昭和八年十二月一日印刷
昭和八年十二月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一
發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地
印刷者　和田助一

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
　　　　　　　一〇五四番
電話小石川(85)　三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）

明治三十四年七月二十一日印刷
明治三十四年七月二十五日發行

神宮司廳

領もの被仰付候御禮勤之儀、以來廻勤ニ不及、月番之老中若年寄江計り相越候樣可被致候、
其外御禮勤之儀者、是迄之通り可被致候、
右之趣、向々江寄々可被達候事、
六月〇中略

同年同月同日〇文久二壬戌年八月廿日
褒美拜領物幷御用召等取扱方改正ノ達
今度簡易之儀被仰出候ニ付、萬石以下之面々、御褒美被下方等、向後左之通、
芙蓉之間布衣以上之面々　躑躅之間御目見以上
燒火之間御目見以下
但土圭之間、檜之間等ニ而被下候分ハ、是迄之通、
右之席々ニ而拜領物可申渡候、尤布衣以上以下共拜領物ハ、時服黃金之外、席江差出ニ不及、
申渡相濟候上、御品者御納戸頭江可相渡候、尤寄〇寄上疑有脫文書付江拜領もの員數認可相渡候
間、御納戸頭江申談候樣可被致候、席以下之分ハ、是迄之通可被心得候、
一萬石以上之面々、拜領もの之節ハ、是迄之通ニ候、〇中略
但時服黃金者、前以席江出置、申渡相濟、直ニ御禮申聞、都而拜領人一度出と可被心得候、
一輕き御普請御修復、其外御用相勤候節、御目見以上以下、是迄席ニ而御褒美被下候分、時宜ニ
寄、書付を以相達候儀も可有之候、
一布衣以上之面々、都而御用召之節、觸切紙を以相達候處、以來御普請御修復、其外御用勤候節、
又ハ定式差定候御褒美被下候節等、輕き事柄之分ハ、御用召書付を以て、相達候儀も可有之
候、

松平伊織

〔德川禁令考十九褒美賜規〕享保五庚子年二月廿四日

七十歲以上解職之輩褒美願方達

組支配之內、七十歲以上迄勤、御役又者御番御免願候節、御ほめ之儀可₂相願₁と存候者ハ、其者之勤、常々精₂出候儀、此段吟味之上、書付可₂被出₁候、

一當役被₂仰付₁候節、御加恩被₂下候者之事、

一當役相勤候內、他國御用、同在番等、病氣ニ而御斷申上候者之事、

一五ヶ年以來、閉門逼塞被₂仰付₁候者之事、

但此三ヶ條ノ品有₂之ニ於てハ、御褒美被₂下間敷候事、

二月

〔憲敎類典三ノ十御褒美〕元文四己未年九月四日

佐渡守殿御渡

七拾歲以上迄、年久敷御奉公相勤、隱居番代、又は小普請入相願候者、右年數之內、子細も無₂之小普請ニ入、又ハ御奉公罷出候者、小普請ニ入、前後之勤年數を以、御褒美願可₂申出₁候、

但病氣ニ而相願、小普請ニ入候者之儀ニ而ハ無₂之候、

右之趣、組支配有₂之面々江、前々可₂被相達置₁候、尤西丸御目付江も可₂有₂通達₁候、

九月

〔德川禁令考十九褒美賜規〕文久二壬戌年六月五日

褒美拜領禮廻ノ儀ニ付達

諸役人之儀者、常々御用多相勤候事にも候間、毎暮差定候御褒美、且其外御用相勤席ニ而拜

〔江戸會誌二〕旅費

京都江爲御用罷越候御勘定奉行

御暇金七枚　時服のしめ、白ムク、リンズ御紋付、　羽織チリメン御紋付

〔青標紙三編〕一御召御紋服著用之儀、致拜領候者ゟ、代々持傳致著用候而も不苦儀ニ御座候哉、又者何代目迄は致著用不苦、其餘者不相成ト申御定メも有之候義ニ御座候哉、此段御問合申上候、以上、

四月朔日　蒔田權佐

下札書面御召御紋服、家ニ而拜領之儀候得ば、代々致著用不苦候、

文化六丑年三月

御召御紋服之義ニ付水野中務江問合

一御召御紋服著用之儀、一代致拜領候得ば、代々持傳致著用候而も不苦儀ニ候哉、且又由緒有之讓請致著用候義、何々之續迄は不苦候哉、此段及御問合候、

三月廿四日　內藤外記

下札書面御召御紋服、家ニ而拜領候義ニ候得ば、代々著用不苦候得共、大概年數程合可有之事ニ候、且祖父母、妻、子、伯叔父母、聟、舅迄は、讓請不苦儀ト存候、

一此間及御問合候、御召御紋服著用之儀、御下札之通承知候、右は相互ニ讓請致著用不苦候哉、妻ゟ讓請候儀も同樣不苦候哉、猶又此段及御問合候、以上、

四月廿二日　內藤外記

下札書面御召御紋服讓請候儀、先達而及御挨拶候通り、近親相互ニ讓請不苦義ト存候得共、妻ゟ讓請候義は、申立ニは難相成筋ニ被存候、

享保五子年四月　　御勘定奉行

〔天明集成絲綸錄四十一〕安永九子年十二月

御勘定奉行江

金三兩宛　　內山七兵衞組同心見習　內田權平〇以下三人略

右ハ亥年〇安永八年見習被仰付、無足ニ付、當暮より願之通御救金被下之、

右之通申渡候間、可被得其意候、

〔寶曆集成絲綸錄二十四〕寬延四未年九月

御勘定奉行江〇中略

猪御犬奉見習　直井喜四郎

同　品川甚藏

右兩人見習御免無足に成、當年分之御切米御扶持方は被下之、

右之通申渡候間、得其意可被談候、

〔幕朝故事談〕諸侯

大名衆、元日頂戴の時服を二月十五日著用致す事は、十五日迄の登城は、皆熨斗目にて、ふくさ小袖を著する日無之故也、因て十五日に著用不致れば、廿八日でも、其以後にても、宜きなり、十五日に著用して、又廿八日に著用して、〇此間恐有誤脫棄物有之節は、もとよりの御目付へ屆候事也、御徒目付立合改候上、子細無之候得ば、町奉行所へ出す、十五日立候て、闕所倉に入る事なり、御目付への屆、三日迄延引致候分ハ不苦候事、棄候譯不相知候段、其に奉行所へ申達し、品物相渡候事也、〇中略時服被下、御旗本熨斗目、大名は綸子、四品以上しゝら熨斗目、三位以上の御下著は白綾なり、元日より三日迄拜領の者、十五日著登城、是服有之〇以上四字恐有誤脫禮義なり、

無足

〔江戸會誌一〕幕府廩米支給手續

御扶助米と云あり、是は家斷絶之者、殘る遺族へ元高の多少に寄、或は五人扶持、或は三人扶持、或は二人扶持と三等に區分し、家族の人員に不拘、親井ニ妻へは一生の內、忰、娘、厄介へは片付候迄被下、其家族之內一人表判元之頭支配裏判する、若死者あり、片附候者ある時は、裏判之者より伺書を出し、御差圖に任すと雖も、素より人員に拘はらず被下なれば、一人にても殘る限りは、是迄之通被下定なり、

〔經濟錄五〕凡士以上ハ田祿有者也、〇中略田祿無シテ米俸、金俸ヲ受ル者ヲ、今世ニ無足人云、農人ノ中ニテ、田地ヲ持テ在者ヲ百姓ト稱シ、田地無ヲ無足人ト稱スルニ傚ヘル也、

〔仕官格義辨下〕總領御番入之事

問曰、むかしは總領御番入、三年無高と申儀有之候由、唯今は左樣成儀不承候、何之頃より止候哉承度候、答曰、三年無高之儀は、承應明曆之頃は勿論、延寶之頃迄も有之候由、三年之內、初年二年目、御番十二迄引候分は御切米被下候、三年目に御番十より多引候へば、御切米不被下候、四年目五年目には、御切米被下旨、天和三亥年、總領御番入之頃より、早速御切米も被下候、其後は無足之御番入は相止候、

〔勘契備忘記中〕享保五子年

書替所御切米御役所渡方定書〇中略

御扶持方渡方之覺〇中略

一御扶持方有之者相果、跡式不被仰付內も、無足之子者、父之頭、或者支配方より、實子總領、養子總領、無紛斷狀を以、御扶持方可被相渡候、勿論願上置候養子者、申渡不相濟者、被下間敷候事、〇中略

右之通、可被得其意候、以上、

扶助米

二月

右之通、日光奉行江申渡候間、可被得其意候、

〔概席寶鑑御目見以下大概順〕二十俵持扶持　見習ハ御救金御扶持被下○中略　御鷹御犬牽

〔大概順御目見以下大概順〕持高扶持○中略　御救金五兩　吹上御鳥方

〔享保集成絲綸錄三十〕寛永二十未年二月

一諸物頭依召登城、近年御旗本之面々、進退不罷成者有之樣ニ被聞召之、先年黃金御知行等被下置之處、如此之段、如何樣之子細ニ候哉、以書付可申上之由、依上意老中相傳之、

寛永二十未年二月

一御小性組、御書院番、大御番、右之面々、此以前御金被下之、或ハ御加增、或ハ御借金等被仰付之處、進退不成之旨達上聞、最前雖爲御重恩、右之仕合不屆ニ被思召之間、向後無其品進退於不成は、御穿鑿之上可被行曲事之旨、堀田加賀守、松平伊豆守、阿部豐後守、阿部對馬守、朽木民部少輔列座有之而、右之頭中江傳上意之趣、其後彼組中之面々、列侯之席江、三輩出座有而、右之通相傳伊豆守畢、

〔寶曆集成絲綸錄二十五〕寶曆五亥年十二月

御勘定奉行江

小普請組金田主殿組久次郎實子
柳島彌三郎

右彌三郎、ひ立候はゞ、相應之場所へ抱入ニ可申付候間、其節可申聞候、抱入候迄ハ扶助米三人扶持被下候間、其段可被申渡候、相應之場所無之不抱入候共、十七歲ニおよび候はゞ、扶助米被下間敷候、

右之通、小普請組支配へ申渡候間、得其意、主殿可被談候、

金三兩宛　御賄六尺
同斷先日之殘　黑鍬之組頭
同斷　紅葉山御掃除組頭
同斷先日之殘　御中門
同斷　金町關所番人
金二兩宛　紅葉山御掃除之者
同斷　同所御高盛手傳六尺
同斷　品川御殿御掃除之者
同斷先日之殘　御掃除之者
同斷同斷　黑鍬之者
同斷先日之殘　六尺
同斷同斷　御勘定所湯呑所者

〔享保集成絲綸錄三十一〕享保二十一辰年二月

御勘定奉行江

日光諸給人共困窮仕候由ニ付、御救之儀相願候得共、承應年中已來、配當米金度々增被下之、配當目錄極り有之上は、御足米等率爾ニ被下候儀、外江も障り難相成事候、乍然右已後も當分之御救米被下候儀有之、其上近來參詣人も少く有之由相聞候付而、去る戌年より寅年迄五ヶ年之間、御救米被下候通り、今年計被下之候、先達而茂申聞候通り、向後何卒御神領之內ニ而諸給人とも助力に相成候品可有之哉、左樣之義有之候得は、相應之事候條、猶又日光奉行致了簡、上野執當江茂申談、重而其段可相達候、

一長病之面々御金被下わけ、組中病人有之諸番頭へ、於芙蓉之間佐渡守申渡之、〇中略

元祿十二卯年十一月

一今度御吟味之上、御譜代小給之輩、御救之御金被下之旨、頭々支配々々江相摸守〇老中土屋數直傳達之、〇中略

覺

一當病忌中之分江は、御金被下之、長病は御金不被下之候、

一拜領御金之儀、荻原近江守、諸星傳左衛門、兩人方へ諸事可被承合候、以上、

十一月

覺

金拾兩宛先日之殘　家瓦奉行組與力 御賄組頭

金五兩宛先日之殘　御賄頭

金四兩宛　御藏手代

同斷　川舟手代

同斷　漆奉行手代

同斷　御林役人

同斷　用水手代

同斷　御鷹師

同斷　紅葉山御高盛坊主

同斷　同前御掃除坊主

金三兩宛先日之殘　同心

馬飼料

〔吏徵御目見以下〕火消與力六十人〇中略

馬飼料一日大豆三升

〔御勘定所定書中〕淺草御藏役人勤方納米改方等之定書

一大豆渡方之儀、御馬飼料ニハ並之大豆、火消方馬大豆ニハ、御馬飼料よりハ次之大豆可被相渡候事、

享保十九寅年九月　御勘定奉行

藥種代

〔吏徵附錄世職〕小川良意養生所肝煎

藥種代金五拾兩

道具代

〔大概順御目見以下大概順〕持高　御道具代一ヶ年金五兩〇中略　同〇吹上奉行支配　御大工之者

救金

〔享保集成絲綸錄三十〕元祿十二卯年閏九月

覺

一百日餘は長病

一百日より內は當病

一當病忌中之分は、同役頭々支配々々ヨリ可被申達候、

一長病は快氣之節可被伺之候、

以上

覺

拜領之御金、御藏ニ而被請取筈ニ候、荻原近江守、并諸星傳左衛門、兩人方江諸事可被承合候、御金之員數書付出候間、何茂可有一覽之由可被申渡候、以上、

元祿十二卯年十月

弓稽古料

右之通向後被下候筈ニ候間、可被得其意候、

二月

〔御書付留〕嘉永六年二月二日

一金貳拾六兩貳分　　御持弓頭戸田大學組 同心五拾三人分

一金貳拾五兩貳分　　御持弓頭服部半組 同心五拾一人分

右者當丑年、同心弓稽古料請申度奉存候、御勘定奉行へ被仰渡、可被下候樣仕度奉存候、以上、

二月二日　　御持弓頭〇節略

番料

〔官中秘策十〕諸役人之事

一奥御醫師　　御番料貳百俵　　凡八九人

一御外科　　同　　七人

〔吏徵附錄廢職〕御廊下番

元祿十年丁丑十二月十八日、百五十俵取之者十人並之通、御番料百俵宛被下、

〇按ズルニ、此外桐之間番、土圭之間番ニモ番料アリ、

〔享保集成絲綸錄三十〕元祿十二卯年十月

覺

閏九月中罷出、御番相勤面々江は、御金被下之、當十月朔日よりは、罷出候而も最早御金不被下筈候、可被存其趣候、以上、

傳馬金書狀取遣金

〔概席寶鑑御目見以上布衣以下大概順〕二百俵高〇中略　傳馬金拾五兩、書狀取遣金七兩、　御鳥見組頭

〔概席寶鑑御目見以下大概順〕八十俵高〇中略　傳馬金十八兩　御鳥見

物書料

但乘馬牽連候節者、壹匹分之飼料可被下之、

同四人分同斷、人足三人分同斷、馬壹匹同斷、

姫君樣方御用人

但同斷

同四人分同斷、人足貳人分同斷、馬壹匹同斷、

法印法眼之醫師、姫君樣方御用人格奥御右筆所詰、

但同斷

〔寶曆集成絲綸錄二十五〕寶曆六子年正月

御勘定組頭、御勘定、支配勘定、遠國へ御普請御修復幷見分御用ニ罷越候節、物書料、御勘定組頭へ關外金三拾兩、關內金貳拾兩、御勘定支配勘定へ關外金貳拾兩、關內金拾五兩被下候積、去々戌年相極候處、

關外物書料金貳拾兩　關內同　金拾五兩　御勘定組頭

關外物書料金拾五兩　關內同　金拾兩　御勘定支配勘定

右之通、向後被下候筈ニ候間、可被得其意候、

正月（中略）

寶曆六子年二月

御勘定吟味役、遠國江御普請御修復幷見分御用罷越候節、物書料、關外金五拾兩、關內金三拾兩被下候積り、去ル戌年相極候處、

關外　物書料金三拾兩

關內　同金貳拾兩

右之通、布衣以上之役人江可被達候、

十月

別紙

上下拾四人分道中諸入用、乘馬壹匹之飼料、人足六人分之賃錢、馬三匹之賃錢、

御側、御留守居、海軍奉行並、陸軍奉行並、外國總奉行並、大目付、町奉行、御勘定奉行、

上下拾貳人分同斷、乘馬壹匹同斷、人足五人分同斷、馬三匹同斷、

林大學頭、軍艦奉行、奥詰銃隊頭、騎兵奉行、步兵奉行、

同拾人分同斷、乘馬壹匹同斷、人足四人分同斷、馬三匹同斷、

御勘定奉行並、御作事奉行、外國奉行、神奈川奉行、長崎奉行、箱館奉行、軍艦奉行並、騎兵奉行並、步兵奉行並、製鐵所奉行、遊擊隊頭、軍艦頭、銃隊頭、砲兵頭、騎兵頭、步兵頭格陸軍所修行人教授役頭取、撒兵頭、西丸御留守居格陸軍所修行人教授役頭取、新番頭格同斷、

同八人分同斷、乘馬壹匹同斷、人馬五人分同斷、馬貳匹同斷、

御目付、御作事奉行並、外國奉行並、神奈川奉行並、長崎奉行並、箱館奉行並、製鐵所奉行並、銃隊頭並、遊擊隊頭並、軍艦頭並、砲兵頭並、騎兵頭並、撒兵頭並、御使番、小十人頭、別手組出役頭取取締、

同七人分同斷、乘馬壹匹同斷、人足四人分同斷、馬貳匹同斷、

二丸御留守居、別手組出役頭取取締並、開成所頭取、御鐵炮玉藥奉行、納戸頭、

同六人分同斷、乘馬壹匹同斷、人足三人分同斷、馬貳匹同斷、

靜寛院宮樣天璋院樣御用人、御臺樣御用人、御勘定頭取、

同五人分同斷、人足三人分同斷、馬貳匹同斷、

御小姓、吹上奉行、二丸御留守居格遊擊隊調方頭取、同格遊擊隊頭取、開成所頭取格同斷、奥御右筆組頭、

貳拾俵以下

同壹人五割增同斷、人足壹人半分同斷、

但持高場所之者ハ、御役席同等之者江引付被下候積、

右之通被下候、尤御供等ニ而、彼地著之上者、御賄不被下、道中幷御用中諸入用、一日壹人永貳百文宛、馬飼料永貳百五拾文宛被下、長持持人足者不被下候、

〔德川禁令考十九旅中制規〕慶應三丁卯年九月十六日

道中被下人馬ヲ止、賃錢給與之旨達、

五街道筋宿々、連々及困窮候折柄、物價騰貴ニ付而者、彌疲弊切迫ニ付、向後無賃被下人馬御差止相成、御用旅行之面々、分限ニ應シ、人馬賃錢被下候間、繼人馬幷渡船川越等、一般御定之賃錢相拂旅行可致旨被仰出候、畢竟御用途多之折柄、右體被仰出候者、專ら宿驛之疲弊を被爲救候御趣意之程厚相辨、尤被下人馬高、是迄より御減じ可相成候間、其心得ハ勿論、前々度々相觸候次第も有之候得共、彌簡易ニ旅行いたし、宿驛難儀不相成樣可致候、且御用物之儀も、同樣向々江賃錢可相渡間、荷物等取調、其時々可申立候、尤當十一月より書面之通可被心得候、

右之通、萬石以下之面々江可被相觸候、〇中略

慶應三丁卯年十月十六日

同上〇遠國出役役名ニテ、諸入用幷人馬賃錢給與ノ定、

諸役人其外遠國御用被下物之儀ニ付、此程被仰出候者、御役高ニ應じ候被下方ニ有之候處、今般御改正、布衣以上御役相勤候面々江、御足高御役料等不被下、御役金被下候旨被仰付候ニ付而者、向後布衣以上之面々、道中諸入用人馬賃錢被下方、御役名ニ而別紙之通御定被置候間、被得其意、其餘者都而最前相達候通可被心得候、

同拾人分同断、乗馬壹匹同断、人足四人分同断、馬三匹同断、

千石高

同八人分同断、乗馬壹匹同断、人足五人分同断、馬貳匹同断、

七百俵高

同七人分同断、乗馬壹匹同断、人足四人分同断、馬貳匹同断、

五百俵高

同六人分同断、乗馬壹匹同断、人足三人分同断、馬貳匹同断、

但五百石以下ニ而も、乗馬牽連候節者、壹匹分之飼料可被下候、

四百俵高

同五人分同断、人足三人分同断、馬貳匹同断、

三百五拾俵高

同五人分同断、人足貳人分同断、馬貳匹同断、

三百俵高

同四人分同断、人足三人分同断、馬壹匹同断、

貳百俵高より百五拾俵高迄

同四人分同断、人足貳人分同断、馬壹匹同断、

百俵高より七拾俵高迄

同三人分同断、人足壹人分同断、馬壹匹同断、

六拾俵高より三拾俵高迄

同貳人分同断、人足貳人分同断、

其方共支配向、是迄遠國御用として被差遣候節、筆墨紙蠟燭代、幷物書料被下候處、以來ハ不被下候間、可被得其意候、

〔德川禁令考旅中制規十九〕慶應三丁卯年九月十六日

遠國出役ノ者、月割手當金ヲ止、役高ニ應シ、道中諸入費給與ノ定、

御上洛御供幷遠國御用等被差遣候諸役人御番方其外江、是迄月割御手當等被下候處、當今不容易御用途多之折柄ニ付、以來別紙之通諸入用被下、且道中被下人馬之儀、近年宿驛疲弊之折柄ニ候間、是迄之仕來ニ不拘、人馬數相減、道中往返之人馬賃錢被下候、尤御朱印幷證文之儀者、先規ニ不拘、以來御用物ニ寄被下候條、可被得其意候、且御供交代所ニ御警衞相越候武役之向、隊伍を組罷越候節者、道中諸入用人馬賃錢共被下方之儀者、猶可相達、其餘都而別紙之通相心得、向後御供、幷遠國御用罷越候面々者、諸入用人馬數取調、御勘定奉行江之斷書差出候樣可被致候、尤當十一月より、書面之通可被心得候、

右之通、向々江可被達候、

御役高之分限ニ應じ

五千石高

上下拾六人分之道中諸入用、乘馬壹匹之飼料、人足七人分之賃錢、馬三匹之賃錢、

四千石高

同拾四人分同斷、乘馬壹匹同斷、人馬六人分同斷、馬壹匹（〇壹匹恐三匹誤）同斷、

三千石高

同拾貳人分同斷、乘馬壹匹同斷、人足五人分同斷、馬三匹同斷、

二千石高

同金五兩
一同金三拾兩壹分　千石高
同金四兩
一同金貳拾貳兩　七百石高
同金三兩
一同金拾九兩壹分　六百石高
同金三兩
一同金拾七兩壹分　五百石高
同金三兩

右之通、當十一月より、慶安度御定、半減之人數召連之ものへ被下候、尤人數増減之有之向へも、右之割合を以被下候得共、中間其外雜人ハ、御定半減之人數迄被下、其餘相増候分ハ不被下、士分并徒士足輕等相増之分へも、夫々召連人數ニ應シ、御手當相増可被下候間、其旨相心得、請取方之義ハ、御勘定奉行可被談候、
十二月二日周防守殿〇老中松平康直
御進發御供先より、御用ニ付歸府、猶又出立いたし候もの、在府是迄旅御扶持方不被下候處、以來ハ在府中ニ候へ共、日數三十日迄ハ被下、三十日以上に相成候へハ不被下候、
右之通、被仰出之候事、
〔分限御手當筋御書付留〕慶應二寅年九月十五日、周防守殿、〇老中松平康直貞阿彌を以御渡、
御勘定奉行
同吟味役江

返納等閑置もの有之哉に相聞、如何之事ニ候間、向後遠國并江戶御用共、御用濟之上、請取過有之面々者、其譯巨細相認、尤遠國御用之分ハ、出立歸府日限等書加、返納方早々相伺候樣可被致候、

右之趣、向々江可被相觸候事、

慶應元乙丑年十一月十六日

遠國出役ノ者、格式ニ不拘、役名ニテ手當金其外給與之旨達、

諸役人江戶遠國御用相勤候節、御手當金御扶持方人馬等、格式之ものハ右廉ニ而増被下候處、向後格式ニ不拘、都而御役名之廉ニ而御手當金其外共可被下、尤遠國御用之節、御暇拜領物之儀者格式之廉ニ而可被下候間、可被得其意候、

右之趣、向々江可被達候事、

〔分限御手當筋御書付留〕丑〇慶應元年十一月廿五日、大坂ニおいて伯耆守殿〇老中松平宗秀御渡、

御進發〇德川家茂御供、五百俵以上之面々御手當之儀今度御變革相成候ニ付、被下方割合左之通、

一壹ヶ月 金七拾八兩　五千石高

一同 金六拾五　四千石高

但別段御手當金九兩

一同 金五拾貳兩三分　三千石高

同金八兩

一同 金四拾貳兩三分　貳千石高

同金七兩

一同 金三拾三兩三分　千五百石高

同金六兩

御用之儀有之、京都へ被差遣候付而、金三百兩被下候間可被相渡候、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年十一月十八日、上洛供奉ノ士ニ俸米ヲ賜フノ差等ヲ達ス、

來二月御上洛〇德川家茂御供の面々、万石以下御扶持方の儀ハ分限に應じ、一倍の積りを以て、凡日數七十日分の內、日數三十日分ハ於京都御渡し方の積りに付、日數四十日分ハ、淺草御藏より相渡し候筈に候間、十一月中御勘定所へ受取手形差出し、掛り御勘定組頭裏判取之、十二月中、勝手次第受取候樣可致候、

〔德川禁令考十九旅中制規〕元治元甲子年十一月廿四日

遠國出役ノ者手當金幷扶持方給與ノ儀ニ付達、

諸役人其外遠國江爲御用被差遣候節被下物之儀、今度御改革相成、以來布衣以上、御目見以上之面々江者、御合力米宿代ハ不被下、御手當銀幷旅御扶持方可被下、御目見以下之もの江者、賄道具雜用金、宿代ハ不被下、是又御手當金幷旅御扶持方可被下候、尤いづれも御手當金銀者、六ヶ月以上相掛り候御用之節者、右當りを以、月割ニ而可被下、程近之場所、日數少之御用柄、又者御軍艦等ニ而罷越候節ハ、御用柄ニ不拘、日當御手當可被下、尤日數三十日以上ニ相成候節ハ、夫々員數減候而可被下、且又關內御用之分者、向後御暇拜領物者被仰付間敷候、〇中略

慶應元乙丑年閏五月十四日

旅費請取過ノ分返納ノ儀ニ付達、

覺

諸向遠國御用被仰付候面々江、月割日當等を以被下候御手當幷旅御扶持方、其餘江戸表ニ而、臨時御用相勤、野扶持等被下候面々、最初見込を以請取、御用濟之上、請取過相成候分も有之候處、右者早速返納可致筈之處、兎角等閑置向も有之、其餘取越米等、兼而年賦返納等ニ被仰付候分、是又

一銀拾枚宛　火之番　御挑灯奉行　御中間頭　御小人頭　御駕籠頭　黒鍬頭
一金拾兩宛　御臺所組頭　一銀拾枚宛　御賄方組頭　御徒　御
披官　御休足御庭番　小間遣頭　平御臺所人　御奥大工　大工棟梁
一金五兩宛　御賄方　御納戸同心　御腰物方同心　御細工同心　御作事奉行支配
同小役之者　勘定役
一銀五枚宛　御中間組頭　御小人組頭　一銀三兩宛　諸同心　小間遣組頭
一銀三枚宛　御簞笥奉行同心　御弓矢鎗奉行同心　御具足奉行同心　御幕奉行同
心　御書物奉行同心　御奥奉行同心　御手大工
一金貳兩宛　御中間　御小人　小間遣平之者　御駕籠之者　御膳所六尺組頭
一銀貳拾枚宛　千人同心　黒鍬之者　奥六尺　表六尺　新組　御數寄屋御露次之者
御大工頭支配定普請同心
一銀拾枚宛　御馬乘　一金貳兩宛　御馬口附之者
一銀貳枚宛　御馬飼　一金五枚宛　奥醫師　寄合醫師
一金三枚宛　奥外科　寄合針醫　同眼醫　同齒醫
一銀貳拾枚宛　河合久圓

日光御供に罷越候に付、金銀被下候、諸事儉約を可用候

日光御供之面々江金銀被下候、諸事儉約を可用旨、布衣以下之面々江可被達候、

享保十三申年二月　高家　前田信濃守

〔寶暦集成絲綸錄二十五〕寶暦十辰年二月

小十人頭
一銀百枚宛　御鐵炮方　御納戸頭　一金五拾兩宛　新御番組頭
一銀五拾枚宛　表御右筆組頭　御膳奉行　中奥御番　兩御番　御納戸組頭　御鐵炮
御簞笥奉行　御弓矢鎗奉行　御具足奉行　御幕奉行　御書物奉行
御賄頭
一金三拾兩　諏訪部文右衞門　一金三拾兩宛　新御番
一銀三拾枚宛　御腰物方　御納戸　一金三拾兩宛　奥御右筆
一銀三拾枚宛　表御右筆　一金貳拾兩宛　御馬方
一銀五拾枚宛　小十人組頭　一銀三拾枚宛　小十人
一金三拾兩宛　御勘定組頭　一金貳拾兩宛　御勘定　御馬醫
一銀三拾枚宛　御臺所頭　御奥奉行　御細工頭
一金三枚宛　御大工頭　一銀三拾枚宛　御作事下奉行
一銀三拾枚宛　御同朋頭　一銀貳拾枚宛　御同朋
一金貳拾兩宛　御數寄屋頭　一金拾兩宛　奥坊主組頭　同組頭並
御數寄屋坊主組頭
一銀拾枚宛　表坊主組頭　一金五兩宛　奥坊主　御數寄屋坊主
一金五枚宛　表坊主　一金貳拾兩宛　千人頭
一金貳拾枚宛　御徒目付組頭　火之番組頭
一金拾兩宛　御徒組頭　一銀貳拾枚宛　諸與力
一金拾兩宛　御太鼓役　御貝役　御徒目付　御徒押

一七百石　二十人　一七百五十石　廿一人
一八百石　廿二人　一八百五十石　廿二人
一九百石　廿三人　一九百五十石　廿三人
一千石　廿四人（但千石より千四百石迄ハ可爲同人數）　一千五百石　廿五人
一二千石　三十人　一二千五百石　三十七人
一三千石　四十五人　一三千五百石　五十二人
一四千石　六十人　一四千五百石　六十七人
一五千石　七十五人　一一万石　百五十人
一二万石　三百人　一三万石　四百五十人

〔享保集成絲綸錄三十一〕享保十三申年正月
　日光御社參に付、御供之面々金銀被下候、
一銀百枚宛　高家衆　一金三拾枚宛　御側衆
　但万石之御側衆御金不被下
一金貳拾枚　巨勢大和守　一金拾枚　有馬六右衛門
一金百兩宛　御小姓　一金拾枚宛　御小納戸
一銀三百枚宛　兩御番頭　一金貳拾枚　大目付、御旗奉行、
一銀貳百枚宛　御勘定奉行　御作事奉行　御普請奉行　百人組之頭　御鎗奉行　新御番頭　御持弓頭　御持筒頭
一金拾枚宛　中奥御小姓　一金五枚　林大學頭
一銀百五拾枚宛　火消役　御弓頭　御鐵炮頭　御目付　御使番　兩御番組頭　御徒頭

一二千九百石より五千石迄百石ニ付一人半扶持增之積り、

一三日路隔候處、五割增、

一四日路隔候處、一倍增、

一二十五里迄ハ五割增、

一二十五里四五町有之處ハ一倍增ニ被下候由、

右定書、町奉行より此方へ三月相渡候、自今ハ此書面ヲ以、御扶持員數相極め出し可申旨被申渡候由、

〔柳營秘鑑四〕御扶持方積り

一百石　七人扶持○中略　一四万石　六百人扶持　一五万石　七百五十人扶持

一六万石　九百人扶持　一七万石　千五十人扶持　一八万石　千貳百人扶持

一九万石　千三百五十人扶持　一十万石　千五百人扶持

右者御上落、日光御成等之節之御定也、御陣之時者、一倍之御扶持被下之、

〔東武實錄〕元和九年五月十一日、今度御上洛○徳川家光ニ依テ、被仰出御制法、○中略

御上洛御供之衆御扶持方被下覺

一百石　七人　一百五十石　十人

一二百石　十人　一二百五十石　十一人

一三百石　十二人　一三百五十石　十三人

一四百石　十四人　一四百五十石　十五人

一五百石　十六人　一五百五十石　十七人

一六百石　十八人　一六百五十石　十九人

但前同斷
支度金三両
宿代壹ヶ月金壹分貳朱
但御用之品ニ寄、貳分も被下候義も有之、
諸雜用金一ヶ月金貳両貳分
筆墨紙蠟燭代一日銀壹匁ヅヽ
小もの雇賃銀、一日銀三匁七分五釐、
外ニ本馬壹疋、前同斷被下、
平常之御用ニ而致出役候雜用銀
一三里以上日歸り
與力　銀四匁三分
同心　銀貳匁壹分五釐
一五里以上日歸り
與力　銀七匁五分
同心　銀四匁三分
右宿掛り之者ハ五割増之積、勤日數を以相渡り申候、
〔淺草米廩舊例〕高掛り御扶持方
一二百五十石より八百九十九石迄、五十石ニ付一人扶持ヅヽ増ス、
一九百石より二千九百石迄、百石ニ付一人扶持ヅヽ増ス、或ハ二千石之内外ハ、御扶持方無之、御關所越候得バ一倍扶持、

同

一永百五拾貳文五分　　御普請役

同斷

同

一金貳分永五拾八文三分　　御徒目付

白米七合五勺ツヽ四人分　所相場

一永百三拾文　　御小人目付

旅御扶持方貳人扶持五割増　庭相場

石代本馬壹疋之賃錢

〔分限御手當筋御書付留〕京都町奉行組與力遠國御用御手當

一與力壹人

旅御扶持方拾人扶持一倍

但貳十五里內ハ五割増

支度金拾兩

宿代壹ヶ月金壹兩

諸雜用ハ金五兩

筆墨紙蠟燭代金壹兩

外ニ本馬貳疋人足三人里數ニ應テ

一同心壹人

旅御扶持方三人扶持

旅費

時服五　羽織　　同　駿府御城代
金三枚　時服三　同　　同
〔分限御手當筋御書付留〕日當御手當
一金貳兩壹分、永貳百三拾文、　大目付
御勘定奉行
同並
講武所奉行並
一金壹両三分　御目付
御勘定吟味役
一金壹兩壹分、永七拾三文三分、　御勘定組頭
一金三分、永百四拾三文六分、　御勘定吟味方改役
白米壹人七合ヅヽ　御勘定
上下四人分　所相場
一金貳分、永貳百拾壹文九分、　同改役並
同斷四人分　支配勘定
一永貳百拾九文貳分　御普請役元〆
御扶持方五人扶持五割增、　但庭相場
本馬壹疋分駄賃錢
一永百八拾五文九分　吟味方下役
同斷三人扶持五割增

金十枚　時服五

同五枚　時服貳　羽織

同三枚　同三　同

同壹枚　同貳

同

金壹枚

金五枚　時服　羽織

同十枚　時服貳　同

時服四　羽織

銀三十枚　時服三　同

時服貳　羽織

金三枚

芙蓉之間　大坂御城番

同　大坂町奉行

同　大坂御舟手

ツヽジノ間　大坂御具足奉行

同　御弓奉行

同　御金奉行

同　御破損奉行

同　御藏奉行

同　御鐵炮奉行

駿府御破損奉行

同　西國御代官

同　駿府御武具奉行

芙蓉之間　伏見奉行

同　長崎奉行

佐渡奉行

同　山田奉行

奈良奉行

同　堺奉行

同　久能惣門御番

同　日光奉行

禮に罷出候節留置被下物對馬守申渡頂戴有之候事、

但對馬守病氣差合等之節は、御本丸老中壹人、西丸江罷越可申渡事、

右之通得其意、御暇之節、西丸江罷出候面々、大目付江申談可被留置候、

〔青標紙三編〕諸御役人遠國御使幷御暇之節被下物

席	役	被下物
羽目之間	京都御使　高家	金十五枚 時服十三　羽織
同	伊勢同　同	金十枚 時服十二　羽織
同	日光御使　同	金五枚 時服二　同
芙蓉之間	大坂御目付代	金五枚
同	尾州江御使	金十枚
同	長崎御目付代	金十枚 時服十二　羽織
同	駿府御目付代	金貳枚 時服二
羽目之間	京都所司代	金貳十枚 時服五　羽織
芙蓉之間	禁裏附　仙洞附	金五枚 時服二　同
ッ	京都町奉行	
ッ、ッノ間	二條御門番	金貳枚 時服貳　同
御右筆部屋	小堀縫殿	
ッ、ッノ間	二條御鐵炮奉行	同一枚 時服貳
	同御藏奉行	
	同御殿番	
羽目之間	大坂御城代	時服二十

右之通、御作事奉行小普請奉行江相達候間、可被得其意候、
四月
〔享保集成絲綸錄 三十〕元祿十丑年十一月
御用付而、宅地被召上面々引料被下之所謂、
宅地引料
引料被下員數
一六千石より三千石迄、銀百枚宛、
一三千石之内より千石迄、金五拾兩宛、
一千石之内より三百石迄、金三拾兩ヅヽ、
一三百石之内より五拾石迄金貳拾兩ヅヽ、
以上
〔吹塵錄 二十九 德川氏〕遠國御役人拜借金高書
引越料
一金三拾兩　二條御藏奉行
是者拜借は無之、彼地江引越候節、書面之通被下之、〇中略
一金五拾兩　日光奉行支配組頭
一金五拾兩　新潟奉行支配組頭
是者いづれも引越料として被下之
〔吏徵 首卷 万石以上〕所司代一人〇中略
暇賜與
京都在任　御暇、御刀代金貳拾枚、御馬一疋、金貳拾枚、時服五、羽織、
〔憲敎類典 三ノ六 拜領〕享保十二丁未年三月十日
諸大名御暇之節、大納言樣よりも被下物有筈ニ候、上使之外於殿中申渡、被下物之分は、西丸江御

作事料

一御給金取來る者、御切米直し被下候節ハ、御切米年中渡、尤其年受取候御給金返納ニ成る、享保十一午年、御證文ニ而極る、

〔概席寶鑑御目見以下大概順〕二十俵二人フチ　御給金十三兩二分マデ被下　湯呑所之者○中略

御給金一兩二分　牢屋下男

○按ズルニ、此外藏手代、藏小揚之者、鹽硝藏掃除之者、濱殿物書等ニモ給金アリ、

〔東武實錄〕寛永六年、是年三浦志摩守正次ニ、於一ッ橋ニ屋敷地ヲ給リ、爲作事料黄金三百兩ヲ給フ、

〔嚴有院殿御實紀三十〕寛文五年二月三十日、大坂船手頭に官宅構造料銀三十貫目ヅヽ下さる、

〔嚴有院殿御實紀五十〕延寶三年五月二日、在京役人、官宅修理の料をたまふ、禁裏附石谷長門守武清、牧野攝津守成喬、女院附久保和泉守勝周、梁田隱岐守直次、本院附岡部土佐守許之は七貫目、小笠原丹波守信吉は六貫目、畿内代官五味藤九郎豊旨十五貫目、其外與力以下賤吏にも若干の賜あり、

〔德川禁令考二十四役所役宅〕天保十四卯年四月三日

御役宅御修復之儀ニ付御書付

越前守殿○老中水野忠邦御渡　　御勘定奉行江

御勘定奉行御役宅四ヶ所之内、向後御作事方小普請方ニハ、二ヶ所充持場ニ相定、御修復等之儀可被取扱候、尤御勝手方御役宅ハ、金高拾兩以下、自分ニ而取賄、拾兩以上ハ御修復可被仰付候間、其節ニ見分之上可被相伺候、公事方御役宅ハ同拾兩以下自分ニ而被賄、拾兩以上五拾兩迄ハ手元餘金を以取計候積、五拾兩以上御修復相成候間、是又見分之上可被相伺候、且持場之儀ハ、猶又雙方申談相伺候樣可被致候、

〔寶曆集成絲綸錄二十五〕寶曆二申年三月

御勘定奉行江

御賄吟味方

三月		下役	拾二人
九月	金貳兩宛	書役	三人
三月	金壹兩貳分宛	寸打六尺	六人
九月			
三月	金壹兩宛	通番新組	九人
九月			

右之通、勤金向後被下候間、被得其意、御賄頭斷次第可被相渡候、

○按ズルニ、此外普請役、小普請方吟味役、評定所書役、學問所下番、掃除者等ニモ勤金アリ、

勤銀

〔寶曆集成絲綸錄二十四〕寬延元辰年十二月

紅葉山代僧六人之内　御鍵役兩人

右爲勤銀、一人へ銀五枚宛每年被下候間、可被得其意候、尤寺社奉行可被談候、

勤料

〔概席寶鑑御目見以下大概順〕二十俵持フチ　勤料一日一匁　寄場下役

〔吏徵御目見以下〕小仕事之者三人

十五俵一人半扶持高　勤料一日米一升銀一匁

給金

〔淺草米廩舊例〕支配向定人數御給金御扶持方

御給金十兩　御藏手代　定人數五十四人〇中略

右何も勤日數を以て相渡候事

〔書替所定書〕當時定法

も、是亦右之趣可准候、

五月

〔明暦以來御書付留〕二月〇弘化元年十四日

大炊頭殿〇老中土井利位林阿彌を以、播磨守〇勘定奉行戸川安清へ渡、

御勘定奉行　御作事奉行　小普請奉行　御目付　御勘定吟味役〇中略

右之通、安永三午年相達候處、野扶持請取方、區々之取請計も有之哉ニ相聞候間、尚又申達候、向後心得違無之樣可被致候、

懸扶持 出扶持

〔淺草米廩舊例〕支配向定人數御給金御扶持方

御藏手代

定人數五拾四人

御給金拾兩三人扶持宛

内

組頭七人　役金五兩宛

掛役手代貳拾七人

平手代貳拾人

懸扶持四人扶持宛

懸扶持三人扶持宛

出扶持一人扶持宛

右何も勤日數を以て相渡候事

配當米

〔寶暦集成綵綸錄〕二十四　寛延二巳年六月

御勘定奉行江

十大夫〔能役者喜多〕達

日向富三郎

五人扶持

配當米拾五石〇中略

右之通、此度新規御扶持方配當被下候間、被得其意、渡し方、並之通可被心得候、

勤金

〔吏徵〕御目見以下御賄調役五人〇中略

役切米三拾俵　勤金十兩

御數寄屋頭三人

御四季施五月帷子單物一、九月小袖一、十二月小袖一、

四季施代

〔概席寶鑑布衣以上大概順〕四百俵高○中略　金二拾四兩二分、御四季施代、　奥御右筆組頭

〔概席寶鑑御目見以下大概順〕三十俵　御四季施銀五枚　紅葉山御高盛坊主

〔吏徴上御目見以上〕御同朋七人

若年寄支配　百俵十人扶持高　御四季施正月小袖一、上下代金壹兩貳朱、四月袷一、上下、代金同斷、五月帷子貳、上下、代金同斷、九月小袖一、上下、代金同斷、十二月裝束一通、但平にては裝束無之家も有之　小袖貳、上下貳具、半長上下、代金同斷、

○按ズルニ、此外表右筆組頭以下右筆、賄調役、賄吟味役、及ビ數寄屋坊主組頭等ニモ四季施代アリ、

野扶持

〔憲教類典二ノ五御役〕元文三庚午年三月廿日

御目見以下、役儀勤之內、場所定高並役扶持、

八拾俵高扶持　御鳥見

外野扶持拾五人扶持、取來之通、

〔天明集成絲綸錄四十〕安永三午年五月

御勘定奉行江

都而御普請御修復御用掛之面々へ被下候野扶持之儀、小屋場出來、御普請御修復取掛候日より、其場所皆出來、引渡相濟候日迄可被下候、尤支配向之者、附切相勤候御用向ハ、勤候日數丈、野扶持可被下候、○中略

右之通、以來急度可被相心得候、品ニより小屋場不取建、附切ニ相勤候儀も有之、野扶持被下候節

金七千兩　御作事方
金六千兩　御疊方幷備後表御買上代共
金壹萬兩　小普請方
金千五百兩　御材木方
金五千兩　御細工所
先達而被仰出も有之候通、御勝手向不取〆、諸向も相ゆるみ候故、御入用も相增、御遣方御不足ニ相成候、依之當亥年より來々丑年迄三ヶ年、右金高ニ而壹ヶ年之御用相濟候樣致勘定取計可被申候、委細之儀ハ、御勘定奉行可被談候、
右之通、向々江申渡候間被得其意可被談候、
四月

腰懸補理料

〔吏徴別錄上〕布衣以上御勘定奉行
寶曆八年戊寅十一月廿四日、公事方ハ腰懸補理料として、闕所金之内を以、金七十兩可被下旨被定、

差掛料

〔寶曆集成綠綸錄二十四〕寬延三午年八月
御勘定奉行江
遠國へ罷越候面々、只今迄差掛料被下候得共、向後相止候間、可被得其意候、乍然差掛無之候而ハ、難成場所ハ、吟味之上、公儀御入用ニ而、申付候樣可被心得候、

四季施

〔吏徴上〕御目見以上御同朋頭三人
御四季施、正月小袖一、上下、代金一兩二朱、四月袷一、上下、代金同斷、五月帷子三、單物一、上下、代金同斷、九月小袖貳、上下、代金同斷、十二月裝束一通、小袖二、上下二具、長半、同代金同斷、〇中略

役所入用金

寶曆二年壬申八月十一日、毎月雜用金貳分を賜ふ、

〔天保集成絲綸錄八十六〕寬政四子年三月

御勘定奉行江

人足寄場立合相勤候御小人目付へ、〇中略御用中、野扶持之外、月々一分ツヽ、爲雜用被下候間、得其意、御勘定奉行可被談候、

右之通申渡候間、可被得其意候、

〔東徵上布衣以上〕町奉行〇江戶二人

役所入用金貳百兩

〔德川禁令考二十四經費改革〕寶曆五亥年四月

諸向御入用減方之儀ニ付御書付

御勘定奉行

御勘定吟味役江

金貳千兩餘　町奉行方

金八百兩餘　御船手

金千七百兩餘　神寶佛具裝束類

金貳萬兩　元方御納戶

金壹萬五千兩　拂方御納戶

金八千兩　西丸御納戶

金壹萬三千八百兩　御賄方

金六千貳百兩　西丸御賄方

一高五万石餘ハ、一万石ニ付、金五拾兩十人扶持宛之割增を以、支配高に應じ可ㇾ被ㇾ下ㇾ之

但五万石以上ハ、四千九百石餘迄ハ不ㇾ被ㇾ下ㇾ之、五千石ゟ、右一万石之入用米金可ㇾ被ㇾ下ㇾ之、

一一ヶ年入用米金、二月七月十一月、三度可ㇾ相渡候、但銀遣之場所ハ、入用渡候節之相場を以て銀ニて可ㇾ相渡候、

一御代官御役御免、又ハ相果候節ハ、右入用米金月割を以、相勤候月迄之分可ㇾ被ㇾ下候間、兼々其心得を以、諸入用手代給分等可ㇾ相渡候、

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕御金奉行〇中略

元文五年庚申ヨリ、古御代官貸金取立候ニ付、諸入用金十兩被ㇾ下

〔天保集成絲綸錄八十六〕寬政五丑年正月

御勘定奉行江〇中略

御材木藏役人入用金八拾九兩餘之內を以、是迄御材木奉行二季附屆等、金拾貳兩程、先遣拂候由、仕來とは申ながら、不ㇾ可ㇾ然筋ニ付、以來差止可ㇾ被ㇾ申候、〇下略

手當受用金

〔吹塵錄二十九德川氏〕長崎奉行御手當受用金

長崎奉行、高御役料之外御手當受用金、弘化四未年より、初在勤八千兩、二在勤より六千五百兩受取候處、安政四巳年より千兩ツヽ相減、初在勤七千兩、二在勤より五千五百兩ツヽ受取申候、萬延元年

雜用金

〔吏徵附錄慶應職〕松前奉行支配調役並七人〇中略

庚申九月、右筆所間合勘定所答、

在勤中、御手當金七十兩、雜用金六十兩月割、

〔概席寶鑑御目見以下大概順〕持高　外雜用金一兩　御鷹部ヤ御門番人

〔吏徵別錄下御目見以下〕油方同心〇中略

諸入用金

被下之、

〔天明集成絲綸錄三十八〕明和三戌年二月

御勘定奉行江　　　　石谷備後守〇清昌

長崎奉行之御役料も被下候儀ニ候得共、御勘定奉行本役ニ付而、月番も相勤候儀ニ候間、御役爲入用、毎年被下候御金三百兩之内、江戸表ニ罷在候内、百五拾兩被下候間、可被得其意候、

〔吏徵上 布衣以上〕美濃郡代一人〇中略

諸入用金八百兩〇中略

西國筋郡代一人〇中略

諸入用金九百五十兩〇中略

飛驒郡代一人〇中略

諸入用金八百兩〇下略

〔牧民金鑑三 諸入用〕元文元辰年三月廿日

覺

五畿內　海道　北國　關東　東國筋〇中略

右國々御代官所

一高五万石 金五百五拾兩 米七十人扶持

但一万石ニ付 金百拾兩 米十四人扶持〇中略

右之割合を以、高三万石より內は、三万石分之入用可被下之、高三万石餘ハ、四万石分之入用可被下之、高四万石餘ハ、五万石分之入用可被下之、

役入用金

得ニ相達置候間、可被得其意候、○中略

寛政四子年三月

御勘定奉行江

人足寄場立合相勤候御小人目付、御手當金之儀被申聞候ニ付、壹人江壹ヶ月金壹兩づゝ被下候、尤以來立合御用相勤候御小人目付江、御用中、野扶持之外、月々金壹兩づゝ爲雜用被下候間、得其意御勘定奉行可被談候、

右之通申渡候間、可被得其意候、

○按ズルニ、此外遠國ニ出役ヲ命ゼシ者ニモ、手當金アリ、下文旅費ノ條、併セ見ルベシ、

〔吹塵錄三十一徳川氏〕慶應三年改革後有司俸金總計豫算

慶應三卯年十二月調○中略

布衣以下御手當金一ヶ年凡積

一金三万千六拾兩○中略

定式御手當金一ヶ年凡積

一金三万二千兩餘○中略

右之通御勘定所御勝手掛ニおいて、取調候ものに御座候、

〔吏徴下布衣以上〕御勘定奉行四人○中略

御役入用金三百兩

〔寶暦集成糸綸錄二十五〕寶暦四戌年二月

御勘定奉行

右公事方勝手方共ニ、筆墨等其外入用多、致難儀相勤候段達御聞候、依之向後年々御金三百兩宛

〔吏徵御目見以下〕御鳥見廿二人、見習九人、同並三人、〇中略
見習並三人扶持、御手當金拾兩、〇中略
御普請方改役二人〇中略
役扶持七人扶持、御手當金五兩、　勤方一人役扶持　御手當金同斷〇中略
御作事方勘定役廿貳人
持高　見習御手當金貳兩貳分

〔天保集成絲綸錄八十六〕寛政四子年閏二月

御勘定奉行江

御作事奉行	金高百五拾兩程
御普請奉行	金高三拾兩程
小普請奉行	金高百五拾兩程
御賄頭	金高百五拾兩程
御膳所御臺所頭	金高三拾兩程
表御臺所頭	金高五拾兩程

其方共、支配向少給之もの共へ、御手當、且風儀取直、正道競ひ候樣ニとの儀ニ付、先達而內存相尋候處、答被申聞候趣、一覽の事ニ候、依之御手當金可被成下候間、支配向之者共、勤格別成者、且變事打重り、取續御奉公勤かね候類、夫々心を被用、勘辨之上、御褒美、又ハ御手當拜借等にても遣し度被存候節々、同役相談之上、御手當致し遣候樣可被取計候、尤其度々可被相聞候、〇中略　右手當金請取方之儀ハ、御勘定奉行相談、受取候積り、

右之通、向々へ相達候、尤御手當金受取方之儀ハ、前書向々之金高目當を以、追々受取候積、頭々心

手當扶持

〔天保集成絲綸錄八十六〕寬政四子年閏二月

御勘定奉行江

小普請組支配組頭之儀、高三百俵より以下之分ハ、御手當御扶持方廿人扶持、支配世話取扱之者も、三百俵より以下之分ハ、十人扶持ツヽ被下旨申渡候間、可被得其意候、

〔吏徵上錄御目見以上〕儒者五人

若年寄支配　貳百俵高　御手當扶持十五人扶持

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕學問所勤番組頭〇中略

文化三年丙寅三月、御手當扶持七人扶持、

〔分限御手當筋御書付留〕寅〇慶應二年十一月十七日、美濃守殿〇老中稻葉正邦貞阿彌を以御渡、

覺

御役扶持、御手當扶持被下之面々、是迄正米ニ而被下候得共、當分之內、三拾五石ニ付、代金貳百兩之割合を以、御金ニ而被下候、尤高ニ付、御扶持方ハ、是迄之通、正米ニ而被下候間、向々へ可被達候事、

手當金

〔吏徵附錄慶應〕松前奉行二人〇中略

在勤中、御手當金七百兩、

下田奉行組與力十人

現米八十石高〇中略　吟味懸三人　御手當金三兩　同見習一人　御手當銀二枚　地方懸二人

御手當金三兩　同見習一人　御手當銀二枚〇下略

〔吏徵別錄下布衣以下御目見以上〕川船改役〇中略

天明八年戊申三月廿四日、爲御手當、御年貢之內より、一ヶ年五十兩宛被下、

手當米

御勘定奉行江

御扶持方三拾人扶持増
五拾人扶持

御合力金三百五拾兩増
五百兩

おらく御方事
御內證之御方

但只今迄相渡候、薪炭湯之木油五菜銀者、相止候事、

右之通被仰出候間、可被得其意候、

〔御老女衆記〕御本家

一御切米五拾石

一御合力金六拾兩○中略

右上﨟御年寄　萬里小路○中略

一御切米貳拾石

一御合力金四拾兩○中略

右御客應答　藤山

○按ズルニ、右ハ文久年中ノモノナリト云フ、

〔續王代一覽後記 三〕文政五年十一月十五日、松平右近將監○齊厚へ、德之助君○齊厚養子、德川家齊子齊民、御引移以後、御手當トシテ每歲五千俵ヅヽ賜ハル旨、波間ニ於テ老中列坐、水野出羽守傳達ス、

〔政化間記續筆〕天保五年十二月廿八日、松平右近將監、御手當料二千俵被爲增、向後每年一万七千俵ヅヽ可被下旨被仰出、

〔溫恭院實記 四〕嘉永六年十二月二十九日、賜年々米五千俵于水戶前中納言殿○齊昭、中略

一　御使 内藤紀伊守
水戶中納言殿

右海岸防禦筋等之儀ニ付、繁々御登城有之候ニ付、御一生之內、年々米五千俵被遣之、

給はり、赴任の暇下さる、

〔嘉永明治年間錄九〕萬延元年五月九日、今ヨリ毎歳米二千俵ヲ松平左兵衞督〇信和、上野吉井、一萬石、ニ賜フ、

松平左兵衞督へ、出格之思召を以て、其方一代の內、御合力米として、年々二千俵宛被下之、

合力米渡方

〔書替所定書〕當時定法

一御合力米ハ、年中兩度相渡申候、右相渡候時節ハ極り無之、御手形御役所へ來次第、書替相調申候、從前々極る

〔淺草米廩舊例〕遠國御役人取越米之事

一遠國御役人被仰付、御合力米、御當地ニ而取越被下候分ハ、御切米之時節ニ相渡候共、皆米ニて相渡申候事、

〔札差業要集下〕大御番方登年渡り方覺

二條　江戶出立御定日、毎年三月、小廿八日、大廿九日より、春御借米定日御書替玉なし、米金渡り、

夏取越米、春不勤以下、初日御書替濟玉なし、皆米渡り、冬は定日御書替玉入、米金渡り、

於彼地渡り　初御合力　五月十八日渡り　後御合力　十月七日渡り

大坂　江戶出立御定日、毎年七月、小廿二日、大廿三日より、春御借米定日御書替玉入、米金渡り、夏御借米定日御書替玉なし、米金渡り、冬は定日御書替、米金渡り、

於彼地渡り　初御合力　八月廿三日渡り　後御合力　翌正月十六日渡り

合力金

〔柳營御女中覺書附〕延享元年九月八日

女中病氣ニ而御暇被下候節、三十年以上勤候者ニハ、御切米、御合力金之內多き方と、御扶持方、右兩樣、一生之內可被下候旨被仰出之、

〔天明集成絲綸錄三十八〕明和三戌年二月

一大坂在番罷在候組頭共、交代近々ニ御座候得共、御合力米之增、日割を以も可被下哉と奉存候、

書面之通、在番罷在候組頭、當年より御足高六百石之積被下候間、大坂ニ而、當年請取候御合力米者、御足高之割を以、一倍被下候間、大御番頭江可被談候、

右之通奉伺候、以上、

松平駿河守

卯〇元祿十二年七月

二條大坂在番御合力米之御書付

二條大坂在番之御番衆、在番中、當地ニ而、父之跡式被仰付候面々者、何月とても、父之跡式被仰付候時之前月迄、其身御切米高積御合力米相渡、父之跡式被仰付候月より、其高を以、御合力米可相渡事、

巳〇元祿十四年七月

〔憲教類典 御役二ノ五〕元文三庚午年三月二十日

一遠國御役人并御足高御役料定〇中略

御合力米現米百廿石　二條御城御門番番頭

同　現米四拾石　二條御藏奉行

〔寶曆集成綸錄 二十五〕寶曆八寅年十一月

在番之節只今迄、一万石以上之面々へも、高一倍御合力米被下候得共、向後ハ一万石宛被下之、餘分ハ不被下候間、可被得其意候、

十一月

右之趣、大御番頭江相達候間、可被得其意候、

〔大猷院殿御實紀 八十〕慶安四年四月七日、長崎奉行黒川與兵衛正直、前例のごとく合力米二千苞

合力米

從シ、或ハ遠國ニ出役スル時ハ、旅費及ビ雜費ヲ給スルコト各〻差アリ、救金ハ、病中忌中若シクハ見習トシテ勤役スル時ニ給スルモノニシテ、扶助米ハ家名斷絕者ノ遺族ニ給スル月俸ナリ、

無足ハ部屋住ニシテ、單ニ米俸又ハ金俸ノミヲ給スルモノヲ謂フナリ、

〔吏徵 布衣以上〕大御番頭拾貳人

老中支配　五千石高　二條大坂在番御合力米分應一倍一万石以上　万石

○按ズルニ、大番組頭及ビ大番ノ、二條、大坂ニ在番スルモノモ亦之ニ準ジテ、同ジク合力米アリ、

〔吏徵 御目見以上〕二條御城御門番頭二人

所司代支配　京都在住　持高　御合力現米百廿石

○按ズルニ、此外二條、大坂駿府ノ金、鐵砲弓、武具等ノ奉行、及ビ長崎、大坂、駿府等ノ目付ニモ合力米アリ、

〔勘契備忘記 中〕元祿十一寅年

二條大坂在番幷役人御切米皆米ニ而相渡候御書付

二條大坂在番之大番頭御番衆幷與力同心御合力米、近來米金兩樣ニ相渡候、向後先年之通、不殘米ニ而相渡候、尤二條大坂定役之面々も右同前之事、

當時ハ米金兩樣ニ相成

寅八月

一、二條在番之組頭共、此度御足高ニ准じ、御合力米も一倍被下置候儀ニ奉存候、

御附紙　書面之通被下候間、〇旨間誤疑大御番頭へ申渡候間、得其意可被談候、

古事類苑

封祿部十

雜俸

德川幕府ノ時、知行、切米、役俸等ノ外ニ於テ、支給スル所ノ種類モ亦頗ル多シ、今總稱シテ雜俸トス、

合力米ハ、二條、大坂ノ在番、及ビ二條、大坂、駿府ノ諸奉行等ニ給スルナリ、合力金ハ大奥ニ仕フル女中ノ給料ニ謂フ所、又手當アリ、文政五年、松平齊厚ニ毎年五千俵ヲ給シ、後天保五年、一萬七千俵トス、嘉永六年、德川齊昭ニ、毎年五千俵ヲ給スル類是ナリ、手當扶持ハ、儒者、小普請組支配組頭等ニ給シ、手當金ハ、松前奉行、川船改役、小人目付等ニ給シ、作事、普請、小普請ノ三奉行、賄頭、膳所臺所頭、表臺所頭等ノ下吏ニモ給ス、

役入用金ハ、勘定奉行ニ給シ、諸入用金ハ郡代及ビ代官ニ給ス、又手當受用金アリ、長崎奉行ニ給ス、雜用金ハ、松前奉行ノ下吏、廐部屋門番、油方同心、小人目付等ニ支給ス、四季施ハ、正月、四月、五月、九月、十二月ニ、同朋頭、及ビ數寄屋坊主等ニ時服ヲ賜フヲ云フ、又四季施代金アリ、奥右筆同朋等ニ給ス、又野扶持、懸扶持、配當米、勤金銀、勤料、給金等アリ、小吏及ビ見習ノ輩ニ給スルモノナリ、

作事料ハ官宅、賜第造營費ナリ、其邸地ヲ官ニ收ムル時ハ、移轉費ヲ給シ、之ヲ引料ト云フ、又遠國ノ諸奉行ノ新補セラレシモノニハ引越料ヲ支給ス、又將軍ノ上洛、及ビ日光社參ニ扈

右之通、以有馬兵庫頭被仰付候、

享保十六辛亥年三月　本多伊豫守

〔勘契備忘記 中〕享保十八丑年、右衛門督殿〇德川宗武附、徒以下切米扶持方御書付、

現米五千石

右之通被遣候間、自今徒以下宛行、於其許被下候樣可被致候、此已後被召抱候者有之節者、御賄料之内ニ而御抱可被致候、右五千石之内、御人出入ニ付、切米ニ若餘り候樣成儀候ハヽ、御賄料同斷候間、可被得其意候、以上、

丑十月

加扶持

一父御足扶持取候て相果、家督被下、御足扶持上り候節、父之不受取月より、子ニ元扶持被下候、

但御足扶持父死後ニ請取候へハ返納ニ成る、

一御足扶持取來候もの、役替ニて御足高被下、御足扶持上り候時ハ、受取之御足扶持之分、御足高ニて引落しに成る〔享保十九子年、御證文ニて極、〕

〔寶暦集成綵綸錄二十四〕寛延三午年十二月

御勘定奉行

澀川圖書

右暦補之御用相勤候内、如父時加扶持七人扶持被下候間、被得其意、可被相渡候、

〔寶暦集成綵綸錄二十五〕寶暦八寅年六月

御勘定奉行江

石川玄蕃組
谷口安右衛門〇以下三人略

右淺草本所御藏見廻り假役可相勤旨可被申渡候、勤候内爲加扶持五人扶持被下候間、其段も可被申渡候、尤御勘定奉行へ可被談候、

右之通申渡候間、御徒頭可被談候、

〔天保集成綵綸錄八十六〕寛政四子年五月

御勘定奉行江

八王寺千人同心組頭、持添抱相止候ニ付、以來日光火之番在勤中半組半組頭五人へ、別段加扶持二人扶持ッヽ被下候間、〇中略可被得其意候、

雜載

〔憲教類典二ノ五御役〕總而宜方ニ而御役替被仰付、場所ニより高低之處江參候義有之節は、吟味之上相伺、取來候高幷御扶持方等、勤候内可被下候事、

足扶持渡方

三拾俵貳人扶持　筒井紀伊守同心　永島金十郎跡

內 御足高拾五俵　御足扶持半扶持

貳拾俵貳人扶持　同人組同心　實子總領　金右衛門

右金十郎、元來御切米御扶持方實子金右衛門被下、尤父取來御足高御足扶持ハ、勤候內被下之、

但金右衛門取來御切米御扶持方ハ上ル

〔譜代家督留 二〕

一元高拾五俵 町奉行遠山左衛門尉組同心被成、元同所同人組同心無足見習、

壹人半扶持

外 御足高拾五俵　御足扶持半扶持

都合三拾俵貳人扶持之高被成

町奉行遠山左衛門尉組同心　權平實子總領　渡部錠助

右父相果、家督書面之御切米御扶持方被下候間、引付直之、向後如父時、以判形手形可被相渡候、但權平勤候內、御足高拾五俵、御足扶持半扶持被下候處、錠助儀、如父時相勤候ニ付、直ニ御足高御足扶持勤候內被下候間、被得其意、家督御切米御足高共、來申春之分より、御足扶持者當十二月分より可被相渡候、尤御扶持方渡り候月を考、無相違樣可被渡之候事、

弘化四未年十二月

〔書替所定書〕當時定法

一御足扶持ハ、被仰付候月より渡す、享保八卯年より、御證文ニて極る、

一御足扶持取來る者相果、家督被下、如父時相勤候ニ付、子ニ御足扶持被下候節、御足扶持ハ家督被仰付候月より渡候、

足扶持

同斷　　表御臺所人

役扶持三人扶持　　小間遣頭

同斷　　（御休足御庭）御掃除之者組頭

四拾俵高　　二丸御坊主組頭

持扶持之儘

二百俵高　　奥御祐筆

御役扶持拾五人扶持ツヽ　　村松太郎兵衛　稻垣運平

田中主膳　加藤傳右衛門

八拾俵高　　御鳥見

持扶持之儘、野扶持五人扶持取來通、（但見習之者ハ只今迄之通）

百俵高　　幸田春知

持扶持之儘

右之通、御増高被下候間、向々江可被相談候、以上、

〔寶曆集成絲綸錄二十五〕寶曆三酉年三月

御勘定奉行江　　御留守居河野豐後守同心　關根文平（○以下三人略）

右之者共、大坂御米藏番人ニ申付候、鈴木伊左衛門儀ハ、勤候内二人扶持之積、御足扶持被下候、尤並高現米七石二人扶持ニ候間、得其意、御留守居へ可被談候、

〔譜代家督留　一〕丑（○天保十二年）四月三日、備後守殿、（○老中太田資始）林阿彌ニ以御渡、（○以上朱書）

町奉行江

四拾俵高　平御臺所人
持扶持之儘　法心院殿
貳百俵高　御用達
取來候御扶持方共
七拾俵高　御同所　侍
持扶持之儘　蓮淨院様
同斷　侍
七拾俵高　御賄組頭
五人扶持　御賄方
四拾俵高　勘定役
持扶持之儘
同斷　同　御膳御酒役
二拾俵高　御召御馬口附之者
壹人半扶持
五拾俵高　御膳所御臺所人
持扶持之儘　一位様
七拾俵高　淨圓院様　竹姫君様　御臺所組頭
持扶持之儘　御女中様方
四拾俵高　御臺所人
持扶持之儘

七拾俵高　表火之番
持扶持之儘

八拾俵高　御小人頭
持扶持之儘

六拾俵高　御駕籠之者頭
持扶持之儘

百五拾俵高　西丸御裏門番與力
但取來候御扶持方共

七拾俵高　西丸御門添
持扶持之儘

六拾俵高　二丸火之番
持扶持之儘

七拾俵高　一位様御侍
持扶持之儘

二百俵高　月光院様御用達

七拾俵高　御同所御侍
持扶持之儘

同斷　瑞春院様御侍

同斷　養仙院様御侍

同斷　御同所御臺所組頭

持扶持之儘

御疊奉行
高之多少無構
御役扶持七人扶持

御作事方下奉行
百俵高
持扶持之儘　但御役扶持ハ只今迄之通

小普請方改役下役組頭
二拾俵高
貳人扶持　但役扶持ハ只今之通

西丸火之番
六拾俵高
持扶持之儘

西丸御坊主組頭
四拾俵高
持扶持之儘

御留守居番與力
百五拾俵高
但取來候御扶持方共ニ

表火之番組頭
同斷
同斷

御掃除之者頭
百俵高
持扶持之儘

御徒押
八拾俵高
持扶持之儘

御提灯奉行
八拾俵高
持扶持之儘

持扶持之儘　但御役料有之分ハ只今迄之通

御鐵炮玉藥奉行　高之多少無構　御役扶持貳拾人扶持

御鐵炮御簞笥奉行　高之多少無構　御役扶持拾人扶持

御弓矢鎗奉行　同斷

御具足奉行　同斷

御天守番　百俵高
持扶持之儘

富士見御寶藏番　百俵高

御本丸二丸御女中樣方添番　同斷

奥火之番　八拾俵高
持扶持之儘

進物取次上番　五拾俵高
持扶持之儘

御本丸二丸御女中樣方御廣敷伊賀之者　三拾俵高
貳人扶持

御留守居與力　二百俵高

漆奉行　御役扶持七人扶持

御勘定　百五拾俵高
但取來候御扶持方共、部屋住之者ハ只今迄之通、

支配勘定　百俵高

足米

御扶持方　　當十二月分ゟ渡ル

〆

〔柳營沙汰書 三〕慶應三年四月二十九日

御同人 ○老中松平周防守康直 御渡　　兩御目付江

御抱筋之者其場所ニテ番代申付候節、場所高ヨリ元高之者ハ、場所高ヲ以番代申付、元高小高之者ハ、元高ヲ以番代申付勤候、同場所高並之通、御足高被下候筈之處、近來區々ニ付、以來ハ都テ前文通り相心得候樣可被致候、

右之趣、組支配有之面々可被達候事、

〔柳營秘鑑 四〕諸御番所 井 末々迄御切米並高之大概

一御坊主組頭 並高之上廿俵御足米被下

〔憲法部類 三〕享保四年十月十一日、左之御書付、上田新四郎被相觸候、

御足米御褒美願之義、只今迄ハ、勤之功無功之無差別、一統並立候樣、申出候類も有之候、左樣ニハ有之間敷義ニ候、去年も申通候通り、彌向後ハ隨分遂吟味、御足米之義ハ、格別勤之功有之もの又ハ小給ニて、決而御奉公難取續もの、御褒美にも別て骨折候譯、得と吟味詰候て、相願候樣可仕候、

右願之義、自今此方より年々申通間敷候間、九月中可願出候、其年者十月より差出候、以上、

〔享保集成絲綸錄 三十〕享保九辰年七月

此度御吟味之上、積兼候小給之者共ニ、御增高被下候間、自今支配之內ゟ格別之儀も無之候はゞ、御足米願申出間敷候、

右之趣、向々江可被達候、

五拾俵高　　紅葉山附坊主

外何千俵ハ當春 何千俵ハ當夏 爲御足高米請取申候

右是ハ當何冬、爲御足高米請取申處實正也、仍如件、

年號月日

高家
何之誰

伊庭惠兵衞殿

榊原小兵衞殿

〔天保集成絲綸錄 八十七〕文化八未年十二月

御勘定奉行江

總而御役替、御番入等被仰付、御切米御足高被下候面々、十月以後被仰付候節ハ、向後半年分可被下候、

右之通、向々寄々可被相達候、

〔吹塵錄 三十一 德川氏〕慶應三卯年九月

大目付 御目付 江

此度布衣以上御役人、御役金被下、是迄之御足高等上り、銘々持高ニ相成候ニ付而ハ、御藏御證文ハ不相渡、是迄之證文を以、本高之分相渡候筈に候間、此段爲心得、御藏米取之面々江可被達候、

〔佐渡奉行公務扱〕一佐渡奉行被仰付御足高御役料請取方心得之事

文政十一子年十二月八日、元本高百俵御勘定吟味役ゟ 百俵御加増、貳百俵高ニ被成下、佐渡奉行被仰付候、

鈴木傳市郎

右御加増高、御足高御役料、御扶持方共渡り方左之通

御加増之分　當春之分ゟ丸渡

御足高之分　半年分渡

御役料は　當冬之分計渡

段書替奉行へ可₂被₁申渡₁候、
〔天明集成絲綸錄三十八〕寶曆十一巳年八月
御勘定奉行へ
此度御役御免、寄合又ハ小普請入被₂仰付₁候面々、當巳年中、御足高之分ハ不₂殘被₁下候旨被₂得其意₁、向々へ可₂被₁達候、尤御勘定奉行被₂談候樣可₁被₂致候、
右之通、御目付へ申渡候間、可₂被₁得₂其意₁候、
〔天明集成絲綸錄四十三〕天明五巳年九月
御勘定奉行江
都而遠國御役人御足高、於₂其場所₁可₂請取₁筈之處、願之上、御役中、於₂江戸表₁相渡候も有之候得共、是迄請取來候分も、以來ハ都而於₂江戸表₁相渡候儀ハ難₂相成₁候間、於₂其場所₁請取候樣可₂被₁致候、
〔憲敎類典五ノ十御藏前〕寛政二庚戌年十一月廿七日
久世丹後守
久保田佐渡守被₂達
諸向御切米、御足高米、御役料、御扶持方、請取手形認方振合、近來區々ニ相成、手形相止高、書替所、御藏方、御勘定所取扱方差支ニも相成候間、以來別紙案文之通、御認被₂成候樣存候、
書付手形案
朱書程村紙二ツ切
但御役料も同様
請取申冬御足高米之事
高何千俵內
米合何千俵者　但三斗五升入

猪飼大峯　倉知重藏〇以下十四人略

右之分、小普請ニ入、御足高取來分は上り、當年分之御足高は被下之、〇中略

右之通申渡候間、得其意可被談候、

〔書替所定書〕當時定法

一御加增、御足米、御足高之分ハ年中渡候、御加增御足米渡り方も、時々御證文を以渡、御足高ハ、享保八卯年より、御證文ニて極る、

一父子御足高有之父相果、家督御足高被下候時、子取來る御足高、父死後受取候へハ返納いたし、家督之御足高渡り、三季共同斷、

但父存生之內、父子受取候へハ、不及返納差引

一御足高取、御加增被下、御足高上り候節ハ、永代之事故、御足高指引無之、

一大御番組頭御足高取り、在番ニ付、夏高半分請取候以後、小普請ニ入候へハ、足高春夏四分一より渡り、過之分返納ニ成る、延享元子年十月伺

〔淺草米廩舊例〕遠國御役人取越米之事

一御當地御役人被仰付、御足高被下候節、譬ハ夏御張紙之內、春夏之御借米、一紙手形ニて出候はば、手形引分ケさせ、夏之分ハ米金ニて相渡候事、

〔寶曆集成綜綸錄〕二十五　寶曆四戌年二月

御勘定奉行江

高家衆

長崎奉行

右御足高御役料、只今迄、各裏印ニ而相渡候得共、向後直判手形ニて受取候樣申渡候間、得其意、其

五百石内者五百石高・御役料三百俵　御廣敷御用人

卯六月

〔御書附留〕京都町奉行　大坂町奉行

千五百石ヨリ以下之者ハ、向後千五百石之高御足高被下之、御役料ハ唯今迄之通リ被下候、

長崎奉行　駿府御定番　禁裏附　院附　山田奉行　堺奉行　奈良奉行　駿府町奉行

佐渡奉行　浦賀奉行

千石ヨリ以下之者ハ、向後千石之高御足高被下之、御役料ハ唯今迄之通被下之候、

右之通候間、可被得其意候、

元文三年三月

〔吹塵錄二十八徳川氏〕寛政元酉年分限高

貳拾六万三千百三拾五俵餘、八百五拾五人半扶持、　御足高

拾壹両　同

〔大概順〕御目見以下大概順

三拾俵持扶持　御鷹匠同心　御犬牽

但以下は御足高被下置、見習は御金も御扶持も被下置候、

〔寶暦集成絲綸錄二十四〕寛延四未年九月

御勘定奉行江〇中略

佐々木勘三郎支配　猪御犬牽組頭

直井喜七

木村伴四郎

只今迄之通三百俵内者御役料百俵　御細工頭
當時ハ貮百俵高御役料百俵

四百石内者四百石高　富士見御寳藏番之頭

高多少ニ無構御役料貮百俵　御賄頭

只今迄之通貮百俵四人扶持内八百俵　御臺所頭

七百石内者七百石高御役料貮百俵　一位様御用人

七百石内者七百石高御役料貮百俵　月光院様御用人

五百石内者五百石高御役料貮百俵　瑞雲院様御用人

只今迄之通御役料五百俵　壽山院様御用人

四百石内者四百石高御役料四百俵、當時ハ御役料五百俵、　竹姫君様御用人

四百石内者四百石高御役料四百俵　法心院様御用人

四百石内者四百石高御役料四百俵　蓮乗院様御用人

四百石内者四百石高御役料四百俵　壽光院様御用人

七百俵御役料　駿府御定番

千俵宛御役料　高井飛騨守　土岐信濃守

五百石内者五百石高御役料只今之通千石内者三百俵　御小性
但部屋住者、只今迄之通御切米御役料可被下候、次男ニ而も同断

五百石内者五百石高右同断　御小納戸

五百石内者五百石高右同断　西丸御小性

五百石内者五百石高右同断　西丸御小納戸

七百石内者七百石高　御船手

七百石内者七百石高　御腰物奉行

只今迄之通千石内者御役料三百俵　御勘定吟味役

只今迄之通四百俵内者御役料二百俵　奥御祐筆組頭

六百石内者六百石高　新御番組頭

只今迄之通四百俵ゟ内者御役料百五十俵　御祐筆組頭
　當時者三百石高御役料百五拾俵

高之多少ニ無構御役料百五拾俵　御膳奉行

只今迄通四百俵内者御役料百俵　御納戸組頭
　當時ハ四百俵高

六百石内者六百石高　大御番組頭

三百俵内者三百俵高　小十人組頭

只今迄之通四百俵内者御役料百俵　御勘定組頭
　當時ハ三百五拾俵高、御殿詰并御勝手方御取箇方組方ハ御役料百俵、

只今之通三百石内者御役料百俵　御金奉行
　當時ハ貳百俵高御役料百俵

四百石内者四百石高　西丸切手御門番之頭

四百石内者四百石高　御裏御門切手番之頭

高多少ニ無構御役料貳百俵　御廣敷番之頭

四百石内者四百石高　御天守番之頭

貳千石内者貳千石高　御鑓奉行
千五百石内者千五百石　御持弓御持筒頭
貳千石内者貳千石高　西丸御留守居
三千石内者三千石高　小普請支配
貳千石内者貳千石高　新御番頭
貳千石内者貳千石高　御作事奉行
貳千石内者貳千石高　御普請奉行
貳千石内者貳千石高　小普請奉行
千五百石内者千五百石高　總御弓御鐵炮頭
千石内者千石高　御留守居番
千石内者千石高　御目付
千石内者千石高　御使番
千石内者千石高　御書院番組頭
千石内者千石高　御小性組番頭
七百石内者七百石高　西丸御裏御門番頭
千石内者千石高　御徒士頭
千石内者千石高　小十人頭
七百石内者七百石高　二丸御留守居
只今迄之通千石内者御役料貳百俵　御鐵炮方
七百石内者七百石高　元方拂方御納戸頭

今日諸役人、一役より一人ヅヽ可レ致二登城一ニ付、出仕有レ之候處、於二芙蓉之間一老中列座、被二仰出一之趣、水野和泉守被二申渡一、御書附ニ通出候而、向々へ寫取候由、御書付之趣、諸役人役柄ニ不レ應、小身之面々、前々より御役料被二定置一被レ下候處、知行高下有レ之故、今迄被二定置一候御役料ニ而ハ、小身之者御奉公續兼可レ申候、依レ之此度御吟味有レ之、役柄ニより、其場所不相應ニ、小身ニて御役勤候者ハ、御役勤之內、御足高被二仰付一、御役料增減有レ之、別紙〇勘契備忘記同文故略之通相觸候、此旨可二申渡一旨被二仰出一候、

但此度御定之外、取來候御役料ハ、其儘可レ被二下置一候、

〔勘契備忘記 中〕享保八卯年

諸向御足高御書付

高家衆　千五百石內者千五百石高
　肝入者御役料八百俵
御側衆　五千石內者五千石高
御留守居衆　五千石內者五千石高
大御番頭　五千石內者五千石高
御書院番頭　四千石內者四千石高
御小性組番頭　四千石內者四千石高
大目付　三千石內者三千石高
町奉行　三千石內者三千石高
御勘定奉行　三千石內者三千石高
御旗奉行　貳千石內者貳千石高
百人組之頭　三千石內者三千石高

ふ。この日近習の人々も、五百石にたらざるものは、給米をまして五百石の數にみてらるべしとなり、是より先同職の內、はるかに微祿なるものもうち交りければ、祿少き者は、費用たらざるにくるしむこと多かりしに、かくおもはずなる御惠により、なべてかしこみ奉る事大かたならず、今に於てこの御德をぞあふぎける。後にきけば此事申出せしは、小納戶大島近江守以興が父古心入道（初稱三大島伴六守正）なりといへり、これまで父にかゝりて家にあるものを近習となさるゝ時は、別に三百俵の祿賜ひ、官料も亦。三百俵を賜ふことなれば、すべて事たるといへども、家つぎし者の祿少きは、官料のみのたすけなれば、勤仕にたえぬ人おほし、願くは五百石より下つかたのものを近習となされんには、別に給米をたまはらんことをとうち〳〵聞え上けるとぞ、この古心、そのはじめ紀藩にて番頭奉行の職つかふまつりしが、年老てとく仕をかへし、今は片山里に引籠りてありしが、大統をつがせ玉ひし（○德川吉宗）後、ふたゝび召れて江戶にまゐりしかば、勘定奉行を命せらるべしとて、先其心をとはせ玉ひしに、それがし不肖の身をもて、深き御いつくしみを蒙り、府下までも召よせられしことかぎりもなき御惠なり、いかにも仰にしたがひ侍らば、家をも身をもおこし、子孫までも光榮をのこし侍るなれども、かゝる重職にのぼりては、心のまゝに直言を聞えあげ、微忠をつくす事もなりがたし、重任となさるべき才略の御家人はいくらも侍るべし、あはれ某をばこのまゝにすておかれ玉はれかし、さすれば誰に憚る事もなく、思ふ程の事をつゝまず言上すべしとて、かたく辭し申ければ、其心に任せられ、年ごとに金百兩、御衣御羽織などかづけられて、政にあづかる事ども、折々問せられけり、其子近江守をも重く用ひ玉はんとありしかど、これもよひとのごとくみだりに職をむさぼる心なく、多病なりとて、職にすゝめらるゝ事を辭し申けるとなん、父子共に近き世にいとめづらしき人なりき、

〔享保通鑑八〕享保八年六月十八日

足高

平庄九郎、遊撃隊方頭取調　伴野七之助、但高千石以上之者江ハ半減、御切米高三百石以上之者江ハ半減、　金四百両宛、遊撃隊頭取　伊庭軍兵衛、三橋寅藏、榊原健吉、高橋伊勢守、加藤平九郎、勝與八郎、但御切米高貳百俵以上之者江ハ半減、　金五百両開成所頭取、但高千石以上之者江ハ半減、御切米高六百俵以上之者江ハ不被下、同三百俵以上之者江ハ半減、　金四百両開成所頭取、遊撃隊頭取、格、湊信八郎但高八百石以上之者江ハ半減、御切米高五百俵以上之者江ハ不被下、同貳百俵以上之者江ハ半減、　金五百両御鐵炮玉藥奉行但高千石以上之者江ハ半減、御切米高六百俵以上之者江ハ不被下、同三百俵以上之者江ハ半減、　金六百両宛、御納戸頭、御勘定頭、頭取、奥御祐筆組頭、但高千石以上之者江ハ半減、御切米高七百俵以上之者江ハ不被下、同三百五十俵以上之者江ハ半減、　金五百両奥御祐筆組頭格但高千石以上之者江ハ半減、御切米高六百俵以上百者江ハ不被下、同三百俵以上之者江ハ半減、　金五百両宛姫君様方、本壽院様、實誠院様、御用人但高千石以上之者江ハ半減、御切米高六百俵以上之者江ハ不被下、同三百俵以上之者江ハ半減、　金三百両姫君様御用人奥御祐筆所詰、格、妻木主一　金三百両宛美濃、西國、飛驒、郡代但高ニ不拘被下

右之通、御役金月割を以被下候、渡方之儀者、三月、六月、九月、十二月、右四度ニ相渡ニ而可有之候、請取方等之儀者、御勘定奉行可被談候事、

〔吹塵錄三十一德川氏〕慶應三年改革後有司俸金總計豫算

慶應三卯年十二月調

布衣以上御役金一ヶ年凡積

一金三拾壹万三千八百両餘中略

布衣以下御役金一ヶ年凡積

一金三千両餘

御目見以下役金一ヶ年凡積

一金七千八百両餘中略

右之通、御勘定所御勝手掛ニおいて、取調候ものに御座候、

〔有德院殿御實紀附錄三〕享保八年六月十八日、諸職の有司俸米の定額を定らる、これを足高とい

町奉行但同上 金貳千兩京都見廻役並但同上 金千五百兩宛、日光奈良駿府甲府奉行但同上 金三千兩佐渡奉行但同上 金貳千兩新潟奉行但同上 金千五百兩宛、軍艦奉行並、騎兵奉行並、歩兵奉行並、製鐵所奉行、遊擊隊頭、軍艦頭、銃隊頭、砲兵頭、騎兵頭、歩兵頭、撒兵頭、但高三千石以上之者江ハ半減、御切米貳千俵以上之者江ハ不被下、同七百俵以上之者江ハ半減、 金七百兩宛、西丸御留守居、學問所御用、林式部少輔、坂井右近將監、西丸御留守居格、陸軍所修行人教授役頭取、下曾根甲斐守、 金三百五十兩宛、同上山口近江守、新番頭格同上松平石見守、 金八百兩淸水小普請組支配但高千六百石以上之者江ハ半減、御切米高千俵以上之者江ハ不被下、同五百俵以上之者江ハ半減、 金貳千兩火消役但高ニ不拘被下 金千兩御目付但高貳千石以上之者江ハ半減、御切米高千俵以上之者江ハ不被下、同五百俵以上之者江ハ半減、 金六百兩御小性但高千貳百石以上之者江ハ半減、御切米高千俵以上之者江ハ不被下、同三百俵以上之者江ハ半減、 金三百兩吹上奉行但高六百石以上之者江ハ半減、御切米高五百俵以上之者江ハ不被下、同貳百五十俵以上之者江ハ半減、 金六百兩宛、静寛院様、天璋院様、御簾中様、御用人、但高千貳百石以上之者江ハ半減、御切米高七百俵以上之者江ハ不被下、同三百俵以上之者江ハ半減、 金四百兩法印法眼之奥醫師、但高八百石以上之者江ハ半減、御切米高四百俵以上之者江ハ不被下、同貳百俵以上之者江ハ半減、 御匙江別段金百兩、 金八百兩御作事奉行並、但高千六百石以上之者江ハ半減、御切米高千俵以上之者江ハ不被下、同五百俵以上之者江ハ半減、 金千兩外國奉行並但高貳千石以上之者江ハ半減、御切米高千俵以上之者江ハ不被下、同五百俵以上之者江ハ半減、 金千五百兩神奈川奉行並但高ニ不拘被下、在府之者江ハ金千兩、高貳百石以上ニ而在府之者江ハ金五百兩、御切米高千俵以上同斷之者江ハ不被下、同五百俵以上同斷之者江ハ金五百兩、 金貳千兩宛、長崎奉行並、箱館奉行並、但高ニ不拘被下、在府之者江ハ金千兩、高貳千石以上ニ而在府之者江ハ金五百兩、御切米高千俵以上同斷之者江ハ不被下、同五百俵以上同斷之者江ハ金五百兩、 金八百兩宛、軍艦頭並、製鐵奉行並、遊擊隊頭並、砲兵頭並、歩兵頭並、銃隊頭並、騎兵頭並、但高千六百石以上之者江ハ半減御切米高千俵以上之者江ハ不被下、同五百俵以上之者江ハ半減、 金五百兩宛、歩兵頭並格、陸軍所修行人教授役頭取、飯田庄藏、榊原鏡次郎、 金八百兩撒兵頭並但高千六百石以上之者江ハ半減、御切米高千俵以上之者江ハ不被下、同五百俵以上之者江ハ半減、 金貳百兩御使番但高千石以上之者江ハ半減御目付介之者江ハ金六百兩、同斷、高千石以上之者江ハ金三百兩、同七百俵以上之者江ハ半減、 金三百兩駿府勤番組頭但高六百石以上之者江ハ半減、御切米高五百俵以上之者江ハ不被下、同貳百俵以上之者江ハ半減、 金六百兩宛、別手組出役頭取取締澤井鎮之助、鈴木猪三郎、塚原寛十郎、小泉兵庫、 金五百兩宛、同上神保常次郎、寺西直次郎、山田勝三郎、儒者奥村秀五郎、永井三藏、和學所頭取伊丹桄之丞、沼津調頭取松

足高役料等ヲ廢シ役金給與ノ定

布衣以上御役相勤候面々江、向後御足高御役知御役料御役扶持不レ被レ下、是迄之場所高ニ不レ拘、今度御改正、別紙之通、役金被レ下候旨被二仰出一候事、

別紙

御役金被レ下高之覺

金壹萬兩隱居并部屋住ヨリ被二仰付一候老中　金五千兩同上老中格　金四千兩同上若年寄但御役宅江引移、月番相勤候者江金六千兩、

金八百兩若年寄、山陵奉行、戸田大和守　金四千兩萬石以下若年寄格、若年寄並、但高八千石以上之者江ハ半減　金千五百兩高家但高三千石以上之者江ハ半減、御切米高貳千俵以上之者江ハ不レ被レ下、同千俵以上之者江ハ半減、肝煎江ハ別段金五百兩、

金貳千五百兩御側但高五千石以上之者江ハ半減、御切米三千俵以上之者江ハ不レ被レ下、同千五百俵以上之者江ハ半減、　金貳千兩宛、駿府御城代、甲府御城代、但高ニ不レ拘被レ下、在府中ハ不レ被レ下、　金千五百兩山田奉行但高ニ不レ拘被レ下　金貳千五百兩宛、御留守居、海軍奉行並、陸軍奉行並、外國總奉行並、大目付、町奉行、御勘定奉行、但高五千石以上之者江ハ半減、御切米高三千俵以上之者江ハ不レ被レ下、同千五百俵以上之者江ハ半減、　金貳千五百兩京都見廻役但高ニ不レ拘被レ下　金七百兩林大學頭　金八百兩宛、一橋殿家老、龜之助殿〇田安家老、但高ニ不レ拘被レ下　金貳千兩宛、軍艦奉行、奥詰銃隊頭、騎兵奉行、歩兵奉行、但高四千石以上之者江ハ半減、御切米高貳千五百俵以上之者江ハ不レ被レ下、同千俵以上之者江ハ半減、　金貳千兩宛、御勘定奉行並、御作事奉行、但高四千石以上之者江ハ半減、御切米高貳千五百俵以上之者江ハ不レ被レ下、同千俵以上之者江ハ半減、　金貳千兩禁裏附但高ニ不レ拘被レ下　金千五百兩甲府小普請組支配但同上　金貳千兩外國奉行但高四千石以上之者江ハ半減、御切米貳千五百俵以上之者江ハ不レ被レ下、同千俵以上之者江ハ半減、　金三千兩神奈川奉行但高ニ不レ拘被レ下、在府之者江ハ金千五百兩、高三千石以上ニ而在府之者江ハ金七百五十兩、御切米高貳千俵以上同斷之者江ハ不レ被レ下、同七百俵以上同斷之者江ハ金七百五十兩、　金四千兩長崎奉行但高ニ不レ拘被レ下、在府之者江ハ金千五百兩、高三千石以上ニ而在府之者江ハ金七百五十兩、御切米高貳千俵以上同斷之者江ハ不レ被レ下、同七百俵以上同斷之者江ハ金七百五十兩、　金千五百兩浦賀奉行但高ニ不レ拘被レ下　金四千兩箱館奉行但高ニ不レ拘被レ下、在府之者江ハ金千五百兩、高三千石以上ニ而在府之者江ハ金七百五十兩、御切米高貳千俵以上同斷之者江ハ不レ被レ下、同七百俵以上同斷之者江ハ金七百五十兩、　金三千兩兵庫奉行但高ニ不レ拘被レ下　金貳千五百兩宛京都大坂

後右之通御宛行被下之、直御抱被仰付安左衛門手へ附相勤候樣可致候、〇中略
右之通、可被申渡候、
三月
御勘定奉行江

〔天明集成絲綸錄二十九〕明和九辰年九月
御普請役　大河内庄右衛門
右佐渡奉行支配、與力格、廣間役ニ可被申渡候、勤候內、役金三拾五兩被下候、

〔佐渡奉行公務扱〕享和元酉十二月十一日、廣間役被仰付候、
高三十俵三人扶持小普請方手代ゟ　平野仁左衛門
戌年二月十七日出立、三月十二日佐渡著、
右御切米者、酉年分先役ニ而請取、役金は當酉冬之分拾貳兩貳分、此外來戌年春渡御役金拾壹兩貳分、同春渡御借米七俵取越請取、取來之御扶持方は戌正月分迄、先役ニ而請取、御切米御役金共、戌夏渡ゟ佐州ニ而請取候、
文化元子十月廿四日
支配組頭被仰付候　元百俵五人扶持內三拾俵御足高、御役扶持拾五人扶持、小普請方、　杉浦文左衛門
本高七拾俵五人扶持ニ成ル
右佐州行越ニ付、取越請取物左之通、
御役金御役料共、當冬來春夏之分、百兩三百俵取越請取、御切米は當子年分先役ニ而受取、來丑春夏御借米之分三拾四俵取越請取、
來丑冬之分より、御切米御　金御役料共、佐州ニ而渡候、

〔德川禁令考十八諸規〕慶應三丁卯年九月廿六日

請取候樣可レ仕哉と奉レ存候、

右之通奉レ伺候、以上、

辰三月　御賄頭

御附紙

伺之通可レ爲候、其節之御勘定奉行より添狀遣候樣申渡候間、可レ被レ談候、但悴共、父家督被レ下、御奉公相勤候ハヽ、役切米可レ被レ下候、是又御勘定奉行添狀遣候樣申渡候間、其節ニ可レ被レ談候、

役米

〔吏徵 下 御目見以下〕御中間五百五十人

十五俵一人扶持　御旗指之者、役米十五俵、　御持鑓之者、役米五俵半扶持、　御馬髮卷役、役米五俵、〇中略

御小人四百五十人

十五俵一人扶持高　御小馬驗役之者、役米三拾五俵、　龜井坊二十五俵、役米拾五俵、　御長刀役之者、役米拾五俵、　御小道具役、役米五俵半扶持、

役金

〔吏徵 上 布衣以上〕長崎奉行一人

老中支配　御役金三千兩

〔概席寶鑑 御目見以下大概順〕十五俵　御役金一兩三分　紅葉山御高盛六尺

〇按ズルニ、此外駿府武具奉行、奥坊主組頭、普請方等ニモ役金アリ、

〔寶曆集成絲綸錄 二十四〕延享元子年三月　上坂安左衛門〇代官

御切米七拾俵三人扶持宛　元〆手代三人　外役金拾兩宛

右安左衛門元〆手代三人、常々實體ニ相勤、別而去亥年、〇寬保三年御取箇其外、精出シ相勤候ニ付、向

同年〇明和九年三月迄、月次御扶持は、御手形壹枚限渡來候處、御扶持方同樣、札差壹人分、結石〆に而、以來御渡し之御達有之、

〔分限御手當筋御書付留〕寅〇慶應二年十一月十七日、美濃守殿〇老中稻葉正邦貞阿彌を以御渡、

覺

御役扶持、御手當扶持被下之面々、是迄正米ニ而被下候得共、當分之内、三拾五石ニ付代金貳百兩之割合を以、御金ニ而被下候、尤高ニ附御扶持方ハ、是迄之通、正米ニ而被下候間、向々へ可被達候事、

〔吏徴御目見以下〕御賄組頭七人

頭支配　役切米三拾俵〇中略

御賄六人

持高　下役、役切米五俵、

〇按ズルニ、此外賄調役以下、賄方ノ下吏ハ、皆役切米ヲ給與セラレシナリ、

〔書替所定書〕當時定法

一御賄方役切米之儀、諸向之役切米トハ別段ニて、他役へ成候ても不及沙汰候由極、

〔勘契備忘記中〕享保二十一辰年〇元文元年御賄方御役御切米被下方書付

一御賄役被仰付候節者、賄方之内より被仰付候ハヽ、組頭御役御切米以來被下候積、

一組頭ニ成候者、諸繰上ニ而申付候ハヽ、其場所之御切米、有來之通被下候積、

右之通、其場所々々之御役切米無相違、元御證文を以被下候積奉存候、

一御賄方之者之悴共、跡式被下、御奉公ニ罷出候節、當分ハ被下間敷哉、左候ハヽ、其節拙者共ゟ御勘定所へ印形斷狀ニ而、右取高相除高、追而被下候節も、拙者共儀、印形斷狀を以、元御證文之通、

元祿十五午年十月

但寶永七寅年、御役扶持之儀聞合候處、御藏衆ゟ此書付到來、

〔勘契備忘記 中〕御扶持方渡之覺

一御役扶持取候面々、來月分之御扶持方請取、相果候類、或は御役退候而御免候共、不レ及二返納一候、勿論不レ請取一分ハ、書替相濟候共不レ被レ下候、此御扶持之儀、元祿十五午年十月、返納之積り御書付出ル、

附御役被二召放一候者、御役料者同斷、跡役之ものへ被二仰付一候月ゟ可レ被レ下候事、○中略

右之通可レ被レ得二其意一候、以上、

享保五子年四月　　御勘定奉行

〔書替所定書〕當時定法

一御役扶持方計取候者、御足扶持被レ下、元扶持ハ御足高直ニ被レ下候者、小普請ニ入、元扶持計りニ成候時ハ、御足扶持受取候翌月より元扶持渡、享保十七年、元高御切米取を、扶持請の例を以極る、

一御作事御被官出役之役扶持、入替り之節、前之者請取候翌年より渡る、尤時々添状、○節略

〔淺草米廩舊例〕月々渡方凡石數覺

二日御役扶持　米六拾石程

廿一日渡御役扶持　米貳百九拾石程

勤仕御役扶持　米五千六百石程

不勤御役扶持　米八百石程○中略

御代官扶持　米六千石程　是ハ春夏冬ニ渡ル

〔札差業要集 中〕享保年中より文化迄御藏方荒増之扣

之割合ニて被₂下置₁之、
〔概席寶鑑〕御目見以下大概順持高　御役扶持二人扶持　御普請方同心
○按ズルニ、役扶持ヲ給與セル者、此外大坂船手、書物奉行、疊奉行、代官、勘定川船改等アリ、今其最高額、及ビ最低額ノモノヲ掲グ、
〔吹塵錄〕二十八德川氏寫政元酉年分限高
五千五百八人半扶持　御役扶持
〔續々泰平年表〕安政元年正月十六日、御先手本多左京、若林勘解由、金田式部、石川將監、永井能登守、坂井右近、松平藤十郎、戸川日向守、川井攝津守、内藤七左衞門、右の面々へ、市中晝夜見廻リ被₂仰付₁、同十七日伊勢守殿より御目付へ、夷國船渡來非常の節、其方共組支配與力同心家來共に至る迄、當番の者相除、寄場等へ相詰候向は、三千石以上持高、并御役高とも、晝夜四度分御扶持方にて日々被₂付候に付、頭支配に於て配賦可₂致候、三千石已下の分は、組支配并家來共ニ至る迄、晝夜四度の配賦被₂下候積リ、且乘馬秣等の儀も、二千石以下の分は、是又兵粮同樣於₂場所₁御渡有₂之、就ては組人數并家來下々迄の總人數、二千石以下乘馬員數取調、揃者迄早々可₂申聞₁候、尤御軍役に泥み、無益の雜人雇人等召連候儀、可₂成丈相省、御實備の處勘辨いたし可₂被₂申聞₁候、但屯所相立候夕刻より、御扶持方御渡被₂下候に付、夫迄の兵粮等は、銘々用意可₂被₂致候、且御扶持御賦請取方、并場所等の儀は、猶又可₂申達₁候、
〔京都御役所向大概覺書〕三覺〇中略
一御役扶持有₂之面々、來月分を、前之月請取候已後、御役替リ、又ハ御役被₂召放₁候時ハ、可₂爲₂返納₁候、但月を越候ハヾ不₂及₂返納₁候、且又御役扶持、前之月請取候以後相果候ハヾ、不₂及₂返納₁候事、
已上

役扶持

右日限之通、美濃部庄右衛門、三雲新左衛門裏判取之、米金請取候義、來十月より十一月廿九日迄可限之、但米金請取方之儀も右ケ條ニ准じ可相心得、直段之儀ハ、百俵ニ付四十六兩之積たるべき事、

酉九月廿六日○中略

〔憲教類典二ノ五御役〕享保九甲辰七月十三日

左之趣、大久保佐渡守殿○常春被仰渡候由、三宅大學被相觸候、大學口上ニて被申聞候ハ、年々御足米願出候場所も有之候、夫共ニ向後相願申間敷由、佐渡守殿被仰渡候、

此度御吟味之上、饒乘候小給之者へ、御増高被下候間、自今ハ支配之内より、格別之義も無之候はゞ、御足米願申間敷候、

高多少不構、御役扶持二十人扶持、　御鐵炮玉藥奉行○中略

右之通御役扶持被下之○中略

一享保十六辛亥年三月

御目見以上、御役勤候內、御足高丼御役料定、

御役扶持

三百人扶持　火消役○中略

七人扶持　漆奉行延享四卯四月十四日、御役料百俵被下、御役扶持上ル、○中略

享保十六辛亥年三月　本多伊豫守

〔柳營秘鑑二〕御番頭之次第

一駿府加番ハ万石以上一人、是を世上ニて大加番と云　其外五六千石寄合兩人被仰付、○中略　但加番之面々、一万石以上ハ減高一万石にて勤仕之御役扶持一万石ニ四百人扶持被下之、其以下之面々ハ右

候、夏之分ハ九月、冬分ハ十二月ニ入候はゝ、不及返納候候、

一閏月ハ、月數之內ニ而籠り候事、〇中略

右之通可被得其意候、以上、

享保五子年四月

〔書替所定書〕當時定法

一御役料ハ、高三分一渡、(元祿十六未年より添狀ニて極る)

一御役料取、御足高被下、御役料上り候節ハ、受取候分之御役料、御足高之內ニ而引落し渡る、

但御足高より最前之御役料多、引不足之節ハ、其年中御足高不相渡、引殘り之分不及返納、翌年より御足高被下候、但御役扶持も同斷、(享保八卯年、御證文ニ而極る、但書享保十五戌年十二月、寬延元辰年九月、御證文ニて極る、)

一御役料、御足扶持、御役扶持、取來る者、御加增御足米等被下、右取來る品々上候時ハ、不及引落、先達而受取分ハ其儘被下候、

但御加增御足米被下候以後請取候へバ、引落ニ成る、(享保八卯年、御足高被下候已後より、御證文ニて極る、)

一閉門御免以後、閉門中之御役料ハ不被下、歸役以後之御役料計被下候、御役扶持も、閉門中之御役扶持ハ不被下、歸役之月より御役扶持渡る、尤其時ニ添狀、(元文二巳年、添狀ニて極、)

一遠慮逼塞之者、御役料御役扶持、御免以後、溜り之分ハ添狀ニて相渡、但御免之時ハ不渡、

一子御役料取ニて、父家督被下、御役料上り候節ハ、父死後ニても、家督已前請取候へバ、返納無之候、家督以後ニ候へバ、返納ニ成り候、(享保八卯年伺極る)

〔御用留〕酉冬御切米御張紙寫

當酉〇文久元年冬、御役料請取高、三步一米、三步二、金ニ而可相渡候、

一御役料二百俵有餘以下ハ、十月十三日より同十四日迄、

渡候、九月ニ入候ハヾ、春夏之分相除、冬之分定候時節可相渡候事、
附先役人春御役料請取候以後、跡役四月迄之内被仰付候ハヾ、夏御役料請取可申候、先役人夏御役料請取候以後、跡役八月迄之内被仰付候ハヾ、冬御役料ゟ請取可申候、先役人冬御役料共ニ不殘請取候以後、跡役其年之内被仰付候ハヾ、冬之分計可被下候事、
元祿十五午年十月

一閏月ハ返納渡方共ニ、其月數之内ニ籠候積可相心得事、
一父子相勤、子御役料取來候時、父相果、跡式被仰付候節、子御役料請取分ハ、不及返納候事、
一子細有之、不時ニ請取候御役料ハ、至其節可相伺之事、○中略
已上
元祿十五午十月

〔御勘定所定書 中〕御役料渡方之定
一御役料之儀、四月迄内御役被仰付候はゞ、一ヶ年分可被下候、八月之内に候はゞ夏分より、十二月迄之内ニ候はゞ冬之分可被下候、但御役料請取、御役退き候歟、御免歟、又ハ相果候面々之跡役之儀、御役料可請取月割之時節被仰付候はゞ、月割定之通、御役料可被下事、
附前々御役ニ而、御役料請取、御役退候共、後役之御役料、八重ニハ被下間敷候、然共右三度之月割之内、御役退候而、後之御役料高候はゞ、其分は足米可被下候、後御役料より前々御役料多分ハ、不及返納候、
一三度相渡候御役料之儀、何月御役退候歟、御免歟、相果候もの、請取候分ハ被下、不請取分ハ不被下候、或ハ父之家督ニ成候而、御役料不被下ニ成候共、請取候御役料不及返納候、
附御役被召放候者ハ、四月迄之内ニ候はゞ、春御役料返納可仕候、五月ニ入候はゞ不及返納

役料渡方

御留守居組頭

右高之多少に無構三百俵充御役料被下之、貳百俵より以下之者は、勤候內貳百石之高に被成下候事、

〔憲教類典 御役二ノ五〕元文三庚午年三月九日

一遠國御役人幷御足高御役料定 〇中略

御役料 現米六百石 京都町奉行 大坂町奉行

〔吹塵錄 徳川氏二十八〕寛政元酉年分限高

御役料

七万七千六百三拾八俵餘、〇中略

〔淺草米廩舊例〕書替三季五段手形渡し日

御役料二十四日

〔京都御役所向大概覺書 三〕覺

一江戸幷遠國御役人御役料之儀、向後等分ニ割、三ツニわけ、春夏冬三度ニ可相渡候、依之四月迄之內、御役御免歟、被召放候ハヽ、春御役料可為返納候、五月ニ入候ハヽ不及返納候、且八月迄之內ニ候ハヽ、夏御役料可為返納候、九月ニ入候ハヽ不及返納候、十二月迄之內ニ而候ハヽ、冬御役料可致返納候、但病死之者ハ、春夏冬共ニ不及返納候、御役替之面々ハ、後之御役ニ付、御役料有之候ハヽ、過不足不及指引、御役替以後ハ、後之御役ニ付候御役料高を以、請取可申候事、

附御役料有之候御役ゟ御役料無之御役へ替候ハヽ、返納之儀伺之上、御勘定頭添狀可有之候事、

一先役人御役料不請取內ニ、御役御免歟、又ハ被召放候歟、或ハ病死ニ而跡役被仰付候節、四月迄之內ニ而候はヽ、一ヶ年分之積可相渡候、五月ニ入候ハヽ、春御役料相除、殘分ハ定候時節可相

例にて館二すぢをもたせ、その外多くの人を召具することなれば、五六千石を領する人、家祿のみにてはつかふまつりがたし、これにも官料を賜りたき事なり、すでに大坂駿府の定番にさへ一倍半倍の税を賜はる事なれば、伏見奉行に役料下されしとて、誰か議する者あらむや、この外の有司もみなこれにたぐふべし、(中略)(信公文案)

〔享保集成絲綸錄三十〕享保八卯年六月

諸役人、役柄に不ㇾ應、小身之面々、前々より御役料被二定置一被ㇾ下候處、知行之高下有ㇾ之故、今迄被二定置一候御役料にては、小身之者御奉公續兼可ㇾ申候、依ㇾ之今度御吟味有ㇾ之、役柄により、其場所不相應に小身にて御役勤候者は、御役勤候內、御足高被二仰付一、御役料增減有ㇾ之、別紙之通相極候、此旨可二申渡一旨被二仰出一候、

但此度御定之外、取來候御役料ハ、其儘被二下置一候、(○下略)

〔憲教類典二ノ五御役〕享保十六辛亥年三月

御目見以上、御役勤候內、御足高井御役料定(○中略)

御役料

五百俵　養仙院樣御用人　竹姬君樣御用人　　二百俵　御鐵炮方、御膳奉行、御廣敷番之頭、御諏訪部文九郎、書替奉行、御藏奉行、

延享三寅年ゟ二百俵　小普請支配組頭

二百俵　御賄頭　向後二百俵以下之者被二仰付一節は、二百俵高御足高被ㇾ下、御役料も被ㇾ下、右之通伺之上、延享二壬丑十二月被二仰出一、

百俵　御材木石奉行　百俵御番料　御番醫師御女中樣

五拾俵　評定所勤之儒者　百俵御番料　二百石高迄　御番醫師(○中略)

享保十六辛亥年三月　本多伊豫守

〔享保集成絲綸錄三十一〕享保十九寅年六月

一二千俵　大目付　一千俵　町奉行　一千俵　御旗奉行　一七百俵　御作事奉行
一同斷　御勘定頭　一五百俵　御鑓奉行　一同斷　御留守居　一同斷　御普請奉行
一四百俵　御納戸頭　一同斷　御船手　一同斷　御腰物奉行　一同斷　西丸御留守居
一三百俵　二丸御留守居　一同斷　田付四郎兵衛　一同斷　新御番組頭
一貳百俵　大御番組頭　一同斷　御切手番頭　一同斷　御廣敷番頭　一百俵　御納戸組頭　一同斷　小十人組頭

〔德川禁令考十八祿規〕寛文六丙午年七月廿一日

役料之定

午上剋御黑書院出御、今日出仕之面々、一同御前江被召出、何も御役料被下、且又萬事可用儉約之由被仰出之、老中御挨拶申上、御役料員數、於欵冬間大和守傳之、

〔憲廟實錄四〕天和二年四月廿一日、諸番頭、物頭、諸役人の役料を加祿となして給はる、○中略廿二日、諸役人の役料を加祿として給はる、

〔憲廟實錄十六〕元祿五年五月十一日、御留守居、諸番頭、諸物頭、諸役人ニ役料を給ふ、

〔有章院殿御實紀十五〕正德六年○享保元年四月六日、少老大久保佐渡守常春、大久保長門守教寛、森川出羽守俊胤、在職の間、各廩米五千苞を賜ふ、

〔有德院殿御實紀附錄五〕すべて諸有司の祿、其職に應せざれば、其任にたへざるもの多く、おのづからものを貪り、財をやぶさかるの心をも生ずるなり、今少祿にして重職に居る者多し、ねがはくはその職に應ずるほど祿を賜ふべきか、某若かりしとき、上洛して都の有樣をも見しに、所司代は誠に大任にして、あづかる事も多ければ、封邑のみつぎのみにてはたるべからず、別に恩貸の地にてもあたへらるべきか、伏見奉行又繁務にして、しば〳〵都にゆきゝし、其道すがらも先

役料

三千石　御役知千石　甲府勤番支配

〔泰平年表大御所〕文化十二年六月廿七日、大久保加賀守〇忠眞松平右京大夫〇輝延を召れ、向後所司代御城代共、高無差別、勤役中壹万石宛、御役知を賜ふの旨令せらる、

〔慶應三年武鑑〕京都守護職　溜之間　御役知五百石

二十八萬石、正四位中將松平肥後守容保、

〔嚴有院殿御實紀附錄下〕諸有司、もとは各の原祿もて奉仕せしを、寛文六年七月、諸司をめされ、新に役料を賜はる旨仰下さる、その數は留守居二千俵、大目付、町奉行、各千俵、旗奉行、作事奉行、勘定頭、各七百俵、鎗奉行、留守居番、普請奉行、各五百俵、西城留守居、船手頭、納戸頭、腰物奉行頭、各四百俵、二丸留守居、鐵砲方、新番組頭、各三百俵、西城裏門番頭、廣敷番頭、大番組頭、各二百俵、納戸組頭、小十人組頭、各百俵なり、この後歷朝俸祿の增減はさま〳〵なりといへども、なべて官料下さるゝ事は、この時よりはじまりしなり、

〔憲教類典二ノ五御役〕寛文五乙巳年三月十八日

御役領之覺

二千俵　大御番頭

千俵　御書院番頭　御小性組番頭

七百俵　新御番頭　百人組

五百俵　御書院番組頭　御小性組與頭　御使番　御持弓　御持筒　御先手　御先鐵炮

御目付　御步行頭　小十人組番頭〇中略

寛文六丙午年七月廿一日

一御黑書院へ出御被爲成、御役人被爲召、御役料被下候覺、

古事類苑

封祿部九

役俸

役俸ニ、役知、役料、役扶持、役切米、役米、役金、足高(タシダカ)等ノ種類アリ、役知ハ、遠國官ノ最モ重キ者ニ給スル役俸ニシテ、京都所司代、大坂城代等ニ賜フ、多キハ萬石以上ニ及ブ、役料ハ、切米ト同ジク、春、夏、冬ノ三季ニ分チテ、金、米、併セ給ス、寛文中、大番頭以下ノ役料ヲ定メ、享保年間、役料給與ノ法ヲ制シ、以テ永式ト爲ス、役扶持ハ、毎月給スルモノナリ、役切米ハ、賄方ノ下吏ニ給シ、役米ハ、中間小人ニ給ス、役金ハ、遠國奉行等ニ給ス、多キハ三千兩、少キハ一兩ニ至ル、慶應中、役俸ノ制ヲ改メ、布衣以上ノ吏ノ役知、役料、役扶持ヲ停メ、代フルニ役金ヲ以テシ、三月、六月、九月、十二月ノ四期ニ支給ス、老中一萬兩、若年寄四千兩、以下各、差等アリ、但シ家祿ノ多少ニ由テ、役金ノ全額ヲ給スルアリ、半額ヲ給スルアリ、或ハ全ク給與セザルモアリシナリ、

足高ハ、勤役中俸米ヲ加給スルヲ云フ、初メ徳川幕府役料ノ制ヲ定メタレド、各自家祿ノ高下ナキ能ハズ、故ニ其小祿ノ者ノ爲ニ、享保八年、新ニ有司足高ノ制ヲ定ム、例ヘバ、高家ハ千五百石高ナルヲ以テ、千石ノ家祿ニシテ之ニ任ズル者ニハ、五百石ヲ加給スル類是ナリ、足(タシ)米(マイ)ハ持高ノ上ニ俸米ヲ加ヘ給ス、又足扶持、加扶持等アリ、畢竟足高ニシテ、專ラ小吏ニ給ス、

〔憲教類典 御役 二ノ五〕元文三庚午年三月九日

一遠國御役人并御足高御役料定

扶持方手形

寅七月

〔教令類纂初集六十〕覺

一御扶持方手形出候義ハ、前月之廿日より晦日迄間可出之、米渡方同前之事、○中略

右之條々、末々迄猥無之様ニ可被相尋者也、

正保三年

源左衞門
內藏允
順齋
紀伊守

淺草方
御城米方
御藏奉行衆中
御目付衆中

扶持受取方

〔柳營沙汰書三〕慶應三年正月二十八日

周防守殿○老中松平康直

兩御目付江

御藏證文相願候節、以來元御役名、并被仰付候月日、先勤中之御切米御扶持方等受取、其外申渡之廉々、委細相認メ差出候様可被致候、最是迄御藏證文願差出、未タ不相濟分モ、右廉々巨細相認メ差出候様可被致候、

右之趣、御藏米取之面々エ可被達候事

一寄合醫師御切米御扶持方ハ、勤仕並ニ相渡候事、正徳六申年正月、添狀ニて極、○節略

〔勘契備忘記中〕享保五子年

書替所御切米御役所渡方定書○中略

御扶持方渡方之覺○中略

一定御扶持方取候面々、御加增、御足米、新規御切米被下、御扶持方上り候時ハ、其翌月より上り候、請取候ハヾ不及返納候事、

附、父地方、或は御切米計ニ而、子御扶持方有之候ハヾ、跡目被仰付候月迄者可被相渡候、或ハ父計御扶持方有之時者、跡目被仰付候翌月より子ニ可被下候、或ハ父子共ニ御扶持方有之候ハヾ、過不足ニ無構、跡目被仰付候月迄者、子之分可被相渡候、尤此類も跡目以前ニ來月分を請取候ハヾ、返納ニ及ばず候事、

一御扶持方有之者相果、跡式不被仰付内も、無足之子者、父之頭、或者支配方より、實子總領、養子總領、無紛斷狀を以、御扶持方可被相渡候、勿論願上置候養子者、申渡不相濟内者、被下間敷候事、○中略

右之通、可被得其意候、以上、

享保五子年四月

御勘定奉行

享保七寅年、跡目不被仰付内、御扶持方實子ニハ可被下御書付、

一御切米貳百俵以下ニ而、御扶持方有之面々令病死、跡式不被仰付候前、御扶持方計ハ實子總領之手形、有來裏判ニ而渡候樣ニと、御藏衆江添狀遣、養子之分ハ、御前不相濟内ハ無用候、然共實子ニ而も跡目出入有之歟、又者其父御勘定等不相濟歟、兎角跡目可滯子細有之分、裏判無用候、若裏判被致、跡式不立候ハヾ、誤ニ可相成候、

〔御勘定所定書中〕淺草御藏役人勤方納米改方等之定書〇中略

一御扶持米渡候時も御藏を改、先達而拂可ㇾ然米、相談之上書出置、毎月廿一日より、同晦日迄之間可ㇾ被ㇾ出事、

附極月ハ十一日より廿一日迄之內、可ㇾ被ㇾ相渡ㇾ事、

一御扶持方ニ相渡候米之儀、御切米より次之米、或ハ御切米之節、少々俵へ虫さし有ㇾ之、撰出之內ニて被ㇾ致ㇾ吟味、可ㇾ被ㇾ相渡ㇾ候事、〇中略

一猿樂扶持ニハ、常之御扶持より次之米、并御作事扶持共、猿樂扶持より次之米可ㇾ被ㇾ相渡ㇾ候事、〇中略

右之通相心得、不時之儀有ㇾ之候節ハ、可ㇾ被ㇾ相伺ㇾ候、以上、

享保十九寅年九月　　御勘定奉行

〔書替所定書〕當時定法

一御扶持方之內、御足高ニ直り取來る者、場所替ニ而、御足高上り、元扶持被ㇾ成候節ハ、被ㇾ仰付ㇾ候月より御足高ニ直り候元扶持渡、元文元辰、御證文ニて渡る、

一御役扶持方計有ㇾ之者、御足扶持被ㇾ下、元扶持ハ御足高直ニ被ㇾ下候者、小普請ニ入、元扶持計リニ成候時ハ、御足扶持受取候翌月より元扶持渡、元文元辰、御證文ニて渡る、

一御扶持方、御足高ニ直し被ㇾ下候時ハ、一人扶持五俵ニ直ㇾる、享保八卯年、御證文ニて極る、

一御扶持方計り取來候者、御切米被ㇾ下、取來る御扶持方上り候節ハ、被ㇾ仰付ㇾ候翌月より上る、正德二辰、御證文ニて極る、

一舞々御扶持方、毎年冬三月より翌三月迄相渡候處、午年より四月交代ニ成候間、向後四月分より渡、元文三午年三月、添狀ニて極、

共、手形三枚限に而玉壹ッに仕、御藏方は以前之通り、手形壹枚に紙判壹枚之御書替に而、御米渡りも手形壹枚限り、俵割銘々端米不殘、幷本俵に不相成、小扶持之分共に、逸々計立渡る故、是迄同樣之御手數に有之候、右體ニ而、明和五子年九月迄御仕來之處、札差一同より御藏江申立、同年十月分より不勤御扶持方は、札差一軒別に、手形何拾枚有之共、玉扣江札旦那御名前石數書立、末に手形數石高〆上ゲ、玉扣初筆之御一名を以、玉壹ッに仕、玉落候得ば、其初筆之御姓名、石數〆高、幷手形〆數計紙判江御認、〆玉壹ッに紙判壹枚ヅヽ之御引替相成、翌日御米渡り之砌、右〆高石數俵割ニ相成、當時之通、本俵渡り引殘り、端米も玉壹ッに端米一ッヅヽ計立渡りに相成、是を結玉と唱、御藏方札差方、雙方手數相減じ候事、

〔札差業要集下〕御書替所札差最初より當文化迄成始末左に〇中略

一月々御扶持方手形御書替は、毎月十六日より始り、廿一日御取切り迄、御定日六ヶ日之間は、月番御書替所江非番之御奉行御手代方迄御立合、御書替ニ付、月番之御書替所江札差行司御手形持參、御裏印相濟、右定日迄に、手形不來後レ御扶持方手形は、其月廿四日廿七日晦日、翌月四日十日、右五ヶ日後レ御書替日ニ有之共、御立合無之故、月番御書替所江行事御手形持參、月番計御裏印相濟、直に非番御書替所江行司御手形持廻り、非番御裏印も當日相濟、毎月御扶持方手形、翌月江相越候而は、文言入は格別、通例之手形に而は、御勘定所御添狀無之而は、御書替不相濟御定法之事、

但毎月御扶持方手形勤仕千六百枚餘、不勤千八百枚餘、都合三千五百枚ヅヽ程有之事、

一年々十二月は五日より御扶持方手形御書替始之御定日ニ而、月番江非番より御立合有之筈之處、毎年手形不揃に付、兩三日ヅヽ、初日相延始ル、尤後レ日も、其年々別段に御差日有之急ぎ之手形は、大晦日にも御裏印相濟事、

一御代官扶持は玉無し、三季帳付呼出し渡り、

一御作事飯米、猿樂御扶持方は毎月、玉無し、御帳付呼出し渡り、○中略

御扶持方渡り方之事

一御扶持方も、以前は御切米渡り方に記置、御仕法之通り、御武家方より御直に御藏江差札御米受取來處、是以所々之町人共江御賴、或は取越米に相成、札差人數御取極、尚又御武家方より御賴に付引請、玉入仕法に相成候而も、御扶持方も御切米同樣に而、玉壹ッ手形三枚立に而玉入に仕、當日落不申玉は不用に相成、御藏に而直に取捨に成、翌日又候新規玉拵、右體玉落不申内は、日々玉入に仕、札差方手數相懸り、御藏方に而も、今之御鑑札無之故、其替りに玉落候得ば、直に手形表之御名前石數等、其頃紙判と唱候如、當時之割札、御切紙壹枚江手形壹枚分ッヽ、逸々に御寫し取、夫を手形數丈ヶ御出來、今之割札通、玉壹ッに三枚ッヽ引替に札差江御渡候間、玉場仕舞刻限、晝後亦は八時過に相成義も有之、右跡に而、後レ御扶持方等玉入別に有之、是を夕玉と今以唱來候、翌日御米渡りは、前日御藏より御渡之右紙判持參、壹人扶持、壹人半扶持、貳人扶持、三人扶持迄も、當日之俵廻しに寄、本俵に不成分、逸々計立御渡に相成、三人扶持以上ニ而も、當日廻しを以、俵割本俵渡り引殘り、端米之分は、手形壹枚限、逸々計立渡りに付、日々渡り切は夕刻にも及、引取方は夜にも及候程に有之、札差方混雜には有之共、計升に而計立、渡りに有之手元に而は、小升に而廻し候故、御扶持方米に而、切レ石は一向不相立、却而出石有之、其上寬政元年御改正以前は、壹人扶持取越、壹ヶ月利米五合ヅヽにて、御扶持方付少高之札差料は、百俵以下も金壹分宛に候間、右小札取扱候札差は勝手に相成、身上宜相成候者多く有之候、五拾壹ヶ年以前、明和三戌年二月より、落不申玉は別に新規に拵、日々玉入之義は、御切米御扶持方共相止、其後は繫玉と唱へ、札差銘々より玉扣差出置、玉入當日より振切迄、最初之玉相用、札差手數減じ候得共、矢張御切米御扶持方

勤仕御扶持方　一日千石程宛　但五百石程も二手ニ取候事
廿日より廿四日迄、日數五日ニ取候事、近來先四日ニ取申候、
不勤御扶持方
大廿五日より廿九日迄　大之月一日手形數三百八拾枚ツヽ
小廿五日より廿九日迄　小之月一日手形數四百七拾枚ツヽ
右ハ天明五午年ニ相極候事

〔淺草米廩舊例〕明和四亥年十月松平右近將監殿老中、武元、被仰渡候御書付寫
一諸國御年貢納、并御扶持渡第出役、每月朝五半時、急度場所取懸候樣可致事、○中略
一御扶持渡之儀、極暑之節ハ朝五時より相渡候樣可致事、

〔札差業要集中〕三季御切米御扶持方渡り御藏方御定法荒增左に
一月々御扶持方、勤仕は每月廿日玉入御定日、翌廿一日より御米渡リ、玉は五日目廿四日振切、翌廿五日不勤玉入、三日目廿七日振切、但廿日後、御書替濟之分は日々追玉入、勤仕玉振切後ハ不勤玉先に相成、不勤玉振切後、御書替之分は勤仕不勤共、翌月六日、十二日、十八日、右御定日前御書替濟之分御米渡り、其後御書替濟之分は、御張付呼出し渡り、但御書替御裏判有之、定御役扶持手形は月次御扶持方江加、玉入御米渡り同斷之御仕法之事、○中略
一御扶持方渡リ方、每年十二月は十日勤仕玉入御定日に而、翌十一日より御米渡り玉は五日目振切、翌日不勤玉入、三日目振切、
但勤仕不勤共、十二月分御扶持方後レ日は、十二月二日九日御米渡り、正月分御扶持方後レ日、十二月廿二日廿五日御米渡り、其後は御帳付呼出し渡り、翌正月迄後レ候御扶持方は、正月十二日十八日御米渡り、

扶持渡方

御上洛御供、其外御用ニ而罷出候節、分限高ニ應じ被下之、尤万石以下關越候得バ一倍、關無之所ハ貳拾五里外ハ一倍、關內幷貳拾五里內ニ五割增、万石以上ハ關所有無、幷道法遠近ニ不拘五割增、京大坂伏見長崎御番所、万石已下ハ知行高一倍、万石以上ハ五割增、駿河御番ハ、万石已下廿五割增、被下之定法也、

一金壹人扶持、一度玄米貳合五勺ニ定りたるハ、寬永年中、松平伊豆守信綱執政之時、御工夫ヲ以、貳合半之定法始る、一說ニハ秀吉御代始りしといふ說あれど、政談ニも信綱始めたまふとあれバ定說なるべし、又軍中籠城等兵粮ハ壹人前、晝夜三升と宛る法の由なり、

〔營中御日記 三〕寬永三年五月五日、今度備中守〇阿部正次大坂御番當番被仰付之間、御加增三万石都合八万五千石被下之、以五万石之軍役、大坂城可守衞旨、外月俸七百五十人扶持被下旨、於御垣之間、酒井雅樂頭、土井大炊頭列座、雅樂頭傳上意之趣、

〔營中御日記 十六〕寬永十八年四月十二日、昨日西丸へ御成、卽刻還御之處、御供之面々欠如有之哉、不致供奉候ニ付、甚以御氣色不快、御吟味之處、當番小十人頭本目權兵衞改易、彼組之內、

天野兵右衞門〇以下七人姓名略

右之輩、御扶持被放之、

〇按ズルニ、扶持ヲ召上グル事ハ、法律部下編役儀召放篇ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔淺草米廩舊例〕每月御扶持之日

六日十二日十八日　但十二月ハ二日九日

御金渡リ日

朔日十日十八日廿四日〇中略

每月定扶持渡玉場石數日數左之通リ

貳千石、三拾四人扶持、　貳千百石、三拾五人扶持、　貳千貳百石、三拾六人扶持、
貳千三百石、三拾七人扶持、　貳千四百石、三拾八人扶持、　貳千五百石、三拾九人扶持、
貳千六百石、四拾人扶持、　貳千七百石、四拾壹人扶持、　貳千八百石、四拾貳人扶持、
貳千九百石、四拾三人半扶持、　三千石、四拾五人扶持、　三千百石、四拾六人半扶持、
三千貳百石、四拾八人扶持、　三千三百石、四拾九人半扶持、　三千四百石、五拾壹人扶持、
三千五百石、五拾貳人半扶持、　三千六百石、五拾四人扶持、　三千七百石、五拾五人半扶持、
三千八百石、五拾七人扶持、　三千九百石、五拾八人半扶持、　四千石、六拾人扶持、
四千百石、六拾壹人半扶持、　四千貳百石、六拾三人扶持、　四千三百石、六拾四人半扶持、
四千四百石、六拾六人扶持、　四千五百石、六拾七人半扶持、　四千六百石、六拾九人扶持、
四千七百石、七拾人半扶持、　四千八百石、七拾貳人扶持、　四千九百石、七拾三人半扶持、
五千石、七拾五人扶持、　壹万石迄、五千石同前、

一撿地其外御用掛り候節、御代官手代壹人ニ三人扶持之定、

一御代官所、拾里之外貳拾五里之内へ被遣候手代ハ、壹人ニ三人扶持、但五割增、貳拾五里之外へ遣候手代、三人扶持壹倍之積り、

一同心御用ニ懸リ候節ハ貳人扶持、遠方へ參候得バ例之割增被下之、

〔地方凡例錄九〕分限扶持之事、附り扶持米貳合半始之事、〇中略

御扶持方割

壹万石　　百五拾人扶持

是より拾万石迄、壹万石ニ付百五拾人扶持增、

右之通旅御扶持方

扶持

〔德川禁令考稽規十八〕慶應二丙寅年十月九日

免職ノ者ヘハ切米ヲ給與セザル旨達

部屋住ニ而布衣被仰付以後、御役御免被成候もの、是迄者御切米者被下候處、向後取來候分共、御切米者不被下候、

一同斷布衣以下之向者、御役御番等御免之節、御切米上リ之儀相願候得共、以後ハ御免之上ハ、直ニ御切米上リ候儀ト相心得、別段相伺候ニ不及候、

○

〔倭訓栞不前編二十六〕ふち〇中略人を扶持するにそへたり、類書纂要に、扶持は顧問周濟之也と見えたり、よて稟食をふち。かた。といへり、

〔槪席寶鑑〕御扶持方ハ一人フチ五俵積、十人フチハ五十俵ノツモリ、

〔京都御役所向大槪覺書三〕公儀御定御扶持方積之事

一七十俵ゟ九十俵迄　五人扶持　　百石、七人扶持、　　百五拾石、拾人〇拾人、恐八人或九人誤、扶持、

貳百石、拾人扶持、　　貳百五拾石、拾壹人扶持、　　三百石、拾貳人扶持、

三百五拾石、拾三人扶持、　　四百石、拾四人扶持、　　四百五拾石拾五人扶持、

五百石、拾六人扶持、　　五百五拾石、拾七人扶持、　　六百石、拾八人扶持、

六百五拾石、拾九人扶持、　　七百石、貳拾人扶持、　　七百五拾石、廿壹人扶持、

八百石、廿貳人扶持、　　九百石、貳拾三人扶持、　　千石、貳拾四人扶持、

千百石、貳拾五人扶持、　　千貳百石、貳拾六人扶持、　　千三百石、貳拾七人扶持、

千四百石、貳拾八人扶持、　　千五百石、貳拾九人扶持　　千六百石、三拾人扶持、

千七百石、三拾壹人扶持、　　千八百石、三拾貳人扶持、　　千九百石、三拾三人扶持、

ヲ取コト少シ、諸侯ノ人ヲ養所ヲ計ルニ、給人ハ少ク、無足ハ多シ、米ハ本土地ヨリ出ル者ニテ、水旱ノ災ナケレバ、邑入スル處增減ナク、毎年同然也、給人ハ米ヲ取者ナレバ、給人ニ出スル米モ增減ナク、毎年同然也、只無足人ニ給スル處金俸ナルハ、米價ノ高下ニ因テ、米ノ出ル所增減有、元祿以來享保六年迄ノ如ク、米價貴キ時ハ、金方ノ爲ニ米ヲ出スコト少ク、上ニ利アレドモ、壬寅以來、米ノ價甚賤クナルハ、金俸ノ爲ニ米ヲ出スコト前ノ一倍ニ過グ、又近來大小ノ諸侯皆貧窮シテ、國用不足、故ニ給人ノ祿ヲ減ジ、或ハ死亡有闕ヲモ補ハズ、或罪無ニ永ノ暇ヲ玉フ類頗多シ、三十年前ノ時ニ比スレバ、諸侯ノ人蓄フ處給人以上ハ人ニテ省キ、給人ノ爲ニ米ヲ出ルコト、既ニ三分ノ一ヲ減ト見ユ、大國ノ古キ諸侯ハサモアラズ、新國ノ小諸侯ハ比々トシテ皆然也、是ニテハ國用モ足ルベキニ、一年ハ一年ヨリモ困窮スルハ何ノ故ゾヤ、所詮ハ元祿以來奢侈ノ餘風ト云ナガラ、金俸ノ者多キ故也、給人以上ハ上ニ云如ク、祿ニテ減ジ、人ニテ省ケドモ、無足人ハサノミ人ニテモ省キ難シ、歲ホウモ定レル給分ニテ、一列ニ給スル物ナレバ、僅ナル內ヲ借上ベキ樣モナク、昔モ今モサノミ易レルコトナシ、今ノ時ニ至テ、金俸ノ害見ヘタリ、

凡士人ハ不耕シテ君ノ養ヲ受ル者ナレバ、卒徒奴隷ノ賤者迄モ米ホウヲ給スベキコト、道理顯然也、工商ノ輩ハ祿無者ナレバ、奴婢ヲ蓄フニ、金銀ヲ給フベキコト勿論也、諸侯卿大夫ハ金俸ヲ以、人ヲ蓄フコト有ベカラザルコト也、若金俸ニ改メントナラバ、近年ノ米價ノ最貴最賤ヲ考ヘ、廿年程ノ內ニテ、其中價ヲ取リテ米俸ノ定額トスベシ、無足人ニ悉米俸ヲ給スレバ、凡諸侯ノ人ヲ養フ所每歲幾許ノ米ヲ用ルト云コト定リテ增減ナシ、モシ凶年ニ過テ年穀登ラズ、國ノ收納常ノ年ヨリ少キコト有バ、其程ニ隨テ其年ノ祿俸ヲ減ズベシ、既ニ米俸ヲ定マル上ハ凶年ニ其俸ヲ減ゼラルヽヲ誰カ怨ンヤ、凡ソ士大夫ノ田祿有者ヨリ以上、諸侯天子迄、大地ヨリ出ル者ヲ以テ祿トス、

目付　御徒頭　御船手

右之面々へ、於芙蓉之間阿部豐後守〇正武、老中、殿被仰渡候由、

〔嚴有院殿御實紀五十〕延寶三年正月十九日、諸士困難するにより、冬賜る廩米の半の內を、この春給はるべしとふれらる、

〔御勘定所定書中〕拜領屋敷へ新規家作之節、御切米取越被下候書付、

只今迄ハ、屋敷拜領仕候者新規家作致候ニ付、御切米取越被下候例無之候得共、自今新規ニ家作仕候輩ハ、一度分之御切米ハ、願次第可被下置候事、

但春之御切米不請取ハ、右御切米前ニ候はゞ、春一度之分ハ、御切米早々被下候樣、尤春之御切米請取候以後ニ候はゞ、夏一度之御切米可被下候、冬御切米、右ニ准じ候事、

享保七年寅十月

〔御書付留〕覺

高三拾俵宛　御持弓頭戶田大學組同心　青山半太郎〇以下九人姓名略

右者去ル三日、四谷傳馬町三丁目横町より出火之節、同所組屋敷ニ而類燒候ニ付、當夏御借米、幷冬御切米共取越爲請取申度候間、右之段書替奉行へ御斷可被下候、

嘉永四亥年四月　御持弓頭　戶田大學

石河土佐守殿〇勘定奉行、此下有ニ七人姓名、今略之、

〔經濟錄五食貨〕凡國ニ仕官スル者ハ、田祿ヲ不賜賤者迄モ、皆米俸ヲ給ハルベキ也、當時國家ニ直參スル者ハ、卒徒ノ類迄皆米俸也、徒ハ中間小人ノ類也、諸侯ノ國ニハ米俸、金俸トモアリ、或ハ金俸無モアリ、新國ニハ金俸多米俸少シ、諸侯ノ國ニテ金俸出スハ甚不便利成コト也、子細ハ大小トモ、諸侯其國ヨリ收納スル物ハ米也、米價貴ケレバ、米ヲ賣テ金銀取コト多シ、米價賤ケレバ、金銀

一右之面々、小普請入仕候分も右同斷、
但右類春御借米一季請取候ものは、元扶持江戻り候事、只今迄之通、夏御借米受取候者も同斷、
右之通、向々江可被達候、尤西丸御目付江も可有通達候、
〔憲敎類典御藏前五ノ十〕萬治二己亥年十一月朔御米藏高札

受取方

定
一御藏前ニおいて御切米御扶持方受取之輩、差札等之儀ニ付而、万事不作法いたすべからず、并御藏衆雜言申べからざる事、○中略
右可相守此旨、若違背之輩於有之は、可被處嚴科者也、
萬治二亥年十一月朔日　奉行

改廩米爲采地

〔常憲院殿御實紀三十六〕元祿十年七月廿六日、けふ布衣以上の諸有司に令せらるゝは、五百俵以上の輩、廩米を采邑にかへ下さるべし、隸下へも其よしを曉諭し、註記して勘定奉行へ出さしむべしとなり、八月十日、先に廩米を采邑に換給はりし輩、來寅年より收税あるべしと令せらる、十二日、けふ令せらるゝは、こたび五百俵以上の輩、采地にかへ下さるれば、采邑廩米をまじへて給はりし輩、廩米いかほどにても原額五百石以上ならば、采地にかへ給ふべし、當多の廩米は、是迄の如く給はり、來年より采地にかへ給はるべしとなり、
〔敎令類纂初集五十九〕元祿十二乙卯年閏九月七日
一御切米、地方ニ御引替被下候付、返納米有之面々、當秋風雨ニ付而、知行所高之內、半作程損毛仕候分ハ、當卯暮ハ御差延被下候、來辰暮より上納可仕候、
御留守居　大番頭　御書院番頭　御小姓組番頭　大目付　新番頭　御留守居番物頭　御

返納、父子可請取分共可被下候、父春借米請取、子者不請取候共、子ニ春借米可被下候、夏借米より者、父之分可請取候、夏多も同前、父地方ニ而取來候も差別無之事、

附父子共ニ請取候得者、不及沙汰事、

一父子同高歟、子之高增、跡目願無之面々者、父之請取候分ハ被下、不請取分ハ不被下候、跡式潰候も同前之事、

附地方取ニ而跡式潰候ハヽ、何月相果候共、收納之物成ハ被下、不收納者被下間敷事、

一組附之類、御番替、或者暇出、其跡江相抱候者、前之者請取候ニ無構、四月迄ニ抱候ハヽ春借米より、八月迄ニ抱候ハヽ夏借米より、十二月迄ニ抱候ハヽ冬切米より可被下候、御扶持方者、抱候月より總高を以、御切米御扶持方相渡候、組付明跡より抱候も同前之事、

〔憲教類典 五ノ十 御藏前〕寶曆三癸酉年四月廿九日

板倉佐渡守殿御渡　　御目付江

無足家督之分、向後證文差出候に不及、父之證文を以御切米御扶持方可相渡候、尤其節頭支配より書替所江斷狀差出可申候、

一京都大坂御役人、父相果家督被下候分、

一家督被仰付、御足高被下候分、

一御取立之者、家督被下候分、

右三ヶ條ハ、證文差出可申候、

一總而御切米御扶持方取候分、御足高被下候場所高ニ被仰付候節は、御扶持方ニ高は詰被下候、

右之面々相果、家督被下候節、各御切米受取相果候者は、其年之御扶持方被下候ニ不及、春御借米不請取以前ニ相果候者ハ、其年之正月分より御扶持方被下候様可仕候、

上、父之御借米不レ請取分ハ、跡目已後ニても不レ請取、冬御切米より、父之分を可レ被レ下ハ勿論、子之受取候夏借米不レ及レ返納候、但子無足ニても、跡目被レ仰付候上ハ父之不レ請取分之御切米可レ被レ下候事、

一七月朔日以後相果候者、跡式被レ仰付候上、父之冬御切米請取可レ申候、且又跡式無レ之者、冬御切米不レ請取前ニ相果候はゞ被レ下間敷候、御切米請取已後相果候はゞ不レ及レ返納候、地方取ニ而跡式潰候もの、何月相果候とも、物成収納候分ハ被レ下、不レ請取物成ハ被レ下間敷事、

一夏御借米已後、何月ニても父相果、地方ニても、御切米ニても、跡式被レ仰付候迄ハ、子之冬御切米不レ請取、被レ仰付候上ニて父之分を可レ受取、但父子共ニ請取已後、父子之内、相果候はゞ、不レ及レ返納候事、

付父地方、子御切米ニて、年内又ハ正月二月之内父相果、跡目之義願上候バ、父之春御借米請取申間敷候、春御借米已後、父相果候はゞ、夏御借米請取申間敷候、但春ニても夏ニても、御借米受取以後、父相果候はゞ、返納ニ不レ及事、

一父子同御切米高歟、又父より子之高増候而、跡目願無レ之候バ、子之知行、御切米有來通リ受レ取之、父之不レ請取分、何月相果候共、上リ候事、〇中略

右御切米、御扶持方、上知、自レ來午年レ可レ爲レ書面之通レ者なり、

元祿二年巳九月

〔勘契備忘記〕〇中享保五子年書替所御切米御役所渡方定書

死跡御切米渡方之覺

一父子御切米ニ而、父子共ニ不レ請取内、父相果候ハゞ、跡目被レ仰付候以後、不レ請取分計可レ被レ下也、死後子者請取間敷候、若心得違ニ而請取候ハゞ可レ及レ返納候、父存生之内請取候ニおゐてハ不レ及

家督相續渡方

高百俵
同斷　同半分　百俵
百俵　七拾五俵
貳拾五俵　同　拾貳俵
同斷　同　五拾俵

現米
高百拾五俵
五拾俵　三拾八俵
二十八石七斗　高十二割　九石五斗
同斷　同半分　五拾七石五斗
五拾七石六斗　四拾八石

高百五拾俵
三拾七俵　高八歩　拾九俵
同斷　同半分　七拾五俵
七拾六俵　五拾六俵

〔淺草米廩舊例〕書替奉行へ問合候書面幷下ゲ札答書寫
遠國役のものハ、都て江戸渡ニ無之候、併依願御切米ハ江戸渡ニ相成候もの有之、是ハ其時々御證文出候事御座候、○下略

〔返納米定書〕覺
春借米ニても、夏借米ニても、請取候以後ハ、何月相果候共不及返納候、跡目有之候も、跡目潰候も同前之事、
一父子共ニ御切米取候て、春借米ニても、親子共受取候後父相果、子ニ跡式被仰付候上、子之御借米受取候分ハ不及返納、冬御切米より、子之分上り候、父地方ニて取來候分も同前之事、
一父子共ニ御切米取ニ而、春ニても夏ニても、御借米不請取候處、親相果、七月子ニ跡式被仰付候

一佐州御役人被仰付候衆、御張紙日限之内ニ候得バ、米金相渡候事、
但佐州ニ而皆米渡之由ニ付、寶暦十二午年五月、大野助次郎、夏御借米御役料、米金ニ而渡、若林市左衛門ハ夏冬御切米一紙、同御役料一紙、手形取皆米ニ而渡、
一二條大坂駿府登御番衆取人代人ニて、跡より登り衆取越米之義、御張紙日限之内ニ候得バ、米金ニて相渡先格、
一譬バ春御借米日限之内、遠國御用被仰付、春度一紙手形ニ候とも、引分ニ不及、享保八卯年伺書ニ准ジ、皆米ニて相渡候事、
但明和二酉年二月、遠藤平左衛門日光御用ニ付、其節春夏御借米一紙手形ニ而、張紙日限之内、手形出候へ共、評議之上、皆米ニ而相渡、〇中略
一遠國御用被仰付、御切米御借米、無差札可相渡旨、書替より斷有之候節、組附一紙手形ニ而相渡候、其内譬バ十人組合之内、五人無差札之斷有之候ても、右五人分限高、御藏ニて不相知候ニ付、無差札ニ可相渡高、書替より取之候筈、
但明和二酉年二月、日光御用ニ付、春御借米無差札之儀、書替ゟ申來候ニ付、一紙手形之内、無差札可相渡分は書付無之、〇中略

三季御切米渡方井在番二條大坂登年渡方割

登前ハ無玉ニて渡ル、取越米ハ皆米渡り、二條ハ玉なし、大坂ハ春玉入、

高六百俵
春百五拾俵 高十二割　五拾俵
夏同斷 高四分　三百俵
冬三百俵　二百五十俵〇中略

高貳百俵
五拾俵 高八分ニ割　貳拾五俵

一壹斗　野廩移　黒野新三郎
一貳斗五升　小普請組　篠崎嘉十郎

半々附候御扶持方

一四人半扶持　小普請　原田藤五郎
一三人半扶持　同　戸山彦次郎
一貳人半扶持　同　渡邊瀧右衛門

切米手形

〔憲教類典五ノ十御藏前〕享保五庚子年四月廿二日
大久保佐渡守殿御渡

御目付へ

閉門ニて罷在候面々、御切米御扶持方之儀、向後其親類手形ニて可被下候、
右之趣、寄々頭々支配へ爲心得可被達候、

〔佐渡奉行公務扱〕御切米手形認め方之事
用紙程村貳ツ切少しせまく
請取申夏御借米之事
高千俵内
米合貳百五拾俵者　但三斗五升入
右是者當夏爲御借米請取申所實正也、仍如件、
文政八酉年五月　佐渡奉行　泉本正助印
安井平十郎殿
野呂彌右衛門殿

遠國役人渡方

〔淺草米廩舊例〕一遠國御役人被仰付、爲支度御切米御役料、取越被下候故、譬バ春御借米御張紙日限之内、御借米受取候共、皆米ニ而相渡候事、○中略

て多數ざるに入れ振ひ落し、一日之渡り員數丈けを振出す、此落ちたる名前を、札差共御藏役所に詰居、銘々札、旦那方へ通達する其文に、

明日御天氣次第、御米相渡り候間、此段御案内申上候、以上、何月幾日、何屋何兵衞、何之誰樣御用人中樣と申越す、請取人ハ兼て札差に引合置、米何程拂米と約し置、船車等直に札差より送付する、後日勘定請取に札差方へ相越す、札差にてハ明細目錄を作り差出す、一體御目見え以上は家來を遣すべきを、自身相越すもあり、又先方より伴頭小僧をして爲持差越すもあり、

〔淺草米廩舊例〕御切米冬計請取御名前

一百俵　高木菊次郎

一五拾俵　廣德寺

一三拾五俵但合　御桶大工　細井藤十郎　野々山孫助

一貳拾四俵　御鑄物師　椎名伊豫

一拾俵　小普請　守隨彥太郎

一五俵　大御番　大草榮之丞

夏計無ニ春冬ヽ
一貳拾俵　小普請　小幡平八郎

春冬計無ン夏
一拾五俵　御大器大工　松井新左衞門

四斗入ニ而請取候者

一貳百俵　大御番　佐野五左衞門

御扶持方

三十日ニ
一壹斗八升七合五勺　小普請金集手傳　西村常右衞門

一〃右同斷　同　村田彌十郎

所にてハ、此斷狀に裏書をする、表書之通、何役何之誰斷候間、可被得其意候、斷ハ本文に有之候以上、年月御勘定奉行、同吟味役、連印、書替奉行宛にて出す、此外一時御藏米渡の分は、其身分に不拘、斷狀にて相濟、御證文斷狀濟、札差方より書替所へ手形案問合、本人の出す手形、西之內半枚に認め調印す、たとへハ、

請取申春御借米之事

高貳百俵內

米合五十俵　　但三斗五升入

右者當子春爲御借米請取申處實正也、仍而如件、

何年何月　　　何役何之誰印

書替奉行兩名宛

此手形、頭支配に差出す、頭支配裏書す、表書米御渡し可有之候、斷ハ本文に有之候、以上、何年何月、何役何之誰印、書替奉行宛、又請取人に渡す、受取人札差江渡、札差是を書替所へ出す、書替所にてハ、前草案に突合、且裏判を兼て差出有之候印鑑に引當、相違無之、於てハ奥書とす、前書之通、相違無之候、以上、書替奉行兩名調印、御藏奉行衆と宛、札差に渡、札差是を御藏役所へ出す、御藏役所にては、表書裏書之調印に不拘、書替奉行之奥書を目當に、米之渡り方をなす、故に中古手形頭役を書替奉行と改る、書替奉行にてハ、分限高の渡方規則を調、手形裏判之眞僞を改める主役也、御藏役所にてハ、出納之役也、手形に裏判手形、直判手形との區別あり、都て御老中支配の向、幷若年寄支配の諸役人は、直判手形、其他頭支配ある向ハ小役人御番衆、總て御家人末末迄ハ本人表判、頭支配裏判人直判にて、請取向幷裏判をする向は、兼て判鑑を御勘定所へ差出、書替役所に備置也、○中略扨御藏役所にてハ、請取本人名前、米員數を小切手に認め、是を丸め

一新規御抱入之ものへハ、極月被仰付候ても、御切米ハ年中渡、但部屋住之者、新規御切米被下候ても同斷、

一女中衆之分ハ、新規明跡無構、年中御切米渡、尤其時々御證文、從前々極る

一御切米御扶持方、手形譯無之、書付時節過ぎ、月を越渡候へバ、其時ニ添狀ニ而渡す、

但渡し日過候計ニて、月を不越候ハ、頭支配頭手形ニて渡、寛文十亥年、添狀ニて極る、

一取來御切米、半知に成候もの、春夏受取候以後ニても、春より半知之積り、先達而受取候春夏之分ハ指引渡、享保四卯年、御證文ニて極る、

一御切米御足高之交り有之者、三季之割合ニて春夏御足高之分不相渡內、小普請入候へバ、小普請入已後、冬御切米之節、春夏御足高之分割合を以渡、享保十午年十月より極る

一逐電出奔行衛不知分御切米、御扶持方上り候節ハ、御料ニ准じ取計候事、元文三午年七月、添狀之趣を以て極る、

一屋敷拜領仕候者、新規家作いたし候節ハ、御切米御足高取越渡る、○節略

〔江戸會誌 一〕幕府廩米支給手續○中略

扨諸向御切米御扶持方渡り方ハ隱居家督、或は跡目家督、御番人、御役出、御役替等、身分之代る毎に、其者又頭支配より御老中方へ御證文願出す、此度何々被仰付、御役料、御役扶持、御足高、何何被下候間、書替所へも御證文被下候樣、願書進達する、表御右筆に御證文掛りあり、其向にて、是迄の請取方を糺、書替奉行へ突合之上、御切米は當何季分より、御扶持方ハ當何月分より、或ハ直判手形、或ハ頭支配裏判手形を以、可相渡之旨、御老中方連印之證文、程村紙二タ折に認め、書替奉行兩名宛にて、頭支配より渡、頭支配是を書替役所へ使者を以差出す、家督證文に限り、同日家督之分、連名にて四ケ月目に御證文出る、其外御抱入身分之者ハ、其頭により斷狀を出す、是ハ草案書替奉行へ問合之上、本書程村紙二タ折に認め、調印之上、御勘定所に出す、御勘定

右之趣、千俵以下勤仕之面々江可被達候、

〔淺草米廩舊例〕壹ヶ年諸渡方凡積〇中略

三季五段渡切御屆之儀、是迄當日期御屆候處、寛政四亥年五月十二日、翌日御屆可申旨、横屋幸之進、勝屋彥兵衞より申來ル、御借米御切米渡方ハ、御張紙出候日ゟ八日玉入、御金渡九日目渡初ル、

〔札差業要集中〕三季御切米御扶持方渡リ御藏方御定法荒增左に〇中略

一御借米御切米は、三季御張紙出ル當日より八日目、勤仕以下御定日玉入、當日玉落分、直に御金渡り、翌九日目より御米渡リ、年々御定式也、勤仕以上玉振切次第、翌日勤仕以上玉入、右順を以、不勤以下不勤以上御役料迄五段順々玉入也、右玉入後、御書替相濟分は、其翌日々々に追玉入、尤玉振切後、御書替相濟、後レ御切米之分は、別段に玉場江、其後レ日御張紙出ル事、

但雨天ニ而も、玉場御金渡りは日々有之、御米渡りは相延、天氣能日玉落之順に、追日御米相渡事、

一御張紙表御定式、春は三月、夏は六月、冬は十一月、右三季晦日に限り、日相過、翌月朔日ゟ勤仕不勤御役料共、御金渡り無之、皆米渡り之事、〇中略

一御女中御切米は、二季渡り、玉なし、皆米渡り、

〔淺草米廩舊例〕一御切米御扶持方共、玉落候以後、受取人病死之者札差より申出候共、書替より斷無之候はゞ、米金相渡候事、

〔書替所定書〕當時定法

一總御切米渡り方割

一春夏御借米、分限高之四分一渡す、殘多御切米ニて渡、但女中衆ハ三月九月二季ニ、高半分ツヽ渡す、享保八卯春御借米より、御張紙ニ而極る、但高ハ古來より之渡り方ニて、前々より極る、

同(明和〇)三戊二月、是迄は振殘之玉は、又々日々新規に拵、玉入來所、以來ハ相止、初日入之玉、終迄御取用に相成間、御組付御當番日に而、玉除に相成分は、其當日玉場不ㇾ始以前、御屆申上置、落玉は翌日御米渡り、其分計除相願、其翌々日、其御組分御米可ㇾ請取事、

〔淺草米廩舊例〕明和四亥年十月、松平右近將監殿被ㇾ仰渡候御書付寫、

御藏奉行江申渡

一三季御切米之御節金渡之儀、隨分手廻いたし、晩景ニ不ㇾ成樣可ㇾ致候事、〇中略

一三季御切米并御扶持方、玉入候儀、渡方初日ニ至爲ㇾ入置、振仕廻候度每、玉柄杓へ、札差行事共、封印爲ㇾ致可ㇾ申事、〇中略

十月

右之趣、御藏奉行江可ㇾ被ㇾ申渡候、

〔札差業要集中〕享保年中より文化迄御藏方荒增之扣〇中略

明和五年九月迄、不勤御扶持方も三枚立玉一ッ宛之處、結玉札差一人別手形何枚有ㇾ之共、玉一ッづゝ〆、石渡りニ不勤之分相成ニ付、是迄端ニ相成一人扶持二人扶持等之分計リ、立俵ニ入、相渡來分、以來右之俵之代并諸入用、御屋敷方江相掛間鋪御達、御請書差出事、〇中略

一文化元子夏、三百俵以下皆金渡り、其後御役料共、米金渡りに付、玉入渡リ方共、七段ニ相成事、

〔天保集成絲綸錄八十六〕寛政三亥年八月

大目付

千俵以下勤仕之面々へ、當冬御切米渡之內五分一、此節御米ニ而、御借米被ㇾ下置候間、被ㇾ得ㇾ其意、受取方之儀ハ、御勘定奉行可ㇾ被ㇾ談候、

八月

一御切米扶持方相渡候時、小札之俵數を書付、手形と引替、渡置候庭帳ニ記候本俵、右之札ニ引合、銘々爲ニ割渡一、端米ハ出役之御藏奉行、小渡帳ニ扣、小札引合可レ被ニ相渡一事、○中略

一御切米御扶持方渡候時、可レ成程ハ御藏切ニ相渡、殘俵無レ之、御藏明候樣可レ被レ致候、若出俵ニ入少、細俵も有レ之候はゞ差米致し、本俵並斗立渡候樣可レ被レ致候事、

一御切米ニ出候御米、御藏圖包之內上ニ御藏奉行可レ有ニ封印一候、且又御切米御扶持方、手形包候上ニも、御藏奉行致ニ印形一可レ被レ置候、

一二條大坂駿府御番衆、并與力同心御切米之儀、二條登ハ春御借米、大坂駿府登ハ夏御借米ハ、無ニ差札一可レ被ニ相渡一事、

一三季御切米玉振候節、御藏奉行玉場へ出、朝五時より玉爲レ振可レ被レ申候、若直取之者、遲く參り候共、半時立候はゞ決而玉爲レ入申間敷候、且又直取之家來不埒ニて、渡り候米不ニ引取一候はゞ、其時之品ニ寄、御勘定所へ可レ被ニ相伺一候、勿論當日又ハ翌日請取主相知候はゞ、吟味之上證文取レ之、可レ被ニ相渡一候事、○中略

右之通相心得、不時之儀有レ之候節ハ、可レ被ニ相伺一候、以上、

享保十九寅年九月　　御勘定奉行

〔札差業要集 中〕享保年中より文化迄御藏方荒增之扣 ○中略

寶暦四戌八月、是迄御藏米渡り廻シ、竿圖埒圖有レ之、其當ル壹はい貳拾俵不レ殘、貫目を掛、貫目違之、分は、幾口に而も別々に計り立、總平均廻しニ付、貳拾俵共、貫目違に有レ之ば、貳拾口に計立、總平均廻シ、御仕來之御仕法之處相止、其以來如ニ只今一竿圖埒圖入、其貳拾俵圖に而、當り三俵計立、平均廻に相成、貳拾俵以下は、貳俵廻シ、五俵以下ハ一俵廻シに御定、但納方には、只今に而も貫目改有レ之共、御渡シ米貫目改は其以來相止、○中略

御藏方萬作法之覺書

一御切米ハ勿論、御扶持方渡前ニも御藏を改置候て、日數過惡敷可成米より、先達而可被相渡候、不僉議ニ而むざと被相渡候て、米惡敷成後、請取衆迷惑可被仕候間、能々吟味可有之事、〇中略

一御切米御扶持方渡候時、端渡候小札其時々に御藏衆へ可被相渡由、手代方へかたく可被申付候、御藏衆も庭帳ニ引合見可被申事、〇中略

一御切米御扶持方出し申候藏圖、並手形等も包申候上ニ、御藏衆御目付衆立合、可有相判候、無左候て、藏圖にて自然依估も有之樣に請取人可存、手形上包ニ判無之候はゞ、相違之儀も可有之事、〇中略

一御扶持米御切米請取ニ參候者ニ、手代小揚等、不作法成言葉など無之樣ニ可被申付事、

〔御勘定所定書中〕淺草御藏役人勤方納米改方等之定書

一御切米渡候時ハ、前方ニ御藏を改、御米之善惡、各相談之上、御藏を定置、御藏番付、圖を拵へ、請負人ニ圖を爲取、其藏より相渡可被申候、廻し之儀ハ貳俵ニ相定、請取人ニは以圖を爲取、圖ニ當る二俵を廻、平均ニ致正路ニ可被極候事、

附御切米渡候儀、前日ニ差札爲致、翌日可被相渡候、勿論前日差札ニ不出手形一切渡間敷事、

〇中略

一渡方之米、其日限ニ庭帳ニ〆、番を糺、出役之御藏奉行致判形、出俵之員數念を入、其時之廻を以、員數を相極、番ニ引合無相違樣可被相渡候、尤出俵之員數廻し、何程ニ拂、番付帳ニ渡り候俵數廻し、并米所迄、委細書記、出役之御藏奉行致判形候上、再改いたし、組頭可被致加印候、尤殘米之分ハ有高帳ニ記、勿論一ト藏之御米、不殘渡切候はゞ、前廣納入候俵數と、拂之帳をも改出目欠米、何程と誌候樣、帳面組置可被申候事、

一五段渡高帳之事
右ハ米金渡高五段廉々、日々帳上ニ留置之、
一五段廉々渡切之時ニ、米金之員數、御屆書付差出、猶五段總渡切御屆、御勘定所ヘ差出候事、

〔教令類纂初集六十〕覺
一米納拂之義ニ付、公儀之御損も無之、米惡敷不成樣ニ仕、御切米御扶持方衆も迷惑不致、又百姓も迷惑不仕樣ニ、其外萬御藏之作法能樣ニ常々可被申付事、〇中略
一暮之御切米、年內ニ渡切可被申事、
一夏借米之義ハ、七月十日迄、渡切可被申事、〇中略
一御城女中方御切米之義、兩御藏之內ニ而可被相渡事、〇中略
右之條々末々迄、猥無之樣ニ可被相守者也、
正保三年　源左衞門〇勘定奉行曾根吉次、以下三人略、
淺草方
御城米方
御藏奉行衆中、
御目付衆中

〔享保集成絲綸錄三十〕慶安元子年十一月
一御旗本切米之面々、幷徒同心之切米、入念惡米不渡之樣ニと被仰出、御藏衆江、此由可相傳之旨、酒井紀伊守、曾根源左衞門〇二人並勘定奉行ニ被申渡之、幷切米取之頭中江、此段可相傳之旨上意也云云、

〔教令類纂初集六十〕承應元壬辰年十二月

手形數〆員數へ調印致置、是を角判帳と唱候事、

一玉組帳之事

右ハ手形三枚、玉一ッ宛、差札名前認、札差一人限、俵數札數玉數〆名前記し、總札差分綴合總〆致、行事共より、玉入前日御役所へ差出す、是を玉組帳と唱候事、但玉入總石高、此帳ニて留置、玉場之員數差引等ニ用ᵣ之、

一玉場帳之事

右ハ玉場ニて、落玉之差札名前、此帳へ留置、是を玉場帳と唱候、但日々落玉名前後日見合等之爲留ᵣ置之、

一御金扣井御金庭帳之事

右ハ御金渡當日、札差ども一人限、落玉之手形數一人限、御金受取高内割等迄悉認ᵣ之、〆之書付を銘々より差出す、是を御金扣と唱ふ、但右之扣不ᵣ殘御役所へ取上、改算入致、總渡高〆、御役所元取調有ᵣ之候判帳を以金に突合、一冊ニ綴、是を御金庭帳と唱、御金渡場ニて、此庭帳を以札差一人限之〆高ニて、御金相渡候事、

一鬮井御藏鬮之事

右ハ御切米渡前日、右渡方國柄之御米取調、二手渡之積、竹鬮二本へ御藏ニ認、鬮筒ニ入、手扣帳添、猶鬮箱へ入、月番御藏奉行、封印附置、是を鬮と唱、且翌朝相渡候節、御役所庭へ札差行事呼出、出役御藏奉行鬮箱封印相渡、一番手二番手、御藏爲ᵣ相極ᵣ候、是を御藏鬮と唱へ候事、但渡方御米之善惡等、都而自由ならざる爲ニ、此仕法相立候事、

一入日記之事

右ハ御金元拂差引認候、是を入日記と唱へ候事、

を緘封印附置候事、但受取方遲速之勝手、都而不正之謂無之爲ニ、此仕法相立候事、

一鑑札之事

右ハ木札ニ而一枚三枚札兩樣、御役所燒印居江調有之、玉場ニ而玉落之手形取上、其品此鑑札ヲ以受取べき爲渡置き、米金渡候節此鑑札取上ゲ、其品相渡候事、但受取渡シ手續不洩爲之仕法也、

一裏書之事

右ハ玉場ニて取上候手形裏へ、御金品々渡方金石記之、

一判帳之事

右認方、手形面俵數名前、幷金品々渡り方、悉相認候事、但御米渡之節、札差ども方へ相渡候ニ付、名前相記し、受取印形取之候故、是ヲ判帳と唱ふ、

一庭帳之事

右認方、手形俵數名前、米渡石數のみ認候事、但渡し米、御藏庭にて廻し相立、此面を以割渡候ニ付、庭帳と唱候事、

一割札之事

右ハ半紙四ッ切ニて、夫を裁懸ニ致し、御役所判、割判ニ押之、御切米受取人名前、玉場ニ而雙方へ認、御米渡之節、米之銘俵數、端米、幷俵廻し、共巨細ニ認、片方ハ俵數計認候方ハ、御藏庭ニて庭帳俵數と讀合、取上之御米を相渡、是を割札と唱候、但悉認候片破ハ、請取主へ可遣爲、其札差へ相渡、

一角判之事

右ハ玉場ニ而、御藏奉行落玉之差札と、手形名前讀合、手形之角と、帳面へ押爲致、一番手、二番手、

筑前　肥前　甲州　勢州　野州　世田ヶ谷　横見　上州　豆州　岩附

此外勤仕以下ニ而ハ、右國より次之方相渡候、米不足之節ハ、勤仕以上以下共、左之通相渡、

田河　豐後　越後　丹後

豐後　野州

御扶持米不足之節ハ

右ハ先年内評之由、當時ハ右之位之心得ニて、三色ニハ分不申候、少々小口受之分ハ撰不申候、相渡候米之位ハ、前々之通ニ心得候事、

〔淺草米廩舊例〕御切米渡方手續仕法唱方凡例

一五段之事

右ハ勤仕百俵以下同百俵以上不勤百俵以下同百俵以上、御役料、右五段と唱、書面之順ニ相渡候事、

一條目之事

右ハ手形毎、算當リ無之、其儘是を用候爲、其餘之渡方、俵數を謀、譬バ一俵より何千俵迄、悉米金品之渡方仕立置、手形俵數ニ合せ用之、是を條目と唱候事、

一玉之事

右バ札差共方にて、手形三枚ニ玉一ヅヽ積、受取人名前、半紙四ッ切程之紙へ三人立ニ認、尤札差名前書添、是を玉と唱、且此玉を開き候上ハ差札と唱候事、但此差札ニ受札方之斷書付也、

一玉柄杓之事

右ハ曲物ニて柄を附、其蓋へ玉一ッ宛可出程之穴を明け有之、是を玉柄杓と唱、玉場初日、札差共、差出候玉不殘、右玉柄杓二本へ入置振出す、是を玉落と唱、當日玉場相濟候得バ、此柄杓之穴

一年々正月十日迄休日、同十一日御藏開き渡り方始り、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日、右四節句、六月五日、第六天神祭禮、六月八日天王祭禮、六月十五日山王御祭禮年、九月十五日神田明神御祭禮年、十二月十七日十八日淺草觀世音市、其外大川堅川通、淺草大通筋、御成之砌休日、上野并濱御殿、其外御成ハ無構事、

一十二月は大晦日迄渡り方有之、御書替大晦日濟、渡り方不差急分ハ、翌春御藏開き迄、渡方相延候、手形も有之事、

〔淺草米廩舊例〕月々渡方凡石數覺

女中御切米一ヶ年米三千九百石餘是ハ二月九月兩度ニ渡ル○中略

御米位附○中略

上米　御合力米　御役扶持　女中御切米

中上米　御役料　上御切米　御役扶持　女中御切米

中米　勤仕御切米

中次米　不勤御役米　同御扶持　定扶持　作米　猿樂○中略

諸渡方內評議

御側衆　御勘定奉行　吟味役

右　駿州　遠州　播州　豐前　橘樹　稻毛　神奈川　六鄕　川崎　品川　馬込　房州

御留守居　大目付　町奉行　御側衆子息　御勘定奉行子息　御小納戸　奥醫師　狩野榮川

御勘定組頭

右　播州　豐前　久良岐　幸手　八條　新ノ方　越ケ谷　貳合半　松伏　府中

御作事奉行　御目付　小普請奉行　奥御右筆　書替奉行　御同朋頭

渡方

一同百俵有餘ハ、二月三日ヨリ同六日迄、
一御奉公不勤百俵以下、二月七日ヨリ九日迄、
一同百俵有餘ハ、二月十日ヨリ同十二日迄、
一御役料ハ貳百俵有餘以上以下共、二月十三日ヨリ同十八日迄、
右日限之通、吉岡榮之助、垣屋義助裏判取之、米金受取儀ハ、二月三日ヨリ三月晦日迄可限之、但米金受取方ノ儀モ、右箇條ニ準ジ可相心得、直段之儀ハ、百俵ニ付七拾兩ノ積タルベキ事、

〔明良帶錄續編〕御藏奉行〇註略
御勘定奉行支配にて淺草御藏の米穀渡方、三季御切米之節、渡方を司る、御役料二百俵にて、手代幷藏番小揚の物等を指揮す、〇中略
御切米手形改〇註略
御勘定奉行支配にて、手代八人づゝ、淺草御役宅に有、三季御切米手形案文押切て、引付直御證文、頭支配有之分ハ、新規御役被仰付節ハ、小普請組頭え昇り、夫々經昇して佐渡奉行に昇る、諸向より至るもの也、
〇按ズルニ、切米手形改ハ、或ハ書替奉行ト云フ、事ハ官位部德川氏職員切米手形改篇ニ在リ、宜シク參看スベシ、

〔淺草米廩舊例〕書替三季五段手形渡し日
以下二月十二日但御張紙書替日割之仕廻之日より八日目也〇中略　以上同十六日　不勤以下同十九日　同以上同廿二日　御役料廿四日
〇按ズルニ、以上以下トハ、百俵以上以下ヲ謂フ、

〔札差業要集中〕御藏米渡リ方休日

得二其意一候、

右之趣、御藏米取寄合之面々へ可レ被レ達候、

〔天保集成絲綸錄八十七〕文政二卯年九月

御勘定奉行江

近年打續米價下直ニ付、御藏米取之面々、別而可レ爲二難儀一被二思召一候、依レ之格別之譯を以、當多御切米御役料共、御金渡之分、百俵ニ付、張紙直段ニ金五兩增之積を以、可二相渡一候間、可レ被レ得二其意一候、

右之趣、向々江相達候間、可レ被レ得二其意一候、

九月

〔德川禁令考八十七〕慶應元乙丑年九月七日

切米役料渡方ノ定

覺

家督跡目被二下置一候者、又者轉役新規被二召出一候者、御切米御役料渡方ノ儀、是迄季節ニ寄、皆米渡、米金割合等、差別有之候處、以來都而一季分、皆米ニ而相渡、其餘張紙米金步合を以て、相渡候筈ニ候間、其旨可レ被二相心得一候事、

右之趣、向々江寄々可レ被レ達候、

〔柳營沙汰書一〕慶應二年正月廿六日

御張紙寫

當寅年春御借米貳百俵有餘以下、其分限高四分、

一御役料ハ三分一積、但渡方ノ儀ハ、御借米御役料共三分一米、三分二金ニテ可二相渡一候、

一御奉公勤候百俵以下ハ、正月廿九日ヨリ二月二日迄、

一季皆米渡りに有之、其外皆米渡りは一切無之事、

〔殿居囊〕武家年中行事

正月下旬、春御借米張紙出ル、

四月下旬、夏御借米張紙出ル、

九月下旬、冬御切米張紙出ル、

〔憲教類典〕〔五ノ十一〕〔前付〕寬保元辛酉年正月廿七日

當酉年春御借米貳百俵有餘以下共、分限高四分一、御役料は三分一米、三分二金ニ而可相渡候、

一御奉公勤候百俵以下は、二月朔日ゟ同四日迄、同百俵有餘は、二月五日ゟ同八日迄、

一御奉公不勤百俵以下は、二月九日ゟ同十一日迄、

一同百俵有餘は、二月十二日ゟ同十四日迄、

一御役料は、貳百俵有餘以下共、二月十五日より同十六日迄、

右日限之通、黑部善右衞門、神尾忠藏裏判取之、米金請取候儀は、二月五日より三月廿九日迄可限之、但米金受取方之儀も、右ヶ條ニ准じ可相心得、直段之儀は、百俵ニ付四拾七兩之積りたるべき事、

以上

酉正月廿七日〇中略

天明三癸卯年十二月二日

石見守殿御渡　　御目付江

當冬御切米三分二金、三分一米渡之處、關東北國筋不作ニ付、不勤百俵以上以下共、御切米、右三分一米渡之内、半分米、半分ハ張紙之直段四十六兩之二割增、五十五兩之積りを以、金渡ニ候間、可被

九月廿八日冬御切米三拾壹兩

同十九年

正月廿七日春御借米三拾兩　四月晦日夏御借米貳拾四兩

九月廿五日冬御切米貳拾七兩

同廿年

二月四日春御借米貳拾三兩　四月廿九日夏御借米貳拾三兩

十月六日冬御切米貳拾五兩

同廿一年

二月八日春御借米貳拾六兩　五月晦日夏御借米不殘米渡

九月廿八日冬御切米貳拾八兩

〔札差業要集中〕御張紙直段之事

一年々御切米は、當文化十三子年より、百六拾五ヶ年以前、承應元辰年春、初而御張紙直段始り、拾八兩に出、其後延寶貳寅年迄、廿三年之間は、夏冬御張紙出、右直段ヲ以二季御米、金渡りに相成、二季之内、皆米渡りも五季有之、百四拾貳ヶ年以前、延寶三卯年より、春夏冬三季渡りに相成、其年春夏二季共、皆米渡り、夫より享保二酉年迄、四拾三ヶ年之間、元祿十三辰年、春分計御張紙出、四拾八兩に而米金渡りに有之共、其外は年々春分は皆米渡り、夏冬兩度は、御張紙直段に而御米金渡りに有之、九拾九ヶ年以前、享保三戌年春分御張紙八拾壹兩に出、御米金渡り始、其後は年々三季共、御張紙出、今に至迄、御米金渡に相成、但享保四亥年、春分御張紙貳拾九兩に而、初而皆金に渡り始り、其後も米相場格別下直之年は、三季之内には皆金渡り今に有之共、皆米渡りは、去ル享保三戌年、三季渡りに相成而より、當文化十三子年迄九拾九ヶ年之内、八十壹ヶ年以前、元文元辰年、夏分

同十二年

正月廿七日春御借米貳拾八兩　四月廿八日夏御借米貳拾八兩

九月廿六日冬御切米貳拾六兩

同十三年

正月廿六日春御借米貳拾六兩　四月廿六日夏御借米貳拾五兩

九月廿八日冬御切米貳拾六兩

同十四年

正月廿三日春御借米貳拾五兩　四月廿八日夏御借米貳拾四兩

九月廿三日冬御切米貳拾四兩

同十五年

二月三日春御借米貳拾五兩　四月廿七日夏御借米拾九兩皆金

九月廿五日冬御切米貳拾六兩

同十六年

正月廿七日春御借米拾八兩　四月廿五日夏御借米貳拾兩

九月廿八日冬御切米貳拾八兩

同十七年

二月四日春御借米貳拾六兩　四月廿八日夏御借米三拾貳兩

九月廿九日冬御切米三拾壹兩

同十八年

正月廿五日春御借米四拾兩　四月廿八日夏御借米三拾八兩

正月廿三日春御借米三拾兩皆金渡　四月廿二日夏御借米三拾三兩
十月七日冬御切米四拾壹兩
同六年
二月十五日春御借米卅九兩皆金渡　五月朔日夏御借米四拾壹兩
十月十二日冬御切米四拾六兩
同七年
二月十二日春御借米五拾三兩　七月五日夏御借米四拾九兩
十月十四日冬御切米三拾三兩
同八年
正月十五日春御借米三拾壹兩　四月廿六日夏御借米貳拾六兩
九月廿三日冬御切米貳拾七兩
同九年
正月廿七日春御借米貳拾五兩　四月廿五日夏御借米貳拾五兩
九月廿四日冬御切米貳拾四兩
同十年
正月廿三日春御借米貳拾七兩　四月廿三日夏御借米貳拾六兩
九月廿四日冬御切米貳拾七兩
同十一年
正月廿四日春御借米三拾貳兩　四月廿五日夏御借米三拾貳兩
九月廿五日冬御切米貳拾八兩

延寶三卯　春皆米
夏同斷
冬三拾七兩（小切米半分、三分二、大切米三分二、御役料皆金、）○中略
享保三戌　春八拾壹兩（半分金）
夏七拾貳兩（半分金）
冬七十八兩（半分金大切米ハ三分二金）

〔舊札差人村林建藏所藏張紙直段扣帳〕享保元年より同廿一年までの張紙直段

享保元年
正月十五日春米ばかり　四月廿二日夏御借米六拾貳兩
九月廿九日冬御切米六拾七兩
同二年
正月十九日春米ばかり　四月廿一日夏御借米七拾九兩
九月廿三日冬御切米七拾三兩
同三年
正月十九日春御借米八拾壹兩　四月廿三日夏御借米七拾貳兩
十月十五日冬御切米七拾八兩
同四年
正月廿二日春御借米廿九兩皆金渡　五月九日夏御借米貳拾七兩
十月九日冬御切米三拾三兩
同五年

此石五万九千九百六拾四石餘　　同以下

米六万五千四百六拾四俵餘

此石貳万貳千九百拾貳石餘

内　米六万五千三百八拾四俵餘　本高
　　米八拾俵　御足高

〔吹塵錄二十八德川氏〕張紙直段

旗下家人の俸祿は、春夏冬の三季に分ちて下附す、而して其米額、悉皆米にて給與する事あり、又幾分を代金にて給與する事あり、其價格每季同じからず、百俵即ち三拾五石ニ付、金若干兩と定め、貼紙を以て之を示す事なり、之を三季張紙直段と稱す、今承應元年より、弘化三年春までの張紙直段の書面を得たれば此に謄錄す、

因に云、古代は知らず、近世は俸祿金額の四分之一を春借米、四分之一を夏借米、二分之一を冬切米と稱し、春は二月夏は五月、冬は十月に渡したるなり、延寶二年以前には、春借米あらざりしものか、或は皆米渡なりし故に、直段帳に記載せざりしものか、いまだ詳ならず、

御張紙直段

承應元辰　夏拾八兩　冬貳拾三兩

同二巳　夏貳拾壹兩　冬壹兩ニ壹石五斗替〇中略

寬文三卯　夏冬米計ニ而被下〇中略

同五巳　小切米ハ皆米、又ハ三分一金子、大切米ハ半分、又ハ三分一成共、御役料ハ皆金、小切米半分、三分二成共金、大切米ハ三分二、御役料ハ皆金、　夏三拾五兩　冬同断〇中略

三拾九石餘宛　壹ヶ月分

〔吹塵錄二十八德川氏〕寛政元酉年分限高

貳百貳拾六万三千八百三拾七石餘、貳万四千七百九拾壹人半扶持、　元高

　內八拾三万三千六百六拾四俵餘　御藏米

千八百三拾八兩　同

〇中略

五万九千五百貳拾貳俵、千七百八拾六人半扶持、　部屋住御切米

拾貳兩　同

〔吹塵錄二十八德川氏〕万石以下藏前取之高

　元治慶應度平均

　御切米渡方一ヶ年凡積

一米百拾八万六千三拾六俵餘　但三斗五升俵

　此石四拾壹万五千百拾貳石餘

　　此譯

米四拾七万四千貳百八拾四俵餘　勤仕之者百俵以上

　此石拾六万五千九百九拾九石餘

　　內米三拾八万四千七百五拾六俵餘　本高

　　　米八万九千五百貳拾八俵餘　御足高

米四拾七万四千九百六拾俵餘　同以下

　此石拾六万六千貳百三拾六石餘

　　內米三拾九万四千貳百九拾六俵餘　本高

　　　米八万六百六拾四俵餘　御足高

米拾七万千三百貳拾八俵餘　不勤之者百俵以上

壹万九百石餘宛　同以上
四千五百石餘宛　御役料
米拾三万貳千七拾四石餘
冬米渡高
內
三万貳千九百拾石餘宛　勤仕百俵以下
六万七千百七拾壹石餘宛　同以上
六千四百九十壹石餘宛　不勤百俵以下
貳万千貳百七拾五石餘宛　同以上
四千貳百貳拾五石餘宛　御役料
御扶持方
米六万九千石餘　壹ヶ年
內
五千七百五拾石餘宛　一ヶ月分
四千九百五拾石　勤仕
內
八百石　不勤
比丘尼御扶持方
米四百七拾七石餘　壹ヶ年高
內

右同斷　夏米渡リ
右同斷　同金渡リ
七万石程　冬米渡リ
貳拾万兩程　同金渡リ
三口〆金四拾壹万兩
三季五段渡切御屆之儀、是迄當日朝御屆候處、寛政四亥年五月十二日、翌日御屆可申旨、横屋幸之進、勝屋彥兵衞より申來ル、御借米御切米渡方者、御張紙出候日より八日目、玉入御金渡、九日目渡初ル、
〔憲教類典〕五ノ二十五御切米　年號月日不知
御切米半分金之積り
米拾三万四千八百貳拾貳石餘
春
米渡高
夏
內
六万七千四百拾壹石餘宛
內
壹万四千八百六拾七石餘宛　勤仕百俵以下
三万四千三拾九石餘宛　同以上
三千百五石餘宛　不勤百俵以下

三口〆金拾八万四千両
一米貳拾七万五千石餘　半分米渡リ
内七万石程　春米渡リ
七万両程　同金渡リ
右同断　夏米渡リ
右同断　同金渡リ
拾三万五千石程　冬米渡リ
拾三万五千両程　同金渡リ
三口〆金貳十七万五千両
一米十八万四千石餘　三分一米渡リ
内四万七千石程　春米渡リ
九万三千両程　同金渡リ
右同断　夏米渡リ
右同断　同金渡リ
九万石餘　冬米渡リ
拾八万両程　同金渡リ
三口〆金三拾六万六千両
一米拾四万石餘○四分一米渡リ
内三万五千石程　春米渡リ
拾万五千両程　同金渡リ

總高

〔淺草米廩舊例〕三季御切米渡リ方凡積　但御金積之儀者、米三十五石ニ付、金三十五兩直段之積リ、

一米五拾五万石餘　皆米渡リ
内拾四万石　春御借米
右同斷　夏同斷
貳拾七万石　冬御切米
一米四拾壹万貳千石餘　四分三米渡リ
内拾万貳千石程　春米渡リ
三万五千兩程　同金渡リ
右同斷　夏米渡リ
右同斷　同金渡リ
貳拾万貳千石程　冬米渡リ
六万八千兩程　同金渡リ
三口〆金拾三万八千兩程
一米三拾六万六千石餘　三分二米渡リ
内九万三千石程　春米渡リ
四万七千兩　同金渡リ
右同斷　夏米渡リ
右同斷　同金渡リ
拾八万石程　冬米渡リ
九万兩程　同金渡リ

松平彈正三千五百石、同作左衞門三千石、三河に知行あり、

切米 扶持 併入

切米ハ家祿ニシテ、廩米ヲ以テ支給スルモノナリ、德川幕府ノ時、是ヲ春、夏、冬ノ三季ニ分チテ給與シ、春借米、夏借米、冬切米ト稱ス、全額ヲ四分シテ、二月ニ一分、七月ニ一分、十月ニ二分ヲ給ス、是ヲ藏米取ト云フ、其遠國ニ赴任スル者、及ビ拜領ノ地ニ第宅ヲ造營シ、或ハ火災ニ罹ル時ハ、未ダ期限ニ至ラズト雖モ、特ニ給與ス、之ヲ取越米ト云フ、切米ハ概ネ米金併セ給スルヲ例トス、毎季米價ヲ揭示ス、之ヲ三季張紙直段ト稱ス、張紙トハ、城中ノ中ノ口ニ張出スヲ云フ、

凡ソ米ハ三斗五升ヲ一俵ト爲シ、廩米ノ品位ヲ上米、中上米、中米、中次米ノ四類ニ別チ、切米、扶持方、合力米以下ニ班給シ、其制定マレリ、幕府ノ米廩ハ、江戸淺草ニ在リ、藏奉行之ヲ管シ、切米手形改ト共ニ切米、役料、扶持方下附ノ事ヲ掌ル、

扶持ハ口糧ナリ、一人一月ノ分ヲ玄米一斗五升トス、是ヲ一人扶持ト云フ、毎月之ヲ給ス、其受取ノ法、概ネ切米ニ同ジ、

名稱

〔倭訓栞中編五幾〕きりまい　切米と書り、室町家の時より見えたり、

〔經濟錄五食貨〕凡士以上ハ田祿有者也、○中略今世ニハ、小祿ノ者ハ廩米ヲ取テ、土地ナキ者モアレドモ、土地有者ニ准ジテ之ヲモ知行ト云、之ヲ給人ト云、又其下ニ卑キ者ニテ、田祿ヲ給セズシテ、廩米若ハ金銀錢ヲ賜テ、其衣食ニ給ス、之ヲ俸ト云、今ノ俗ニ切米給分ト云是也、俸ニ歲俸、月俸ノ品アリ、又米ヲ給ハルヲ米俸ト云、金ヲ給ハルヲ金俸ト云、

〔青標紙、三編〕御旗本三千石寄合席ニ而、先祖之本國ニ今以テ采知領分有之ハ、能勢熊之助、本國攝津ニ而、知行同國能勢郡ニ有之、又此知行所村内ニ、安德天皇行在所ニ成たる趣、棟札の出たる農家あり、此能勢氏ハ世人の知れる狐除黒札を出す家にて、向柳原藤堂家の隣家に邸宅有之、四千八石の差出高にて、近江伊勢にも飛。知有之事、今一ツハ石川左金吾なり、左金吾ハ三千石にて、知行ハ河内國石川郡を領す、石川氏の本國ハ河内なり、然るに同性澤山あれども、此左金吾の家に限り、先祖の本國を領する事冥加なるべし、今一は朽木彌一郎の家ニ而、彌一郎六千石、知行近江なり、同龜六も三千石にて近江を領す、朽木氏の本國近江なれども、大名の朽木ハ、却て領知三万五千石、丹波福知山の城主なり、交代寄合朽木兵庫介も領知近江にあり、

今一軒ハ中坊陽之助也、中坊先祖ハ南都興福寺坊中の衆徒なり、故に本國ハ大和なるに、今以知行同國吉野郡にあり、四千石の高なり

又其一ハ大島帯刀也、本國美濃にて、知行美濃にあり

今一軒ハ加藤平内、本國美濃ニ而、知行所同國ニアリ、甲斐庄喜右衛門、本國河内ニ而、領分同國に有之、遠山左京六千五百石餘、美濃に有之、是又本國ハ美濃なり、苗木城主遠山信濃守又然り、戸川一家、蒔田家、水谷主水、何れも本國にはあらざれども、知行所備中にあり、

池田家、淺野家、何れも播磨に領知有之、

秋月金次郎、高三千石、本國日向ニ而、知行所今以而日向に有之候、大名の秋月も、同國高鍋の城主也、

青木孫太郎、本國美濃ニ而、五千石の知行美濃に有之、妻木平四郎三千石、右同斷、

佐藤金之丞三千石、又同じ、

佐野欽六郎四千石、同龜五郎三千五百石なり、本國下野にて、兩家ともニ下野を領知せり、

知行所損毛

御勘定奉行江

越前守殿（老中水野忠邦）御渡

江戸大坂、今般上知相成候内向之ニハ、小身之輩も有之、代知爲請取可致出役家來ニも差支、又ハ是迄知行所賄ニ而融通いたし居候類ハ、當座不都合ニ可有之、或ハ代地手違之場所江出候ハ、迷惑も可仕候ニ付、五百石以下代知之儀、當時御定之通、御藏前ニ引替可被下候、左候得ハ、廻米難破船等之愁も無之、其外雜費相省、年中之世話迄も薄、自然家事之一助ニも可相成事ニ候、委細御勘定奉行可被談候、

右之通、今般上知被仰付候五百石以下之面々江、可被達候、

右之趣相觸候間、可被得其意候、

今般上知相成候向之内、五百石以下之分ハ、代知御藏米ニ引替被下候、尤多人數之内ニハ、是迄賄方等知行江申付置候族、右之通被仰出候ニ付而ハ、當座迷惑ニ及び候類も可有之哉と、格別之思召を以、右引替相成候向江ハ、御金可被下と之御沙汰ニ候、依之高百石ニ付金拾両（太平年表ニハ拾七兩トアリ）宛被下候、御金受取方之儀ハ、御勘定奉行可被談候、

右之通、今度上知被仰付候、五百石以下之面々江可被達候、

右之趣相觸候間、可被得其意候、

〔敎令類纂初集五十九〕元祿十四辛巳年十月十三日

覺

小給之面々、知行所損毛ニつきて、返納米並上納金差延願之儀、知行高之内、何程損毛之旨、員數書付可被差出候、向後ハ相給之方よりも、右知行所損毛之段、書付取之、相給無之ハ、近邊御代官よりも書付取、相濟可被差出候、

十月十三日

萬石以下布衣以上御役人、其外御奉公相勤候ものハ、知行下免ニ付、相勤候内ハ、御藏米御引替之儀、享保十七子年、出羽、陸奧信濃、越後、越前ニ知行有之分ハ御引替可被下旨、相極之候間、右五ヶ國ニ知行有之分計、御引替被下候筈、寛延二巳年、相極候得共、向後千石以上ハ、布衣以上之分計、千石以下ハ布衣以上以下とも、右五ヶ國之無差別、拾ヶ年平均二ツ九分以下ニ付候分ハ、御藏米御引替被下候筈候間、可被得其意候、

〔天明集成絲綸錄三十九〕明和八卯年二月

御勘定奉行江

百人頭　岡田將監組與力　貳拾三人

御先手　奧田山城守組與力　拾人

右知行所取扱、不案內ニ而難儀ニ付、願之通、一人前現米八拾石宛、御藏米ニ引替被下之旨得其意、向々可被談候、

〔天明集成絲綸錄四十三〕天明七未年九月

御勘定奉行江

万石以下知行、御藏米引替之儀、千石以上ハ布衣以上、千石以下ハ布衣以上以下共、知行所國之無差別、十ヶ年平均二ツ九分以下ニ附候分、勤之內御藏米御引替被下候筈、明和五子年相極候處、向後ハ、享保年中申渡候通、出羽、陸奧、信濃、越後、越前五ヶ國ニ限、千石以上ハ布衣以上之分計、千石以上以下ハ布衣以上以下とも、勤候內、書面之通、下免之分、御藏米御引替可被下候、右五ヶ國之外ハ、御引替不被下筈相極候間、可被得其意候、

〔德川禁令考三十七知行〕天保十四年七月十二日

代知御藏米ニ引替之儀ニ付御觸書

御目付へ

御奉公相勤候者知行所下免ニて、御藏米ニ御引替之儀、向後御役又ハ御番相勤候內計、御藏米御引替被レ下候間、御役御番御免、病死等之節ハ、頭支配より其趣申聞、御勘定所へも可レ被二申達一候、尤只今迄引替相濟候分ハ不レ及二其儀一候、

〔憲法部類三〕寬保二戌年六月十四日、左之御書付、稻垣淸右衞門被二申觸一候、

万石以下布衣以上之御役人ハ、知行下免ニて十ケ年平均、二ツ九分以下ニ附候分、願候はゞ、勤候內御藏米ニ引替可レ被レ下候、

右之通、向後可二心得一旨、寄々可レ被レ達候、

〔寶曆集成綠綸錄二十二〕延享四卯年四月

御勘定奉行江

大御番戶田近江守組與力
森新太郎

右知行所惡敷候ニ付、御藏米御引替被レ下候、尤勤候內、御引替被レ下候間、被レ得二其意一、知行所之儀可レ被レ談候、〇中略

寬延三年五月

御勘定奉行江

御留守居若狹守養子
高力大學

右養父若狹守相勤候內、地方三千石、御藏米御引替被レ下候處、若狹守病死ニ付、家督被レ下候付、如二最前一地方ニ成候間、可レ被レ得二其意一候、尤大學へ可レ被レ談候、

〔天明集成綠綸錄三十八〕明和五子年九月

御勘定奉行江

藏米引替

之領知は三ッ五分取ニ而、物成米三千五百石納りたる處、此度渡りたる領地は四ッ取ニ而、物成米四千石有り、先知より米五百石相増とも、拜領高壹萬石之高を減る事は難ㇾ成、物成之增ニ不ㇾ構、壹萬石相渡ニ付、增米五百石丈之高千貳百五拾石なり、此高之分を延高と唱ふる、萬石以下は、物成詰ニ而村替等有ㇾ之ニ付、知行割掛りニ而、村方割合先ヅは延高無ㇾ之事、

但延高仕出シ方ハ、先知行之取米三千五百石を、當知行之免四ッニ而除ケバ、高八千七百五拾石ニなる、壹萬石之內右高引之殘高千貳百五拾石と出る、此分込高なり、

〔御勘定所定書〕中知行御藏御引替之御書付

分限高千石以下面々、取來知行下免ニ而、御藏米御引替願之儀、十ヶ年平均取ケ、二ッ九分以下ニ付候分ハ引替被ㇾ下、三ッに付候得バ引替不ㇾ被ㇾ下定法、可ㇾ被ㇾ心得候、

享保九年辰正月

〔勘契備忘記〕中享保十七子年、酒井讃岐守殿、〇忠音、老中、御勘定奉行江御渡書付、

万石以下布衣以上御役人知行、御藏米御引替御書付、

一万石以下、向後出羽、陸奥、信濃、越後、越前、五ヶ國之內、知行所有之布衣以上之御役相勤候もの、勤候內計、願次第御藏米ニ御引替可ㇾ被ㇾ下筈ニ被ㇾ仰出ㇾ候、

但右五ヶ國ニ而取來候知行、御藏米とハ引替被ㇾ下候而も、其儘領知定免を以、年々御年貢上納仕候筈ニ候、山林者、地頭取捌ニ成候間、左樣被ㇾ相心得、定免之儀、其節之地頭へ申請可ㇾ被ㇾ相定候、

子七月

〔憲敎類典〕五ノ十藏前 寬保元辛酉年八月十日

左近將監殿〇〇老中松平乘邑　伊豫守殿〇〇若年寄本多忠統　御渡

越石

込高
延高

り、〇中略借又万石以下の御役人、知行所よろしからず、御役中御藏前取願有之引替るときは、是までの知行千石の物成、二ッ五分、三ッ位に當る共、御藏前にては百石百俵の積り千俵渡しに付、三ッ五分に當る、かやうの類は物成詰には無之なり、

〔憲教類典五ノ四地方上〕大御所樣〇德川吉宗御尋ニ付、有馬兵庫頭殿ヲ以テ、辻六郎右衛門書上也、

右之書付短クつゞめて書上候樣ニ御尋

一越石之事

是は知行を割渡候時、其渡知高に不足有之ニ付、他村より足し高、小分割添遣候て渡、知行高都合仕候も越石と申候、少分之足高故、百姓も、田畑地所も、割分け渡候義不罷成候ニ付本村並之年ニ取箇積を以、右足高之分を物成計引越遣候ニ付、越石と申候、越石ハ、物成之外ハ、夫役等、懸り物之類も、地頭より割懸候義不罷成、諸事仕にくき事故、近年ハ越石ニハ不仕、割分ケ渡候程之足高仕候樣ニ知行割渡候、〇中略

享保四亥年三月十四日

〔地方凡例錄一〕込高之事

是は御料所には無事なり、私領村替等の節、假令バ高五百石四ッ取の村方、只今まで知行いたし居る處、此度上り代地外の村々ニて、高五百石渡る、此村ハ三ッ五分之村に付五分だけ、最初取來りたる村より物成不足ニ付、五分だけの高を、其村內にても、又は他村にても、五百石の上に增してわたすを込高といふ、勿論麁の高下計りにてハなく、雙方の村の小物成高掛り、米永物成詰にて高に結び、多少を見て、物成不足だけを高にて渡すを込高といふ、

一延高之事

是も御料には無事なり、知行渡り之節、縱ば高壹萬石物成詰ニ無之高ニ而引替ニ相成り、只今迄

物成詰

關東畑方永取之分ハ一反を米一石二斗五升代之積りニて、田方米取都合仕、屆付割合來候得共、自今一石替之積りニ割合可然奉存候、

右之通り存寄候儀ニ御座候間申上候、以上、

寅〇享保七年四月

右之通り伺相濟候由、寅四月廿二日、駒木根肥後守殿〇政定奉行、勘被仰渡候、

〔幕朝故事談〕諸侯

折紙とは、二つ折の金銀馬代の事也、〇中略御加増被下候節、大小名に不限、三千石以上の加增なれば、御禮の時、金馬代なり、三千石以下は、銀馬代にて御禮申上る也、

〔地方凡例錄〕一物成詰之事

是ハ知行渡しの節、高百石に付、米三斗五升入、百俵の當りニて、米三拾五石免ニて三ッ五分に當る、公儀より私領え渡る、村々免は高下あるに付、其村々の物成、本途幷に小物成米、永鄉帳組の分を打込み、高百石、三ッ五分に當るやうに割合、三ッ五分より高免の村方あれば、又下免の村を差加へ、高には拘はらず、物成にて增減いたすゆゑ、物成詰と云、然し拜領高千石の物成、四百石有之、免四ッに當るとて、三ッ五分に當るやう、千石の高を減少いたし渡す儀はならざるに付、三ッ五分に當るべき村方を糺し、割合て相渡す、又千石の村、下免にて三ッ五分の物成に不足なれば、外村にて不足だけの米に當るやう、千石の上に高相增し、込高にしてわたす、是は新知のことなり或は村替等有之分は、三ッ五分に拘はらず、只今まで納め來る本途に、物成の石數を以て引替、雙方の村方、本途小物成を打込て、物成詰にて引替る、古來は万石以下計り物成詰にて、万石以上は物成に拘はらず、石高にて引替るよし、然る處何れの頃よりにや、近來万石以上も、村替加增地等物成詰に成たり、夫も國替所替等の節は、物成詰にならず、有高にて引替る故、國替には甚損益あ

加増

し賜ひ、五千石十年叙爵し、〇中略十五年七月所領の地倍し賜る、一萬石

〔明良洪範九〕神君ノ御側ニ召仕ワレシ舊功ノ人々、一萬石ヲ賜ハリタル中ニ、安藤帶刀直次ノ、ミ横須賀五千石ヲ賜ハリヌ、神君ハヒトシク一萬石ナリト思シ召シテノ事ナリ、アルトキ成瀬、安藤ト御前ニ伺公スルトキニ、汝等ニ一萬石ノ領地ヲアタヘヌ、仕置法度ハイカヾスルゾト御尋アリ、成瀬曰、臣等ミナ一萬石也、其中安藤ハ只五千石ナリト申ス、神君大ニ驚カセタマヒ、予ハ横須賀、實ニ一萬石ト思ヘリ、汝ヂ成瀬ト共ニ數年武功ヲカサネテ、與フル所ノ祿ナリ、何ゾ多少ヲ分タンヤ、然ルニ汝ヂ色ニモ顯ハサズ、詞ニモ出サズ、不怨不慍ニシテ、今日ニ至ルマデ實ニ有難キ心底ナリ、是篤實ノイタリ、忠義ノマコトヽ云フベシトテ、卽刻五千石ヲ加ヘラレ、且其年限ヲ計ルニ、十年ニ及ビケレバ、是又五千石ノ米穀ヲ積テ一度ニ下シ玉ハリヌ、所納米石高五萬石ニ及ビシ、是ヨリ安藤帶刀直次ノ家豐饒ナリトゾ成リヌ、

〔營中御日記〕寛永二年六月二日、渡邊山城守、二條御城代被仰付、取來知行五千石養子監物ニ被下之、山城守ヘ新地七千石被下之、

〔幕朝故事談〕諸侯

德廟〇德川吉宗以來御加增地は、關東にて出す御規定也、

〔御勘定所書付留〕覺

一新知御加增被下候時ハ、知行割仕候儀、御役儀格式ヲ以而、物成屆付之高下、從前之例を以而、御勘定所ニ而割合仕來り候、然共知行被下候儀ハ、御役儀之格ヲ以而、物成積之多少之差別ハ有御座間敷候事ト奉存候、自今ハ物成之屆付ケ、三ッ五分宛ヲ定被下候而可然奉存候、三ッ五分積りヲ以而割渡候ヘバ、私領ニてハ少々取箇も相增候故、知行方ニ付、諸入用掛之分ハ引候ても、御藏米程ニ相當り申積候間、三ッ五分之屆付ニ被下可然被存候、但只今迄之知行割之仕形、

新知

但上知ニ付、御金被下候向は、來辰年より十ヶ年賦ニ上納可致候、
右之通可被相觸候
右之趣相觸候間、得其意、以前江復し候樣、早々取計可被相觸候、
嘉永六丑年十月廿九日
知行村替願出間敷旨御觸書
大目付江
伊勢守殿〇老中阿部御渡
万石以上以下領分知行村替之儀、御用ニ付、公儀より被仰付候ハ格別、依願猥ニ引替可被下筋ニ無之處を、近來荒地損毛、其外勝手難澀之故を以、村替相願候面々不少候、古來より不宜場所領來候ハ、勿論、是迄所替村替被仰付、收納減少候も、其時々子細有之事ニ候へバ、兼而より銘々覺悟も可有之處、多くハ等閑ニ打過、剩繁々用金をかけ、或衰微候郡村を以、引替之儀相願候ヘ、如何之儀ニ有之、殊ニ御料所ハ、數多之國々ニ候得バ、荒廢之地、水旱之患ハ、猶更多分之儀、其御手當御入用大造之事ニ候處、猶又向々之願ニまかせ、相應之土地を以、不宜郡村ニ引替候ハ、際限も無之、不容易事ニ候條、向後村替之願申立之儀、差扣可被申候、尤万石以下、知行御藏前ニ引替之儀ハ、天明七年相達候國々之外、決而難相成事候
右之通、先年相達候處、近來村替之內願等被申立候向も有之候、右達之通、彌相心得、萬端御事多之折柄ニも候間、村替井總而勝手ヶ間敷諸內願、容易ニ被申立間敷候、
右之通、向々江可被相觸候、
〔家忠日記追加十八〕此年〇慶長九年松平三郎四郎定綱、後越中守と號す下總國山川領の內采地五千石を賜はる、
〔藩翰譜三久松松平〕越中守源定綱ハ隱岐守定勝の三男なり、〇中略九年〇慶長始て下總國山川の地下

追々紛亂候ニ付、全爲御取締無據被仰出、實ハ御不本意之儀ニ被思召候事故、右願之趣下ニ而ハ廉潔之儀ニ候得共、被爲於上候而ハ、聚斂之御處置ニも相當、思召ニハ甚以不相叶候間、右之願ハ不被遊御許容旨ニ而、別段品々難有御沙汰之事共有之、誠以感泣銘肝之至ニ候、乍併御許容無之ハ、人君之道を被爲盡候譯ニ候、臣下之身ニ取候而ハ、愈以抽忠誠可申筈之處、難有御沙汰を蒙候迚、御時節がら、御料より膏腴之土地、居然領知罷在候ハ、如何にも不相當之筋と被存、何分安じ不申ニ付、猶又申談、高免之場所差上度ハ素願ニ候、打碎候へバ、此外ニも相含微意ハ、御損益を計、又ハ私之譽聞を求候儀ニハ無之、國家之御爲と存込候次第、委細再願書ニ建白いたし候通ニ有之、殊ニ兩大城傍近のみ御料所ニ被仰出候得共、諸大名其外飛地之分、纔平常之用向辨候迄之家來差置、甚手薄ニ有之、且民情も自然疎遠ニ而、萬端城附之如くニハ行屆不申候間、飛地之分、不殘城附領地並之免合ニ而、一纏ニ被仰付候得バ、御趣意にも相當、銘々持高丈之取締出來、安心之儀ニ候旨申上候處、件之旨趣、委敷被爲聞召分、折角之存込ニ而再願之上ハ、可被遊御聞屆旨被仰出、微忠之赤心相達、誠以難有次第ニ候、若年寄衆、御側衆も同樣願之趣、入〇此下恐脫字御許容ニ相成候、此度上知被仰付候面々も、奕世之御鴻恩奉報度誠心ハ同樣之事と存候へ共、一己之勝手都合而已ニ拘率いたし、異存之輩も候ハヾ、被申出候樣無急度可被達候、

天保十四年閏九月七日

上知復古之旨御觸書

大炊頭殿〇老中土居利位御渡　　御勘定奉行江

今度御取締之ため、江戸大坂最寄一圓、御料所ニ可被成置旨、被仰出候ニ付、上知被仰付、并飛地領地之儀ニ付而も、相觸候趣も有之候處、別段厚思召も被爲在候ニ付、右之儀ハ不被及御沙汰候、以前之領地知行之通り、可被成置旨被仰出候、

知行替之儀ニ付口達之趣書取

越前守殿〇老中水野御渡

御料所之內薄地多、御收納免合調省、殊ニ近年品々之御用途差湊候折柄ニ候得共、厚御趣意を以、御勝手向ニ相響候儀をも不被爲厭、御貸附金御仕法替、幷十組問屋之內、運上冥加之類、若干免除被仰出、都而上を損、下を益候御仁政、上代ニ不恥美事と、一統難有奉存候、然處銘々領分ニ高免之土地も有之候ハ、畢竟神祖盛慮を以、封建之制度確乎と相定り、其上御代々之御恩澤ニ而加地等頂戴候得共、御治世後、間も無之時被分封、又ハ倉廩充實之節、被恩賜候儀ニ而、其後移封等ニより增減有之候而も、當時御料所より私領之方高免之土地多く有之候ハ、不都合之儀と奉存候、假令如何樣之御由緒を以被下、又ハ家祖共武功等ニ而頂戴候領知ニ候とも、加削ハ當御代思召次第之處、右御由緒等を彼是申立候ハ、事態を不辨ニ相當り、殊ニ銘々數代御鴻恩を蒙居、御勝手向之儀ハ、毫髮不顧、收納多分有之候を、一己之餘潤とのみ心得候筋ハ有間敷事ニ候、元來家族奴僕之扶助、可也出來、御軍役、高並相勤り候得バ事足候儀ニ而、既ニ享保度ハ上米も被仰付候處、此節右樣之御沙汰無之を能事と心得、默々己之利を固執仕候ハ、人臣之分とハ難申、彼是恐懼無限候間、何とか願方も可有之哉と含居候處、幸此度江戸大坂最寄爲御取締上。知。被仰付候、右領分其餘飛地之領分にも、高免之場所も有之、御沙汰次第差上、代知之儀、如何樣ニも不苦候得共、三つ五分より宜敷場所ニ而ハ、折角上知相願候詮も無之候間、御定之通、三つ五分ニ不過土地被下候得バ、難有安心可仕候、偏ニ神祖封建之盛慮ハ不及申、御代々守成、又ハ更張之御經營故、銘々無量之御德澤ニ浴申候事、聊之代知等ニ而奉酬とニハ無之候得共、區々之誠悃、御許容被成下候ハヾ、難有仕合奉存候、右之通、越前守、大炊頭、備中守、相願候處、兼々諸臣迷惑之筋ハ、深く被爲厭候御趣意ニ候得共、此度江戸大坂御城最寄、上知被仰付候ハ、御損益ニ關係候儀ニハ無之、從來御規定之領知割、

知行替上知

但御用木ニ成候程之立木有之林ハ、相渡不申候事、

一江戸拾里四方内之村方ハ、寛政十二子年より知行割ニハ不仕候、且又魚猟場其外、諸運上小物成格別多村方ハ相渡不申候事、

　但得替知行割之儀、城附直渡ニ不致、割直し渡候時ハ、右之村方ハ相除候へとも、城附近所ニ而難相除候者歟、或ハ先領主へ同高ニ而増地殘地等無之時ハ、其儘相渡候事、

一知行割之節、關東米方永方割合之儀、大概高百石ニ付、米方拾六七石ゟ貳拾石位迄割合相渡候分ハ、永方相渡候事、

一關東永方米ニ直し候儀、古來ゟ永壹貫文ハ米貳石五斗替之積仕候處、元祿三午年ゟ永壹貫文ハ米壹石貳斗五升替之積相改候、然ル所享保七寅年ゟ、永壹貫文ハ米壹石ニ可渡旨被仰渡候、(朱書)此儀只今ハ、永壹貫文ハ米壹石貳斗五升替之つもり罷成候、

右拾ヶ條ハ、前々ゟ書面之通、割合來候事、

一知行割之儀、新規并御加增共、只今迄舊知最寄を第一ニ仕、宜村のみ割合候、左候而ハ、御料所ニ惡敷村計殘候義如何ニ候間、向後ハ見計、左之通割合可仕候事、

一新規并御加增割合之儀、水旱損有之村方、并在方御普請所有之村方も、向後ハ五ヶ年拾ヶ年之樣子見合、其もの之分限高に應じ相渡、村柄不宜をも取合割合之樣可仕候事、

一新規并御加增得替共ニ割合候儀、永方ハ壹貫文ニ付、米壹石貳斗五升替ニ而米ニ直し候處、享保七寅年ゟ、永壹貫文壹石替ニ相成候ニ付、知行割之節、免合下リ候間、向後前方之通、永壹貫文ニ壹石貳斗五升替ニ免積可仕候事、

右は享保二十卯年ゟ、書面之通相極候事、

〔德川禁令考知行三十七〕天保十四年八月十八日

一得替知行割之儀、城々附直渡之節ハ、拜領高外之新田改出しハ、其儘高外ニいたし可相渡候事、

但上知ニ成、壹ケ年も御料所ニ而、御所替有之候以後、知行渡ニ相成候節ハ、石高外之新田改出し等之分、拜領高ニ結ひ相渡申候、

一知行所御用地ニ上リ、代地被下置候節ハ、上ケ地物成之通、物成詰を以相渡候、且又川路潰地等ニ而、少分之代地は、免合無構相渡候、然れ共各別取劣候へハ、物成詰ニも仕候事、

但壹万石以上之上知ニ而、小物成高外ニ渡候分は、小物成之高外ニハ相構不申候へ共、可成程ハ大概ニも割合候事、

一得替之知行割物成ハ、厘附出來相渡候事、

但格別物成劣之節ハ、伺之上割合仕候事、

一新規御加増共ニ、分限高壹万石以上之面々ニハ、小物成ハ、高外ニいたし相渡、分限高壹万石以下之分ハ小物成高ニ相渡候事、

但小物成高結候事、永壹貫文を高五石之積取候へハ、壹石貳斗五升ニ〆入、銀壹匁を高壹斗ニ詰取候へハ五升ニ〆入、

一分限高壹万石以下之知行渡候節、高ニ結候小物成ハ、其土地より生じ、年々増減無之品々ハ高に結び、年季請負等ニ而差出候運上類、其外年々増減有之品ハ、高へハ除有之斗入候事、

但見取場米永ハ高ニ不結、取人斗入、且又高掛夫米差米目米等之類ハ、高取共ニ相除候事、

一物成詰込高之儀、古來ハ新規御加増共ニ、最寄事一ニ相渡候ニ付、五割位迄ニも相渡候へ共、近年ハ最寄少々飛散候而も、可成程ハ高減候樣ニ割合候事、

一林之儀、新木小木等有之林ハ、高百石ニ付、大概五反歩程迄ハ相渡候、尤割合出來方ニより、林無之候而も相渡候、

新規御加増知行所替御書出被下候儀ニ付書付

一總而知行拜領之面々、御書出被下候義、只今迄ハ新規御加増被下候分計御書出被下候、然共知行替被仰付候衆中ニハ、前方御書出被下候儀有之、一樣ニ無之旨、自今以後ハ兩樣ニ御書付被下候筈ニ相極可申旨被仰出候事

子四月

〔敎令類纂二集八十三〕安永元壬辰年十月廿一日、御勘定奉行石谷備後守〇淸昌川井越前守〇久敬より達

御勘定所へ御差出有之候万石以下知行鄕村帳之儀、隱居、家督、小普請入、頭替、名替等之節ハ、帳面相改、引替相違無之分ハ、其段屆書、一箇年ニ兩度ツヽ御差出之處、相違無之分ハ、向後兩度宛之不及御屆、知行高之內、入狂ひ有之候歟、又ハ隱居、家督、小普請入、頭替り、名替等之節計、是迄之通、帳面御改、御引替有之候樣存候、右ハ松平左近將監〇老中殿へ伺之上、及御通達候、但組中へも御達有之候樣致度候、以上、

〔柳營沙汰書三〕慶應三年四月二十三日

周防守殿〇老中松平康直　兩御目附江

萬石以下地方取之面々、巳ヨリ去寅迄十箇年、物成書付早々差出候樣可被致候、最支配向之分ハ其頭支配ニテ取集、一同御勘定奉行江可被達候、

右之趣、向々江可被達候事、

〔營中御日記〕寬永二年七月十七日、今度知行取之面々、御朱印改被仰出、新田開發地、何程にても可出旨、諸物頭へ老中傳上意之趣云々

〔勘定所條例二〕知行割之覺書

覺

一何方も知行悪敷持成候地頭へハ、一往も二往も理候而、其上悪敷持候人をバ、可ㇾ申二上之一、幷明知行之儀も、其觸口之役人請取、其撰寄代官可二申付一事、〇中略

慶長十四年酉二月二日

〔敎令類纂初集五十九〕寛永十九壬午年五月

一大御番頭、御小姓組番頭、御書院二番頭一、小十人組頭、御歩行頭、御旗奉行、御鎗奉行、御弓鐵炮頭、其外諸役人、依ㇾ召登城候、是在々所々、土民令二困窮一之旨達二御聞一、右之面々、幷組中共、御知行被二下置一族ハ、交替ニ考二遠近一在所へ相越、仕置等可二申付一之旨仰之趣、伊豆守、〇松平信綱豐後守、〇阿部忠秋對馬守、〇阿部重次民部少輔、〇朽木稙綱傳ㇾ之、

〔憲敎類典二ノ八下御家人〕元祿辛未年〇四年四月廿六日

覺

一御留守居與力　大御番與力　御書院與力　江戸町與力
禁裏附與力　百人組與力　御先手與力同心　御留守居番與力
西丸御留守居同心　二丸御留守居同心　御寶藏番同心　御鐵炮玉藥同心
御鷹師同心

右地方知行取來候者共、少給ニ而は、百姓致二こんきふ一候沙汰有ㇾ之付而、今度遂二吟味一候所、從二先規一わけ有ㇾ之、地方拜領之筋目も有ㇾ之候、依ㇾ之前々之通、領知被二下置一候間、彌百姓こんきふ不ㇾ仕、領知地方ニ可二申付一候由、右頭中江可二相達一候、以上、

四月廿六日

〔勘定所二條例一二〕元祿九子年

古事類苑

封祿部八

知行

知行ハ家祿ニシテ、釆地ヲ領スルヲ謂フ、徳川幕府ノ制、萬石以上ハ大名ト稱シ、釆地ヲ領地ト云フ、萬石以下ハ土地ヲ領有シ、貢賦ヲ徴收スル事、大名ニ異ナラザレドモ、其釆地ヲ知行ト云フ、其一石ノ地ノ貢賦ハ、一俵即チ三斗五升ニシテ、是ヲ三ツ五分ノ物成(モノナリ)ト云ヒテ、物成ノ通則トス、物成トハ貢賦ヲ云フナリ、高百石ト稱スル者ハ、其貢賦百俵、即チ三十五石ナリ、然レドモ其中ニハ四ツ物成ナルモアリ、三ツ物成ナルモアリテ、各村必シモ一定セザリシナリ、其知行ヲ給スルニ、物成ノ高キ地ト、低キ地トヲ通計シテ、三ツ五分ノ通則ニ合スルアリ、之ヲ物成詰(モノナリヅメ)ト云フ、又知行高ニ不足アル時、之ヲ補フニ他村ノ地若干ヲ以テシ、其物成ノミヲ收ムルアリ、之ヲ越石(コシコク)ト云ヒ、物成ノ高キ地ヨリ低キ地ニ轉ズル時ニ、其不足ヲ補給スルヲ込高(コミダカ)ト云ヒ物成ノ低キ地ヨリ高キ地ニ轉ズル時ニ、其剩餘セシ者ヲ延高(ノベダカ)ト云フ、而シテ物成ノ事ハ、政治部下編ノ田租篇ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔經濟錄五食貨〕凡士以上ハ、田祿有者也、田祿トハ、君ヨリ田地ヲ賜ハル也、今世ニ知行ト云是也、知行トハ、其田地ヲ己ガ物トナシテ、其事ヲ知行スル故ノ名目也、去バ知行ト云ハ、必土地也、今世ニハ、小祿ノ者ハ廩米ヲ取テ、土地ナキ者モアレドモ、土地有者に准ジテ之ヲモ知行ト云、

〔教令類纂初集五十九〕慶長十四己酉年二月

仕丁

〇〔延喜式二十三民部〕凡大宰府充仕丁者、帥卅人、大貳廿人、少貳十二人、大小監各八人、主神、主工、大小典、博士、明法博士、主厨各六人、音博士、陰陽師、醫師、算師、主船各五人、大唐通事四人、史生、新羅譯語、弩師、傔仗各三人、府衞四人、學授二人、藏司二人、稅倉二人、藥司一人、匠司一人、修理器仗所一人、守客館一人、守辰六人、守驛館一人、儲料廿人、並准諸國事力、其食皆充庸米、若有仕丁情願酬傭者、並以黑綿卅斤爲限、不得因此過收、其香椎宮守戶一烟、藥園驅使廿人、主船一百九十七人、厨戶三百九十六烟、

〔山槐紀〕元曆元年十一月十日、左兵衞督實綱云、我爲三位中將之間、雨皮不令持退紅仕丁、雨皮持令著白張、是嚴閤左相府〇藤原經宗令諷諫也、任中納言實令持退紅仕丁、聞此事新衞中納言定能曰、故堀川宰相賴定被申云、同依左相府御諷諫、暫雖不令持退紅仕丁、傍輩相公皆令持退紅仕丁、我獨無此事、仍後々用退紅、

〇按ズルニ、仕丁ノ事ハ、政治部丁役篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

事力副丁

苦、流離他境、雖加撫育、去多歸少、望請准畿內例、差充丁徭、以慰窮弊、至是太政官處分依請、
〔延喜式 民部 二十二〕凡國司事力皆充副丁、人別六人、
〔政事要略 交替雜事 五十九〕民部省符定諸國事力副丁事
右衞士仕丁離土在京、以免調庸、更充食粮、兼給副丁五人、以爲遠資、至于事力、不去鄉國、量其勞逸、理難一同、宜充副丁四人、永爲恒例、
以前被太政官去閏正月三日符偁、造式所起請具件如右、大納言正三位兼行左近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅、宜附所司施行者、省宜承知依宜行之者、諸國承知依件行之、
弘仁十年二月廿三日 〇十年恐十一年誤、閏正月在十一年、
民部省符
應加增衞士仕丁事力副丁事
衞士仕丁七人半、元五人、今加二人、〇二人下恐脫半字、 國司事力六人、元四人、今加二人、
右被太政官今月七日符偁、得出雲國解偁、百姓之徭卅日爲限、而貞觀六年正月九日格、改定廿日、事力所使已違格旨、何者立丁副四人、一年役百卅日、立丁調分廿日、庸分十日、徭分廿日、副丁四人、徭分八十日、而總責立丁一人、令驅使三百六十日、今撿案內、所乘之日二百卅日、黎元之弊莫過斯甚、夫百姓之徭、國吏所行、然而被拘式文、不得輙加、望請加增副丁、將省民弊、謹請官裁者、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅、件 〇件上恐脫依字、 准加、自餘諸國亦宜准此者、省宜承知依宜行之、立爲恒例者、諸國宜承知依件行之、
貞觀十年十一月十六日

收課錢

〔續日本紀 八 元正〕養老五年六月乙酉、詔曰、〇中略 隨令給事力、不得遠役他致使艱辛、若有收課、一月三十錢、

云々、又陸奥國元來國司鎭官等各以公廨作差、令舂米四千餘斛、雇人運送、以充年粮、雖因准年久、於法無據、但邊要之事頗異中國、何者苅田以北近郡、口支軍粮、信夫以南遠郡稻給公廨、其去國府二三百里、於城柵七八百里、事力之力不可舂運、若勘當停止、必致飢餓、請給舂運功、爲例行之、並許之、

按察使

〔續日本紀八元正〕養老五年六月乙酉、太政官奏言、國郡官人、漁獵黎元、擾亂朝憲、故置按察使、糺彈非違、肅清奸詐、既定官位、宜有料祿、請以按察使准正五位官、賜祿幷公廨田六町仕丁五人、記事准正七位官、祿幷公廨田二町仕丁二人、幷折留調物便給之、詔曰、朕之肱股、民之父母、獨在按察、寄重務繁、與群臣異、加祿一倍、便以當土物准度給之、○又見類聚三代格十五、

遣唐使兼國

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應給遣唐使等兼國事力事

右撿案內、太政官去延曆廿一年六月廿七日、下民部省符偁、太政官去寶龜七年九月十五日、下同省符偁、使人兼國、爲優其身、宜給職田、以助家業、但事力徵功、於事不穩、身不直國、不可充行者、右大臣宣、件人等奉使絶域、遙陟滄波、惟其嶮難、事須優賞、宜給事力、一同見任者、今被右大臣宣偁、宜准延曆例給之、

承和元年八月廿日

免課役

〔令義解三賦役〕凡舍人、○中略事力、○中略並免徭役、

〔延喜式二十五主計〕凡勘大帳者（中略）事力（中略）爲見不輸、○下略

以雜徭而役

〔續日本後紀二仁明〕天長十年六月乙酉、因幡國言、百姓之徭卅日爲限、至于事力、竟年驅使、比之平民、受弊殊重、請停差調丁、驅使徭人、許之、

〔三代實錄四十七光孝〕仁和元年三月五日庚申、先是陸奥國解偁、國司事力、須依國例、載大帳、立丁見不輸色、而此徭丁宛給例用之外、猶有留郡之丁稱不輸者、卽此公損也、事力、立丁、爲民之重役、黔首不堪、其

右造式所起請云、頃年國司到任所後、未勘知前、申請官符、規要留京、量其本情、無有他計、爲貪事力及公廨田、徒損公家、還潤私門、論之政途、甚無謂、伏望如此輩、永停宛給、以絕奸慮、但別有仰事、暫被徵召、未經一年、歸於國者、不在此限者、從三位大納言兼左近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十二年十二月廿五日

〔延喜式 民部 二十二〕凡國司已下、到任之徒、留京者停給事力幷公廨田、但殊被徵召、未經一年歸國者、不在此限、〇中略

凡志摩國司、不充事力、其職田五町、以伊勢國田給之、

國博士 醫師

〔續日本紀 稱德 二十七〕天平神護二年五月乙丑、太政官奏曰、准令諸國史生博士醫師、國無大小一立定數、但據神龜五年八月九日格、史生之員隨國大小各有等差、其博士者總三四國一人、醫師者每國一人、〇中略 朝議平章博士總國一依前格、醫師兼任更建新例、職田事力公廨之類並給正國、不給兼處、有料之國名爲正任、無料之國名爲兼任、〇中略 庶令經術之士周遍宣揚、功勞之人普蒙霑潤、奏可、

鎭守府

〔享祿本類聚三代格 六〕乾政官謹奏

陸奥國鎭守府給公廨事力事

將軍 准守　將監 准掾　將曹 准目

若帶國者不須兼給

右件府官人、離家遠任、理須矜恤、伏請自今以後、准件並給、臣等商量如前、伏聽勅裁、謹以申聞、謹奏、奉勅依奏、

天平寶字三年七月廿三日

〔類聚國史 八十四 政理〕弘仁元年五月壬子、東山道觀察使正四位下兼陸奥出羽按察使藤原朝臣緒嗣言

左大臣宣、奉レ勅、依レ請、四畿內同准レ此、

天長二年閏七月廿二日

〔享祿本類聚三代格 六〕太政官符應レ定ニ新置介掾公廨田事力分法一事

甲斐　能登　丹後　石見　周防　長門　土佐　日向

右八箇國介、公廨四分、公廨田一丁六段、事力五人、

飛驒

右一國掾、公廨三分、公廨田一丁三段、事力四人、

以前得ニ能登國解一偁、被ニ太政官去年六月二日符一偁、依ニ太政官去三月九日奏、新置ニ介員一、延暦十二年二月十五日格云、和泉、伊豆、甲斐、安房、能登、石見、周防、淡路、阿波、土左等國司公廨、守五分、掾三分、又案ニ令云、公廨田、大國守二丁六段、上國守大國介二丁二段、中國守上國介二丁、下國守大上國掾一丁六段、中國掾大上國目一丁二段、中下國目一丁、軍防令云、給ニ事力一、大國守八人、上國守大國介七人、中國守上國介六人、下國守大上國掾五人、中國掾大上國目四人、中下國目三人者、案ニ件格令一、未レ見ニ中國介之分法一、謹請ニ官裁一者、官判、新置ニ介掾一、諸國宜同依レ件行レ之、

貞觀八年三月七日

〔三代實錄 十二 清和〕貞觀八年三月七日癸未、太政官判定、新置ニ介掾一諸國公廨田事力數一、甲斐、能登、丹後、石見、周防、長門、土佐、日向八箇國介、給ニ公廨四分、公廨田一町六段、事力五人一、飛驒一國掾、公廨三分、公廨田一町二段、事力四人、　閏三月五日庚戌、加賀國司言、居ニ住國內一之輩、便任ニ國司一、幷士民爲ニ博士醫師一者、二箇年間不レ給ニ事力一、勅許レ之、但得試之人不レ在ニ此限一、

〔享祿本類聚三代格 六〕太政官符

一可レ停レ給ニ國司已下到レ任之後留レ京者事力公廨田一事

○按ズルニ、事力ヲ運送ストハ、事力ノ課ヲ收メテ運送スルナリ、

〔日本後紀五桓武〕延暦十六年二月壬申、是日停給畿內國司事力幷職田、

〔類聚國史八十四政理〕延暦十七年正月甲辰云々、停止公廨、一混正稅利、置國儲及國司俸、又定書生及事力數、停公廨田、

〔日本紀略桓武〕延暦十九年八月丁亥、依舊更置國司公廨田、

〔令集解十二〕古記云、公廨田不輸租、問、國司公廨田以誰人作、役事力作也、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應停畿內諸國事力事

右得當道觀察使左大辨從四位上兼行右衞門督藤原朝臣緒嗣奏偁、撿令前世之時、未有公廨、特充事力、以優國司、天平十七年、始置公廨、利潤已給、理須停止、延暦十六年、依給俸料、畿內事力、一切停止、至于廿年、停給俸料、公廨事力、並依舊例、優厚倍重、至今遵行、但畿內諸國近棲〇棲恐接誤都下、雖事調徭、無輸庸物、比於他國、良以爲輕、而百姓困弊、未期家給、尋其所由、實在臨時差科繁多、徭丁數少、今國司等公廨有潤、兼蒙營田、望請停給事力、支用雜役、然則公途得濟、私門無乏、謹請處分者、被右大臣宣、奉勅、依請、

大同三年二月五日

太政官符

應國司停作田給事力事

右得河內國解偁、撿案內、太政官去延暦三年十一月三日下諸國符偁、國司等多營田園、妨民農業、凋弊之源、職斯之由、宜加禁制、不得使然者、而至于大同二年七月廿四日下符、畿內特聽作田、不給事力、在今商量、營田之煩、觸事多妨、望請准據舊例、停止作田、被給事力、但以徭均使、不損貢賦、謹請官裁者、

大宰府諸國司國師

ハ、陸奧國モ之ニ倣ヘリ、是ヨリ先ニ畿內ニテハ、既ニ雜徭ニテ役セシナリ、又元明天皇ノ養老五年ニハ、一月ニ錢三十文ヲ其主ニ納レテ、課ヲ免ル、ノ法ヲ立テタリ、

〔令義解五軍防〕凡大宰及國司、並給事力、帥廿人、大貳十四人、少貳十人、大監、少監、大判事六人、大工、少判事、大典、防人正、主神、博士五人、少典、陰陽師、醫師少工、算師、主船、主厨、防人佑四人、諸令史三人、史生二人、大國守八人、上國守大國介七人、中國守上國介六人、下國守大上國掾五人、中國掾、大上國目四人、中下國目三人、史生如前、一年一替、皆取上等戶內丁、謂中以上戶也、並不得收庸、

〔通典三十五職官〕北齊官秩、〇中略自一品以下、至流外勳品、各給事力、一品至三十人、下流外勳品或以五人爲等、或以四人三人二人一人爲等、繁者加一等、平者守本力、間者降一等、〇中略大唐、〇中略凡諸親王府屬並給士力、數如白直、其防閤、庶僕、白直、士力、納課者、每年不過二千五百、

〔延喜式二十二民部〕凡遙授國司、不給公廨田幷事力、

〔類聚三代格五〕勅、給傔仗者、大宰帥八人、大貳四人、其事力及料田、幷考選並准史生例、

和銅元年三月廿二日

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月乙卯、勅大宰府帥大貳、幷三關及尾張守等、始給傔仗、其員帥八人、大貳及尾張守四人、三關國守二人、其考選事力及公廨田、並准史生、〇又見職員令集解　二年六月癸丑、勅、自大宰率已下、至于品官、事力半減、唯薩摩多褹兩國司、及國師僧等、不在減例、

〔續日本紀七元正〕靈龜二年八月壬子、大宰府言、帥以下事力、依和銅二年六月十七日符、各減半給、綿自此以來、驅使丁乏、凡諸屬官、並爲辛苦、請停綿給丁、欲得存濟、許之、

〔續日本紀十二聖武〕天平八年五月丙申、先是有勅、諸國司等除公廨田事力借貸之外、不得運送者、大宰管內諸國已蒙處分訖、但府官人者任在邊要、祿同京官、因此別給仕丁公廨稻、亦漕送之物色數立限、又一任之內不得交關所部、但買衣食者聽之、

從七位下刑部宿禰助國　從七位下巨勢朝臣眞松
右得從二位行中納言兼大宰權帥藤原朝臣隆家去三月八日奏狀偁、隨身依例所請如件者、左大臣宣、奉勅依請者、府宜承知給各食一具馬一疋者、路次之國亦宜准此、符到奉行、
右少辨藤原朝臣　　　左大史但波朝臣
長和四年四月七日

請被下宣旨左右近衞左右兵衞等府各令差進隨身依交名給官符狀
右依代々例每府各二人所請如件
長元二年六月十九日　　從二位行權中納言兼宮內卿大宰權帥源朝臣道方

〔日本書紀孝德二十五〕大化元年八月庚子、拜東國等國司、〇中略其長官從者九人、次官從者七人、主典從者五人、

事力　仕丁併入

事力ハ外官ニ賜ヒテ、驅使ニ供スル所ニシテ、大宰帥ヨリ國史生、博士、國師、醫師、傔仗等ニ至ルマデ、各等差アリ、故ニ公廨田モ之ヲシテ營作セシムルナリ、但シ遙授國司ニハ給セズ、倘ホ國司ノ事力ニハ沿革アリ、

事力ハ土人ノ中ニテ、中戶以上ノ丁ヲ取リ、課役ヲ免シ一年ニ一替ス、然ルニ平民ニ比スルニ、勞苦殊ニ甚シキヲ以テ、後ニハ人別ニ副丁ヲ充テ、其徭分稻ヲ以テ資用ニ供シタリ、是謂ユル養物ナリ、而シテ副丁ニ對シテ役ニ就ク者ヲ立丁ト云ヘリ、又仁明天皇ノ天長十年ニハ、因幡國ニテハ課役ヲ免ジテ役スルノ制ヲ改メ、雜徭ヲ以テ役シ、光孝天皇ノ仁和元年ニ

隨身

右得東山道觀察使正四位下兼行陸奥出羽按察使藤原朝臣緒嗣解偁、天平五年十一月十四日勅符偁、給國司以下軍毅以上護身兵士守八人、介六人、掾五人、目三人、但遣鎮奥塞者、守十人、介八人、掾七人、目五人、史生傔仗各三人、大少毅各二人者、今撿此符、不預鎮官、請□□之將、賜護身之兵者、被右大臣宣偁、奉勅、依請、其按察使准此給十人、

大同五年五月十一日

〔名目抄院中〕御隨身上﨟六人左右府生、左右官人、左右番長、左右近衛各三人、是兵仗儀也、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

御隨身主人進請文、依宣旨仰近衛兵衛、令進差文、次賜官符、四府各二人、合八人、内印、

〔類聚符宣抄七〕太政官符大宰府

應給左右近衛左右兵衛合捌人食馬事

左近衛物部親忠　上毛野宗延　右近衛海守富　秦松吉　左兵衛榎本千長　紀延滋　右兵衛土師延國　倭文武依

右正三位行中納言兼帥平朝臣惟仲隨身如件者、左大臣宣、奉勅、宜給各食一具馬一疋者、府宜承知依宣行之、路次之國、亦宜准此、符到奉行、

右大辨藤原朝臣　左大史小槻宿禰

長保三年五月廿九日

太政官符大宰府

應給左右近衛左右兵衛等合八人事

左近衛從七位下紀朝臣爲武　從七位下出雲宿禰國重　右近衛從七位下刑部宿禰助高　從七位下上毛野朝臣吉方　左兵衛從七位下伴宿禰如近　從七位下伴宿禰明武　右兵衛

停傔仗

〔日本紀略 村上 三〕天曆元年八月五日丙戌、左大臣候御前、俄行除目、出羽介平齊章、申請傔仗二人任之、

〔日本紀略 桓武〕延曆十七年二月壬戌、停近江守傔仗、

〔類聚三代格 五〕太政官符

　應停止遙授陸奧出羽按察使大宰帥等傔仗事

右中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、遙授官員、不赴州府、凡其傔仗於事無益、自今以後宜從停止、

　寛平七年十一月七日

傔從

〔延喜式 二十六 主稅〕凡大宰及國司巡行部內者、帥傔從十人、貳六人、監以下三人、史生一人、

○

仗身

〔續日本紀 八 元正〕養老三年十二月庚寅、五位已上家、補事業、防閤、仗身、自是始矣

〔東大寺正倉院文書 九〕右京三條三坊

戶主衣田連福德戶手實　天平五年 ○中略

　今年計帳見定良賤大小口貳拾人

　　不課貳拾人

　　　男漆人 ○一人丈身 下略

〔南史 四十六〕周山圖、字季寂、義興義鄉人也、○中略 圖於新林立墅舍、晨夜往還、上 ○宋武帝 謂曰、卿罷萬人都督、而輕行郊外、自今往墅、可以仗身自隨、以備不虞、

〔通典 三十五 職官〕大唐 ○中略 調露元年九月、職事五品以上者、准舊給仗身、

護身

〔享祿本類聚三代格 十八〕太政官符

一應給鎭官護身事 二箇條內初條

右依二代々例一所レ請如レ件

長元二年六月十九日　　從二位行權中納言兼宮內卿大宰權帥源朝臣道方

〔爲房卿記〕嘉保二年七月二十二日乙卯、雞鳴帥卿〇源經信被二進發一、〇中略儀仗八人前行隨身八人移馬、半夜引二向山崎一之間、已以口之輿厩所爲也、帥冠直衣駕二檳榔毛一、去夕自二大殿一〇藤原師實遣二御車幷御牛一、娘達被レ乘レ之、已剋著二鋼戶院一、件所都督領所也、主計頭道言我領所示レ可レ憚之由、帥被レ申者、故賚通大貳進發之後、宿二州仲村庄一、是又同事也者、

陸奧守

〔類聚三代格五〕定二陸奧國官員一事〇中略

守儀仗二人〇中略

延曆十七年六月廿八日

〔奧州後三年記上〕國司の郎等に、〇中略儀仗助兼といふ者あり、

〔吾妻鏡六〕文治二年三月廿七日乙巳、北條殿已欲レ進二發關東一、仍爲レ警二衞洛中一、撰二定勇士一、被レ差二置之一、其交名注二載折紙一、所レ付二進帥中納言一也、

注進京留人々

合

平六儀仗時定　　梓乃新大夫〇下略

出羽守介

〔類聚三代格五〕太政官符

應レ置二出羽守儀仗二員一事

右陸奧出羽邊要之地、獷俗難レ馴、古來有稱、而陸奧守殊給二儀仗一、出羽守獨無二其員一、兵革之事、先レ聲後實縱有二警急一、何以威レ之、被二大納言正三位兼行右近衞大將良峯朝臣安世宣一偁、奉レ勅、宜レ准二陸奧之例一補レ之、

天長五年四月十四日

正六位上菅野朝臣邦隨　正六位上菅乃朝臣通利　正六位上中臣朝臣延親
正六位上石作朝臣眞親　正六位上多治朝臣盛文　正六位上算部朝臣元信
正六位上文室朝臣佐親　正六位上伴朝臣盛武

右得正三位行中納言兼大宰帥平朝臣惟仲去二月廿九日奏狀偁、依例所請如件者、左大臣宣、奉勅、依請者、省宜承知依宜行之、符到奉行、

右大辨藤原朝臣　左大史小槻宿禰

長保三年五月廿九日　〇中略

太政官符式部省（先以官符給式部之後、以彼省符任、今作任符請內印云々）

應給傔仗八人事（此一人漏符案）

正六位上藤原朝臣惟恒　正六位上平朝臣齊國　正六位上平朝臣致友
正六位上菅原朝臣友頼　正六位上藤原朝臣爲成　正六位上藤原朝臣時佐
正六位上藤原朝臣如孝

右得從二位行中納言兼大宰權帥藤原朝臣隆家去三月八日奏狀偁、傔仗依例所請如件者、左大臣宣、奉勅依請者、省宜承知依宜行之、符到奉行、

右少辨藤原朝臣　左大史但波朝臣

長和四年四月七日

請被下宣旨補任傔仗八人狀

正六位上藤原朝臣重枝　正六位上藤原朝臣行良　正六位上藤原朝臣佐高
正六位上藤原朝臣時通　正六位上橘朝臣公通　正六位上源朝臣成經
正六位上紀朝臣清澄　正六位上紀朝臣公則

弘仁三年四月七日〇中略

太政官符

應補鎭守將軍傔仗事

右得式部省解偁、補傔仗者、此省所掌、夫文武分職、執掌殊貫、鎭守將軍、兵部所任、傔仗隨則彼省可補、而被拘式旨、此省獨補、論之理致、可謂相違、望請件傔仗令兵部省補、然則各守其局、不爲違越、謹請官裁者、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿藤原朝臣良房宣、奉勅依請、

承和十四年閏三月廿五日

〔朝野群載二十二諸國雜事〕任鎭守府傔仗

太政官符　陸奥國司幷鎭守府

正六位上文屋眞人季延　正六位上道公方行

右去四月十九日、任鎭守府將軍從五位下源朝臣信孝傔仗畢、國府宜承知、符到奉行、

右中辨源朝臣保光　　左少史吉志宿禰

康保二年五月廿五日

大宰帥
大貳
三關國守
尾張守

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月乙卯〇二十二日勅、大宰府帥、大貳、幷三關、及尾張守等、始給傔仗、其員帥八人、大貳及尾張守四人、三關國守二人、其考選事力、及公廨田並准史生、

〔類聚三代格五〕勅、給傔仗者、大宰帥八人、大貳四人、其事力及料田、幷考選並准史生例、

和銅元年三月廿二日

〔續日本紀四元明〕和銅元年五月庚戌、給近江國傔仗二人、

〔類聚符宣抄七〕太政官符式部省

應給傔仗捌人事

總管節度使

〔續日本紀 十一聖武〕天平三年十一月癸酉、制、○中略給大總管傔仗十人、副總管六人、鎭撫使三位隨身四人、四位二人、並負持弓箭、朝夕祗承、隨主願充、令得入考、總管如有緣事入部者、聽從騎兵三十匹、

〔續日本紀 十一聖武〕天平四年八月壬辰、勅、○中略節度使○。已下傔人已上、並令佩劒、

〔續日本紀 二十四淳仁〕天平寶字七年正月庚戌、賜國王○渤海及使傔人已上祿、亦有差、

〔通雅 二十四文職〕唐制、大使副使皆有傔苦念切人、別奏大使傔二十五人、河西節度崔希逸、襲破吐蕃于青海、會希逸傔人孫誨入奏事、說文新附曰、傔從人、類篇曰、侍從也、

按察使鎭守府將軍

〔延喜式 二十八兵部〕凡鎭守將軍傔仗二人、並補入色人、若願將子者聽一人、

〔職原抄 下〕鎭守府○中略

傔仗二人

擇重代武士補之、將軍判授之官也、凡傔仗者、陸奧守同給二人、按察使給四人云々、

〔有職問答 一〕一職原抄に傔仗二人と其數候事

然に按察使四人を給と候、不審のよし候哉、按察使は別而四人給候事規模其分候に而候由被仰出候キ、其分候哉、

〔北山抄 六備忘略記〕鎭守府將軍傔仗事

上卿奉勅、官符給兵部、

〔類聚三代格 五〕太政官符

加減傔仗員事

陸奧出羽按察使四人 元三人、今加一人、

鎭守將軍三人 減一人、定二人、

右被右大臣宣偁、奉勅、傔仗之數、依件加減、

〔續日本紀聖武十〕神龜五年三月甲子、勅、京官文武職事、五位以上、給防閤者、人疲道路、身逃差課、公私同費、彼此共損、自今以後不須更然、其有官人重名特給馬料、給式有差、事並在格、

名稱
制度

傔仗 仗身 從者 併入 護身 隨身

傔仗トハ、帶仗シテ傔從スルノ義ニテ、總管、節度使、按察使、鎭守府將軍、大宰帥大貳、三關國、陸奧出羽ノ國守等ニ賜フ所ナリ、但シ遙授ニハ給セズ、サテ傔仗ハ式部ニテ判補シ、事力、公廨田ヲ賜ハリ、考選ニ預ルコト、一ニ國ノ史生ノ例ニ準ズ、而シテ輙ク白丁ヲ取ルコトヲ得ズ若シ子ヲ以テ補セント請フトキハ、一人ヲ取ルヲ聽ス、但シ鎭守府ノ傔仗ハ兵部ニテ判補セシガ、後ニハ將軍判授ノ職ト爲レリ、又傔仗ヲ傔人ト云ヒシ例モアレド、傔人ハ多クハ將從ノ事ヲ云ヘリ、將從ハ從者ノ帶仗セザル者ナリ、

又元正天皇ノ養老五年ニハ、五位以上ノ家ニ仗身ヲ補セシコトアリ、仗身ハ亦傔仗ノ類ニシテ護衛ノ官ナリ、

又陸奧國司、及ビ鎭守府官ニ、護身兵ヲ給セシ事アリテ、史生、傔仗、郡司ニモ賜ヘリ、

〔伊呂波字類抄計疊字〕傔仗

〔續日本紀元正八〕養老二年五月甲辰、禁三關、及大宰、陸奧等國司傔仗取白丁、

〔續日本紀聖武十〕天平元年五月庚戌、太政官處分、准令諸國史生及傔仗等、式部判補、赴任之日、例下省符、符內仍偁關司勘過、自非辨官、不合此語、自今以後補任已訖、具注交名、申送辨官、更造符乃下諸國、

〔延喜式式部十八〕凡大宰帥、大貳、幷陸奧出羽按察使及守等傔仗者、申太政官補之、不得輙取白丁、若情願以子補之者聽取一人、但身不赴任者不給之、

年三月辛未、勅給右大臣從二位長屋王、帶刀資人十人、中納言從三位巨勢朝臣邑治、大伴宿禰旅人、藤原朝臣武智麻呂各四人、其考選一准職分資人、

〔扶桑略記（六聖武）〕天平六年三月八日、中納言以上、賜帶仗資人、

〔續日本紀（二十二淳仁）〕天平寶字三年十一月壬辰、勅、益大保從二位藤原惠美朝臣押勝、帶刀資人卄人、通前卅人、

〔續日本紀（二十四淳仁）〕天平寶字六年五月丙午、賜大師正一位藤原惠美朝臣押勝、帶刀資人六十人、通前一百人、其夏冬衣服者官給之、

雜載

〔律（名例）〕八虐（○中略）

八曰、不義、（謂殺本主本國守見受業師、（本主者、依令、親王及五位以上得帳內資人、於所事之主、名爲本主、））

〔令義解（九喪葬）〕凡服紀者、爲君（謂天子也）父母及夫本主（謂其文學家令等、不在此限也、）一年、

〔西宮記（臨時一）〕諸宣旨（○中略）

同（○康保三）四二、與侍藤原賜資人代叙三位、

○

防閤

〔續日本紀（八元正）〕養老三年十二月庚寅、五位以上家、補事業、防閤、仗身、自是始矣、

〔唐六典（三戶部）〕凡京司文武職事官皆有防閤、一品九十六人、二品七十二人、三品三十八人、四品三十二人、五品二十四人、六品給庶僕十二人、七品八人、八品三人、九品二人、公主邑士八十人、郡主六十人、縣主四十人、特封縣（○下脫主字）三十四人、

京官任兩職者從多

凡諸親王府屬並給士力、其品數如白直、

其防閤、庶僕、白直、士力、納課者每年不過二千五百、執衣不過一千文、

決罰法

〔令義解六儀制〕凡帳內資人、雖有蔭位、不稱本主者、杖罪以下、本主任決、(四位以下、唯得決笞、)

入道後資人

〔續日本紀八元正〕養老五年五月乙丑、正三位縣犬養宿禰三千代、緣入道辭食封資人、優詔不聽、

〔延喜式十八式部〕凡親王以下五位以上出家入道、其帳內資人考滿六年留省、若還俗幷敍位、以舊人充之、舊人若遷他色、以新人充之、

歿後帳內資人

〔續日本紀十一聖武〕天平五年正月庚戌、內命婦正三位縣犬養橘宿禰三千代薨、　十二月辛酉、別勅莫收食封資人、

〔續修東大寺正倉院文書四十五〕北大家經寫所啓

請奉經四帙(大般若經〇中略)

天平十一年五月十八日　資人石村布勢麻呂

〇按ズルニ、北大家ハ藤原房前ナリ、天平九年ニ薨ゼリ、此其歿後ニ係レリ、

〔續修東大寺正倉院文書九〕計帳斷簡

戶主大友但波史族廣麻呂、年卅七、　正丁、藤原卿資人、

〇按ズルニ、此帳年月逸セリ、然レドモ帳中載スル所ノ廣麻呂ノ弟吉備麻呂ノ歲ヲ以テ、之ヲ天平二年ノ計帳ニ照シテ、神龜二年タルヲ知ル、藤原卿ハ不比等ナルベシ、此歲其歿日ヲ去ルコト四年ナリ、

〔續日本紀十聖武〕神龜四年閏九月丁卯、皇子誕生焉、　十月甲戌、王臣以下至(〇中略)太政大臣家(〇故藤原不比等)資人、女孺、賜祿各有差、

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年七月丁丑、故三品中務卿伊豫親王、故從三位夫人藤原吉子復位號、帳內資人亦依法行之、

授刀資人

〔續日本紀八元正〕養老四年三月甲子、有勅特加右大臣正二位藤原朝臣不比等授刀資人三十人、　五

解免法

ニ三穗麻呂ニ作ル、北宮ハ長屋王ナラン、和銅五年ノ寫經徵スベシ宮ト稱シ帳內ヲ賜フハ、遇スルニ親王ノ禮ヲ以テセシナラン、左大臣モ亦長屋王ナリ、是レ職分ニ係ル、且臣ハ朝臣ナリ、阿倍朝臣ハ首名ナラン、慶雲三年ニ大宰少貳ト爲レリ、

〔本朝文粹 二 意見封事〕意見十二箇條　善相公 清行 ○中略

一請置諸國勘籍人定數事

右謹檢案內、三宮舍人、諸親王帳內資人、諸大夫命婦、位分資人、諸司勘籍人、諸衞府舍人、式兵二省載季符者、一年四季之內、稍及三千人、又略計本朝課丁、除五畿內、陸奧、出羽兩國、及宰九箇國之外、不滿卅萬人、就中大宰是無有身、然則見課丁纔有十餘萬人、今十餘萬人中、每年除三千人之課役、傍薄而論之、未盈四十年、天下之人皆可爲不課之民、○中略 或難云、三宮舍人、帳內位分資人等、古來所充給也、然而累代鎰符、無有此妨、今至當時、何出異論、答云、凡諸勘籍人等符損符、鎰符、通計可載鎰符、具在式條、而今比年所下鎰符之損、百人之中無符鎰一人、又近古諸家、一得資人、無復改補、而比年補資人後即遷轉三宮及諸司內考、重復改請、於是三省史生書生等、因緣爲奸、或不觸本主、不依國解、僞稱勘籍、獨載季符、其尤甚者、本主未補一人、省底已盈其數、如此奸濫、日以加倍、公損之甚、無過於此、伏望件等勘籍人、隨國大小、每年立其定數、大國一年十人、上國七人、中國五人、小國二人、以載鎰符、此外不得加增一人、又舊例近江國一年免百人、丹波國免五十人、兩國凋殘職此之由、今須因准此例、近江國減定十人、丹波國減定七人、又勘籍解文、必二通進官、其一通留官底、一通加外題、即下式部省、省進季符之日、與官底解文勘合、然後請印、又鎰符所載多符損少符鎰者、勘返不得請印、但京戶五畿內不拘此制、冀也調庸易納、收宰無煩、

〔令義解 五 軍防〕凡帳內資人、癈疾應免仕者、謂不堪執事者皆是、不必癈疾以上也、皆申式部、勘驗知實聽替、謂未滿六年者還本貫、已滿者留省也、

戸主出雲臣嶋麻呂、年肆拾捌歳、　正丁、右頬黒子、從五位下大生部直美保萬呂資人、〇中略
戸主大初位上出雲臣筆戸〇中略
今年計帳定見良大小捌人男五、女三
不課口漆人舊六、新一
男肆人帳內一〇中略
戸主大初位上出雲臣筆〇中略
男大初位下出雲臣安麻呂、年肆拾貳歳、　正丁、眉黒子、北宮帳內、〇中略
戸主出雲臣文田戸〇中略
今年計帳定見良大小口拾玖人男九、女十、〇中略
不課口拾陸人舊
男陸人資人一〇中略
戸主出雲臣文田〇中略
男大初位下出雲臣忍人、年參拾陸歳、　正丁、左臂黒子、左大臣資人、〇中略
戸主出雲臣麻呂戸〇中略
今年計帳定見良賤大小口肆拾參人男十四、奴七、女十二、婢十、
不課口肆拾貳人舊卌、新二
男貳拾人資人一〇中略
戸主出雲臣麻呂〇中略
從父少初位下出雲臣沙美麻呂、年肆拾歳、　正丁、右手指黒子、阿倍旦臣筑紫資人
〇按ズルニ、太政大臣ハ藤原不比等ナランヽ其薨ハ此年ノ前五年ニアリ、美保萬呂、神龜元年紀

〔續日本紀 六元明〕和銅七年六月甲戌、太政官處分、職分資人、若本主亡、幷以理去官者、不限年遠近、並留省焉、如本主去官、亦有復任、以舊人充焉、

〔續日本紀 二十一淳仁〕天平寶字二年十二月丙寅、以式部散位四百人、蔭子位子、留省資人共二百人、兵部散位二百人、爲定額、與考、自餘額外情願輸錢續勞者、一依前格處分、

〔令義解 三賦役〕凡舍人、(中略)帳內、資人、(中略)並免徭役、

〔延喜式 二十五主計〕凡勘大帳者、(中略)依符所免爲符損、(中略)帳內資人(中略)爲不課、(下略)

〔續日本紀 七元正〕養老元年五月丙辰、詔曰、率土百姓浮浪四方、規避課役、遂仕王臣、或望資人、或求得度、王臣不經本屬、私自駈使、囑請國郡、遂成其志、因茲流宕(宕原作菪、據一本改、)天下、不歸鄉里、若有斯輩、輙私容止者、揆狀科罪、並如律令、

〔東大寺正倉院文書 十二〕山背國愛宕郡出雲鄉雲下里、神龜三年計帳、

戸主少初位上出雲臣廣足戸(中略)

今年計帳定見良大小口參拾貳人(男八 女廿四)

不課口貳拾漆人(舊十九 新八)

男參人(資人一 中略)

戸主少初位上出雲臣廣足(中略)

男出雲臣山村、年貳拾陸歲、 正丁、右耳下黑子、太政大臣家位分資人、(中略)

戸主出雲臣嶋麻呂戸(中略)

今年計帳定見良大小口捌人(男四 女四)

不課口捌人(舊七 新一)

男參人(資人 中略)

進二階、八考上進三階敍、

〔令義解 四考課〕凡內外初位以上長上官、計考前釐事、不滿二百卌日、分番不滿一百卌日、若帳內資人不滿二百日、並不考、〇中略

凡帳內及資人、每年本主、量其行能功過、立三等考第、恪勤不懈、淸廉稱主、爲上、祗承合意、（謂祗者敬也、承猶事也、）產業不怠、爲中、好請私假、數有愆失、（謂二事不相須、若有一者亦爲下、其相折之法、同分番條也、）爲下、

〔令集解 十七選敍〕慶雲三年格、帳內以六考爲限、職分資人亦同、

〔續日本紀 五元正〕和銅四年五月辛亥、制、帳內資人、雖名入式部、不在豫選之限、既敍位者許之、職分不在此例、唯聽帳內三分之一、資人四分之一、其雖敍位逗留方便違主失禮、卽追其位、還之本貫、若得他處位者不退焉、或本主亡者不得豫選、皆還本色、但欲廻入者聽、以外如令、

〔續日本紀 九元正〕養老六年閏四月乙丑、太政官奏曰、〇中略望請陸奧按察使管內百姓庸調浸免、〇中略其國授刀兵衞、衞士、及位子、帳內、資人、幷防閤、仕丁、采女、仕女、如此之類、皆悉放還、各從本色、若有得考者、以六年爲敍、一敍以後自依外考、〇中略奏可之、

〔續日本紀 十聖武〕神龜五年三月甲子、勅、補事業位分資人者、依養老三年十二月七日格、更無改張、雖然資人考選者、廻聽待滿八考始選當色、外位資人、十考成選、並任主情願、通取散位勳位子及庶人、簡試後請、請後犯罪者、披陳所司、推問得實、決杖一百、追奪位記、却還本色、〇中略餘依令、

〔續日本後紀 八仁明〕承和六年九月癸卯、制、選敍令、帳內資人者、並以八年爲限、神龜五年格、外五位資人十年成選、自今而後、外五位資人選限者、宜依令行之、唯神宮司、禰宜、祝、國造、外散位郡司及俘夷之類、不在此限、

留省資人

〔延喜式 十八式部〕凡職分資人、本主亡及以理去官者、不限年數並聽留省、若有復任者、廼以舊人充之、舊人若遷他色、以新人充之、

貢人不第者、貢擧之人罪何、答不可科罪者、然可案律、

〔令義解四選敍〕凡帳內資人等、本主亡者、朞年之後皆送式部、謂周忌之後月也、其考者主家授之、若本主犯罪除免者、不待朞年即追之也、若任職事者、即改入內位、謂隨任職事、即入內位、若任才伎長上者亦同、故上條云、伎術長上並同職事、其內位任外職事者、亦即改敍外位也、文云改入內位、即須毀先位、猶當免之人、後敍之位、與先位同階者、仍毀先位也、其雜色任用者、考滿之日、聽於內位敍、若無位者、未滿六年、皆還本貫、謂直云六年、不言六考、即知不問考之得否、唯計年數也、若廻宛帳內資人者、亦聽通計前勞、謂未還之前、使相廻宛者、若既還訖者、不在通計之限也、

〔令集解十七選敍〕釋云、朞年考者、主家考也、古記云、問朞年之後、未知其年考若爲處分、答如常得考耳○中略 凡稱帳內資人者、職分資人皆約不、答皆約者、穴云、問擧亡是一、未知去職之日職分資人何、答稱資人者、職分位分並同、去職者亦同此文也、朞年考得於本主家也、私於去職不待朞年、爲服一年故也、上件解述令志、但於今放格耳、○中略 釋云、未還本貫之間、便充帳內資人、不限當家他人也、既還本訖不更追充、古記云、亦聽通計前勞、還謂未還本貫人課役、縱本色雖多年更得成帳內資人者、前主考、後主考、通計聽成選也、一云、未還本貫之間、便充帳內資人者、聽通計也、還本土訖、後更求仕者非、何者本令若廻充帳內、親事謂祖父帳內便充子孫是也、跡云、廻充謂不限同家他人、廣充資人者皆是、但還本貫以後更補資人不計前勞、朱云、若廻充帳內資人者、亦聽通計前勞者、未知己私求充歟、爲當官司自充歟、答、

〔令義解四選敍〕凡帳內勞滿應敍、才堪理務、謂閑曉書筭、及知屬文、堪從政者是也、本主欲於內位敍者聽、

〔令集解十七選敍〕跡云、資人不合聽、○中略 釋云、才堪理務、不至貢擧之計○計恐科誤 者非也、或釋云、不至貢擧之科、資人不合、古記云、才堪理務、謂工書筭並知法令、唯不至貢擧之科也、問、時務與理務若爲別、答、大而言一、細而言別、何者理務謂必須書筭也、時務謂縱不便書計、臨時差遣公事勘濟也、朱云、堪理務何可知、答、○中略 釋云、師說云、已敍內位者、不得還主家、古記云、欲於內位敍者聽、謂猶仕本主也、

〔令義解四選敍〕凡敍舍人史生、兵衞、伴部、使部、及帳內資人、並以八考爲限、八考中進一階、四考中、四考上

貢擧考課敍位

射、相撲及膂力者、輙給王公卿相之宅、有詔搜索無人可進、自今以後不得更然、若有違者、國司追奪位記、仍解見任、郡司先加決罰、准勅解却、其誂求者以違勅罪罪之、但先充帳內資人者、不在此限、凡如此色人等、國郡預知、存意簡點、臨勅至日、卽時貢進、宜告內外咸使知聞、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年三月丙申、詔、○中略又伊勢美濃越前者、是守關之國也、宜其關國百姓及餘國有力之人、不可以充王臣資人、如有違犯、國司資人同科違勅之罪、

〔延喜式十八式部〕凡外散位六位、勳七等以下情願者、聽充帳內及職分資人、七位以下者、聽充位分資人、○中略

凡飛驒、陸奥、出羽、及大宰府所管諸國人、皆不得補帳內職分位分資人、亦陸奥人不聽補雜色、○中略

凡中宮春宮白丁舍人幷三色資人（○帳內及位分資人、職分資人、）者、以本貫勘籍解文補之、

〔令義解四選敍〕凡帳內資人等、才堪文武貢人者、（謂武人貢擧試條、幷敍法、不載令條、待式處分也、）亦聽貢擧、得第者於內位敍、（謂若本位先高者、改爲內位、卽位記多者、改其最高、其及留省之第者、考滿之日、乃敍內位也、）不第者各還本主、

〔令集解十七選敍〕古記云、才堪文武貢人者、未知武擧人試條幷敍法若爲、答武擧人考試法式、幷及第敍法、幷將出別式也、不限年之多少、謂依貢人條、凡貢人幷限年廿五以下、但帳內資人、縱年廿五以上聽貢擧、故云不限年之多少之也、朱云、帳內資人等者、未知等字意何若、○中略朱云、聽貢擧者、未知何人可擧、又不擧者科罪不、答雖不擧无罪、何者文稱聽字故也、知何人可擧哉何、○中略釋云、其位高於對策第者、改本位可敍內位、延暦四年格文也、跡云、无位人得第者敍內位、若本位高於第位者、卽改其本位、但前位記雖不毀、而仍不合用、凡外位住內職事者、皆卽改合授內位、穴云、得第者於內位敍、問、本位外八位可授初位者何、答改八位授於內八位耳、又問、本位初位以上、今明經出身上下以下而可留省、第者量止至考滿日敍內位耳、問改外八位敍內八位、未知先外位毀哉以否、答從獄令毀位記條論定耳、又問、自餘諸雜任以上出身者也、亦得入內哉、答、擧賤包貴明入內也、○中略朱云、問被

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

內外五位不合同等事〇中略

位分資人

右外正五位五人、外從五位四人、女亦同〇中略

奉勅、宜依前件永爲恒式、

神龜五年三月廿八日

〔日本後紀十二桓武〕延暦廿三年九月甲午、式部省言、〇中略案去延暦廿一年九月廿三日格云、親王內親王並年滿四歲始充帳內者、今親王內親王、或年未成人、或不便文筆、至經官司若爲申牒、〇下略

〔令義解四選敍〕凡任官、〇中略帳內資人等、式部判補、

〔令義解五軍防〕凡帳內、取六位以下子及庶人爲之、謂內六位以下子、不論嫡庶、何者下文稱不得取內八位以上子、亦不論嫡庶故也、其資人、不得取內八位以上子、唯充職分者聽、並不得取三關及大宰部內陸奧、石城、石背、越中、越後國人、

〔續日本紀五元明〕和銅三年三月戊午、制、輙取畿外人用帳內資人、自今以去、不得更然、待官處分而後充之、　四年五月己未、先是禁取畿外人充帳內資人、至是始許之、　五年九月乙未、禁取三關人爲帳內資人、

〔續日本紀七元正〕靈龜二年六月乙丑、制、王臣五位已上、以散位六位已下欲充資家者、人別六人已下聽之、

〔續日本紀八元正〕養老三年十二月庚寅、始以外六位內外初位及勳七等子年二十以上爲位分資人、八年一替、又五位以上家補事業、防閤、仗身、自是始矣、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年三月甲子、勅補事業、位分資人者、依養老三年十二月七日格、更無改張、〇中略其三關、筑紫、飛驒、陸奧、出羽國人、不得補充、餘依令、　五年四月辛卯、勅曰、如聞諸國郡司等部下、有騎

制度

〔日本書紀崇峻二十一〕二年○用明七月、物部守屋大連資人捕鳥部萬、萬名也將一百人、守難波宅、而聞大連滅、騎馬夜逃、

〔日本書紀持統三十〕天渟中原瀛眞人天皇○天武、中略、朱鳥元年十月己巳、皇子大津謀反發覺、逮捕皇子大津、併捕○中略帳內礪杵道作等三十餘人、

十年十月庚寅、假賜正廣參位右大臣丹比眞人、資人一百二十人、正廣肆大納言阿倍朝臣御主人、大伴宿禰御行、並八十人、直廣壹石上朝臣麻呂、直廣貳藤原朝臣不比等、並五十人、

〔令義解軍防五〕凡給帳內、一品一百六十人、二品一百卌人、三品一百廿人、四品一百人、資人、一位一百人、二位八十人、三位六十人、正四位卅人、從四位卅五人、正五位廿五人、從五位廿人、女減半、減數不等從多、謂假如五位資人廿五人、減半給者不等、即給十三人之類也、其太政大臣三百人、左右大臣二百人、大納言一百人、謂若致仕者、准祿令減半、大納言亦准此也、

〔通典職官三十五〕大唐有親事帳內、六品七品子爲親事、八品九品子爲帳內、限年十八以上、擧諸州共率萬人爲之、凡王公以下、及文武職事、三品以上、帶勳官者則給之、

〔令義解祿令四〕凡嬪以上、並依品位給封祿、謂欲顯不減半、故云依品位、其封祿是重、僅令准男、資人位田、約然不減、

〔延喜式式部十八〕凡嬪以上位分資人、不在減限、○中略

凡中宮春宮舍人及三色資人等、待考帳放出、

〔享祿本類聚三代格四〕勅旨、依官員令、大納言四人、職掌既比大臣、官位亦超諸卿、朕念之任重事密、充員難滿、宜廢省二員、爲定兩個、更置中納言三人、以補大納言不足、其職掌敷奏宣旨待問參議、其官位料祿、准令商量施行、奉勅、如前件、朝議商量、今加件官、掌近大納言、事關機密、其官位料祿不可便輕、請其位擬正四位上官、別封二百戶、資人卅口給、

慶雲二年四月十七日

舍人

令前帳內資人

防閣ハ、亦帳內資人ノ類ニテ、元正天皇ノ養老三年ニ、始テ五位以上ノ家ニ補セシガ、聖武天皇ノ神龜五年ニ廢セラレタリ、

〔古事記中應神〕大山守命者、違天皇之命、猶欲獲天下、有殺其弟皇子之情、竊設兵將攻、爾大雀命〇仁德聞其兄備兵、卽遣使者、令告宇遲能和紀郞子、故聞驚以兵伏河邊、亦其山之上張絁垣立帷幕、詐以舍人爲王、露坐呉床、百官恭敬往來之狀、旣如王子之坐所、

〔日本書紀十一仁德〕四十年三月、隼別皇子之舍人等歌曰、〇歌略

〔日本書紀二十四皇極〕二年十一月丙子朔、蘇我臣入鹿、遣小德巨勢德太臣、大仁土師娑婆連、掩山背大兄王等於斑鳩、於是奴三成與數十舍人、出而拒戰、〇下略

〔日本書紀二十八天武〕天命開別天皇〇天智四年十月癸未、至吉野而居之、是時聚諸舍人、謂之曰、我今入道修行、故隨欲修道者留之、若仕欲成名者還仕於司、然無退者、更聚舍人而詔如前、是以舍人等、半留半退、

〔萬葉集二挽歌〕皇子尊宮〇天武皇太子草壁皇子舍人等慟傷作歌廿三首〇歌略

高市皇子尊城上殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌〇長歌略

短歌二首〇一首略

埴安乃池之堤之隱沼乃、去方乎不知、舍人者迷惑、（ハニヤスノイケノツツミノカクレヌノ、ユクヘヲシラズトネリハマドフ）

〔日本書紀十四雄略〕三年〇安康十月、大泊瀨天皇〇雄略彎弓驟馬、而陽呼曰猪有、卽射殺市邊押磐皇子、皇子舍人帳內佐伯部賣輪更名仲子抱屍駭惋、不解所由、

〔日本書紀二十五孝德〕天豐財重日足姬天皇〇皇極四年六月庚戌、天豐財重日姬天皇授璽綬禪位、〇中略輕皇子〇孝德再三固辭、轉讓於古人大兄、〇中略古人大兄、避座逡巡、拱手辭曰、〇中略臣願出家入于吉野、勤修佛道、奉祐天皇、辭訖解所佩刀、投擲於地、亦命帳內（トネリ）皆令解刀、

若シ本主ノ意ニ稱ハザルトキハ、其本主ハ位階ノ高卑ニ依リテ、或ハ笞シ、或ハ杖スルコトヲ得ルナリ、

帳內資人ヲ取ルニ其法差アリ、帳內ハ六位以下ノ子及ビ庶人ヲ取リ、位分資人ハ外八位以下ノ子及ビ庶人ヲ取ル、而シテ職分資人ハ內八位以上ヲ取ルコトヲ得、又情願スル者アルトキハ、外散位ノ六位、勳七等以下ハ、帳內及ビ職分資人ニ充テ、七位以下ノ者ハ位分資人ニ充ツ、然レドモ帳內資人ハ防衞ノ爲ニテ、騎射膂力ノ人ヲ要スルコトナレバ、邊要國ノ人ヲ以テスルコトヲ得ズ、並ニ課役ヲ蠲カルヽヲ以テ、本貫勘籍ノ解文ヲ待チテ、式部ニテ判補ス、其選限ハ文武天皇ノ制令ノ時ニ八考トシ、慶雲三年ニ六考トセリ、而ルニ聖武天皇ノ神龜五年ニ、外五位ノ人ノ資人ニ限リ十考トシタルヲ、仁明天皇ノ承和六年ニ至リ、令條ニ據リ八考トス、總テ考滿ニ至リ、本主其行能功過ヲ量リ、式部ニ報ジ、三等ノ考第ヲ立テヽ黜陟ス、而シテ皆外位ニ敍スベキヲ、其才用ヰルベクシテ、貢擧シテ得第スルトキハ內位ニ敍ス、又理務ニ堪ヘタル者ハ、選限ノ滿チタル時、本主ノ請アレバ內位ニ敍ス、又本主亡スルトキハ、期年ノ後ニ皆式部ニ送ル、若シ長上ニ任ズルトキハ、改メテ內位ニ入レ、分番ニ補スルトキハ、其考滿ノ日ニ內位ニ敍ス、又職分資人ハ本主亡シ、及ビ理ヲ以テ解官スレバ留省ヲ聽ス、留省ハ式部ノ散位ニシテ、淳仁天皇ノ天平寶字二年ニハ、其額數ヲ定メタリ、帳內及ビ位分資人ハ、本主入道シテ其考六年ニ滿タザレバ、留省スルコトヲ得ズ、

又大臣、納言ニ、授刀資人ヲ賜ヒシ事アリ、是ハ特恩ニ出デヽ、其官ニ居ル者ノ皆然ルニアラズ、授刀資人ハ授刀舍人寮ノ舍人ナリ、然ルニ其寮ハ屢、更革ヲ經テ後ニ近衞府ト爲レリ、因テ授刀資人ヲ賜フハ、近衞ヲ賜フト同ジク、專ラ防衞ノ爲ニスルナリ猶ホ官位部授刀舍人寮篇ヲ參看スベシ、

廿八日辛未
准后勅別當有無被尋事
參〇參恐誤頭中將隆輿朝臣子細者、准后宣下之時、准后勅別當被宣下之例有之哉否之由、先日隆輿朝臣被尋之、此程引勘之處、所見無之、仍今日件返答申了、
〔義演准后日記〕文祿五年正月十一日
法身位准后濟〇滿御日記ニハ、准后以上ハ、疊ノ上ニテ始終御禮ヲ申由慥見了、雖然當時之間如此進退、定有後難歟、近代マデ乘車扈從以下御供ト見タリ、當時只板輿之體、零落無念也、

帳內資人　防閤　傔人

帳內ハ雄略天皇紀ニ始テ見エ、資人ハ崇峻天皇紀ニ始テ見エタリ、然レドモ皆史筆ノ追書ニ係リテ、當時既ニ此稱アルニアラズ、且ツ帳內ヲ訓ジテトネリトシ、資人ヲ訓ジテツカヒビトトセルモ、強テ其別ヲ立テタルニ似タリ、實ハ並ニトネリト呼ビシナラン、故ニ又舍人ト書セル者アリ、今大寶ノ令ニ依リテ考フルニ、帳內資人ハ並ニ防衞驅使ニ供スル爲ニ賜フ所ナリ、而シテ親王ニ、品階ニ依リテ賜ブヲ帳內ト云ヒ、五位以上ノ王臣ニ、位階ニ依リテ賜フヲ位分資人ト云フ、是レ其人ニ從ヒテ稱ヲ異ニセルノミニテ其實ハ一ナリ、又職分資人アリ、官職ニ依リテ賜フ所ニシテ、大臣、納言ニ止マル、親王ニシテ大臣タレバ、亦職分資人ヲ賜フ、職分資人ハ、致仕スレバ其半ヲ減ズ、位分資人ハ、嬪以上ノ外ハ、女ハ減半シテ賜フ、外五位ハ、原ハ內位ト同等ナリシヲ、聖武天皇ノ神龜五年ニ、大ニ其數ヲ減ジ、而シテ女ノ外五位ヲ以テ男ニ同ジクセリ、凡テ帳內資人ハ、蔭ヲ有スルモノアリ、位ヲ有スルモノアレドモ、

一平松宰相被ㇾ示、自今准后、儲君與御次第被ㇾ立候、爲ㇾ心得被ㇾ示之由、尤儲君、親王宣下有ㇾ之候得者、親王准后與御次第可ㇾ有ㇾ之御沙汰之由也、

一姉小路前亞相、昨夜被ㇾ示、准后是迄之通被ㇾ稱ㇾ女御與ㇾ候由、前關白殿被ㇾ仰候由被ㇾ示候、右之儀、當女院准后宣下被ㇾ爲ㇾ有候後モ、右之通ニ御沙汰有ㇾ之候ヘ共、諸向稱候處ハ、准后與申候、今度急度右之御沙汰ニ候ヘバ、關東ヘも申達候、左候ヘバ、此度何等之子細ニテ、女御ト被ㇾ稱候哉不ㇾ尋來候得共、其子細分明ニ不ㇾ申達ㇾ候而者不ㇾ相濟ㇾ候、如何可ㇾ有ㇾ之哉、議奏衆五卿申談候處、御內儀より急度被ㇾ仰出ㇾ候儀ニテモ無ㇾ之、關白殿被ㇾ仰候事ニテモ無ㇾ之、於ㇾ准后御方ㇾ前關白殿被ㇾ仰候而已ニ候ヘバ、先年之通ニ相心得、子細有間敷候、兩役所、右之通覺悟候ヘバ、夫ニテ可ㇾ相濟、尙又前殿下江ハ、此趣可ㇾ申入置ㇾ之由、姉小路被ㇾ示了、

〔中右記〕寬治八年三月九日庚辰

近代

一院、太上天皇、女院二人、二條院、郁芳門院、后宮三人、太皇太后、皇后、中宮、准后五人、祐子、聰子、令子、內親王、篤子、道子、女御、前關白一人、前太政大臣一人、信長、前大僧正一人、覺圓、前天台座主一人、良眞、東寺長者四人、定賢、寬意、賴觀、經範、男女道俗如ㇾ此、上多時下苦、古賢所ㇾ重也、

〔季連宿禰記〕天和二年十一月廿七日庚午

准后立ㇾ中宮ㇾ宣下下行帳之事

從ㇾ武家傳奏花山院右大將可ㇾ參由有ㇾ命、即局務同道令ㇾ參入、子細者今度准后宣下、幷中宮宣下下行帳之事也、其儀來月二日、親王宣下下行ノ高ノゴトクニテ准后宣下下行帳下書可ㇾ相調、又東福門院准后宣下ノ古帳ノ高ニテ、今度立中宮ノ下行帳下書可ㇾ相調云々、即畏由返答了、

天正拾三年七月十五日

關白御判

〔准后親王座次第〕准后勅答五枚　慶長廿三八

大閤〇鷹司信房

夫官職高則封戸增之、位階下則位田減之、委載舊記者也、准后與親王相當分明歟、次三后准三宮親王等有差別歟、准后之大臣者如三后歟、幷或記曰、抑准后之人、其禮可在親王之上之由、大略一定歟、此條有子細、至親王者爲天子之親族、於准后者后妃之職也、又仲野親王贈太政大臣有例、次內辨大臣端爲上座、外辨親王與爲下座、造酒正上首勤端座役、內豎正下﨟勤與座役、宜有時議乎、

前關白

北山抄之御齋會大極殿御座、御屏風去一許丈、設大臣之座、王卿座在欄下、上中下略幷有准后出仕之時、妙法院大覺寺兩親王有扈從歟、又大永年中准后尙通、親王貞敦、於禁中和歌御會、座席頗及異論、爲理運內々儀不覺例歟、但依家記注之、又雖爲儲君親王既令降爲向攝關給、常之儀也、況自餘之親王、與准后之大臣差別有之歟、從宜在聖裁矣、

右府〇近衞信尋

節會座次、親王大臣至殊禮者、可依時宜之旨所見歟、幷太政大臣高市親王、二品萬多親王贈從一位官位例有之歟、又建保三年四月廿四日、熙子爲內親王、同六年二月十四日爲准后、又嘉曆三年正月卅日、尊珍親王元無品爲准后、又親王差三公之下之由、貞觀政要歟、准后親王最前隔座、又智仁親王被違官次歟、何先座席無沙汰、

〔兼胤公記〕寶曆九年三月廿二日

一御附以大判事尋云、女御御方、〇桃園女御藤原富子自今ハ可奉稱准后哉之由也、追而可申聞示了、

應給前大僧正祐嚴准三宮封千戶事

右權大納言正三位源朝臣持康宣、奉勅、宜殊給之者、省宜承知依宜行之、符到奉行、

正四位下行右中辨藤原朝臣　　從四位上行左大史小槻宿禰

寶德元年九月廿六日

贈准三宮

〔續三宮傳〕新崇賢門院、(中御門院御母)寶永六年十二月廿九日薨、(三十五歲)同七年三月廿六日贈准三宮、

東京極院、(仁孝帝御親母)天保十四年三月廿一日薨去、(六十四歲)同十五年二月十三日贈准三宮、(○中略)

准后座次

〔准后親王座次第〕慶長廿二十七、以兩頭准后親王座席之次儀、左右ヨリ以書付勅答之旨被仰出、則

三月八日兩頭ヘ勅答出之也、

(准后方之衆)各同前被出之云々、同九日以兩傳奏傳長老近日駿河下國ニ付而、各勅答被渡之云々、

右勅答ども、於駿河披露候處、御機嫌云々、何モ有御上洛、直談之上、法度可被定之旨、三月廿八日、傳長老ヨリ書狀、同日野入道書狀等到來也、卯月三日彌御執成之通、條々以便宜返事兩所ヘ遣候也、

〔三寶院文書〕五 一親王と准后座次之儀、可爲各座、但龍山と伏見殿者、不混自餘之條、此兩人者何時(茂)ならばれて可爲各座事、

一同法中之儀、總並之准后、と親王間のごとく可爲各座事、

一前關白と法中之准后、可爲各座之事、

付法中之親王同前事

親王准后相論之事、古今無一決者歟、然今度於大德寺遂禮明、或求職原官班兩趣哉、披雙方舊記、連々之批判、右之三箇條定置之者也、爲後代龜鏡者哉、仍以此趣被成勅書、猶爲治定之間、今令告觸諸家門跡畢、彌可被守此法度者也、

勅、繇行揚名者、人倫之規範也、褒德立號者、王道之恒典也、前大僧正法印大和尙位義承、出將營家、入秘密室、久居台嶽之貫長、致公門之護持、依之今准三宮之崇班、則旌一朝之殊獎、宜授邑土千戶、幷年爵、內外官三分、主者施行、

嘉吉元年八月　日

〔康富記〕寳德元年九月廿五日壬寅、自局務有消息云、明日隨心院僧正〈○祐嚴〉可有准后宣下也、嘉吉二年六月十七日、實相院殿准后時、予勅書持參事被尋之、予申云、實相院御時非陣儀、以口宣被宣下、雖然上卿仰大內記大外記官務等、勅書已下有持參之儀、中務輔家種勅書持參、而一向不存知之、嘉吉元八卅梶井殿准后時、有陣儀、中務不參、外記康顯勤輔代、勅書令持參本所、有被物、代々祿物之由申之、是應永十八年御室准后時、外記予勤中務代之例候之間申之、去年十二月卅日、三寶院准后時者、非陣儀、口宣宣下也、有沙汰被略勅書了、兩局務宣旨被持參、但彼度外記宣旨未寫之由返答了、廿六日癸卯、是日准后宣下也、隨心院前大僧正〈祐嚴〉令蒙此宣旨給、陣儀也、上卿權大納言源持康卿、職事頭右中辨冬房朝臣〈官方兼行〉、一﨟外記忠種、右大史員職、大內記菅在治朝臣、中務大輔源家種等參陣之、勅書事、召大內記仰之、奏聞時、大內記持宮、從弓場儀云々、員職康顯辭申少內記之由申之、後各不從內記役也、年官年爵事、局務不參之間、召一﨟仰之、雖然於宣旨者局務成之、持參隨心院殿〈東帶云々〉、封戶事、官務不參、辨仰員職、又於宣旨者、官務之持參御門跡、同束帶云々、准后封爲千戶之條、古來儀也、而文安二年淨土寺殿御時以後、爲五百戶之由有申仁、〈菅相公益長卿歟〉爾來五百戶之分成宣旨了、此事無其謂、改爲緒宿禰爲官務申沙汰、近例爲千戶之條分明也、仍今日官務申談辨、爲千戶由載宣旨云々、復本儀之條、公事之興行也、隨心院僧正者、執柄御兄也云々、宣旨進上之後、兩局被參御前、御太刀被進上之、有御一獻、御太刀被下、又爲祿物匹絹一匹充給之云々、

太政官符民部省

〔准后親王座次第〕門跡准三宮初例○中略

一三寶院准三宮初例

祖師法身院滿濟（鹿苑院義滿公猶子）

應永卅五年四月廿日准三宮　宣下初例

後遍智院義賢（滿濟□□）

文安五年十二月廿六日、同補之事、○中略

右依勅問、令勸進所候也、謹言、

二月　義演

廣橋大納言殿

三條大納言殿

〔三寶院文書〕四勅、彜行兮授爵者、王道之令典也、施化兮勸善者、聖朝之嘉猷也、前大僧正法印大和尚位滿濟、稟豪家之餘裔焉、傳眞宗之奧旨矣、嘉名既顯、智德惟高、誠是僧苑之英魁、釋門之柱石、依之准三后之位、授千戶之封、又任人賜爵、普告遐邇、俾知朕意、主者施行、

應永卅五年四月廿日

〔薩戒記〕嘉吉元年八月廿九日癸巳、三寶院僧正（義賢）被送使（慶長法師）云、梶井殿（座主前大僧正義承、鹿苑院太政大臣御息也、）准后事被宣下之樣可奏達、此事仰遣右京大夫持之朝臣之處、直可申之由令返答、無子細者、明日被宣下之樣可申沙汰者、答急可經奏聞之由、午刻參內、付女房（勾當）奏聞、爲無子細之事者、明日可令宣下者、彼僧正觸武家奏聞之上者、勅許不能左右歟由申入之、則以使者仰遣藏人左少辨俊秀許了、　卅日甲午、今日以前大僧正義承（于時天台座主）可准三后之由被宣下、上卿四條中納言（隆夏）云々、藏人左少辨俊秀奉行之、

臣被宣下於官、封戸事同被宣下了、但可爲去八日日付之由被仰之云々、先例准后宣下之時者、官務只成封戸宣旨許、剩令與奪六位史、今度之儀始而被成宣旨於官之間、官務自身束帶持參之、門主有御對面、無祿物云々、後日被送祿云々、

凡准三后事、於陣被宣下之、内記作進詔書、經奏聞之後、中務輔令持向本所之條定規式也、然而今度略陣儀、止詔書辨被宣下於官者也、封戸宣旨同宣下之、年官年爵宣旨、外記局必成進之處、亦被略了、云被云是新儀之例、更不可有者也、

抑後日淨居庵令語給云、准后宣下事、廣橋大納言兼宣爲傳奏可有申沙汰之也、武家御執奏之間、如何早速可有此事之由、去八日被仰之、仍八日夜、廣橋亞相令來淨居庵給有談合、既今日中可有勅許之由、自武家被催促申之間、今日誰人爲上卿可被參行之哉、今夜中曾不可事行也、不及尋先例、於當局事不停滯、無爲入眼之樣、可令相計給云々、仍准后事、止詔書以口宣被宣下之先例更不可有、雖然就時宜止陣儀并詔書被宣下於官務者可宜候歟由、淨居庵被指南申之由被語仰之、仙洞叡慮同可被止陣儀之由被思召云々、仍任被下之旨被計申之處、如被御申被行之間、且叶時宜、且不背理致歟

前大僧正滿意

右中辨藤原朝臣宣光傳宣

權大納言藤原朝臣兼宣宣、奉勅、件人宜准三后、宛賜封千戸者、

應永廿九年十二月八日　修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史小槻宿禰爲緒奉

自官被成進之宣旨案見右、是只一通也、先々封戸バカリノ時ノ宣旨同者也、若今度者准后事一段可被加詞歟如何、　十五日戊辰、參高倉、風爐有之故也、官務被語云、去十一日准后宣下、止詔書被宣下事、前大外記師胤朝臣、於廣橋亭加難破云々、此難破事可被斟酌歟如何、　廿二日乙亥、後聞、今日自如意寺准后祿物百疋被送官務亭云々、先日宣下持參之時不被下候、

〔准后准三后考〕法中准三宮の始

靑蓮院准后道玄

是は八十八代後深草、八十九代龜山院、兩代の關白、二條の普光園院良實の息なり、良實は二條殿の始にてましますなり、道玄弟三井寺長吏大僧正道瑜も准后たりしよし、大系圖にみえたり、是攝家門跡准后の始なるべし、又按するに、將軍の男准三宮の宣旨ありし始は、鹿苑院殿の息梵光院准后法尊、大覺寺准后義昭二人を始とや申すべき、

〔康富記〕應永二十七年十一月十九日甲申、今日前天台座主前大僧正桓敎號二岡崎一被レ宣二下准后一、是是心院關白〇二條師良息也、先日於二室町殿一被レ修二七佛藥師法一、爲二彼賞一自二武家一被二執申一也、彼門流始例、且天台座主兩度補任、旁被レ始レ例、爲二規模一者哉、上卿權中納言時房卿、職事權右少辨俊國、辨方奉行中務權大輔賴賢、大外記師胤朝臣、少外記淸原宗種、宣下分配左少史高橋員職、召使行繼參陣、內記不參、史員職勤レ代、勅書中務權大輔被レ持二參本所一、兼爲二程一也、少納言同車云々、翌日爲二中務輔祿物一、以二伊豫法印一、練貫一重、杉原十帖被レ送二高倉一云々、年官年爵宣旨、師胤朝臣持二參之一處、有二御對面一、被レ下二御太刀一云々、封戶宣旨、官務爲緖宿禰成レ之、與二奪六位員職一云々、員職翌日持二參之一、被レ下二祿物百疋一云々、勅書案見レ左、

勅、法驗彰而加二褒賞一、薫修積而浴二恩寵一、明時嘉模、朝庭大猷、前大僧正法印大和尙位桓敎、出二於大籠之家一、入二于天台之室一、行瑩二珪璧一、法究二淵源一、誠是護持之勞積レ年、法威之名蓋レ世、恐超二先蹤一、殆少二比類一者歟、宜レ准二三后之列一、增二授千戶之封一、又任人賜爵、若稽二舊典一、布二告遐邇一、俾レ知二朕意一、主者施行、

應永廿七年十一月廿日

廿九年十二月十一日甲子、如意寺滿意僧正聖護院御弟子御連枝也云々左府持基公御伯父准后事被二宣下一、此宣旨昨夜子官到來之處、昨十日例日也、今日可レ成二進宣旨一之由、傳奏被レ申之間、官務局務爲緖宿禰成二宣旨一、今日被レ持二參彼門跡一云云、是去六月、主上〇稱光御不豫時、於二禁裏一藥師法阿闍梨令レ勤之給、其賞令レ被レ行之者也、右中辨宣光朝

之ヲ莊園若シハ封戸ノ地ヨリ召シ、長上或ハ番上セシメテ使役スルヲ云フカ、因テ參考ノ爲ニ今昔物語ノ文ヲ引クコト左ノ如シ、

〔今昔物語三十一〕藏大史生宗岡高助傅娘語第五

今昔大藏ノ最下ノ史生ニ、宗岡ノ高助ト云フ者有キ、〇中略五間四面ノ寢殿ヲ造テ、其レニ高助ガ娘二人ヲ令住ム、〇中略然テ此樣ニ微妙ク傅ケレバ、上日ノ者、宮ノ侍、可然キ諸司ノ尉ノ子ナド、聟ニ成ラムト云セケレドモ、高助目ザマシガリテ、文ヲダニ不取入サセザリケリ、

〔今昔物語二十七〕美濃國紀遠助値女靈遂死語第二十一

今昔、長門ノ前司藤原ノ孝範ト云フ者有キ、其レガ下總ノ權ノ守ト云ヒシ時ニ、關白殿ニ候ヒシ者ニテ、美濃ノ國ニ有ル生津ノ御莊ト云フ所ヲ預カリテ知ケルニ、其御莊ニ紀ノ遠助ト云フ者有キ、人數有ケル中ニ、孝範此ノ遠助ヲ仕ヒ付テ、東三條殿ノ長宿直ニ召上タリケルガ、其宿直畢ニケレバ、暇取セテ返シ遣ケレバ、美濃ヘ下ケルニ、〇下略

〔五代帝王物語〕大殿〇藤原道家は、帝の外祖たるうへ、攝政幷征夷將軍の父なれば、世の從ひ恐事、吹風の草木をなびかすよりも速なり、されば山の座主、三井寺の長吏、興福寺の別當、みな御子なり、仁和寺の御室は、代々王胤にてこそおはしませども、世を手に握り給うへは、北の政所の腹に福王御前とて、愛子にて御座をば、御室の弟子に成て、師跡をうけつぎ給き、されば大殿の御葬禮の時も、殿たちよりも上にたちておはしましけるは、父の御素意のとほりなるべし、後は關白の准后法助と申、法師の准三后の宣旨、是が始なるべし、

〔准后親王座次第〕一門跡准三宮初例

御室法助光明峯寺道家公息、號開白准后、

延慶六年七月廿七日、蒙准三宮宣旨給、初例、從是諸門跡連綿令補任事、

〔本朝文粹五表〕爲入道前太政大臣出家後辭封戸幷准三宮第二表　江匡衡

沙彌如實〇藤原道長言、前獻誓言、未蒙矜遂、五情如灼、三伏履氷、沙彌某中謝某昔極槐路之崇班、今爲桑門之後進、形類玄鶴、警夜久案枕中之方、志在白牛、去朝何促車上之舞、荷君惠而早老、欲息肩過一生、戴佛恩而愁遺、應合掌棄餘念、加以某寢疾落涙之後、詔長男内大臣藤原朝臣〇頼通攝行天子之政、一同某在俗之時矣、彼魯伯禽者、姬旦之後也、雖受公封、而無齊璇璣、漢霍禹者、子孟之兒也、雖襲侯爵、而無負王扆、遠訪大邦、未聞此類、近考列祖、少可因循、而昨日其父去其職、今日其子承其塵、事之殊常、未曾有焉、嗟呼老身存而既見息子總百揆之寄、大臣罷而更忝禿丁准三宮之儀、眞云俗云、蒙恩如此、某初謂一投夢宅變易之折、長斷畏途生死之輪、豈料晝浮榮兮字不成、澗水空顯、破宿盧兮跡難隱、山雲正愁、譬猶欲擾野鹿以先控良弓、逐家狗以還予滋味者歟、反覆而思、一無可者、伏望叡覽神聽、停此異賞、唯則陶唐稽古之政、莫降飛越布新之恩、不耐荒悚之至、謹重奉表陳乞以聞、沙彌某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

永祚二年六月日　沙彌某上表

〔百練抄八高倉〕治承四年六月十日、入道前太政大臣〇平清盛幷從三位時子被下准三宮勅畢、

〔源平盛衰記十二〕安德天皇御位事

春宮〇安德位ニ卽セ給ケレバ、外祖父外祖母トテ、太政入道〇平清盛夫婦トモニ、三后ニ准ズル宣旨ヲ蒙テ、年官年爵ヲ賜テ、上日ノ者ヲ被召仕ケレバ、繪書花付タル侍ドモ出入テ、院宮ノ如ニテゾ有ケル、出家入道ノ後モナヲ榮耀名聞ハ盡ザリケリトゾ見エシ、出家ノ人ノ准三宮ノ宣旨ヲ蒙事ハ、法興院ノ大入道殿ノ御例トゾ承ル、大入道殿トハ、九條右丞相師輔ノ第三男、東三條太政大臣兼家ノ御事也、

〇按ズルニ、上日ノ者ト云フ事、未ダ詳ナラズ、今昔物語ニ據リテ考フルニ、或ハ准三宮タル人、

親王任准后例

聖護院覺珍（叙親王後、嘉應三年正月晦日准后宣下、）

〔日本紀略一九一條〕正曆元年五月十三日、勅、入道太政大臣（○藤原兼家）任人賜爵准三宮依舊不改、又加給封二千戸、

〔諸門跡譜上〕性信准三后（三品大御室）

三條院第四皇子、母皇后娍子、濟時卿女、（○中略）始而號御室出家之後蒙准三后之宣旨號大御室廣澤流正統也、師明親王是也、

○按ズルニ、師明親王准三后ノ事ハ、攝關大臣家條ニ引ク台記ニ詳ナリ

〔日本紀略後十三一條〕寬仁三年五月八日甲子、勅、入道前太政大臣（○藤原道長）任人賜爵准后如故不改

〔濫觴抄下〕法准三宮　後一條四年己未（寬仁三）五月八日、入道前太政大臣重勅如故、出家以後希代之例也、

〔本朝續文粹四表〕入道後謝准后儀表　文章博士爲政作

沙彌（某○藤原道長）言、伏奉今月八日勅命賜臣以二千戸封及准三宮儀焉、亡考遁世之昔、初（○初下恐有脱字）斯塵、聖上御寓之今、强追彼蹤、雪首雖除、氷尾忽踏、（某中謝）須占幽寂以任觀念、避喧囂以學坐禪、而病恙之易發、常問良藥於醫方、依筋力之漸衰、未致苦行於佛戒、况若栖野雲、則遠可隔鳳闕龍樓、若處山月、則遙欲謝椒房蘭殿、雖思誘諭、暫以徙倚、方今乖于出家之幽意、更賜希代之厚恩、草庵至窄宮園之准的非便、山厨不寬、二千之食邑奚納、加之所陪從者緇衣之法侶也、誰有任人賜爵之望、廳所儲蓄者、香花之什物也、曾無生民貢賦之要、既絕妄語於十戒、寧飾虛詞於一端、伏望聖慮、幸照蒙襟、早收無涯之恩波、竭小流之定水、不勝懇迫屏營之至、謹抗表陳乞以聞、某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

寬仁三年六月十九日

僧徒

た詳ならず、此後は西園寺大相國實氏の室、從一位貞子を、北山准后と申しき、此ひとは八十八代後深草、八十九代龜山院、兩代の御母、大宮の女院の御母なれば、此宜を賜はらせ玉ひしなり、何れも皆御門の御外祖母なるが故なるべし、

〔義演准后日記〕慶長二十年（○元和元年）三月四日、准親書付廣橋辨へ遣、

釋門准三宮初例

法成寺攝政道長公、寬仁三年三月廿一日、出家、（法名行覺）同五月八日、詔准三宮如ㇾ元云々、又封邑二千戶加ㇾ之、凡法中准后之濫觴歟、

門跡准三宮初例

御室法助、（光明峯寺攝政道家公息、號二開田准后一、）延慶元年七月廿七日、蒙二准三宮宣一給、從ㇾ爾以來、諸門跡連綿令ㇾ任ㇾ之、

三寶院准三宮例

祖師法身院滿濟、（鹿苑院准后義滿公猶子）正長元年四月廿日、准三宮宣下初例、

後遍智院義賢、（滿濟准后資）十二月廿六日同任ㇾ之、

同親王例

聖珍無品親王（伏見院皇子、元東南院、醍醐寺座主、三寶院兼帶、）

聖雲無品親王（龜山院皇子、號二遍智院一、醍醐寺座主、）

聖尊無品親王（後二條院皇子、號二遍智院一、醍醐寺座主、賢助僧正資、）

同王子例

空性（二條院三宮、三寶院乘海資、）

聖海法印（惟明親王子、號二宮法印一、醍醐寺座主、三寶院成賢僧正資、）

道性僧正（龜山院皇子、宮[illegible]親王、元仁和寺、醍醐寺座主、三寶院兼帶、）

不書入道字事

永保二年二月廿日入道師明親王叙二品給件位記狀就法名可被作歟將又可付俗名歟、大內記敦基申上卿權中納言伊房卿之處、件卿被示云、可依先例、大內記申云、入道親王叙品今度初有此事、准據例不可候歟、但惠子女王(華山院外祖母)准三宮之時、勅書保胤注外祖母王氏、是則出家以後有准后事、不書法名書王氏、此例如何、上卿申事由、可依彼例之由被仰下也、

無品師明親王

右可二品

中務磐石基國、法林材高、雪山尋蹤、雖辭榮望於釋宮之月、天潢分流、欲增寵光於帝子之星、宜昇榮級式照禪扉、可依前件主者施行、

永保二年二月廿日

依此例、一條殿准后之時、從一位藤原朝臣書之、以旨可令申給也、恐々謹言、

三月廿四日　大內記長光

私言上

此十餘日聊有療治所勞如忘他事候、就中此七八日許有增氣不能起居候、如此之間思給忘示合不令申候也、惠子女王准后勅可獻之處、此奏永範朝臣借取了、但保胤作所入文粹也、件勅ニモ書出家之由候也、今度就師明親王位記狀所草進候也、保胤不書入道王氏、故京兆不書入道無品師明親王、仍今度不書入道從一位候也、

〔百練抄七十六條〕仁安二年十一月十八日、從三位平盛子、(故攝政(藤原基通)北政所、前太政大臣(平清盛)女、)被下准三后勅書、

〔准后准三后考〕武臣准后の始

又按ずるに、大臣の妻、准三后の宣を蒙りし始も、淨海の室を始とぞいふべき、夫より前のこと、未

憲問之、申曰、准后雖尊、論尊卑未得勝攝政者、所申未得其理、而夜更漸深、客卿疲倦、余(○藤原頼長)以爲於家夫尊於妻、縱准后尊於攝政、先夫後妻有其理、卿起座、使資憲申候由於主公、可許後進庭中再拜了歸入、使雅國朝臣(准后職事)申小君如初再拜之、(准后拜賀有無、先日請處分於大相公、公謙退辭、余示告卿等強以拜賀爲、明日公與書悅謝、)了、　廿二日庚子、大相府與書曰、禪閤(○忠通父忠實)嚴命如此、宜計示者、卽見禪閤御消息、載三箇條、一條殿(○忠實母)欲加階、已爲從一位、可益加何事乎、角振隼宜加一階、憲雅可加階而重喪人有憚否、此等事與左大臣(○忠通弟頼長)謀議可否候、以聞法皇者、報狀曰、一條殿已極位、無所可益加、竊以爲帝(○近衛)之高祖母齡過九旬、(是年九十)一被准三宮、理尤可然、角振隼加階亦必可、(○中略)範家來仰從一位藤原朝臣准三宮、角振隼加階、顯成、季家、季兼、清高、信方、光房加階事、(三宮已下皆是家賞、此內光房追而申請、)內大臣問余曰、一條殿已爲尼、勅書可載法名否、與諸卿竊可議定之由有大相命、余曰、尼爲皇后者轉昇之時如何、大臣曰、宜命不載名、余曰、法成寺入道相國未遁世蒙准后詔、出家後復有此詔、到于僧者無載男時名、定知載法名、今亦載法名無其難、又位祿定時見命婦歷名、雖尼皆載女名候也、思之尼不失女名、倩案事情、男出家後失官位、女出家後不失之、然則不失女名、理實可然、雖載女名亦可無難、內大臣曰、故仁和寺法親王除目尻付注入道師明親王、令書入道從一位藤原朝臣全子如何、余及左金吾左武衞皆以稱善、大臣召大內記長光仰之、封戸事仰範家、勅書於新宮可奏之由有大相命、仍余已下卒起於陣腋、範家仰內大臣曰、如公等議任師明親王例載女名加入道字、尤有其理者、(○中略)後聞內大臣奉勅書云々、

勅、有功必酬、貽彝範於竹帛、積善永顯、傳佳猷於典墳、從一位藤原朝臣全子者攝籙大相國(○藤原忠通)之祖母也、四德俱備、六行相兼、二代宰臣之致輔弼也、受彼餘裔、當時皇后之儀啓令也、爲其曾孫、仍縱凝安禪之觀、寧忘褒崇之通、宜授邑土三百戸、幷年爵內外官三分、主者施行、

久安六年正月廿二日　作者大內記長光

上卿內大臣、中務輔丞不參、仍召外記師直賜之、

るは三位四ゐになるもあり、さま〴〵いとめでたくおはします、

〔日本紀略後一條十三〕長和五年六月十日壬午、勅、左大臣〇藤原道長年官年爵准三宮、本封外加食邑三千戸、〇中略又室家源倫子、本封外給邑土三百戸年官年爵內外官三分、

〔本朝世紀〕久安五年十月十六日甲子、今日有攝政〇藤原忠通北政所准合勅書事、酉刻左兵衞督藤重通卿參仗座、召大內記長光仰云、從一位藤原朝臣宗子准三宮、可賜年官年爵、本封之外可加賜三百戸、依長和例可草進勅書、〇藏人頭爲通朝臣傳仰上卿也內記持參勅書草、上卿付藏人頭爲通朝臣令內覽、〇先例以內記令內覽歟爲通朝臣歸來傳攝政命云、於清書者不可覽、爲吉事之故也、次大內記進清書、上卿披見之後下中務、〇輔不參、仍下給藏人丞實重、次召大外記師長被仰年官年爵事、次召左中辨朝隆朝臣被仰封戸事、

〔台記別記〕久安五年十月十六日甲子、今日攝政殿〇藤原忠通北政所從一位藤原朝臣宗子有准三宮勅宣事、上卿左兵衞督重通卿、依召參右仗、藏人頭皇太后宮權亮爲通朝臣宣下之、大內記長光制作之、其勅文曰、

勅、位由德昇、天給之典無朽、封遵功進、漢榮之文長存、從一位藤原朝臣者、攝籙之嫡室、皇后〇近衞后藤原呈子之母儀也、訓導克宜、施榮輝於掖庭之月、節操夙標、傳佳譽於曲阜之風、況朕〇近衞義同祖母、禮如順孫、撫養之恩惟深、報酬之忠最切、是以緬訪芳躅於倭漢、將准徽號於宮闈、宜授本封外邑合三百戸、年爵并內外官三分、主者施行、

久安五年十月十六日

中務輔不候之間、下給藏人丞平實重云々、〇又見本朝世紀、

〔台記〕久安六年正月一日己卯、今日今麻呂被聽昇殿、〇中略次拜禮了參大相府、〇藤原忠通問伊通卿曰、公未蒙准后宣旨、兩方拜賀未詳、前後爲之如何、答曰、宜取主公處分、卽使資憲取之、有公等可計決之報、問伊通成通兩卿、持疑未決、此間主公使今麻呂催拜賀、兩卿曰、大外記師業朝臣參催、宜尋決者使資

云、花族ト云、申ニ及ヌ所ナレドモ、竹園攝家ノ外ニ、未准后ノ宣旨ヲ被下タル例ナシ、平相國清盛入道、出家ノ後、准后ノ宣旨ヲ蒙リタリシハ、皇后ノ父タルノミニ非ズ、安德天皇ノ外祖タリ、又忠盛ガ子トハ名付ナガラ、正ク白河院ノ御子ナリシカバ、花族モ榮達モ今ノ例ニハ引ガタシ、

〔常樂記〕文和三年四月十七日、北畠入道(准后一品覺空)於紀州賀名生圓寂、

武臣

〔准后准三宮考〕武臣准后の始

太政大臣從一位平清盛入道(浄海)

此人は、八十一代安德天皇の御外祖なりければ、安德御卽位ありし治承四年二月、浄海夫婦共に准三后を宣旨せらる、是武臣准三后の始めなるべし、されど逍遙院殿の御記には、鹿苑院(〇足利義滿)毎事の樣、攝家昇進の如くなる故に、始めて此宣を蒙らしめ玉ひしよしを注せられたり、心得られず、但浄海のことは、其例の始のよからぬ事なれば、斯くの玉ひしにや、若くは又武家の代となりて、准三后の始、鹿苑院殿に起れりとのことにや、

〔公卿補任〕後小松永德三年癸亥

左大臣從一位源義滿二十六、右大將、征夷大將軍(中略)六月廿六日、宣下准三宮之由

〔公卿補任〕後花園寬正五年甲申

左大臣從一位源義政(中略)十一月廿八日准后宣下

攝關大臣室家

〔榮花物語〕十二玉の村菊 同じ月(〇寬仁元年三月)の十七日、大殿(〇藤原道長)攝政を內大臣殿(〇藤原賴通)に讓りきこえさせ給、(〇中略)われはたゞいま御つかさもなき定(〇定原作みや、據一本改)にておはしますなれど御くらゐはとの(〇藤原道長)もうへ(〇道長妻倫子)も准三宮におはしませば、(〇長和五年六月、准三宮)世にめでたき御ありさまどもなり、との丶御まへの御さいはひは、さらにもきこえさせぬに、うへのおまへかく后とひとしくて、よろづのつかさかうぶりをえさせ給などして、としごろのにようばうはみなかうぶりえ、あ

清華

每度之例也、

准后　宣下仰詞不審條

從一位藤原朝臣准三宮賜年官年爵食邑內舍人兵仗

〔公卿補任〕後土御門明應六年丁巳

前太政大臣從一位藤原政家五十四、前關白、四月十六日准三宮、賜年官年爵食邑封戶、如忠仁公故事、可作勅書之由宣下、

〔勅書寫〕安政三年八月八日、鷹司關白政通公、當職固ク辭退之處、被聞召、乍併如關白中內覽兵仗等、如舊宣下、格別依勤於勞、八月八日、同日准后宣下也、御頂戴、

勅、倂披皇圖、緬稽囊策、昭代之典、崇重元勳爲貴、聖王之政、優待碩德爲先、爰前關白太政大臣藤原朝臣、斧藻仁義、珪璋令範、專任博陸之勞、已三十有四年、光輔兩朝、用贊皇猷、羽儀百辟、式熙帝載、啓沃之謨、酌泉源而弗竭、忠貞之節、貫雪霜而靡渝、信人倫之氷鏡、道義之標準也、非進褒德勸功之典、曷示尊賢尙齒之儀、宜加年官年爵、一准三宮、食邑三千戶、以內舍人二人、左右兵衞各六人、爲隨身兵仗、並賜帶仗資人三十人、如忠仁公故事、普告遐近、令知朕意、主者施行、

安政三年八月八日

〔准后准三后考〕清華准三宮の始。

未詳

逍遙院殿の御說に、清華其例希なり、たしかに所存を得ず、北畠親房卿南朝に於て宣下なり、當朝には用ふべからずと注されたり、さらば其初さだかならずと云べし、

〔太平記三十一〕吉野殿與相公羽林御和睦事附住吉松折事

北畠入道源大納言親房〇ハ、准后ノ宣旨ヲ蒙テ、華奢タル大童子ヲ召具シ、輦ニ駕シテ宮中ヲ出入ス、其粧天下耳目ヲ驚カセリ、此人ハ、故奧州ノ國司顯家ノ父、今皇后嚴君ニテオハスレバ、武功ト

寺殿御文書被取出令見給勘例等在之、忠仁公以來三千戶也、次立寄日野黃門許閑談、冷泉黃門參會、次歸宅、

長享三年四月五日　宣旨（此書樣、以今案仰宣秀了、法中無年官年爵、又封戶二百戶、或三百戶歟、從一位第一也、前關白太政大臣也、前官以載位爲是、）

從一位藤原朝臣

宜賜准三宮年官年爵封戶三千戶

藏人左少辨藤原宣秀奉

十三日辛丑、次參二條殿、准后去十日御出家之由承及候間所參申也、禪閤出座、聊御言談之後歸宅、

〔公卿補任 後土御門〕延德三年（辛亥）

前左大臣從一位藤原政基（前關白、十一月廿八日、准三宮宣下、）

〔實隆公記〕明應六年正月十六日己未

抑今夜准后宣下計、仰詞師卿有御存事、續左、

勅、依功勞授爵級者、王道之令典也、以剛柔佐政化者、攝關之彝範也、關白從一位藤原朝臣（家○政）者、朝之重臣、國之元老也、而今不加褒章、向後定貽謗譏、宜加年官年爵、一准三宮、又食邑三千戶、以內舍人二人、左右近衞、左右兵衞各六人爲隨身兵仗、幷賜帶仗資人卅人、如忠仁公故事、普告遐邇、俾知朕意、主者施行、

應永廿二年十一月廿八日

猪隈大閤（家○藤原實）

嘉禎四年三月廿五日勅書曰、年官年爵一准三宮、又食邑三千戶、以內舍人二人、左右近衞、左右兵衞各六人爲隨身兵仗、幷給帶仗資人三十人、如忠仁公故事、

嘉禎以來、兵仗員數一樣也、其前有不同、計內舍人二人、幷帶仗資人三十人、如忠仁公故事之詞等

〔愚管抄 二〕前關白忠實保延六年二月、中重内聽蒙輦車、六月五日准三宮、

〔本朝續文粹 四表〕辭准后表　　敦光朝臣

臣忠實言、今月三日、中使從二位行權中納言兼右衞門督中宮權大夫藤原朝臣宗能至、賜以勅命、抑厥款誠、雖仰聽之可塞、更歎綸誥之不許、臣某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪、臣聞、陶唐至治之時、稷契持仁義之仗、隆漢昇平之日、蕭曹整文武之冠、信廼俟國器以導俗、開世鑒以馭民者也、臣小量而入大麓之路、下愚而登上台之階、萬機者昔之務也、割錦之用早休、貳膳者今之齡也、和羹之味如忘、謹披勅書、俯奉叡旨、宰臣之親、皇后之祖、隆邦家之褒賞、叶兆民之仰望、三宮之儀、一門之擬蹄歸者、渙汗之命、慙慨于情、撿舊風於寬仁、則不及前賢百萬里、尋故實於治曆、亦猶少曾祖十餘年、有何徵猷、繼彼勝躅、況復長女〇崇德后聖子之備后妃也、𥟖翬褘而占芝砌、少子〇賴長之帶將相也、閃雷戟而步槐庭、臣非材非藝、少功少勳、經四代之明時、爲一朝之元老、高秩厚禮者、君之惠渥焉、嘉遁逸遊者、臣之願足矣、方今容姿差變、診候屢加、擺塵累於城闕、驗谷神於林泉、松軒秋風、傳山中宰相之遺愛、藥欄曉露、訪淮南道士之秘方、伏羨陛下參天之德、尊容鄙懷、兩曜之明、曲察野牘、前表所請皆徒停廢、至于岩阿逃名、郊端養性、帝鄉不遠、伴白雲而廻往來之駕、樵徑爲隣、逐青嵐而恣閑放之心、既斷羈束、寧叨寵榮、不耐荷懼之至、重抗表陳乞以聞、臣某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

保延六年七月十二日　　從一位臣藤原朝臣上表

〔宣胤卿記〕長享三年四月四日壬辰、大閤〇二條持通准后事勅許、明日以消息宣秀可宣下由、勸修寺大納言狀到來、法中准后消息宣下、度々事歟、俗中准后消息宣下初例歟、不然事也、勅書略定歟、甚可謂無念、　五日癸巳、參二條殿大閤、持通公、七十三歲、准后事賀申、進例之太刀、御出座、消息宣下無例歟之由申之、今時分雖有斟酌、有子細被忘云々、定御得度近日歟之由推量、又封戶數事、先例申不審之由、無御所見云々、一條殿有御所見歟可尋申云々者、參殿下尋申此事、後成恩寺殿〇藤原兼良御時、文書紛失、其以前成恩

〔扶桑略記二十五村上〕天慶九年五月廿日、關白太政大臣藤原朝臣忠平、詔准三宮、本隨身外更授內舍人二人左右近衞四人、以爲隨身、又賜任人爵人、時年六十九也、

〔本朝文粹四論奏〕同公〇藤原忠平辭攝政准三宮等表　後江相公〇大江朝綱

臣某中謝臣聞、用陳力、奉上之規自存、易務求功、御下之訓既謬、何則冶兼金而成器、鎔範之工足觀、構散木而爲材、剞劂之美何在、取喩於臣、何遠之有、臣病臨老倍耄逐日加、事與心違、同於反鑑之取容、旨過物戾、類於倒裘之求領、爰攝籙之勤、兼四海而未免、官爵之賞、准三宮而難當、昔五湖泛浪、遙遁珥蟬之榮、萬鍾拋恩、更返屠羊之肆、是則讓功不居、辭賞無受、彼猶若此、矧於愚臣、縱招臣身逆旨之咎、寧遺吾君妄施之名乎、況邊鎭不閑、重門有驚、隴頭秋水、白波之音間聞、邊城曉雲、綠林之陳不定、仰恐先朝寄託之重、俯乖聖世康和之風、豈非委任失材、致此災變乎、朝慙夕惕、寢興無聊、抑魁首將門、獸心人面、結黨聚徒、公行剽劫、狂謀不悛、猶同朱髮之賊、野心彌熾、不異白額之禽、陛下皇威遠振、玄德潛通、鈇鉞之誅未及、神明之戮先加、幽顯合契、身殞於一箭之前、遐邇同歡、首傳於千里之外、開闢以來、帝王之跡、夷凶息暴、未有如當今速者也、微臣筋骨疲衰、犬馬之力難展、陛下聖德鼎盛、日月之光彌新、以此施化、無思不服、伏願曲廻如綸、憐此匪石、早停不堪之攝行、亦收無功之重賞、天地覆載之仁、窮聖襟而化下、春秋生殺之令、決叡慮而撫民、樵夫野老、謗議自停、餘燼遺孽、逆心長滅、不勝悚懼屛營之情、謹重拜表、陳讓以聞、臣某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

天慶三年五月廿七日　太政大臣從一位臣藤原朝臣某上表

〔日本紀略九一條〕寬和二年八月廿七日癸亥、今日勅、攝政藤原朝臣〇兼家准三宮幷以內舍人近衞等爲隨身兵仗、如忠仁公故事、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕治曆三年十月七日壬子、前大相國〇藤原賴通賜准三宮勅書、年官年爵食邑三千戶、內舍人二人、左右近衞各六人爲隨身、資人卅人、如忠仁公舊事、

山、稟質猶輕、恐不爲風下之草、今不堪悃誠、重表以聞、勅答曰、表諭累沓、含咀雅言、來誨慇懃、反覆而已、公仁爲己任、化導朕躬、所以推朕之心、置公之腹久矣、蓋功被天下者、當受天下（○者以下五字原脱、據一本補、）之重賞、而公風素在懷、書白其節、不履肥美之地、屢吐降挹之詞、夫謙云損云、減省所享之封也、今公空有上台之號、顓辭以其封賞、豈非行過於謙、事違於法乎、仍以先辭之封賞、爲今日之褒賜、皇天猶當降以福、鬼神未可害其盈、何貪公好謙之高義、不顧朕忘德之醜名、令朕剗戻崇飾之典、孤負長養之恩、公是朕之鷹鏆、亦須從其熊虎、加公之威重、增朕之干城、豈以在直廬之故、闕其隨身之兵仗、又年官者、先帝之遺規、非朕之新意、孝子善述父志、忠臣不失主心、公爲忠臣、朕爲孝子、不亦美乎、但來表以爲穀稼載登、皃雁在御、然後食邑、固不敢當、朕重違元老之意、欲開福謙之門、宜分爲三以享其二、自餘一如前詔、即斷後章、　五月六日辛亥、太政大臣重抗表、苦辭隨身兵仗封邑及年官准三宮之恩賞、優詔不許、　廿日乙丑、先是今月六日太政大臣重抗表、辭加增封邑帶仗資人、是日勅答、前後之章、一二毛擧、在於茂績、當有殊加、事之舊也、今公露款瀝懷、流謙見底、銷浮雲於心壑、澄晧氣於胸陂、幅之至矣、朕嘉損挹之爲美、更恨成典（○典原脱、據一本補、）之猶淹、望其必享、豈有量乎、而公志貞夫一、讓過于三、匪席之心、朕何眷焉、所以許此辭邑之高、永彼有隣之日、但至于圓闕鳴秋（○鳴秋恐鴻秩誤）群封復舊、自如前詔、其餘命有司施行、難以收汗、誠宜緘言、

〔大鏡二太政大臣良房〕このおとゞ（○藤原良房）は文德天皇のおぢ、太皇太后明子の御ちゝ、清和天皇の御祖父にて、太政大臣准三宮位にのぼらせ給ひ、年官年爵の宣旨くだり、攝政關白などし給ひて、十五年こそはおはせしか、おほかた公卿にて卅年、大臣の位にて廿五年ぞおはせし、

〔扶桑略記二十二宇多〕仁和四年二月廿二日、關白太政大臣藤原基經、勅准三宮、賜年官年爵、如忠仁公（○藤原良房）舊事、（○年五十三）

〔日本紀略二朱雀〕天慶二年正月廿八日、太政大臣（○藤原忠平）任人賜爵並准三宮、一如貞觀故事、

（據部氏文集補、）敢踰法、唯盡其所當宜、其封戸全食三千、以內舍人二人左右近衛左右兵衛〇（左右兵衛原脫、據部氏文集補、）各六人、爲其隨身之兵、又給帶仗資人三十人、年官准三宮事、亦當奉遵先帝之遺詔、又大臣所保官爵、皆是先朝之寵章也、於朕之時、無一加益、仍欲增授一位之餘階、而深忌亢極、固自遜辭、朕不敢睽〇（睽原脫、據一本補、）逢、全其冲挹、斯亦屈己之志成人之美也、普告遐邇、令知朕意、

十四日庚寅、太政大臣從一位藤原朝臣良房抗表曰、臣伏奉今月十日勅位、賜臣以食邑如舊命、年官准三宮、帶刀資人隨身兵仗等事、荷恩不力、銜膽無間、臣聞太政大臣者、上理陰陽、下經邦國、一人有慶、師範猶施、四海無波、儀形自用、而先帝不棄臣庸瑣、委以此崇班、純陽未免履氷、臘月逾添流汗、自愧形影、深執撝謙、唯許減封三分有一、又隨身兵仗等事雖舊貫、臣不敢當其仁、年官則恩是新情、臣未堪爲其首、故臣並固辭、以視不虛受、今陛下更憲章先帝、重宜慰鴻私、忠誠不移、先後惟一、臣欲推賢以避路、何私陛下公選之官、將扶老以于城、何分陛下宿衛之士、況比年調和不偶、水旱重仍、倉廩少禮節之資、城池失金湯之險、故去十一年六月二十六日、聖主下勅曰、服御常膳、並宜減撤、同年七月二日、公卿上奏曰、五位已上封祿、亦蹔減折、其議未復、其事猶存、豈君臣偏好卑讓、蓋內外共待豐稔、若以斯時、全食彼邑、欺耻格於先帝、而取嫌猜於當時也、且尸素者天奪其鑒、充盈者鬼瞰其家、溫飽有餘、何以忘止足、年齡已暮、蹔欲養遊魂、臣所以不奉遵、公私兼濟而已、不任懇款屛營之至、謹修表狀陳讓以聞、不許、

十八日甲午、太政大臣重抗表曰、去十五日中使中納言藤原朝臣基經至奉宣聖旨、返臣上表、將遂先勅、頻苦剋肌、再慙蜚耳、臣自謂功之輕薄、鴻毛則其重萬鈞、賞之深淵、瀛海則其淺三尺、蓋荒年祭祀、禮不必充豐、嘯歲威儀、事或從儉約、今陛下藜羹自存、王公茅土且減、臣全不食邑之意、將斷先己之嫌、若事不得已、義可必行、五稼登年、群臣復舊、然後同享所減、臣願足矣、又陛下不許臣就私第、賜直廬於禁中、霜仗百重、隨身何用、虎賁千列、帶仗安施、臣所以固辭、亦復在此、臣所有一兩僕隸、皆是陛下幼年之侍童也、隨分得官者、或年三四人、陛下以爲慰舊功力、臣以爲拜家數人、未報萬乘之先恩、何擬三宮以新制、臣持心不重、蹔欲樂地中之

四月三日　　常宗

此兩內親王ハ、後光嚴院皇女候哉、

〔職原抄上〕太政官

准三宮大臣者、每年給官爵、爵即從五位下、官乃掾若內官也、如三宮之儀、

〔准后准三后考〕攝政准三后の始

太政大臣從一位藤原良房

〔實隆公記〕明應六年

攝政准后事

忠仁公〇藤原良房　昭宣公〇基經　貞信公〇忠平　忠義公〇兼通
法興院殿〇兼家　御堂殿〇道長　宇治治暦三十七、于時關白、〇頼通　知足院殿〇忠實
猪隈殿〇家實　峯殿〇道家　後普光園〇良基　成恩寺應永廿二十一廿八、于時關白、〇經嗣
後成恩寺〇兼良　大染金剛院〇持通　九條前關白〇政基

〔三代實錄十九清和〕貞觀十三年四月十日丙戌、勅、功多者賞厚、先王之通規、德茂者位尊、往哲之彝訓、是故蒼精既著、增高於曲阜之基、朱火以光、加映於博陸之地、爰及本朝、亦有舊典、皆迹存於鉛槧、事絢於緹緗、朕外祖父太政大臣藤原朝臣、風槩沈遠、器度淹凝、摘勝之寄攸歸、據斗之任是重、朕自在襁褓、賴其保生、義爲君臣、恩過父母、蓋有不世之功、須受非常之寵、而鳴謙在心、卑損無已、所行顯著之績、春秋繁茂、成降崇之典、歲月寂寞、今朕已得成人、大臣頽齡漸暮、若遂捨多之美、不崇加異之章、則恐當時後代將歸謗於朕躬、夫太政大臣法當食邑三千戶、及隨身兵仗、國有成式、又准三宮給年官、〇官下原有給字、據都氏文集刪、先帝之恩寵也、至于封邑固讓二千、唯享千戶、隨身等事、皆辭不受、朕以祿法所當、古賢不辭、既能有其功、居其位、何不食其祿、增其威、然則所辭封邑等事、乖元老崇班之義、非國家褒飾之心、故今不〇不原脫

明俾聞知、主者施行、

保延三年四月十二日　　作者大內記令明

〔本朝世紀〕久安二年四月十六日己卯、今日有暲子內親王○鳥羽皇女准后勅書事、內大臣召內記、大內記藤原長光參軾、內大臣仰云、暲子內親王准后勅書、附陽明門院之例可草進者、長光奉仰歸掖陣、成草持參、內大臣見畢仰云、有御畫歟、長光申云、不可候、內大臣仰云、延久之例有御畫事、彼日上卿京極大殿也如何、長光申云、准后勅書之記、一品康子內親王也、彼時無御畫事、延久有之者誤也、其由見故敎基朝臣私記、內大臣被仰合民部卿顯賴卿、申云、如長光申不可候也、延久之例有失錯之由、粗所承也、仍淸書奏聞、內大臣召中務大輔季家下給勅書、次親族公卿參弓場有拜賀事、

勅、親九族而敦睦、唐堯之聖德長昭、建諸姬而分封、周發之賢行既舊、暲子內親王者、朕○近衞同產之姉也、瓊樹粧馥、早受偏愛於姑射之風、紫蘭色鮮、專養濃艶於后房之露、今見柔儀之婉順、將旌殊常之寵章、宜本封之外、更加千戶、以爲公主湯沐之邑、亦任人賜爵、殊准三宮、布告遐邇、俾知朕意、主者施行、

久安二年四月十六日

〔新抄〕文永四年六月廿六日、壬午准后宣下、伊世齋宮(後嵯峨皇女愷子內親王)爲准后

〔女院小傳〕五條院傳子後嵯峨三女、母孝時入道女、號刑部卿局、正應二十二七爲內親王、廿八十日准三宮、

同日院號、永仁二十一廿五御事、卅三

〔實隆公記〕明應六年正月十九日壬戌

執柄臣准三宮例、注進候、平相國○平淸盛出家以後、准后宣下候歟、於親王者連綿候、同時相並准三宮事、治子內親王昭子內親王近例候、其外先規等は、院號人先准三宮、又以勿論候、不能註申候哉、常宗誠恐誠恐謹言、

准后之慶賀可奏此由者、予即參御前奏云、內親王蒙准后宣旨、爲賀其事關白已下侍臣兩三參候者、各奏其官名等如例被仰聞食了由、即退下、帶劔把笏、於關白前仰聞食めしつと宣不由了退去、諸卿拜舞了、關白被參御前、又召予被仰云、以按察藤原朝臣長家可爲祐子內親王別當之由可仰者、予申云、可仰他上卿歟、將只可仰彼人歟、仰云、只可仰彼人也者、即仰長家卿了、在南廊下良久之內大臣參進被奏詔書清書、予奏之即下給了、內府云、不可內覽由有其仰、仍不可內覽者、予時丑二刻許也、○中略後日督殿被命云、准后事是無術事也、雖皇子猶可依攝錄之緣邊歟、齋宮齋院是已隔數年姉也、而先彼有此事、謂天下如何、又神意可恐歟如何、努力云云者、又內密談云、藤氏皇后于今無其人、已非託宣旨、源氏皇后蒙神罰之後、以其子息忽被下准后宣旨、尤背神意歟、尤可恐々々者、先日主上○後朱雀密被仰云、准后事忽不可然也、給千戶封之人々當時有其員、加之有齋宮齋院事、仍更不可思立、然而關白懇切奏此事、仍難止也云々、此間事人心不可思量者也、可以目也、無益々々、一品事不被仰、仍取案內、仰云、此度不可叙也者、關白有許容云々、

〔扶桑略記二十九後三條〕延久元年六月十九日甲寅、第一內親王聰子叙一品、給千戶封邑幷年官年爵、

〔一代要記七後三條〕聰子內親王(中略)延久元年六月十九日叙一品、准三后、

〔扶桑略記三十白河〕承暦三年八月十七日、勅、以篤子內親王○後三條皇女准三宮、賜封邑千戶、依祖母陽明門院○後朱雀皇后禎子內親王之讓也、

〔中右記〕保延三年四月十一日、或人云、內○崇德御風指事不御者、天下大慶也、從大殿○藤原忠實給御消息云、明日院姬宮○鳥羽皇女叡子內親王可准后事、可立拜人不見、必可參也者、　十二日、今日准后、上卿大宮大夫師頼卿、

勅、堯日分暉、垂明德於既晞之露、唐棣連蕚、傳芳猷於孔懷之風、某內親王者、朕○崇德之小妹也、受鍾愛於茅洞、致鞠育於椒房、全枝忩粧、林慮之春花媿色、銀潢流譽、泌水之曉浪讓聲、朕今思親之厚意、將強殊常之寵光、宜訪舊典、以准三宮之儀、加本封、以增千戶之邑、又任人賜爵併如前規、布告遐邇、

見仍申行、勅書大内記宣義作之、奏草清書等、清書無御畫日、仍返奏後給中務少輔孝明、裝束一具給則忠、三位表衣、宰相中將則忠加車、中宮權大夫可叙二位、□□右兵衛督叙三位、爲三人下馬爲寄不少、未事了前退出、依不心地宜也、子時、

勅、周天之雲遍覆、何殊穆親、法水之波遙融、猶憶叙族、二品脩子内親王者、朕(〇一條)之長女也、長宮之月早隔、已爲扁雲、中殿之風漸養、自有穠李、天性之愛、一時難弛、是以立權制、更寵章、叙一品准三宮、本封之外、加以千戸、又任人賜爵、皆同先規、布告遐邇、俾知朕意、主者施行、

寛弘四年正月(御畫)廿日

〔日本紀略一條十一〕寛弘四年正月廿日戊午、勅、二品脩子内親王叙一品、年官年爵准三宮、本封外加千戸、

〔小右記〕長和四年十二月廿八日甲辰、資平云、女三宮(中宮〔三條后藤原研子〕腹、七歳、禎子、)給千戸封、又准三宮年官年爵宣旨下、左大臣奉之、於陣座奉宣旨、資平傳仰之、(有勅書、)

〔日本紀略三條十二〕長和四年十二月廿七日癸卯、勅、禎子内親王、年官年爵准三宮、本封之外加千戸、

〔日本紀略後一條十四〕長元三年十一月廿日己巳、第一章子内親王、於飛香舍著袴、(〇五歳)勅、本封外加千戸、任人賜爵准三宮、即叙一品、

〔春記〕長曆四年十一月廿三日甲戌、今日故中宮(〇後朱雀中宮嫄子、藤原賴通女、實敦康親王女、)第一女宮著袴日也、(〇中略)小時予(〇藤原資房)依召參御前、勅命云、祐子内親王(〇後朱雀皇女)可下准后宣旨之由可仰内大臣(〇藤原教通)者、予返奏云、准后非指號、只本封外加若干戸封、任人賜爵一可准三宮之由可被仰下歟、此間關白(〇藤原賴通)被候、即被仰此由云々、又勅語云、尋先例可行由可仰者、予即以此旨仰内大臣了、(〇中略)内大臣召予、仍參陣頭、被奏云、祐子内親王非尋先例、本封之外加千戸封、任人賜爵可准三宮由、有其詔云々者、予先申關白殿、殿下命云、可然事也、奏事之由可宣下者、即奏之、依天許仰下又了、少時内府參進、以予被奏詔書草、予先經内覽了奏聞、即返給之、關白已下諸卿并侍臣兩三人參候、(在南廊壁下、)予依召參進、關白命云、

夕大殿女子叙從四位下、名勳子、〇鳥羽上皇後宮上卿中宮權大夫宗能卿、有位記請印、藏人辨資信仰下也、位記留御所、少納言雅國參仕、次件人有准三宮宣旨、召大內記令作勅書、給中務大輔忠兼、封五百戶、

勅、有功必酬、遺彝範於竹帛、積德餘慶、傳嘉猷於枝葉、從四位下藤原朝臣勳子、三朝輔弼之長女、四德淑美之哲媛、穠華養艶、三槐之露久薰、貞節在心、仙松之風靜調、今分恩輝於茅土之貢、將准徽譽於椒庭之儀、宜授邑土五百戶、幷年爵內外官三分、主者施行、

長承三年三月二日

上卿中宮權大夫宗能、作者大內記令明、中務大輔忠兼宣奉行、

親王

〔平戶記〕仁治三年十二月十八日丙寅、今日故四條院女御〇藤原彥子被下准后宣旨、殿下〇藤原實經御猶子之儀云々、仍令申請給也、

〔伏見院御記〕正應三年正月十九日、今日從三位藤原相子〇後深草上皇後宮蒙准后宣旨、內大臣奉行之、先奏宣命草、次奏清書、有親族拜、內大臣、三條大納言、皇后宮權大夫、別當冷泉宰相、新宰相立之、爲弘長例云々、

〔日本紀略十一一條〕寬弘八年六月二日甲辰、是日三品敦康親王叙一品、本封之外加一千戶、准三后給官爵、

內親王

〔准后准三后考〕內親王准三宮の始

一品資子內親王

是は六十二代の帝、村上天皇の皇女にて、冷泉院御同腹の御妹にてましますなり、此後內親王にこの宣下あること、連綿してたえず、

〔日本紀略六圓融〕天祿三年十二月十六日壬寅、勅、資子內親王本封之外加千戶、

〔法成寺攝政記〕寬弘四年正月廿日戊午、內府候御前間被仰云、女一宮依前例叙一品、幷本封之外加千戶、任人賜爵事如何、奏有前例被行有何事奏、仰云其□□行者召外記尋前□天曆八年見日記、具

〔基煕公記〕天和二年十二月七日庚辰、今日准后宣下(○房子)云々、上卿勸修寺大納言云々、抑准后之事、執政臣女爲女御時、不及准后宣下、直爲立后、於在位間宣下之例無覺束、爰先日從先殿下(○鷹司房輔)被尋關白(○一條冬經)之處、被注送例、即一覽之間、寫留之、此例年序相違之由、前關白被談之、仍引勘之處、後妙花寺關白(敎房公)自筆　氏系圖(余家物也)之中被注付趣尤相違、從關白以何本被勘出歟、不審、於彼家者、以敎房公自筆殊可爲證者也、然者僻覺歟、又依無例僞用歟、不可說々々々、總當世體非所及愚存、如此執政臣在朝行事、朝廷繁昌歟、衰微歟、是非可在神慮、只末世之體沾袂者也、

從關白被出例(被送前關白一紙也)

御在位中女御准后例

宣仁門院(四條院妃○藤原彥子)

仁治二年十二月三日入內、同月十七日准三宮、

新陽明門院(龜山院妃○藤原位子)

文永十二年二月廿六日女御、同日准三后、此外御在位時內親王准后例多候、

右四條院例、縱雖在位間不吉例也、其上崩後也、敎房公自筆本趣如此、(○中略)又新陽明門院、是又非在位條現然也、如此例被用朝廷上は、大臣小臣頂冠有何益哉、不便々々、

〔續三宮傳〕靑綺門院、(櫻町院皇后、御諱舍子、二條前關白贈准后吉忠公御女、御母從三位菅原利子、)元文元年十一月廿五日入內、同日女御宣下、同五年五月廿七日准三宮、延享四年五月廿七日皇太后宮、(三十二歲)

〔續三宮傳〕新皇嘉門院、(仁孝帝女御、御諱繫子、)文化十四年十二月十一日入內、(廿一歲)同月十二日女御宣下、(○中略)

文政三年十二月廿六日准三宮宣下(二十四歲)

〔中右記〕長承三年三月二日壬子、知信朝臣爲大殿(○藤原忠實)御使入來云、彼御名字、大貳實光所撰申、君字勳字可用何字哉、予(○藤原宗忠)申云、君字勝由申了、猶勳字勝由重申了、君字故一宮御名也、仍憚也、今

辨　宣基

封戶宣旨案

左少辨藤原朝臣定光傳宣、權大納言藤原朝臣資藤宣、奉勅、從二位藤原朝臣康子封、宜宛賜伍佰戶者、

應永十三年十二月廿七日　造興福寺次官左大史兼備前權介小槻宿禰彥枝奉

廿九日壬申、准后宣下下行、下帳之事、幷東照宮御年忌度々勘進之事、

一昨日廿七日自花山院家被申渡准后宣下下行帳下書二冊、一冊ハ諸司ノ人數、如元和度、一冊者同人數、大概除之、以今度立親王宣下之高調之、今日局務同道令持參花山院右大將家了、且又東照宮御年忌分度々可勘給由、內々從花山院有命、仍今日是又書付進了、右自局務被勘出之、

自禁裏勘例被仰出事

一自禁裏番所有召、即參非藏人部屋、勸修寺大納言經慶卿被面謁、被命云准后封戶千五百戶之例有之哉、可勘進由仰也云々、予云、新廣義門院准后之外者、千五百戶之例無所見之旨令言上了、猶勘於所見者可言上由被示了、

勸大密語云、准后封戶、近年誤テ五百戶有之、元來千戶也、然此度被改千戶之條、復舊儀珍重之由、小槻爲緒宿禰之記ニ有之云々、何比之記歟、予不儘問勸大云、所詮此度千戶可然歟之由被語之了、

十二月七日庚辰

准后宣下事

今日女御從三位藤原朝臣房子令蒙准三宮宣旨給、陣儀一刻限辰一點著束帶令參陣、大外記以下諸司等同以參陣也、剋限上卿著仗座、奥職事出陣、仰仰詞、上卿移端座、以官人令敷軾、

〔扶桑略記二十九後三條〕延久四年十二月一日乙亥、女御源朝臣基子准二三后一、給二年官年爵幷封戸五百烟一、

〔季連宿禰記〕天和二年十一月廿五日戊辰

先日油小路頭中將隆眞朝臣被二招引一、准后女院〇靈元女御新上西門院房子、鷹司教平女、宣下封戸之員數幷封戸宣旨一枚可二勘進一由被レ命、尋二今日注二折紙一令レ持二參折紙一、注レ左、但宣旨ノ案者立紙ニ書レ之、

高陽院　長承三年三月二日准后、封五百戸、

陽祿門院　文和元年十月廿九日准后、封五百戸、

北山院　應永十三年十二月廿二日准后、封五百戸、

中和門院　元和六年六月二日准后、同日院號定　封三千戸、

公卿　左大臣烏丸大納言　西園寺大納言　今出川大納言　河野中納言　中院中納言　平宰相

職事　季俊朝臣

辨　光長

淸子內親王

寛永六年十月廿九日准后、封三千戸、

上卿　右大臣

職事　經廣朝臣

辨　俊完

新廣義門院〇後水尾後宮藤原國子　延寶五年七月五日准后、封千五百戸、

上卿　右大將

職事　淳房朝臣

〔迎陽記〕應永十四年三月廿三日丁丑、今日北山院〇後小松准母藤原康子御入内也、舊年十二月廿七日爲御准母儀、令蒙准三宮宣給、上卿新大納言資藤卿仰大内記長頼、令作勅書、奉行五位藏人宣資也、宣下以後、長頼持參勅書、有恩祿、砂金年官年爵事、被仰大外記師胤朝臣、封戸事被仰四位史大枝宿禰、共成宣旨持參、賜祿云々、勅書草、

勅、易彰牝馬之貞、載坤卦、詩揚鳲鳩之德、歌國風、若稽舊章、咸爲令典、從二位藤原朝臣某者、朕之准母也、柔順表質、嘉淑有詞、降紫詔兮、既加二品之崇班、託彤管兮今准三宮之貴寵、宜授邑士五百戸幷年爵内外官三分、主者施行、

應永十三年十二月廿七日〇中略

恭惟、准后尊君〇足利義滿者、四海之儀形、一人之股肱、萬機之政、一統而治、寰中莫不讋懾、域外咸以歸服、淳撲之風再復、清平之世久全、九十餘年御入内之嚴儀、絕而无其例、二十六年御在位之明世、興而有斯事、朝廷之嘉模、國家之遺美、每各矣勸、陳力就列、輕車霆激、驍騎龍移、便旋閭閻、盈溢街衢、凡棧敷輪輿數十町、鼓操男女幾千萬、集而成市、匝而如垣、禁中更無成恐見物之女、堂上皆有競媚取榮之人、綺羅紛々、文繡粲々、其美被撰、唯愛所下、國母女院者、長岡之右相數代之餘裔、開府儀同三司之賢女、久備嘉偶、飽存貞心、譬猶大姒之德和於内、文王之政明於外、母堂浴三品之加級、親族施一家之昌榮、乾坤成其德以揚名、佛神與所運而遣寵、詩曰、淑人君子其儀不忒之謂也、千秋偕老之盟無窮、一天仰瞻之望益久者也、日野大納言殿無一事之違亂、有大儀之奉行、世皆感悅、人以稱歎、秀長〇菅原忝蒙鈞命、聊記毫端、雖恐僭踰、謹以奉進而已、

〔尊卑分脈藤原〕眞夏〇中略―資康―女子太政大臣義滿公室、准后、從二、康子、北山院、後小松院准母、應永十四三五院號、同廿六十一十一崩、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕永承六年六月廿四日、右大臣藤原朝臣敎通三女、女御歓子准三宮、賜年官年爵封戸一千戸、一云七月十日准三宮云々、

〔准后准三后考〕女院准后の始
高松院〇中略
近き比ほひ、後水尾法皇の御母は、後陽成院の女御代にておはしませしが、准后の宣を蒙らせ給ひて後には、中和門院と申し奉りき、

〔宣順卿記〕承應三年十月五日、秉燭之後、自殿下（〇二條光平）資熙（〇中御門）可參之由有御使、則伺候、御命云、院宣（〇後水尾）京極局（亡主〈後光明〉御母儀）准后院號（〇壬生院）宣下、（日付、去八月十八日、消息宣下、院號消息宣下、此度初例、）可爲上卿三條中納言（實敎）辨資熙、以密儀承（女院〈東福門院〉）譲給、可有御沙汰之旨、以園前大納言（基色、舊主内々雖有此御氣色、女院譲給無御沙汰、）此仰之旨行三黃（〇三條西實敎）許、可傳仰由殿下御命也、仍向三黃、三黃云、此頃依未著陣雖不請下知、如此時節申子細如何承之由答、此次而京極局、名字繼子、亡主御諱紹ツグ（〇後光明諱紹仁）同訓、不可然之由申了、（後被改光子、從三位、）壬生院（此院號、院御所御定、）准后院號等消息宣下（今度初例）不可然、無消息、只口づから可仰旨被命外記、御參内次而召寄可仰云々、大内記にもくちづから可仰云々、宣旨被請事、（院號ハ官宣旨、封戸ハ外記宣旨、准后ハ勅書、）自待賢門院已後不被請子細、院へ被進宣旨事、有間敷事也、玉葉にも被進事有難、宣旨武家臣下への可爲沙汰事、萬事（殿舍稱等）不本式故也、近クハ北山院被請、仍今度宣旨不被請者可然之由上卿被命云云、勅書は被受云云、今度封戸數、准后ニ五百戸、院號ニ千戸、本自臣下戸數少物也、（子細ハ賜封戸之後准后宣下アル故、戸數多ナリ、）

〇按ズルニ、帝母ヲ准三后ト爲ス事ハ、尙ホ帝王部皇后篇ニ載ス、參看スベシ、

准母

〔山槐記〕治承三年六月十七日甲辰、子刻白川殿（准□故六條攝政〈藤原基實〉室、六波□□□國女、）於白河亭（延勝寺、昨日依獲麟、自重宗法師宅今渡此給、）薨逝、　廿日丁未、安房守定長來曰、依白川殿御事、主上（〇高倉）可有御錫紵哉否之由、以頭中將通親朝臣被申院、又被問□記、當今在藩之時、御座六條攝政亭白河殿、爲彼□家被奉養育、卽位之後、猶准母儀、有准后、

〔百錬抄（九安德）〕養和元年二月十七日、從三位通子（故中殿攝政〈藤原基實〉女）有准三宮事、依可爲帝准母儀也

西華門院、源基子、後宇多妃、後二條母、內大臣具守一女、父大相國基具爲子、母從三位平親繼女、弘安八月日奉誕後二條、十七、或十六、德治三八廿六爲尼、淸淨法、卅、依後二條御事也、延慶元十一廿七敍從三位、十二月准三宮、同日院號、

〔女院部類〕光範門院資子、贈左大臣藤資國女、准大臣資敎爲子、後小松院妾、稱光母、後花園養母、○中略

應永三十一年七月廿九日准三宮、同日院號、

〔康富記〕文安元年四月廿六日乙巳、參伏見殿、○中略今夜有准后宣下事、國母當今(後花園)井二宮之御母儀、伏見入道親王北政所、○後崇光院妃源幸子令蒙此宣旨給、

〔和長卿記〕大永六年五月廿日壬寅、今夜東洞院殿○後奈良生母藤原藤子有准后宣下事云々、

〔孝亮宿禰記〕元和六年六月二日戊申、今日准后宣下陣儀從三位藤原朝臣前子(後水尾生母)宣、爲准三宮事門院號定被付行仗議有之、

上卿左大臣、近衞殿信尋公公卿烏丸大納言、光廣西園寺大納言、公益今出川大納言、宣季阿野中納言、實顯中院中納言、通村平宰相、時慶奉行職事正親町頭右中將季俊朝臣參仕、辨竹屋右中辨光長、大外記師生朝臣、右大史孝亮、少外記――少史――六位史安倍盛勝、今日召加主典代、

宣旨

右中將藤原朝臣季俊傳宣左大臣藤原朝臣宣、奉勅、從三位藤原朝臣前子封宜宛賜三千戶者、

元和六年六月二日　　左大史小槻宿禰孝亮奉

右中將藤原朝臣季俊傳宣左大臣藤原朝臣宣、奉勅、中和門院封雜物等宜如舊奉宛者、

元和六年六月二日　　左大史小槻宿禰孝亮奉

右中將藤原朝臣季俊傳宣左大臣藤原朝臣宣、奉勅、改准后宜爲中和門院者、

元和六年六月二日　　左大史小槻宿禰孝亮奉

准后例　帝母

權右中辨藤原朝臣長順傳宣
權大納言源朝臣建通宣、奉勅、女御正三位藤原朝臣夙子封、宜宛賜仟戶者、
嘉永六年五月七日
修理東大寺大佛長官權中務少輔主殿頭兼左大史小槻宿禰輔世奉
陣始巳剋
終午半剋
陣之次第
准三后宣下次第
上卿著仗座、奥職事來仰仰詞、次上卿移著外座、令官人敷軾、次上卿以官人召大內記、仰勅書之事、次內記持參勅書草、入筥上卿披見之、次上卿進弓場、付職事奏之、內記取筥相從御覽畢返給之、次上職事仰仰詞、次上卿歸著陣、仰可令清書之由於內記、次內記持參清書、入筥上卿披見之、次上卿歸著卿進弓場、奏之、御覽畢返給之、次上卿乍令持筥於內記、見御畫之有無、職事仰仰詞、次上卿陣、內記置筥退、次上卿以官人召中務大輔、下勅書、乍筥先是召外記、問中務參否、次上卿以官人召大外記、仰年官年爵之事、次召辨仰封戶之事、次上卿令官人撤軾、次上卿起座
〔玉海〕文治六年四月十九日壬寅、今日當今〇後鳥羽母儀〇藤原殖子敍三品、即被下准后宣旨了、是余〇藤原兼實再三所奏請也、勅別當權中納言親信卿云々、彼母儀伯父也上卿內大臣、
〔業資王記〕正治元年十二月十三日辛未、主上〇土御門御母儀〇源在子被下准后宣旨云々、近日三品局所勞、殊大事云々、
〔女院小傳〕玄輝門院藤愔子後深草妃、伏見母、左大臣實雄第三女、母大納言隆房女、從三位藤臧子、弘安三正八敍從三位、卅五正應元十二十六准三宮、卅三同日院號、同四八廿六爲尼、自性智、四十六、元德元八卅御事、〇中略

中務輔給之、次召内記賜空宮、

〔基煕公記〕元祿二年正月廿九日丁酉、酉剋著冠直衣參仙洞、〇靈元准后宣下珍重之由申入之、卽參内左大將二條大納言等不慮參會、仍一同申入珍重退出了、今日宣下、上卿今出川大納言、奉行頭頼重朝臣、弁輔長云々、又准后母儀東二條叙三品云々、委細可尋注之、

准后　宣下次第

上卿參著仗座、奥　職事來仰、仰詞〇中略　次上卿令官人召弁　仰封戸事、　次弁於床子仰史　次

上卿起座

右次第從頭頼重朝臣許寫取之了、頼重朝臣爲覺悟私書次第云々、

勅書如此

勅、母以子貴、舊史之旨斯著、封依功進、蓋聖之典聿宣、從三位藤原朝臣宗子、柔儀内備、淑貞外彰、欲顯親愛之恩、正准后宮之班、宜授邑士千戸、任人賜爵、一如舊典、主者施行

元祿二年正月廿九日　幼主自令加給云々

宣旨如此

右中弁藤原朝臣輔長傳宣、權大納言藤原朝臣伊季宣、奉勅、從三位藤原朝臣宗子封、宜宛賜壹仟戸者、

元祿二年正月廿九日

修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史算博士小槻宿禰季連奉

〔准后宣下一會〕

官宣旨申次　澤備前權介宣嘉

トアリ、猶ホ年官年爵篇ヲ參看スベシ、

名稱

〔有職問答〕一准后事

俗體、法體、女房にも有之、但淸花には希也、

北畠に任じ候事候由被仰出候、其分候哉、

親房卿於南朝宣下也、當朝には雖不可用之、予今准后と稱來候、

〔官職難儀〕准三后とは、太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮の三に准ずる事なり、后の宮にて有を、男又法中になさるゝ事、道理に叶はぬ樣なれど、貞觀十三年に、忠仁公准三后年官、年爵、封戸等を賜はらる、是は官爵封戸を給らん爲なり、年官年爵とは春除目に諸國の掾一人、目一人、秋除目に內官を給、叙位に叙爵を一人給る也、給をば誰にても申任じ給ふ事なり、又法中に成給ふは、光明峯寺關白の御息、御室法助と申せしに、御母儀政所准后にてわたり給ひしを、讓申されたるより此がた、例となりて皆成給ふなり、三后とも三宮ともいづれへも申なり、同事也、准后とは中略したる事也、

〔准后准三后考〕謹て按ずるに、○中略桓武より後は、代々、皇后宮、中宮、二宮を並置かれしなり、此事は、むづかしき事にて、其說長ければ、先大略を述るすなり、○中略然るに又近き代には、女御よりすぐに中宮に立給ふといふこともなく、多くは准后の宣旨を行はるゝ例になりたり、思ふに是は其初より女御にはましまさず、女御代にておはしますが故に、又中宮に准せられて、准后の宣旨ありて、後々には院號を參らせらるゝ事にぞあるべき、

准后宣下式

〔柱史抄下后宮〕准三宮事

內親王幷女御、帝外祖母、執政臣等、多有此事、當日內記參入、上卿著仗座、召內記、內記參軾、仰云、某可准三宮、□□內記退歸成草參進、內覽奏下如恒、次持參淸書、覆奏之後、上卿還座、內記□□退、上卿召

古事類苑

封祿部七

准三宮

准三宮ハ准三后トモ、准后トモ云ヒテ、太皇太后、皇太后、皇后ノ三宮ニ準擬シテ、年官、年爵ヲ賜フヲ云フ、清和天皇ガ文德天皇ノ遺詔ニ遵ヒ、外祖父太政大臣藤原良房ノ勳績ヲ褒スルニ與ル、然レドモ是時ノ勅旨上表ニハ並ニ年官ノ事ノミアリテ年爵ノ字ナシ、恐ラクハ年官ヲ舉ゲテ年爵ヲ包ネタルナラン、而シテ三后ノ年官、年爵ノ事ハ、是ヨリ前ニアリシナラン、然レドモ史ニ所見ナシ、江家次第、職原抄、及ビ長承二年ノ中右記、久安五年ノ兵範記等ノ諸書ニ據リテ考フルニ、敍位ニ從五位下一人ヲ賜ヒ、除目ニ內外官ノ內三分一人ヲ賜フ者ノ如シ、三分トハ公廨ノ分法ヨリ出デヽ、諸國ノ掾ヲ云ヘルナレドモ、內官ヲモ之ニ準ジテ賜フナリ、是ヨリ後、帝母、准母、後宮、親王、內親王、法親王、攝政、關白、太政大臣等ニ賜ヒシ事、其例頗ル多シ、而シテ其後宮ニ賜フハ、後ニハ之ヲ皇后ニ立テ、若シクハ院號ヲ上ランガ爲ノ準備ノ如クナレリ、後一條天皇ノ寬仁年間ニ前太政大臣藤原道長ニ、入道ノ後ニ賜ヒシガ如キハ、殊ニ變例タレドモ、後ニハ常々コレアリ、後世ニ至リ藤原道家ノ子僧法助ヲ准三宮トセシハ尤モ特例トス、而シテ本封ノ外ニ若干戸ヲ加フルハ、准三宮ノ事ニ干ルニアラザレドモ、准三宮タル人ハ必ズ賜フコトヽ爲レリ、夫レ准三宮ハ官職ニアラザルナリ、位階ニアラザルナリ、特ニ年官年爵ヲ賜フベキ爲メナルヲ、此ヲ以テ位(位トハ官職位階ヲ統稱スルナリ)ト稱セシコ

參議從四位上平時望（中略）同（寬平）九年七月十三日、從五位下、（成院御給、御卽位次）

〔公卿補任朱雀〕承平七年丁酉

參議從四位上藤顯忠（中略）延喜十三年正月七日、從五位下、（東宮御給）

天慶二年己亥

參議從四位上藤敦忠（中略）同（承平）二年十一月十六日、正五位下、（依中宮御給加階）

〔權記〕長保二年九月廿三日丁卯、候御前之次、奏齋院被申臨時給爵給光尹加階事、御返事云、光尹事、先日自東三條院有被申之事、而受領吏買上階、於事不穩、仍不承之、爲之如何、須被申他人、奏文注目錄、

〔本朝世紀〕康和元年六月廿八日己亥、關白從一位內大臣藤原師通公薨、（○中略）五年（○延久）正月七日、依親父左大臣讓、叙正五位下、卅日（○卅日原作此日、據一本改、）以東宮御給叙從四位下、

〔兵範記〕仁平二年十二月十九日己卯、今夕藏人平義範叙爵、前女御基子（○後三條天皇女御、准三宮、長承三年薨、）爲未給云々、

〔玉海〕嘉應三年四月廿二日丙寅、昨日有小除目、上卿源中納言雅賴、宰相左大辨實綱云々、（○中略）

敍位

正二位藤原實房（○建春門院去年御給）　同邦綱（坊官賞）

以院宮御給叙上階、未曾有事也、

〔公卿補任高倉〕嘉應三年辛卯（○承安元年）

權大納言從二位藤原實房（廿五、四月廿一日、正二位、建春門院去年未給）

權中納言從二位藤原邦綱（五十一、四月廿一日、正二位、坊官賞、預此度）

〔公家新制四十一ヶ條〕弘長三年八月十三日　宣旨（○中略）

年爵

權少目磯部浪滿朝臣當年給權大納言藤原

伊豆權少掾藤井延弘內大臣當年給二合所任

甲斐權目坂田重久春宮權大夫藤原朝臣當年給

〔薩戒記〕應永三十三年三月廿七日辛酉

請以男正六位上長繁被拜任諸司助狀

右公卿子息給二合、請任諸司助、是恒規也、以件長繁被拜任諸司助者、知奉公之貴矣、謹請處分、

治承三年正月十四日　　參議正三位平朝臣敎盛〇中略

請以男正六位上久家當年給二合被拜任諸司助狀

右以公卿子息年給二合、請任諸司助者恒例也、望請早被拜任者、知公卿之貴矣、謹請□處分、

應永卅三年三月廿七日　　參議從三位行左近衞權中將藤原朝臣定親

〔朝野群載〕四朝儀

童爵申文

某內親王家

正六位某姓朝臣名

右當年給爵所請如件

年月日　　書位

〔公卿補任〕醍醐延喜廿一年辛巳

參議從四位下藤邦基〇中略昌泰元年十一月廿一日、從五位下、太皇大后宮御給、

延喜廿三年癸未〇延長元年

參議從四位上藤扶幹〇中略同〈仁和〉三年五月十七日、從五位下、御即位爵次院御給、

延長八年庚寅

延喜五正　美濃權大掾正六位上伴朝臣良友停中務卿親王去四年臨時給同二年二分　同

天元四秋　尾張掾正六位上民連全成太政大臣康保元年給權大目額田秀倫不給任符秩滿替二合所任　雅信

天元元秋　丹波權掾正六位上伴宿禰利主兵部卿親王申停天暦九年內給御處分常陸目式養二合所任　同

長保元春　備中權掾正六位上藤原朝臣善理停故太政大臣天元三年給上總權大目坂上岡眞二合所任

轉任二合尻付事

今案　故。太。政。大。臣。天元三年給、以件善理任權大目而二合所任、同人轉同國掾之時如此可有歟、若轉他國掾者可注本國名其目也、

今案　其人其年給以件某任大目、而去年依獻五節舞姬、二合所任、依五節轉任之時如此可有歟、

〔園太暦〕康永三年正月廿五日丙戌

內舍人橘光氏公賢臨時申○中略

掃部助藤原季景停權大納言藤原朝臣實去年臨時給河內介藤原信弘請任息子○中略

右京權亮藤原堯光停左大臣建武三年給二合去年八月所任伯耆權大掾春道花明請任息子○中略

大和權守三善康文切也折紙雖被載子細大略也

大目天田有久關白當年給○中略

加賀大目山松繁右近大將藤原朝臣當年給

權少目藤井花盛參議藤原朝臣持當年給

伊勢掾藤井行爲內豎頭

尾張權目立花春榮權大納言藤原朝臣實當年給

參河權大掾清原國安內豎散位

遠江目漢部重晴權大納言藤原朝臣名當年給

長治二年正月廿三日　正二位行權中納言藤原朝臣仲實〇中略

臨時給〇中略

大臣

天元二　信濃介正六位上高向朝臣行方外帥申左大臣高明　雅信

長德三　肥前權掾正六位上滋野朝臣相如自二左大臣一臨時給

長德元　遠江介正六位上田口朝臣幸來道―臨時給

長德元　美濃權介外從五位下秦宿禰輔光內大臣臨時給

永承二　越中權介正六位上源朝臣祐異左大臣臨時給

康平二　但馬介正六位上紀朝臣末光左大臣臨時被レ申

延久五　但馬權介正六位上藤原朝臣賴高關白臨時給

治承三　相模權介正六位上藤原朝臣季長自餘―臨時申

右大臣臨時申

正六位上藤原朝臣季長

望二諸國介一相模權

治承三年正月十六日〇中略

納言

天元二　長門權介正六位上若麻續直元理大納言爲光中宮大夫藤原朝臣申　雅信

永觀二　加賀介正六位上伴宿禰廣時中納言文範民部卿藤原朝臣臨時給　同

寬弘二　大宰大監正六位上平朝臣信實大納言道綱東宮傅臨時給無二姓尸一如何

〔除目大成抄二〕以レ目替レ掾二合

昌泰三正　大和權少掾正六位上安倍朝臣惟良停二春宮寬平九年給出羽權少目坂上秋宗及同年々給一分二合一　時平

長德二　駿河大目正六位上建部宿禰忠信（大納言源朝臣當年給○中略）

按察使例

延久三　二合　同五　未給兩所

不加使例

長久五　二合　永承二　同五（○中略）

參議　二分一人　一分一人

永承四　長門少目從七位上文室眞人信通（參議藤原朝臣行經當年給○中略）

納言　隔四年二合

永久四　備後權掾正六位上豐原朝臣有廉（右大將藤原朝臣（家忠）當年二合○中略）

五節二合（大臣以下躍參議獻五節次年必二合）

（往當年例）長保元　讃岐掾正六位上秦忌寸邦成（內大臣當年給依獻五節舞姬二合）

長德四　肥後少掾正六位上平朝臣清忠（民部卿藤原朝臣當年給依獻五節舞姬二合）

（去年當年共往例）同　美濃大掾正六位上藤原朝臣信時（齊信朝臣當年給依獻去年五節舞姬二合）

康平七　阿波掾正六位上坂上宿禰松依（權中納言藤原朝臣依去年獻五節舞姬當年給二合）

（去年當年共不往例）長保元秋　讃岐掾正六位上船木宿禰種守（中納言平朝臣給依獻五節舞姬二合所注）

長治二　備後少掾正六位丹波朝臣國光（權中納言藤原朝臣依獻五節二合所任）

（納言二合式下勸例）

可勸二合年（件爾去年獻五節舞姬仍今年當二合年）

正六位上丹波朝臣國光

望諸國掾（備後少）

右去年依獻五節舞姬當年給二合所請如件

五節之用途者、奏請之旨、尤可許容、抑奉五節舞姬女、非宰相之職、納言以上、同營此事、自今而後、大臣已下參議已上、今年獻五節舞姬者、其明年給殊許二合、但納言以上、若當二合年、廻宛他年、立爲恒例者、

安和二年二月十四日　大外記兼播磨權少掾菅野朝臣正統奉

〔類聚符宣抄七〕諸國一分事付公卿給

中納言橘朝臣

當年給一分補他色

天祿元年十二月廿二日

正三位行中納言源朝臣雅信宣、奉勅、中納言橘好古卿、當年給一分宜補他色、

天祿元年十二月廿二日　少丞清原佐時

〔朝野群載七公卿家〕公卿年給御申文

正六位上凡宿禰貞義

望淡路大掾

右承德元年正月給未補、所請如件、

承德二年正月廿五日　從一位藤原朝臣

〔除目大成抄一〕當年給〇中略

公卿

大臣太政大臣二分一人　一分三人
左右大臣二分一人　一分二人

永久四　越前大目從七位上上毛野朝臣延國關白當年給〇中略

納言二分一人　一分一人

原師遠返答云、公卿不獻五節舞姬以前、不申内官二分之由所承傳也、見雜例抄任官卷又大臣納言之間及三度之例、多獻五節之次年當二合年者、先申年給二合、五節二合ヲバ後ニ申之故實也、或又年給二合、五節二合相並天被任例存之、今案、只五節二合ヲ被申天、年給二合不被申例多、又公卿消息名字載二合書事、參議者獻五節、不二合以前不書之歟云々、

〔蟬冕翼抄〕前攝政關白預年給事

九抄云、凡預年給之人、院宮、男女親王常例、此外女御、尚侍等也、而院宮后付准親王、女御、尚侍等之類者、其身雖出家猶預年給、至公卿者避其本官之時、況出家之後無預年給、倩案此事、至院宮者雖有出家而不離其職歟、至別宣旨之人不付職、只身ノ恩ニ給フ之故歟、至公卿者付其官之故ニ、辭官バ不預年給歟、而關白攝政雖無其本官預年給、是ハ有別宣旨歟、將一人職勝大臣准大臣歟、所不審者、前大臣之前關白攝政猶年給之理不審也、

〔三代實錄〕十九清和貞觀十三年四月十八日甲午、太政大臣重抗表曰、〇中略臣所有一兩僕隷、皆是陛下幼年之侍童也、隨分得官者、或年三四人、陛下以爲慰舊功力、臣以爲拜家數人、未報萬乘之先恩、何擬三宮以新制、〇下略

〔政事要略〕二十六年中行事中卯十一月新嘗祭事

右、大臣宣、奉勅、參議治部卿正四位下兼行伊豫守藤原朝臣齊敏、參議左大辨從四位上兼守大藏卿行備後權守藤原朝臣文範等、去年十一月三日奏狀偁、謹撿案內、大臣已下參議已上、所勤公役、專無差別、所賜封祿、甚以懸隔、其參議之封只六十戶、仍爲優勤勞、殊賜兼國、而諸國公廨多申減省、無本舉數處分之率已少國司之員倍多、適所當之料、勤致物貪、難支急用、就中五節之事、所費不少、彼茅土高貴之家、猶傾貲產而多勞、蓽戶閑素之輩、還損公威而有恥、方今雖募二分之年給、曾無一人之企望、僅要判官、更辭主典、世俗所變、人心難齊、然則年官月俸有名无實、望請殊蒙天恩、早降二合之宣旨、將支

可給式部丞、直廬儀之時攝政作之、召外記下之、攝政不帶大臣者、傳一上給外記云云、但曆仁二正、攝政殿雖不帶大臣給、召大外記師兼被下之、又仁治三三五、縣召除目始、(御前初度去五日敍位猶爲直廬儀)關白殿(兼經公)被下之、關白殿執筆、左大臣(實經公)可令下給之由、關白殿雖令申給、左府令申子細給、關白殿令下給、先例不詳、猶左府不可令下給歟、

一內給以下外國年給事○中略

公卿(五節二合未給チハ雖前官如諸司助、近衞將監、兵衞尉、未給ニ天擧申子息、如當職、於年給外國者、去職後ハ雖未給不申之、二合チハ自新任年皆可勸之、但未申者自申任之年可許之、)

大○殿○(攝關父雖不帶大臣、有外國給、保安二正廿三記云、除目中夜也、被上殿下(藤原忠實)御給御申文、令覽給、去夜內兼有沙汰、故大殿(藤原師實)嘉保元、令讓申關白於後二條殿(藤原師通)給之後、同二年三年有御給、師通勸申、此例、○中略)

納○言○目一人、一分一人、(新任次年可申任二合也、但有不然之事等、自新任年宛二合、年々可勸之、以申任二合之年、後々可勸之、)

宰○相○目一人(獻五節次年二合、其外不二合、天暦已後例云々)

大○臣○者隔年二合、(或每年二合、但近代不然、二合ト云者任掾之號也、三合シ天任介、或又二分二合シテ任介云々、但近代三合シテ任介事不見、)納言者三年二合、或注四年、注五年、已雖區、所詮隨計樣可一同云々、三年二合ト云者、任タル次年ヨリ計天又任ズル前年マ天三年ニ當ル也、中三年ヲ計天三年二合ト云、又四年二合ト云者、任タル次年ヨリ任ズル年マ天四年ニ當ル也又五年ト云者、任タル年ヨリ又任ズル年マ天五年ニ當ル也、且三條入道左府(藤原實房)○御說如此云々、近代外記勸上之計樣又如此云々、或又大納言者三年二合任掾、中納言者五年二合之由雖見古抄、大中納言近代無差別、二合年計樣同前、任大臣之次年必二合之由有舊說、大中納言猶初任之次年可上二合申文歟、參議者獻五節次年之外者不二合也、申子息二合之時任諸司助允近衞將監兵衞尉等、參議同前、納言之間子息二合兩度申任例存之、天治元正十九、故攝州○中

公卿給

長德二　近江大掾正六位上河內宿禰行業（女御元子當年）

寬弘四　越前權少目從七位下與道宿禰傳濟（從二位女御義子當年給）

同　備中掾正六位上日奉宿禰興賴（從三位尚侍妍子當年給二合）

長德二　山城權大目正六位上江沼宿禰富基（尚侍藤原朝臣當年給〇中略）

女御給年々

元子　長德元掾　長保元掾　同二二分代　寬弘七目

義子　長德三掾　同四同　長保掾　寬弘七目

尚侍給年々

綏子　正曆五掾　長德掾　同三掾　同四掾〇中略

典侍

天元四秋　陸奧權大目正六位上陽侯宿禰內成（典侍挸子朝臣當年給）　雅信〇中略

臨時給〇中略

女御尚侍

寬平十二　參河權大目從七位上尾張宿禰栗主（朱雀院女御義子朝臣臨時給）

寬弘二　大宰權大監正六位上藤原朝臣孝隆（女御茂子臨時給）

紀伊介正六位上藤原朝臣忠盛（尚侍藤原朝臣嬉子臨時給）　實資

〔除目抄〕公卿給事（作樣故實、見除秘抄并叙位略秘抄中、仍除之、）

執筆大臣、除目月若次月之間、作公卿給下給大外記、大外記召具式部丞參里第、以上﨟家司給之、或召簾下自給之、六位外記參之時、以家司（衣冠）給之、公卿給中ニ二合停任卷籠（天）給之、式部丞ニハ二合中ニ停任卷籠（天）給之、不給公卿給件文無禮紙裏紙、二合停任各二通也、一通ヲバ給外記、一通ヲバ

女御給　尙侍給　典侍給　掌侍給

賀茂齋內親王例

延久三秋　康平四

不ㇾ注₂齋王由₁例

延久元後子內親王齋宮也于ㇾ時卜定了、未ㇾ入₂諸司₁、

〔除目抄〕一內給以下外國年給事

女。御。

目一人　一分一人

尙。侍。

任ㇾ意天二合、或說別給依₂宣旨₁預ㇾ之、

一分一人近代二合、天曆比任ㇾ目、其已後被ㇾ任ㇾ掾、又臨時給被ㇾ申₂任介₁、寬元二年三年共任ㇾ掾、改被下勘外記不加口所ㇾ謂寬元二正廿三安木少掾中原康弘、典侍藤原賢子當年給二合同三正十三甲斐

典。侍。權大掾藤井則友典侍藤原賢子當年給二合

一分一人

掌。侍。

一分一人

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年正月十三日庚寅、是日勅₂女御從三位藤原朝臣多美子₁、自今以後每年給₂一分官一人、一分官一人₁、

〔除目大成抄一〕當年給〇中略

女御尙侍二分一人、一分一人、二合年限不定云云、

天曆八　周防權掾正六位上佐伯宿禰安秀從二位女御安子朝臣當年給二合　淸愼

齋宮給
齋院給

從七位上菅宿禰某丸
望諸國掾
右當年給所請如件
大治四年正月三日別當正三位權中納言源朝臣雅定
御申文此定也、但右狀不注別給由也、相尋之處、大外記師遠申云、宣旨未下先件法親王給、不知年給別給別巡給也、只每年給掾一人被成之由所聞也、有件親王宣旨被下、最前之年、可申定也、最前故顯季卿沙汰、次顯隆卿二人、不知案內、不沙汰、只上掾申文了、隨又被成也、爲之如何、或書別當由、或注無別當由、或封或否、入夜歸了、往年不沙汰、每年給掾、大奇恠歟、
〔除目大成抄 一〕當年給○中略

齋院。
正六位上淸原眞人常安
望諸國掾周防
從七位上大和宿禰儀永
望諸國□伯耆大
右當年給所請如件
長治二年正月廿五日

。齋宮。齋院例
長德二齋院　永承七二條院　延久二齋宮　嘉保元齋院

齋內親王例
長元四于時齋宮齋院共御座、無分別歟

將尙可ㇾ預二年給一之宣旨後可ㇾ進歟、答云、○藤原資信前例蒙二宣旨一有下進二申文一之人上、又雖ㇾ不ㇾ然有下獻二申文一之人上、但雖ㇾ無二宣旨一申請矣、不ㇾ可ㇾ有二其難一、仍近來多雖ㇾ無二宣旨一所ㇾ被ㇾ任也者、先年無二宣旨一不ㇾ可ㇾ獻二申文一之由所ㇾ執也、而今如ㇾ此、若改案歟、

〔親長卿記〕文明七年二月一日、參內、○中略除目聞書到來、書二加之一、○中略
相模權掾民原久邦高親王當年巡給

〔除目大成抄一〕當年給○中略
親王○中略
覺法法親王家
從七位上酒人宿禰久末
望二諸國掾一丹波大
右當年御給所ㇾ請如ㇾ件
永久四年正月卅日
|

〔中右記〕大治四年正月廿二日辛丑、裏書云
右衞門督實行卿談云、仁和寺宮覺法親王、每年給、諸國掾一人、年來顯隆卿進二申文一、彼卿卒去、從二今年一可二沙汰一也、而申文書樣幷掾事如何、予○藤原宗忠答云、別給人、每年給ㇾ掾也、是召二賜第一親王一之事歟、然者先別給巡給宣旨可ㇾ被ㇾ尋二問大外記一也、又申文書樣ハ、定在二年來成來一歟、可ㇾ令ㇾ尋給一歟、大略年來顯隆卿不ㇾ沙二汰此事一、推而進二上諸國掾申文一歟、
次日、新中納言雅定卿談云、今朝被ㇾ成二仁和寺宮別當一了、仍進二年給御申文一了加判先了
二品覺法親王家

數四十有餘、非隔數年難可周給、伏請總計親王、不別代々、輪轉而給、鱗次弗愆、將使先後然恨、男女共欣、永永相承以爲成式、但先來有勅所別給者不入此限、謹錄事狀、伏聽天裁、奏可、

〔左經記〕長元八年正月廿四日己酉、欲參殿之間、自內府〇藤原教通有可來之命、仍參入、仰云愚室親王〇禔子三條院御宇、蒙可預年給宣旨、每除目獻申文、而此十餘年失不獻申文云々、任舊宣旨猶可獻申文歟、將如何、申關白可被示仰旨者、卽參殿申此由、御報云、預巡給內親王、結婚之後、猶令勘預年給之例、可被申者、退出之次詣內府申殿御返事、卽召大夫外記賴隆眞人被問此事云々、

〔中右記〕保安元年正月十六日丁巳、今日政始也、〇中略次相具人々、參院御所、近々之間步行暫以候北面之間、頭辨奉仰、若宮預巡給之宣旨被下歟、書件宣旨持來左府歟、竊見之所、

元永三年正月十六日宣旨

顯仁親王

從今年宜預巡給

藏人頭權右中辨藤原朝臣伊通

書紙屋紙、頭辨持來左府也、近代被下外記令不下給官歟、晚頭退出、

〔長秋記〕天承元年正月廿日、除目始也、〇中略直詣內府宿所、大外記俊在簾外□□雜事之中不審事、凡雖蒙親王宣旨、可預巡給之由不給宣旨、不出年給申文云々、此事乖愚案、蒙親王宣旨者、雖不蒙宣旨、出巡給二合申文也、雖有蒙巡給宣旨之人、是希有之例也、預別巡給之人、蒙宣旨時仰云、可預巡給也、若不存此旨歟、又申云、親王不任外三分、只任二分一分也者、此事乖自案、巡給是諸親王作大巡二合任三分也、別給每年任三分也、何乖此理、不可任三分之由陳哉、但累代名家也、有所存歟、

保延元年四月廿六日己巳、依昨日催參內、〇中略又問云、〇源師時蒙親王宣旨人、准公卿可進年給申文歟、

長曆三年

大和掾大江廣賴 無品尊仁親王當年別巡給二合

尾張掾菅原明高 無品尊仁親王當年巡給二合○中略

別給 今上后腹第一親王給、別給人不入別巡給例 之、每年給也

若后腹親王有二人者、一人別給、一人可爲巡給歟、別給二人無其例、一身依難作巡不可預別巡給歟、

長保元 尾張權掾正六位上美努宿禰能長 式部卿親王當年別給二合所任○中略

無品善仁親王 皇子○堀河 家

正六位上內藏宿禰正道

望諸國掾 近江少

右當年別給以件正道所請如件

永保二年正月廿九日

正二位行權中納言兼皇太后宮大夫左衞門督源朝臣師忠○中略

臨時給○中略

諸宮

長德二 出雲權介正六位上當麻朝臣世保 春宮臨時御給、職事非常事、

〔三代實錄十淸和〕貞觀七年正月廿五日丁未、太政大臣從一位臣藤原朝臣良房○中略等奏議言、伏見自延曆至仁壽六代、親王年料給分主典史生等、每代各一人互稱一代不用通計、是以或隔一年即給、或經數年稀給、或省內親王不闕給例、執論各殊、披訴間出、天慈攸及、還似不平、謹按此事、格式不載、宣旨非切、從見流例、未詳本源、方今年中所出之給、始自三宮至諸司、有勞應補者、居常若其不足、而親王之

永承五祺子內親王當年給有疑可尋
延久元禖子內親王當年給　篤子內親王
　　　佳子內親王　　　俊子內親王
已上四人當代親王也、踐祚初如此、後々年不然、〇中略

別給〇中略

建久七
播磨大掾正六位上藤井宿禰滿安當年別給二合今上第一內親王
無品昇子內親王第一皇女〇後鳥羽家
正六位上藤井宿禰滿安
望諸國掾播磨
右當年別給所請如件
建久七年正月六日
別當參議從三位行左大辨兼勘解由長官越前權守藤原朝臣宗賴〇中略

別巡給今上后腹親王給之、別巡給當例、巡給者相承任之、
若有數人者不論男女作巡給之、假令有三人者隔二年當巡、〇中略

別巡給例巡給相承任例
寬弘八年
但馬掾文室興茂敦頁親王當年別巡給
阿波掾秦貞友敦頁親王當年巡給
長元二年
伊賀掾荒田部光安東宮長和五年別巡給
甲斐掾秦成信東宮長和五年巡給

依勅定懸親王巡也、又非后腹當時親王給之號也、一人之時每年任之、但末代無沙汰、寛元宗尊親王非后腹當代親王也給可有之歟、不有之歟、有沙汰、遂不被申之、非后腹當代親王給、某親王當年別給ト在之、將子內親王例也、此義可然歟、依勅定懸親王巡云々、寛平九六廿六宣旨云、尙侍藤原淑子別給、掾一人、一分一人、是年給一分之外也、每年任之、先人之說也云々、今案、攝州師遠歟、

〔除目大成抄一〕當年給〇中略

准后〇中略

無品善子內〇〇親王〇家

正六位上小長宿禰永宗

望諸國掾遠江少

從七位上六人部宿禰常貞

望諸國目尾張少

右當年給所請如件

長治二年正月廿五日〇中略

可勘巡當不件內親王巡給、二合當當年、

无品禖子內親王家

正六位上淸原眞人安元

望諸國掾近江大

右當年巡給二合所請如件

應德二年正月廿六日

散位從五位上橘朝臣資成

非准后內親王掾目各一人並任例

一說
假令
白川院第一親王一年　次年同院第二親王　次年同院第三親王
次年堀川院第一親王　次年同第二親王　次年鳥羽院第一親王
次年同第二親王
今案、是其代ノ親王一人ヅヽ可被申之心歟、

一說
一年白河院第一親王　堀川院第一親王　鳥羽院第一親王
次年白河院第二親王　堀川院第二親王　鳥羽院第二親王
次年白河院第三親王　堀河院第三親王　鳥羽院第三親王
今案、是其代ノ一二親王達ヲ分別シ天、一年ヅヽ可被申之心也、
古抄云、江帥卿示予師遠云、巡給ハ一代々々親王ヲ可作巡給之次第也、假令後朱雀院親王一巡、次後冷泉院親王一巡、次後三條院親王一巡之類是也云々、而予師遠所案異之、只依巡給宣旨之次第可被任也、假令巡給ノ人三人アラバ、三年ニ一度、四人アラバ四年ニ一度可任也、但一代親王一巡ヅヽ、悉被任之、極秘說也云々、

別巡給
第一親王每年二合依別勅也、今案、別巡給是也云々、別巡給トハ、當帝后腹親王不論男女、可預別巡給之由被宣下ヌレバ、一人御座ノ時ハ每年任之、二人之時ハ隔年任之、只可依別巡給之人數也云々、

別給

正六位上小野朝臣有連

望阿波目

右當年御給以件等人所請如件

長保四年二月廿七日

〔西宮記 臨時一〕諸宣旨

親王預年給事（上卿奉勅仰外記、代代無定事、后一巡、自餘大巡、或年給外有別給之、）

〔北山抄 三拾遺雜抄〕執筆細記（在別）

親王巡給有二說

一說、每親王作巡、假令有男女親王十人者、隔十當巡也、

一說、每一族作巡、假令有四代親王者、隔四年當巡也、長和親王不論男女皆一巡也、後朱雀院後爲一巡、後三條院後爲一巡、當時爲一巡等也、

但蒙准三宮勅書之人、不可入此巡云々、

近代用後說歟、近則治曆五年正月、當代親王五人、共預巡給例是也、

〔除目抄〕一親王巡給事（巡給、別巡給、別給、已上其號有三種、年給目一人、一分一人、外巡給二合事也、）

一巡給（巡給事、又在別抄、）

一代御後、親王不論男女預之、寛平御後親王有例巡給、別巡給云々、延喜六年五月宣、

一說

假令

白川院親王一年　堀川院親正一年　鳥羽院親王一年

今案、是其代親王一巡悉被申任之心也、

東宮給

下中件御申文、上卿被給之、下官仰云、令勘給否、次召大外記賴業眞人被下之、卽勘申、(勘文之中文等相具入宮獻之)次召下官被奏聞、卽返給、上卿被給下官賜位記、次又仰云、藏人藤原定經依臨時恩令叙爵、次上卿召少內記藤原能貴被仰兩人榮爵了、

皇太后宮職

請因准先例返上年々御給未補外國三分四人以正六位上平朝臣信淸被叙爵狀

外國三分四人

仁平二年未補

久壽元年未補

長寬二年未補

永萬元年未補

右返上年々御給未補外國三分四人申榮爵者例也、仍以件信淸所請如件、

仁安二年九月四日　　從四位下行亮藤原朝臣賴輔

御中文書樣如此、內覽院奏了引裏紙卷懸紙下奉上卿、

〔公卿補任 醍醐〕延喜九年己巳

參議從四位下藤原定方(中略)寬平七年二月十一日陰奧權少掾(御東宮)

〔除目大成抄 一〕當年給〇中略

諸宮〇中略

春宮坊

正六位上淸原眞人正忠

望若狹掾

皇太后給
太皇太后給

治承四年正月廿六日〇中略

臨時給〇中略

諸宮〇中略

寛弘四　美濃介從五位下十市宿禰明理中宮職臨時御給

〔除目大成抄〕一當年給〇中略

諸宮三分一人　二分一人　一分三人

永久四　土左大掾從七位上多治宿禰末國太皇太后宮當年御給

阿波大目從七位上毛野宿禰久友太皇太后宮當年御給

太皇太后宮職

從七位上多治宿禰末國

望諸國掾土左大

從七位上毛野宿禰久友

望諸國目阿波大

右當年御給所請如件

永久四年正月廿八日

臨時給〇中略

諸宮〇中略

元永二　河內權守從五位下藤原朝臣道清太皇太后宮臨時御給

〔兵範記〕仁安二年九月五日己巳、參院奏文書、其次愚息藏人信清、以皇太后宮年々外國三分合爵申敍爵由奏聞彼宮申文、即有勅許、入夜參內、新中納言忠親卿、行內文請印事、被候仗座、下官〇平信範著軾、

聞之後可下上卿者、予〇藤原資房 卽參內、奏名簿幷中宮御給、事畢出左仗下、 十二月十四日丙子、今日有直物事、〇中略 良經叙正四位下、皇后宮御給 爲善叙從四位上、前中宮〇藤原嫄子 未給云々、以人給叙上階尤難事也、而又近代事也、

〔除目大　抄 一〕當年給〇中略

諸宮〇中略

皇后宮職

從七位上藤井宿禰武方

望諸國掾播磨權

從七位上秦宿禰武元

望諸國目美作少

右當年御給所請如件

永久四年正月廿八日

治承四 伊豫大掾正六位上草部宿禰末光中宮當年御給

讃岐目從七位上藤井宿禰正恒中宮當年御給

中宮職

正六位上草部宿禰末光

望諸國掾伊豫大

從七位上藤井宿禰正恒

望諸國目讃岐

右當年御給所請如件

皇后給
中宮給

院號、停進賜、可爲判官代主典代歟、又內膳御飯、幷御米御封御季御服物等如舊可奉充歟、又年官年爵、彼時御出家、次年之正月、如元可奉充之由有宣旨、彼者依叙位除目程遠、忽無宣旨也、於此度者、除書在近、今日同可有宣旨也者、則參御所奏此狀、仰云、停太皇太后宮職、爲上東門院、停進賜、可爲判官代主典代、又御封、幷御季御服物、內膳御菜等、皆以如元可奉充、但內膳御飯者、自本宮被奏可停之由、仍可隨停止者、又年官年爵、如元可奉充者、則進陣仰此旨、則奉御封幷御季御服物、內膳御菜等、如元可奉充之由、兼又奉可停止內膳御飯之仰、歸陣腋仰大夫史貞行宿禰、次右府召大外記賴隆眞人於膝突、被仰院號幷年官年爵等事云々、

〔除目大成抄一〕當年給○中略

諸院○中略

皇嘉門院○藤原聖子

正六位上藤井宿禰守澤執筆入之

望諸國掾備前少

正六位上中原朝臣盛經

望內舍人二分代

右當年御給所請如件

治承三年正月十七日

〔園太曆〕康永三年正月六日、及晚叙位聞書到來、續左、○中略

從三位藤原定親　藤原實長後伏見妃(廣義門院藤原寧子)當年御給

〔春記〕長曆二年十一月二日甲午、晚景參關白殿、○藤原賴通依物忌於門外令申此案內等、仰云、召御前給御衣、有何事乎、卽給彼息名簿、被仰云、此名簿以中宮○後朱雀中宮藤原嫄子臨時御給、爵可叙從五位下之由、奏

女院給

可勘合不 件院者、天喜五年内官御給未補、

後三條院

正六位上平朝臣貞資

望諸司三分 左馬允

右前坊者天喜五年御給未補、仍所請如件、

承保三年正月十六日　正二位行權大納言兼春宮大夫藤原朝臣能長

〔榮花物語 十三木綿四手〕はじめの東宮をば小一條院ときこえさす、〇中略 一院とて、年官年爵えさせ給、藏人、判官代、なにくれさだめあるにつけても、あしくはおはしまさず、

〔園太曆〕康永三年正月六日、及晩叙位聞書到來、續左、〇中略

正二位藤原資明 一院(花園)當年御給 〇中略

藤原實俊 院(光嚴)御給 上(光明)被仰之、云々、

〔類聚符宣抄 四〕左大臣宣、奉勅、停皇太后宮〇藤原詮子職、爲東三條院、停進屬、爲判官代主典代者、

正曆二年九月十六日　大外記兼博士播磨介中原朝臣致時奉

同日於式御曹司爲尼

左大臣宣、奉勅、東三條院御給年爵年官、宜如舊奉充者、

正曆三年正月五日　少外記滋野

〔左經記〕萬壽三年正月十九日丁酉、早旦參關白殿、〇藤原賴通 則御供參大宮、〇中略 關白殿候御前、朝干飯方 召余〇源經賴 被仰云、太皇太后宮〇藤原彰子 今日可有御出家事、院號等事、准東三條院例、可被行歟、將當可有可被加行之事歟、上達部相共可定申之由、可仰右大臣者、余進座下申右府、云々、奉綸旨、移著南座、上達部相共議定、令余覆奏云、院號等事、大略准故東三條院例、可被行歟、則以御在所上東門院爲御名號爲

長保四　丹波掾正六位上清原眞人重方冷泉院當年御給
院御給請二一人一例　冷泉院
正六位上清原眞人重方
望二丹波掾一
右當年御給以二件重方一可レ被レ任狀如レ件
長保四年二月廿八日略○中

臨時給略○中

諸院

長德二　參河介正六位上穴太宿禰季保冷泉院臨時御給
長德三　備前權介外從五位下茨田宿禰忠式東三條院臨時御給
永承二　越後介從五位下藤原朝臣斯兼上東門院臨時被レ申
延久五　加賀介從五位下則孝王上東門院被レ申
安元二　伊勢權介正六位上藤原朝臣範俊上西門院臨時被レ申
上西門院臨時被レ申
正六位上藤原朝臣範俊
望二諸國介一伊勢權
安元二年正月廿八日

〔除目大成抄 二〕故者

諸院

永承元秋　修理亮正六位上藤原朝臣維綱後朱雀院長元七年御給
承保三　左馬少允正六位上平朝臣貞資後三條院天喜五年、前坊御給、御給有レ之、

師房

望某官

右當年御給所請如件、

年月日

別當公卿加署 當年給不加署書、外加封也、

中宮職准之可知 但大夫一人加署

舊年以往名替等類、隨事有某狀、仍不記之、

正六位上某姓某丸

望某官

右當年給二合、以件某丸所請如件、

年月日　官位姓名

大臣以下皆同之、但右狀之詞隨事可有狀、又至于內親王、其家司一人署日下、

〔除目抄〕一內給以下外國年給事

一院三宮

爵一人 三宮有女爵、東宮無之、但一院新院者有女爵、西宮抄、男親王有女爵之樣注之歟、院外春宮親王女爵一切無例歟、

內官一人 助允、或兵衞尉、近衞將監、又有臨時御給、雖御憚時、京官御給無相違被申任、叙位御給無之、年始被憚之故歟、後年以未給有被申叙之例、但誤天可叙歟之由、見先達勘草、

掾一人　目一人 二分代、若申任內舍人、　一分三人

此外准后人隨見在被申之、但攝關大臣准后之時、有限年給、外國之外爵給、內官給等不被申之、女人准后之時、雖凡人爵并內官給等被申之歟、

〔除目大成抄〕一當年給○中略

諸院　三分一人、二分一人、一分三人、

院給

仰内藏寮、申不堪之由不獻、仍仰内給所、

寬和元年二月廿三日戊戌、今日直物、依召參院、〇圓融被奏内給所名替文、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨〇中略

院宮御給申文體

某院宮

ム位姓某

望某官（據目載一枚）

右當年御給所請如件

年月日

大夫宮司加封、勅使來請時可被付奏、舊年御給宮司加名、（付藏人奏聞、不封、）

王臣申文

ム姓尸ム丸（右京人）

望某官

右當年給以某丸所請如件

年月日　官姓名

親王大臣右狀加二合字、隨人右狀相異也、納言隔五年二合、公卿名替申文、或時不入望國注右狀、童親王（幷）女御申文家司加名、

〔西宮記臨時三〕諸年給申文體

某院

正六位某姓某丸

内給所

天喜四　備中掾正六位上赤染宿禰色經 去年内給
永久四　伊豫大掾正六位上紀朝臣爲眞 天永二年内給
可勸給否 件内給、去年天永二年未補、
正六位上紀朝臣爲眞
望伊豫大掾
右去天永二年未補、以件人可任之、
永久四年十二月廿一日

〔吾妻鏡四十〕建長二年十二月九日庚子、野本次郎行時、名國司所望事、父時員任能登守之時、不付成功、直令解除之上者、如彼例可爲臨。。。時内給之由申之、爲淸左衛門尉奉行、今日有沙汰、其父時員屬越後入道勝圓在京之時、被内擧自然令任歟、被堅法之後者、不足爲例之間、輙叵蒙許容之旨被仰出、又臨時内給事、於三分官等者、依事體可被申請之、至國司以上者、可被停止其競望之由云云、

〔親長卿記〕文明七年二月一日、參内、○中略
近江權掾櫻井松忠 ○當年内給 中略
但馬權守源重正 臨時内給

〔本朝世紀〕天慶五年四月九日壬戌、此日有勅、召内給所錢百貫文、爲使藏人所雜色等、差小舍人并諸衛、物節分給東西飢饉疫疾之輩、

〔小右記〕天元五年二月十日癸酉、參殿、○藤原賴忠 申昨日勅命○圓融 旨、被奏云、豐樂院等修理事、欠亡大事、可令諸卿定申者也者、被仰云、羅城門武德殿等、同可在此中者、又被仰云、圓融寺御堂造畢云々、去年以往有非常事、不能臨幸、來月欲幸如何者、被申云、於御願處無妨臨幸、左右隨旨而已者、依入夜不能歸參、南殿壁代料絹、召内給所可奉之由、即被奏聞、　十二日乙亥、仰云、明日可有御遊、殿揷可召候者、

〔除目大成抄一〕當年給

内給一分三分掾二人、史生廿人、二分目三人、一分召別事也、不載除目、

永久四　參河大掾正六位上藤原朝臣經遠當年內給

下野少掾正六位上佐伯朝臣安里當年內給

周防掾正六位上秦忌寸重國當年內給

攝津少目從七位上藤井宿禰里安當

內給稱當如此　正六位上藤原朝臣經遠

望參河掾

正六位上佐伯朝臣安里

望諸國掾下野少掾

正六位上秦忌寸重國

望諸國掾周防掾

從七位上藤井宿禰里安

望諸國目攝津少

右當年內給以件等人可任之

永久四年正月十八日〇中略

未給

內給

長德三　美濃權少目正六位上縣主首富茂內給、天元五年巡給、未補所任、

一條院天元三年降誕、差親王時未給、在位間被任歟

年ませに掾を給はる、ある時は介を申、
封二千二百五十戸　職田四十町
左右大臣
目一人　一分二人
掾を申ことはじめのごとし
封戸千五百戸　職田三十町
納言
目一人　一分一人
四年に一度掾を給はる、又二分とて諸國の助允などを申給て子となす、
封大納言六百戸中納言三百戸　職田二十町
參議
目一人　五節まいらせたる時、掾をたまはる、
封六十戸
內侍
一分一人
〔除目抄〕內給以下外國年給事
內給　內給
掾二人　目三人　一分廿人
掾ヲバ稱₂三分₁、目ヲバ稱₂二分₁、一分ト云者、史生郡司等類也、近代不₂被₁任之、一分ヲ別シテ一分召ト云任₁之、

〔簾中抄〕下御給　年官　年爵　封戸　位田

內給　諸國掾二人　目三人　一分卄人

掾をば三分とす、目をば二分とす、郡司などをば一分とす、この內給といふは、內の女房などの中に給なり、

太上天皇

諸司允一人　爵一近代加階　諸國掾一人　目一人　一分三人　封二千戸

勅旨千町たてまつらるゝこともあり

諸院宮東宮もこの定

官も爵もおなじこと、又臨時に諸司助など申たまわらせ給ふ事あり、二分代とて、內舍人を申、これつねのことにあらず、封千五百戸、

親王

諸國目一人　一分一人

當代第一親王はとしごとに掾を給はる、さらぬ親王は巡をつくりて掾をば給はる也、又式部卿は一分二人、

一品親王　封六百戸　位田八十町

二品三品　封百五十戸　位田二品六十町、三品五十町、

四品無品　封七十五戸　位田四十町は四品也、無品無二位田一、

內親王はこれになからを減ず、位田は三分の一なり、

太政大臣

諸國司一人　二分三人

（親王巡給也、后腹有別巡給、或又年給外有別給、給皆依宣旨所預、）

女御、（依宣旨預之）尙侍二分一人　一分一人（每年二合過親王、不可然云々、可勘、）

典侍以下有一分一人、

〔二中歷年官七〕內給外官掾二人　目三一分二十人　一院三宮允爵一　掾目各一二分三　相國目一一分三・大臣目一一分二　親王二一分各一　納言以上同親王　宰相二分只一人　內侍一分各一人

今案、一院三宮、以一分一人申任內舍人、而近代以二分所申任也、大臣以上隔年二合三合成介、（或云每年）親王作巡而二合、（但第一親王每年給之、皇后腹親王爲別巡給云々、但式部丞加一分二人、）納言四年一度二合、以息子二合申任官助允、（或云五年）隔宰相進五節之時二合、

〔拾芥抄中末御給〕內給　諸國掾二人　目三人　一分廿人

太上天皇、諸司允一人、諸國掾一人、目一人、一分三人、爵一、（近代加階）

封戶二千戶、勅旨田千町、

諸院宮（東宮）官爵同之（或云、臨時中賜諸司助、又給二分代、內舍人、封戶千五百戶、或減五百戶、）

親王、諸國目一人、一分一人、（或云、當代第一親王者、每年賜掾、自餘親王者巡給之、又或式部丞者一分二人也、）

太政大臣、諸國目一分三人、封戶（千五百戶、減七百五十戶、）職田（四十町）

左右大臣、諸國目一分二人、封戶、（千五百戶）職田、（卅町）

內大臣、諸國目一人、一分二人、封戶、（八百戶）職田、（無之）

納言、諸國諸目一人、一分一人、封戶、（大納言六百戶、中納言三百戶、）職田、（廿町）

參議、諸國目一人、封戶六十戶、（或云、四年一度賜掾、申賜諸司二合助允、任子息云云、或云、獻五節之時賜掾、）

內侍、一分一人、

內官一人、外國三分一人、二分二人、

已上返上未給、被叙從五位下之員數也、

內官二人

返上內官未給二人之時、不入外國、

外國二分六人

返上外國二分六人之時、不入內官并外國三分、

內官一人、外國三分三人、

返上內官一人外國三分三人之時、不入同二分、

外國三分四人

返上外國三分四人之時、不入內官、近代多如此、或又五人、

外國三分二人、二分四人、（間又如此）

已上、此等ノ未給ヲ返上シ天、被申叙爵之時ノ員數等也、件未給雖非眞實之未給、隨時宜、外記註出之、件年々載本所之御申文、奏聞之後被下勘外記、以外記勘文、上卿又付職事、覆奏之後、上卿宣下內記局、外記勘様見宜旨抄、

年官給數

〔北山抄　三　拾遺雜抄〕除目

給數

內給三分二人　二分三人　一分廿人

院宮男女爵各一人（東宮无女爵）　三分一人　二分一人　一分三人

大臣二分一人　一分二人（太政官臣三人）

親王及納言以下二分一人　一分一人

長保元　美濃介從五位上十市宿禰明理（停冷泉院天暦六年臨時御給下野權介忍海高晴改任（冷泉院天暦恐一條正暦誤））

天（〇天恐正誤）暦六年、以小槻滋兼任下野權介、長德二秋、以大春日遠晴改任、同三秋、日下部惟遠改、同四春、以高晴改、

更。任。

延長三　薩摩權掾正六位上藤原朝臣直生（前坊十八年御給、以大國安國補任、廿年改任直正、而去年計先歷被任其替、仍更任、）　貞信公

天元二　肥前介正六位上別公種國（皇太后皇長和二年臨時給、貞元二年三月以別種國所任、不給任符、秩滿更任、）　雅信

永觀二　淡路掾正六位上掃守宿禰業茂（式部卿親王天祿三年給、件業成不給任符、更任、）　同

同　備中掾正六位上藤原朝臣文說（太政大臣天延元年給、同文說秩滿更任、）　同

同　上野權大掾正六位上上毛野朝臣公平（天元二年內給、同二年不給任符、秩滿更任、）

康平七　大宰少典正六位上紀朝臣吉任（故權中納言顯基卿長元六年給、不給任符、仍更任、）

保延四　伊豫少目正六位上三枝宿禰牛友（按察使藤原朝臣長承二年給、（公卿給有缺誤字）以件牛友所任、而不給任符、秩滿、仍更任、〇中略）

重。更。任。

長德四秋（押紙、秩滿落人更任也、私案、）　土佐權少目正六位上東部宿禰枝君（故太政大臣天元四年給日置久忠任、而不給任符、秩滿、仍更任、）

可勘合不

故太政大臣家（〇藤原賴忠、永祚元年薨、）

正六位上東部宿禰枝君

右去天元四年給、以件枝君任土左權少目、而依身病不赴任之替、去——年以日置久忠改任、亦稱非本望不給任符秩滿、仍以枝君可被更任之狀所請如件、

長德四年——

〔除目抄〕一合。爵。合。冠。間事（院宮返上內官井外國未給、被申敍爵一人事也、）

名替

長德二　大和權介正六位上藤原朝臣忠節停東三條院去年臨時御給平好光改任

可勘合不件院長德元年臨時御給、同八月以平好光任大和權介、而任符未出。

東三條院

正六位上藤原朝臣忠節

望大和介

右長德元年臨時御給、同八月以平好光任件國介、而依身病不賜任符、仍停件好光可被改任之狀所請如件、

長德二年正月廿一日　　左大臣正二位藤原朝臣中略○

四重

長德二　加賀掾正六位上野中宿禰守延停右大臣長德三年給錦輔成改任

長德三年春、當年給、以橘茂方任之、長保元、以上建部利政改任、同秋、以輔成改之、

長保元　土佐掾正六位上民連吉景停內大臣長德元年給二合大名福光改任

可勘合不件大臣長德元年給二合、同三年正月以大名福光任土佐掾、而任符未出、

正六位上民連吉景

望土左掾

右去長德元年給二合、同三年正月以大石福光申任件國掾、而福光依煩身病不給任符、仍以吉景可被改任之狀所請如件、

長保元年正月廿八日　　內大臣從二位兼行左近衛大將藤原朝臣作名中略○

五重

長德二　肥後大掾正六位上大和宿禰延正停二正暦四年内給武佐國讓山城權少掾一改任

長保二　伊賀權目正六位上紀朝臣秋近停二正暦五年内給備前權少目長谷正生一改任

治承二　豐後介正六位上中原朝臣俊清停二去安元二年臨時内給日向介中原康成一所レ任○中略

秩。滿。

名。替。

天暦八　鎭守府軍曹正六位□志太連元立朱雀院御給天慶七年内給紀常峯不レ給二任符一秩滿代

清愼公

康平八　備後掾正六位上文室宿禰武則上東門院康平六年御給品治光任不レ給二任符一秩滿替

永承四秋　攝津目正六位上紀朝臣吉成春宮大夫藤原朝臣長元七年給清原德正不レ給二任符一秩滿、仍改任、

長保元　讃岐大目正六位上佐伯宿禰扶尙停二大納言源朝臣長德元年給爾宜利遠一改任○中略

任。符。返。上。

名。替。

長德三　若狹權掾正六位上錦宿禰良盛花山院去年御給巨勢爲信任符返上替

華山院

正六位上錦宿禰良盛

望二若狹權掾一

右去年御給、同正月以二巨勢爲延一任二彼國掾一、而稱レ非二本望一返二上任符一、仍以二件良盛一可レ被レ改二任之一狀、所レ請如レ件、

長德三年正月廿二日

大納言正三位兼行右近衛大將春宮大夫藤原朝臣作者中略○

三。重。

又秩滿名國替モ有之、
又三重國替モ有リ、四重國替モ有リ、

更任。更任ト謂ハ、不給任符シテ、秩滿ノ後、同人ノ同國ニ更ニ任ゼムト申也、仍一任ノ過ニタレバ、大間ニ必可取闕也、若無其闕バ、子細ヲ可問外記、

轉任。本諸國ノ權掾ニ任タル者ノ正ニ任ゼムト申シ、少目ニ任タル者ノ大ニ任ゼムト申スヲ轉任ト謂也、是ハ外記ノ勘申ス轉任ニ非須、外任也、在國替內、或在更任內、

臨時給。臨時給ト謂ハ、內給、院宮、大臣ノ年給外ニ、諸國權守已下ヲ臨時ニ申任也、皆職事書袖書、

〔除目大成抄 二〕國替。

昌泰元　備中權掾從七位下橘朝臣春常（繁子內親王去年給、自下野掾遷任、）　時平

延喜十三春　伯耆大目從七位上毛野公夏蔭（清經朝臣延喜八年給、以件夏蔭任常陸少目、而今改任、）　貞信公（○藤原忠平）

康保三　肥前掾正六位上長岑宿禰忠親（右大將藤原朝臣康保二年給、二合、以件忠親任肥後少掾、而改肥前、）　清愼公（○藤原實賴）

長保二秋　因幡權大目正六位上刑部宿禰久遠（停中宮大夫源朝臣長德四年給伯耆大目改任）

永承五　土左少目正六位上清原眞人清武（停左近衞中將藤原朝臣永承三年給但馬大目改任）

延久二　伊豫掾正六位上民宿禰友武（停內大臣延久二年給近江少掾改任）

裏書　或云、國替遷任也、不可為停任、乃不書停字云云、然而古賢書樣皆如此、

永久四秋　備中大掾從七位上藤井宿禰行里（權中納言源朝臣重當年給二合、以件行里任石見掾、而改其國所任、○中略）

名國共替。

內給已下ノ去年以往給ヲ申請之、是謂未給、故者ノ未給モアリ、其後家申請之、近例ハ稀事也、又內給ノ未給モ依御處分テ、親王申請之、近例不見事也、

諸二合

內給已下有此事ナリ

內給ハ一分廿人、任意ヲ二合云々、

院宮給ハ一分三人、同ジク任意二合云々、

非准后之女御ハ一分一人、猶任意二合、或說別給云々、

太政大臣ハ一分三人、隔年二合、

大臣ハ一分二人、同隔年二合、

納言ハ一分一人、五ケ年一度二合、

參議ハ一分一人、獻五節之外不二合、

但大臣以下參議已上、獻五節舞姬之次年ハ、年給ノ目一人、一分一人ヲ二合シテ、任掾一人、

名替

名替ト謂ハ、內給以下年給ニ申任スル者ノ、稱非本望不賜任符ニ、同國ニ他人ヲ申任スル也、

國替

國替ト謂ハ、內給已下ノ年給ニ申任スル者ノ、稱非本望不賜任符ヲ、件人ヲ更ニ他國ニ申任スル也、

又申任シタル人ヲモ改テ、更ニ他人ヲ以テ申任ナリ、國ヲ改テ更ニ他國ヲ申任ス、是謂名國替、

又二合ノ國替モ有之

又臨時給ノ名國替モ有之

かうぶりせさせてん、十日の日と定めてする事ども例のごとし、

〔蜻蛉日記解環六〕蓋此歲〇天祿元年新帝〇圓融御代始ニ行ハルヽ大事ニツキテ、院ノ御給モ行ハルニツイテ、ヨキ折ト、公ノ思メシテ、元服サセテ、叙爵ヲカフムラセントノコトヲカクイヘルナラン、

〔公卿補任一條〕寛和三年丁亥〇永延元年

參議從三位藤原道綱(中略)天祿元年十二月廿日從五位下大嘗會冷泉院御給

〔職原抄上〕式部省〇當ニ唐吏部中略

卿一人〇中略

每年於本省行諸國一分召也、一分召者任諸國史生之名也、史生謂之一分、內給、院宮、大臣已下參議已上、皆有年給、式部卿行之也、近代其禮久絕畢、

〔蟬冕翼抄〕任符返上

任符返上ト謂ハ、內給已下ノ年給ニ申任スル者ノ任符ヲ給テ後ニ、各有申テ返上スル也、

任タル國非本望トテ、件國ノ符返上シタルヲ、給主ノ請文ヲ書テ、其奧ニ任符ヲ卷籠メ上也、是ヲ任符返上ノ國替ト謂、

又任符ヲ給テ不赴任國シテ、空四ケ年ヲ過テ、秩滿シタル第五年、五ケ年ヲ爲一任ル國ハ第六年春猶本國ニ任ゼントテ申ヲバ、是ヲ任符返上ノ更任ト謂、

又任タル國非本望トテ、件國ノ任符ヲ返上シタルヲ、給主ノ同國ニ他人ヲ任ゼムト申ヲバ、是ヲ任符返上ノ名替ト謂、

凡任符返上ト謂ハ總名也、此中ニ有國替、更任、名替也、心ヲ留テ閑ニ見テ可任也、

諸未給

ニ預ルヲ云フ、而シテ二合ト云フコトハ、公卿給ニモアリテ、親王給ハ目〈二分〉一人、史生〈一分〉一人ナルヲ、併合シテ掾〈三分〉一人トスルガ如シ、公卿給ノ中ニテ、大臣ハ隔年ニ二合、納言ハ四年ニ一度二合、五節ヲ獻ゼシ明年ハ巡ヲ待タズシテ二合、參議ハ五節ヲ獻ゼシ明年ノミ二合ナリ、又合爵ト云フ事アリ、合冠トモ云フ內官一人、外官三分一人、二分二人等ノ未給ヲ返上シテ、從五位下一人ヲ賜ハルヲ云フ、而シテ年爵ニハ未給ト云フ事ナシ、是官職ハ其闕ナキ時ハ任ズルコトヲ得ズ、故ニ當年ニ給セザル事モアレド、位階ハ額數ナケレバ、每年ニ給スルコトヲ得べケレバナリ、年爵ニハ又加階アリ、從五位下以上ノ人ノ更ニ位階ヲ進ムルヲ云フ、後ニハ人給(ヒトダマヒ)〈院宮ノ給ハリタル年官年爵ヲ云フ〉ヲ以テ二位三位ニ昇ル者アリ、又臨時給ト云フハ、任官ニモ敍位ニモアリテ、年官年爵ノ外ニ臨時ニ賜ハルヲ云フ、又式部卿ニ一分召ノ時ニ、一分一人ヲ賜フ、是亦年官ノ類ナリ、政治部除目篇參照スベシ、要スルニ、古ハ官ニ季祿、公廨等ノ俸アルノミナラズ、位ニモ位田、位祿等ノ給アリ、是レ年官年爵ノ起ル所以ナリ、然ルニ後世ニ至リテハ位ニ俸ナキノミナラズ、官ニモ亦賜フ所ナシ、是ニ於テ年官、年爵、並ニ徒設ノ具ト爲レリ、

又國守ヲ賜フ事アリ、亦年官ノ類ナリ、事ハ賜國篇ニ詳ナレバ、宜シク就テ見ルベシ、

名稱

〔空穗物語〕〈樓の上下之一〉さるべき所を思ひめぐらし侍に、こゝはいとさわがしくかんのおとゞの京極をさるべきさまにまかりゐでつくらせん、このころ伊賀の守じするをみやうねんの院の御たうばりを、ことし申させ給へと、女御どのゝ御をんぞきこえさせ給て、さるべきやどもは、ひとゝせつくらせて侍り、

〔蜻蛉日記〕〈中〉五日〈○天祿元年八月〉の日は司召とて、大將になる、〈○藤原兼家〉いとまさりていとめでたし、それより後ぞすこししば〳〵みえたる、此大嘗會に院の御たうばり申さん、をさなき人〈○藤原道綱〉に

貞觀十三年、藤原良房ノ准三宮ヲ辭スル表ニ、臣一兩僕隷、得官者或年三四人、何擬二三宮一以二新制一ト云ヘルニ依リテ知ラレ、陰ニ賣與シテ財ヲ得ル爲メナル事ハ、政事要略ニ、安和二年ノ宣旨ヲ載セテ、雖レ募二二分之年給一、曾無二一人之企望一ト云ヒ、長保二年ノ權記ニ、受領吏買二上階一ト云ヘルヲ以テ知ラルヽナリ、若シ之ヲ望ム人ナキ時ハ、假リニ無身ノ人ヲ設ケテ其官爵ヲ受ク、又其官爵ヲ人ニ授ケテ、其所得ヲ己ニ入ルヽ者アリ、是謂ユル揚名介、揚名掾ナリ、

年官、年爵ハ、除目敍位ノ時ニ、其主ヨリ申文ヲ官ニ進メテ、其人ヲ任敍スル事ニテ、大別、內給、院宮給、親王給、公卿給ノ四種アリ、內給トハ內裏ヨリ給與ノ費ニ供スル爲メニ設クル所ニシテ、院宮給トハ太上天皇、三宮、女院、東宮、准三宮ノ分ヲ云ヒ、親王給ハ親王、內親王、法親王ノ分ヲ云ヒ、公卿給トハ攝關、大臣、納言、參議ノ賜ハルモノヲ云フ、此年官ニハ當年給、未給、名替、國替、名國替、秩滿更任、任符返上等ノ目アリテ、當年給トハ當年ノ巡給ヲ云ヒ、未給トハ昨年已往ノ未給ヲ云ヒテ、或ハ歿後ニ係レル者アリ、名替トハ其身疾ニ罹ル等ノ事アリテ、任符ヲ給ハラザル人ノ代ニ、餘人ヲ任ズルヲ云ヒ、國替トハ甲國ノ司ヲ改メテ乙國ノ司トスルヲ云ヒ、名國替トハ見任ノ人ノ任ヲ停メ、餘人ヲ他國ニ任ズルヲ云ヒ、秩滿更任トハ任限已ニ滿チテ解官セル人ノ代ニ、其前任ノ人ヲ任ズルヲ云ヒ、任符返上トハ甲ノ人ノ任符ヲ返進シテ、乙ノ人ヲ任ズルヲ云フ、親王給ニハ又例巡給、別巡給、別給ノ別アリ、例巡給トハ世系ノ次序ヲ逐ヒテ、遞ニ年官二合ヲ給ハルコトニテ、例ヘバ第一年ハ白河天皇ノ親王ノ巡給、第二年ハ堀河天皇ノ親王ノ巡給ナルガ如シ、然レドモ此巡給ノ事ハ、古來異說アリテ、其實ハ詳ナラズ、別巡給トハ、今上嫡后所生ノ親王ハ男女ヲ論ゼズ、別巡給ニ預ルベキノ別勅アルトキハ、餘ノ親王ノ巡ニ拘ハラズ、特別ニ巡給ニ預ルナリ、若シ其親王一人ナレバ、毎年二合ニ預リ、二人ナレバ隔年ニ二合ニ預ルナリ、別給トハ嫡后所生ニアラザル親王ノ別巡給

百斛正税交易貢銀直料

壹岐島陸拾斛玖斗

右光經謹撿故實、當島年貢銀者、是被催渡彼七ヶ國年粮米下行採丁等、或致採銀之勤、或所交易進上也、此外又島內恒例佛神事有其數、皆以年粮米內支配件用途、且奉祈天長地久國家泰平之由、且所祈請國內安穩貢銀採得之旨也、而近代管國吏各背先例、猥怠進濟、仍代々島司申下官符宣旨、令加催促之間、雖成渡一旦之廳宣、更無始終之所濟、因玆在廳不致貢銀之營、雜掌失所濟之計、然而親光任被催渡管七ヶ國正税交易米六百斛九斗、可令交易貢銀三百兩之旨、經奏聞之時、被成下依請官符之間、致沙汰、經公用云々、從往古被定置七ヶ國年粮米本數三千五百餘斛也、當島司資盛俊成能盛親光等時、經上奏之日、被召下七ヶ國廳宣、以官使催渡當島、可取返抄之由、悉宣下了、望請官裁、早任彼等例、被成下官符之後、各召給廳宣、正税已下任色數可寛濟之由、欲被宣下者、

年官年爵

年官、年爵ノ事、其始ヲ詳ニセズ、然レドモ貞觀七年ノ藤原良房等ガ奏議等ニ依ルニ、淸和天皇ノ前ニ在ルコト必セリ、年官トハ、每年ニ內外ノ一分、二分等ノ官ヲ賜ハルヲ云ヒ、年爵トハ每年ニ從五位下一人ヲ賜ハルヲ云フ、一分、二分等ノ名ハ、公廨ノ分法ヨリ出デ、公廨ヲ處分スルニハ、史生ハ其一分ヲ受ケ、目ハ二分ヲ受ケ、掾ハ三分ヲ受ク、因テ史生ヲ一分ト云ヒ、目ヲ二分ト云ヒ、掾ヲ三分ト云フ、京官モ此ニ準ジテ名ヲ立テタリ、蓋シ年官、年爵ハ、陽ニハ親近ノ人ニ授クル爲メニシテ、陰ニハ人ニ賣與シテ財ヲ得ルガ爲メナラン、故ニ其主或ハ資ヲ納レズシテ、人ニ付スル事モ常ニコレアリ、陽ニハ親近ノ人ニ授クル爲メナル事ハ、

百斛正稅交易貢銀直料
肥前國伍佰肆拾伍斛玖斗
准米二百廿斛九斗
見米三百廿五斛
二百廿五斛防人拾伍人功料
百斛正稅交易貢銀直料
肥後國捌佰肆拾漆斛玖斗
准米二百八十二斛九斗
見米五百六十五斛
四百六十五斛防人參拾壹人功料
百斛正稅交易貢銀直料
豐前國肆佰漆拾壹斛漆斗
准米二百四十六斛七斗
見米二百廿五斛
百廿五斛防人捌人功料
百斛正稅交易貢銀直料
豐後國肆佰漆拾壹斛漆斗
准米二百四十六斛七斗
見米二百廿五斛
百廿五斛防人捌人功料

勘從五位下行對馬守源朝臣光經申請雜事三箇條內　二箇條事

一請任色數仰管七ヶ國被催渡當島年粮幷正稅交易買銀直防人功米等事

右引勘文簿之處、申請之時、代々皆所被下宣旨也、○中略

以前條々、文簿之所注如件、仍勘申、

弘安十年七月十二日　右史生大江職重

紀職秀

左史生紀尙幸

紀重有○中略

從五位下行對馬守源朝臣光經解申請官裁事、請特蒙官裁因准去仁安治承建仁三箇年例被成下官符雜事參箇條子細狀、

一請任色數仰管漆箇國被催渡當島年粮米幷正稅交易買銀直防人功米等事

筑前國伍佰陸拾壹斛

准米二百廿一斛

見米三百四十斛

二百四十斛防人拾陸人功料

百斛正稅交易買銀直料

筑後國伍佰肆拾伍斛

准米二百廿斛

見米三百廿五斛

二百廿五斛防人拾陸人功料

以往、件年粮穀、從六箇國遞送於壹岐島、壹岐島受領、轉漕於對馬島、而大同以來已停廢、伏以古人遠圖、深達物理、但令六國漕運、猶未由救弊、因撿文簿、壹岐島課丁二千餘人、並是乍輸者也、千人貢御油、千人進府儲油并雜穀等、又同島水田六百十六町、而沒八十六步、就中除百姓口分田并雜職田等之外、死者口分并疫死口分、國造田等一百餘町也、今商量役十人丁、營百町田、其勢易於反掌、停進府之雜物、運對馬島年糧事、又仗於人民、假令停壹岐島所進雜油并雜穀等、令進六國、停六國所運年粮、令營壹岐島田租、利害所返納稻二萬九千六百三十餘束、卽其支度用途載在別紙、但反經之可否、利害難明、因召彼島守賀茂直峯、幷練事書生等、令陳利害、勘署已訖、○中略謹錄事狀、伏聽天裁、奏可、

〔三代實錄三十六陽成〕元慶三年十月四日庚申、大宰府言、壹岐島營作田一百町、其獲稻爲糙送對馬島、以充防人年粮、而島地隘狹、田疇薄埆、非唯耕作之爲苦、亦知轉漕之有煩、島司申請、早被言上、停件營田救民之費、今以爲充國用正稅、分力○力原作則、據一本改運送漂失易塡、年損不煩、請停壹岐島運粮之勢、其年粮田百町地子、島司依例勘納、從之、

〔勘仲記〕弘安十年七月十三日壬寅、參禪林寺殿、奏三年一請用途事、傳奏無人之間、以藤中納言條々聞食、承勅答之後、參殿下、申條々事、○中略

對馬國司申請三ヶ條雜事

一請任色數仰管七ヶ國、被催渡當島年粮米并正稅交易貢銀直防人功米等事○中略

右大臣權中納言藤原朝臣、左衛門督藤原朝臣、兵部卿藤原朝臣、出雲權守藤原朝臣、右大辨藤原朝臣等定申云、各任續文被裁許之條、何事之有哉、權中納言源朝臣定申云、於兩條者、同人々定申之儀、府使亂入守護人對捍役事、輙難計申、宜在聖斷乎、

弘安十年七月十三日

文殿

〔享祿本類聚三代格六〕勅
對馬多褹二島等司、身居邊要、稍苦飢寒、擧〇擧、續日本紀作出擧、之官稻、曾不得利、宜割大宰所部諸國地子、各給守一万束、掾七千五百束、目五千束、史生二千五百束、其大隅、薩摩、壹岐、別有公廨、不給地子、
天平寶字四年八月七日
〇按ズルニ、多褹島ハ天長元年ニ大隅國ニ屬セリ、
〔續日本紀淳仁二十三〕天平寶字四年八月甲子、勅、大隅、薩摩、壹岐、對馬、多褹等司、身居邊要、稍苦飢寒、出擧之稻、曾不得利、欲運私物、路險難通、於理商量、良須矜愍、宜割大宰所管諸國地子各給、守一万束、掾七千五百束、目五千束、史生二千五百束、以資遠戍、稍慰羈情、
〇按ズルニ、本書對馬多褹二島ノ外ニ、大隅薩摩壹岐ヲ加ヘタルハ、恐ラクハ誤ナラン、
〔續日本紀光仁三十二〕寶龜三年十二月己未、大宰府言、壹岐島掾從六位上上村主墨繩等、送年粮於對馬島、俄遭逆風、船破人沒、所載之穀、隨復漂失、謹撿天平寶字四年格、漂失之物、以部領使公廨塡備、而墨繩等款云、漕送之期、不違常例、但風波之災、非力能制、船破人沒、足爲明證、府量所申、實難默止、望請自今以後、評定虛實、微免許之、
〔三代實錄清和二十八〕貞觀十八年三月九日丁亥、參議大宰權帥從三位在原朝臣行平、起請二事、其一事、請營壹岐島水田一百町、使充對馬島年粮、曰、撿文簿、六國一年所漕運對馬島年粮穀二千斛運賃幷雜用料穀穎三萬四千五十束、就中筑前、筑後、肥前、豐前、豐後等國、各三百二十斛、肥後國四百斛、運賃穀一萬七十四束、幷綱丁挾抄水手百六十五人、徭丁稻三千二百八十束、凡厥所費、大略如件、而往古以來、全到者寡、〇寡原作實、據一本改、年中漂五六之三四、以故運輸之國、人物從盡、撿領之島、粮儲常空、壹岐島司幷習俗人民等、皆〇皆原作習、以意改、申云、壹岐島者肥前國等、且恐犯人夜著岸對馬島上、壹岐島又亦如之、其潮落潮來、不似他處、而陸地人民等不漂波程枚、〇程枚恐程數誤、雖蕩沒連踵、溺死不絶者、今謹撿故實、延曆

年粮

宜、然則未進之代、何物弁塡、年中之用、何當支給、加以公廨者欠負之儲也、所塡之色、觸類多端、重望先以職田辨濟未進、若未進數多乃奪公廨、然則懈惰之吏勤勵〇勵原脫、據一本補、更新、撿領之官、催督自休、貢進合期、例用贍給、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅、立制之初不忍苛酷、宜貶考解任此度停止、自餘事咸依請

貞觀四年九月廿二日

〔三代實錄清和九〕貞觀六年十二月十四日丁卯、若狹國言、謹撿齊衡二年五月十九日格偁、當年調庸來年不究、明年三月卅日以前、主計寮具錄未進之數、移主稅寮、准未進之數沒國司史生已上公廨、貞觀四年三月二十日格偁、非受業博士醫師、宜准史生責其解由、〇由下、三代格有者字、然則史生已上既立其制、博士醫師不入沒例、況復從事同於史生、何獨保其俸料、望請、博士醫師除受業練道人〇人原脫、據三代格補、之外、同沒公廨、從之、諸國亦准此、

〔三代實錄清和二十七〕貞觀十七年十二月庚戌朔、讃岐國司申請、准國司例、以受業練道博士醫師公廨塡未納官物、太政官處分、依請焉、

〔三代實錄陽成三十八〕元慶四年八月十五日丙申、丹波國司言、史生槍前宗範無故不出、撿非違使丹波宗雄坐私鑄錢人刑部永淵之事、隱避不出、請以此二人公廨稻一千七百二十四束七把、補國儲之所不足、太政官處分依請焉、

○

〔延喜式主稅二十六〕凡筑前、筑後、肥前肥後、豐前、豐後等國、每年穀二千石、漕送對馬島、以充島司及防人等粮、其部領粮、船賃挾抄水手功粮、並用正稅、

〔延喜式雜五十〕凡運漕對馬島粮者、每國作番以次運送、

〔續日本紀聖武十一〕天平四年五月乙丑、對馬島司、例給年粮、秩滿之日、頓停常粮、比還本貫、食粮交絶、又薩摩國司、停止季祿、衣服乏少、並依請給之、

失官物、其郡司者不在會赦之限、　六年七月丙子、先是去寶龜十年立制、牧宰之輩、奉使入京、或無返抄而歸任、或稱病而滯京下、求（〇求原作永、今據一本改、）預考例、兼得公廨、如之之類、莫預釐務、國司奪料、郡司解任、容許之司亦同此例、而自其時後、希有違行、至是重下知諸國不使前過、猶致後怠、卽科違勅罪矣、

〔類聚三代格八〕太政官符

應諸國雜米立進納限幷責未進怠事

右得大宰府解偁、撿民部省式云、諸國春米運京者、伊勢、近江、丹波、播磨、紀伊等國、二月卅日以前、尾張、參河、美濃、若狹、越前、丹後、四月卅日以前、但馬、因幡、美作、備前、讚岐、六月卅日以前、並送納訖、若有未進者、准調庸例、割公廨令辨備者、又延曆十四年七月廿七日格云、寶龜四年閏十一月三日下民部省符偁、頃者諸國雜米未進數多、既闕國用、仍撿案內、寶龜元年五月十五日下諸國符偁、春米掾領已上專當其事、史生已上充綱領送、春運違限解却見任、又奪公廨一依前符者、右大臣宣、奉勅、自今以後若有未進雜米、無問多少、國司史生已上、皆奪公廨沒爲官物、主典已上並卽貶考、專當官者解却見任、其郡司主帳已上、咸取職田、解任貶考亦同國司者、今被右大臣宣偁、奉勅、依少奪大、事實不穩、而斛米疋絹一物未進、則偏稱格式、悉奪公廨、於事思量深乖弘恕、自今以後宜國司史生已上各作差法、准未進數割其公廨、隨色辨備進納京庫、但其未進之物、徵納以充公廨、其省寮計會每年（〇年原脫、今據一本補、）勘出、自餘事條、一依先符者謹案件文、專論他國未及西道、是緣物不納京庫事不經所司也、今府庫所納雜米、修理官舍器仗、幷選士衞卒粮、廚司染所五使料等、總三千七百八十餘斛、或正稅或府儲年料春運色別有數、而國郡懈緩、未進猥積、因斯納官雜物貢進違期、府中例用、闕乏多時、寔依懲革無文格制未施也、望請新立程期、以責未進、但時澆政劇憲法難專、准式立限、甚以促近、今須筑前、筑後、肥前、六月卅日以前、豐前肥後、八月卅日以前、豐後十月卅日以前、並爲進納之期、若有過期未進之國者、貶考解任、一從先格、又案件格、國司既割公廨而辨備、郡司更奪職田以沒官、試使國司公廨或補未納郡司職田復被納

テ此ニ至リテ舊欠ヲ塡納スル數ヲ減ジタルナリ、

〔貞觀交替式〕國司公廨不塡論定未納事

右參議彈正大弼從四位下橘朝臣常主奏狀偁、謹案格、每國畫論定公廨等數出擧、遭凶年、論定公廨相半收納者併塡論定、國司無所食、今須以公廨合論定、總號論定、利稻見納、作爲二分、一分爲官物、一分爲公廨、未納者隨分他色、以公廨可塡者、依例行之、若有非常損、總不納者、依全納之率三分之一、以正稅貸之、見納數少、及塡出擧雜稻未納、不足此率者、補所不足、其緣年不濟、貸物不塡者、豈非受物人、令後司徵塡、不拘解由、以絕內顧之心者、奉勅、公廨有未納、量賜借貸、不貸不塡者、後人依數徵塡、不拘其解由、

天長元年八月廿日

〔類聚符宣抄八〕應暫置勘出勘濟公文、天曆六年交替欠留國官田地子稻、塡納遺十四万八千六十一束二把三分七毫二釐事、

右得前和泉守從五位上菅原朝臣雅規去八月三日解偁、〇中略案貞觀新定交替式、天長九年十二月十七日官符、奉公廨本穎可塡舊年未納欠物、此國公廨本穎八万束也、減省定擧二万六千束、雖然率彼本數八万束、每年所當二千四百束、前司任終一年、當任四年、幷五箇年料万二千束、適致忠勤塡納已了、望請殊蒙天裁、被下宣旨、且以所塡勘會公文、且以其遺暫置勘出、將勘濟公文、然則官物漸有塡納之期、公文自無勘濟之煩者、左少辨平朝臣偕行傳宣、左大臣宣、奉勅依請者、

康保四年十二月一日　右大史吉志宿禰公胤奉

沒公廨

〔延喜交替式〕凡水旱不熟之年、出擧雜物、如有未納者、以當時公廨物塡納之、雜物謂稻粟麥等類

〔續日本紀三十九桓武〕延曆五年六月乙未朔、勅、撫育百姓、糺察部內、國郡官司、同職掌也、然則國郡功過、共所領知、而頃年有燒正倉、獨罪郡司、不坐國守、事稍乖理、豈合法意、自今以後、宜奪國司等公廨、總塡燒

論之、

〔續日本紀 三十七 桓武〕延暦元年十二月壬子、詔曰、公廨之設、先補欠負、次割國儲、然後作差處分、如聞諸國曾不遵行、所有公廨、且以費用、至進稅帳、詐注未納、因茲前人滯於解由、後人煩於受領、於事商量、甚乖道理、又其從四位已上者、冠蓋既貴、榮祿亦重、授以兼國、佇聞善政、今乃苟貪公廨、徵求以甚、至于遷替、多無解由、如此不責、豈曰皇憲、自今以後遷替國司、滿百二十日、未得解由者、宜奪位祿食封、以徵將來、

〔續日本紀 四十 桓武〕延暦九年十一月乙丑、勅曰、公廨之設、本爲塡補欠負未納、隨國大小、既立擧式、而今聞、諸國司等、雖有欠物、猶得公廨、理須依法科罪沒爲官物、但以國司等久有仕官之勞、曾無還家之貲、今故立法制、宜自今以後有舊年未納欠負者、大國三万束、上國二万束、中國一万束、下國五千束已上、每年徵塡、附帳申上、若不據此制、有未納者、返却稅帳、隨事科罪、其當年未納者、一依去天平十七年式塡之、

〔延暦交替式〕太政官符

應塡納舊年未納欠物事

撿案內、太政官去延暦九年十一月三日下諸國符偁、被右大臣宣偁、奉勅公廨之設、本爲塡補欠負未納、隨國大少、既立擧式、今聞諸國司等、雖有欠物、猶得公廨、理須依法科罪沒官其物、但慮官人等久有仕官之勞、曾無還家之貲、故今立法式、舊年未納欠物者、大國三万、上國二万、中國一万、下國五千束已上、每年徵塡、附帳申上、當年未納、一依天平十七年式塡之者、今被大納言從三位神主宣偁、奉勅、出擧息利、一從減少、塡納舊物、理須改張、宜令大國一万八千、上國一万二千、中國六千、下國三千束已上、每年徵納、其當年未納、一依先符者、諸國承知、依宜施行、

延暦十六年八月三日

○按ズルニ、雜稻ヲ出擧スルニ半倍ノ利ヲ收メタルヲ、延暦十四年ニ減ジテ三分ノ息トス、因

任所、未給公廨資用乏少、宜各准公廨四分之一、借貸正稅者、然則新任之用、以此足矣、而依舊給粮、於事重疊、望請當道公粮、永從停止者、右大臣宣、奉勅依請、自餘諸國亦宜准此、

大同三年六月六日

〔享祿本類聚三代格 六〕太政官符

應處分公廨事

公廨欠負未納處分

右造式所起請偁、太政官去延曆廿二年二月廿二日符偁、去延曆五年六月一日格偁、撿實錄三年八月十五日格偁、前人出擧、後人收納、彼此有功、宜共半分者、今出擧收納、勞逸不均、自今以後宜革此例、一依天平寶字元年十月一日式、收納之前者入於後人、收納之後者令入前人者、如聞諸國所行、頗有不穩、何者前人在任、秋多徵收、新人後到、纔逢限月、依格公廨全入後人、今量勞逸、實乖穩便、或有收納未畢國司身亡、孤遺之輩艱苦難言、自今以後宜改此格、七月已後、遷代國司彼此半分以均苦樂、六月已前全入後人者、撿案內、去天平十七年、始置公廨、自茲以降、處分之法、屢經改張、或以出擧收納爲期、或取遷替之月爲限、幷皆事迂人情、理涉偏頗、因茲自昔至今、爭論途繁、假有前人春首初任夏季得替、准據後格、當年公廨全給後人、而前人或遭父母喪、去職空歸、徒失半年之勞、不免塡欠之累、或不幸身亡、妻子獨存、無由還家、流離他鄕、或一年頻遷、數處得料、或自近拜遠、中路失分、如斯之類、觸事多端、仍案唐永徽祿令云、諸祿幷依日給、京官據詔書出日、外官據籤符到日給者、今若一年公廨總計爲分、各准歷任日數班給、則新舊之吏、甘心受賞、競爭之源、從茲永絕者、大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅依請、宜付所司施行、

弘仁十年十二月廿五日

〔延喜交替式〕凡公廨有未納者、量賜借貸、遭年不登、所貸不塡者、後人依數徵塡、不拘解由、○中略

凡國司就奉幣讀經事、致國儲過用者、便以公廨補塡之、若輙致過用、分得公廨者、准置未納受用公廨

彼此有功、不合無料、前後之司、宜各平分、至是勅出擧收納、其勞不同、宜革前例、一依天平寶字元年十月十一日式、收納之前所有公廨入於後人、收納之後入於前人、

〔延曆交替式〕太政官符〇中略

一定處分公廨例事

右去延曆五年六月一日格偁、撿寶龜三年八月十五日格偁、前人出擧、後人收納、彼此有功、宜共半分者、今出擧收納、勞逸不均、自今以後宜革件例、一依天平寶字元年十月一日式、收納之前者入於後人、收納之後者全入前人者、如聞諸國所行頗有不穩、何者前人在任、秋冬徵收、新人後到、纔逢限月、依格公廨全入後人、今量勞逸、實乖穩便、或有收納未了國司身亡、孤遺之輩艱苦難言、自今以後宜改此格、七月已後遷代國司、彼此半分以均苦樂、六分已前者、宜全入後人、

以前被右大臣宣偁、奉勅如右者、諸國承知依件行之、

延曆廿二年二月廿日

〔類聚三代格八〕太政官符

應聽新任國司借貸正稅事

右被右大臣宣偁、奉令旨新任之司、初到任所、未給公廨資用乏少、宜各准公廨四分之一借貸正稅者、諸國承知依宜行之、但處分公廨之日、不論存亡先塡所貸、縱未及得分有遷替者、塡納後任、若過限〇限原脫、據一本補、數依法科處、

延曆廿五年三月廿四日〇又見日本後紀

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

停止給新任國司等公粮事

右西海道觀察使大宰帥從三位藤原朝臣繩主奏偁、准延曆廿五年三月廿四日令旨、新任國司初到、

權任國司公廨

新舊司交代給公廨法

右得彼道々博士等今年八月二十三日奏狀、偁、謹撿案內、偁、諸道儒士無有給俸、況以遙授之潤、聊爲奉公之資、而近代國宰素易儒者、空送任限、不充俸料、申返位祿季祿、徒有兼國之名、曾無給俸之實、三逕四壁彌歎荒蕪、季祿筆耕、已慙境埆、凡道之陵夷、只有若斯、又無兼國間、所給位祿、國司稱有先來官符、動以申返、若于儒者位祿、不論先後、必可充行之狀、同欲蒙宣旨、方今近衞中少將、先日申請、裁許已了、文武之用、何親何疎、以彼准此、盍蒙優恤、望請蒙天恩、任傍例、被下宣旨於所司、以各請文、永令勘會公文、將補稽古之疲、但國宰縱雖申請他事、立用公帳、停其勘責、令求請文者、右中辨源朝臣俊賢傳宣、權中納言源朝臣伊陟宣、奉勅依請者、

正曆四年十月七日　　左少史安倍茂忠奉

〔春記〕長曆四年十一月八日己未、參關白殿、〈〇藤原賴通、中略、〉予〈〇藤原資房〉申云、左右近次將等愁申云、遙授國々司不下行其代、皆申請公事云々、至于宰相者、先年申下宣旨已了、令准彼例、可申請由所愁申也、〈〇中略〉命云、〈〇中略〉近衞次將尤可被優事也、早可被申請也者、予卽退出、參內、以藏人資成令奏、復命等了、仰云、聞食已了者、　廿八日己卯、參關白殿御直廬、申文書等、〈〇中略〉又令覽左右近次將申請奏狀、件書先日予申關白、依其氣色所令覽也、事旨者、兼國公廨等、彼國司申請他事、不下行、仍准參議例停止其事之由也、左右次將等皆加署名、位階次第書判所也、予令大內記孝親令筆作、以左府生令取傍將等名了、又送右中將行經許了、行經以右府生令取彼將等署名了、又返奏也、仍今日令覽也、命云、件事尤可有許容事也、近衞將其役繁多也、而國司動抑留其祿事、太不便事也、必異他者也、早可奏聞者、予申云、資房加署名有憚、執奏何之、仰云、可然事也、卽召經成給此奏狀、被仰云、左右次將等申請之旨、尤道理也、早可有裁許也、以此旨可奏者、經成卽奏聞畢、依天許卽奉下東宮權大夫〈師房〉已了、

〔三代實錄〕〈十清和〉貞觀七年五月十七日丁酉、上野國言、加擧權任國司公廨料稻七萬束、從之、

〔續日本紀〕〈三十九桓武〉延曆五年六月乙未朔、先是去寶龜三年制、諸國公廨處分之事、前人出擧、後人收納、

遙授兼任公廨

公廨、一從多處給、其不給公廨、混合正稅、至有損之年、不必拘多處、但陸奧國、守兼任中國者、特優其身、不在此限者、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔延喜式 二十六主稅〕凡諸國一分已上遙授兼任之輩、遷任他國幷京官者、不得受用公廨、若停任官符未到之前、處分已畢、有妨改帳者、便加國儲、

〔政事要略 二十七年中行事〕十五日〇十一月奏給位祿文事

應勘會公文參議遙授兼國公廨位祿季祿事

右得參議正三位行左兵衞督兼皇太后宮權大夫美濃權守源朝臣時中等、去年十一月廿七日奏狀偁、謹案兼國之起、爲潤恩澤、所被拜任也、而今國宰等寄言左右、無心充行、徒有遙授之名、然少受用之實、是則依無勘會之文、便致牢籠之計而已、望請被下宣旨於所司、准之封戶、以返抄勘會公帳、國司縱有臨時申請、永停越訴、將塞他用、然則虛無之詞、日斷徼倖之數、自全不勝憤懷之催、俯仰天裁者、左少辨源朝臣扶義傳宣、左大臣宣、奉勅依請者、

永祚二年二月廿二日　左大史史忠信奉

應准參議申請例左右近衞中少將遙授公廨幷位　季祿永以返抄勘會公文事

右得從三位行右近衞權中將兼尾張權守藤原道綱卿等去年十二月三日奏狀偁、謹案事情、預兼國之者、以近衞次將爲先、是則遠近之役、勝於他之故也、而其公廨等、國司不敢辨行、遙授之名徒殘、受用之實已稀、望請被下宣旨於所司、以返抄永勘會公帳、國宰縱有臨時申請、更停越訴、將全徼倖矣者、左少辨源朝臣扶義傳宣、左大臣宣、奉勅依請者、副本解、

永祚二年二月二十三日　右少史肥田宿禰維延奉

應依官符以各請文勘會公文紀傳明經明法算四道博士等兼國公廨位祿季祿事

〔類聚符宣抄 七〕太政官符大和國司 外

從八位上伴宿禰公扶

右從三位守大納言源朝臣高明宣、奉勅、件人宜補彼國掾非違使者、國宜承知依宣行之、其公廨准一分給之、符到奉行、

右大辨　　左大史

天曆八年二月廿三日

〔類聚三代格 七〕太政官符

一擇國守事

右撿正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫陸奧出羽按察使良岑朝臣安世奏狀偁、國守者古之刺史也、當仁之人不可多得、伏望令一良守兼帶諸國、小大之政從其所請、一兩僚屬亦依請任之、又祿不厚則人不勸、人不勸則治不立、伏望其公廨者、攝國之中擇其殷阜、以二守分給者、宜試於一國、明知治否、然後令兼之、〇中略

以前意見奏狀、依今月八日詔書、頒下如件、

天長元年八月廿日

〔享祿本類聚三代格 六〕太政官符

應國司兼兩國、其公廨從多處給事

右撰格所起請偁、天長元年六月廿日、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫陸奧出羽按察使良峯朝臣安世奏狀偁、令一良守兼帶數國、其公廨者、攝國之中擇殷阜、以二守分給者、今案祿令、一人帶數官者、祿從多處給、又式部〇部下恐有脫字云、一人帶數官、若高官上日不足、而卑官上日滿限者、祿從多給者、據此見之、一身帶數官、猶從一官給、而或國宰兼二國、同費其俸、論之法式、甚乖公平、伏望停食兩處

國撿非違使公廨

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應准大宰府全給鎭守府公廨事

右得正三位行中納言兼陸奥出羽按察使平朝臣高棟解偁、鎭守府解偁、邊垂之吏、去鄕遼遠、公廨之外、無復資粮、而至有未納、抑而不行、今案去承和五年六月廿一日格偁、大宰府司公廨雖有未納、以正税全給者、商量事由、陸奥大宰東西雖殊、邊戎警備、勞苦是一、望請准彼府例、以致全給、其代令當國徵塡者、右大臣宣、奉勅依請、

貞觀二年九月廿七日〇又見三代實錄

太政官符

應〇應下疑脫減省二字在前舂送國司鎭官年粮事

右得陸奥國解偁、撿去大同五年五月十一日格、此國元來國司鎭官等、各以公廨作差、令舂米四千餘斛、雇人運送、以充年粮者、因循是格、承前國司、當年收納之時、豫留出擧稻、令舂公廨半分、至時充用、行來爲例、今商量事意、在前舂用官稻、曾無所據、若停而不舂送、遠鄕之吏、無隣乞貸、望請減省往年之數、在前令舂五分之一、然則吏無飢餓之苦、民少舂運之煩、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

貞觀十五年十二月廿日

〔三代實錄二十四清和〕貞觀十五年十二月廿三日甲寅、正五位下行陸奥守安倍朝臣貞行起請三〇三恐二誤事、〇中略其二事曰、國中之政、莫重收納、然則分配之吏、可勤其事、而任用之官、未必其人、或被誘郡司税帳、納稾爲稻、或見賂富饒酋豪、以虛爲實、須據格〇格原脫、今據一本補、旨、必科其罪、而備〇備恐衍偏貪俸料、不畏有罪、望請爲致虛納、欠損國司之公廨、先補所欠、然後科責、若欠物巨多、公廨數少、長官已下相共塡納、

〔三代實錄二十九清和〕貞觀十八年七月八日癸未、山城丹波國司申請、割國司公廨、准一分給撿非違使、但有調庸未進欠負未納之年、准國司例勘補、從之、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符
應以論定利稻加給國司鎭官公廨事
合公廨本稻七十五万三千二百七十八束
國司料六十四万一千二百束　鎭守料十一万二千七十八束
利稻廿二万五千九百八十三束四把小利
國司料十九万二千三百六十束
相折大利所減十二万八千二百卅束
鎭官料三万三千六百廿三束四把
相折大利所減二万二千四百十五束六把
今應加給減分料十五万六百五十五束六把
右得陸奥國解偁、邊城之吏、事在勤王、遠辭鄕國、資粮難給、專賴公俸、更無支用、而所給公廨、在昔大利之時、率一分之人五千三百廿束、當今少利之日、率一分之人二千八百八十束、依斯減折、難以終歲、況警固之事、晝夜不休、夷狄之情、貪慾爲業、長吏遂無潤澤、何以食餌彼類、此國年中所收息利、調庸租地子等、積貯特多、無處納置、因斯年別造加屋倉、徒有民弊、還煩宰吏、望請用彼利稻、加賜公廨、所殘年別依數糙納、亦例用之外、特有公用、先支其料、後充公廨、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅依請、
承和十一年九月八日
○按ズルニ、大利トハ半倍ノ利ヲ云フ、小利トハ三分ノ息ヲ云フ、
〔延喜式二十六主税〕祿物價法
畿內絹一疋直稻卌束、絲一絇六束、綿一屯三束、調布一端十五束、庸布一段九束、鍬一口三束、鐵一廷五束、〇中略陸奥國絹百六十束、綿十三束、絲十五束調布五十束、庸布卅束、鐵十四束、

無畜積、何防非常、加以往年每有征伐、必仰軍粮於坂東國、伏請以坂東官稻、充陸奥公廨、以陸奥公廨、留收官庫、然則公私得所、實惬便宜、並許之、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應春(○春下恐脫運字)按察使幷國司鎮官年粮事

右得東山道觀察使正四位下兼行陸奥出羽按察使藤原朝臣緒嗣解偁、陸奥國元來國司鎮官等、各以公廨作差、令舂米四千餘斛、雇人運送、以充年粮、雖因循年久、於法無據、然邊要之事、頗異中國、者刈田以北近郡稻支軍粮、信夫以南遠郡稻給公廨、計其行程、於國府二三百里、於城柵七八百里、事力之(○之原脫、今據類聚國史補、)力不可舂運、若勘當停止、必致飢餓、請給舂運功、爲例行之者、依請、

一應加給擔夫運粮賃乘事

右同前解偁、太政官去大同元年十月十八日符偁、陸奥出羽按察使起請偁、計陸路程、給運粮賃、而國司等候海晏隙、時用船漕、儻有漂損、國司塡償、得平達者、賃料頗遺、若事覺被勘問者、恐致罪於遺賃、望請不勘遺賃、勿免浮損者、右大臣宣、奉勅依請者、而今國內百姓皆疲運粮、請補被年中漂損之外、所遺賃乘加給擔夫、以濟窮弊者、依請、

以前被右大臣宣偁、奉勅如右、

大同五年五月十一日

〔類聚國史八十四政理〕弘仁四年九月丙子、勅、邊要之地、外寇是防、不虞之儲、以粮爲重、今大軍頻出、儲粮悉罄、遺寇猶在、非常難測、若無貯蓄、如機急何、宜陸奥出羽兩國公廨、混合正稅、每年相換、給於信濃越後二國、但年穀不登、無物混稅、幷有不可得公廨之人、合隨狀移送、依實相換、停止之事、宜待後勅、

天長七年十月乙卯、增加出羽國出擧、論定稻六萬束、公廨稻十四萬束、人民蕃息、兼邊吏之資也、
八

年五月庚申、加擧陸奥國公廨稻一十三萬束、優邊吏也、

鎮守府及陸奥出羽公廨

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年二月十九日丁酉、制、令大宰府進公廨處分帳、先是民部省言、主税寮解偁、謹案式、府公廨百萬束、管內諸國各有擧數、而去承和五年六月二十一日格曰、府公廨雖有未納、以正税全給、若當國正税減少者、管內相通行之者、因玆府司減彼增此、每國所行、其數無定、所司須總勘國税帳、辨知通行之物數、而事有參差、無由據勘、何者管國税帳、相共不下、或國纔勘貞觀年中、或國天安以降未勘、仍減甲國、加乙國之由、徒經年序、不能勘知、隨雜掌到、責其違式、追以勘出、然而時遷人替、更無如何、又承和十四年十月十四日格云、有貢物麁惡、違期未進、奪府司公廨四分之一者、至有如此之怠、准格應沒公廨、而不進其帳、无由勘沒、勾勘之吏、事似未備、望請每年令進府司公廨處分帳、以備勘會、從之、

〔延喜式二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻

相摸國正税公廨各卅万束、〇中略鎮守府公廨五万四千卅七束、〇中略

陸奥國正税六十万三千束、公廨八十万三千七百十五束、國司料六十四万一千二百束、鎮官料十六万二千五百十五束、〇中略

凡鎮守府公廨、給當國并相摸國、

〔享祿本類聚三代格六〕乾政官謹奏、

陸奥國鎮守府給公廨事力事

將軍准守　將監准掾　將曹准目　若帶國者不須兼給

右件府官人、離家遠任、理須矜恤、伏請自今以後准件並給、臣等商量如前、伏聽勅裁、謹以申聞、謹奏、奉勅依奏、

天平寶字三年七月廿三日

〔類聚國史八十四政理〕大同五年五月辛亥、東山道觀察使正四位下兼陸奥出羽按察使藤原朝臣緒嗣言云々、國以民爲本、民以食爲命、而鎮兵三千八百人、一年粮料五十餘萬束、因此百姓疲弊、倉廩空虛、如

事、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應聽府官幷國島司公廨稻舂米漕上京事

右得大宰府解偁、大宰所部、本禁出米、復依太政官去延暦十二年八月十四日符、重加勾勘、一切確禁、此部諸國、桑麻不繁、國司在任、衣服已乏、加以或老親在京、常闕資養、望請、人別料稻四分之一、每年舂米漕京、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、但兼任之官聽漕半料、

弘仁二年十月十五日 ○日本後紀係二月庚辰

〔續日本後紀三仁明〕承和元年五月癸亥、大宰府司公廨元來班給六國、至天長八年、依民部省所請、停給六國、混給肥後國、至是勅曰、如聞轉送之勞、民受其費、混給一國、事乖穩便、宜復舊給之、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應大宰府公廨依格全給事

右得彼府解偁、撿案內、太政官去弘仁十四年八月一日符偁、府解偁、管內出擧、府國公廨各別有數、謹案延暦十六年格云、公廨者欠負之儲者、然則管內諸國、有未納之年、須以兩色公廨先補欠負等、而府官人千里離家、一方從事、非京非國、中間孤居、如不給公廨、何能存計、加以此府所掌雜物、觸類繁積、有彼欠失、何以補之、望請、件公廨雖有未納、猶被全給、謹請官裁者、右大臣宣、宜論定幷公廨計見納數、每色相率、先令割置、不得以府公廨、補當國欠失等者、而今得筑前肥前等國解偁、頃年不穩 ○穩恐稔誤 見納數少、諸 ○諸疑論誤 定之外、割置雜稻本穎、仍不得行府公廨者、國司所執、雖非格旨、至於雜稻絕本、須請處分、又國裁司蓋霜 ○國裁司蓋霜、恐當作國司董霜四字、 借貸、府司翻失俸料、望請、雖有未納、少正稅、猶被全給、彼代令國司徵塡、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請者、若當國正稅員少者、管內相通行之、

承和五年六月廿一日 ○又見續日本後紀

以前得能登國解偁、被太政官去年六月二日符偁、依太政官去三月九日奏、新置介員、延暦十二年二月十五日格云、和泉伊豆甲斐安房能登石見周防淡路阿波土左等國司公廨、守五分、掾三分、又案令云、公廨田、大國守二丁六段、上國守大國介二丁二段、中國守上國介二丁、下國守大上國掾一丁六段、中國掾大上國目一丁二段、中下國目一丁、軍防令云、給事力、大國守八人、上國守大國介七人、中國守上國介六人、下國守大上國掾五人、中國掾大上國目四人、中下國目三人者、案件格令、未見中國介之分法、謹請官裁者、官判新置介掾、諸國宜同、依件行之、

貞觀八年三月七日（政事要略五十三）○又見三代實錄、

（延喜式二十六主税）凡大宰府處分公廨、帥十分、大貳六分半、少貳五分、監三分、典二分、主神、主工、博士、明法博士一分大半、主城陰陽師醫師算師主船主厨一分半、大唐通事一分少半、史生弩師新羅譯語傔仗一分、

（延喜交替式）凡對馬島司公廨、割大宰所部諸國地子給、守一萬束、掾七千五百束、目五千束、史生二千五百束、

（續日本紀十二聖武）天平八年五月丙申、先是有勅、諸國司等除公廨田事力借貸之外、不得運送者、大宰管內諸國、已蒙處分訖、但府官人者、任在邊要、祿同京官、因此別給仕丁公廨稻、亦漕送之物、色數立限、又一任之內不得交關所部、但買衣食者聽之、

○按ズルニ、諸國ニハ是時未ダ公廨ヲ以テ、官人ノ祿ニ充テシコトアラズ、而ルニ大宰府管內ニテハ、既ニ之ヲ行ヒシナラン、

（續日本紀二十孝謙）天平寶字二年五月丙戌、大宰府言、承前公廨稻合一百萬束、然中間官人任意費用、今但遺一十餘萬束、官人數多、所給甚少、離家既遠、生活尙難、於是以所遺公廨、悉合正稅、更割諸國正稅、國別遍置、不失其本、每年出擧、以所得利、依式班給、其諸國地子稻者、一依先符任爲公廨、以充府中雜

少ノ分別其目ヲ立テガタシ、故ニ假ニ舂米トシテ斛斗升合勺才撮ヲ以之ヲ算フルノミ)是史生、博士、醫師等合セテ五合各一人ヅヽノ得ル所ノ數ナリ、二分ト云ハ之ヲ倍ス、則六千三百四十一束四把六分三厘四毫强、之ヲ舂イテ米三百十七斛七升三合一勺七才强トナル、是目二人各一人ヅヽノ得ル所ノ數ナリ、三分ト云ハ、一分ヲ三倍ス、則九千五百十二束一把九分五厘一毫强、之ヲ舂イテ米四百七十五斛六斗九合七勺五才六撮强トナル、是掾四人各一人ヅヽノ得ル所ノ數ナリ、四分ト云フハ一分ヲ四倍ス、則一萬二千六百八十二束九把二分六厘八毫强、之ヲ舂イテ米六百三十四斛一斗四升六合三勺四才一撮强トナル、是介二人各一人ヅヽノ得ル所ノ數ナリ、六分ト云ハ、一分ヲ六倍ス、則一萬九千二十四束三把九分二毫强、之ヲ舂イテ九百五十一斛二斗一升九合五勺一才二撮强トナル、是守二人各一人ヅヽノ得ル所ノ數ナリ、

〔延喜式二十六主稅〕凡志摩國公廨料、用尾張國綠海郡正稅穀、給守三百石、目百五十石、史生七十五石、

〔延喜式二十六主稅〕祿物價法

畿內絹一疋直稻卅束、絲一絇六束、綿一屯三束、調布一端十五束、庸布一段九束、鍬一口三束、鐵一廷五束、伊賀、伊勢、志摩、相摸四箇國、絹六十束、絲十束、綿六束、調布卅束、庸布廿束、鍬三束、鐵七束、餘國不顯物直者皆准此

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應定新置介掾公廨田事力分法事

甲斐　能登　丹後　石見　周防　長門　土佐　日向

右八箇國介、公廨四分、公廨田一町六段、事力五人、

飛驒

右一國掾、公廨三分、公廨田一町三段、事力四人、

分、史生一分、其博士醫師准史生例、權任者各准當色、其帳者每年進官、一年公廨總計爲分、各准歷任日數班給、

〔延喜式 二十六 主稅〕凡國司處分公廨差法者、大上國、長官六分、次官四分、判官三分、主典二分、史生一分、中國無介則長官五分、下國無掾則長官四分、員外司者、各准當員、其國博士醫士准史生、但陸奧國博士醫師陰陽師並准目、鎭守府將軍准守、軍監准掾、軍曹准目、醫師弩師准史生、若帶國者、不須兩給、其按察使准當國守、記事准掾、

〔羽倉考 一〕國司處分公廨之分法、○中略 其六分ト云ヒ、四分ト云フ類ノ分法ヲ詳ニセル文ナシト雖、式ノ內、如此ノ分法ハ、皆戶令分財ノ條ノ分法ニ同ジケレバ、公廨ヲ處分スルモ、此法ニ異ナラザル事、大略疑ナシ、○中略 今戶令分財ノ分法ヲ以、大國上國ノ公廨處分ノ員數ヲ算フル所左ノ如シ、

一假令バ大和ノ國ノ公廨ハ二十萬束ナル事、主稅式ニ見ユ、其二十萬束ノ中ニテ、官物ノ闕員未納ヲ塡テ、國內ノ儲物等ニ割取テ殘ル所假令バ十三萬束アランニ、是ヲ守以下博士醫師マデニ差ヲ爲テ配分ス、其分法大和ノ國ハ大國ナレバ、守權守二人ノ受ル所各六分ヅヽ、是ヲ二六ノ十二ト立テ、介權介二人ノ受ル所各四分ヅヽ、是ヲ二四ノ八ト立テ、大掾權大掾、少掾權少掾四人受ル所各三分ヅヽ、是ヲ三四ノ十二ト立テ、大目少目二人ノ受ル所各二分ヅヽ、是ヲ二二ノ四ト立テ、史生三人博士醫師各一人、合セテ五人ノ受ル所各一分ヅヽ、是ヲ一五ノ五ト立テ、右守ノ十二ト、介ノ八ト、掾ノ十二ト、目ノ四ト、史生以下ノ五トヲ合セテ四十一トナル、十三萬束ヲ四十一ニ分チテ、其一ヲ一分ト云、卽三千百七十束七把三分一厘七毫强、之ヲ舂イテ米百五十八斛五斗三升六合五勺八才五撮强トナル、(私ニ云、是古升ニシテ今ノ升ニ同ジカラズ、又公廨ヲ分ツニハ、束把ヲ以分ツベシ、舂米ト爲ベキニ非ズ、然レドモ束把ニハ小數ナケレバ、細

外官公廨

之苦、國司利厚、自有衣食之饒、因茲庶僚咸望外任、多士曾無廉耻、朕君臨區寓、志在平分、思欲割諸國之公廨、加在京之俸祿、卿等宜詳議奏聞者、臣聞三代弛張、百王沿革、隨時損益、事在利人、伏惟陛下、仁霑品物、德茂群生、愍庶僚之飢寒、均內外之豐儉、損彼有餘、補此不足、凡在勸植莫不霑潤、臣等承奉聖旨、喜〇喜原作嘉、據類聚國史改、百恒情、臣等商量、每國割取公廨四分之一、以益在京俸祿、奏可、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜十年十一月乙酉、太政官奏偁、謹撿去寶龜六年八月十九日格云、京官祿薄、不免飢寒苦、國司利厚、自有衣食之饒、宜割諸國之公廨、以加在京之俸祿者、立格以來、年月稍積、霑澤之恩虛流、優賞之歎未洽、何者諸國正稅略多欠負、或僅擧論定〇論定下、類聚國史有或全二字、無公廨、而暗據出擧、或〇或恐衍分割四分之一、今計一年送納之物、作差處分、每人所得、仟錢已下佰錢已上、然則諸國須於交替、厚秩負於多士、徒增勞擾、不穩於行、臣等望請、停此新格、行彼舊例、奏可之、

〔享祿本類聚三代格六〕詔官多則政黷、人少則事稽、故省併量宜、委宰期要、昔諸司百寮、有閑有劇、是以資俸賞賜、或厚或薄、今官既從改、賞何依舊、宜要劇、馬料、時服、公廨、悉革前例、普給衆司、詳爲條例、

大同三年九月廿日〇又見日本後紀

〔延曆交替式〕太政官宣、比年諸國司等、交替之日、各貪公廨、競起爭論、自失上下之序、既虧淸廉之風、於理商量、不可如此、今故立式、條呂如左、

凡國司處分公廨式者、總計當年所出公廨、先塡官物之欠負未納、次割國內之儲物、後以見殘作差處分、其差法者、長官六分、次官四分、判官三分、主典二分、史生一分、其國博士醫師准史生例、員外官者各准當色、

天平寶字元年十一月十一日

〔延喜交替式〕凡國司處分公廨者、總計當年所出公廨、先塡官物之欠負未納、割國內之儲物、後以見殘作差處分、其差法者、長官六分、和泉、伊賀、伊豆、安房、飛驒、若狹、佐渡、淡路、隱岐、大隅、薩摩、壹岐等國島五分、志摩國四分、次官四分、判官三分、主典二

太守十分計十二貫七百三十一文四十一分文之二十九
別駕七分計八貫九百一十二文四十一分文之八
司馬五分計六貫三百六十五文四十一分文之三十五
錄事參軍二人各三分各得三貫八百一十九文四十一分文之二十一、二人共七貫六百三十九文四十一分文之一、
司倉參軍三分計三貫八百一十九文四十一分文之二十一
司法參軍三分計三貫八百一十九文四十一分文之二十一
司戶參軍三分計三貫八百一十九文四十一分文之二十一
參軍二人各二分各二貫五百四十六文四十一分文之十四、二人共五貫九十二文四十一分文之二十八、
術曰、置本錢八百八十貫文、以六因之、退二位、爲息數、先除六百文公廨食料、餘令諸官均分、并諸分、得四十一分、爲法除之、得一貫二百七十三文、不盡四十一分文之七、副置之、各以所求分乘之、各得其錢及分數、

○按ズルニ、夏侯陽ハ隋ノ世ノ人ナリ、

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年四月丙辰、以始營紫香樂宮、百官未成、司別給公廨錢總一千貫、交關取息、永充公用、不得損失其本、每年限十一月、細錄本利用狀、令申太政官、

〔通典三十五職官〕大唐〇中略其俸錢之制、京司諸官初置公廨、令行署及番官興易以充其俸、貞觀十二年罷公廨、置胥士七千人、取諸州上戶爲之、准防閤例、而收其課、三歲一更、計員少多、而分給焉、貞觀十五年、以府庫尙虛、勅在京諸司、依舊置公廨、給錢充本、置令吏府史胥士等、令廻易納利、以充官人俸、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年八月庚辰、太政官奏曰、伏奉去七月二十七日勅、如聞京官祿薄、不免飢寒

下國參仟束〈志摩國、幷壹伎、對馬、多褹三島、不入此例、〉

右撿案內、去神龜元年三月廿日格偁、割正税稻出擧取利、名爲國儲、以充朝集使還國之間、及非時差役、幷繕寫籍帳書生、幷除運調庸外向京擔夫等粮食、其出擧法、大國四万束、上國三万束、中國二万束、下國一万束者、至天平十七年、始置公廨、卽停國儲、天平寶字元年十月十一日式、唯稱割公廨內、置國儲物、未立割置之數、充用之色、因玆諸國所置、多少無限、或有貪吏、不免贓汚、自今以後宜依件爲定、以充公用、其充給粮食之色、准神龜元年格、但税帳大帳貢調等使、亦充粮料、其長官佐職各遞奉使、品秩雖異、使務是同、如聞、或國一使之料、上下別數、事實不穩、宜一使粮料、高卑同法、但四度使料、多少之數、量事閑繁、增減定之、若違此制、輙私犯用者、計贓科罪、一同官物、〇中略

以前被右大臣宣偁、奉勅如右者、諸國承知依件行之、

延曆廿二年二月廿日

〔延喜式五十雜〕凡諸司公廨限三箇年出擧、其本依數返納、仍以利爲本、出息每年十二月錄定本數申送於官、交替官長分明付領、然後放還、其處分法者、長官五分、次官四分、判官三分、主典二分、史生一分、若無次官或判官者、止准見官爲差、

〔續日本紀三文武〕慶雲元年七月庚子、公廨祿給式部省大學散位等寮、

〔夏侯陽算經中〕分祿料

今有官本錢八百八十貫文、每貫月別收息六分、計息五十二貫八百文、內六百文充公廨食料、五十二貫二百文逐官高卑共分、太守十分、別駕七分、司馬五分、錄事參軍二人各三分、司倉參軍三分、司法參軍三分、司戶參軍三分、參軍二人各二分、問各錢幾何、

答曰

以公廨充用途并儲蓄

准戸口數增減爲率許之、

〔令義解 十雜〕凡公廨雜物、（謂內外諸司公廨、其物數待式處分、）皆令本司自勾錄、其費用見在帳、年終一申太政官、隨至勾勘、

〔唐律疏議 十五廐庫〕諸監臨主守、以官物私自貸、若貸人、及貸之者、無文記以盜論、有文記準盜論、（文記謂取抄署之類、）立判案減二等、〇中略 卽充公廨、及用公廨物、若出付市易而私用者、各減一等坐之、（雖貸亦同、餘條公廨準之、卽主守私貸、無文記者、依盜法、）

〔令義解 六儀制〕凡春時祭田之日、集鄕之老者、一行鄕飲酒禮、〇註略 使人知尊長養老之道、（其酒肴等物、出公廨供、）

〔令集解 十二田〕和銅五年五月十六日格云、國司巡行部內、將從次官以上三人、判官以下二人、史生一人、并食公廨、日米二升、酒一升、史生酒八合、將從一人米一升、酒五合、

〔續日本紀 十二聖武〕天平八年三月庚子、太政官奏、諸國公田、國司隨鄕土沽價賃租、以其價送太政官、以供公廨、奏可之、

〔續日本紀 二十二淳仁〕天平寶字三年正月甲戌、勅曰、〇中略 宜隨國大小割出公廨、以爲常平倉、逐時貴賤、糴糶取利、普救還脚飢苦、

〔日本後紀 二十一嵯峨〕弘仁二年四月甲戌、勅、河內國稅分錢三百貫、便充當國、限三箇年出擧收利、爲造堤料、〇中略 又割公廨息利、充堤所食料、其代者廻給隨便國、三年以後復舊焉、

〔延曆交替式〕太政官符

一定割公廨置國儲數事

大國壹萬貳仟束（計公廨利率一万束割取一千以爲國儲、若公廨有增減者准折、上中下國亦同此例、）

上國玖仟束

中國陸仟束

○中略 石見國正稅公廨各十五万五千束、○中略 隱岐國正稅二万束、公廨四万束、○中略 播磨國正稅公廨各卌四万束、○中略 美作國正稅公廨各卌万束、○中略 備前國正稅公廨各卌八万一千一百五十束、○中略 備中國正稅公廨各卌万束、○中略 備後國正稅公廨各廿四万束、○中略 安藝國正稅廿三万束、公廨廿二万八千八百束、○中略 周防國正稅公廨各廿一万束、○中略 長門國正稅公廨各十一万束、○中略 紀伊國正稅公廨各十七万五千束、○中略 淡路國正稅三万五千束、公廨四万五千束、○中略 阿波國正稅公廨各廿万束、○中略 讃岐國正稅公廨各卌五万束、○中略 伊豫國正稅公廨各卌万束、○中略 土佐國正稅公廨各廿万束、○中略 筑前國正稅公廨各廿万束、○中略 府官公廨十五万束、○中略 筑後國正稅公廨各廿万束、○中略 府官公廨十万束、○中略 肥前國正稅公廨各廿万束、○中略 府官公廨十五万束、○中略 肥後國正稅公廨各卌万束、○中略 府官公廨卌五万束、○中略 豐前國正稅公廨各廿万束、○中略 府官公廨十万束、○中略 豐後國正稅公廨各廿万束、○中略 府官公廨十五万束、○中略

已上六國以下○筑前 出擧、府公廨總一百万束、若不堪擧、隨卽減之、

日向國正稅公廨各十五万束、○中略 大隅國正稅八万六千卌束、公廨八万五千束、○中略 薩摩國正稅公廨各八万五千束、○中略 壹岐島正稅一万五千束、公廨五万束、○中略 對馬島正稅三千九百廿束

〔江家次第四正月〕定受領功課事

本穎條(本穎、國史貯穀之總名也、正稅、公廨雜稻、出擧是也、諸國置此三色稻、見主稅式、穎本謂之稻、切穗謂之穎、出擧十束稻、加利稻三束、春時出擧、秋收納之、)

〔延喜式二十六主稅〕凡出擧官稻者、皆據人多少、若可加減者、正稅公廨各須同數、其出擧帳附大帳使申送官、

〔類聚國史八十三政理〕大同二年九月壬子、東山道觀察使從四位下安倍朝臣兄雄言、當道諸國正稅公廨

太政官奏、諸國司等割留正稅出擧之式、請依前件以爲公廨之料、若有正稅數少、及民不肯擧者、不必滿限、其官物欠負未納之類、以茲令塡、不許更申、

天平十七年十一月廿七日〇又見續日本紀

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻、

山城國正稅公廨各十五万束〇中略 大和國正稅公廨各廿万束〇中略 河內國正稅公廨各十四万九千四百七十七束〇中略 和泉國正稅公廨各八万束〇中略 攝津國正稅公廨各十八万五千束〇中略 伊賀國正稅公廨各十三万五千束〇中略 伊勢國正稅公廨各卌万束〇中略 志摩國正稅穀一千二百斛〇中略 尾張國正稅公廨各廿万束〇中略 參河國正稅公廨各廿万束〇中略 遠江國正稅公廨各廿八万束〇中略 駿河國正稅廿三万束、公廨廿五万束〇中略 伊豆國正稅公廨各六万五千束〇中略 甲斐國正稅公廨各廿四万束〇中略 相摸國正稅公廨各卌万束〇中略 武藏國正稅公廨各卌万束〇中略 安房國正稅公廨各十五万束〇中略 上總國正稅公廨各卌万束〇中略 下總國正稅公廨各卌万束〇中略 常陸國正稅公廨各五十万束〇中略 近江國正稅公廨各卌万束〇中略 美濃國正稅公廨各卌万束〇中略 飛驒國正稅公廨各四万束〇中略 信濃國正稅公廨各卌五万束〇中略 上野國正稅公廨各卌万束〇中略 下野國正稅公廨各卌万束〇中略 陸奥國正稅六十万三千束、公廨八十万三千七百十五束國司料六十四万一千二百束、鎭官料十六万二千五百十五束、〇中略 出羽國正稅廿万束、公廨卌四万束、〇中略 若狹國正稅公廨各九万束〇中略 越前國正稅公廨各卌万束〇中略 加賀國正稅公廨各卌万束〇中略 能登國正稅公廨各十五万束〇中略 越中國正稅公廨各卌万束〇中略 越後國正稅公廨各卌三万束〇中略 佐渡國正稅三万八千束、公廨八万束〇中略 丹波國正稅廿三万束、公廨廿五万束〇中略 丹後國正稅公廨各十七万束〇中略 但馬國正稅公廨各卌四万束〇中略 因幡國正稅公廨各卌万束〇中略 伯耆國正稅公廨各廿五万束〇中略 出雲國正稅廿六万束、公廨卌万束、

唐武德中、外官無祿、貞觀二年、制有上考者、乃給祿、其後遂定給祿俸之制、○中略其俸錢之制、京司諸官、初置公廨、令行署及番官、興易以充其俸、貞觀十二年、罷公廨、置胥士七千人、取諸州上戶爲之、准防閤例而收其課、三歲一更、計員少多而分給焉、貞觀十五年、以府庫尙虛、勅在京諸司依舊置公廨、給錢充本、置令史府史胥士等、令廻易納利、以充官人俸、諫議大夫褚遂良上疏、言其不便、太宗納之、停諸司捉錢、依舊本府給月俸、二十一年、復依古制置公廨、給錢爲之本、置令史胥士等職、貿易收息、以充官俸、永徽元年、悉廢胥士等、更以諸州租庸脚直充之、其後又令薄賦百姓一年稅錢、依舊令高戶及典正等掌之、每月收息、以充官俸、其後又以稅錢爲之、而罷其息利、

凡京文武正官、每歲供給俸食等錢、幷防閤庶僕及雜錢等總一十五萬三千七百二十貫、員外官不在此數外官則以公廨田收及息錢等常食公用之外、分充月料、先以長官定數、其州縣少尹長史司馬及丞各減長官之半、尹大都督府長史副都督別駕及判司准二佐、以職田數爲加減、其參軍及博士減判司、主簿縣尉減縣丞各三分之一、

沿革

〔類聚國史八十四政理〕延曆十七年正月甲辰、停公廨、一混正稅、割正稅利、置國儲及國司俸、

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年六月癸未、勅、前停止公廨、混合正稅、兼減舉數、以省民煩、然諸國稱任中之未納、徵公廨之息利、百姓受弊、艱苦實深、自今以後宜停徵焉、如有違者、隨卽科之、

〔類聚國史八十四政理〕延曆十九年九月丁酉、諸國論定公廨依舊出擧、

諸國公廨數

〔延曆交替式〕公廨

大國肆拾萬束

上國參拾萬束

中國貳拾萬束就中大隅薩摩二國各四万束

下國壹拾萬束就中飛驒、隱伎、淡路三國、各三万束、志摩國、壹岐島、各一万束、

一分ノ公廨ナリ、又延喜ノ主税式ナル、志摩國ノ史生ノ公廨料ノ穀、七十五石ナルニ依リ考フレバ、七十五石ノ穀ハ稻七百五十束ニシテ、舂キテ米トスレバ三十七石五斗ナリ、更ニ志摩國ノ祿物ノ價法ニ依レバ、七百五十束ノ價ハ、絹十二匹半、絲七十五絇、綿百二十五屯、調布二十五端、庸布三十七段、鍬二百五十口、鐵百七挺ナリ、是レ志摩國一分ノ公廨料ナリ、地ニ肥瘠アリ、國ニ遠近アリ、歲ニ豐歉アリ、世ニ前後アリ、物ニ多少アリ、價ニ貴賤アリテ、一律ヲ以テ推スコト能ハズト雖モ、亦以テ其梗概ヲ知ルベシ、サテ此公廨ノ分法ニ依リテ史生ヲ一分ト云ヒ、目ヲ二分ト云ヒ、掾ヲ三分ト云フナリ、又前任後任交替ノ時ニ公廨ヲ處分スル法ハ、孝謙天皇ノ天平寶字元年ニ始テ見エテ、其後屢〻沿革アリ、又內官ノ人ノ外官ヲ兼ヌルヲ以テ榮トスルハ、公廨ヲ得ルヲ以テナリ、猶ホ政治部貸借篇ヲ參照スベシ、

對馬ノ島司ニハ公廨ヲ充テズシテ、代フルニ年粮ヲ以テセリ、猶ホ志摩國司ニ公廨料ヲ給スルガ如シ、其年粮ハ、筑前、筑後、肥前、肥後、豐前、豐後ノ六國ヨリ、毎年穀ヲ以テ漕送ス、但シ防人ノ粮モ此內ニテ給スルナリ、

〔伊呂波字類抄 久疊字〕公廨

〔令集解 十二田〕古記云、○中略供公廨、所謂供給官人也、以充雜用、謂臨時雜用耳、問、公廨正訓未知何訓、答、供給官人之物、謂之公廨物也、此物所安置處、謂之公廨院字也、假令借貸請官物出擧取利、以本還官、以利更廻出擧、取利以借給當司官人等、此爲公廨物、本此官物、故厩庫律之同官物之例、

〔倭訓栞 中編久 六〕くかい　公界の音也、又公廨と書り、職田は全く私用とし、公廨は官府の雜用とするをもて、押出したるをいふ詞になれりといへり、一說に公廨今畠年貢といふ、國司以下諸役人公廨の內をもて役料に配當す、

〔文獻通考 六十五職官〕祿秩 ○中略

利ヲ以テ先ヅ官物ノ欠負未納ヲ塡備シ、次ニ割キテ國儲トス、但シ此時既ニ官吏ノ俸ニ充テシナラン、(但シ大宰府ニテハ、是ヨリ先キニ既ニ公廨稻ヲ官人ノ祿ニ充テタリ、)桓武天皇ノ延曆九年ノ勅ニ、國司等ガ欠物ヲ塡セズシテ、猶ホ公廨ヲ得テ、天平ノ格ニ依ラザルコトヲ誡メタルヲ以テ見ルベシ、其勅ニ新欠ハ當年ノ公廨ヲ以テ塡シ、舊欠ハ每年率ヲ立テヽ償ハシメタリ、又淳仁天皇ノ天平寶字三年ニ、諸國ニ常平倉ヲ設ケ、公廨ヲ割キテ穀ヲ輸サシメ、桓武天皇ノ延曆二十二年ニハ、國儲メ數ヲ定メテ公廨メ內ヨリ割キ、嵯峨天皇ノ弘仁二年ニハ、河內國ノ公廨ノ息ヲ割キテ、其國ノ造堤所ノ食料ニ充テタリ、又官人ノ俸料トスルニ就キテハ、孝謙天皇ノ天平寶字元年ニ、長官以下ノ分法ヲ立テタリ、而シテ其守ハ國ノ大小ニ依ラズ皆六分ヲ得タリシヲ、後ニハ大上國ノ守ノミ六分ニシテ、中國ハ五分、下國ハ四分トシタリ、此分法ハ始ラク大國ノ法ニ依リテ言フトキハ、大國ハ守六分、介四分、大掾少掾各、三分、大目少目各、二分、史生三人各、一分、博士一分、醫師一分、合計二十五分ナレバ、若シ當年剩ル所ノ公廨稻十二萬五千束アレバ、二十五ヲ以テ之ヲ除シ、一分ノ人ハ五千束ヲ得、二分ノ人ハ一萬束ヲ得、三分ノ人ハ一萬五千束ヲ得、四分ノ人ハ二萬束ヲ得、六分ノ人ハ三萬束ヲ得ルナリ、官員ニ增減アルトキハ、二十三分トモ二十七分トモシテ、其內ノ六分四分等ヲ得ルナリ、上中下國モ之ニ準ズ、サテ其一分ハ大率幾何ナルカト云フニ、淳仁天皇ノ天平寶字四年ノ勅ニ、對馬島ノ史生ノ年粮ヲ二千五百束トセリ、穀トスレバ二百五十斛、舂キテ米トスレバ百二十五斛ナリ、是レ對馬島ノ一分ノ年粮ナリ、又仁明天皇ノ承和十一年ノ官符ニ、陸奧國ノ國司鎭官ノ一分ノ人ノ公廨ヲ五千三百二十束トセリ、是レ穀トスレバ五百三十二斛ニシテ、舂キテ米トスレバ二百六十六斛ナリ、更ニ陸奧國ノ祿物ノ價法ニ依レバ、五千三百二十束ノ稻ハ、絹三十三匹、絲三百五十四絇、綿四百九屯、調布百六端、庸布百七十七段、鐵三百八挺ニ該ル、是レ陸奧ノ

古事類苑

封祿部六

公廨 年粮併入

公廨トハ、原ハ官舍ノ事ナルヲ、轉ジテ官舍ノ用度物ノ事トス、而シテ其用度ニ供スルニハ、之ヲ出擧シテ、其利ヲ以テ充テ、亦以テ官人ノ俸ニモ充ツルナリ、官人ノ俸ニ充テシハ、京官ニ在リテハ、文武天皇ノ慶雲元年ニ、公廨祿ヲ式部省、大學寮、散位寮ニ給セシヲ以テ始トス、光仁天皇ノ寶龜六年ニ、京官ノ薄祿ナルヲ以テ、諸國ノ公廨四分ノ一ヲ割キテ、京官ノ俸ヲ益シタリ、而ルニ其毎人ノ所得、多キ者ハ千錢ヲ出デズ、少キ者ハ百錢ニ過ギザルヲ以テ、尋デ罷メタリシガ、平城天皇ノ大同三年ニハ、普ク諸司ニ給シ、延喜ノ雜式ニ其分法ヲ載セタリ、其法タル、諸司ニ於テ其公廨物ヲ、三年ヲ限リテ出擧シ、其利ヲ以テ本トシテ更ニ出擧シ、其利ヲ長官以下史生ニ至ルマデ、差ヲ立テヽ配分シ、三年ノ後ニ其本ヲ其司ニ返納スルナリ、意フニコレハ並ニ稻ニアラズシテ、錢ヲ以テセシナラン、而レドモ內官公廨ノ事ハ、載籍ニ寥々タルヲ以テ、詳ニ之ヲ知ルニ由ナク、且ツ延喜式ノ後ニハ、絕エテ見ル所ナシ、僅ニ准三宮ノ勅ニ於テ、內官三分ノ名アルヲ知ルノミ、サレドモ是ハ外官ニ準ジテ立テタル名ナルガ如シ、外官ノ公廨ハ、盡ク稻ヲ用キル事ニテ、本ハ國儲ヨリ起レリ、聖武天皇ノ神龜元年ニ、正稅稻ヲ割キ、出擧シテ利ヲ取リ、名ケテ國儲トシ、朝集使等ノ粮食ニ充テシガ、天平十七年ニ、國儲ヲ停メ、始テ公廨ヲ置ケリ、國ノ大上中下ニ從テ多少ノ差アリ、是ヲ以テ出擧シ、其

掌膳四人　尚縫四人　典藥二人　典兵二人　典闈四人　典殿二人　典掃二人　典水二人

典酒二人（並准八位）

右廿四人、各錢一貫一百文、

前件女官、自正月至六月、上日一百廿五以上者、給春夏馬料錢、（初任官計日、准給季祿法、）秋冬准此、（春夏料七月十日、秋冬料正月十日、與式部兵部共申太政官、）其有上日共等、勞劇亦同者、依官位次作差分給、滿限日貪濁有狀者、不須給與、如帶二官者從一高給、其員外官者亦准正員、

○按ズルニ、女官ノ馬料ハ、尚侍以下皆男官ノ半ヲ賜フコト、位封位祿ノ制ニ同ジ、獨リ尚藏ハ正三位ニ準ジナガラ、其馬料男官ノ半ニ及バズ、

女官馬料

定修理職官位事

右太政官去延暦十五年七月廿四日下式部省符偁、造宮職官位、宜准中宮職、但大屬特爲七位官、其馬料者、少屬已上人別給之、又弘仁九年七月十九日符偁、修理職官位馬料季祿等准廢造宮職者、右大臣宣、奉勅、件職官位、宜仍舊貫、

寬平三年八月三日

〔延喜式十二中務〕女官馬料

尚藏一人准正三位

右一人、給錢八貫文、

尚侍二人准從三位

右二人、各錢七貫五百文、

尚膳一人　尚縫一人並准正四位

右二人、各錢三貫五百文、

典侍四人　典藏二人並准從四位

右六人、各錢三貫文、

掌侍四人　典膳二人　典縫二人並准從五位

右八人、各錢二貫文、

尚書一人　尚殿一人　尚酒一人並准六位

右人別錢一貫二百五十文、但尚酒一人一貫百七十文、

掌藏四人　典書二人　尚藥一人　尚兵一人　尚闈一人　尚掃一人　尚水一人並准七位

右人別錢一貫一百七十五文、但典書二人、各一貫一百文、尚藥一人一貫二百五十文、

八位官二貫五百文（日二貫二百文、夜三百文）
左近衛府十三人（從三位官一人、從四位官一人、正五位官二人、六位官四人、七位官四人、八位官一人、右近衛府准此、）
左衛門府十一人（從四位官一人、從五位官一人、六位官二人、七位官二人、八位官五人、右衛門府准此、）
左兵衛府九人（從四位官一人、從五位官一人、六位官一人、七位官二人、八位官四人、右兵衛府准此、）
左馬寮六人（從五位官一人、六位官一人、七位官二人、八位官二人、右馬寮准此、）
齋宮寮門部司二人（准六位官一人、初位官一人、）
馬部司一人（七位官）

右自正月至六月上日上夜、各一百廿五以上者、給春夏馬料錢、秋冬准此、（其春夏七月十日、秋冬正月十日、與中務式部共申、）
（太政官、）但雖滿限日、貪濁有狀者、不須給與、若帶二官者從一高給、其齋宮門部司料者、以伊勢國神稅給與、不給夜料、如不足者通用比國、

〔日本後紀 十七 平城〕大同三年四月甲子、內舍人廿人准少監物賜馬料、以出納官物也、

〔類聚三代格 五〕太政官符
應定巡察馬官位幷預馬料事
大屬正八位上官　少屬大初位上官
右得彈正臺解偁、依太政官去年十二月廿九日符、新置巡察大少屬各一員、而未定官位、亦不預馬料、望請准例被定官位幷預馬料、謹請處分者、中納言兼左近衛大將從三位行民部卿清原眞人夏野宣、奉勅、宜依件定之、但馬料給八位官一人料、
天長四年八月廿八日

〔三代實錄 十六 淸和〕貞觀十一年十二月二日乙酉、制、加增典藥寮五位官人一員馬料、立爲恒例、

〔類聚三代格 五〕太政官符

主水司一人六位已下初位以上官
彈正臺七人從三位官一人從四位官一人六位官二人八位以上官二人正五位官一人
春宮坊八人從四位官一人從五位官一人六位官三人八位官三人
左京職八人從四位官一人從五位官一人六位官一人七位官二人八位官三人、右京職准此、
修理職八人從四位官一人從五位官一人六[illegible]三人七位官一人八位官二人
勘解由使九人從四位官一人從五位官二人六位官三人七位官三人
齋宮寮廿四人從五位官一人六位官四人七位官七人初位官十二人
齋院司四人從五位官一人六位官一人七位官一人八位官一人
凡權官馬料、准正員給之、
右自正月至六月、上日一百廿五以上者、給春夏馬料錢、秋冬准此、但春夏七月十日、秋冬正月十日、與中務兵部共申太政官、其有上日共等、勞劇亦同者、依官位次第作差分給、縱滿限日、貪濁有狀者、不須給與、如帶二官者、從一高給、若有大學頭陰陽頭不解經術者、隨便停給、其齋宮寮馬料者、以神税給、若不足者通用比國、

〔延喜式二十八兵部〕馬料

從三位官廿五貫日分十五貫夜分十貫
從四位官九貫日六貫夜三貫
正五位官七貫日五貫夜二貫
從五位官六貫日四貫夜二貫
六位官二貫八百文日二貫五百文夜三百文
七位官二貫六百五十文日二貫三百五十文夜三百文

雅樂寮八人從五位官一人六位官一人七位官一人八位官五人之中屬一人歌師四人

玄蕃寮四人從五位官一人六位官一人七位官一人八位官一人

諸陵寮三人六位已上官一人七位官一人八位官一人

民部省十一人正四位官一人正五位官一人從五位官一人六位官四人七位官一人八位官三人

主計寮十人從五位官一人六位官一人七位官三人八位官五人

主稅寮八人從五位官一人六位官一人七位官二人八位官四人

兵部省六人正四位官一人從五位已上官一人六位官二人八位已上官二人

刑部省十四人正四位官一人從五位已上官一人六位官二人八位已上官二人判事正五位官二人從六位官四人八位已上官二人

大藏省六人正四位官一人從五位已上官一人六位官二人八位已上官二人

織部司一人六位已下初位已上官

宮內省七人正四位官一人從五位已上官三人八位已上官三人

大膳職三人從五位已上官一人七位已上官一人八位官一人

木工寮十人從五位官一人六位官一人七位官二人八位官六人之中屬算師各二人大小工各一人

大炊寮三人從五位官一人七位已上官一人初位以上官一人

主殿寮四人從五位官一人六位官一人七位官一人初位以上官一人

典藥寮十五人從五位官一人六位以下官七人之中侍醫四人助允各一人初位以上官二人七位官七人之中醫博士一人○計數不レ合、恐有レ誤、

掃部寮四人從五位官一人六位官一人七位官一人初位以上官一人

內膳司五人六位官一人七位官三人初位官一人

造酒司一人六位已下初位以上官

采女司一人六位已下初位以上官

右以神税給之

一位官五十貫　二位官卅貫
正三位官卅貫　從三位官十五貫
正四位官七貫　從四位官六貫
正五位官五貫　從五位官四貫
六位官二貫五百文　七位官二貫三百五十文
八位官二貫二百文　初位官二貫五十文

太政官廿九人一位官一人二位官二人正三位官二人從三位官三人從四位官二人正五位官四人從五位官三人六位官六人七位官六人
中務省卅二人正四位官一人正五位官二人從五位官一人六位官四人七位官一人八位官三人內記六位官二人七位官一人監物從五位官二人六位官四人
七位官四人初位官一人主鈴七位官二人八位官二人典鑰七位官一人八位官一人
中宮職八人從四位官一人從五位官一人六位官三人八位官三人
大舍人寮四人從五位官一人六位官一人七位官一人八位官一人
圖書寮四人從五位官一人六位官一人七位官一人八位官一人
內藏寮八人從五位官一人六位官二人七位官二人八位官三人
縫殿寮四人從五位官一人六位官一人七位官一人八位官一人
陰陽寮十一人從五位官一人六位官一人七位官九人之中允一人陰陽博士二人曆博士一人天文博士一人漏剋博士一人陰陽師二人初位巳上官一人
內匠寮六人從五位官一人六位官一人七位官二人八位官二人
式部省七人正四位官一人正五位官一人從五位官一人六位官二人八位巳上官二人
大學寮十九人從五位官三人六位官一人助博士二人人之中允一人博士十一人八位官一人七位官十三
治部省六人正四位官一人從五位巳上官一人六位官二人八位巳上官二人

諸司馬料

久、秋冬乃馬料可賜比女刀爾合若干、以下亦同式部、大臣判命、三輔共稱唯、大臣若有所問、三輔隨狀辨答、次丞錄俱稱唯、自下退出、輔執版提出、若於曹司賜、即亦准此、訖修解文、進左辨官、太政官錄三省所申總目、十五日少納言奏之、廿日下符大藏省、廿二日質明、式部二省省掌向大藏省、唱計諸司、掃部寮設丞錄已下座於藏下、丞錄史生各就座、大藏省積料錢、掃部亦設二省幷大藏座於料物下、大藏積物畢狀申辨官、辨官令官掌喚式兵二省、錄稱唯參進、辨大夫命、諸司馬料早給之、錄稱唯退申丞、訖引就頒給座、丞命云、給之、史生稱唯、諸司主典隨喚稱唯進跪、史生宣示物數、藏部承命計授、隨即且申其數、史生記錄、大藏亦如是、史生申給畢狀、即引退出、

〔延喜式十九式部〕諸司進馬料文幷給

六月十二月下旬、文官各總計當司幷所管官人上日、造簿、正月七月三日平旦、各令主典申送等事、如季祿儀、十日質明錄就左辨官版位、申曰、將申馬料文於上、中務兵部亦如之、三省輔各率丞錄就太政官版位等事、亦如季祿儀、廿二日質明、省掌向大藏省、召計諸司、掃部寮設丞錄以下座於藏下、丞錄史生就座、大藏積料錢、掃部寮又設二省幷大藏座於其物下、大藏積物了狀申辨官、令官掌召二省、錄稱唯進、辨大夫命曰、馬料早給、錄受宣退申丞、訖引就庭座、丞命曰、給之、史生稱唯、以次唱給、亦如季祿儀、史生申訖狀、即引退去、

〔享祿本類聚三代格六〕詔、官多則政蕪、人少則事稽、故省併量宜、委宰期要、昔諸司百寮、有閑有劇、是以資俸賞賜、或厚或薄、今官既從改、賞何依舊、宜要劇馬料、時服、公廨、悉革前例、普給衆司、詳爲條例、

大同三年九月廿日　〇又見本後紀二日

〔延喜式十八式部〕馬料

神祇官十八人　伯六貫　大副四貫　少副二貫五百文若叙五位者四貫　大祐少祐各二貫五百文　大史少史各二貫二百文　宮主二貫五百文諸宮主准此　卜長上各二貫二百文

大同三年十二月廿六日

〔延喜式十八式部〕凡令稱初任者、是無祿任有祿、其有祿遷有祿者不入初任之例、但別勅才伎長上諸司者、任職事官與初任同准、（馬料亦准之）其在外官人遷任京官、會給祿者聽入給例、（謂正月七月卅日以前、上日臨身者）

〔年中行事秘抄正月〕馬料事

弘仁式云、諸司馬料者、起正月盡六月、計上日一百廿日以上、給春夏料、

〔延喜式十一太政官〕凡諸司馬料者、起正月盡六月、計上日一百廿五以上、給春夏料、中務式部兵部等省錄人物數、七月十日辨官率三省申太政官、（其太政官馬料者、當月一日錄送辨官、辨官總造目、三日下符式部）卽錄三省所申總目、十五日少納言奏之、廿日官符下大藏、廿二日出給、秋冬准此、（事見式部式）

〔延喜式十八式部〕凡內記、監物、主鈴、典鑰等四箇局官人季祿馬料、別錄令申、不得混雜管省、

〔延喜式四十春宮〕凡正月廿二日賜馬料、官人一人參大藏省、（七月亦同）

〔延喜式十八大舍人〕凡十二月廿一日請秋冬馬料、并元日威儀雜物文申省、

〔日本紀略三村上〕天曆二年七月十日丁巳、中務兵部申馬料目錄、

賜馬料儀

〔儀式九〕正月廿二日賜馬料儀

當月十三日、（七月十日）平旦中務式部兵部等省錄、依次就左辨官版、式部祿進就版申云、式部省申久、司司乃秋冬乃馬料可賜事上留申賜止申、次兵部錄進申亦如之、次中務錄申云、中務省申久、比女刀禰秋冬馬料可賜事上留申賜止申、辨命候之、三省錄俱稱唯退出、輔丞錄各一人到太政官廳候、丞錄各一人就外記請可申政之狀、卽少納言以下率三省輔以下就版、（五位就前版、六位就後版、但在西堂者、直度馳道）大臣命喚之、五位以上俱稱唯、六位以下亦稱唯、五位以上隨色就座、六位以下依次亦就座、辨一人起座申云、司司乃申世留政申賜止申、式部錄起讀申云、式部省申久、秋冬乃馬料可賜司司長上合若干、就中其位若干云々、可賜料錢若干貫、損益去年若干申賜止申、訖卽居、次兵部錄起申詞同式部、次中務錄申云、中務省申

ヲ春夏ノ分トシ、七月ヨリ十二月マデヲ秋冬ノ分トシ、並ニ上日一百二十五以上ニシテ賜ニ預ル、但シ兵部衞府等ノ官人ノミハ、日夜ノ分ヲ給ス、而シテ夜宿ノ數ハ日直ト同ジ、凡テ馬料ノ法タルヤ、一省一寮ニ某々ノ官位幾人、合計幾人ト定メタルコトナレバ、其省其寮ニ官員此數ヨリ多クシテ、上日皆其限ニ滿テルトキハ、普ク給スルコト能ハズ、因テ上日共ニ等ク、勞劇亦同ジキトキハ、官位ノ次第ニ依リ、差ヲ作シテ分給スルナリ、又縱ヒ限日ニ滿テリトモ、貪濁ノ狀アル者ニハ與ヘズ、二官アル者ハ、一ノ高官ニ從テ給ス、又神祇官齋宮寮ハ神稅ヲ以テ給ス、

馬料ヲ給スル次序ハ、初メ式部、兵部、中務ノ三省、文武官、女官ノ上日ヲ錄シ、簿ヲ造リ、正月七月ノ十日ニ三省ノ官人太政官廳ニ詣リ、馬料ヲ賜ハンコトヲ請ヒ、奏聞ヲ經テ、二十二日、大藏省ニ於テ給與ス、

起原

〔續日本紀十聖武〕神龜五年三月甲子、勅、京官文武職事五位以上、給防閤者、人疲道路、身逃差課、公私同費、彼此共損、自今以後不須更然、其有官人重名、特給馬料、給式有差、事並在格、

〔年中行事秘抄正月〕馬料事

始自神龜五年三月一日奏、

制度

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

初任官人幷散事季祿事

右依令、自八月至正月上日一百廿以上者、給春夏祿、秋冬亦如之、此則六月之內、上日三分之二以上、乃給季祿、而承前所行初任之官、不限日之多少、皆依給祿之例、今被右大臣宣偁、奉勅、自今以後、改張此例、起自任日至于限月、上日不滿三分之二者、不在給例、又二月八月上旬新任者、雖祿文未奏、而既在限外、宜入後季計日給之、其給馬料、亦准此例、

トヤ
勘申

〔本朝續文粹勘文二〕變異疫疾飢饉盜賊等勘文　敦光朝臣

變異疾疫飢饉盜賊等事○中略

一去年風水有難今年春夏飢饉事○中略

右王者八政食爲其先、○中略七者依府庫空虛也、大府○大藏省之倉廩、久以空虛、諸國租稅、已少塡納、況納官封家、有名無實、列位之臣、不預月俸、奉公之士、難禦歲寒、所謂衣食闕於家、雖父母不能制其子、凍餒切於身、雖堯舜不能固其節、又諸國大粮、充行惟稀、臺隷之輩、衣糧難支、○中略

保延元年七月廿七日　正四位下行式部大輔藤原朝臣敦光

〔台記〕康治二年十月廿七日庚戌、有大粮申文、施米定、去年不行大粮施米兩事、仍今夜大粮、去年大粮也、於施米者當年也、政重宿禰云、賑給施米者、雖一年定籍、後年無其代、位祿大粮者、必雖一年有其代、深更退出、

馬料

元正天皇ノ養老三年ニ、五位以上ノ文武ノ京官ニ防閤ヲ給セシガ、聖武天皇ノ神龜五年ニ之ヲ廢シテ、賜フニ馬料ヲ以テセリ、是馬料ヲ賜フノ權輿ナリ、馬料ハ養馬ノ料ニ供スル爲メニ、京官ノ文武諸司、女官、及ビ齋宮寮、齋院司ノ長上官等ニ錢ヲ賜フコトニテ、或ハ官職相當ノ位階ニ依リ、或ハ官名職號ニ依リテ各等差アリ、而シテ權官ノ文官、員外ノ女官ハ、正員ニ準ジテ給ス、馬料ハ春秋二孟ニ、既往ノ上日ヲ計ヘテ給スルコトニテ、正月ヨリ六月マデ

タル道理ニ候フ、皆押量リ思給フル事也、然レドモ己等一人ガ事ニモ非ズ、近來府ニ露物不レ候デ、陣ノ恪勤ノ者共侘申スニ依テ、此ク發リ候ヘバ、此レ皆互ニテ候ヘバ、糸惜ク思ヒ奉リ乍ラ、此ク參テ候フモ、極テ不便ニ思フナド云フ程ニ、此ノ兼時敦行近ク居タレバ、腹ノ鳴ル事糸頻也、サフメキ喤ルヲ、暫シハ笏ヲ以テ机ヲ扣テ交ハス、或ハ拳ヲ以介□□ニ彫入レナドス、守龍起ニ見遣レバ、末ノ座ニ至ルマデ、皆腹鳴合テスヒキ口合ヘリ、暫許有レバ、兼時白地ニ罷立ツト云テ、忩テ走ル樣ニテ行ヌ、其レヲ見テ、兼時ガ立ツニ付テ、異舍人共追シラガヒテ座ヲ立テ、走リ重ナリテ板敷ヲ下ルニ、或ハ長押ヲ下ル程ニ、ヒチメカシテ垂懸ケツ、或ハ車宿ニ行テ、著物ヲモ不二解敢一ズ痢懸ル者モ有リ、或ハ亦疾ク脱テ褰テ、檁ノ水ヲ出スガ如クニ痢ル者モ有リ、或ハ隠レモ不二求敢一ズ痢リ迷タリ、如レ此クスレドモ、互ニ咲合テ、然ハ思ツル事ゾカシ、此ノ翁共、墓々シキ事不二爲セ一ジ、必ズ怪ノ事出シテムトハ押量ツル事也、何樣ニテモ、守ノ殿ハ惡クモ不レ御ズ、我等ガ酒ヲ欲ガリテ呑ガ至ス所也ト云テ、皆咲ヒテ腹ヲ病テ痢合タリ、而ル間門ヲ開テ、然バ出給ヘ、亦次々ノ府ノ官人達入レ申サムト云ヘバ、吉キ事ナヽリ、疾ク入レテ、亦己等ガ樣ニ痢ヨヤト云テ、袴共ニ皆痢懸巾ヒ線テ追シラガヒテ出ルヲ見テ、今四ノ府ノ官人共ハ、咲テ逃テ去ニケリ、早ウ此ノ爲盛ノ朝臣ガ謀ケル樣ハ、此ク熱キ日、平張ノ下ニ三時四時炮セテ、後ニ呼入レテ、喉乾タル時ニ、李鹽辛キ魚共ヲ肴ニテ、空腹ニ吉クツヽシリ入サセテ、酸キ酒ノ濁タルニ、牽牛子ヲ濃ク摺入レテ呑セテハ、其ノ奴原ハ不レ痢テハ有ナムヤト思テ謀タリケル也ケリ、此ノ爲盛ノ朝臣ハ、極タル細工ノ風流有物ノ物云ヒニテ、人咲ハスル馴者ナル翁ニテゾ有ケレバ、此モシタル也ケリ、由无キ者ノ許ニ行テ、舍人共辛キ目ヲ見タリトテナム、其ノ時ノ人咲ヒケル、其ヨリ後懲ニケルニヤ有ラム、物不二成サ一ヌ國ノ司ノ許ニ、六衞府ノ人發テ行ク事ヲバ不爲ヌ事ニナム有ケル、極タル風流ノ物ノ上手ニテ、追返サムニモ不レ返マジケレバ、此ル可レ咲キ事ヲ構タリケル也トナム、語リ傳ヘタル

物ヲ見レバ、鹽辛キ干タル鯛ヲ切テ盛タリ、鹽引ノ鮭ノ鹽辛氣ナル亦切テ盛タリ、鯵ノ鹽辛、鯛ノ醬ナドノ、諸々鹽辛キ物共ヲ盛タリ、菓子ニハ吉ク膿タル李ノ紫色ナルヲ、大キナル春日器ニ十許ヅヽ盛タリ、居畢テ後ニ然バ先ヅ近衞官ノ官人ノ限、此方ニ入給ヘト云ヘバ、尾張ノ兼時、下野ノ敦行ト云フ舍人ヨリ始メテ、止事无キ年老タル官人共、打群テ入來ヌレバ、他ノ府ノ官人モゾ入ルト云テ、門ヲ閉テ鏁ヲ差シテ鎰ヲ取テ入ヌ、官人共ハ中門ニ並居タレバ、疾ク登リ給ヘト云ヘバ皆登テ左右近ノ官人東西ニ向座ニ著ヌ、其ノ後、先御坏疾ク參レヨト云ヘドモ、遲ク持來ル程ニ、官人共物欲カリケルマヽニ、先ヅ悉テ箸ヲ取ツヽ、此ノ鮭鯛ノ鹽辛醬ナドノ鹽辛キ物共ヲツヽシルニ、御坏遲々ト云ヘドモ、疾ニテ不持來ズ、守對面シテ聞ユベケレドモ、只今亂レ風難堪クテ、速カニモ否不罷出ズ、其ノ程御坏食テ後ニ可罷出シト云ハセテ不出來ズ、然テ御坏參ラス、大ナル坏ノ窪ヤカナルヲ二ツ、各折敷ニ居テ、若キ侍二人捧テ持來テ、兼時敦行ガ向座ニ居タル前ニ置ツ、次ニ大ナル提ニ酒ヲ多ク入テ持來タリ、兼時敦行各坏ヲ取テ、泛許受テ呑ニ、酒少シ濁テヌキ樣ナレドモ、日ニ被炮テ喉シ乾ニケレバ、只呑ニ呑テ、持乍ラ三度呑ツ、次々ノ舍人共モ皆欲カリケルマヽニ、二三坏四五坏ヅヽ、喉テ○喉字恐衍ニ喉ノ乾ケルマヽニ呑テケリ、李ヲ肴ニシテ呑ニ、亦御坏ヲ頻ニ參セケレバ、皆四五度五六度ヅヽ呑テ後ニ、守簾超ニ居ザリ出テ云ク、心カラ物ヲ惜ムデ、其達ニ此ク被責申シテ、耻ヲ見トハ何デカ可思キ、彼ノ國ニ去年旱魃シテ、露徵得ル物无シ、適マ露許得タリシ物ハ、先ヅ止事无キ公事ニ被責シカバ、有限リ成シ畢テ、努々殘物无ケレバ、家ノ庖料モ絕テ、侍女童部ナドモ餓居テ侍ル間ニ、此ル耻ヲ見侍レバ、可然キ事ト思テナム侍ル、先ヅ其達ノ御料ニ、墓无キ當飯ヲダニ否不參セヌニテ押シ量リ給ヘ、前生ノ宿報弊クテ、年來官ヲ不給ラデ、適マ己ガ國ニ罷成テ、此ク難堪キ目ヲ見侍ルモ、人ヲ可恨申キ事ニモ非ズ、此レ自ノ耻ヲ可見キ報也ト云テ哭ク事極シ、音モ不惜マズ泣居タレバ、兼時敦行ガ云ク、彼仰ル事極

天慶六年八月十日

大外記兼近江權少掾三統宿禰公忠奉

〔日本紀略六醍醐〕天延三年六月十六日丁巳、六衞府官人以下舍人以上著束帶、愁申諸國不下行大粮米之由、忽無裁許之間、立平張於陽明門、著弓箭訴申之、被問先例無此例、仍壞平張畢、愁申事、召問在京國司、可令裁許者、

〔今昔物語二十八〕越前守爲盛付六衞府官人語第五

今昔、藤原ノ爲盛ノ朝臣ト云フ人有ケリ、越前ノ守ニテ有ケル時ニ、諸衞ノ大粮米ヲ不成ザリケレバ、六衞府ノ官人下部ニ至ルマデ皆發テ、平張ノ具共ヲ持テ、爲盛ノ朝臣ガ家ニ行テ、門ノ前ニ平張ヲ打テ、其ノ下ニ胡床ヲ立テ、有ル限リ居並テ、家ノ人ヲモ出シ不入ズシテ責メ居タリケリ、六月許ノ極ク熱ク日長ナルニ、未ダ朝ヨリ未ノ時許マデ居タリケルニ、此ノ官々ノ者共、日ニ炮迷ハサレテ爲ム方无カリケレドモ、物ノ不成ザラムニ返ラムヤハト思テ、念ジテ居タリケルニ、家ノ門ヲ細目ニ開テ、長ナル侍頭ヲ指出テ云ク、守ノ殿ノ申セト候フ也、須ク疾ク對面給ハラハ欲ケレドモ、事ノ愕シク被責レバ、子共女ナドノ恐ヂ恐侍レバ、否對面シテ事ノ有樣モ申シ不侍ヌニ、此ク熱キ程ニ、无期ニ被炮給ヒヌラムニ、定テ御咽共モ乾ヌラム、亦物超シニ對面シテ事ノ由ヲモ申シ侍ラムト思給ルヲ、忍ヤカニ御坏ナド參セムト思フハ、何カ便不无マジクハ、先ヅ左右近ノ官人達舍人ナド入給ヘ、次々ノ府ハ官人達ハ、近衞官ノ人達ノ立給ナム後ニ可申シ、一度ニ可申ケレドモ、怪ノ所モ絲狹ク侍レバ、多ク可詳居給ヌベキ所モ不侍ネバ也、暫シ待給ヘ、先ヅ近衞官ノ官人達入給ナムヤトナム侍ルト云ヘバ、日ニ被炮テ實ニ咽モ乾タルニ、此ク云出シタレバ、事ノ有樣ヲモ云ハムト思テ、喜ビヲ成シテ、糸喜キ仰也、速ニ參リ入テ、此ク參タル事ノ有樣ヲモ申シ侍ラムト答フレバ、侍其ノ由ヲ聞テ、然バトテ門ヲ開タレバ、左右近ノ官人舍人皆入ヌ、中門ノ北ノ廊ニ長筵ヲ西東向樣ニ三間許ニ敷セテ、中机二三十許ヲ向座ニ立テ、其レニ居ウル

參河　遠江　近江　美濃　若狹　越前　加賀　丹波

播磨　美作　備前　備中　備後　伊豫　讃岐　土佐

右式云、國內官稻數少、出擧雜用不足者、預前申官、聽當年租收穎、諸封戶租、亦聽收穎者、諸國須出擧雜用不足、以收穎者、先申其狀、隨裁收之、而偏見式文、輙稱徵穎、不行大粮、無充封租、其尤甚者、不勞言上、晏然平居、雖加譴責、再三申請、爰事不獲已、開不動倉、行大粮料、以正稅穀充封租代、公損之甚、莫過於此、左大臣宣、奉勅宜仰件等國、別加制止、若妄稱徵穎、不待本色者、處之重科、不曾寬宥、

延喜二年三月十三日

進私穀充大粮

〔扶桑略記二十三裏書〕延喜六年五月廿三日乙亥、播磨明石大領赤石貞根叙外從五位下、是進私穀五千石、依充諸司大粮也、

給大粮

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應給時服幷番上粮米事

史生四人　時服二人　粮(粮下恐脫米字)二人　各日白米一升

笛工八人　笛生六人　歌人卅人

合五十二人〇粮米廿人中略　各日白米一升

大同四年四月一日〇詳具時服簿

〔延喜式三十九內膳〕膳部卅人粮、白米人別日一升、鹽一勺、仕丁十七人粮、黑米人別日二升、鹽二勺、膳部卅人給衣服、

仕丁十七人、紺布衫一領、別二丈　調布袴一腰、別七尺　調布帶一條、別長八尺四寸、中割、三年一請、

不給大粮

〔類聚符宣抄六〕大納言右大將藤原卿宣、左史生大海保平、右史生百濟玄來、使部高篠清蔭等、不給俸料多經日月、宜警將來、殊可勸免之由、仰辨官已了、同知此由、請官俸料符者、

大粮納畢移

文治三年　月廿八日乙未、有不堪定幷加奏、中略依秉燭之後、相伴內府、余直衣、內府束帶、參內、卽內府著陣、先是兼光、親宗、經參候、先有大粮申文、官奏者、九月公事也、大粮者、十月公事也、依理須先有官奏者、然而就當時便宜、先有此申文、是定例也、

〔知信朝臣記〕長承四年〇保延元年二月十七日辛酉、大將殿、〇藤原頼長始可令著陣給、〇中略

右近衞府移主計寮

納畢米參佰斛狀

右播磨國當年大粮米、相加精代雜貨、所納畢如件、以移、

長承四年二月十七日　府生惟宗

權中將藤原朝臣

以此文號納畢移、令著陣給之後、所請印也、年預中將加判、

割官田充番上粮

〔類聚三代格十五〕太政官符

應准要劇下符勘解由使給田諸司番上粮事

右按太政官去九月五日符偁、元慶年中、割官田給諸司〇太以下二十字原脫、據一本補、要劇、寬平元年、可載年終帳、下知既訖者、夫給番上粮者、諸司去月五日應給米月料狀移宮內省、省卽總計、同月十日、申官下符、而去元慶年中、亦割官田充給彼料、厥後所司晏然、不進粮文、仍見仕不仕、無知其由、論之政途、理不可然、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣宣、奉勅、長上番上、職掌雖異、從事勤公給廩惟一、自今以後、宜宮內省依例進粮文、隨卽下符勘解由使、令勘會年終帳、明知其用殘、若有勘出、一如要劇、

寬平八年十月十三日

闕不輸倉充大粮

〔類聚三代格十五〕太政官符

應禁止田租徵穎事

〔玉海〕安元二年十二月十四日乙酉、晩頭隆職宿禰來、呼簾前問官奏及位祿施米等事、是內々事也、官奏事、雖有光雅告、未蒙上催、又無一上讓、然而爲用意也、又所充申文、位祿定、施米定、大粮申文等、今年未被行、近代多被付官奏之由、隆職令申、余(藤原兼實)云、非一上讓者、被改上卿不能行之者、隆職云、若左府(藤原經宗)可尋申官奏事、其改件等公事、何比可被行、亦伺形勢、若有被申旨者、可申案內者、抑元永年、故殿兩度、候給吉書奏、若有由緒改、依不審先日問隆職、今日註申云、後度吉書奏、改元之後奏也者、仍今度不可有吉書奏者、奏候之故也、又位祿施米舊文書等、內々持來令見之、　十八日己丑、此日不堪荒奏也、(先有不堪申文、又付行所充大粮等申文、大粮式相副所充文、申云、依永萬元年例也、)申刻右少辨光雅來、余出逢、光雅仰云、今日官奏一定可被行、左府申所勞、可令參勤者、申承了由、○中略　酉刻隆職宿禰來、呼前仰今日可被仰行事等、申云、所充申文、先被行之可宜、依永萬元年例、欲相副大粮式申文如何、余諾、隆職卽參陣了、戌刻著束帶(色目如除目日)參內、依無便宜、不經床子座、(去春依爲初度、強經床子座前、後々不可如然、可隨便之宜也、)直著陣奧座、卽左大辨俊經、參著橫切座、(我座程)余示云、先可有所充申文、(可副大粮式也、)俊經申云、件式未持參、重遣召了、余云、若依其文可懈怠者、強不可待之、只可申所充文也者、俊經起座、向床子座見文、余計程著外座、引直下襲、(其裾垂自長押)以扇直沓、以官人令置軾、頃之左大辨著橫切座上頭、申云、申文、余目之、大丞稱唯顧左、次左小史重插書杖參候小庭、(西面)余目之、史稱唯、趍進著軾置書、余置笏、(奥)以左右手取文置前、(所充文紙書一通、大粮式紙書一卷、此中卷籠別紙、納社春勘文紙白一通、)(已上卷籠一禮紙、無內外結緖、抑申所充文之時、先例必副鉤匙文、相副大粮式之時、不副鉤匙文之由、隆職所申也、所習傳如此、隨又永萬例同之云々、)史揖、座定後、披禮紙押文於右、(展張如常)先是所充文(緣持右手至奥見之)卷之、置禮紙內左端、次取大粮式披之、取所永賀之主稅寮勘文、如本置禮紙內右端、見大粮式、(緣持右手至奥見如初、)訖置緣取所於前、(禮紙上也)卷之、置禮紙內左端、(所充文同所)更取主稅寮勘文端兩三枚、披見、(不至奥、件文爲合文刻之不可見、如盡之故也、)卷之、取大粮式、如本卷籠表紙中、置禮紙左端、如本卷加禮紙、乍置攬廻指出置板敷端、史取之開禮紙、先結申處充文、(其內不覺)余目之、史稱唯卷文置禮紙左端、次結大粮式、(其詞不覺)余目之、史稱唯卷文(不結申、主稅寮勘文例也、)加禮紙、取副杖揖退出、余取笏(史欲起間也)已上所充申文儀、

囚獄司仕丁卅二人（直丁廿一人、廝廿一人、）
應給米十二斛一斗八升、（人別日二升、）鹽一斗二升一合八勺、（人別日二勺、）布廿一段、（人別一段、）
並應給久爾宮
以前省并所管司仕丁等、來三月廿九箇日料、所請如件、故移、
天平十七年二月廿日　従七位上行少録韓國連大村
従四位下守卿王
〔東大寺正倉院文書〔一〕〕中宮職解
合肆拾參人（直丁三人、仕丁廿人、廝丁二人、廝丁十八人、）
應請米壹拾參斛捌㪷　鹽壹㪷參升捌合
右直丁貳拾參人料（人別米六斗、鹽六合、）
庸綿肆拾屯
右廝丁貳拾人料（人別二屯）
以前來十一月卅箇日料粮、米鹽綿等數如件、今錄事狀申送、以解、
天平十七年十月十八日　従七位上行少屬小田臣枚床
○按ズルニ、大粮申文、本書ニ載スル所尙ホ多シ、今僅ニ其一二ヲ收ム、
〔永昌記〕保安三年十二月廿七日壬子、今夜又可有種々公事、日入參陣、左少辨師俊、大夫史政重、在床子座、次右大臣被參、（入數政門、）予（○藤原爲隆、）參仗座、申請次第事、先可有大粮申文、予歸著床子、史良兼持參文書、（左右近諸司等大粮充文一通、租穀注文一通、上野國鉤文一通、以上三通不結申、）予見文取回置之、良兼給之、良兼插書杖、又歸來、予參仗座、稱申文、唯又顧眄、史參入、大臣見之返給史、結之、司々ニ定充大粮申上ト申セル事、次結鉤文租穀文、史退入、

歌女七十九人料、米廿二石九斗一升、人別日一升 鹽二斗二升九合一勺、人別日一勺

直丁二人料、米一石一斗六升、人別日二升 鹽一升一合六勺、人別日二勺 廝二人料庸布二段、人別一段

右歌女及直丁等、來三月廿九日料米鹽等數、具錄如件、以解、

天平十七年二月廿日　従七位上行少属後部高多比

玄蕃寮解　申請月。料。事

合參拾貳人十六人直丁、十六人廝、

合米玖斛貳斗捌升、仕丁十六人、人別日二升、鹽玖升貳合捌勺、仕丁十六人、人日二勺、

甲賀宮肆人直丁二人、廝二人、

米壹斛壹斗陸升、鹽壹升壹合陸勺、庸布貳段、

久爾宮貳拾捌人十四人直丁、十四人廝、

米捌斛壹斗貳升、鹽捌升壹合貳勺、庸布拾肆段、

以前來三月廿九箇日料、所請如件、錄狀以解、

天平十七年二月廿日　大初位上守少属秦大藏連道成

従四位上行頭　従六位下行大允津島朝臣

正八位下守少允榎井朝臣別當中略○

刑部省移民部省

合仕丁伍拾肆人直丁廿七人、廝廿七人、

應給米壹拾伍斛陸斗陸升、鹽壹斗伍升陸合陸勺、布貳拾漆段、

省仕丁一十二人直丁六人、廝六人

應給米三斛四斗八升、人別日二升 鹽三升四合八勺、人別日二勺 布六段、人別一段

大粮

制度

大粮、又ハ公粮ト云フ、官給日食ノ總名ナレド、今ハ番上〔史生丁等〕役ニ米鹽ヲ給スルヲ云フ、而シテ廝丁ニハ多ク庸布庸綿等ヲ給スルナリ、卽チ本司每月其給スベキ人員ヲ錄シ、民部省ニ移送シ、省ヨリ太政官ニ申シ、更ニ太政官ヨリ符ヲ民部省ニ下シテ出シ給セシム、而シテ中間官田ヲ割キテ、要劇ト同ジク其粮ニ充テタリ、尙ホ政治部丁役篇ヲ參看スベシ、

〔延喜式十一太政官〕凡親王以下月料、幷諸司要劇及大粮等、每月申官出充、〔中略〕○大粮者、每月十六日申太政官、廿日官符下民部、廿二日出給、若逢雪雨臨時改日、

〔延喜式二十二民部〕凡給公粮者、本司每月十一日錄移送省、省總勘錄、十六日申官、待印書到給、但六九十二、合三箇月、以十三日爲申省期、

〔延喜式十三大舍人〕凡每月一日、官人前月上日幷番上粮文、〔大月料白米廿四斛、但小月減八斗、〕上番門籍文申省、〔正月者二日、但朝拜止者如恒、〕

大粮申文

〔西宮記十一月〕申大粮文、〔一大臣著陣、大辨候座、近年史申文如例、〕

〔江家次第十九十月〕大粮申文〔十月申、一上於陣申之、〕

加此文一枚申之、如例申文、〔扶義卿爲左大辨之時、作大粮式、〕諸司諸衞有定國、院宮隨時出入、爲閏月之時、又頗作代、其後成官符、近代諸司院宮、不待官符成催牒請國物、以件請文成承知符、最可怪、

〔東大寺正倉院文書二〕雅樂寮解　申請公粮事

合米貳拾肆斛柒升、鹽貳斗肆升柒勺、庸布貳段、

擣各二合、滓醬二合、生栗子五合、擣栗子二合、五勺干柹子一合五勺、橘子十五顆、木綿二分四銖、

六位已下二百六十人

人別糯米六合七勺、大豆四勺七撮、小豆六勺、醬五勺、鹽一合七勺、東鰒二兩、堅魚二兩一分二銖、鮨二兩、鯖三兩二分、海藻二兩、漬菜二合、生栗子三合、橘子五顆、

籠筥十五合、膳筥九合、菓餅筥四合、納肴鹽筥二合、各長一尺四寸、廣一尺二寸、深三寸、陶高盤大盤各十口、參議已上盛菓子料榼三俵、食籠二百六十合、各長一尺二寸、廣八寸、深二寸、箸竹二百六十株、筥坏二百卌口、參議已上別八口、五位已上別五口、

右依前件、其五位已上食並盛筥、菓子雜肴盛以干柏結、以木綿、六位以下食用籠、其籠山城國所進○中略

同祭釋奠○雜給料

鰒堅魚、享官五位二人、六位已下九十八人別二兩、煮堅魚、烏賊五位二人別二兩雜鮨享官百人別二合、學生三百五十人別四合、海藻百人別二兩醬二人別一合、九十八人別五勺、酢二人別二勺、九十八人別一勺、鹽二人別四勺、九十八人別二勺、學生三百五十人別一勺五撮、漬蒜房、蒜英、韮擣、五位已下官人已上卌人別一合五勺漬菜、始日享官五位已下一百人別二合、朝夕料、畢日學生三百五十人別一合、蜀椒子、人別一勺

窪坏盤各九十口、匏十五柄、箸竹百卅株、

右春料依前件、秋亦准此、

〔延喜式三十五大炊〕四月一日侍從已上儲料米一斛十月亦同

侍從卌人、一人日米二升、廿九人各日一升六合、並廚飯料、同前、大舍人四人、日各米八合、割本家番上粮充之內舍人廿五人、人別日米一升六合、廚飯料、

〔延喜式四十四勘解由〕凡給熟食者、據前月上日、移送宮內省、長官已下書生已上、日米一升二合、酒六合、魚四兩、鹽二勺、滓醬一合、但參議長官不在此限、

○按ズルニ、節日、神事、佛會等ノ時、王臣ニ食ヲ給スル事甚ダ多シ、今ハ只其二三ヲ錄シテ、他ハ省略ニ從ヘリ、

給食

勸學田、亦每日給大炊寮百度飯一石五斗、(人別三升、五十人料、)以補照讀之疲也、(〇中略)

延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

〔延喜式〕(三十五大炊)凡正月四節、五月五日、七月廿五日、(〇相撲節會)九月九日節給食法、並同大嘗會、(正月七日以外諸節、並除無位女王、)

〔延喜式〕(三十二大膳)六月神今食、十二月准此、(〇中略)

小齋給食惣二百六十二人、(五位已上廿人、六位已下二百人、命婦十人、女孺采女合廿七人、御巫五人、)五位已上一人、醬酢各五勺、鹽一合、東鰒二兩、堅魚、烏賊各一兩、熬海鼠、腊各二兩、雜鮨九兩、鯖三兩、海藻二兩、漬菜二合、六位已下一人、醬五勺、鹽五勺、東鰒二兩、堅魚一兩、熬海鼠二兩、鯖一兩、鮨七兩、海藻二兩、漬菜二合、(皇后宮小齋六位官人已下采女已上、惣六十八人、食法准此、)槲三俵、箸竹八十株、

鎭魂(皇后宮東宮亦同〇中略)

雜給料

參議已上

人別糯米一升四合、大豆一合八勺七撮、小豆二合八勺、壺酒一合、酢四勺、醬三合、滓醬二合九勺、東鰒一兩二分、隱岐鰒五兩、堅魚二兩一分二銖、烏賊二兩、熬海鼠三兩二分、與理刀魚五兩二分、鮭二分隻之一、雜魚楚割三兩、堅魚煎二兩二分、鮨二斤四兩、雜鮨十一兩、紫菜、海松各三分、海藻二兩、漬菜二合、漬蒜房、蒜英、韮擣各二合、生栗子一升四合、擣栗子六合、干柿子三合、橘子卅三顆、木綿二分四銖、

五位已上卅人

人別糯米七合五勺、大豆七勺、小豆一合五勺、壺酒三勺、酢一合、醬二合、鹽二合九勺東鰒一兩二分、隱岐鰒四兩二分、堅魚二兩一分二銖、烏賊二兩、熬海鼠三兩二分、與理刀魚五兩、鮭二分隻之一、雜魚楚割三兩、堅魚煎汁一兩一分、鮨二斤四兩、腊十兩、紫菜、海松各三分、海藻二兩、漬菜二合、漬蒜房、蒜英、韮

〔延喜式大膳三十三〕輦轝兵庫寮器仗監物一人、兵部官人二人、五位一人、六位以下一人、史生一人、雜使三人、各限十日給食、准百度法、

〔延喜式宮內三十一〕凡供奉六月十一月十二月神事御卜官人已下、並給百度食、○中略

凡彈正巡檢之日、給百度食、○下略

〔江家次第五二月〕釋奠

王卿以下、入自東西壁外砌著百度座、

〔江次第抄五二月〕釋奠

百度座　天慶記云、大炊寮未進百度、西宮云、諸司調百度、以口宮給之、允亮云、女帝曰、勤公之者、雖一日百度可給云云、今案、百度謂大炊寮之飯也、

○按ズルニ、女帝ハ孝謙天皇ヲ謂フ、下文女帝亦同ジ、

〔中右記〕寛治八年○嘉保元年八月八日丁丑、釋奠也、○中略

抑清談之次、予○藤原宗忠問定俊眞人云、百度之座何故哉、定俊答云、昔女帝御時、宣旨云、至勤功諸司、一日雖有百度可給饗饌者、今百度是其儀也、予重云、然者諸公事可有百度座也、何釋奠時許可行先事哉、定俊答云、尤可然、但釋奠日許、已留此禮也、仍至今不絕者、予又問云、女帝何時哉、上從神功皇后下高野天皇、已以數代、此中何時被下此宣旨哉、定俊答云、外傳之習不窮言、書不盡言、陳此旨頗似咲、甚以不審也、雖無由事、又不可不記置之、

〔本朝文粹意見封事二〕意見十二箇條　善相公清行

一請加給大學生徒食料事

右臣○中略伏見古記、朝家之立大學也、始於大寶年中、○中略其後代代下勅、給罪人伴家持越前國加賀郡沒官田一百餘丁、山城國久世郡公田卅餘町、河內國茨田澀川兩郡田五十町、以充生徒食料、號曰

廳申文四枚〇中略

百度文二枚

宮內省申久、大膳職乃申官物收下司々乃人等乃、此月乃百。依。乃。分。乃。魚。六。斤。鹽。二。斗。給止申津、

宮內省申久、大炊寮乃申官物收下爪司々乃人等乃此月乃百。依。料。乃。米。三。坂。給止牢申津、

〔延喜式宮內三十一〕凡出納官物者、諸司及本司並給百度食、諸司官人數見監物式、但每司各率史生一人、

〔延喜式監物十二〕凡應出納大藏物者、少辨已上一人、中務民部大藏三省、輔各一人、監物一人、主計助已上一人、同會就諸司廳、〇中略　其出納鐵鍬等類、及自餘諸司物者、官史一人、三省錄各一人、監物及主計屬各一人、若祿屬不在者、丞允代之、俱會出納、

〔延喜式大膳三十三〕出納官物諸司五位已下主典已上、人別鹽二勺、滓醬五勺、鮭二兩、雜鮨二兩、史生准此、

右一度料依前件、月別總計百度之料、一度請受、用盡之日、先進前月費用帳、勘勾然後更請、如有殘者、廻充後料、〇中略

勘解由使百度料

長官以下書生以上、日別各魚四兩、滓醬一合、鹽二勺、〇中略

年料雜器

折櫃十二合、陶叩瓮四口、水椀十二口、加盤坏八十口、柏十五把、日料

右百度料

〔延喜式大炊三十五〕松尾祭料

米二石九斗二升八合、一石四斗二升八合、机六前、折櫃卅五合、大笥卅三合、裹飯百廿口料、一石五斗百度料、飯椀五十一口、〇中略

出納官物諸司百度料、一月所受米六斛、五位已下六合、史生四合、用盡之日、先進前帳勘勾、然後更請、如有所殘者、廻充後料、

大同四年閏二月四日〇又見二日本後紀一
（日本後紀嵯峨二十二）弘仁三年三月己未朔、諸司要劇停ㇾ米充ㇾ錢焉、

普給諸司
（享祿本類聚三代格六）詔官多則政蹟、人少則事積、故省併量ㇾ宜、委ㇾ宰期ㇾ要、昔諸司百寮有ㇾ閑有ㇾ劇、是以資俸賞賜、或厚或薄、今官既從ㇾ改、賞何依ㇾ舊、宜ㇾ要劇、馬料、時服、公廨、悉革ㇾ前例、普給ㇾ衆司、詳爲ㇾ條例、
大同三年九月廿日〇又見二日本後紀一

停要劇料
（享祿本類聚三代格六）太政官符
應ㇾ停ㇾ止大學官人博士要劇史生粮事
右被ㇾ中納言兼左近衛大將從三位行春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣ㇾ偁、大學官人已下學生已上、並預ㇾ月料ㇾ畢、宜ㇾ要劇本粮、並從ㇾ停止ㇾ、
弘仁九年五月廿五日

闕官不仕要劇料
（延喜式正親三十九）凡闕官及不仕官人已下要劇番上料者、充ㇾ修ㇾ理司中小破幷雜用ㇾ、
（延喜式彈正四十一）凡闕官不仕要劇者、充ㇾ臺中雜用ㇾ、
（延喜式左右京四十二）凡闕官料要劇田地子者、充ㇾ職家公用ㇾ、
（延喜式東西市四十二）凡闕官要劇料、充ㇾ司中修理雜用ㇾ、

掎要劇料
（延喜式大藏三十）凡諸節會日所ㇾ懸之幄、令ㇾ左右衛門府守ㇾ之、若不ㇾ勤守ㇾ致ㇾ破損ㇾ者、申ㇾ官拘ㇾ留官府〇官府恐顚倒要劇馬料ㇾ、

〇

百度食
（延喜式主計二十五）凡出ㇾ納官物ㇾ諸司、毎日給ㇾ百度食ㇾ、所司總ㇾ計百度之料ㇾ、一度請受供給、寮隨ㇾ日用ㇾ、且與ㇾ返抄ㇾ、用盡之日、本司總錄送ㇾ寮、算師勘會訖、即官人加ㇾ署返ㇾ送本司ㇾ、更令ㇾ申請ㇾ、
（朝野群載太政官六）官中政申詞

給米錢

右大納言正三位兼左近衛大將藤原朝臣時平宣、奉勅、件要劇料、宜停給京庫以官田給之、

昌泰元年閏十月廿六日

〔權記〕長保四年三月廿九日乙丑、余〇藤原行成依左府〇藤原道長命、詣彈正宮、申刑部卿近信朝臣愁申、大輔相任朝臣押領要劇田、次宮下部成權勢不令領之事、即詣彼宮申之、御報云、遣下部於專所可遣也、但先日近信朝臣有申事、仍其間相任申云、要劇田皆有本得分、故自房親朝臣爲卿之時所領知也、又有仰、相共議定所可左右而仰朝臣自由欲押領年來所領也者、即詣左府申此由、

〔兵範記〕仁安三年十月六日甲午、兵庫寮要劇田所課、山城國司信家切充河原禊所反橋并黒木等、無先例由、事同宜下長官仰令免除、即被返下、

〔類聚三代格十五〕太政官符

應割官田充諸司要劇并番上粮料事〇中略

右要劇之俸、其來尚矣、養老三載、簡劇官而給錢、大同四年、混衆司以行米、初依官立法、多少有差、後隨時制宜、平均無別、自爾而降、相分二物、普給百官、〇中略

元慶五年十一月廿五日

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應給職事四位已下初位已上要劇料事

除觀察使、人別日給米二升、

右承前特簡劇官、給件料錢、准其官位、多少有差、謹案去年九月廿日詔書偁、要劇等類、悉革前例、普給衆司者、然則官無閑劇、理合普給、而米價已貴、懸倍往年、依舊給錢、事乖隨時、加以既是食料之儲、豈有多少之異、今被右大臣宣偁、奉勅、宜改前例依件給之、其坊令不在給限者、夫奉公之道、清愼爲先、無功之賞、廉吏所耻、宜細勘上日、依實申送、務從正直、不得疎略、

攝津國十九町四段百廿九步
右元木工寮闕官料、而依彼寮寬平七年十一月五日解狀返納、今使充同寮長上要劇料、
攝津國十一町五段二百卌六步
右典藥寮侍醫等要劇料
山城國一町　攝津國廿一町八段
右兵庫寮要劇幷番上料
以前遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣宣、奉勅、件要劇番上等料、宜停給京庫以官田給之、
寬平九年二月十七日
太政官符
應以官田給中宮職官人要劇幷番上料事
山城國七町四段二百六十八步
大和國十五町九段三百九步
河內國五段廿步
右大納言正三位兼行左近衞大將藤原朝臣時平宣、奉勅、件要劇番上等料、宜停給京庫以官田給之、
昌泰元年八月二日
太政官符
應以官田給修理職官人幷長上要劇料事
山城國卌一町三段六十三步
大和國十四町六段三百十步

判事十八町五段三百七步
巡察彈正十三町七段四步
左兵庫十二町九段二百卅四步
右兵庫十二町九段二百卅四步
園池司公廨田四町
攝津國六十六町七段三百十二步
內藥司廿一町九段五十四步
造兵司十町三段五十四步
鼓吹司十九町六段十八步
園池司六町九段二百八十八步
主油司七町九段二百五十八步
右依太政官去八月廿九日奏、併省件等司既畢、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣宣、奉勅、件要劇番上等料田、宜返收依舊爲官田、
寬平八年九月七日

太政官符
應以官田充諸司要劇并番上料事
大和國廿五町六段三百卅四步
攝津國卅三町一段三百卅四步
右內匠寮長上要劇料
河內國二町八段七百七十六步

勅依請、

寛平元年十月廿三日

〔類聚三代格十五〕太政官符

應載年終帳要劇幷番上田事

右大納言正三位兼行左近衞大將太皇太后宮大夫藤原朝臣良世宣、諸司所給要劇幷番上田等、既有其色目、宜始從今年、（○今以下十七字原脫、今據一本補、）可載年終帳、

寛平元年十二月廿五日

太政官符

應給田諸司要劇下符勘解由使事

右檢案內、給要劇者、當司各注前月上日、後月四日進官、下符宮內省、若諸司有致雜怠、隨卽抑止、待其辨申、然後許之、而元慶年中、自從割官田給要劇、諸司未必解文進官之（○之恐當作官）以不給米無復留意、是以懈怠官人、無由勘責、不上具僚、徒得俸米、因寛平元年十二月廿五日、可載年終帳狀、下知既訖、若無出給之符、何知用之遺、雖行米賜田名號各異、而計日請俸、彼此一同、仍須下符勘解由使、勘會年終帳、其有用遺者、使充日月權官等料、不許輙充他用、若有勘出者、官人遷替之日、拘其解由、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫菅原朝臣宣、奉勅依件行之、

寛平八年九月五日（○此格文原脫、以一本補、）

〔類聚三代格十五〕太政官符

收廢司要劇番上料幷公廨田事

山城國七十五町三百廿九步

散位寮十二町八段二百七十步

應充官田百卅二町九段百七十七步事

山城國四町七段二百七十四步

河內國一町

右史生等番上料

山城國七町五段

河內國四町一段二百六十步

攝津國十三町一段九十六步

右左右史生等番上料

河內國十町八十六步

右內記要劇幷番上料

攝津國卅七町一段五十二步

右主計寮要劇幷番上料

山城國卅五町二段百廿九步

右勘解由使要劇幷番上料

以前得前件諸司解偁、件要劇幷番上料米、停給京庫、以官田所請如件者、右大臣宣、奉勅依請、

仁和二年八月四日〇中略

太政官符

應以官田給主鈴典鑰等要劇料事

山城國十六町八段百十二步

右得中務省解偁、主鈴典鑰等解偁、件要劇米、停給京庫、以官田所請如件者、謹請官裁者、左大臣宣、奉

以上卅九司以㆓官田㆒給

右大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣冬緒宣、奉ㇾ勅、件要劇月粮、相㆓分錢米㆒充行年久、而頃年貢賦難ㇾ備、頻多㆓減耗之年㆒、倉廩屢空、猶少㆓盈溢之日㆒、官俸由ㇾ其罕ㇾ給、月粮爲ㇾ之難ㇾ行、仍分㆓官田㆒、永以充給、但太政官、幷出納諸司、及諸給㆓月料㆒之司、事不ㇾ得ㇾ已、猶給㆓京庫㆒、又番上資粮、充㆓給外國㆒之類、分㆓留京庫之色㆒、依ㇾ例行ㇾ之、勿ㇾ改㆓舊迹㆒、亦八省卿、彈正尹、二府大將、四府督、或德高皇子、猶在㆓其官㆒、或身貴公卿、兼居㆓其職㆒、如ㇾ此之類、元來不ㇾ給、除㆓此之外㆒、例在㆓給限㆒、然則給否在ㇾ人、不㆓必因㆒ㇾ官、須㆓京庫隨ㇾ時取捨㆒、願ㇾ令㆔內外俸各得㆓其所㆒、上下群官共全㆓其料㆒、

元慶六年四月十一日〇中略

太政官符

應ㇾ割㆓官田㆒給㆓主稅寮要劇幷番上料㆒事

山城國十二町九段　河內國十町四段　攝津國十町五段

右得㆓彼寮解㆒偁、件要劇幷番上料米、停ㇾ給㆓京庫㆒、以㆓件官田㆒、永被㆓充給㆒、謹請㆓官裁㆒者、大納言正三位兼行彈正尹藤原朝臣冬緒宣、奉ㇾ勅依ㇾ請、

元慶八年四月十七日

〔三代實錄四十七光孝〕仁和元年二月九日乙未、勅以㆓攝津國菟原郡官田二町一段㆒、給㆓造墨長上要劇料㆒、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年八月四日庚戌、以㆓河內國大縣澀河兩郡官田十町八十六步㆒、給㆓內記要劇料㆒、攝津國島上、島下、豐島、河邊、武庫、菟原、八部、能勢、八箇郡官田四十七町一段百二十二步、給㆓主計寮要劇幷番上料㆒、山城國乙訓、愛宕、紀伊、三箇郡官田三十五町二段百二十九步、給㆓勘解由使要劇幷番上料㆒、

〔類聚三代格十五〕太政官符

先後稠疊、後世若分此田、以充如此之色、非所以割民口分助國虚耗、是明君所不行、賢臣所不取也、縱非神寺總絕外用、豫戒未萌、莫令更然、

元慶五年十一月廿五日

○按ズルニ、本書計數合ハザル所多シ、卽チ要劇田ノ總數合一千二百卅五町二段三百卅九步トアレドモ、山城、大和、河內、攝津四國ノ合計ハ、一千二百三十五町二段三百四十五步ニシテ、六步ノ差アリ、又山城國百九十四町三段二百卅九步トアレドモ、圖書寮以下十一司ノ合計ハ、二百四町三段二百九十八步ニシテ、十町五十九步ノ差アリ、又大和國四百六十七町九段二百十八步トアレドモ、太皇太后宮職以下十三司ノ計、四百六十九町九段三百五十步ニシテ、二町百三十二步ノ差アリ、又攝津國三百十二町九段五十二步トアレドモ、大舍人寮以下十八司ノ合計ハ三百十二町九段百十四步ニシテ、六十二步ノ差アル等是ナリ、

〔類聚三代格十五〕太政官符

改給諸司要劇幷番上粮事

太政官　中務省　監物　大學寮　民部省　宮內省　大炊寮

大舍人寮　內藏寮　圖書寮　縫殿寮　內匠寮　式部省　治部省

已上七司以米給

雅樂寮　玄蕃寮　諸陵寮　兵部省　隼人司　刑部司（省○司恐誤）　判事

囚獄司　大藏省　織部司　大膳職　木工寮　主殿寮　掃部寮

正親司　內膳司　造酒司　主水司　采女司　彈正臺　左京職

東市司　右京職　西市司　左近衞府　右近衞府　左衞門府　右衞門府

左兵衞府　右兵衞府　左馬寮　右馬寮

造兵司十町三段五十四步
鼓吹司十九町六段八十步
隼人司十二町六段
大藏省卅町一段二百八十八步
織部司十二町六段
木工寮卅四町六段
造酒司九町二段三百卅三步
園池司六町九段二百八十八步
主水司九町二段三百廿四步
主油司七町九段二百五十八步
東市司七町九段百九十八步
西市司七町九段百九十八步

右要劇之俸、其來尙矣、養老三載、簡劇官而給錢、大同四年、混衆司以行米、初依官立法、多少有差、後隨時制宜、平均無別、自爾而降、相分二物、普給百官、至于外米穀少、如雲之祿、人無栖畝之粮、國用差倍於前、倉廩漸磬於後、因茲月俸難給、日稟屢空、既違先皇之素情、亦非後主之新慮、加以賜白粲者全稟六斗、得青趺者不盈百枚、論之故途、事不齊一、正三位行中納言兼民部卿藤原朝臣冬緒宣、奉勅、夫官田之設、爲利朝家、卽補闕之深圖、充虛之遠算、今文官武職、要劇資粮、年少見行、月多不給、遂事不得已、或賜外庫、而諸國頻稱正稅不足、屢申不動用盡、徒爲行李之煩、每有闕乏之歎、仍割件田、永充其料、願使勤王之吏、識榮辱於當時、主藏之臣知禮節於季葉、凡厥上日每月申官一如舊規、勿失前躅、但其遺田者、官之蓄積、國之資儲、永號官田、傳之不朽、頃年或以公田施入寺家、或以私地奉資神社、尤格式所制、

右兵衞府卅三町七段三百廿四步
左馬寮六十一町六段百七十七步
右馬寮五十九町二段八十一步
河內國二百六十町百九十六步
式部省卅四町四段二百七十步
玄蕃寮十六町五段百廿六步
兵部省卅二町一段五十四步
大膳職卅二町七段
木工寮廿町七段二百八十八步
播部寮卅五町五段二百五十步
內膳司廿四町一段
左京職廿六町八段三百廿四步
右京職廿六町八段三百廿四步
攝津國三百十二町九段五十二步
大舍人寮十六町二段二百五十二步
縫殿寮十三町九段百卅六步
內匠寮廿三町二段
內藥司廿一町九段五十四步
雅樂寮卅七町六段二百卅三步
諸陵寮廿町五段二百八十八步

治部省廿一町四段三百卌二步
刑部省廿四町六段二百七十步
判事卌二町三段六十三步
囚獄司九町二段百廿六步
正親司九町二段百廿六步
采女司八町四段二百八十步
彈正臺卌町二段二百十六步
左兵庫十二町九段二百卌四步
右兵庫十二町九段二百卌四步
大和國四百六十七町九段二百十八步
太皇太后宮職廿三町三段二百八十步
皇太后宮職廿二町七段二百八十步
內藏寮六十町三段百八十步
大藏省卌二町三段二百七十步
主殿寮廿四町五段十八步
左近衞府卌三町七段三百廿四步
右近衞府卌一町三段百八十步
左衞門府廿六町五段卌六步
右衞門府廿六町五段卌六步
左兵衞府卌三町七段三百廿四步

百度食ハ、官物ヲ出納スル諸司等ニ、毎日大炊寮ノ米、大膳職ノ魚鹽ヲ給スルヲ云フ、其他ハ事アル日ニ臨ミテ賜フ事アリ、而シテ百度ノ義、古來明ナラズ、今延喜タ主計式ニ、所司總計百度之料、一度請受供給ト云ヘル文ニ依リテ意フニ、一年ニ百度給スベキ分ヲ、或ハ月ニ配シテ受ケ、或ハ其日一度ノ分ヲ賜フナラン、要スルニ要劇料ヲ以テ普ク諸司ニ配スルニ至リ、更ニ要劇ノ官、要劇ノ日ヲ簡ビテ百度食ヲ給セシナリ、

制度

〔延喜式太政官十一〕凡親王以下月料、并諸司要劇及大粮等、毎月申官出充、○中略要劇者、錄前月應給官人及物數、毎月四日申官、即加官要劇造總目、同日申太政官、五日官符下宮内省、十三日出給、但給田者下符勘解由使、○中略若逢雨雪臨時改日、

要劇申文

〔朝野群載太政官六〕外記廳申文

四日申文三枚

要劇文二枚

左乃管司々乃人等、合天二百餘卌人加、去月仕奉日數仁依天、要劇乃料乃米百坂四十坂給申津、

右乃管司々乃人等毛、合二百餘六十八人加、去月仕奉日數依天、要劇乃料米百坂五十坂給止申津、

〔小野宮年中行事正月〕四日諸司申要劇文事毎月申、但二月四月七月五日申、式云、二四七十月三日進、即讀申外記廳、

要劇田

〔類聚三代格十五〕太政官符

應割官田充諸司要劇并番上粮料事

合一千二百卌五町二段三百卌九步

山城國百九十四町三段二百卌九步

圖書寮十九町八段二百九十七步

散位寮十二町八段二百七十步

要劇料 百度食 給食 併入

要劇料ハ、元正天皇ノ養老三年ニ劇官ヲ簡ビテ錢ヲ賜ヒシニ起リテ、內官ニ給スル所ナリ、而シテ平城天皇ノ大同三年ニ、寮司ヲ併省シ、閑劇ノ異ナキヲ以テ、普ク諸司ニ給シ、四年ニ米價ノ往年ヨリ貴キヲ以テ、錢ヲ給スルコトヲ停メ、觀察使坊令ヲ除クノ外、四位以下初位以上ノ職事ニ、人別ニ日ニ米二升ヲ給セリ、蓋シ二升ノ米ハ、當時日食ヲ給スルノ定例ナリ、而シテ四位ヨリ初位マデノ長上ニ給セシハ、養老ノ時ヨリ既ニ然リシナラン、然ルニ嵯峨天皇ノ弘仁三年ニ、更ニ舊ニ依リテ錢ヲ給セリ、

要劇田トハ、內官諸司ニ充ツル所ノ田ニシテ、其所穫ヲ以テ官人ノ要劇料ニ充ツルナリ、即チ陽成天皇ノ元慶五年ニ、畿內ノ官田一千二百三十餘町ヲ割キテ、五十司ニ充テタルニ始マル、是ヨリ先キ要劇料ハ錢米ヲ雜ヘテ給セシガ、米ヲ得ル者ハ、法ノ如ク一月ニ六斗(日別二升)ヲ得ベク、錢ヲ受クル者ハ、百文ニ過ギズ、且ツ國用乏シキヲ告ゲテ、賜フコトヲ得ザルコト多キヲ以テ、或ハ諸國ノ正稅ヲ以テ給スルニ至レリ、因テ此法ヲ設ケ、均シク田ヲ以テ諸司ニ給セリ、而シテ六年ニ至リ、太政官等ノ七司ニ限リ、大藏ノ廩米ヲ以テ給シ、其餘ハ仍ホ官田ヲ以テ給セリ、但シ皇子及ビ公卿ニシテ、八省ノ卿、衞府ノ長官ニ居ル者ニハ給セズ、是ヨリ後之ヲ充ツル寮司ノ增加スルニ從ヒ、田數モ亦增加セリ、此要劇田ハ、官田ヲ割キタル者ナレバ、不輸租田タルコト明ナリ、而シテ諸司田ニ屬ス、

凡テ此要劇料ハ、當司各、前月ノ上日ヲ注シ、太政官ニ申シ、太政官ヨリ符ヲ宮內省ニ下シテ給シ、若シ雜怠アラバ辨明ヲ待チテ給ス、又要劇田ノ分ハ、官符ヲ勘解由使ニ下シ、年終帳ニ勘會セシメ、見上不上ヲ審ニシテ後ニ給ス、

（人別一疋）綿卅屯、（人別二屯）縹布七端二丈、
十二月晦日雜給料
命婦已下料、米八十斛、糯米廿斛、大豆小豆各廿斛、油四斛五斗、
皇后宮女孺等料、米十五斛、糯米五斛、大小豆各五斛、油二斛、（○中略）
闈司
闈司襪料、東絁五疋、細布五端、紅花八斤、（○中略）
內敎坊
春神祭五色薄絁各二尺、木綿一斤、商布二段、鍬二口、酒三斗、米五斗、糯米二斗、（秋三斗）大豆小豆各五升、
鹽三顆、鰒堅魚腊、海藻各一籠、秋祭准此、七日節女樂五十人裝束料、絹一百卌四疋三丈、綿一百五十
屯、
年料、庸布四段、鍬六口、白木韓櫃二合、明櫃四合、折櫃廿合、筥五十合、輿籠四口、槽二隻、箕四枚、簀十枚、
食薦廿枚、椀卅口、坏一百口、
女孺厨
春神祭料、五色絁各三尺、木綿麻各一斤、調布一端、鍬三口、（秋二口）酒三斗、米五斗、糯米二斗、大豆小豆各
一斗、鹽三顆、鰒堅魚腊、海藻各一籠、（秋祭准之）柏三俵、（自十一月至正月料）
年料、庸布五段、鍬六口、白木韓櫃六合、案四脚、切案二脚、明櫃六合、折櫃一百合、麻笥八口、筥一百合、斗
一口、升二口、杓八柄、繩笥六合、槽二隻、箕四枚、簀廿枚、瓶二口、叩盆六口、坏三百口、陶椀盤各一百口、
右雜用料、依前件待內侍移申官請受、（臨時所須雜物亦准此）但神今食御巫、平野祭等物忌裝束、縫殿神祭料
物、及季料紙、女官漬菜料等鹽、各見本司式、

延喜十四年八月十五日

〔延喜式十二中務〕女官雜用料

賀茂祭四月

使命婦二人、女孺二人裝束料、帛十疋、絹十六疋、細布五端、紺細布廿端、紅花十四斤、裙四腰、直

春日祭春冬同

使命婦一人、女孺三人裝束料、絁十一疋、綿十四屯、紺細布十四端、

大原野祭春冬同

使命婦一人、女孺三人裝束料、絁十一疋、綿十四屯、紺細布十四端、

六月神今食八姫裝束料、絹八疋、大嘗會絹十疋、綿廿屯、通用十二月神今食、

命婦已下今良已上裝束料、絹一百六十九疋、調布一百端、貲布二百十六端、八丈爲端、縹布廿五端、殿司燈守四人、掃司女孺十三人裝束料、縹絁八疋三丈、人別三丈、火炬二人、黃絁一疋、人別三丈、

皇后宮定額女孺九十人裝束料、絁卅五疋、貲布卅九端三丈、四丈爲端、今良十五人裝束料、絹七疋三丈、人別三丈、縹布七端二丈、人別二丈、

新嘗會

命婦已下今良已上裝束料、絹三百卅八疋、綿六屯七十六屯、調布六百卅一端、縹布廿五端、殿司燈守四人、掃司女孺十三人裝束料、縹帛八疋三丈、人別三丈、帛八疋三丈、人別三丈、綿卅四屯、人別二屯、火炬二人、黃帛一人別三丈、帛一疋、人別二屯、綿四屯、人別二屯、

東豎子四人裝束料、人別緋絁四丈、帛二疋、綿四屯、元日亦准此、但五月五日帛一疋、貲布四丈、紅花小二斤、並依內侍司移請充、

皇后宮女孺九十人裝束料、絁九十疋、綿一百八十屯、調布一百八十端、今良十五人裝束料、絁十五疋、

所、宮主一人、(日米八合)候内裏侍醫一人、(日米一升五合)藥生十人、(日米八合)校書殿、(日米三升四合、割内竪三人料一升八合、大舍人二人料一升六合充之、)進物所、(五升四合)贄殿、(一升二合、並割内竪料内充之、)御書所、(日米一斗六升)畫所、(日米一斗六升)作物所、(日米三斗)

右每日料、依前件熟食充之、

〔延喜式二十一雅樂〕凡蕃樂人料、飯四斗、日別永給、

歌女卅人、各日黑米八合、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年六月廿七日戊申、松尾神社物忌一人充日粮、立爲永例、

〔令義解十雜〕凡給後宮及親王炭、(謂嬪以上、其皇后者、自入供進之例、)起十月一日、盡二月卅日、其薪知用多少量給、供進炭者不在此例、

〔延喜式三十六主殿〕親王并妃夫人、各月別九升、(小月減三合、)

女御六升、(小月減二合、)

親王頓料六斗、(下知名號之日所行、)

○按ズルニ、延喜式ニ此文ノ前後ニ、皆油ノ事ヲ載セタリ、因テ是亦油タルヲ知ル、

〔政事要略五十三〕太政官符厨家

應勤行雜事五箇條事(○中略)

一定晦料油并夏冬頓給料及雜穀等事(勘文在別)

右同前解狀(○厨家延喜十二年八月十三日解狀)偁、檢案內、列見定考祿、已載式條、而晦料油、并雜穀等、未有所據、辨行多疑、然而充行之例、年序尙矣、望請因准舊跡、得定件數、但夏冬頓給料、依延曆十八年十月廿一日宣旨、同爲定行者、同宜依請、(○中略)

以前條事所充如件、厨家宜承知依宣行之、符到奉行、

右中辨藤原朝臣　　　左大史酒井宿禰

司史生以下雜色人以上時服幷月料之法、

〔日本後紀十七平城〕大同三年五月乙巳、停有品親王月料、

〔三代實錄三十五陽成〕元慶三年三月七日丁酉、停太上天皇〇清和女御從二位藤原朝臣多美子、從四位上嘉子女王、從四位上兼子女王、忠子女王、正四位下平朝臣寬子、從四位上源朝臣濟子、從四位下源朝臣嚴子、藤原朝臣穎子、正五位下源朝臣暄子、藤原朝臣佳珠子、源朝臣宜子十一人季料月俸、緣太上天皇勅也、

〔本朝續文粹二勘文〕變異疾疫飢饉盜賊等勘文　敦光朝臣

勘申

變異疾疫飢饉盜賊等事〇中略

一去年風水有難今年春夏飢饉事〇中略

右王者八政、食爲其先、〇中略七者、依府庫空虛也、大府之倉廩、久以空虛、諸國之租稅、已少塡納、況納官封家有名無實、列位之臣不預月俸、奉公之士難禦歲寒、所謂衣食闕於家、雖父母不能制其子、凍餒切於身、雖巢由不能固其節、〇中略以前參箇條、據史籍課愚管勘申如件、

保延元年七月廿七日　正四位下行式部大輔藤原朝臣敦光

〇

日料

〔延喜式三十五大炊〕中宮雜給、日別米四斗平飯料、六升磨飯料、圖書寮、日米四升同寮紙工一人、日米二升雅樂寮蕃樂人日米一斗六升膳司、日米六升磨飯料御火炬童四人料米日三升六合、一人一升二合、三人各八合、春宮坊帶刀卅人料米六斗、人別日米二升鹽物、日米八升八合主鈴、日米三升二合典鑰、日米三升二合勘解由使、日米三斗二升二合內裏殿上侍所、日米二斗五升藏人所、日米二斗女藏人、日米一斗三升、飯二斗料、上御膳宿采女、日米五升、飯一斗料、次御廚子所米八升、膳部六人、日米四升八合、破飯一斗二升料、女孺四人日米三升二合、破飯八升料、候同

正三位兼行民部卿藤原朝臣冬緒宣、奉勅依請、

元慶七年十二月九日〇中略

太政官符

應以官田給中宮職宮主并戸座等月料事

山城國三町七段二百八十五歩

右得神祇官解偁、宮主等解偁、件月料准三宮例、以官田被充給者、官依解狀、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

寛平三年八月三日

神官月料

〔類聚三代格十五〕太政官符

應以官田充平野神社預一人御炊女四人月料事

山城國七町百卌歩

右得神祇官解偁、件月料米、停給京庫、以官田被充、謹請官裁者、大納言正三位兼行彈正尹藤原朝臣冬緒宣、奉勅依請、

元慶九年二月八日〇又見三代實錄

歸化人月料

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年正月甲戌、唐人大學權大屬正六位上李法琬、大炊權大屬正六位上淸川忌寸斯麻呂、造兵權大令史正六位上榮山忌寸千島、官奴令史正六位上榮山忌寸諸依、鼓吹權大令史正六位上淸根忌寸松山等給月俸、愍其羈旅也、

法王法臣法參議月料

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年十月乙巳、詔、法王月料准供御、法臣大僧都第一修行進守大禪師圓興准大納言、法參議大律師修行進守大禪師正四位上基眞准參議、

停減月料

〔日本後紀十七平城〕大同四年閏二月庚寅、廢減供御幷年中雜用、諸司官人以下月料、 三月庚申、定賜諸

宮主戸座月料

七位官、倍給二季祿及月料、並留應入京調庸物相折、通融隨時便給、○中略奏可之、
○按ズルニ、是時大宰府ヲ廢シテ鎭西府ヲ置キシガ、尋テ舊ニ仍リテ、又大宰府ヲ置ケリ、

〔類聚三代格五〕太政官符
應停攝津職爲國司事
右被右大臣宣偁、奉勅、難波大宮既停、宜改職名爲國、其二季祿及月料、並從停止、
延暦十二年三月九日

〔類聚三代格一〕勅
戸座
阿波國阿曇部　壬生　中臣部　右男帝御宇之時供奉
備前國壬生　海部　壬生首　壬生部　右女帝御宇之時供奉
備中國海部首　生部首　笠朝臣　右皇后宮供奉
以前戸座等、○中略月料人別三斗六升
天平三年六月廿四日

〔類聚三代格十五〕太政官符
應以官田給三宮□主戸座等月料事
山城國九町四段百十八歩
御宮宮主一人、戸座一人、合二人料、三町百卌九歩、
太皇太后宮宮主一人、戸座一人、合二人料、三町百卌九歩、
皇太后宮宮主一人、戸座一人、合二人料、三町三段百八十歩、
右得神祇官解偁、宮主等解偁、件月料米、准諸司要劇、以官田被充給者、官依解状、謹請官裁者、大納言

應給官田九十二町三段百卌八步事

山城國卌二町五段廿七步〇廿七步、三代實録作二百廿七步、

和泉國七町

攝津國五十二町八段十一步〇十一步、三代實録作三百十一步、

右得宮内省解偁、典藥寮解偁、月粮米停給京庫、以官田所請如件者、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

仁和二年十月十九日〇中略

太政官符

應給官田七十八町六段三百卌九步事

山城國十九町三段二百九十九步

河内國廿七町九段二百九十六步

攝津國十町二百六十步

右陰陽寮官人以下諸生以上、幷廿八人月料、

山城國廿一町二段二百四步

右主殿寮殿部廿八人粮料

以前得中務宮内兩省解偁、彼兩寮解偁、件月料粮等米、停給京庫、以官田所請如件者、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅依請、

仁和四年十二月廿五日

〔日本紀略嵯峨〕弘仁十一年十二月癸巳、勅、置針生五人、令讀新修本草經、明堂經、劉涓子鬼遺方各一部、兼少史集驗、千金廣洛方、等中治療方、特給月料、令成其業云々

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年正月戊午、太政官奏、鎭西府將軍准從五位官、判官准從六位官、主典准從

右靑栁荷葉、大和河內攝津等國所進、干栁播磨國所進、
內舍人廿五人、人別鹽二勺、雜腊二兩、鮨三兩、(○中略)
主鈴典鎰、滓醬二斗四升、(小月二斗三升二合)
內竪二百人料、鹽三斗六升、(小月三斗四升八合)
畫所年料、鹽二斛、
采女卅七人料、鹽二斗一升一合五勺、(小月二斗四合四勺五撮)
藏人所料、月別腊魚卅斤、滓醬六升、長人、日別鹽五勺、鮭半隻、鮨十五兩、海藻七兩、
諸衞異能士、月別鹽一斗、(小月亦同)
〔延喜式 三十一 宮內〕凡應給諸司月料魚宍者、省司每月臨勘厨庫見物多少及可盡之物、申官充用、勿致盡廢、臨時雜用准此、

親王月料

〔續日本紀 二十三 淳仁〕天平寶字五年二月丙辰朔、勅、朕以餘閑歷覽前史、皆降親王之禮、並在三公之下、是以別預議政者、月料馬料、春秋季祿、夏冬衣服等、其一品二品准御史大夫、(○大納言)三品四品准中納言給之、

諸司月料

〔享祿本類聚三代格 六〕太政官符
應停止大學官人博士要劇史生粮事
右被中納言兼左近衞大將從三位春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣偁、大學官人已下、學生已上、並預月料畢、宜要劇本粮並從停止、
弘仁九年五月廿五日
〔延喜式 二十 大學〕凡官人已下月料米、前月廿五日受大炊寮、其闕官不仕料充寮中雜用、
〔類聚三代格 十五〕太政官符

醬一斗二升、日四合 未醬六升、日二合 鹽一斗五升、日五合 東鰒九斤六兩、日五兩 隱岐鰒、煮堅魚、烏賊、海藻、各七斤八兩、日四兩 鮭十五雙、日二分之一 腊十八斤十二兩、日十兩 鮨廿五斤十兩、日十三兩二分一銖 堅魚煎、○煎下恐脱汁字 紫菜、海松、各一斤十四兩、日一兩

夫人

醬一斗二升、日四合 未醬六升、日二合 鹽一斗五升、日五合 東鰒八斤、日四兩三分 隱岐鰒、煮堅魚、烏賊、海藻各六斤、日三兩二分 堅魚七斤、日三兩五分五銖 鮭十雙、日三分之一 腊十八斤、日九兩三分三銖 鮨廿斤、日十兩四分四銖 堅魚煎、○煎下恐脱汁字 紫菜、海松、各一斤、日三分二銖

女御

醬、未醬、各六升、日二合 鹽六升、腊五斤十兩、日三兩 鮨九斤六兩、日五兩 紫菜、海松、各一斤十四兩、日一兩 海藻七斤八兩、日四兩

女官月料

女孺二百七十五人、醬六升、滓醬六斗、醬一斛六斗五升、人別日二勺

內敎坊命婦已下一百人、鹽三斗、

大藏縫女廿六人、鹽七升八合、

親王乳母、海藻八斤二兩、鹽六升、

侍從卅人、七人參議已上、餘五位已上、

三位已上及四位參議、醬二合、五位已上減二一合一 酢、鹽、各四勺、五位已上同 東鰒二兩、五位已上減二一兩一 隱岐鰒、煮堅魚、各一兩、堅魚二分、烏賊一兩、鮭六分雙之一、五位已上並同 堅魚煎汁二勺、五位已上除 雜鮨三兩一分二銖、海藻二分、末滑海藻四勺、五位已上並同

東宮、青槲干槲、各日別廿五把、荷葉卅枚、侍從所青槲干槲、各日別十五把、

粢料

右依前件人別日米一升、但大學官人博士、并諸衛府生以下日各二升、大學史生學生日各一升二合、

内竪二百人、月料人別日米六合、

〔貞信公記〕延長九年(〇承平元年)正月廿六日、右大將來、有院御消息等、(〇中略)内教坊申、衣服月料米事、仰高堪朝臣、　四月七日、可給諸司仕丁采女内教坊等一月料、女官主殿縫殿等半月料、以穀可給仰同辨、

〔延喜式三十三大膳〕粢料鹽(秋亦准此)親王五十斛(内親王同)太政大臣卅石、左右大臣各十石、大納言六石、中納言五石、參議三位四位各三石、中宮職五十石、春宮坊六石、侍從所春一石一斗四升、秋一石九斗、縫殿寮四石二斗四升八合、内匠寮一石五斗、木工寮七石、主殿寮六斗、掃部寮六石、左右近衛各八石、左右兵衛府各六石、左右衛門府各二石、隼人司一石四斗三升七合二勺、左右馬寮各春夏季二石四斗八升、(漬菜料一石、造馬薬醤料一石、薬料四斗八升、)内教坊二石五斗、女官厨五石、命婦以下六百籠、(三百籠、各納三斗、三百籠、各納二斗、)堅鹽一千五百顆、

右依前件毎年二月八月隨符給之、其參議已上月別上旬充之、但命婦已下者、内侍一人臨職、(〇大膳)

班給、

親王以下月料

無品親王内親王

醤一斗二升、(日四合)未醤六升、(日二合)鹽一斗五升、(日五合)東鰒九斤六兩、(日五兩)堅魚七斤八兩、(日四兩)鮭十五隻、(日二分之一)腊十五斤、(日八兩)鮨十五斤、(日八兩)堅魚煎、(〇煎下恐脱汁字)紫菜各一斤十四兩、(日一兩)海藻七斤八兩、(日四兩)

賀茂齋内親王月料

東鰒卅斤、堅魚廿九斤十兩、堅魚煎汁、紫菜一斤十三[illegible]、醤鹽未醤各一斗五升、海藻十斤十兩、(〇中略)

妃

ラン、

〔東大寺正倉院文書十〕大倭國天平二年正稅帳

平群郡〔略〇中〕

輕稅錢、直稻穀伍拾參斛捌斗玖升

〔東大寺正倉院文書三十七〕紀伊國天平二年大稅帳

紀伊國司解申天平二年收納大稅幷神稅事〔略〇中〕

依民部省天平二年八月廿八日符、加添輕稅錢、直稻參阡漆佰貳拾肆束漆把、

〔通典職官三十五〕二十一年、〔〇貞觀〕復依故制、置公廨給錢、爲之本、置令史府胥士等職、貿易收易、以充官俸、永徽元年、悉發胥士等、更以諸州租庸脚直充之、其後又令薄賦百姓一年稅錢、依舊令高戶及典正等掌之、每月收息以充官俸、其後又以稅錢爲之、而罷其息利、

〔延喜式大炊三十五〕親王已下月料

無品親王、內親王、妃、夫人、女御、〔日米各五升〕幼親王乳母、〔日二升〕乳母子各五斗、〔小月亦同、七歲以後停止、〕

賀茂齋內親王料、日米一斗、稷八合、

〔延喜式大炊三十五〕釆女卌七人料米、十八石九斗、〔小月十八石二斗七升〕中宮女孺廿七石六斗、〔小月亦同〕女官厨一百五十六石、〔小月一百五十石七斗六升二合〕內敎坊米廿石、〔小月十九石三斗三升三合六勺〕

諸得業生、〔人別日二升〕觀天文生、〔日二升〕漢語師、〔日一升二合〕

大藏縫女卌人、〔總日四升〕長人、〔日五升〕

中務史生十人、省掌一人、監物史生四人、大學寮官人六人、博士十五人、史生四人、學生五十人、民部史生廿人、宮內史生十人、春宮坊史生二人、舍人五十人、左右近衛府生各六人、番長三人、近衛二百人、左右兵衛府生各二人、番長二人、兵衛百五十人、左右衛門府生各二人、門部五十人、

〔延喜式中宮十三〕凡每月十一日、請來月料米一百斛、白五十石、黑五十石、
〔延喜式縫殿十四〕凡女孺七十人月粮、不經女官厨、直受大炊寮、
〔延喜式大學二十〕凡官人以下月料米、前月廿五日受大炊寮、其闕官不仕料、充寮中雜用、
凡寮家月料米者、不更待口宣而受之、
〔延喜式齋宮五〕凡諸司男女官月俸、雜色人衣服者、隨當國他國所進之多少、不論上下、每色分別、但須先女官後男官、
〔日本後紀平城十七〕大同四年三月庚申、定賜諸司史生以下雜色人以上時服幷月料之法、
〔享祿本類聚三代格六〕太政官符
應長例符之上〇長例符之上、恐有誤脫、更不申增減幷滿限及薨卒之人月料待官符除事
右得宮內省解偁、檢案內、太政官去弘仁十一年八月十六日符偁、承前之例、供御幷春宮坊御料、及親王已下月料、諸司每月申於辨官、官即下符、依例令充、大納言正三位兼行右近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、其政貴簡要、事歸易行、宜自今而後、令彼省每月收諸司解移勘會此符、然後充行、若事有增減、卽請官裁者、然則省須新預月料之色、以省符可行狀、更請官裁、此一物之上、再煩官符、官省之間、共增忩劇、又滿限及薨卒之輩、事不分明、難可趣知、初既有符充行彼料、終何無符除省此人、望請自今以後、新預月料之色、不更請裁、直以省符行之、滿限及薨卒之類、並待官符以從除省、謹請官裁者、大納言正三位兼行右近衞大將藤原朝臣良相宣、依請、
齊衡三年十月七日

收輕稅充月料
〔續日本紀八元正〕養老五年六月乙酉、詔曰、〇中略京及諸國、因官人月俸收斂輕稅、自今以去皆悉停之、
〇按ズルニ、因官人月俸收斂輕稅トハ、百姓ニ薄賦シテ以テ官俸ニ充ツルコトヲ云フナリ、然ルニ此時收稅ヲ罷メタレド、次ニ擧ゲタル東大寺正倉院文書ニ依レバ、後ニ又之ヲ復セシナ

古事類苑

封祿部五

月料 日料 女官雜用料 給炭薪油 附入

月料トハ、延喜式ニ依ルニ、親王、大臣、納言、參議、妃、夫人、中宮、東宮ノ官人、侍從、内舍人、六衞、女官ノ類、禁闈ニ親事スル者、及ビ大學寮ノ官人等ニ給スル所ノ毎月ノ食料ニシテ、卽チ諸司ヨリ來月ノ數ヲ錄シ、太政官ニ申シ、宮内省ヨリ大炊寮ノ米、大膳職ノ鹽醬魚菜等ヲ給スルナリ、但シ延喜式ヨリ以前ニハ、税錢ヲ收メテ内外官人ノ月俸ニ充テシ事アリ、鎭西府、攝津職ニ月俸ヲ給セシ事アリテ、京官ノミニハ限ラザルニ似タリ、且ツ平城天皇ノ大同四年ニ、諸司京官ヲ云フ官人以下ノ月料ヲ廢減セシ以前ハ、恐ラクハ普ク京官ニ給セシナラン、而ルニ崇德天皇ノ世ニ至リテハ、倉廩空虚ニシテ、列位ノ臣モ月俸ニ預ラザルニ至ル、

日料トハ、圖書寮等ニ、毎日大炊寮ノ飯ヲ賜フヲ云フ、又後宮親王等ニハ、年料ノ炭薪等ヲ給ス、

名稱

〔運歩色葉集氣〕月俸

〔優頭屋本節用集財計寳〕月俸(ケツホウ)

制度

〔延喜式十一太政官〕凡親王以下月料、並諸司要劇及大粮等、毎月申官出充、其月料物者、錄來月數、毎月十日申太政官、十七日官符下宮内省、廿五日出給、

〔延喜式二十六主税〕凡諸司諸家月料粮料之類、停給京庫、可給外國者、雖可行白米、而猶充黑米、

召₂御前₁賜₂別祿₁

被物無₂謂₁可₃給₂御衣₁、在家ニハ賜₂女房裝束₁、

爲₂祿引₁牛馬法

上臈ハ馬、下臈ハ牛也、

預₂祿₁儀

可₃懸₂左肩₁、近代必不₂懸₁之、取₂右腕₁歟、

一纏頭間事

理之所₂至₁者、我可₂著₁之衣也、

爲准正、仍賜祿有差、

〔侍中群要七〕檢非違使奏事

別當有闕之時、廳底可然人、奏事由、（行于例事依可下給也）有名犯人、幷有宜旨追捕者、得之時參藏人所奏其由、（或有給祿之時、各疋絹也、佐若有此中藏人所授於六位官人出納有何事乎、藏人尉可有任心也、）

追捕官人等給祿事

可然之時、於殿上口給祿、各疋絹、（不論尉志府生）但或尉二疋、志府生一疋、各可隨議、

檢非違使事

從追捕歸參帶弓箭直以參入、若給祿者不拜舞、

天德四年、不論尉志府生等、各給祿一疋、

天祿四年、尉一疋、志府生各給一疋、（此例不詳）

〔三中口傳四〕一諸祿法事

驗者祿

御衣幷御裝束類可宜、雖夏中賜御直垂恒事也、被物三重御直垂、御小袖、若御裝束一具可宜歟、

被物三重絹五疋、布十段、過分也、非發心地等揭焉事者不及牛馬、

物付祿

及五七箇日者、絹五疋許可置之

醫師祿

雖夏中於綿者賜之

絹布爲祿物調樣

上下紙ヲ宛ヲ可結之

祿法、皇太子三百屯、（文人加百屯、）一品百九十屯、（文人加七十屯、）二品百七十屯、（文人加六十屯、）三品百五十屯、（文人加五十屯、）四品百三十屯、（文人加三十屯、）無品七十屯、（文人加二十屯、）太政大臣二百五十屯、（文人加七十屯、）左右大臣二百屯、（文人加六十屯、）大納言百卅屯、（文人加五十屯、）中納言百屯、（文人加四十屯、）三位參議七十屯、四位參議五十屯、一位百卅屯、二位百屯、三位五十屯、（以上文人加三十屯、）四位三十屯、（文人加廿屯、）五位廿屯、外五位十五屯、（文人各加十五屯、）六位以下文人十屯、

○

〔侍中群要七〕勅計事

凡觸事有勅計、分遣侍臣諸陣、令取見參賜祿、（或不給、但大嘗之時殿上男女房、及内侍所主殿寮男女官間預見參、）

勅計事（大嘗新嘗見參朔旦等頗異也）

左右近　左右兵衞　左右衞門　帶刀陣（或不遣只隨仰）藏人承仰仰侍臣遣件陣々（近衞次將不多候者中少將遣近陣）勅使到陣問見參、面々來向、勅使只計人數歸參、其後陣官書見參、取勅使署、勅使授藏人、藏人取聚一度奏之、（當日奏之、若入夜明朝奏之、）

勅計事

每有可然之事、遣侍臣等於諸陣取見參、（左右近衞、左右兵衞、左右衞門、帶刀陣等也、）藏人奉仰傳仰侍臣、分遣陣々、勅使等計人數歸參、其後本陣各書見參、取勅使署名授藏人、藏人取集一度奏之、若入夜明朝奏之、又被問上卿見參之時、至陣後招陣官備問了歸參奏之、或至南殿東庇格子下伺見、

〔唐六典（三戸部）〕凡賜物十段則約率而給之、絹三匹、布三端、綿三屯、

〔續日本紀（一文武）〕元年十二月庚辰、賜越後蝦狄物各有差、　二年二月丙申、車駕幸宇智郡、　癸卯、賜百官職事已上及才伎長上祿各有差、　丙午、賜武官祿各有差、

〔續日本紀（二文武）〕大寶元年八月癸卯、遣三品刑部親王（○中略）等撰定律令、於是始成、大略以淨御原朝廷

〔延喜式大藏三十〕諸節祿法

十七日節（正月）

大射并諸衛射手祿者、一品一箭著、內規調布卅五端、中規卅端、外規廿五端、二品著、內規卅端、中規廿五端、外規廿端、三品四品著、內規廿五端、中規廿端、外規十五端、（無品准此）諸王諸臣三位已上各准當品、其四位著、內規廿端、中規十五端、外規十端、五位著、內規十六端、中規十二端、外規六端、六位七位著、內規八端、中規六端、外規四端、八位以下白丁以上著、內規五端、中規四端、外規三端、著皮者、五位已上一端、六位已下庸布一段、二箭並著倍給、

五月五日

〔延喜式大藏三十〕諸節祿法

五月五日節

騎射近衛兵衛祿者、每中一的、給布一端、

〔續日本紀十一聖武〕天平元年五月甲午（五日）、天皇御松林苑、宴王臣五位已上、賜祿有差、亦奉騎人等不問位品、給錢一千文、

九月九日

〔延喜式大藏三十〕諸節祿法

九月九日節

皇太子綿三百屯、（預文人者加一百屯）一品一百九十屯、（文人加七十屯）二品一百七十屯、（文人加六十屯）三品一百五十屯、（文人加五十屯）四品一百卅屯、（文人加卅屯）無品七十屯、（文人加卅屯）太政大臣二百五十屯、（文人加七十屯）左右大臣各二百屯、（文人加六十屯）大納言一百卅屯、（文人加五十屯）中納言一百屯、（文人加卅屯）三位參議七十屯、四位參議五十屯、一位一百卅屯、二位一百屯、三位五十屯、（已上文人各加卅屯）四位卅屯、（文人加廿屯）五位廿屯、外五位十五屯、（文人加十屯）六位已下文人十屯、

〔九條年中行事九月〕九日節會事（中略）

合見參五位已上
大臣二人、料絹百疋、(各五十疋)　料綿八百屯(各四百屯)
大納言一人、料絹卌疋、　料綿二百屯
中納言二人、料絹五十疋、(各二十五疋)　料綿三百屯(各百五十屯)
參議一人、料絹二十疋、　料綿百屯
四位九人、料絹五十四疋、(各六疋)　料綿二百七十屯(各百三十屯)
五位十三人、料絹六十五疋、(各五疋)　料綿二百六十屯(各廿屯)
應下
絹二千疋　綿一万疋
用
絹三百十九疋　綿千九百三十屯
殘
絹千六百八十一疋　綿八千七十屯
曆應四年正月十六日

正月十七日

〔續日本紀(三十文武)〕慶雲三年正月壬辰、(〇十七日)定大射祿法、親王二品、諸王臣二位、一箭中外院、布二十端、中院二十五端、內院三十端、三品、四品、三位、一箭中外院、布十五端、中院二十端、內院二十五端、四位、一箭中外院、布(〇布原脱、據一本補、)十端、中院十五端、內院二十五(〇五一本无、恐是、)端、五位、一箭中外院、布六端、中院十二端、內院十六端、其中皮者、一箭同布一端、若外中內院及皮重中者倍之、六位、七位、一箭中外院、布四端、中院六端、內院八端、八位、初位、一箭中外院、布三端、中院四端、內院五端、中皮者一箭布半端、若外中內院(〇院原脱、據一本補、)及皮重中者如上、但勳位者不著朝服、立其當位次、

殘

絹千八百二疋　綿八千七百九十屯

曆應四年正月七日

分配外記一﨟利顯書進之、

正月十六日

〔延喜式三十大藏〕諸節祿法

十六日〔〇正月〕節

皇太子綿三百屯、一品一百七十屯、二品一百五十屯、三品一百卌屯、四品一百十屯、無品七十屯、〔未冠減卌屯〕太政大臣二百五十屯、左右大臣各二百屯、大納言一百卌屯、中納言一百屯、三位參議七十屯、四位參議五十屯、一位一百卌屯、二位一百屯、三位五十屯、四位卌屯、五位廿屯、〔內命婦准此〕

〔延喜式十三中宮〕十六日〔〇正月〕踏歌妓女卌六人、祿料細屯綿六百屯、〔預請大藏〕饗畢班賜有差、

〔延喜式四十三春宮〕凡十六日〔〇正月〕踏歌伎、自內裏退出、從東南門入候殿東庭、近仗分居東西細殿廂、東宮朝服把笏御座、妓出自東、踏歌畢御於殿上、賜酒肴、其祿細屯綿五百屯、〔請內藏寮節料賜之〕內裏女藏人四人在妓中、別給衾各一條、〔用物〕

〔續日本紀二文武〕大寶元年正月庚寅、〔〇十六日〕宴皇親及百寮於朝堂、直廣貳已上者、特賜御器膳并衣裳、極樂而罷、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年正月癸卯、〔〇十六日〕天皇御南苑、宴侍臣、饗百官及渤海客於朝堂、五位已上賜摺衣、

〔師守記〕曆應四年正月十六日甲子、寅剋致行節會、〔〇中略〕

分配外記權少外記淸原宗枝書之、然間近衞次將大內記上入見參、淸家流先例入之間如此云々、當家不入、

皇太子絁八十疋、綿五百屯、一品絁卅五疋、綿三百五十屯、二品絁卅疋、綿三百屯、三品絁卅五疋、綿二百五十屯、四品絁卅疋、綿二百屯、無品絁廿疋、綿一百屯、太政大臣絁七十疋、綿五百屯、左右大臣各絁五十疋、綿四百屯、大納言絁卅疋、綿二百屯、中納言絁廿五疋、綿一百五十屯、三位參議絁廿疋、綿一百屯、四位參議絁十五疋、綿六十屯、一位絁卅疋、綿二百屯、二位絁廿五疋、綿一百五十屯、三位絁十五疋、綿六十屯、四位絁六疋、綿卅屯、五位絁四疋、綿廿屯、外五位絁三疋、綿十屯、（内外命婦准此、）六位女王絁二疋、綿四屯、（女王明日給之、新嘗會亦同、）

〔小右記〕長元四年七月二日丁未、大藏省進正月七日節祿代草、（絹五十四代十五枚、綿四百屯代八枚、）

○按ズルニ、藤原實資、時ニ右大臣タリ、其節祿延喜式ト合ス、

〔師守記〕曆應四年正月七日乙卯、丑剋始行節會、○中略

合見參五位已上

大臣一人、料絹五十疋、　料綿四百屯

大納言一人、料絹廿疋、　料綿二百屯

中納言二人、料絹五十疋、（各廿五疋）　料綿三百屯（各百五十屯）

參議一人、料絹廿疋、　料綿百屯

四位三人、料絹十八疋、（各六疋）　料綿九十屯（各卅屯）

五位六人、料絹卅疋、（各五疋）　料綿百廿屯（各廿屯）

應下

絹二千疋　綿一万屯

用

絹百九十八疋　綿千二百拾屯

同日受女官朝賀

其日内侍仰闈司、○中略 饗宴訖賜祿、（妃白掛衣一襲、夫人内親王各白掛衣一領、三位以上六幅被一條、四位四幅被一條、五位衣一領、三位已上妻四幅被一條、四位以下妻衣一領、）女孺之中給折櫃食百合、祿調綿二百屯、（事見儀式）

三日給省并典藥官人已下酒肴並祿、五位衾一條、六位小褂衣一領、典藥史生一人布二端、生十二人各一端、

〔延喜式四十三春宮〕同日（○正月二日）受群官賀儀

前一日、大藏木工、設幄幔於南門外、當日遲明、左右兵衛各屯門外、主殿署洒掃前殿、設東宮座於東廂、○中略 坊官積祿物於殿庭、土藏陣盛衣被櫃於祿物北、行觴九周、樂止、雅樂寮退出、亮於庭中唱四位五位名、（自下唱之）賜祿物、四位小褂衣一領、五位綿十屯、訖女藏人各持小褂衣一襲、賜親王已下、大納言已上、又持同衣一領、賜中納言三位參議、又持褂衣一領、賜非參議三位、并四位參議、訖群官以下並再拜、而退出、所司閉門、

〔延喜式四十采女〕凡正月三節、采部三人、各給紺調布衫一領、（五月節亦同、七月廿五日九月九日通用、）月粮白米九斗、（人別日一升、）鹽九合、（人別日一勺）

〔後撰和歌集一春〕元日に二條のきさいの宮にて白きおほうちきをたまはりて

藤原敏行朝臣

ふる雪のみのしろごろもうちきつゝ春きにけりとおどろかれぬる

正月七日新嘗會

〔延喜式十二中務〕凡正月七日、十一月新嘗會、命婦賜祿、一同男官、（祿法見大藏式）

〔延喜式十八式部〕凡正月七日、并新嘗會等、祿召名札令大藏省寫取、

〔延喜式三十大藏〕諸節祿法

正月七日節（十一月新嘗准此）

凡次侍從已上年七十以上者、雖身不參給節會祿、

〔類聚國史七十一歲時〕弘仁十三年二月戊寅、制、五位已上高年者不預朝會、但賜節祿而已、

〔類聚符宣抄六〕應令引祿法所幔事

右被右大臣宣偁、如聞、造祿法之所、彼此亂入、有妨公務、於事不當、自今以後、諸節幷臨時宴會、宜仰諸司引幔設座、事據鑒誡、永爲恒例、

承和三年九月八日　大外記山田宿禰古嗣奉

〔儀式六〕元日御豐樂院儀

前一日、內匠寮官人、率雜工等、構立御斗帳於豐樂殿高御座上、○中略宣命大夫降自同階就版、宣制云、天皇（我）詔旨（良万）宣大命（乎）衆諸聞食（止與）宣、皇太子先稱唯、次親王以下共稱唯、皇太子先再拜、次親王以下再拜、訖更宣云、今日（波）正月朔日（乃）豐樂聞食（須）日（爾）在、又時（毛）寒（爾）依（氐）、御被賜（久止）宣、（若雨雪時者、之上、可加雪毛布流之辭、）皇太子先稱唯、次親王以下俱稱唯、訖皇太子先拜舞、次親王以下亦拜舞、訖著座、中務大少輔執札相分、入延明門、（大輔北腋、少輔南腋、）各立樞東西頭、內侍先取御被、賜皇太子、先皇太子再拜、下自東階、中務兩輔唱名、賜之親王以下、一一再拜、經顯陽堂南、出自延明門、賜群臣祿、訖所司以所餘物進於內侍、即於殿上、女史唱名、賜內命婦等、（賜見參者、先是大藏職於殿上、賜命婦等頒、）

〔延喜式十三中宮〕同日（○正月二日）早朝受群官朝賀、○中略內侍一人率女藏人三人、納祿物於樞二合、令持、職舍人四人置廊下上東、（自親王座東去一許丈、）綿六百屯、（受大藏省、）置廊下、（掃部寮設座、）亮進屬各一人、史生二人、侍賜祿所、（所司設座、）事訖賜祿、親王以下大納言已上、各白褂衣二領、中納言三位參議白褂衣一領、非參議三位幷四位參議褂衣一領、四位小褂衣一領、五位綿一連、亮唱四位五位名賜之、（參議已上令女藏人賜之、五位已上令宮司賜之、）若亮有闕、臨時權任、（事見儀式、）同日早朝中務省召職司給次侍從已上見參、即別錄四位已上名簿進內侍、（爲令辨備祿物、）

近來以代給之云々、令問何之由宣旨、有所指書、所申不分明、仍令仰其由、絹者後日慥可令給、且以綿可給之由仰、彼申官人退出、官掌一白召使二亦辨候二人亦給疋絹、司人十二人、信乃布一端、

新任參議行神事之日、賜王祿於下部例也、而去八月除目以後、無可然之神事、仍今日雖非神事、依吉事行事之後給之也、

不賜女王祿

〔中右記〕嘉承二年十一月十八日、今夕有王祿、左宰相中將忠敎、右中辨顯隆勤之、是雖無節會、(新書、下同、)先例有王祿云々、

〔殿暦〕長治二年十一月廿三日丁巳、今日王祿被止了、無節會時不被行云々、仍被止了、申剋許、爲隆告此事、

〔爲房卿記〕應德二年十一月十五日乙巳、今日不給女王祿、無節會也、(殿下昨日召大外記定後仰下此由也、先例被仰上卿之時、無所見)者、

節祿　臨時賜祿物併入

節祿ハ、元日等ノ節會ノ日ニ賜フ所ノ祿ナリ、其物ハ布帛ノ類ニシテ、官位ノ高卑ニ從ヒテ差アリ、又其技ノ優劣ニ由リテ等ヲ立ツルモノアリ、大射ノ祿ノ如キ是ナリ、

制度

〔延喜式三十大藏〕凡諸節會日給祿者、中務式部隨節唱名、省卿頒給、(大射祿當隨班給)若有殘者、辨官幷省共修奏狀附內侍司、(大射祿殘、賭弓畢後進藏人所、)

〔延喜式四十六左右衛門〕凡諸節會之日祿、令衞士運進、

〔延喜式十二中務〕凡節會日、求侍從已上、不預謝座謝酒之禮、不得賜祿、但參議已上幷當日有職掌者、及羸老扶杖之輩、不在此限、

賜女王祿例

參議一人辨史著承明門內、本司官人率女王候幄下、本司官人進奏文、（先例參議加名云々、近代見返給云々、）依例給祿、（見內裏式也、）

〔江家次第 正三月〕給女王祿事（正月八日、十一月中巳日、並大節後朝、）

近例

承明門內面東第二間南邊逼扉鋪半帖一帖、（有後立簾下數簾等也）上卿座前敷膝突小筵為參議座、（北面、其前居火爐、）同第一間南邊逼南壁鋪疊一枚（有下數簾）為辨座、（北面、其前居火爐、）同間砌東北邊逼東壁鋪疊一枚為史座、同間砌東邊鋪疊為官掌等座、不破節會（○七日）西幄為女王座、上卿以下著、（上卿自座西、辨自座東、）正親佑插女王夾名文於書杖、經東砌就膝突覽上卿、上卿取之、（如西宮記者、可返給歟、更不可下辨、）見畢卷之揖、佑退出、上卿以文下辨、（不辨起座給之）乃辨下史、史起座召大藏省令給女王祿、（祿以上一人祇候）

永保二年正月八日、破西幄留東幄、裝束司之失也、同三年正月八日延引、依七日有行幸六條也、同十一日、還御日行之、

內裏式儀式等、有天皇出御南殿之儀、幷裝束等近代不行、

〔江家次第 正三月〕給女王祿事

（御）康保二年正月八日、右少史豐金令共政申云、納言參議皆申障、不能給女王祿事、依（○依原脫、今據一本補、）仰重令召、遂不參、仰云、後可行之、後日被勘不參上達部、十日給女王祿、

（小一條記）天慶九年十一月二十四日、此日賜女王祿、公卿皆稱障不參、辨官行事、永保二年、予參八省、參議俊實卿不待行幸、引予參內裏、行件事、前例也、

〔權記〕長保三年十一月廿六日、候御前、被仰雜事、就縫殿寮女王祿事之由、有外記告、仍申剋與左中辨就彼寮之間、分配辨左少辨致尹朝臣來會、左中辨還與左少辨幷史長定就幄下、正親佑正雅進女（○女下恐脫王字）見參二百人、所當絹人別二疋、綿六屯、大藏省史生高輔懈怠令封宮由、綿千二百屯積之、絹者

其日內侍於縫殿院點檢女王、所司預張幄二字於安福殿前、亦設座於殿庭、積祿物於版以南、紫宸殿南廂西戶外立三尺畫障子、辨備御饌、(謂菓子雜餅等、殿南廂西第三間安酒器、)并皇后饌、及女御尙侍已下散事已上饌、(謂着菓子等、)御座以西皇后座去二許丈、(裝束之儀同御、但不立幔、)御座以東設女御以上座、(用臺床子、其色隨人、(人原作不、今據一本改、)貴賤、)立臺盤、置銀筋匙、(但饌各用私、(私原作松、今據一本改、)物、)御座以東二許丈南北相對立孫王尙侍典侍等床子、(以下同用中床子、)東廂南北相對立散事床子、(以上同鋪毯代、又立臺盤、置白銅筋匙及着菓子等、)東第一間安酒器、祿東頭少北進北面立內侍床子、西去八許尺立女史床子、其前立案、西去一許丈立掃部女孺床子二脚、前立班祿臺一脚、(用長床子、)掃部座西南四許丈立闈司床子、西北去八許丈立來著床子六脚、祿以西五許尺、更南折一許丈立正親司別當以下令史以上床子、自此以北立板障子、辨備既畢、皇帝御紫宸殿、內侍率女王入自月華門、就幄下座、訖乃本司別當以下入自同門、俱趨就前庭座、北面東上、訖佑一人執名簿唱曰、其親王之後、于時一祖之胤、皆下座稱唯、進就賜祿座、座定執簿一一唱名、卽稱唯受祿退出、(其賜內外命婦祿、或七日、或此日、或殿上、或庭、唯臨時勅裁之、)

〔延喜式三十九正親〕凡正月八日、給祿女王、所司設座於殿庭、立幄二字於安福殿前、積祿於版位南、亦供奉殿上裝束、天皇御紫宸殿、內侍率女官就座、本司官人引女王自月華門參入、女王先就幄下座、(以世爲長幼、)次官人共趨就前庭座、佑一人執簿唱曰、某親王之後、卽一祖之胤、皆下座、共稱唯就庭中座、座定執簿一一喚名、女王卽稱唯、進受祿退出、餘亦如之、其祿法、人別絹二疋、綿六屯、新嘗會准此、(十一月)

〔延喜式三十八掃部〕同日(〇正月八日)賜女王祿、御座以西設皇后御座、以東設女御已上座、(用臺床子、)立孫王尙侍典侍等床子、(以下同用中床子、)東廂立散事床子、祿東頭立內侍床子、西立女史床子、前立空床子一脚、西立掃部女孺床子二脚、前立班祿臺一脚、(用長床子、)掃部座西南立闈司床子、闈司西北立來著床子六脚、祿西南立正親司別當已下令史已上床子、幄下立女王床子、

〔延喜式三十大藏〕同日(〇正月八日)內裏南庭西方立五丈紺幄二字、(女王等所侍、十一月新嘗會亦同、)

〔西宮記正月中〕八日給女王祿事(不破節會、(七日、)同、)西幄爲女王座、

名稱

フ次序ハ長幼ニ依ラズ、其祖ノ世次ニ從フナリ、而シテ中世ニ至リテハ、賜祿ニ預ル女王ノ員ヲ定テ二百六十二人トセリ、要スルニ女王ニ祿ヲ賜フハ、男王ニ時服ヲ賜フガ如シ、

〔公事根源 正月〕給女王祿　同日（○八日）

女王祿と字には書たれど、たゞ王祿と計讀て、女字を略するを口傳とはする也、

制度

〔延喜式 三十九 正親〕凡賜祿女王定二百六十二人、其隨闕補代、代（○代恐衍）及改姓不爲闕、事並同上條、（○中略）

凡給女王二節祿見參簿、當日早旦奏之、

〔公事根源 正月〕給女王祿　同日（○八日）

參議辨史などむかひて、承明門の內の西の座にて、女王に祿を給事あり、昔は王四百廿九人、女王二百六十二人と定られて、年毎にけふ祿を給けるとかや、

賜女王祿儀

〔內裏式 上〕八日（○正月）賜女王祿式（十一月同）

其日近衛次將令所司鋪設於殿庭（安福殿前張幄二宇）積祿於版位南、紫宸殿南廂西戶外建三尺畫障子、辨備御饌（鋪菓子雜餅等、殿南廂西第三間安酒器）幷皇后御饌、及女御尙侍以下散事以上饌、（並留肴菓子等）其御座以西二許丈設皇后御座、（裝束之儀同御座、但不立御帳）御座以東設女御以上座、（用蘊床子、其色隨人貴賤）立臺盤置銀筯匙（但饌各用私物）御座以東二許丈南北相對立孫王尙侍典侍等床子、（以下同用中床子）東廂南北相對立散事床子、（以上同、鋪毯代、又立臺盤、置白銅筯匙及肴菓子等、）東第一間安酒器、（事具別記）祿東頭少北進北面立內侍床子、又西去八許尺立女史床子、前立空床子一脚、又以西一許丈立掃部女孺床子二脚、前又立班祿臺一脚（用長床子）掃部座西南四許尺立闈司床子、闈司西北去八許尺立來著床子六脚、祿以西五許尺、更南折一許丈立別當以下令史以上床子、自此以北樹板障子、辨備已畢、御紫宸殿、正親司引女王等自月華門參入、女王先入就幄下座、訖別當以下入就座、節唱名賜祿、（其賜內外命婦祿、或七日夕、或此日、或殿上、或殿庭、唯臨時勅裁、）

〔儀式 八〕正月八日賜女王祿儀（十一月新嘗會亦同）

右夏絹三丈、冬加絹三丈、綿二屯、貲布一端、冬調布二端

女丁人別夏絹三丈、冬加絹三丈、綿二屯、縹調布二丈一尺、庸布一段、冬同、赤

前件時服、夏四月二日、冬十月二日、内侍司具錄人數幷賜色目移省、造解文、十日申官、官符下大藏省、内侍司請受、依件班給、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應給女官職事五位已上時服事

右大同之間、停給件服、今被大納言正三位藤原朝臣園人宣、奉勅、依舊給之、永爲恒例、

弘仁三年八月廿日

戸座時服

〔類聚三代格一〕勅

戸座

阿波國阿曇部　壬生　中臣部右男帝御宇之時供奉

備前國壬生　海部　壬生首　壬生直右女帝御宇之時供奉

備中國海部首　生部首　笠朝臣右皇后宮供奉

以前戸座等給時服料冬人別絁一疋、綿六屯、夏人別絁（絁下疑脱布字）三丈、〇中略

天平三年六月廿四日

女王祿

女王祿ハ、ワウロクト呼ビテ、白馬節會、新嘗會ノ翌日、紫宸殿ノ庭上ニ於テ女王ニ絹、布、綿等ノ祿物ヲ賜フヲ謂フ、延喜ノ頃マデハ、天皇皇后出御アリシガ、後ニハ其事ナシ、其日祿ヲ賜

後宮時服
女官時服

右太政官今月六日下宮内省符偁、造皇后宮供御器手如件、省宜承知、隷内膳司給時服、
弘仁六年八月七日
太政官符
今良捌人 男一人 女七人 染手二人
右件人等依染縫皇〇皇下恐脱后字宮御服、直縫殿寮、省宜承知、預時服、
弘仁六年十月十三日
〔延喜式十一太政官〕凡後宮幷女官時服及飾物料者、夏四月十日、冬十月十日、中務省申官、廿日、官符下大藏省、廿二日、出給、
〔延喜式十二中務〕後宮時服
妃絹六十疋、細布卌端、貲布五十端、冬加綿三百屯、夫人絹五十五疋、細布卌端、貲布五十端、冬加綿二百五十屯、嬪絹四十疋、細布廿端、貲布卅端、冬加綿二百屯、女御絹廿疋、貲布卅端、冬加綿一百屯、前件時服、夏四月五日、冬十月五日、内侍具錄人數及物色、移省、造解文申官、
〔延喜式十二中務〕官人時服
内侍司一百十人、尚侍二人、典侍四人、掌侍四人、女孺一百人、藏司十七人、尚藏一人、典藏二人、掌藏四人、女孺十人、書司九人、尚書一人、典書二人、女孺六人、藥司七人、尚藥一人、典藥二人、女孺四人、兵司九人、尚兵一人、典兵二人、女孺六人、闈司十五人、尚闈一人、典闈四人、女孺十人、殿司九人、尚殿一人、典殿二人、女孺六人、掃司十三人、尚掃一人、典掃二人、女孺十人、水司九人、尚水一人、典水二人、采女六人、膳司卌八人、尚膳一人、典膳二人、掌膳四人、采女卌一人、酒司三人、尚酒一人、典酒二人、縫司一百七人、尚縫一人、典縫二人、掌縫四人、女孺一百人、
中宮女孺九十人
右五位已上、夏絹一疋、冬加綿三屯、女孺已上、絹三丈、冬加絹三丈、綿二屯、
内教坊未選女孺五十人

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字六年五月丙午、賜大師正一位藤原惠美朝臣押勝帶刀資人六十人、通前一百人、其夏冬衣服者官給之、

〔類聚國史職官百七〕延暦十七年四月癸亥、大藏省藏部數定爲卌人、仍給廿人夏冬衣服、

〔日本後紀平城十七〕大同四年三月庚申、定賜諸司史生以下雜色人以上時服幷月料之法、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應給時服幷番上粮米事

史生四人時服二人　粮（粮下恐脱米字）二尺　各日白米一升

笛工八人　笛生六人　歌人卌人

合五十二人粮米廿人　各日白米一升

右被太政官去三月十五日符偁、被右大臣宣偁、奉勅、承前諸司番上及雜色人、劇官以外不給衣食、今苟備員位、非無執當、資粮有闕、情勤蓋少、宜量立定額永給衣粮者、謹依勅旨、量事閑劇、定額如件者、省宜承知依件行之、其衣服色數宜依常例、

大同四年四月一日　中略〇

太政官符

應給時服今良肆人事

右太政官去四月廿六日下民部宮内二省符偁、後宮御火炬二人、御井守二人、宜預月粮者、而未預時服、省宜承知、自今年冬永給時服、

弘仁四年十二月九日

太政官符

合作器手陸人作木器一人　作土器五人

人、正一人、佑一人、令史一人、木部廿四人、守御井六人、左近衛府四百廿五人、大將一人、中將一人、少將二人、將監四人、將曹四人、府生六人、醫師一人、番長六人、近衛三百人、駕輿丁一百人、右近衛府准此、左衛門府六百八十一人、督一人、佐一人、大尉二人、少尉二人、大志二人、少志二人、府生四人、醫師一人、門部六十六人、衛士六百人、右衛門府准此、左兵衛府二百六十七人、督一人、佐一人、大尉一人、少尉二人、大志一人、少志二人、府生四人、醫師一人、番長四人、兵衛二百人、駕輿丁五十人、右兵衛府准此、左馬寮廿八人、頭一人、助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、馬醫二人、史生四人、騎士一人、馬部十五人、右馬寮准此、兵庫寮六人、頭一人、助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、春宮坊十一人、傅一人、學士二人、大夫一人、亮一人、大進一人、少進二人、大屬一人、少屬二人、舍人監一百四人、正一人、佑一人、令史二人、舍人一百人、主膳監四人、正一人、佑一人、令史二人、主藏監准此、主殿署二人、首一人、令史一人、主馬署准此、修理職三百九十人、史生八人、長上十二人、將領廿二人、工部六十人、仕丁二百廿七人、飛驒工六十三人、

右雖有定員、待本司解、明知見定、然後給之、其自十二月一日至五月卅日、上日長上百廿以上、番上八十以上、給春夏時服、秋冬准此、但木工寮、修理職、飛驒工者春以三月、秋以九月爲限、四月十月給之、其計夜者、侍從次侍從限四十以上、省丞内舍人五十以上、六衛府官人已下舍人以上八十已上、兵庫左右寮五十已上、自餘不須計夜、其親王及參議已上者、不在給限、侍從者並依侍從給之、若帶六衛府及左右馬寮兵庫者、宜依本司日夜、其臨時別給、皆依官符、若初任者、起自任日至于限月、計其上日、長上不滿三分之二、番上不滿三分之一、不在給限、新初任者、謂五月及十一月以前任者、其服色者、五位已上春縹絁三丈七尺、秋同、帛一丈五尺、秋一丈七尺、綿四屯、秋同、中務丞及内舍人、絹五丈二尺、秋絁一疋四丈四尺、綿四屯、今良男女、各絁三丈、調布一端、秋絁一疋、布一端、綿三屯、但女綿二屯、隊正火長、庸布一段、秋二段、綿三屯、衛士駕輿丁、商布一段、秋二段、綿三屯、六月十二月一日、總造解文、七日申太政官、九日奏聞、事見儀式、

〔延喜式 四十四 勘解由〕凡賜時服、春夏長官次官、各絹五丈二尺、判官已下使掌已上、各四丈五尺、秋冬長官次官、各一疋四丈四尺、綿五屯、判官已下使掌已上、各一疋三丈、綿四屯、使修解文進官、官下符大藏省充之、

〔延喜式 十三 大舍人〕凡五月廿一日、官人以下春夏衣服文申省、秋冬料、十一月廿一日申之、

〔續日本紀 二十三 淳仁〕天平寶字四年十一月丙午、大臣已下參議已上夏冬衣服、節級作差、

諸司時服

子、源朝臣謙子、源朝臣爲子、源朝臣偕子、源朝臣深子、源朝臣周子、源朝臣審子二十五人、○以上並光孝皇子女

預時服月俸、借空性亦是皇子、同預時服月俸、並須下所司訖、

〔享祿本類聚三代格 六〕詔、官多則政黷、人少則事稽、故省併量宜、委宰○宰、日本後紀作寄、期要、昔諸司百寮有閑有劇、是以資俸賞賜、或厚或薄、今官既從改、賞何依舊、宜要劇、馬料、時服、公廨、悉革前例、普給衆司、詳爲條例、

大同三年九月廿日

〔延喜式 十二 中務〕時服

神祇官卜部廿人、宮主、卜長上、寮宮主、卜部等、在此數内、太政官九人、大外記二人、少外記二人、史生五人、左辨官十五人、大辨一人、中辨一人、少辨一人、大史二人、少史三人、史生八人、右辨官准此、中務省一百八十八人、卿一人、大輔一人、少輔一人、大丞二人、少丞二人、大錄一人、少錄三人、史生十人、侍從八人、次侍從九十二人、內舍人四十人、大內記二人、少內記二人、史生一人、大監物二人、中監物四人、少監物四人、史生四人、大主鈴二人、少主鈴二人、大典鑰二人、少典鑰二人、中宮職一百六十二人、大夫一人、亮一人、大進一人、少進二人、大屬一人、少屬二人、史生四人、舍人一百五十人、大舍人寮一百七人、頭一人、助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬二人、舍人一百人、但大歌生十人在舍人內、圖書寮九人、頭一人、助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、造紙長上二人、造墨長上一人、內藏寮八十五人、頭一人、助一人、大允一人、少允二人、大屬一人、少屬二人、典履一人、史生四人、藏部十人、舍人卅人、作手卅二人、縫殿寮十八人、頭一人、助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、史生二人、縫部四人、染手六人、陰陽寮十六人、頭一人、助一人、允一人、大屬一人、少屬一人、陰陽師六人、陰陽博士一人、曆博士一人、天文博士一人、漏刻博士二人、內匠寮一百卅四人、頭一人、助一人、大允一人、少允二人、大屬一人、少屬二人、史生六人、才長上廿人、番上工一百人、隼人司廿三人、正一人、佑一人、令史一人、隼人二十人、大藏省廿二人、藏部廿人、價長二人、織部司卅八人、正一人、佑一人、令史一人、挑文師二人、織手四十人、織工相作在此數內、織絲女三人、宮內省十人、卿一人、大輔一人、少輔一人、大丞一人、少丞二人、大錄一人、少錄三人、大膳職十七人、屬一人、膳部十四人、作器手二人、木工寮一百卅四人、頭一人、助一人、大允一人、少允二人、大屬一人、少屬二人、史生十人、算師四人、大工一人、少工一人、長上十三人、將領十人、工部五十人、飛驒工卅七人、大炊寮五人、炊部、主殿寮三百九十六人、頭一人、助一人、允一人、大屬一人、少屬一人、史生四人、殿部廿人、今良男一百卅一人、今良女二百廿六人、典藥寮五人、乳長上一人、得業生四人、掃部寮廿五人、頭一人、助一人、允一人、大屬一人、少屬一人、史生四人、掃部八人、作手八人、內膳司六十六人、奉膳二人、典膳六人、令史一人、膳部卅人、作器手十七人、造酒司十二人、正一人、佑一人、令史一人、酒部九人、采女司二人、正一人、采部一人、主水司卅三

右造式所起請條、太政官去延暦廿年十二月十三日符云、職事諸王上日不滿、應預王祿、但不直本司、經二季已上、量情可責宜解見任者、案職制律云、以官當徒者、六位以下以一官當徒一年、仍解見任者、今檢此律、六位以下諸王不上卅五日以上、自須官當解任、而官符二季以上乃可解任、此乖法意、加以解官之罪、於事不輕、而無奉勅字、若爲處分者、大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣、宜奉勅、宜改先符經百廿日不直者解却見任、永爲恒例、

弘仁十年十二月廿一日

〔三代實錄 十清和〕貞觀七年二月二日甲寅、從四位上行伊豫守豐前王卒、○中略先是諸王自二世至四世、賜夏冬衣服、不限人數、隨年數符出多少賜之、或至五六百人、是時載籍進官者四百餘人、豐前上疏曰、諸王給服人數不定、徒費帑藏、何無紀極、望請以當時所在爲定數、隨闕補之、不聽輙過、從之、

〔三代實錄 十七清和〕貞觀十二年二月廿日壬寅、公卿奏請減諸王季祿、兼立給祿定額曰、政因時興、機隨物動、王者詳沿革之理、聖人審變通之規、郎知字民之道、不必守株、經國之方、无復膠柱者也、伏見故從四位上豐前王等意見表曰、利國之故、節用爲先、今府帑稍定貢賦少入、當停諸王之祿存救弊之計者、臣等商量上表之旨、頗有可取、但專停之則似疎皇親、全給之則可闕國用、取捨之方、宜勤折中、又王氏蕃昌、萬倍曩日、計其祿賜、所費難支、伏望當時預祿者、四百二十九人爲定員、從生年足者隨闕補之、但自願賜姓屬籍者、不以爲闕、重以去年炎旱、農民失望、聖上撤服御常膳、群下減食封位祿、而至于王祿依舊不倹、求諸通論、政涉蹐駮、事須准之位祿同從減折、然則適時之要、理无二途、濟世之權、事從一揆、謹錄事狀、伏聽天裁、奏可、

〔三代實錄 四十六光孝〕元慶八年六月二日辛卯、無位源朝臣舊鑒、源朝臣是貞、源朝臣國紀、源朝臣諱、○字多源朝臣香泉、源朝臣友貞、從四位下源朝臣備子、無位源朝臣遲子、源朝臣麗子、源朝臣奇子、源朝臣綏子、源朝臣崇子、源朝臣連子、源朝臣禮子、源朝臣綏子、源朝臣最子、源朝臣默子、源朝臣是子、源朝臣並

〔延喜式正親三十九〕凡賜時服王定四百廿九人、待其死闕依次補之、但改姓爲臣之闕、不補其代、隨卽減定額數、

〔延喜式中務十二〕無品親王時服、（內親王亦同）絹五十疋、細布四十七端二丈一尺、（冬加綿二百屯）

右五月十一月廿一日、解文進省、六月十二月五日、省造解文進官、

〔延喜式正親三十九〕凡諸王給春夏時服者、二世王絹六疋、絲十二絇、調布十八端、鍬卅口、四世王以上並如令、正月廿日、錄送省、秋冬准此、（但以綿代絲、以鐵二廷代鍬五口）皆向大藏受之、不得遣人代請、

〔延喜式宮內三十一〕凡給男王春秋時服者、丞錄史生各一人、向正親司勘見參者給之、若不參過百日者、中官返上、（女王不在此限）

〔延喜式正親三十九〕凡諸王有出家停給時服、其女王節祿亦停、

〔續日本紀聖武十六〕天平十七年五月壬午、制、无位皇親給春秋服者、自今以後上日不滿一百四十不在給例、（計上日七十給春夏服、秋冬亦如之）但給乳母王不在此限、又據格、承嫡王者直得王名、不在給服之限、

〔令集解祿二十三〕延曆六年格云、六位諸王、任六位官者依官祿、任七位官者依王祿、自今以後永爲恒例、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應職事諸王上日不滿預王祿事

右被右大臣宣偁、准例諸王給祿不勘上日、而今任官之後計日入祿、上日不足一無預祿、是緣得官還失其祿、事乖弘恕、理須改易、自今以後職事諸王上日不滿、宜給王祿、但不直本司經二季已上、量情可責、宜解見任、

延曆廿年十二月十三日

太政官符

應職事諸王不直本司解却見任事

〔本朝世紀〕承平五年六月七日庚午、此日中務丞錄參著申云、今日可申諸司夏衣服目錄、而大少輔各有障不參、須被定給代官時申件目錄者、當日不可被申之由、被過難之間、上卿著聽座已畢、仍件省官人、遂不口目錄、空以還向、

〔令義解四祿〕凡皇親年十三以上、皆給時服料、春絁二疋、糸二絇、布四端、鍬十口、秋絁二疋、綿二屯、布六端、鐵四廷、（其給乳母王者、謂二世王、其親王者不見令條、可有別式、若皇親任官、及叙五位以上者、不可重給、但季祿與王祿、從多合給也、絁四疋、糸八絇、布十二端、）

〔令集解二十三祿〕古記云、問注、其給乳母王、入親王不、答、不入別治給也、跡云、給乳母王謂孫王也、此不求乳母在亡、但親王文不見、別勅治給耳、若此王等有位者、止從位祿耳、不合累給、穴云、帶官者職祿位祿累給、皇親之料不累給也、餘同、跡云、問、於今那定令叙六位諸王何、答、職祿與皇親累給耳、給乳母王者謂孫王者、但親王者別有治給耳（未可也可格）或云、給乳母王謂孫王、或云職員令親王及子給乳母者、然則親王入此例者非也、

〔延喜式十八式部〕凡皇親時服者、與季祿共給之

〔續日本紀二文武〕大寶元年八月己酉、皇親年滿者不論官不、皆入賜祿之額、

○按ズルニ、年滿トハ十三歲ニ至レルヲ云フ、

〔延喜式三十九正親〕凡諸王年滿十二、每年十二月、京職移宮內省、省以京職移即付司令勘會名薄、訖更送省、明年正月待官符到、始預賜時服之例、

〔延喜式三十一宮內〕凡給諸王時服者、歲滿十二年、每年十二月、京職錄名送省、省付正親司勘會虛實、訖即申省、省錄申官、下符給之、

〔延喜式十一太政官〕凡諸王時服用官符、給外國者、仰本司令進其歷名帳、每有闕補、隨即令注其側、一如式部兵部二省補任帳、

解文

〔延喜式十一太政官〕凡諸司時服者、起十二月盡五月、計上日一百廿以上、及番上八十以上、各給春夏料、中務省錄人物數、六月七日申太政官、（其太政官時服者、當月一日錄送辨官、總造目、四日下符中務、）九日奏聞、廿日官符下大藏、廿二日出給之、其日辨官一人就大藏省行事、（事見中務式、） 其無品親王及乳母時服、同月十日、官符下大藏、十五日出給、秋冬准此、

〔延喜式三十大藏〕凡諸司給春夏時服者、辨官中務並集、其物積畢、省申辨官、辨官仰中務、宣命訖卽唱名、省因班給、若當日不了、待中務移乃給、（秋冬准此、）

〔延喜式十二中務〕凡諸司諸家衣服解文、移送大藏省、

凡諸司權官衣服、別錄與正官共申、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

　諸司請時服解文事

右承前之例、修解送省、而頃來諸司相論云、修解乖令、須改造移、今被右大臣宣、奉勅、時服者別勅之賜也、宜據舊例、令作解文、自今以後永爲恒例、

　　大同四年六月廿二日

〔本朝月令六月〕九日中務省奏給諸司春夏時服文事（見第一卷）

弘仁中務式云、時服神祇官太政官左辨官云々、右雖有定員、待本司解、明知見定、然後給之、其自十二月一日至五月卅日、上日長上百廿以上、番上八十以上、給春夏服、秋冬准此、○（准此下、延喜式有但木工寮修理職飛騨工者十一字、詳見下文、）春以三月、秋以九月爲限、四月十月給之、其計夜者、侍從限卅以上、省丞內舍人五十以上、六衞府官人以下舍人以上、八十已上、○（八十已上四字原脫、據延喜中務式補、）左右兵庫左右馬寮五十以上、自餘不可計夜、其親王及參議以上者、不在給限云々、六月十二月一日、總作解文、十日申太政官、（事見儀式、）貞觀中務式云、時服、神祇官云々、右云々、六月十二月一日總造解文、十日（今案七日）申太故官、

ハ、敍品スレバ、給スルコトヲ停メ、諸王ハ、其身任官シ、及ビ五位以上ニ敍スレバ累給セズシテ、季祿ト王祿、卽チ時服トヲ比較シテ、其中ノ多キニ由リテ給ス、但シ其任官セル人、上日滿タズシテ季祿ヲ受クルコト能ハザレバ王祿ヲ給ス、中世ニ至リテハ、時服ヲ賜フ王ヲ四百二十九人ト定メタリ、而シテ女王ノ祿ハ白馬節會、新嘗會ノ翌日ニ賜フ、事ハ女王祿篇ニ詳ナリ、

諸司ノ時服ハ長上番上ヲ分チ、上日ヲ計ヘテ給シ、侍從、次侍從等ハ更ニ夜ヲモ計フルナリ、而シテ參議以上ハ給セザル例ナレドモ、古ハ大臣ニモ給セシコトアリ、又諸司ノ長官以下ニ偏ク給フニハアラズシテ、賜フベキ官銜ト其人トヲ擇テ賜フナリ、又妃、夫人、嬪、及ビ宮人ニモ、其等ニ從ヒテ時服ヲ賜フ、

〔延喜式十一太政官〕凡諸司春夏祿及皇親時服者、中務式部兵部等省錄人物數、二月十日、辨官三省申太政官、〇中略廿二日出給、

〔類聚三代格六〕太政官符

諸司時服事

右檢承前例、自十二月至五月爲夏時服、自六月至十一月爲冬時服、長上番上、並上日百廿已上、諸衛番上八十日已上、侍從次侍從夜卅已上、彼及〇彼恐衍省丞內舍人夜五十已上、共給時服、其初任者不計上日月〇月恐並誤預給例、今被右大臣宣偁、奉勅、長上幷諸衛番上計日數既同季祿、但文官番上猶准長上、計百廿日、無所據准、宜改此例一同諸衛、其初任者起自任日至于限月、計其上日、長上日不滿三分之二、番上不滿二分之一、不在給限、又十二月六月上旬新任者、雖時服文未奏、而既在限外、亦宜莫給初任時服者、省宜承知依宣行之、自今以後永爲恒例、

大同四年正月十五日

正六位上平朝臣親子侍従内侍　上日六十三　夜五十七　上等
従五位上藤原朝臣義子小大輔命婦　上日百七　夜十三　上等
従五位下藤原朝臣善子宮内命婦　上日无　夜无

二番上
正五位下藤原朝臣經子宰相御乳母　上日廿四　夜廿四　上等
従五位上藤原親子式部御乳母　上日无　夜无　上等

一番下
従五位上藤原朝臣孝子少將命婦　上日百六　夜百六　上等

二番下
正六位上紀朝臣忠子式部　上日无　夜无

右從ニ去六月一迄ニ于十一月一、上日并夜如ㇾ件、
永承二年十一月五日　女史従五位上安部朝臣長子
今案等第法　夏上等百廿日四疋　中等八十日三疋　下等卌日二疋　冬上等六疋　中等四疋　下等三疋或書云、御乳母并三位各五疋、　博士命婦　得選五位三疋、六位二疋、
女史謂ㇾ之博士命婦、

時服

時服ハ、別勅ニ出ヅルコトニテ、中務省ニテ掌リ、絁、布、鍬、鐵等ヲ、夏冬ノ二時ニ賜フナリ、
親王諸王ノ時服ハ、無品ノ親王、内親王、及ビ諸王ノ年十三以上ノ者ニ給ス、但シ親王、内親王

等第祿

〔寬平御遺誡〕諸國諸家等所申、季祿大粮衣服月料等、或入官奏、或就內給、申不勤正稅等、縱令勘申國中帳遺、或違年帳、雖爲實今須不勤者一切禁斷、正稅者隨狀處分、

○

〔西宮記 七月〕一日、有官政、此日上官著官結政、

二省○式部兵部進補任帳、外記幷藏人所給出納等第、承和例、夏等第、自正月一日至正月三十日、上日百六十日給絹二十疋、百三十日以上十疋、

〔侍中群要 六〕月奏

月奏、藏人依巡奏之、或依﨟次、或依簡次第、件事一﨟所定也、○中略六月十二月加等第文奏聞、奏聞後下藏司、令催絹、分給男女房、但近代男房料以返抄充行、女房料以返抄、雖注成渡、藏人以返抄成副所牒、共其國令催、出納小舍人等第文下穀倉院、抑女房等第文、女史所進也、注上日、不付等第、近代殿下令定等第給、雖無下等、至于女房有下等給、須皆有例歟、諸陣所々月奏、有訛謬失錯、能々可糺問之、

等第月夏六月上等五疋、中等三疋、下等二疋、冬十二月上等六疋、中等四疋、下等三疋、男無下等云々、但藏人所下等三疋三丈、

殿上藏人所內侍所等、上日等第也、相並月奏奏下、侍臣下內藏寮、出納小舍人下穀倉院、

〔朝野群載 五朝儀〕內侍所

勘申殿上女房上日夜事

一番上

正四位下藤原朝臣芳子少將典侍　上日六十三　夜无　上等

從五位上源朝臣繁子源典侍　上日卌七　夜卌七

從五位下藤原朝臣穎子宰相典侍　上日无　夜无

從四位下源朝臣義子小馬掌侍　上日七十九　夜六十一　中等

正五位下藤原朝臣業子小將掌侍　上日七十九　夜六十七　中等

雜載

凡參國忌五位已上待會事訖乃歸却、若不然者同不參例、其六位已下闕職掌者、奪季祿布二端、○中略

凡可參藥師寺最勝會、興福寺國忌、并維摩會、王氏藤原氏、若不參者、五位已上不預新嘗會節、六位已下官奪季祿、○中略

凡應參判奉試文之庭諸儒、无故不參、五位已上不預正月七日若新嘗會節、六位以下奪季祿、○中略

凡諸司幷畿內司不進考文者、五位以上不預節會、六位以下拘留季祿、

凡考問之日有不參司、其五位已上不預節會、六位已下奪季祿、○下略

〔延喜式六齋院〕凡院裏官舍木工寮修理之日、院司臨監、若不滿十年令致破損者、司官五位已上奪位祿、六位已下奪季祿、

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條　善相公清行

一請平均充給百官季祿事

右謹案式條、二月廿二日、八月廿二日、於大藏省可給百官春夏秋冬季祿、而比年依官庫之乏、物不得遍賜、由是公卿及出納諸司每年充給、自餘庶官則五六年內纔給一季料、伏案事意、上下分階、故祿之多少各異、閑忙殊務、故物之精麤不同、至于頒賜、宜無差別、豈可俱勤王事、別置偏照之官、同列周行、或比裸國之俗乎、伏望若可給季祿者、先計物多少、公卿百官一日遍給、一如式文、若官庫無物者、同亦不賜、無有偏頗、如此則鳲鳩在桑、均哺養於七子、單醪投流、期酣醉於三軍、○中略

延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

〔類聚三代格五〕太政官符

應停攝津職爲國司事

右被右大臣宣偁、奉勅、難波大宮既停、宜改職名爲國、其二季祿及月料、並從停止、

延曆十二年三月九日

也、問、本司考思後、未申官以前發者若爲、答、一種无別也、或云、問、給祿之官兵衛等何、答亦同、問、公廨給徵哉、答、科斷未了停給、但給了後犯罪不徵耳、事力等准此耳、已上未明、○在跡記背 古記云、問、公罪下中奪秋冬之祿、未知下中下下若爲、答、此條大例稱不合解官、然則公罪中下以下、不合解官者、猶徵二時之祿、合解官徵一年之祿耳、

〔令義解四祿〕凡奪祿者、徵半年、限六十日內輸畢、徵一年、限百廿日內輸畢、謂並從徵日始計、卽與徵贓備同也、若限內遇恩及別勅復任、謂限內復任本官者、其任他司亦同、若限外復任者、猶須徵之也、者並免徵、卽應給者、從復任日為始計、謂既云從復任日為始計、卽知不問初任之例、凡徵祿者、雖正祿見在、但會恩降者可免、卽與六贓稍異、

〔令集解二十三祿〕或云、限六十日百廿日者、式兵部勘定訖之、待其報為限耳、問、徵半年者、限六十日輸了、未知假令春祿受了、至給秋祿之時、日不滿而不得其祿、此人考在私罪下上公罪下中、可徵半年祿者、不得私祿之故不徵哉、為當徵彼所得春祿哉、答師云、不徵耳、可案在穴記、

〔令義解四考課〕凡官人有犯、私罪下中、公罪下下、並解見任、○義解略 卽依法合除免官當者、○義解略 不在考按之限、並奪當年祿、謂當年者、自春至冬、卽奪事發年祿、不可追前年祿、假如正月事發者、不徵去年祿、卽停將來祿、若秋祿既給後事發者、春秋之祿並皆徵還之類也、本犯不至除解、而特除解者不徵、其考解者幷年聽敍、

〔延喜式十八式部〕凡元正之日、若有不朝者、五位以上莫預三節、七十以上者不在此限、六位以下奪春夏祿、若六位以下有故者、不在此例、但宮內、主殿、典藥、內膳、造酒、釆女、主水等省寮司莫責不參、待醫東宮學士亦同、○中略

凡正月十七日、五月五日、兩度節不參、五位已上待兵部移無預新嘗會、六位已下官人奪季祿、○中略

凡被召大歌所之輩、起自十月廿一日至于正月十六日、一向直所、若无故不上者、五位已上不預節會、六位已下奪季祿、散位雜色等責以違勅、

凡五位已上闕正月御齋會職掌、每度奪位祿絹一疋、若絹盡以布准奪、其六位已下每度奪季祿布二端、○中略

奪季祿

得預宣傳、由茲准量、所務是重、而准位猶卑、祿賜欠少、伏望昇進爵級、品秩相當、臣等商量、所定如前、謹錄事狀伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、聞、

大同二年十二月十五日

〔令義解祿四〕凡應給祿之官、若有負犯、（謂有犯罪也、）應除免官當、被推劾科斷未畢、其祿停給、待斷訖按定、然後給之、（謂若應當免者、依考課令奪當年祿、不應當免者、仍即給之、）其私罪下上、公罪下中、奪半年之祿、

〔令集解祿二十三〕釋云、謂准犯應除免官當之徒、斷定日不至除免官當、故云按定然後給之、若見應除免官當者、依考課令奪當年祿耳、但未按考之前、有私罪下上、公罪下中者可給祿、考按之後可退奪、何者前令有初條注、雖滿限日、有中下狀不在給例、又文此令既除故也、跡云、然後給之、謂無罪者給耳、問、本司預量考第可奪祿者、不載祿文否、答載申合給、但當省考之時、按定更合徵耳、兵衛合奪祿者、與職事同、朱云、應給祿官、謂別勅才伎長上（後反了）幷兵衛亦同也、考課令云、凡內外官人准考應解官者、卽不合蓋事待符報、卽義解云、待報之間、不可追事力職田、依此案後說是也、凡於國司亦准此條可除免官當者、職田事力停給也、不待符報、但所給追不徵也、（未明）後反云、職田事力待符報、解官日停給者、穴云、非應除免官當者、給如常法、至考時應徵者乃徵耳、大夫云同、私案本司考訖以後、省未按以前犯罪斷訖、准狀合解及降貶者附按、然則奪當年之季祿也、後年有犯者、乃徵後年耳、或云、問、才伎長上、及兵衛等同職事官哉、答師云、才伎長上同職事、其考同長上故也、但兵衛者不同此例、何者番上人故也、或云、於官當以上兵衛事一同、但於考解別耳、何者番上人无考解理之故、私思順之、又國司可除免官當之人、公廨稻者准祿法奉了、未知職田事力等何、答考解者待符報之間、可除免官當之人、覆斷訖後、未下官符之前、不可取職田事力、但職田依田令交替前殖者與先人、若交替後者入後人耳、師云、（在穴記）古記云、按考之後、若有下狀、謂省按考訖、未申官間、事發者卽附校徵、已給訖前祿也、考文申官訖發者、更追申附按、停後應給之祿也、若依日不滿、而不可給祿者、還徵前受之祿、

靈龜元年二月丙辰、制、尙侍從四位者、賜祿准典藏焉、

○按ズルニ、祿令ニ依ルニ、尙侍ノ給祿ハ從五位ニ準ジ、典藏ハ從四位ニ準ゼシヲ、是ニ至リ、從四位以上ノ尙侍ニ限リ、從四位ニ準ズルナリ、

〔續日本紀九聖武〕神龜三年二月庚申、制、內命婦身帶五位、任六位以下官者、自今以後給正六位官祿、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜四年三月庚辰、勅、宮人職事季祿者、高官卑位依官、高位卑官依位、但散事五位已上者、給正六位官祿、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年九月乙丑、勅、檢天平寶字四年格偁、尙侍、尙藏、職掌既重、宜異諸人全賜封戶者、然則官位祿賜、理合同等、宜尙侍准尙藏、典侍准典藏、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜十年十二月己未、勅、內侍司多置職員、給祿之品、懸劣比司、自今以後宜准藏司、○又見令集解、

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

擬定位階事

內侍司

尙侍二人

右件、祿令准從五位、今准從三位官、

典侍四人

右件、祿令准從六位、今准從四位官、

掌侍四人

右件、祿令准從七位、今准從五位官、

右謹撿令條、尙侍者供奉常侍奏請宣傳、典侍者若无尙侍代掌宣傳、掌侍者雖不得奏請、而臨時處分

定、請官裁者、官判依請者、謹依符旨、行亦久矣、而依太政官去延暦十二年八月十四日符旨、亦同禁斷資養之徒、因之亦憂、府司商量、不可不申、仍請官裁者、符旨灼然、所禁有限、而共從禁斷、府官所失、宜依舊聽之、

以前右大臣宣、奉勅如件、

大同四年正月廿六日（○又見政事要略二十七）

後宮季祿

〔令義解 祿四〕凡嬪以上、並依品位給封祿、（謂欲顯不減中、故云依品位、其封祿是重優、令准男、賓人位田灼然不減、）其春夏給號祿者、妃絁廿疋、糸卌絇、布六十端、夫人絁十八疋、糸卅六絇、布五十四端、嬪絁十二疋、糸廿四絇、布卅六端、（若帶官者累給、秋冬亦如之、以綿代糸、）

〔令集解 祿二十三〕釋云、號祿嬪夫人妃是號也、依號給祿、（○中略）跡云、嬪以上亦不合累王分祿、朱云、若帶官者累給、謂雖帶三四官、猶累給也、此殊優諸色故也、抑可求、（後又云、一官分累給也、）穴云、帶官累給者、號祿與官祿累給也、但帶數官者多職祿與號祿給二色祿耳、每官累併不可給也、

女官季祿　婦女季祿

〔令義解 祿四〕凡宮人給祿者、尚藏准正三位、尚膳、尚縫准正四位、典藏准從四位、尚侍、典膳、典縫准從五位、尚酒准正六位、尚書、尚藥、尚殿、典侍准從六位、尚兵、尚闈准正七位、尚掃、尚水、掌藏、掌侍准從七位、掌膳、掌縫准正八位、典書、典藥、典兵、典闈、典殿、典掃、典水、典酒准從八位、自餘散事、（謂氏女、女嬬之類也、）有位准少初位、無位減布壹端、（給徵之法並准男、）

〔令集解 祿二十三〕古記云、問、宮人職員令、六位以下稱宮人、五位以上稱命婦、此條宮人若爲分別、答、此條无別、五位以上亦稱宮人耳、朱云、宮人給祿事、不依本位也、猶依官給耳、

〔延喜式 三十大藏〕凡女官春秋二季祿布之內、每季百五十端、以信濃布充內侍司、

〔續日本紀 五元明〕和銅四年十月甲子、勅依品位始定祿法、（○中略）女亦准此、

〔續日本紀 六元明〕和銅七年八月乙丑、制、散事五位應加賜祿、自今以後准職事正六位焉、

主典三員　元從八位官今定從七位下官

右彼使奏狀偁、謹檢案內、太政官去延暦十七年七月廿日下式部省符偁、被大納言正三位神王宣偁、奉勅、使人等、職是要重、宜依件官位永賜季祿者、○中略使等伏請共增位階、依件被定、謹聽天裁者、右大臣宣、奉勅依請、

天安元年十一月十日

按察使季祿

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

按察使　今准正五位階、祿絁五疋、綿五屯、布十二端、鍬廿口、

記事　今准正七位階、祿絁二疋、綿二屯、布四端、鍬十五口、

右國郡官人、漁獵黎元、蠹害政法、故置件司、糺彈非違、肅清奸詐、既定官位、宜令有祿料、其按察請准正五位官、記事准正七位官、給祿、謹量議如前、伏聽勅裁、謹以申聞謹奏、

養老五年六月十日

奉勅、朕之股肱、民之父母、獨在按察、不可同等、宜更加祿一倍、仍隨風土所出、通融相折、餘依奏、自今以後永爲恒式、

〔延喜式二十六主稅〕凡按察使及記事、季祿衣服、廝丁衣服、以陸奥國正稅交易充之、遙授之人不在給限、

大宰府季祿
國司季祿

〔延喜式十八式部〕凡大宰及對馬官人季祿者、於大宰府給之、其大唐通事祿准大初位官、

〔續日本紀十一聖武〕天平四年五月乙丑、薩摩國司停止季祿、衣服乏少、並依請給之、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

一聽運位祿季祿料米事

右得大宰府解偁、謹檢太政官去神護景雲二年七月廿八日符偁、得府解偁、五位國司及帶諸○諸恐衍國諸司官人等款云、所賜位祿并季祿料春米、上京欲資親族者、府檢解狀不可不申、仍前例不便、更加准

非平穩、守常莫改、何以勸人、望請自今以後、長上祿料、勞重處多、劾輕居少、官議商量具如前件、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

天平勝寶九年八月八日

奉勅依奏

兵衞季祿
授刀舍人季祿

〔令義解四祿〕凡兵衞六月內、上日夜各八十以上者給祿、有位准大初位、無位准少初位、授刀舍人亦准此

〔令集解二十三祿〕朱云、日夜相須給耳、又得考日所亦同也、反未明、計月者始八月計耳、或云、問、日夜各八十以上者、考所亦習此哉、答、然也、未明、在跡記背古記云、六月內、上日夜各一百以上者、分番若爲得百以上也、答、月別節日及會集等日須必參上、以此准量云耳、除此等日以外亦仕滿耳、問、夜乘日不足、日乘夜不足、通計得不、答不合、

〔令集解二十三祿〕釋云、天平寶字三年格云、授刀舍人兵衞等、有位鍫十口今減二口、無位五口今減一口、

坊令季祿

〔類聚三代格五〕太政官符

應以坊令准初位官事

右謹案令條、左右京職每條置令一人、督察所部、惟人是憑、而任居要籍、秩无微俸、至于除補競事辭遁、伏望准少初位下官給祿、優恤其身、令勤職事、臣等商量如前、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、聞、

延曆十七年四月五日

勘解由使季祿

〔類聚三代格五〕太政官符

應增勘解由使官人位階事

長官一員　元從五位官今定從四位下官

次官二員　元正六位官今定從五位下官

判官三員　元正七位官今定從六位下官

可准少判官之祿、但今行事與大主典之同位以下、准大主典之祿也、此是法主命作者本意如然也、

〔續日本紀元正八〕養老三年八月己丑、有司處分、別勅才伎長上者、任職事員、〇員原作賓、今據一本改、與初任同、

〔延喜式式部十八〕凡令稱初任者、是无祿任有祿、〇中略　但別勅才伎長上諸司者、任職事官同、馬料亦准此、

〔延喜式式部十八〕凡准令以別勅才伎長上諸司者、其位主典以上准少判官、以下准大主典、與主典見階相當以下准大主典、以上准少判官、其木工算師准二寮〇主計、主税、算師、鉦鼓師准雅樂師、諸司雜色長上、並准少初位官、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官謹奏

諸司長上祿法宜差事

内舍人　大神宮司　神祇宮主　造金銀銅長上

造玉長上　吹角師　鑄鏤師　木工長上工

右依令

諸縣舞師　蘆羅舞師

右准雅樂諸師從八位官

木畫長上　造伎樂面長上　截押金薄長上

炙造丹胡粉長上　金畫長上　造鏤形師

右准畫師大初位官

造墨長上　造紙長上　大藏作革長上　典藥取乳長上

内膳造餅長上　諸司雜色長上

右准染師少初位官

以前諸司長上、勞逸不同、春秋祿料亦宜差別、而式部曹司行來舊例、不以輕重容以一規、優劣渾淆、理

取神宮司、常陸國鹿島神宮司、越前國氣比神宮司、並准從八位官、(並以封戶物充之)能登國氣多神宮司准少初位官、(以神封給之)

〔延喜式(四伊勢大神宮)〕凡大神宮司二員、大宮司一員正六位上官、少宮司一員正七位上官、其季祿以神稅給之、

齋宮寮女孺季祿

〔延喜式(十八式部)〕凡大神宮司、及齋宮官人季祿者、便以伊勢國神稅給之、

〔延喜式(十二中務)〕凡(○中略)其齋宮寮女孺等季祿者、准時沽價以伊勢國正稅給之、

史生季祿

〔續日本紀(七元正)〕養老元年三月乙丑、制、令外諸司史生等一季賜祿、降當司主典祿一等、是當少初位官祿、自非才伎別勅、一同此例也、

修理職季祿

〔類聚三代格(五)〕太政官符

定修理職官位事

右太政官去延暦十五年七月廿四日下式部省符偁、造宮職官位宜准中宮職、但大屬特爲七位官、其馬料者少屬已上人別給之、又弘仁九年七月十九日符偁、修理職官位馬料季祿等准廢造宮職者、右大臣宣、奉勅件職官位宜仍舊貫、

寬平三年八月三日

內舍人季祿
別勅才伎長上季祿

〔令義解(四祿)〕凡內舍人及以別勅才伎長上諸司者、皆准當司判官以下祿、(其位主典以上者、准少判官以外並准大主典、)(謂假令中務大錄正七位官、少錄正八位官、若內舍人正八位者、准省少丞、即從八位以下、及無位者、准省大錄之類也、)

〔令集解(二十三祿)〕釋云、別勅長上倡優之類、才伎長上雜藝之類、(○中略)古記云、問以才伎長上者有限以不、答官員令无文、皆入此限也、或云、別勅才伎二物、(在跡記背○中略)釋云、中務少錄正八位官、大錄正七位官也、然則內舍人正八位以上者准省少丞、從八位以下人无位者准省大錄耳、或說與大主典同位以下准大主典之祿者非也、古記云、問注其位主典以上者准少判官若爲、答依文與少主典同位者、

皇親季祿

〔延喜式十八 式部〕凡親王知太政官事者、其季祿准右大臣、預議政者、一品二品准大納言、三品四品准中納言、○中略

凡六位諸王任職事者、王祿官祿從一高給之、

〔延喜式三十 正親〕凡給季祿男女王、同世之中有同名者、速令申換載帳進之、但新名下注本名、

〔續日本紀三 文武〕慶雲三年二月辛巳、知太政官事二品穗積親王季祿、准右大臣給之、

〔續日本紀二十二 淳仁〕天平寶字三年六月丙辰、參議從三位氷上眞人鹽燒奏、臣見三世王已下給春秋祿者、是矜王親而令計上日、不異臣姓、伏乞依令優給、勿求上日、

神祇官人季祿
神官季祿

〔續日本紀十 聖武〕天平元年四月癸亥、勅每年割取伊勢神調絁三百疋、賜任神祇官中臣朝臣等、

〔續日本紀二十九 稱德〕神護景雲二年四月辛丑、始賜伊勢大神宮禰義季祿、其官位准從七位、度會宮禰義准正八位、

〔類聚國史十九 神祇〕延暦十七年正月乙巳、始以神祇官神封物、賜伊勢大神宮司季祿、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應停止官人品官等季祿依自解文給諸國神稅事

右得神祇官解偁、撿案內、承前之例、官人及諸宮主等季祿、以神稅交易輕物勘納本官、依太政官符、與諸司共充給、而頃年各修自解申官、競賜諸國神稅、至于勘會彼帳、既致物煩、望請被從停止、將絕猥濫、但事不獲已、有可給者、依官解然充給、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅依請、

貞觀十七年二月一日

〔延喜式三 臨時祭〕凡官人季祿馬料要劇、幷供奉神事官人裝束、宮主神琴師龜卜長上季祿馬料月粮、及卜部御巫等衣服者、以神稅充之、但宮主月粮、以官田給之、○中略

凡諸神宮司禰宜季祿者、伊勢大神宮禰宜准從七位官、度會宮禰宜准從八位官、並以神郡神稅給之、下總國香

後反了 但高官初任者、依初任條給耳、後反了、凡縱无任主典以上、人不可云初任官者、私同也、若一人帶數官、毎司上日不足者祿、不得一耳、彼此司上日不通計也、與考日殊也、後反了

〔續日本紀七元正〕養老元年二月丙申、制曰、○中略依令一人帶數官者、祿從多處給、雖高官无上日、若滿卑官上日者、祿從多處、

兼外官季祿

〔延喜式十八式部〕凡一人帶數官、若高官上日不足、而卑官上日滿限者、祿從多給、准此馬料 但公卿兼諸司者、以太政官上日爲定、太政官辨官、及中務、式部、民部、主計、主税等官人兼他司者、依本官見任上日給之、

〔延喜式十八式部〕凡内官兼外官者、位祿季祿、並給兼國、

〔政事要略二十七年中行事〕十五日○十一月奏給位祿文事

應勘會公文參議遙授兼國公廨位祿季祿事、○中略

永祚二年二月廿二日　左大史史忠信奉

應准參議申請例、左右近衞中少將遙授公廨並位祿季祿、永以返抄、勘合公文事、○中略

永祚二年二月二十三日　右少辨史肥田宿禰維延奉

應依官符、以各請文、勘會公文、紀傳明經明法算四道博士等、兼國公廨位祿季祿事、○中略

正暦四年十月七日　左少史安倍茂忠奉

權任季祿

〔續日本後紀十仁明〕承和八年十月己巳、制、延暦廿三年格偁、權任之人、不異正任、年分全給、理合一同、又弘仁十一年格偁、令云、諸祿並依日給、京官據詔書出日、外官據籤符到給之者、今責之所行、理無偏頗、偶給全給、事乖通猷、宜不論權正、據籤符到給之、其間公廨遍共給之、

○按ズルニ、文ニ令トアルハ、享祿本類聚三代格卷六ニ載セタル、弘仁十年十二月二十五日ノ太政官符ニ、案唐永徽祿令云、諸祿並依日給、京官據詔書出日云々トアレバ、唐ノ永徽令ナリト知ルベシ、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

初任官人幷散事季祿事

右依令自八月至七月、上日一百廿以上者給春夏祿、秋冬亦如之、此則六月之內上日三分之二以上、乃給季祿、而承前所行、初任之官、不限日之多少、皆依給祿之例、今被右大臣宣偁、奉勅、自今以後、改張此例、起自任日至于限月、上日不滿三分之二者、不在給例、又二月八月上旬新任者、雖祿文未奏、而既在限外、宜入後季計日給之、其給馬料、亦准此例、

大同三年十二月廿六日

奪情復任季祿

〔延喜式十八式部〕凡令稱初任者、是無祿任有祿、其有祿遷有祿者、不入初任之例、但別勅才伎長上諸司者、任職事官與初任同、馬料亦准此其在外官人、遷任京官會給祿者、聽入給例、謂正月七日卅日以前、上日隨身者、

〔延喜式十八式部〕凡奪情復任之輩、雖上日滿祿限、而任在奏祿文日之後、不得更給、

〔令集解二十三祿〕或釋云、其遭喪解官之徒、周期之內、復遷任者、不在初任之例、通計前任日給耳、何者爲未付散位考帳故、餘同上釋、但無和銅三年以下入初任之例耳、

從外任遷京官季祿

〔續日本紀七元正〕養老元年十二月壬申、太政官處分、始授五位、及從外任遷京官者、會賜祿日、仍入賜例、

〔延喜式十八式部〕凡令稱初任者、是无祿任有祿、中略其在外官人遷任京官、會給祿者、聽入給例、謂正月七日卅日以前、上日隨身者、

帶數官季祿

〔令義解四祿〕凡行守者、並依行守處給、謂假令帶六位人、行七位官者、給七位祿、帶七位人、守六位官者、給六位祿之類也、若一人帶數官者、祿從多處給、謂若高官之日少、而卑官之日滿日、仍從高給也、

〔令集解二十三祿〕穴云、帶數官者、祿從多處給、若上官專无日者、依下官祿、其上日爲不上百廿日、故解官耳、但上官與下官通計滿百廿日者、依上官給、爲考累從一高官同義也、若无高官日者、從卑官祿耳、朱云、一人帶數官者、祿從多處給、謂高官日滿時耳、後了反若卑官日滿、高官日不滿者、依卑官給也、

隨身即給、不遣者不給、又才伎長上任官者、給初任祿、〇中略古記云、雖不滿日皆給初任之祿、謂雖无一日猶給耳、文初任之祿故、一云无一日者不合給也、文不云无日、云不滿日故、問仕可滿日、无故不上不滿日若爲、答猶給耳、一云、不合、問、竹志國人便任二島〇壹岐對馬目以上、不合、向京東國人召任京官、量往來程并不得起上、若爲處分、答亦給耳、一云不合也、云爲未盡、但時行事亦不定也、問、卑官之日既滿祿限、轉任高官上日亦在若爲、答、今依所至給、從高遷卑亦同、但今至處日无者、依前任日給耳、問、兵衞授刀舍人給初任之祿以不、答不合、爲不長上故、問、國史生郡司軍團入初任、不、答、國史生入初任之例、國郡司軍團通計日可給、并爲長上故、問、國司轉任京官通計上日、未知給祿日不未若爲、答、依格身遣給祿之日即給、不遣者更不給者也、一云、祿令无文者、皆合入初任之例、不合通計无祿之日也、跡云、國史生兵衞本非官人色、故令云初任、朱云、此記於兵衞未明、凡與令釋云異耳、又依格才藝長上名初任、但內舍人不合初任、〇中略或云、初任謂无散位、无遷大學通計給日不足不給、但轉主典已上給初任祿、問、解官之人有散位日何、答、給祿无散位日、通計前後日、已上未明、在跡記背宍云、不滿日謂上日有一日以上、是、若都无日者不給、爲不被云日不滿故也、令釋云、此是計任後日、理然不足耳、若應滿不上者、不在給例者爲非也、宜依令文看也、或云、師云、兵衞任職事爲初任、別勅長上、才伎長上、任職事不爲初任、故格別爲文、但祿文任才伎長上兵衞者、可入初任之例耳、問、七月之內以理解、去任之人、已滿日可得祿、新任之人、亦可得初任祿、未知兩人共給哉、答師云、新任之人、可與初任之祿也、去任之人、不可入給例、何者祿計所仕之日給將來祿、然則假令七月去任之人、不可預秋冬之祿、但被載祿文、被申之人祿文與其分祿耳、又問、依上說服解之人復任者、不可云初任、未知誰時得初任之名、私答、終服之後、上寮得番上一日者、任職之後稱初任給祿、若无日者雖得初任之名不給祿、爲文云不滿日无日故、其服中復任者、既爲通計前日與考、不可云初任、但隔考之後、復任者未定、在欠記

右撿案內、太政官去延暦十九年十二月下式部省符偁、得省解偁、臺移偁、給春秋祿日、不參五位及雜任六位已下既違勅例、事須准罪附考勘科者、今依移狀將科違勅、所犯事輕贖銅還重、加以六位已下應至解官者、宜待後處分者、右大臣宣、奉勅、若科違勅實復過重、宜施疎網以存懲肅、其犯違法令宜處以恒科、若事違彈例、卽科違式罪、

延暦廿一年十月廿二日

○按ズルニ、季祿ヲ賜フ時、彈正ノ非違ヲ檢察スル事ハ、尙ホ位祿篇ニ在リ、參看スベシ、

割公廨充季祿

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年八月庚辰、太政官奏曰、伏奉去七月二十七日勅、如聞京官祿薄、不免飢寒之苦、國司利厚、自有衣食之饒、因玆庶僚咸望外任、多士曾無廉恥、朕君臨區宇、志在平分、思欲割諸國之公廨、加在京之俸祿、卿等宜詳議奏聞者、臣聞三代弛張、百王沿革、隨時損益、事在利人、伏惟陛下仁霑品物、德茂群生、愍庶僚之飢寒、均內外之豐儉、損彼有餘、補此不足、凡在動植、莫不霑潤、臣等承奉聖旨、喜百恒情、臣等商量、每國割取公廨四分之一、以益在京俸祿、奏可、

初任季祿

〔令義解四祿〕凡初任官者、雖不滿日、皆給初任之祿、謂初任者、無祿人入有祿也、不滿日者、計任後日、不足給限、其兵衞者雖是有祿、既非職事、若初任官者亦入給例、卽遭喪解官、奪情從職者、通計前日給之、不同初任之例、

〔令集解二十三祿〕釋云、初任謂无祿入有祿也、和銅三年二月四日、太政官處分偁、初任者无祿人遷任有祿者、其有祿人轉任他司者、不入初任之例、案以理解任之徒復任者依此處分、皆入初任之例耳、其初任者雖應滿日猶給初任祿耳、何者任應日滿、而不上一二日者責重、不應滿而不上百日責輕、此其止姦之道不等故、或說此計任後日、理然不足耳、若應滿不上者不在給例、何者法令止人姦濫故者、非今式部所行之例、一人帶數官、若雖高官日不足、而卑官日滿者、其祿從多給初任官者、雖无上日給初任祿也、案兵衞等合入初任官之例、何者祿法既准宮人、又宮人散事、有位准少初位、无減布一端、注云、給徵之法幷准男、卽知男散位亦可有給徵之、格云、國司遷任京官、身遭給祿之日、上日

彈正檢察

〔延喜式大藏 三十〕凡諸司給春夏祿者、辨官式部兵部彈正並集積祿物、舉彈正巡撿、即省申辨官、辨官宣命、訖式部兵部唱名、省因班給、（位祿准此、但不宣命、）若當日不了、具錄殘數移送式部、待報乃給、（秋冬准此）女孺以上給春夏祿者、於正倉院立五丈幄二字、（一字南面懸錢、掃部鋪內侍以下座、一字北面積祿、秋冬准此、）

〔延喜式春宮 四十三〕凡二月廿二日賜季祿、坊官五位并六位以下率監署官人等參大藏省、（若五位有障、具狀移彈正臺、八月亦同、）

〔延喜式中務 十二〕凡女官人自八月至正月計上日一百廿以上者、給春夏祿、（中略）○廿五日（○二月）所司設幄及座、大藏省積祿訖、狀申辨官、官召中務省仰給祿狀、即令縫殿寮計列女官、訖省掌置版位於二幄間東庭北面、輔進就版位宣命、其辭曰、今宣久、常毛給布春夏祿給波久登宣、訖輔還退、（賜男官時服宣命亦准此、）女官降座再拜、（用拍地拜、謂著兩手於地、首不至手、他皆效此、）訖各復座、即中務輔丞錄依次就座、史生就積祿前北面、大藏丞錄史生等以次就座、即中務史生執簿唱之、藏部給之、訖錄進申給訖狀、諸司以次退去、（秋冬准此）

〔續日本紀 二文武〕大寶元年八月丁未、撰令所處分、職事官人賜祿之日、五位已下皆參大藏受其祿、若不然者、彈正糺察焉、

〔類聚三代格 十二〕太政官符

一彈正臺所彈諸司官人事（四箇條內初條）

右得式部省解偁、臺移偁、給春秋祿日、不參五位及雜任六位已下既違勅例、事須斷罪附考勘科者、今依移狀、將科違勅、所犯事輕贖銅還重、加以六位以下應至解官者、宜待後處分者、以前被右大臣宣偁、奉勅如右者、省宜承知立爲恒例、

延曆十九年十二月十九日

太政官符

應彈正臺所彈移諸司官人准犯貶降事

以前外從五位下守大判事物部中原宿禰敏久申偁、二省所論具件如前、然撿令條云、公會之儀、隨事立例、不必一途、何者元日大嘗等會、式部總攝掌之、季祿大祓等儀、數省共相行之、但大同二年、明法曹司答曰、依令式部兵部、各掌文武官名帳、但行立次第、須文武混雜、式兵二省不可各別者、此隨式部所問之旨、只擧彼省所掌之儀、公式令云、文武職事散官朝參行立、各依位次爲序、位同者五位已上即用授位先後、六位已下以齒者、此文既云文武職事散官朝參各依位次、即明元日大嘗等儀不論文武、混雜行列者也、其至如賜祿、省〔〇省上恐脫二字〕俱掌、理須文武分別、不可混雜列立者、被右大臣宣偁、奉勅、宜依敏久所申行之、

弘仁六年十一月十四日

〔延喜式 十九式部〕諸司進祿文幷給〔〇中略〕

廿二日〔〇二月及八月〕平旦、分史生爲六番、預遣省掌於大藏省、召計諸司、令進直丁、運積祿物、掃部寮設省掌以上座於藏下、輔以下引就座、省掌置版位、六番史生分當諸司、計會祿文、大藏錄執名簿、引史生以下藏部以上就版位進之、積祿物訖、大藏錄就辨官版位、申積祿訖、辨令官掌召省、錄稱唯進、辨大夫命曰、祿速令給、錄稱唯、還申輔、俱就列、隨色重行立定、辨大夫進出宣命、五位以上六位以下稱唯再拜舞踏如常儀、初掃部寮設諸司座於祿物下、辨官以下依次就座、訖辨大夫命曰、令給、二省輔稱唯、即命諸番史生云、給之、史生共起稱唯、起自一番、披簿唱之、諸司主典隨唱稱唯進、史生宣示給物色數、藏部承命計授、且申其數、史生各記之、大藏亦如之、諸番給訖、各依次申給訖狀、錄起進申曰、祿給訖、辨官判命之、錄稱唯退、諸司以次退、〔事見儀式〕其後大藏注殘祿數移省、即計會報移、

〔延喜式 十一太政官〕凡諸司春夏祿及皇親時服者、中務式部兵部等省錄人物數、二月十日辨官三省申太政官、〔太政官祿者、當月一日錄送、辨官總遣目、三日下符式部、〕即錄三省所申總目、十五日少納言奏之、廿日官符下大藏、廿二日出給、〔女官祿者、廿五日給之、〕辨大夫宣命、其辭曰、今宣〔波久〕常〔毛〕給〔布〕春夏祿給〔登波久〕宣、〔女官者中務輔宣命〕秋冬准此、〔事見式部式〕

下史生以上西面北上、省掌北面東上、兵部在西相對、彈正史生以上北面西上、臺掌西面南上、文官五位以上、進自彈正東列式部前、北面北上重行、武官五位以上、進自彈正西列兵部前、六位以下各列五位之後彈正以南、立定更進列立、文官五位以上、在馳道東北面西上、式部彈正六位以下列其後、自餘在其次重行、兵部在馳道西相對准此、訖辨大夫進立中庭宣制云、今宣波久、常毛賜布春夏乃祿賜波久止宣、五位已上共稱唯、六位已下亦稱唯拜舞、訖辨官及三省依次就賜祿座、辨大夫命令賜、式兵部輔共稱唯、仰史生云、賜之、史生共起稱唯、起自一番披簿唱之、諸司主典隨即稱唯、史生宣示所賜物色數、藏部受命計授、隨即且申其數、史生各記錄、大藏亦如之、畢各依次申賜畢狀、式兵錄共起、廻自祿物以南當馳道進申、辨云、祿賜畢、各辨命縱錄稱唯、各復座、辨官先退、諸司次退、廿三日、兵部丞錄率史生以下賜武官祿、廿五日、所司設幄及座、大藏省積祿畢狀申辨官、辨官喚中務省仰可賜祿狀、卽令縫殿寮唱計女官、訖省掌置版於二幄間東庭、輔進就版宣制、其詞同男官、訖輔還退、女官除座再拜、用拔地拜、訖復各座、訖中務輔已下史生已上、大藏丞已下史生以上就賜祿座、中務史生執簿唱之、藏部賜之、訖錄進申賜畢狀、諸司以次退出、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

定式部兵部相論給季祿日儀式事

一兵部省解偁、去二月廿二日、於大藏省給春夏祿、于時辨官喚式兵二省宣、早列刀禰、二省承宣相分列立刀禰、而式部召此省勘云、承前被式部○式部下恐有脫字、而今相分列立不當、遂不令列、於理商量、既乖官宣、仍問明法曹司、答曰、撿職員令、式部掌內外文官祿賜名帳、兵部掌內外武官名帳祿賜、然則賜祿之日、須文武別引者、望請依法二省相別、各列刀禰、

一式部省申解偁、案兵部省解偁、明法答曰、式部掌文官祿賜、兵部掌武官祿賜、然則賜祿之日、須文武別引者、賜祿之處、各有所掌、別引之理省無異論、但賜祿宣命之庭、理須文武混雜、何者明法曹司大同二年十二月廿八日問答云、撿職員令、式部兵部各掌文武官名帳、但行立次第、須文武混雜、式部兵部二省不可各別、何者式部總掌禮儀、兵部既無此職、

平明、省掌於門外計列諸司、引就版位、且稱容止、立定其中一人進申、丞命曰進之、諸司倶稱唯傳授、在最下一人總取進之、錄總計其卷數讀申、輔判曰勘之、錄稱唯、丞命曰候之、諸司倶稱唯共退、亦如申送五位以上上日儀、訖令專當錄幷史生總勘造簿、十日平旦、遣錄就左辨官版位、申曰、將申祿文於上、（中務兵部亦如之）三省輔各引丞錄、直度馳道、隨左右辨官引就太政官前版位、六位以下就後版位、立定、大臣命曰召之、五位以上倶稱唯、六位以下亦倶稱唯、五位以上隨色就堂上座、六位以下依次就庇下、立定、式部錄先讀申、兵部次之、中務次之、大臣若有所問、即三輔隨狀辨答、大臣判命之、三輔倶稱唯、次丞錄倶稱唯引還、三輔起就版位、以退出、若於曹司廳、即亦准此儀、訖造解文、十三日進左辨官、

〔延喜式十八式部〕凡諸司春秋季祿解文、注彼交名、

凡内記、監物、主鈴典鑰等四箇局官人季祿馬料、別錄令申、不得混雜管省、

〔類聚符宣抄六〕中納言藤原元方卿宣、中務式部兩省、依官人不具、去八月十日不申諸司、當年秋冬季祿目錄、須任先例令進過狀、然而此般許殊從寛宥、宜除彼兩省之外、自餘諸司請印其季祿符者、

天慶六年九月二日　大外記兼近江權少掾三統宿禰公忠奉

〔儀式九〕二月廿二日賜春夏季祿儀（八月亦准）

廿一日、式兵兩省錄五位以上歷名、移彈正臺、（兼國者不在此限）廿二日、式部省分史生爲四番、（兵部三番）預遣省掌於大藏省、唱計諸司、令進直丁運積祿物、彈正弼以下率史生臺掌、至大藏省正藏院、就西亭座、點撿五位已下、訖式兵兩省丞錄率史生省掌等、至就座、式部丞命錄云、令喚省掌、錄稱唯、命史生云、喚省掌、史生稱唯、喚二聲、省掌稱唯立中庭、丞命云、置版、稱唯趨出、省掌一人擎版置之、兵部亦同、史生分當諸司計會祿文積祿物、畢掃部寮設諸司座於祿物以北、（辨大夫南面、省輔丞錄西面北上、史生北面東上、省掌東面南上、）巡察彈正撿察祿物、訖大藏錄進申積祿畢狀於辨官、式兵兩省省掌豫整列群官、辨大夫喚官掌、稱唯進立、辨命喚式兵兩省、官掌稱唯、退就兩省版喚之、（先式部、後兵部、）錄稱唯進就版、辨命列群官、錄稱唯、還申輔、訖共起就列、（式部輔已

申季祿

本司各具祿人數及祿物色目、二月一日申送於省、省勘會去年祿文、卽造解文、十日錄與式部兵部共就辨官版位申曰、二省申了、中務乃申、其列立依司次、中務省申久、宮人調曰比賣刀禰春夏祿可給事上留申給波牟登申、辨官命候之、錄共稱唯退出、卽隨辨官向太政官申曰、中務省申久、春夏祿可給宮人、合若干人之中、號祿若干所、其位若干人、應給物若干、損益去年人若干、申給登申、大臣判命之、三省共稱唯退出、卽造簿進辨官、

〇下略

〔儀式九〕二月十日申春夏季祿儀八月亦准此

當日平旦、中務式部兵部等省錄依次就版、中務式部左版、兵部右版、式部錄先進立申云、式部省申久、祿可賜事上留申賜止申、次中務錄申云、中務省申久、比女刀禰祿可賜事上留申賜止申、辨命候之、二省錄共稱唯、次兵部錄申云、兵部省申久、祿可賜事上留申賜止申、辨命候之、錄稱唯、相次丞錄各一人、就外記請可申政之狀、卽納言以下率三省輔以下就版、立定大臣宣喚之、五位以上共稱唯、六位以下亦共稱唯、五位以上隨色就座、辨一人起座申云、司司乃申世留政申賜止申、式部錄起讀申云、式部省申久、春夏乃季祿可賜司司乃長上合若干、其位若干云云、可賜分絹若干疋、絲若干絇、冬以綿代之、布若干端、鍬若干口、冬以鐵代之、就中大藏省留可賜絹若干匹、絲以下亦同、國國留可賜絹若干匹、以下亦如之、損益於去年絹若干疋、以下亦如之、申賜止申訖卽居、次兵部錄起申云、兵部省申久、春夏乃季祿可賜司司乃長上色色人等幷若干、其位若干、以下亦同式部、次中務錄申云、中務省申久、春夏乃季祿可賜比女刀禰合若干、就中號祿若干所、其位若干所、散事若干、王等若干、以下亦同式部、大臣若有所問、輔辨答、大臣命、三輔共稱唯、次丞錄共稱唯、自下退出、輔就版拜而出、訖修解文進左辨官、辨官入太政官、太政官錄三省所申總目、十五日少納言奏之、廿日下符大藏省、

〔延喜式十九式部〕諸司進祿文幷給

正月七月下旬、文官各總計當司及所管官人上日、依例勘錄、諸家准此二月八月三日、各令主典申送、其日

〔小野宮年中行事 二月〕十日三省申考選及春夏季祿等目錄事

問、諸祿皆依上日可充給者也、何因季祿一色、計以往日給將來料乎、答、靜案事情、似有所擬待上日滿限、若充給件祿、自二月至八月、可無春夏衣服、仍計以往日者、令致恪勤之誠也、今給將來祿者、令得衣服之便也、爲人有恩、爲公無損而已、

〔唐六典 三戸部〕春夏二季、則春給之、秋冬二季、則秋給之、

有聞者不別給、

〔唐律疏議 十五廐庫〕諸出納官物、給受有違者、計所欠剩坐贓論、○中略 其物未應出給而給者、罪亦如之、

疏議曰、其物未應出給者、依令應給祿者、春秋二時分給、未至給時而給者、亦依前坐贓科罪、若給官物、還充官用、有違者笞四十、其主司知有欠剩而不言者、計所欠剩坐贓論減二等、

〔令義解 四祿〕凡祿春夏二季二月上旬給、以糸一絇代綿一屯、秋冬二季八月上旬給、以鐵二廷代鍬五口、

〔令集解 二十三〕穴云、鐵以十斤爲一廷、但以二廷代五口、不知其由、

〔續日本紀 五元明〕和銅四年十月甲子、勅依品位始定祿法、職事二品二位、各絁三十疋、絲一百絇、錢二千文、王三位絁二十疋、錢一千文、臣三位絁十疋、錢一千文、王四位絁六疋、錢三百文、五位絁四疋、錢二百文、六位七位各絁二疋、錢四十文、八位初位各絁一疋、錢二十文、番上大舍人、帶劒舍人、兵衞、史生、省掌、召使、門部、物部、主帥等、並絲二絇、錢十文、女亦准此、

〔令集解 二十三祿〕釋云、天平寶字三年格云、正八位鍬十五口、今減五口也、

〔延喜式 十八式部〕凡季祿鍬者、八位官十口、

〔延喜式 三十大藏〕凡太政官幷出納諸司季祿布、以信濃布給之、參議帶諸司者、及內記、主税、宮內、修理、勘解由等省寮職使亦同、

〔延喜式 十八式部〕凡諸司官人奉使出外者、季祿馬料運日並給、若有功過者、隨狀與奪、

〔延喜式 十二中務〕凡女官人、自八月至正月、計上日一百廿以上者、給春夏祿、初任上日、不滿三分之二者不在給例、其女王時服不計上日、

等第祿ハ、上日ヲ計ヘ、上中下ノ等第ヲ立テ、祿ヲ給フヲ云フ、

〔令義解四祿〕凡在京文武職事、及大宰壹岐、對馬、皆依官位給祿、（謂、計以仕日給將來祿、然則未給之前、以理去官者、雖滿限日、不在給例也、）自八月至正月、上日一百廿日以上者、給春夏祿、正從一位、絁參拾疋、綿參拾屯、布壹佰端、鍬壹佰肆拾口、正從二位、絁貳拾疋、綿貳拾屯、布陸拾端、鍬壹佰口、正三位、絁拾肆疋、綿拾肆屯、布肆拾貳端、鍬捌拾口、從三位、絁拾貳疋、綿拾貳屯、布參拾陸端、鍬陸拾口、正四位、絁捌疋、綿捌屯、布貳拾貳端、鍬參拾口、從四位、絁柒疋、綿柒屯、布拾捌端、鍬參拾口、正五位、絁伍疋、綿伍屯、布拾貳端、鍬貳拾口、從五位、絁肆疋、綿肆屯、布拾貳端、鍬貳拾口、正六位、絁參疋、綿參屯、布伍端、鍬拾伍口、從六位、絁參疋、綿參屯、布肆端、鍬拾伍口、正七位、絁貳疋、綿貳屯、布肆端、鍬拾伍口、從七位、絁貳疋、綿貳屯、布參端、鍬拾伍口、正八位、絁壹疋、綿壹屯、布參端、鍬拾伍口、從八位、絁壹疋、綿壹屯、布參端、鍬拾口、大初位、絁壹疋、綿壹屯、布貳端、鍬拾口、少初位、絁壹疋、綿壹屯、布貳端、鍬伍口、（宗令降一級、謂書吏以上、通勝家令、假令從七位官、降爲正八位官之類、其少初位官更無所降者、以鍬五口准爲降法、計大少初位祿法、以鍬五口爲差故也、）唯文學不在降限、秋冬亦如之、

〔令集解二十三祿〕釋云、皆依官位給祿、依官位令給耳、假如三品四品、同任大宰帥八省卿、任帥者給三位祿、任卿者給四位祿、或說、三品四品、同准正三位者、此依前令依品位給祿乎、跡云、問官位令云、三四品位、大納言、大宰帥八省卿者、未知此人等任八省卿者、准大納言祿給否、若依行守所猶給、答不問彼此、猶日滿者合給上官祿、若各在同月日者、總此止六十日、故不合給彼此日祿、朱云、記給祿之法、計任日給往前祿耳、依官位給祿、謂爲官位相當色云耳、問大納言以上、亦得此條祿耳歟、先云、然可得者、穴云、依官位給祿謂官位相當色、凡依所過上日、給將來祿也、古記云、問皆依品給祿、未知品祿法若爲、答與位同无別也、或云、請事書云、四品以上祿准三位以上祿例、然此事未審也、○中略穴云、問以八月爲始、未知其由、答不識其由、依文習耳、其考日二百四十日、取此祿限日、故以八月爲考初月也、古記云、問注雖滿限日、若有中下狀、未知若爲、答量其犯狀、至於考時、必須在中下也、

綿等ヲ給スルヲ、元明天皇ノ和銅四年ニ、錢ヲ以テ施絲ニ混ジテ給シタル事アリ、此時和同開珎ノ錢ヲ鑄タレドモ、人ノ通用スルコトヲ喜バザリシカバ、其便ナルコトヲ知ラシメントテ、一時ノ權制ニ出タルナリ、又神祇官ノ官人等、及ビ大神宮ノ神官等ハ、神戸ノ封物ヲ以テ給シ、齋宮寮ノ女孺等ノ季祿ハ、伊勢國ノ正稅ヲ以テ給ス、又季祿ハ在京ノ官人ニハ、大藏省ニテ給シ、大宰壹岐對馬ハ大宰府ニテ給シ、內官ニシテ外官ヲ兼ヌル者ノ季祿ハ衆國ニテ給ス、大藏省ニテ祿ヲ給スルニ就キテハ、二月八月ニ、中務、式部、兵部ヨリ太政官ニ申シ奏聞ヲ經ルナリ、其日賜ヲ受ル者、男子ハ舞踏シ、女子ハ拔地拜ス、而シテ男女日ヲ異ニス、若シ自ラ其場ニ詣ラザレバ罪アリ、其女官ノ祿ヲ賜フ日ニ、號祿ヲモ給フコトニテ、號祿トハ妃、夫人、嬪ニ賜フ所ナリ、是ハ相當ノ位階ナク、其職號ニ依リテ賜フガ故ニ、號祿ト云フ、而シテ妃、夫人、嬪ニシテ官ヲ帶セル者ニハ、更ニ季祿ヲ給スルナリ、又女官ノ季祿ニモ沿革アリテ、元明天皇ノ和銅七年ニ、給祿ニ預ルベキ五位ノ散事ヲ、職事（內侍司等ノ諸司ノ掌以上ヲ職事トシ、其餘ヲ總テ散事トス、）ノ正六位ニ準ジ、聖武天皇ノ神龜三年ニ、五位ノ內命婦（五位以上ノ位ニ居ル者ヲ內命婦ト云フ）ニシテ、六位以下ノ官ニ任ズルトキハ、正六位ノ官ノ祿ヲ給シ、光仁天皇ノ寶龜四年ニ、職事ノ宮人ノ爲メニ、高官卑位ハ官ニ依リ、高位卑官ハ位ニ依ルノ法ヲ立テタリ、季祿ハ原ト長上官ニ賜フ所ナレド、番上ニ給スルモ亦季祿ノ類ナリ、兵衞ノ如キハ番上ナレド、六月間ニ日直夜宿各、八十ニシテ給祿ニ預ル、又季祿ニ預ルベキ人犯罪アルトキハ、其輕重ニ從テ一年半年ノ祿ヲ奪フ、而シテ之ヲ輸納スルニ各、日限アリ、若シ限內ニ赦降ニ遇ヒ、及ビ別勅ヲ以テ復任スルトキハ徵セズ、又元正、大射、端午ノ日ニ參セザル六位以下ノ人モ、亦其祿ヲ奪ハルヽナリ、降リテ醍醐天皇ノ延喜年間ニ及ビテハ、官庫空竭セルニ由リテ、公卿及ビ出納ノ諸司ニハ、每年充給スレドモ、其餘ハ五六年ヲ經テ一季ノ料ヲモ給セザルニ至ル、

雜載

官外任及散位、總奪位祿、六位以下、同沒季祿公廨、無職之人、不預敍用、

承和十年七月九日

〔令義解七公式〕凡料給官物、上抄之日、具載匹丈斛斤兩數、供給之處官司姓名、謂、假令注大藏官司、及辨官、并監物姓名之類、

〔延喜式三十大藏〕凡應出給者、皆隨府到、其出給總目每明日朝進結政所、

〔九曆〕天德三年九月廿一日、以位祿充材木取料事、

季祿 等第祿併入

季祿トハ、文武ノ京官、大宰、壹岐、對馬ノ官人等ニ、長上ノ人ニ限リ、親王、王、臣ヲ擇バズ、官職ノ高卑ニ從ヒテ給フ所ノ四季ノ祿ナリ、考期ハ八月一日ニ始リテ、翌年七月三十日ニ訖レバ、之ヲ二分シ二月ヨリ七月マデヲ春夏ノ分トシ、八月ヨリ正月マデヲ秋冬ノ分トシ、春夏二季ノ分ヲ給スルニハ、前ノ秋冬ノ上日ヲ計ヘ、秋冬二季ノ分ヲ給スルニハ、前ノ春夏ノ上日ヲ計フルコトニテ、其上日並ニ百二十ニ滿タザレバ給セズ、而レドモ季祿ハ將來ノ祿ヲ給フコトナレバ、假ヒ百二十日ノ上日ヲ闕カズトモ、給祿ノ日ノ前ニ解官スルトキハ給セズ、サテ官職ノ高卑ハ、其相當ノ位階ニ依リテ差ト爲ス、故ニ位階ノ高卑ニハ拘ラザルナリ、女官ノ如キ相當ノ位階ナキハ、其官ヲ某位ニ準ジテ給スルナリ、又一人ニシテ數官ヲ帶ビタル者ハ、總テ一ノ高官ニ依リテ給シテ累給セズ、而シテ、諸王ノ季祿ハ時服ト累給ス、又無祿ヨリ初テ有祿ニ入ル者ハ、上日其數ニ滿タズトモ給セシヲ、平城天皇ノ大同三年ニ、上日ヲ計ヘテ給フコトヽ爲レリ、內舍人、及ビ別勅長上、才伎長上ハ、位階ニ從ヒテ、其司ノ判官主典ニ準ゼシガ、孝謙天皇ノ天平寶字九年ニ、勞効ヲ量リテ給スルコトヽ爲レリ、凡テ季祿ハ施

任之日、故生此文、宜計滿百廿日給、故云始計也、依文假雖得散位寮上日、不合、云初任爲復任限內、故又爲免徵前祿、若限外復任者、云給初任之祿耳、爲前祿已後也、凡官人以理去任、有分番日一日者、可云初任官、考解犯罪者、雖有分番之日、依文從復任日計也、（私恩、謂限內復任者、）

〔令義解祿四〕凡應給祿之官、若有負犯、（謂有犯罪也、）應除免官當、被推勘科斷未畢、其祿停給、待斷訖按定然後給之、（謂若應當免者、依考課令奪當年祿、不應當免者、仍即給之、）其私罪下上、公罪下中、奪半年之祿、

〔令集解祿二十三〕釋云、謂准犯應除免官當之徒、斷定日不至除免官當、故云按定然後給之、若見應除免官當者、依考課令奪當年祿耳、但未按考之前有私罪下上、公罪下中者可給祿、考按之後可退奪、何者前令有初條注、雖滿限日、有中下狀不在給例、又文此令既除故也、跡云、然後給之、謂無罪者給耳、問本司預量考第、可奪祿者不截祿文否、答截申合給、但當省考之時按定更合徵耳、兵衞合奪祿者與職事同、

〔延喜式式部十八〕凡闕荷前使之侍從、及次侍從者、侍中務移無預正月七日節、非侍從者奪位祿、亦無預同節、

〔續日本紀九元正〕神龜元年十月乙卯、散位從五位下息長眞人臣足任出雲按察使、時贓貨狼藉、惡其景迹奪位祿焉、

〔類聚三代格五〕太政官符

　應進會赦帳之後放解由事

右被大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使藤原朝臣良房宣偁、奉勅、如聞會去年七月十四日、八月廿七日兩度恩赦、諸國未得解由之輩、或口新司、偏緣洪恩只放解由、至于造會赦帳、令加其名、寄事彼此、拒以不署、此則乖詔書所指、復似隱舊紕、須彼帳進官之後、乃與解由、但後司所勘、事有不平、准不與解由狀加所執、亦前被放許之類、姧遁不署、錄狀言上、其未署之間、五位已上、不論京

人幷子蔭不在此限、

天長二年七月八日

神官位祿

〔延喜式四伊勢大神宮〕大神宮幷豐受宮禰宜帶五位者位祿、同以神稅給之、

後宮位祿
婦女位祿

〔令義解四祿〕凡○中略正四位絁十疋、綿十屯、布五十端、庸布三百六十常、○中略女減半、

凡嬪以上、並依品位給封祿、謂欲顯不減半、故云依品位、其封祿是重、蔭令准男、貴人位田灼然不減、

僧尼位祿

〔續日本紀十聖武〕天平元年八月癸亥、勅、唐僧道榮、身生本鄕、心向皇化、遠涉滄波、作我法師、加以訓導子虫、令獻大瑞、宜擬從五位下階、仍施緋色袈裟幷物、其位祿料、一依令條、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年八月辛丑、外從五位下僧延慶、以形異於俗、辭其爵位、詔許之、其位祿位田者、有勅不收、

前年未給位祿

〔北山抄六備忘略記〕古年位祿等事

先勘給不別納租穀充遣有無被裁許也、雖申請年々料一度先給一個年料、至于給兩年料希有之恩也、但年中度々申請、不在此例、若以舊官符申返等申改、只勘充遣給之、當年料者、不勘給不、但奏目錄之後奏之、又參議以上、內侍殿上人、舊年料間以正稅充給、祭使次將幷獻五節舞姬之人、有給不勤之例、兼國之人、或以往年位祿申請當年正稅、非無其例、古年季祿申改年國者、不被裁許、仕奉祭使等之輩、申請未行、先勘給例未行、被裁許之、以次上卿及他辨史、雖奉宣旨、官符猶稱一上宣、其所辨史署之、

奪位祿

〔令義解四祿〕凡奪祿者、徵半年、限六十日內輸畢、徵一年、限百廿日內輸畢、謂並從判徵日始計、即與徵贖銅同也、若限內遇恩、及別勅復任謂限內復任本官者、其任他司亦同、若限外復任者、猶亦須徵之也、者並免徵、即應給者從復任日爲始計、謂既云從復任日爲始計、即知不同初任之例、凡徵祿者雖正祿見在、但會恩降者可免、即與六贓稍異、

〔令集解二十三祿〕大夫云、問私案、以理去任者、通計勞給、不可從就任後初計、但又不初任耳、即應給者、從復任日爲始計、未知本令始給與此始計其別何、答始給謂雖無日給耳、今於此始計、謂恐通計前

兼國位祿

〔年中行事秘抄正月〕受領依辭退停任者、四ヶ年間不給位祿、不預節會事、

延喜三年十一月廿日外記日記右大臣宣、奉勅、諸國受領之官、依辭退被停任者、四ヶ年間不給位祿、幷勿預節會、自今以後、立爲恒例者、

〔延喜式式部十八〕凡內官兼外官者、位祿季祿並給兼國、

〔政事要略年中行事二十七〕十五日十月〇奏給位祿文事

應依官符以各請文勘會公文紀傳明經明法算四道博士等兼國公廨位祿季祿事、〇中略

正曆四年十月七日　　左少史安倍茂忠奉

〔政事要略年中行事二十七〕十五日十月〇奏給位祿文事

應勘會公文參議遙授兼國公廨位祿季祿事、〇中略

永祚二年二月廿二日　　左大史史忠信奉

應准參議申請例、左右近衞中少將、遙授公廨幷位祿季祿、永以返抄、勘合公文事、〇中略

永祚二年二月二十三日　　右少辨史肥田宿禰維延奉

郡司位祿

〔續日本紀聖武十〕神龜五年四月辛巳、是時諸國郡司及隼人等授外五位、並以位祿、便給當土也、

〔延喜式式部十八〕凡畿內郡司帶五位者、位祿准國司、以京庫物給之、

借敍五位郡司位祿

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應賜借敍五位郡領位祿事

絹三疋、綿三屯、調布廿端、庸布卌段、

右太政官去年八月廿日、下式部省符偁、檢正三位行中納言兼右近衞大將陸奧出羽按察使良峯朝臣安世奏狀偁、郡領者今之縣令也、親民行化實在斯人、時澆俗薄、稱格者希、伏望善政爲國司所舉申者、借授榮級、令足自展、然後考績依實與奪者、依奏者、左大臣宣、奉勅、宜且賜件祿使自勸勵、但位田資

外正五位　絁四疋格員　綿四屯格員　絲十三絇格員今停　布廿四段格員　庸布六十段今定、格員廿七段、

外從五位　絁三疋格員　綿三屯格員　絲十絇格員今停　布廿端今定、格員十八段、　庸布卌段今定、格員廿段、

右准大寶元年格、幷折中祿令所定如件、

以前撿案內、太政官去大同二年十月十九日奏、一品已下食封、幷四位位祿等、兼依令條、而內外五位、未有所定、偏據格旨遺忘祿令、臣等商量良須折中、伏請依件定以爲恒例、其女祿亦准此減半、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、聞、

大同三年十一月十日〇又見祿令集解、政事要略二十七、

散位位祿

〔令義解四祿令〕凡〇中略其五位以上、〇正四位以下不在食封之例、正四位絁十疋、綿十屯、布五十端、庸布三百六十常、〇中略其無故不上二年者則停給、謂、錄爲封祿立例、其職封者不入此例、但以理解官者、服闋及病差之後、無故不上一年者、准選叙令停給、其在任之官不上百廿日者亦不給也、

〔延喜式十八式部〕凡散位五位已上位祿、上日不滿廿不在給限、但未得解由者、下解由後、上日及三分之二給之、若無可役之日、雖上日不足、未申目錄之前、猶預給例、新叙者亦同、但七十以上者、不計上日預給例、

〔文德實錄八〕齊衡三年九月癸丑、散位從五位上春枝王卒、春枝四世從五位下仲嗣第八之男也、〇中略齊衡二年正月爲下總守、稱病篤不之任、隱居養病、有恩詔節祿及位祿等准見任給、卒時年五十九、

外官位祿

〔延喜式十八式部〕凡在外五位已上位祿者、准當土沽便給正稅、

〔享祿本類聚三代格六〕勅、太宰陸奧出羽等官人位祿者、自今以後、宜改先格、准諸國例、給於當所、若有施布等類、從願便給、但五畿內者、正稅減少、所用過多、宜准內官給於京庫、

天平神護三年正月廿八日

神龜五年三月廿八日

〔續日本紀十聖武〕神龜五年四月辛巳、太政官奏曰、○中略諸國司言、運調行程遙遠、百姓勞弊極多、望請外位位祿、割留入京之物、便給當土者、臣等商量、並依所請、伏聽天裁、奏可之

〔類聚三代格五〕勅、惟王建國、例軒冕而旌賢、惟帝念功、設爵賞以御衆、用能翼亮洪基、弼諧鼎業、詳觀列代、咸皆由之、省去神龜五年奏、五位已上子孫累世冠蓋、及明經秀才堪爲儒者、卽叙内位、自餘先叙外位、積勞入内、其外位位祿位田賻物者、給内位之半、女減三分之一、蔭子之階、正五位嫡子從八位上、庶子大初位上、從五位嫡子從八位下、庶子大初位下、並補大舍人、不任内舍人、位分資人正五位五人、從五位四人、女亦同、是所以分別内外、差降品秩也、其自外入内叙、當位之階、則優昇超、衆僉議未允、至於行刑之日、不聽辭訣、論子之科、不須蔭贖、則貶抑過甚、有乖條例、如此事類往々不穩、夫五位者班列大夫、蔭及子孫、朝庭依重人望斯在、而勞級雖貴、禮數猶卑、褒德勸人、豈合如此、古人有言、爵不尊祿不重者、不可與圖難犯危、以其道未可求之也、宜不穩言條並從除去、但位田位祿賻物之數、蔭階資人、因循前例、主者施行、

延暦十二年正月六日

〔享祿本類聚三代格六〕太政官謹奏

內外五位位祿準據令格事

正五位　絁六疋格員八疋　綿六屯格員八屯　絲廿六絇格員今停　布卅六端格員卅八端　庸布二百卅常以二丈八尺爲段、一百十一段一丈二尺、格員五十四段、今定一百十段、

從五位　絁四疋格員六疋　綿四屯格員六屯　絲廿絇格員今停　布廿九端格員卅六段　庸布一百八十常以二丈八尺爲段、八十三端丈六尺、格員卅段、今定八十段、

右據祿令所定如件

六束、調布卌束、庸布卅束、

右位祿價直、各依前件、幣物幷布施法服季祿等直亦准此、其官交易准當時估、但畿內諸國布施法服直、絹五十束、絲八束、綿四束、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年五月九日壬子、是日太政官處分、出羽國位祿物價一准陸奧國、

位祿運送

〔延喜式二十六主稅〕凡五位已上位祿、給諸國者、東海道駿河以東、東山道信濃以東、北陸道能登以北、山陰道伯耆以西給運賃、自餘諸國及在國司者、不在此限、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

一聽運位祿季祿料米事

右得太宰府解偁、謹檢太政官去神護景雲二年七月廿八日符偁、得府解偁、五位國司、及帶諸國諸司官人等款云、所賜位祿、幷季祿料、舂米上京、欲資親族者、府檢辭狀、不可不申、仍前例不便更加准定、請官裁者、官判依請者、謹依符旨行亦久矣、而依太政官去延曆十二年八月十四日符旨、亦同禁斷、資養之徒、因之亦憂、府司商量、不可不申、仍請官裁者、符旨灼然、所禁有限、而共從禁斷、府官所失、宜依舊聽之、

以前右大臣宣、奉勅如件、

大同四年正月廿六日

內外位位祿

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

內外五位不合同等事〇中略

位祿位田賻物

右內位祿料減半給之、如無故不上經一年者停給、女減三分之一、〇中略

奉勅、宜依前件、永爲恒式、

位祿租穀

〔延喜式二十三民部〕年料別納租穀

伊賀國二千石　伊勢國四千五百石　駿河國三千五百石　伊豆國一千五百石　甲斐國三千五百石
相摸國三千五百石　武藏國一萬二千石　上總國四千六百九十石　下總國一萬四千石　常陸國一萬二千石
信濃國一萬二千石　上野國一萬七百卅五石　下野國一萬一千石　能登國四千石　越中國四千石
越後國七千石　丹後國九百八石　但馬國二千九石　因幡國二千五百石　伯耆國四千六百卅石
出雲國四千五百石　石見國二千五百石　長門國二千卅七石　紀伊國三千百石　淡路國一千六百石

右卅五國、各別納租穀内隨官符到充位祿季祿衣服等料、

位祿價法

〔延喜式二十六主稅〕祿物價法

畿内、絹一疋直稻卅束、絲一絇六束、綿一屯三束、調布一端十五束、庸布一段九束、鍬一口三束、鐵一廷五束、伊賀、伊勢、志摩、相摸四箇國、絹六十束、絲十束、綿六束、調布卅束、庸布廿束、鍬三束、鐵七束、(餘國不顯物直者、皆准此、)尾張、參河兩國、絲八束、遠江國、絹八十束、駿河國、絹八十束、絲八束、鐵五束、伊豆國、絲八束、鐵五束、甲斐國絹八十束、絲八束、武藏、上總、安房、下總、常陸五箇國、絹八十束、綿八束、近江、美濃兩國、鐵五束、信濃國絹九十束、綿八束鐵六束、上野國、絹九十束、綿八束、下野國、絹九十束、綿八束、鍬二束五把、鐵五束、陸奥國、絹百六十束、綿十三束、絲十五束、調布五十束、庸布卅束、鐵十四束、出羽國、絹百五十束、綿十五束、絲十五束、調布五十束、庸布卅束、鐵十四束、若狹、越前、加賀、能登四箇國、鐵六束、(若狹國絲八束)越中國、絹七十束、鍬一束五把、鐵七束五把、越後、佐渡兩國、絹七十束、綿八束、鍬二束、鐵六束丹波、丹後因幡、伯耆、播磨、美作、備前、備後、周防、長門、淡、路十一箇國、絹五十五束、絲八束、鐵六束、(備後國、絲十一束、)但馬、備中兩國、絹五十五束、絲八束、鐵五束、出雲、石見隱岐三箇國、絹五十五束絲八束、鍬二束、鐵四束、安藝國、絹五十五束、絲八束、鐵四束、紀伊國、絹五十五束、絲八、束、鐵八束、鍬四束、阿波國、絹五十束、鐵六束讚岐國、絹五十五束、鐵六束、伊豫國、絹五十五束鐵五束、土佐國、絹五十五束、鐵十束、太宰及管内國、絹八十束、絲十束、綿

應勸會稅帳諸大夫位祿事

右得神祇伯忠望王等解狀、偁、年中給物最在位祿、而諸國司等只事申返、無意下行、依斯或徒疊數年官符、永苦生計之難、或空疲一人行李、難免亡路之愉、其窮困尤甚者既至餓死衙門、謹檢案內、諸家封租及諸司大粮、皆是以租穀分行之色也、然而依勸會抄帳、無申返之例、但至位祿物雖同色、以不預勸會、自懸國司之進退、仍常宗抑留曾無充行、非有新制何休乘歎、望請始自今年、令備勸會、將斷申返累、然則爲公無損、爲人有慶者、右大臣宣、宜以本主請牒、幷使者請文副承知官符勸會稅帳者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

右少辨源朝臣　　　左大史大藏宿禰

承平七年十月十六日

〔權記〕長保二年六月廿日乙丑、主計允昌光、送穀倉院位祿官符於遠江土左等國司許、遠江官符近江介永賴朝臣許、土佐官符令付國司、

〔雲州消息 中末〕源美子位祿官符事

右別納租穀若無用殘、早可被返遣申文也、女位祿已以減半、於被解濟何有事費乎、謹言、

十一月　日　　　散位平

謹上播磨守殿

女位祿事

右別納租穀已無用殘、然而爲恐嚴旨可解濟侍、就中彼人昔日雲上之間所相好也、縱無仰事何無其情乎、今年風雨順時、年穀豐稔、任中公事季內可勸畢、申請事等可令加催給也、委曲之旨期參啓候、某謹言、

十一月十五日　　　播磨守

分配畢、卽可撤外記硯、且位祿不堪等得事宜歟者、所命可然、仍先行公卿分配、次位祿定、次施米、次不堪定、次和奏也、

彈正檢察

〔延喜式四十一彈正〕凡賜位祿季祿者、向大藏省檢察非違、若有五位以上不參者、臺卽勘錄移刑部省、但左右近衛不在此限、

〔類聚三代格十三〕太政官符

應送五位已上歷名事

右得彈正臺解偁、去延曆十一年十一月十九日勅例、賜位祿季祿時者、諸五位已上自參大藏省受、若不參者彈正糺之者、而依無歷名不便勘也、謹請處分者、右大臣宣、奉勅式部省寫五位已上歷名、臨時送臺、其六位已下者、專預彼省者、宜承知依宣行之、自今以後永爲恒例、

弘仁二年五月十三日

位祿充文

〔親信卿記〕天祿三年四月十一日、位祿□幷□遺文於腋陣令奏、　十二日、奏聞、卽於御前宛給女房、件文奏位祿目錄之後、彼所辨史宛了後、令奏此文云々、其遺欲宛男房之間、頭中將被示云、如此文可申殿下歟、余申云、一兩年例不覽殿下、但有不足國者令申案內云々、　十六日、持參位祿於殿下令申此由、卽仰云、年來無見此文、雖可見令奏聞了有何事哉、早任年來例可宛給者、奉此仰退出之後宛男房、

〔權記〕長德元年十月十六日、去年位祿、以三河國正稅可宛給申文付藏人辨爲任、昨日左少辨說孝所付、故仰中納言後家申位祿未給二年、幷自申去年未給、又右少辨爲任所付去年位祿申文等覽右府、○藤原道長相次奏聞、卽下右大將、

〔春記〕長久元年五月十七日辛未、依仰書宛女房位祿國々、於御前書之、在別書了退出、

位祿徵收官符

〔政事要略二十七年中行事〕十五日十一月奏給位祿文事

太政官符民部省

〔長秋記〕大永二年五月十四日、左府（○源俊房）参内給、有申文事、雖然（中辨不候、行申文、奇怪事也、左大辨行之、頭辨参院、時刻推移故也、）被定位祿事、付頭辨被奏、辨未参間、左府問人々云、無辨時位祿文以誰人可奏哉、左大辨、尙辨奏由執申、他人云、無辨時付職事奏由申之、大臣同之給、

〔台記〕久安二年二月十七日丙辰、参内、依位祿定也、右大辨頭辨候、先参御前及太后在所、頭辨遲参、及深更、

〔玉海〕安元二年十二月十四日乙酉、晚頭隆職宿禰來、呼簾前問官奏位祿施米等事、是內々事也、官奏事雖有光雅之告、未蒙上催人、無一上讓、然而爲用意也、又所宛申文、位祿定、施米定、大粮申文等、今年未被行、近代多被付官奏之由、隆職令申、余（○藤原兼實）候、非一上讓者被改上卿不能行之者、隆職云、左府（○藤原經宗）可尋申官奏事、其改件等公事何、此可被行、示伺形勢、若有被申旨者、可申案內者、抑元永年、故殿（○藤原忠通）兩度候給吉書奏、若有由緒歟、依不審先日問隆職、今日註申云、俊度吉書奏改元之後奏也者、仍今度不可有吉書奏者、奏候之故也、又位祿、施米舊文書等、內々持來令見之、　廿七日戊戌、此日有不堪定、和奏、及位祿定、施米定、公卿分配等事、（不堪定、相奏者、依上参勤、位祿、施米者左府以隆職有被示旨、子細見去十六日記、公卿分配者、頼業申左府、以被許、今朝告之、）申終（日未没西山、）著束帶（諒闇束帶色目如恒、）参內、先於陣腋（不經床子座前、依無便宜也、子細在寛奏記、）問事具否於隆職、申云、直中辨不参、左右少辨可参、而政未畢之間候結政、又六位史等未参者、仍不著陣、先参御所方、（先是權中納言實綱、右大辨長方参候、）此間關白（亥刻）参入、余問申云、歸陣給文之時、先下不堪文書、次副文等、是定例也、而或說先下副文云々、如何、命云、此說未知者、余又申云、今日合行公事太多、奏以前行位祿、施米、奏以後可行公卿分配、且者先例有可相准之事之故也、而少史未参之間官中事難行、最前行公卿分配、頗不穩歟、如何、命云、先被行公卿分配、尤可宜、更不可有次第、如此事只可隨宜也、余又申云、若然者位祿定可用外記硯歟、如期混合之時、雖官中公事用外記硯、雖外記方事用官硯、是定例也、但於不堪定者用外記硯之例不覺悟、頗可有思慮歟如何、命云、位祿定用外記硯何事有哉、於不堪定者猶不穩便、然者唯公卿

二枚文（出納諸司等枚、殿上一枚、）一、余讀前定文令書也、事了、大辨起座奉之、余取之、大辨復座、余披見了、召左中辨重尹下給定文、乍二枚結申、余目稱唯、重尹者非位祿所辨、先只所下給也、權左中辨經賴可宛也、　五月廿五日丁亥、左少史恒則進位祿文、（信乃、但馬、紀伊、）　六月七日己亥、可給位祿之人々、先日位祿所所進文注付、召史恒則令下給、內々令申云、師光朝臣宛宜國與信濃同法者、問定宛國、申、慥不覺由、仰可改進由、若無殊勝省者、問師光、隨被申可改定人之故也、信乃、（師光朝臣、）但馬、（國經朝臣、）紀伊、（永輔朝臣）

長元四年三月十四日辛酉、參內、左右大辨先參、余入從化德門、大丞立軒廊立蔀邊、問位祿文事歟、左大辨云、具候者、仍不著奧座著南座、右大辨著座歟、左大辨著座候氣色、示可令進位祿文之由、令陣官候於史、卽左少史國宜奉筥文、（文書數如例、）　國宜進退作法太不便也、大辨敎正、右少史爲隆置硯左大辨前、余取出他文書、以國宜文入筥、今位祿辨左少辨經長令奏、但先經內覽可奏之由相示、少選歸來云、御覽訖返給、此間關白參入、余示大辨令書位祿定文二枚、（殿上定文、十個國定文、）　事畢進之、見畢召左少辨經定下給、結申退出、令撤筥文硯等、　廿八日乙亥、今日直物、○中略　卽參內位祿所史孝親進給位祿文、信乃但馬紀伊三箇國下銘、給人名返給、（信乃知貞、但馬永輔、紀伊知道、）

〔後二條關白記〕寬治七年五月二日戊寅、施米位祿等仰史政孝所召也、進覽云々、施米文（十五卷之軸、有紙減云々、）位祿文七卷、（諸大夫、歷文、女歷名、出納諸司書出、國目錄、殿上國宛、出納諸司等國宛、主稅寮租穀勘文、）　諸大夫文大卷也、女歷名小卷、自餘文等一紙等云々、披見了返給、頭辨來下申文云、左右相府等稱故障所辭申也、承了、

〔中右記〕嘉承元年十二月廿九日丙戌、今日必可有和奏、先可著陣也、○中略　次有位祿定、件文書八、大辨先於床子座見之、了史生入筥覽之也、今夜左大辨不然、如何、　二年十二月廿五日丙午、入夜參內、內大臣參右仗座、有所宛申文、次位祿定、（大夫辨書之、）

〔永昌記〕天永元年三月廿六日甲子、左大臣（○源俊房、）以下參進、有仗議事、次有位祿定、予（○藤原爲隆、）奉行辨也、但參殿下（○藤原忠實、）之間、左少辨被行分文者、

史撤宮硯、（位祿以諸國別納租穀給男女四位已下、廿七個國數見税帳、有官符無國量國司以國正税給之、租穀給位祿、遣爲不動也、延喜七年例、別納租穀官符廿七個國、書出二枚、見政事要略第卅三、禁國所謂延喜符二十七國也、小野記云、令大辨書出九個國、男女源氏、女御、更衣、外衞督佐、左右馬助、諸道博士出納諸司二寮頭助等可給之料、殿上料并二枚、國除書有賞賜彼所辨、外記史人此中曰不必爲例之、）

殿上

伊賀二人（四位一人五位一人）　信濃二人（四位一人五位一人）　丹後二人（四位一人五位一人）　但馬二人（四位一人五位一人）　紀伊二人（四位一人五位一人）　淡路三人（五位）

長保三年五月十三日

伊賀一人（五位）　信乃二人（四位一人五位一人）　能登六人（五位）

越中五人（五位）　越後四人（五位）　丹後一人（五位）　但馬二人（四位一人五位一人）　紀伊二人（五位）　淡路二人（五位）

右十個國女御更衣諸衞佐馬寮助諸道博士二寮頭助史等所給也

長保三年五月十三日

〔法成寺攝政記〕長和二年三月四日乙未、著左丈座、奏官奏、〇中略　其後奏位祿目錄、件目錄者、黄文二卷中、其國（二具）四位五位數二書是也、返給後、先國二枚書出答辨、給史取宮、件定書、風吹一枚遣大將座邊、以左衞門令取行與置取之、令奏、其間事了退出、

〔小右記〕治安三年四月廿七日庚申、召大夫史貞行宿禰、仰明日可具位祿文事、幷其所辨可候事等、（權左中辨經賴）問左大辨參不、申云可參入、　廿八日辛酉、今日可奏位祿文、彼所辨經賴朝臣也、先日仰可參由、而今朝令申有所煩不可參由、仰左中辨可參由了、左大辨來云、日來灸治所亂發、人不參內、今日相扶參入、爲申其由所來、示可奏位祿文由、〇中略　問位祿文事於大辨、令儲候、仰可令奉由、右大史義光進位祿文等、（主税寮租穀勘文、位祿宛文、男女歷名帳、出納諸司、外衞佐、馬寮助、諸道博士、大夫史、外記史文、去年定文二通等、）次居硯大辨前、余〇藤原實資　件文等一々見之、取出他文等、印宛文、（黄本、）納宮以左中辨重尹奉關白、若無事難可奏聞由相示了、〇中略　令大辨書

雲二年始給位祿云々、

貞信公御記云、延長九年三月十九日、所勞不平、無便參入、仍乍在私第定位祿事、左大辨來、

天慶四年三月廿一日、朝綱朝臣持來今年位祿國宛勘文、右大將(實賴)所令申也、卽仰依例可定行狀、

同五年五月廿三日、无參議辨少納言近衞府佐內侍等當年位祿可給禁國不動之狀、令右大辨奏、

〔北山抄 一 二月〕位祿事(中旬行之)

一上卿著陣、左大辨申事由、史歷名、別納租穀勘文、官充文、并目錄、去年書出等、入筥進之、上卿見畢、目錄一卷入筥付殿上辨若藏人奏聞、返給之後、令大辨書一世源氏等各一枚、召其所辨給之、(口傳、并九條年中行事如之、但應和三年三月廿日私記曰、大納言高明卿依殿下仰奏之、保忠朝臣返奉之、次申云、書分文有加奏、雖非指仰、氣色如之云々、書分後猶豫、遂不被奏退出、安和二年三月二十三日、左大臣先令藏人奏主税寮勘文、次令大辨書出七ヶ國十一ヶ國文奏之云々、又清愼公被奏件書分之由在齊光卿記云々、此事可尋案之、)

〔江家次第 五 二月〕位祿定(二月中旬可行之、一上觸有障者依讓次人行之、)

一上著陣、先有所充申文、(依未定彼所辨可令申也)近例加鎰文一通申之、大辨進就陣座申行如恒、(非參議大辨者、先著膝突申件文候由、)次有位祿定、大辨著腋床子、(辨史以下候床子)彼所史生覽文書、(入筥)目錄一通、主税寮別納租穀勘文一通、諸大夫命婦歷名各一卷、官所充文一通、(注位階不注名)去年書出二枚、(一枚可給禁國人々也、十個國在狀、隨時取擇、一枚殿上分、五個國許八人、)節會不參人交各(近代不副)大辨一々開見畢、(可案取禁國人人兼國有無)史生取之退畢、大辨著陣座、申其文候由於大臣、大臣目許、大辨仰官人令召史、(以上非參議大辨時不可用)史二人、一人取筥置大臣前、一人取硯筥置大辨前、大臣見畢、筥中只留目錄一通、(自餘文取留之)令殿上辨若藏人內覽奏聞之返給、(仰御覽シツ)次令大辨書、(非參議大辨、此間依召著陣書)之、先書可給禁國人々文、(禁國十個國、殿上分五個國、)書了後更一通讀之卷之候、依大臣氣色進奉之復座、大臣見畢、召彼所辨下之、先給禁國文、(辨結申曰、可給禁國人々、)次給殿上分文、(辨結申曰、殿上ノ分ノ國、)大臣每度揖許、辨退出下史、次

退出、而後辨官申政如恒、

〔西宮記 二月〕一位祿事（小野記云、令大辨書出九ヶ國男女源氏、女御、更衣、外衛督佐、左右馬頭助、諸道博士、出納諸司二寮頭助等可給之料、殿上料并二枚、除目有[illegible]賜彼所辨外記史、同入此中、不必爲例、）

一大臣著陣　大辨在座申位祿文候由、上卿諾、史置筥文、（入諸大夫命婦歷名各一卷、主税寮別納租穀勘文一卷、官宛文一卷、不注位階名目錄一卷、去年書出二枚之中、一枚注其國若干、其四位若干、五位若干、右狀注一世源氏、女御、更衣、外衛督佐、馬寮頭助、二寮頭助、外記史等、雖臨時可注之、一枚其國若干、其四位若干、五位若干、右在殿上分書、）上卿一々見之、以目錄一卷入筥、付殿上辨若藏人奏聞、返給了、令大辨書、（一世源氏等出一枚、殿上人書出一枚、大辨書了奉上卿、上卿召其所辨給之、史撤筥硯等、一卿有障者次人行之、）

後日辨於私家定宛、（殺食史申下殿上院宮大臣家分夾名之後宛之、院分辨可申云々、）宛了以宛遺勘文進殿上、有申舊年未給輩、藏人奉仰就勘文給之、（先可勘給否、）自官申者勘續宛、宛遺給否等入官奏、辨少納言近衞將內侍奏請正税、（國司兼國人以任國正税宛、）最初請印殿上分官符、次々請印、女官舊官符、兼國外任輩不給別納租穀、（兼國輩以其兼國申返、申請他國正税之例、近代間々有之、）

延長六年三月三日、依院御消息大夫五人位祿被宛中國之例、近代間々有之、

天德四年正月廿八日、中務錄依智秦時賴依不申位祿目錄進過狀云々、

式云、一人帶數官、若高官上日不足、而卑官滿限者、祿縱多給、（馬料准之）六位諸王任職事者、王祿官祿從一高給、

式云、內官兼外官者位祿季祿給兼國云々、在外五位以上位祿者、准當士沽便給正税、（式部式文也）

式云、五位已上卒者、給當年位祿、十二月卒者、不給明年之祿云々、畿內郡司帶五位者、位祿准國司以京庫物給之、

天曆八年四月九日御記了、左大臣令藏人元輔奏、延長五年十一月廿一日、散位治方不向任所解任、宜預節會給、位祿宣旨、（先日給令勘申）令仰云、准件例、參議朝忠雖辭大貳、宜從例務兼給位祿也、文武天皇慶

位祿定
賜位祿儀

〔延喜式式部十八〕凡位祿者、毎年十一月十日申太政官、廿二日給之、預具錄歷名移彈正臺、其四位五位自參而受、（參議及散位年七十以上不在此例）若當日不參者、總錄歷名移大藏省、

〔儀式十〕賜位祿儀

中務式部兵部三省、十一月總檢目錄、十日申太政官、如常、訖實錄名帳申送辨官、十五日少納言奏之、廿日太政官下符大藏省正藏院、三省輔已下進就座、于時大藏省積祿於庭中、掃部寮設賜祿座於祿以北、大藏積祿、畢錄進申辨官、大夫喚官掌、令喚式兵二省、省稱唯進立、辨命云、祿早令賜、錄稱唯各還就座、申輔、輔命云縱、錄稱唯訖輔已下進就賜祿座、輔命史生云賜之、史生稱唯執簿平唱之、藏部賜之、史生申賜畢狀、訖以次退出、

〔延喜式式部十九〕給位祿

毎年十一月總檢目錄、同月十日申太政官、訖實錄名帳申送辨官、注可給祿物數、下符大藏省、廿二日省輔已下向大藏就座、大藏積祿物於庭中、掃部寮敷座於祿下、大藏積祿畢卽申辨官、令官掌召省、錄稱唯進、辨大夫命曰、位祿速令給、錄稱唯退而就座、擧申本省、訖輔以下依次就祿下座、輔命史生曰給之、史生稱唯執簿唱之、藏部給之、訖史生申其狀、輔以下起去、其後本司注殘物數移送、亦如上例、

〔侍中群要六〕位祿奏詞事

散位ム（トネ）申請ム年乃料乃位祿以ム國物被宛給シムト申セル事

位祿奏

散位ムガシガ申請某年乃料乃位祿、某國乃其物チ以テ宛給ハシムト申セル事ト奏ス

〔西宮記十一月〕十日三省申位祿文事

少納言辨列入、輔隨之、外記史亦入、置祿隨之立定、大臣宣（召世）、五位六位以次稱唯各就座、訖辨起申云、司々乃申セル政申給止申、訖復座、三省依次讀申目錄、訖大臣總判曰、縱、（詞云與之）輔以下共起稱唯、訖自下

ニ位祿定ノ事アリ、公卿陣座ニ集リテ、位祿ヲ給フベキト、給フベカラザルトヲ議ス、是恐ラクハ延喜以後ニ至リテ與ル所ナラン

中世以後、位祿ハ毎年ニ給ハルコトヲ得ズシテ、前年未給ノ分ヲ得ント請フ者アリテ其請ヲ允サルヽトキハ、多クハ一年ノ分ヲ給スルコトニテ、二年ノ分ヲ給スルハ特恩ニ出ヅルナリ、又位祿ハ別納租穀ヲ以テ充ツベキヲ、不動穀ヲ以テ賜フコトモアリ、

名稱

〔伊呂波字類抄〕呂雜物 祿物

〔倭訓栞〕前編四十一呂 ろくほふ　祿を賜ふ目錄を祿法といふ也、祿所は大藏省の祿を積む所也、

〔文獻通考〕六十五 祿秩○中略 宋興咸平間、知制誥楊億上疏言、唐制、內外官俸錢支外有祿米職田、又給防閤庶僕、親事、帳內執衣、白直、門夫、各以官品差定其數、歲收其課、資於家、本司又有公廨田食本錢、以給公用、自唐末離亂、國用不充、百官俸錢、並減其半、自餘別給一切權罷、官于半俸之中、已是除陌、又於半俸三分之內、其二分以他物給之、鬻于市廛、於裁得其三、曾糊口之不及、豈代耕之足云、

〔周禮註疏〕二大宰 以八則治都鄙、○中略 四曰、祿位以馭其士、○中略 註、祿若今月奉也、○中略 疏、祿若今月奉者、古者祿皆月別給之、漢之月俸亦月給之、故云若今月奉也、

制度

〔令義解〕四祿 凡食封者、○中略 其五位以上、○正四位以下 不在食封之例、正四位絁十疋、綿十屯、布五十端、庸布三百六十常、從四位絁八疋、綿八屯、布卌三端、庸布三百常、正五位絁六疋、綿六屯、布卌六端、庸布二百卌常、從五位絁四疋、綿四屯、布廿九端、庸布一百八十常、女減半

〔延喜式〕十八式部 凡五位以上卒者、聽給當年位祿、其十二月卒者、不給明年之祿、

〔延喜式〕十一太政官 凡給位祿者、中務式部兵部三省錄應給人物數、十一月十日申太政官、即造總目、十五日少納言奏之、廿日官符下大藏、廿二日出給、事見儀式 其身在外國及國司者、以當國正稅給之、

古事類苑

封祿部四

位祿

位祿ハ位階ニ從ヒテ給スル所ノ祿物ヲ謂フ、蓋シ絁綿布鍬等ノ祿物ヲ以テ食封ニ代フルナリ、文武天皇大寶ノ制、三位以上ニ位封ヲ給ヒ、四位五位ニ位祿ヲ給ヒ、婦人ハ妃夫人嬪ヲ除クノ外、男子ノ半ヲ給フコトヽセシガ、慶雲三年ニハ、男子ハ四位ニモ位封ヲ給ヒ、位祿ハ五位ノミニ止ム、又聖武天皇ノ神龜五年ニハ、外五位ハ內位ノ半ヲ給スルコトヽナリシガ、平城天皇ノ大同三年ニ少シク其數ヲ增セリ、是ヨリ先キ內位ノ位祿ニモ更革アリシガ、此ニ至リテ大寶ノ制ニ循ヘリ、借五位ノ郡司ノ位祿ハ、淳和天皇ノ天長二年ニ、外從五位ト同ジカラシム、

凡テ位祿ヲ給フニハ、京庫大藏省ニ給フト、諸國ニ給フトノ別アリ、諸國ニ給フニハ、國ノ遠近ニヨリテ運賃ヲ給フト給ハザルトアリ、而シテ外官ノ位祿、并ニ外官ヲ兼テタル者ノ位祿ハ、諸國ニ於テ其土ノ估價ニ準ジ、正稅ヲ以テ給フ例ナリ、京庫ニ給フニハ、每年十月ニ、中務、式部、兵部ノ三省ニ於テ、位祿ヲ給フベキ人物ノ數ヲ錄シ、十一月十日、太政官ニ申シ十五日ニ之ヲ奏シ、二十日、官符ヲ大藏省ニ下シ、二十二日、位祿ヲ給ハルベキ人、自ラ大藏省ニ詣リテ之ヲ受ケシム、而シテ四位ノ參議、及ビ年七十以上ノ散位ハ、此限ニ在ラズ、又荷前ノ使ヲ闕キタル非侍從等ハ位祿ヲ受クルコトヲ得ザラシム、又江家次第ニ依ルニ、每年二月中旬

〔日本後紀 五 桓武〕延暦十六年正月辛亥、能登國羽咋能登二郡沒官田幷野七十七町、賜尚侍從三位百濟王明信、

〔續日本後紀 四 仁明〕承和二年四月丙子、甲斐國巨麻郡馬相野空閑地五百町、賜一品式部卿葛原親王、

〔三代實錄 二 清和〕貞觀元年四月廿日乙巳、詔賜左大臣從一位源朝臣信攝津國河邊郡爲奈野、爲遊獵之地、

〔三代實錄 四 清和〕貞觀二年十一月三日己卯、詔參議正三位行右衞門督源朝臣融賜大和國宇陀野、爲臂鷹從禽之地、

〔三代實錄 二十四 清和〕貞觀十五年八月癸巳朔、勅賜攝津國河邊郡爲奈野於二品行中務卿兼上野太守諱 光孝天皇 親王、以爲遊狩之地、勿禁百姓樵蘇焉、

賜山

〔續日本紀 三十一 光仁〕寶龜元年十二月乙未、賜左大臣正一位藤原朝臣永手、山背國相樂郡出水鄉山二百町、

〔日本紀略 桓武〕延暦十四年六月丙申、周防國田百町、山八百町、賜茨田親王、

賜牧

〔日本後紀 八 桓武〕延暦十八年九月丁巳、近江國小神舊牧賜諱、嵯峨太上天皇、

〔日本後紀 十二 桓武〕延暦廿三年正月乙巳、安藝國野三百町、賜甘南備內親王、以爲牧地、

賜林　賜池

〔日本後紀 二十一 嵯峨〕弘仁二年八月壬申、山城國乙訓郡地二町、田十町、池一處、栗林一町、賜甘南備內親王、

賜島

〔續日本後紀 九 仁明〕承和七年十一月戊子、以在志摩國答志島、賜無品常康親王、

賜野

郡地六町、賜大原內親王、
〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年二月辛亥、山城國乙訓郡荒地、賜大外記從五位上上毛野朝臣穎人、左大史正六位上朝原宿禰諸坂、左少史從七位下佐太忌寸豐長各一町、
〔日本後紀二十四嵯峨〕弘仁六年四月己酉、攝津國住吉郡地十町、賜參議右大辨從四位上紀朝臣廣濱、
〔續日本後紀二仁明〕天長十年十月乙巳、山城國綴喜郡空閑地五町、賜正三位中納言源朝臣常、
〔續日本後紀三仁明〕承和元年八月丙戌、賜攝津國西成郡閑地一百町於諱、〇缺文　十月壬寅、山城國愛宕郡閑地六町、賜從四位下滋野朝臣貞主、
〔續日本後紀五仁明〕承和三年二月壬午、山城國綴喜郡空閑地四町、賜掌侍從五位上大和宿禰館子、〇中略古市郡空閑地四町賜繁子內親王、
〔續日本後紀六仁明〕承和四年六月丁未、賜人康親王山城國葛野郡空閑地一町、
〔續日本後紀十一仁明〕承和九年六月丁卯、以左京釆女町西北地四分之一、賜右衞門權佐從五位下橘朝臣海雄、
〔續日本後紀十三仁明〕承和十年十一月丁酉、以丹波國氷上郡空閑地卄町、賜親子內親王、
〔三代實錄四清和〕貞觀二年三月廿九日己卯、右京一條三坊地壹町、賜從五位上小野朝臣千株、從五位下藤原朝臣良繩等、　九月十九日丙寅、山城國宇治郡荒廢地一町三百三十八步、賜文德天皇皇子源朝臣能有、　十月廿九日乙巳、山城國宇治郡地廿五町、賜左大臣正二位源朝臣信、
〔三代實錄十四清和〕貞觀九年三月廿三日癸亥、山城國愛宕郡地四町、賜典藏從五位上笠朝臣西子、聽建道場、
〔續日本紀三文武〕大寶三年九月癸丑、施僧法蓮豐前國野四十町、褒醫術也、
慶雲二年四月庚申、賜三品刑部親王越前國野一百町、

無主賜田

者依口分例、若有賜田者亦追、(謂此亦爲除名者立文也)當家之內、有官位及少口分應受者、並聽廻給、(謂口分田分、待班田年乃給也)有乘追收、

〔延喜式二十六主稅〕凡勘租帳者、(○中略)賜田等未授之間、(○中略)爲輸地子田、

○

賜地

〔新撰姓氏錄左京皇別〕輕我孫

治田連同祖、彥坐命四世孫、白髮王之後也、初彥坐命末、賜阿比古姓、成務天皇御代、賜輕地三十千代、是負輕我孫姓之由也、

〔播磨風土記神前郡〕多馳里、(邑曰野、八千軍野、欖岡、)土中下、所以號多馳者、品太天皇(○應神)巡行之時、大御伴人佐伯部等始祖阿我乃古、申欲請此土、爾時天皇勅云、直請哉、故曰多馳、

〔續日本紀十一聖武〕天平六年九月辛未、班給難波京宅地、三位以上一町以下、五位以上半町以下、六位以下四分一町之一以下、

〔日本紀略桓武〕延曆十一年正月戊寅、山背國地卌町、賜大納言紀船守、

〔日本後紀五桓武〕延曆十六年三月丁酉、長岡京地五町、賜從四位下多治比眞人邑刀自、同京地一町、賜大田親王、

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年正月戊午、長岡京地一町、賜從五位下藤原朝臣奈良子、　八月癸酉、長岡京地一町、賜民部少輔從五位菅野朝臣池成、　十月壬申、信濃國地百町、賜左大辨正四位下菅野朝臣眞道、

〔日本後紀十三桓武〕延曆廿四年七月丙子、尾張國智多郡地十三町、賜中納言從三位藤原朝臣內麻呂、十一月己巳、山城國紀伊郡地一町、賜典侍從四位下葛井宿禰廣岐、

〔日本後紀十七平城〕大同三年六月甲寅、山城國久世郡地六町、賜高丘親王、　四年二月甲寅、山城國乙訓

〔日本後紀 嵯峨 二十四〕弘仁六年五月己亥、備前國津高郡荒廢田十九町、賜業良親王、

〔續日本後紀 仁明 一〕天長十年四月己卯、以攝津國百濟郡荒廢田廿七町、賜源朝臣勝、

〔續日本後紀 仁明 三〕承和元年二月甲申、伯耆國會見郡荒廢田百廿町、賜有智子內親王、 甲午、遠江國敷智郡古荒田卅三町、賜阿保親王、 四月丙午、勅賜美濃國荒廢田、幷空閑地五十町於諱、田邑 文德 ○十一月丙子、以越前國坂井郡荒田廿町、賜基貞親王、

〔續日本後紀 仁明 六〕承和四年七月辛卯、加賀國石川郡荒廢田卅九町、賜三品彈正尹秀良親王、

〔續日本後紀 仁明 八〕承和六年十月己酉朔、山城國宇治郡荒田一町、賜无品秀子內親王、

〔續日本後紀 仁明 十一〕承和九年六月戊寅、以攝津國島下郡古荒田五十二町、賜從五位下大中臣朝臣岑子、

〔續日本後紀 仁明 十三〕承和十年十一月己亥、攝津國島上郡古荒田十八町八段、賜時子內親王、

〔續日本後紀 仁明 十九〕嘉祥二年十月辛卯、近江國淺井郡荒廢田九町、賜從五位上橘朝臣清子、

〔三代實錄 清和 五〕貞觀三年二月三日丁未、攝津國豐島郡古荒田五十七町、賜二品兵部卿忠良親王、

賜白田

〔日本後紀 桓武 十三〕延曆廿四年八月丁酉朔、山城國相樂郡白田十三町、賜葛井親王、

〔日本後紀 桓武 十三〕延曆廿四年十二月乙卯、河內國交野郡白田二町、賜仲野親王、 戊午、山城國乙訓郡白田一町、賜大判事從五位下讃岐公千繼、

〔日本後紀 嵯峨 二十一〕弘仁二年正月甲子、山城國乙訓郡白田一町賜從四位下百濟王敎法、 十一月壬子、大和國添下郡白田一町、賜從五位下三國眞人氏人、

〔續日本後紀 仁明 十三〕承和十年十二月辛巳、山城國宇治郡白田一町五段、賜大中臣朝臣東子、

奪賜田

〔令義解 田 三〕凡應給職田位田人、謂案職田位田者、據先既給訖、不可更稱應、或是衍文乎、其職田位田、得職位則授、去者則收、皆不待班田年也、若官位之內有解免者、從所解免追、謂解、解官也、免、免官也、假有正三位位田卅町、犯免官者、三載之後、降先位二等、叙正四位上、即依正四位給廿四町之類也、若解官者追亦如之也、其除名

賜一身田

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲三年五月壬辰、詔曰、不破內親王者、先朝有勅削親王名、而積惡不止、重爲不敬、論其所犯罪合八虐、但緣有所思、特宥其罪、仍賜廚眞人廚女姓名、莫令在京中、

〔日本後紀桓武十三〕延曆廿四年十一月庚辰、相模國大住郡田二町、賜從四位下百濟王敎法、

〔日本後紀嵯峨二十二〕弘仁三年三月己卯、山城國乙訓郡陸田一町九段賜春日內親王、

〔類聚國史百七職官〕大同四年五月癸亥、在河內國內藏寮田十一町、賜正五位下伊勢朝臣繼子、其一身之後、收爲寮田、

〔三代實錄陽成三十三〕元慶二年六月二日丙寅、勅以參河國播磨郡荒廢田一百町、賜孟子內親王、爲一身田、

〔輶軒小錄〕一身田之事

伊勢に一身田と云ふ所あり、專修寺と云ふ寺ありて、親鸞宗の一本寺なり、世に高田と云ふ、一身田と云ふこと、いかなる故をしらず、近頃三代實錄を見れば、元慶二年六月丙寅、敕以參河國播磨郡荒廢田一百町、賜孟子內親王、爲一身田と云へり、是に依りてみれば、一身田と云ふは、口分田世業田の類にて、其一身に下賜せらるゝ田地の名と見えたり、昔この田を賜ふ處、後世遂に地の名となると見えたり、佛家に一身阿闍梨など云ふことあり、あはせ見るべし、

賜荒廢田

〔續日本紀光仁三十六〕寶龜十一年四月辛丑、勅備前國邑久郡荒廢田一百餘町、賜右大臣正二位大中臣朝臣清麻呂、

〔日本後紀桓武五〕延曆十五年九月癸卯、越前國坂井郡公田二町、荒田八十四町、賜諱淳和太上天皇、十一月己丑、河內國志紀郡荒田一町、賜正七位下秋篠朝臣清野、

〔日本後紀桓武八〕延曆十八年十二月癸巳、攝津職舊荒田五十七町、賜大田親王、

〔日本後紀桓武十二〕延曆廿三年九月甲戌、近江國蒲生郡荒田五十三町、賜式部卿三品伊豫親王、

人絁四匹、絲十絇、布二十端、鍬二十口、稻一千束、水田四町、復戸調役、以慰久苦唐地、

〔續日本紀二文武〕大寶元年三月壬寅、賜右大臣從二位阿倍朝臣御主人、絁五百疋、絲四百絇、布五千段、鍫一万口、鐵五万斤、備前備中但馬安藝國田二十町、

〔續日本紀三文武〕慶雲元年十一月丙申、賜正四位下粟田朝臣眞人、大倭國田二十町、穀一千斛、以奉使絶域也、

〔續日本紀四元明〕和銅二年九月己卯、遣從五位下藤原朝臣房前于東海東山二道、檢察關剗、巡省風俗、仍賜伊勢守正五位下大宅朝臣金弓、尾張守從四位佐伯宿禰大麻呂、近江守從四位下多治比眞人水守、美濃守從五位上笠朝臣麻呂當國田各一十町、穀二百斛、衣一襲、美其政績也、

〔續日本紀六元明〕和銅七年閏二月戊午朔、賜美濃守從四位下笠朝臣麻呂、封七十戸、田六町、少掾正七位下門部連御立、大目從八位上山口忌寸兄人、各進位階、匠從六位上伊福部君荒當賜田二町、以通吉蘇路也、

〔續日本紀九聖武〕神龜二年閏正月丁未、天皇臨朝、詔叙征夷將軍已下一千六百九十六人勳位各有差、授正四位上藤原朝臣宇合從三位勳二等、從五位上大野朝臣東人從四位下勳四等、從五位上高橋朝臣安麻呂正五位下勳五等、從五位下中臣朝臣廣見從五位上勳六等、從七位下後部王起正八位上佐伯宿禰首麻呂、五百原君虫麻呂從七位下君子龍麻呂、從八位上出部直佩刀、少初位上紀朝臣牟良自正八位上田邊史難波、從六位下坂下朝臣宇頭麻佐、外從六位上丸子大國、外從八位上國覓忌寸勝麻呂等一十人、並勳六等、賜田二町、

〔續日本紀十聖武〕天平元年二月壬午、曲赦左右京大辟罪已下、幷免緣長屋王事徵發百姓雜徭、又告人漆部造君足、中臣宮處連東人、並授外從五位下、賜封三十戸、田十町、漆部駒長從七位下、並賜物有差、

〔續日本紀三十稱德〕神護景雲三年七月乙亥、賜廚眞人廚女封四十戸、田十町、

賜田例

功田賜田、幷寺家神家地者、不須改易、便給本地、〇中略並許之、

〔令義解五軍防〕凡敍勳應加轉者、謂轉是不定之意也、假令元年行軍、十級爲一轉、二年行軍、五級爲一轉之類、依其無定例、故云之爲轉也、皆於勳位上加、若無勳位、一轉授十二等、毎一轉加一等、六等以上兩轉加一等、二等以上三轉加一等、其五位以上、加盡勳位外、仍有餘勳者、聽授父子、謂若父子共在者、理合授父、其有兩轉者、須分授父子也、如父子身亡、毎一轉賜田兩町、謂如父子先有勳六等、而除勳止有一轉者、此則勳少不及加授、仍須賜田兩町、即此名爲賜田、不爲功田也、其六位以下及勳位、加至一等外、有餘勳者聽廻授、謂廻授父子也、不在賜田之限、

〔日本書紀崇峻二十一〕二年〇用明七月、蘇我馬子宿禰大臣、勸諸皇子與羣臣、謀滅物部守屋大連、〇中略大連親率子弟與奴軍、築稻城而戰、於是大連昇衣揩朴枝間、臨射如雨、〇中略爰有迹見首赤檮、射墮大連於枝下、而誅大連幷其子等、〇中略平亂之後、〇中略以田一萬頃賜迹見首赤檮、

〔上宮聖德法王帝說〕戊午年〇推古六年四月十五日、少治田天皇〇推古請上宮王、令講勝鬘經、其儀如僧也、諸王、公主、及臣連、公民、信受無不嘉也、三箇日之內講說訖也、天皇布施聖王物、播磨國揖保郡佐勢地五十萬代、聖王即以此爲法隆寺地也、今在播磨田三百餘町者

〔扶桑略記四推古〕十四年七月、天皇詔皇太子〇厩戸云、宜於朕前講勝鬘經、〇中略天皇亦詔太子、於岡本宮令講說法華經、亦如僧儀、天皇大悅、以播磨國水田二百七十餘町施皇太子、件田初納法隆寺、後割納中宮寺、中宮寺、是太子母后之宮也、

〔日本書紀推古二十二〕十四年五月戊午、勅鞍作鳥曰、朕欲興隆內典、〇中略汝之所獻佛本則合朕心、又造佛像既訖、不得入堂、諸工人不能計、以將破堂戶、然汝不破戶而得入、此皆汝之功也、即賜大仁位、因以給近江國坂田郡水田二十町焉、

〔日本書紀持統三十〕六年十二月甲戌、賜音博士續守言、薩弘恪、水田、人四町、　七年正月丙午、賜船瀨沙門法鏡水田三町、　十年四月戊戌、以追大貳授伊豫國風速郡物部藥與肥後國皮石郡壬生諸石、幷賜

賜田トハ、別勅ヲ以テ給スル所ノ田ヲ云フ、輸租田ナレドモ、未ダ授ケザル間ハ輸地子田ナリ、凡テ賜田ハ、或ハ戰功ヲ賞シ、或ハ政績藝術ヲ襃シ、或ハ絶域ニ使スルヲ優スル等アリ、此田ハ班田ノ時ニ方リテモ改易セズシテ、本地ニ給スル例ナリ、賜田アル人、若シ五位ニ昇リ、或ハ職田ヲ受クベキ官ニ任ゼラルヽトキハ、其田ヲ足シテ位田職田ノ數ニ盈テヽ給スルナリ、若シ犯罪アリテ除名スレバ、追徴スルモノトス、而シテ賜田ニハ、大ニ功田ト混ジ易キ者アリ、五位以上ノ人、勳位ヲ加ヘ盡シテ、仍ホ餘勳アル者ハ、勳位ヲ其父子ニ廻授スルヲ得ルニ、父子ナキ時ハ、田ヲ其身ニ賜フガ如キハ、功田ニ似タレドモ賜田ナリ、且ツ史册上ニハ田ヲ賜フトノミアリテ、其實ハ功田ナル者多シ、然レドモ其證ヲ得ザル者ハ、姑ク此ニ收メタリ、要スルニ賜田ハ、其終身ニ給スルニ似タリ、而シテ荒廢田ヲ賜フ者ハ、開墾ヲ經テ後ニ、之ヲ子孫ニ傳ヘシナリ、又野ヲ賜ヒ、山ヲ賜フガ如キモ、亦賜田ノ類ナルヲ以テ附載セリ、而シテ閑地ヲ賜フガ如キハ、亦開發シテ田トセシメシナラン、

〔令義解〕三田 凡別勅賜ㇾ人田者、名二賜田一、

〔令集解〕十二田 古記云、輸租也、穴云、位職田、及口分田、雜色田等、別勅指ㇾ人給耳、

○按ズルニ、穴博士ノ説ハ、位田職田等ノ定地ヲ、別勅ヲ以テ賜田トシテ給スルヲ云ヘルナラン、

〔延喜式〕二十六主税 凡勘二租帳一者、中略勅旨田、中略爲二不輸租田一、

○按ズルニ、勅旨田ハ別勅ヲ以テ賜フ所ノ田ナリ、事ハ政治部墾田篇ニ具セリ、

〔延喜式〕二十二民部 凡位田、功田、賜田、及神寺等田者、各據二本地一、不ㇾ須二輙改一、中略

凡別勅賜田者、其人授ㇾ位、便滿二位田之數一、職田亦同

〔續日本紀〕十一聖武 天平元年十一月癸巳、任二京及畿內班田司一、太政官奏、親王及五位已上諸王臣等位田

田也、

〔日本後紀十三桓武〕大同元年二月庚申、收故從五位下箭集宿禰虫麻呂功田五町、養老六年以刪定律令功所賜也、依無胤子收焉、

功田施寺

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年閏八月壬戌、紫微內相藤原朝臣仲麻呂等言、〇中略淡海大津宮御宇皇帝〇天智天縱聖君、聰明睿主、考正制度、創立章程、于時功田一百町、賜臣曾祖藤原內大臣、襃勵壹匡宇內之績、世々不絕、傳至于今、〇中略今有山階寺維摩會者、是內大臣之所起也、願主垂化三十年間、無人紹興、此會中廢、乃至藤原朝廷、胤子太政大臣、傷構堂將墜、歎爲山之未成、更發弘誓、追繼先行、則以每年冬十月十日、始闢勝莚、至於內大臣忌辰、終爲講了、此是奉翼皇宗、住持佛法、引導尊靈、催勸學徒者也、伏願以此功田、永施其寺、助維摩會、彌令興隆、〇中略勅報曰、〇中略朕與卿等、共植玆因、宜告所司、令施行、

〔類聚國史百七十九佛道〕天長元年九月壬申、以高雄寺爲定額、幷定得度經業等、正五位下行河內守和氣朝臣眞綱、從五位下彈正少弼和氣朝臣仲世等言云々、至延曆年中、私建伽藍、名曰神願寺、天皇追嘉先功、以神願寺爲定額、今此寺地勢汚穢、不宜壇場、伏望相替高雄寺、以爲定額、名曰神護國祚眞言寺、佛像一依大悲胎藏及金剛界等、簡解眞言僧二七人、永爲國家、修行三密法門、其僧有闕、擇有道行僧補之、又簡眞操沙彌二七人、令轉讀守護國界王經、及調和風雨成熟五穀經等、晝夜更代、不斷其聲、七七年之後預得度、勅一代之間、每年聽度一人、又備前國水田廿町、賜傳二世、爲功田者、入彼寺充果神願者更延二世、自餘依請、

賜田

賜地　賜野　賜山　賜牧　賜林　賜池　賜島　併入

前太政大臣從一位　平清盛（五月十七日、上表、辭太政大臣幷兵伏、八月十日、賜官符、以播磨國印南野、肥前國杵島郡、肥後國八代郡南郷土比郷等、爲大功田、傳子孫、）

〔愚昧記〕仁安二年八月十日甲辰、向左相府（○藤原經宗）亭、依久不參也、言談之次、被示云、今朝左衞門權佐經房持來太政大臣（○平清盛）給公（○公恐功誤）田之宣旨、使事雖引勘宣旨目六、無所見及、仍相尋官之處、天暦年中例云々、以自一條院以來宣旨目錄欲引出、尤道理歟云々、

〔玉海〕文治六年（○建久元年）十二月十二日壬辰、自院（○後白河）被仰前大將（○源賴朝）勳功賞大功田間事、余（○藤原兼實）先日所申出也、　十三日癸巳、自院以宗賴被仰大功田百町可宣旨之由、幷勳功賞衞廳十人可被任之由、但今日、日次不宜、明日可被行云々、卽將軍下向也、仍早旦大功、田事可宣下之由仰之、

〔愚管抄（六）〕文治は六年といふ四月十一日に、改元にて建久になりにけり、元年十一月七日、賴朝卿は京へ上りにけり、（○中略）十二月十八日に、歸りてくだりにけり、前の日大功田百町宣下など給けり、

歿後賜子孫

〔令義解（三田）〕凡應給功田、若父祖未請、及未足而身亡者給子孫、

〔令集解（十二田）〕穴云、（○中略）給子孫者、若下功者不給孫耳、朱云、問上條云下功傳子者、又此條云、父祖未請、及未足身亡者、給子孫者、未知下功人身亡、无子有孫者何、與孫否、答不與孫也、過世次故也、或云、身亡者、給子孫者、稱孫者計世耳、

〔續日本紀（二文武）〕大寶元年八月丁未、先是遣大倭國忍海郡人三田首五瀬於對馬島、冶成黃金、至是詔授五瀬正六位上、賜封五十戶、田十町、幷絁綿布鍬、仍免雜戶之名、（○中略）又贈右大臣大伴宿禰御行、首遣五瀬冶金、因賜大臣子封百戶、田四十町、（註年代暦曰、於後五瀬之詐欺發露、知贈右大臣爲五瀬所誤也、）

〔續日本紀（九聖武）〕神龜元年三月甲申、陸奧國言、海道蝦夷反、殺大掾從六位上佐伯宿禰兒屋麻呂、　四月壬辰、陸奧國大掾佐伯宿禰兒屋麻呂、贈從五位下、賻絁一十匹、布二十端、田四町、爲其死事也、

收功田

〔續日本紀（二十八稱德）〕神護景雲元年十二月庚辰、收在阿波國王臣功田位田、班給百姓口分田、以其土少、

小錦下坂合部宿禰石敷、功田六町奉使唐國、漂著賊洲、横斃可矜、稱功未愜、依令下功、合傳其子、正五位上大和宿禰長岡、從五位下陽胡史眞身、並養老二年修律令、功田各四町、外從五位下矢集宿禰虫麻呂、外從五位下鹽屋連吉麻呂、並同年功田各五町、正六位上百濟人成、同年功田四町、五人並執持刀筆、删定科條、成功雖多、事匪匡難、比校一同下毛野朝臣古麻呂等、依令下功、合傳其子、以上一十四條、當今所定、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年八月甲子、以紫微內相藤原朝臣仲麻呂任大保、勅曰、○中略更給功封三千戸、功田一百町、永爲傳世之賜、以表不常之勳、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年三月辛丑、賜從三位和氣王功田五町、從四位上大津宿禰大浦十五町、

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年二月丁未、賜從三位山村王功田五十町、從四位上日下部宿禰子麻呂、從四位下坂上大忌寸苅田麻呂、佐伯宿禰伊多知、正五位上淡海眞人三船、從五位上佐伯宿禰三野、五人各二十町、從五位下紀朝臣船守、外從五位下民忌寸總麻呂、二人各八町、並傳其子、

〔日本後紀五桓武〕延暦十六年二月辛未、勅故從三位勳二等坂上大宿禰苅田麻呂、正四位上勳二等道島宿禰島足等、寶字之歲、卒遇不虞、奮不顧身、共著其効、是以叙勳之日授二等、加賜功田廿町、並傳其子、而後特以島足准之大功、所賜之田、世々不絕、功既同等賞何殊、科疇庸之典恐有未允、宜其島足功田依前年勅同傳子之限、

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、○中略延暦十七年、上表請骸骨、優詔不許、仍賜功田廿町、以傳其子孫、

〔扶桑略記二十五朱雀〕天慶三年三月九日乙亥、即賞藤原秀鄕、叙從四位下、兼賜功田、永傳子孫、更追兼任下野武藏兩國守、

〔公卿補任六條〕仁安二年丁亥

贈直大壹丸部臣君手息從六位上大石、贈正四位上文忌寸彌〈○彌恐禰誤〉麻呂息正七位下馬養、贈正四位下昔〈○昔恐黃誤〉文連大伴息從七位上粳麻呂、贈從五位上尾張宿禰大隅息正八位下稻置等一十人、賜田各有差、

〔續日本紀九元正〕養老六年二月戊戌、賜正六位上矢集宿禰虫麻呂田五町、從六位下陽胡史眞身四町、從七位上大倭忌寸小東人四町、從七位下鹽屋連古麻呂五町、正八位下百濟人成四町、並以選律令功也、又賜諸有學術者二十三人田、各有數、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年十二月壬子、太政官奏曰、旌功錫命、聖典攸重、褒善行封、明王所務、我天下也、乙巳〈○大化元年〉以來、人々立功、各得封賞、但大上中下、雖載令條、功田記文、或落其品、今故比校昔今、議定其品、大織藤原內大臣、乙巳年功田一百町、大功世々不絕、贈小紫村國連小依、壬申年功田一十町、贈正四位上文忌寸禰麻呂、贈直大壹丸部臣君手、並同年功田各八町、贈直大壹文忌寸智德、同年功田四町、贈小錦上置始連菟、同年功田五町、五人並中功合傳二世、正四位下下毛野朝臣古麻呂、贈正五位上調忌寸老人、從五位上伊吉連博德、從五位下伊余部連馬養、並大寶二年修律令、功田各十町、四人並下功、合傳其子、〈以上十條、先朝所定、〉贈大錦上佐伯連古麻呂、乙巳年功田四十町六段、被他驅率、効力誅姦、功有所推、不能稱大、依令上功、合傳三世、從五位上尾治宿禰大隅、壬申年功田四十町、淡海朝廷〈○天智〉諒陰之際、義興警蹕、潛出關東、于時大隅參迎奉導、掃清私第、遂作行宮、供助軍資、其功實重、准大不及、比中有餘、依令上功、合傳三世、贈大雲星川臣麻呂、壬申年功田四町、贈大錦下坂上直熊毛、同年功田六町、贈正四位下黃文連大伴、同年功田八町、贈小錦下文直成覺、同年功田四町、四人並歷涉戎場、輸忠供事、立功雖異、勞効是同、比校一同、村國連小依等、依令中功、合傳二世、大錦下笠臣志太留、告吉野大兄密、功田二十町、所告微言尋非露驗、雖云大事、理合輕重、依令中功、合傳二世、從四位下上道朝臣斐太都、天平寶字元年功田二十町、知人欲反、告令芟除、論實雖重、本非專制、依令上功、合傳三世、

賜功田

〔令義解戸〕凡應分者、家人奴婢、氏賤不在此限、田宅資財、其功田功封、唯入男女、謂不依財物之法、男女嫡庶、並皆均分也、總計作法、

〔延喜式民部二十二〕凡位田功田賜田、及神寺等田者、各據本地、不須輙改、

〔續日本紀聖武十〕天平元年十一月癸巳、任京及畿內班田司、太政官奏、親王及五位已上諸王臣等位田功田賜田、并寺家神家地者、不須改易、便給本地、○中略並許之、

〔令義解職員一〕式部省

卿一人、掌○中略功臣家傳田、謂有功之家、進其家傳、省更撰修、事、

〔日本書紀持統三十〕四年十月乙丑、詔軍丁筑紫國上陽咩郡人大伴部博麻曰、於天豐財重日足姬天皇○齊明七年、救百濟之役、汝爲唐軍見虜、洎天命開別天皇○天智三年、土師連富杼、氷連老、筑紫君薩夜麻、弓削連元寶兒四人、思欲奏聞唐人所計、緣無衣糧、憂不能達、於是博麻謂土師富杼等曰、我欲共汝還向本朝、緣無衣糧、俱不能去、願賣我身、以充衣食、富杼等任博麻計、得通天朝、汝獨淹滯他界、於今三十年矣、朕嘉厥尊朝愛國、賣己顯忠、故賜務大肆、幷絁五匹、綿一十屯、布三十端、稻一千束、水田四町、其水田及至曾孫也、免三族課役、以顯其功、

〔續日本紀文武三〕大寶三年二月丁未、詔從四位下下毛野朝臣古麻呂等四人、預定律令、宜議功賞、於是古麻呂、及從五位下伊吉連博德、並賜四十町、封百五十戸、贈正五位上調忌寸老人之男、田十町、封百戸、從五位下伊余部連馬養之男、田六町、封百戸、其封戸止身、田傳一世、　三月戊辰、賜從四位下下毛野朝臣古麻呂功田二十町、

〔續日本紀元正七〕靈龜二年四月癸丑、詔壬申年功臣、贈少紫村國連小依息從六位下志我麻呂、贈大雲星川臣麻呂息從七位上黑麻呂、贈大錦下坂上直熊毛息正六位下宗大、贈小錦上置始連宇佐伎息正八位下虫麻呂、贈大錦下文直成覺息從七位上古麻呂、贈直大壹文忌寸知德息從七位上鹽麻呂、

バザルナリ、若シ子ナキトキハ、兄弟ノ子タル養子ニ授ク、又之ヲ傳フルニ就キテ、子數人アルトキハ數人ニ均分シ、其子又數人ノ子アルトキハ、亦數人ニ均分スルナリ、因リテ均分ヲ受ケタル人沒收セラルベキ刑ヲ犯ストキハ、其人ノ分ノミヲ沒收スルナリ、而シテ其田品ヲ論ズレバ、功田ハ輸租田ナリ、

〔令義解三田〕凡功田大功世々不絶、上功傳三世、中功傳二世、下功傳子、謂男女同也、大功非謀叛以上、謂犯惡逆以下者不收已、以外非八虐之除名、并不收、謂上功以下是也、言八虐之外、犯除除名者、不在收限也、假有功田十町、父沒以後、兄弟甲乙各得五町、甲犯除名者、收甲五町、合還公也、

〔令集解十二田〕釋云、師說云、父死以後所有兄弟、不論嫡庶依法均分耳、古記云、一世盡竟傳二世、嫡孫庶孫、各承父分、穴云、太郎腹四世傳、郎腹二世者、取世盡之人分給、未盡待郎腹耳、身死无可承人者亦同之、問得功田功封之人身死去、其子有男女各一人、依法分得了後、女子身死者、其分與女子之子哉、又若无子者、與其夫哉、又於功田等聽作遺言哉、答不及女子之子幷夫也、死日即須授其兄弟及姉妹、若无者還公耳、唯應得遺言也、跡曰、此田不論嫡庶男女、皆爲均分、貞此方令時事可求者何若此中有身死人者、卽傳其子、如此各分得後、女子死者其分何、答傳與遺男也、女子之子不可與分之故者、○中略朱云、問下功傳子者、兄弟分得、然後兄死者、其分何人可得、答遺弟等可得也、兄之子不可得也、稱傳子之故者、稱子者男女養子並同者、未明古記云、下功傳子、謂女子、不入子之例也、今行事女子亦傳、問下功傳子、未知嫡孫承祖若爲處分、答大寶元年七月廿八日、太政官處分、功臣封傳子者、无子不傳、但以兄弟子爲養子者、聽傳其養子、得傳封者、无子亦聽傳於養子、其計世如正子、但以嫡孫爲繼者不得傳封、○中略穴云、大功人犯謀叛以上、未獄成會赦者、會赦猶流也、令因獄成而收、問依斷獄律、會赦者雖可追究、不拷、而以何方術可令獄成、答不加拷而令獄成耳、若不得獄成者、赦免耳、可反大逆及謀反會赦、故不放也、會降官當之時亦不收、爲與雜犯同故也、

〔令集解十二田〕古記云、功田輸租也、

年正月正三位ト爲リ、是ニ至リテ、從四位相當ノ位田ヲ得タリ、

〔雲州消息 下末〕所命位田之事、仰錄某甲、就穀倉院、尋無主位田、來請之輩、已有其數、然而引勘圖帳、可充行之由仰畢、新中納言職封戶、絹米之國相分充之、而偏以緣海可充之由被示送、隨狀左右耳、美濃國公文成省外題畢、濟事史生深知其事歟、謹言、

十二月　日

位田帳

〔延喜式 二十二 民部〕凡諸國品位田帳、附稅帳使每年進之、

位田施寺

〔類聚國史 百八十二 佛道〕延曆十二年二月戊午、播磨國言、故左大臣從一位藤原朝臣永手位田口口町、神護景雲三年、有勅入四天王寺、夫賜位田者、以身爲限、永入寺家、事乖國憲、勅先朝既行、宜莫收還、

○按ズルニ、藤原永手ハ、神護景雲三年二月ニ從一位ニ敍セリ、其後ニ又進ミテ正一位ト爲レドモ、從一位ノ位田ヲ施セルヲ以テ、當時ノ位階ヲ擧シナリ、而シテ延曆十二年ハ、神護景雲三年ヲ距ルコト二十四年、永手ノ薨ゼシ寶龜二年ヲ距ルコト二十二年ナリ、

功田

功田ハ、勳績ニ由リテ賜フ所ノ田ニシテ、大功、上功、中功、下功ノ差アリ、其差ハ傳世ノ長短ニ由リテ立テタルナリ、卽チ大功ノ人ハ、永ク世々ノ子孫ニ傳ヘ、上功ハ三世、卽チ曾孫マデニ傳ヘ、中功ハ二世、卽チ孫マデニ傳ヘ、下功ハ子ニノミ傳フ、而シテ大功ハ八虐中ノ謀反、謀大逆、謀叛ノ罪、上功以下ハ、八虐ニ係レル除名ヲ犯セルニ非ルヨリハ其田ヲ沒收セズ、但シ功田ヲ賜フベクシテ、未ダ受ケズシテ死シ、及ビ其受クル所、賜フベキノ數ニ盈タズシテ死スルトキハ、之ヲ其子孫ニ賜フナリ、サテ子ト云ヒ、二世三世ト云フハ男女ヲ論ゼズ、嫡庶ヲ擇

度度宣旨、召□□幷饗料、不足之甚非无物煩、況乎臨有急事、募□□前物、公用闕乏、職此之由、望請天裁、准畿内彼□〇闕字恐没字件國无主位田、勘納其地子、將爲公用之資者、□大臣宣、奉勅依請者、國宜承知依宜行之、符到奉行、

從五位下守右少辨藤原朝臣國光
外從五位下行右大史海宿禰業恒

天曆五年十二月廿七日

應永定置檢非違使一人令勘徵畿内无主品位田地子拒捍未進輩事

右得穀倉院去□□□八日奏狀偁、檢案内、稱倉田畝之輩、須致地子之辨、而澆季之俗、土浪之民好募權勢、動成拒捍、春時稱舊作、以充他人、爲愁、秋收致訴計、以逆徵使爲事、適示懲誡、還及鬪亂、因之畿内國司幷左右京職、申請拒捍使、令入勘官物□之未進、已爲流例、望請天裁、准件例被下宣旨、於檢非違使廳、永定置使官人、勘徵件拒捍未進之輩、將令知皇憲之不輕者、□□辨藤原朝臣行成傳宣、右大臣宣、奉勅依請者、

長保五年五月二十二日　左大史小槻宿禰奉親奉

同四年十月十九日　右衞門府生竹田種理奉

〔兵範記〕仁平四年十二月十九日丁酉、裏書三位中將殿〇藤原基實御位田省符、可令成進之由、依殿下〇藤原忠通仰、令申民部卿亭了、以侍爲御使、件御位田、近江國犬上東郡有廿町、是故北政所御位田也、彼御入滅以後、于今無主、今被尋出之被成改給省符、召國司廳宣也、殿下御位田、永久之比、以京極大北政所〇藤原師實室御位田、令預改給符、後蓋准其例也、正三位御位田、本數四十町也、雖半分且被立定也、可進廳宣之由、同遣仰國司朝方許了、

〇按ズルニ、三位中將ハ藤原基實ニシテ、關白忠通ノ男ナリ、仁平二年三月從三位ト爲リ、同三

無主位田

神龜五年三月廿八日

〔令集解田十二〕釋云、〇中略神龜五年三月廿八日格云、外位者內位減半給之、女減三分之一、无故不上經一年者停給、案內位、无故不上經二年以上者停給也、

〔續日本紀九聖武〕神龜三年二月庚戌朔、制五位已上薨卒之後、例限六年、勿收其位田、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜九年四月甲申、勅自今以後五位已上位田、薨卒之後、一年莫收、

〔續日本紀四十桓武〕延曆十年二月辛亥、先是五位已上位田、身歿之後、例給一年、如無子者當年收之、至是無問有子無子、聽同給一年矣、

〔延喜式二十二民部〕凡位田者、薨卒之後、一年勿收、

〔續日本紀十一聖武〕天平四年二月戊子、故太政大臣職田位田幷養戶、並收於官、

〇按ズルニ、故太政大臣ハ藤原不比等ナリ、事ハ職田篇收職田條ニ具セリ、參看スベシ、

〔延喜式二十六主稅〕凡勘租帳者、〇中略位田、〇中略未授之間、〇中略爲輸地子田、

〔延喜式二十二民部〕凡無主品位田、移穀倉院、令收其地子、

〔政事要略五十三〕太政官符近江丹羽口國司

應令穀倉院勘納無主位田地子稻事

右得彼院今月十日奏偁、謹案式條偁、无主品位田移穀倉院、令收其地子稻者、如此文者、不論畿內外國、院可收地子者也、而只收畿內、不勘外國、然則或與所行彼此相違、加以授給位田、各爲二分、一分給畿內、一分給外國、爰民部省所行件國號准畿內、普給諸大夫、若其不給之間、口口爲无主位田、至于其地子物、幷口附帳言上、而口口口口口年々稅帳曾不附帳、无主位田地子口口口國宰者、依不下給省符不勞勘納、作口口憑无其主、无心辨濟之所致也、損之甚、空爲人有、重檢事情、此院可給諸國交易商布、年來之間、國宰稱无直之由、曾不勤進納、又畿內調錢、依度々官符宣旨、充色々雜用、適以所遺錢充

女官位田

〔日本後紀 五 桓武〕延暦十六年二月癸亥、勅從五位上島野女王、百濟王孝法、女御○桓武 百濟王惠信、和氣朝臣廣子、橘朝臣常子、後宮○桓武 紀朝臣内子、紀朝臣殿子、藤原朝臣川子、後宮○桓武 錦部連眞奴從五位下弓削宿禰美濃人等位田、宜准男給之、

〔類聚三代格 八〕乾政官符

應全給尙侍尙藏封戸幷位田事

右奉勅、准令給封女悉減半、但尙侍尙藏職掌既重、宜異諸人、量須全給、位田並亦如此、自今以後永爲恒例、

天平寶字四年十二月十三日 ○又見續日本紀

僧尼給位田

〔續日本紀 二十一 淳仁〕天平寶字二年八月辛丑、外從五位下僧延慶、以形異於俗、辭其爵位、詔許之、其位祿位田者、有勅不收、

〔日本後紀 八 桓武〕延暦十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、○中略 姉廣虫、及笄年許嫁從五位下葛木宿禰戸主、既而天皇○孝謙 落飾、隨出家爲御弟子、法名法均、授進守大夫尼位、委以腹心、賜四位封幷位田、

收位田

〔令義解 三 田〕凡應給職田位田人、謂、案、職田位田者、據先既給訖、不可更稱、應、或是衍文乎、其職田位田、得職位則授、去者則收、皆不待班田年也、 若官位之内有解免者、從所解免追、謂、解、解官也、免、免官也、假有正三位位田卌町、犯免官者、三載之後、降先位二等、叙正四位上、即依正四位給廿四町之類也、若解官者、追亦如之也、 其除名者、依口分例、若有賜田者亦追、謂、此亦爲除名者立文也、 當家之内、有官位及少口分應受者、並聽廻給、謂、口分田者待班田年乃給也、 有乘追收、

〔類聚三代格 五〕太政官謹奏 ○中略

位祿位田○

位田賻物

右內位祿料減半給之、如无故不上經一年者停給、女減三分之一 ○中略

元同　玖坪壹町元同　參條廿里拾貳坪壹町元同　拾肆坪壹町元同　拾陸坪壹町元同　同

郡西鄉拾伍條貳里參坪壹町元同　捌坪一町元同

右位田改給如ㇾ件

寬治八年五月廿日　案主史生惟宗

中臣

惟宗

身入部

粟田

紀

官人代清原

少錄惟宗

少丞藤原

○按ズルニ、令ニ據ルニ從五位ノ位田ハ八町ナリ、此ト合ハズ、

外位位田

〔類聚三代格　五〕太政官謹奏

內外五位不ㇾ合ニ同等ㇾ事〇中略

位祿位田賻物

右內位祿料減ㇾ半給之、如无故不ㇾ上、經ニ一年ㇾ者停ㇾ給、女減ニ三分之一ㇾ〇中略

神龜五年三月廿八日

〔延喜式　二十二民部〕凡外五位位田者、減ニ內位半ㇾ、

後宮位田

〔令義解　四祿〕凡嬪以上、〇妃及夫人　並依ニ品位ㇾ給ニ封祿ㇾ、是謂ㇾ欲ㇾ顯ㇾ不ㇾ減ㇾ半、故云ㇾ依ニ品位ㇾ、其封祿重ㇾ優、令ㇾ准ㇾ男、資人位田灼然不ㇾ減、

〔延喜式二十二民部〕凡任官敍位及薨卒、應收給封田者、官下符省、造奏文付內侍令直奏、訖卽施行、（稱直奏者、他皆准此、）皆量便給之、不得阿容、○中略

凡位田功田賜田、及神寺等田者、各據本地、不須輙改、○中略

凡位田者、各爲二分、一分給畿內、一分給外國、其一處所置、不得過十町、但授給之後、偏號成川、不可必改給、若非常流損之國、明成淵潭之處、依實許相換、荒田不在此限、

凡但馬紀伊阿波等國、不得置位田、

凡別勅賜田者、其人授位、便滿位田之數、（職田亦同）○中略

凡授品田者、親王內親王、其數一同、

凡乘田可充品位田者、以全町給之、

〔續日本紀十聖武〕天平元年十一月癸巳、任京及畿內班田司、太政官奏、親王及五位已上諸王臣等位田功田賜田、幷寺家神家地者、不須改易、便給本地、其位田者如有情願以上易上者、計本田數任聽給之、以中換上者不合與理、縱有聽許、爲民要須者、先給貧家、其賜田人先入賜例、見無實地者、所司卽與處分、位田亦同、餘依令條、○中略並許之、

〔新儀式五臨時〕充品位田事

民部省作奏、付內侍奏覽、畢返給之、

〔朝野群載八別奏〕民部省位田充文

民部田所

改給從五位上藤原朝臣　位田拾町事

大和國

城下郡參條參里陸坪一町（元橋後綱）　漆坪壹町（元同）　路東拾伍條貳里參坪壹町（元同）　捌坪壹町

留ム、但シ其家ニ五位以上ノ人アリテ、受クル所ノ位田未ダ其數ニ盈タズバ、免官等ノ人ヨリ進ズル所ノ田ヲ廻ラシ給スルナリ、又歿後ニハ總テ位田ヲ收ムルヲ、是ニモ沿革アリテ、田令ノ釋ニ依レバ、班田ノ年ヲ待タズ、死闕ノ日即チ收メタルヲ聖武天皇ノ神龜三年ニ、薨卒ノ後、六年ヲ限リテ收メ、又光仁天皇ノ寶龜九年ニ、縮メテ一年トシ、子ナキ者ハ當年之ヲ收メシヲ、桓武天皇ノ延暦十年ニ、子ノ有無ヲ問ハズ、共ニ一年ノ間ハ給フコトヽセリ、其六年、一年ト云フハ、滿六年、滿一年ナリ、サテ位田ヲ充ツルニハ、民部省ヨリ奏聞シテ符ヲ其國ニ下シ、諸國ヨリハ品位田帳ヲ造リ、毎年税帳使ニ付シテ民部省ニ進ムルナリ、總テ位田バ輸租田ナルヲ、未給ノ間、即チ無主位田ハ輸地子田ナリ、又己ガ位田ヲ寺ニ施シ、僧ニ位田ヲ賜ヒ、薨後十三年ヲ經テ、始テ位田ヲ收メタルガ如キハ、位田ノ變例ナリ、

〔令義解三田〕凡位田、一品八十町、二品六十町、三品五十町、四品卌町、正一位八十町、從一位七十四町、正二位六十町、從二位五十四町、正三位卌町、從三位卅四町、正四位廿四町、從四位廿町、正五位十二町、從五位八町、女減三分之一、謂此依町減、不至段步也、

〔令集解十二田〕穴云、女減三分之一、謂親王亦同、但嬪已上、依祿令不減耳、問或云、依町成三分、或云、割段步爲三分、兩說何、答依文稱町以上、然則三分、謂以町作三分、不成段步、亦賞爲從重故也、古記云、注女減三分之一、未知嬪以上減不、答祿令云、其嬪以上、幷依品位給封祿、問女減三分之一、未知以町減、爲當至于段步減不、答依町減之、跡云、嬪以上不減也、

〔令集解十二田〕民部省例、〇中略位田、〇中略已上爲輸租田也、穴云、〇中略位田爲其人佃食、治業所給、與口分无異、依理可輸租、但輸租不輸租委曲者、令釋說了、可覆問也、

〔令義解三田〕凡應給位田、未請及未足而身亡者、子孫不合追請、

〔令集解十二田〕釋云、其職田位田者、得職位之日即授、死闕之日即收、不待班田年也、

位田トハ、有品親王及ビ五位以上ノ諸王諸臣ニ、品位ニ從テ賜フ所ノ田ナリ、或ハ諸王諸臣ニ別タンガ爲メニ、有品親王ノ田ヲ品田トモ云ヘリ、而シテ無品親王ニ賜フ所モ亦此類トス、外五位ハ、令條ニ依レバ、內位ト同ジカリシヲ、聖武天皇ノ神龜五年ニ、減半シテ賜フコトトシ、內位ハ無故不上、三年ヲ經レバ給スルコトヲ停ムルヲ、外位ハ一年ヲ經レバ給セザルコトヽセリ、女ハ三分ノ二ヲ賜フベキ例ナリシヲ、淳仁天皇ノ天平寶字四年ニ、尙侍尙藏ニ限リ全給トシ、桓武天皇ノ延暦十六年ニ、島野女王等ニ限リ、男ニ准ジテ之ヲ給セリ、內親王ノ品田モ、舊ハ三分ノ二ナリシヲ、後ハ男親王ノ例ニ同ジカラシム、但妃、夫人、嬪ノ品田位田ハ、元ヨリ全給ナリ、サテ位田ヲ支給スルニハ、畿ノ內外ニテ分給スルコトニテ、例ヘバ八十町ヲ給フベクハ、一分卽チ四十町ハ畿內ニテ給シ、一分卽チ四十町ハ畿外ニテ給スル法ナレドモ、十町以上ヲ一處ニテ賜フコトヲ得ズ、已ニ支給スルノ後ハ、其地假令崩埋侵食ニ遭フトモ改給セズ、但シ位田ヲ賜フベクシテ未ダ受ケズ、及ビ足ラズシテ身死スルトキハ、其子孫追テ請フコトヲ得ザルナリ、又本ヨリ賜田アル人、敍爵卽チ五位ニ昇ルトキハ、其賜田ノ町段ヲ補ヒ、位田ノ數ニ滿タシメテ之ヲ給ス、位田ハ敍爵スレバ班田ノ年ヲ待タズシテ給スルコトニテ、免官、免所居官、官當ヲ犯ストキハ、免ズル所ニ從ヒテ追奪ス、例ヘバ正三位ノ位田ハ四十町ナルヲ、若シ免官ヲ犯セバ斷罪ノ後、先位ニ三等ヲ降シテ正四位ノ下トシ、卽チ正四位ノ位田二十四町ヲ給シ、其餘ヲ奪ヒ、三載ノ後、先位ニ二等ヲ降シテ正四位上ニ敍スル時ハ、仍ホ二十四町ヲ給ス、正四位ノ位田ハ上階下階ノ別ナケレバナリ、又正三位ノ人、免所居官ヲ犯セバ、先位ニ二等ヲ降シテ正四位上ニ敍シ、位田二十四町ヲ給シ、期年ノ後、先位ニ一等ヲ降シテ從三位ニ敍スル時ニ、位田三十四町ヲ給スルナリ、若シ職田アレバ、斷罪ノ後ニ並ニ職田ヲモ收ムルナリ、又除名ヲ犯セバ、盡ク位田職田ヲ收メテ、口分田ノミヲ

按察使

〔類聚三代格十五〕太政官謹奏

按察使幷記事給職田及仕丁事

右國郡官人漁獵黎元、蠹害政法、故置件司、糺彈非違、肅淸奸詐、旣定職員、合有公廨仕丁、伏請按察使給公廨田六町仕丁五人、記事給公廨田二町仕丁二人、謹量議如前、伏聽勅裁、謹以申聞謹奏、奉勅依奏、

養老五年六月十日〇又見續日本紀、政事要略五十三、

〔類聚國史八十四政理〕大同四年六月丙申、勅、觀察使兼帶外任、暫停食封、代以公廨、而陸奧國官多料少、宜按察使公廨給便近之國、

〔延喜式二十六主稅〕凡國司處分公廨差法者、大上國長官六分、次官四分、判官三分、主典二分、史生一分、中國無介則長官五分、下國無掾則長官四分、員外司者、各准當員、〇中略其按察使准當國守、記事准掾、

觀察使

〔類聚國史八十四政理〕大同四年六月丙申、勅、觀察使兼帶外任、暫停食封、代以公廨、而陸奧國官多料少、宜按察使公廨給便近之國、又大宰帥公廨二萬束、給因幡備前備中讚岐伊豫等五國、省遠運費、但非帶觀察使、一依前例、若大貳缺間、其料者准帥闕時、充用蕃客料、

遣唐使兼國

〔類聚三代格十五〕太政官符

應給遣唐使等兼國職田事

右被右大臣宣偁、件人等奉使入唐事須優給、宜准去延曆廿一年十一月廿四日符行之、

承和元年八月廿日

位田

勅所申有實者、被右大臣宣偁、奉勅宜依件給、

弘仁五年正月十五日（○又見政事要略五十三）

〔三代實錄光孝四十九〕仁和二年十一月十一日丙戌、長門國軍毅一人、主帳一人、始給職田、

牧監

〔延喜式民部二十二〕凡佐渡國雜太團給軍毅職田二町、主帳一町、

〔類聚三代格十五〕太政官符

應賜信濃國監牧公廨田事

右被大納言從三位神王宣口、奉勅監牧之司、雖非正職、而離家赴任有同國司、宜以埴原牧田六町爲公廨田、自今以後永爲恒例、但以當土人任者不在賜限、其新任之年、便以牧田稻給佃料町別一百廿束、

延暦十六年六月七日（○又見政事要略）

〔延喜式民部二十二〕凡甲斐國牧監給職田六町、上野國牧監職田亦同、

鎭西府

〔續日本紀聖武十五〕天平十六年正月戊午、太政官奏、鎭西府將軍准從五位官、（○中略）特賜公廨田、將軍十町、副將八町、判官六町、主典四町、奏可之、

鎭守府

〔類聚三代格十五〕太政官符

應給鎭守府府掌二人職田各二町事

右得陸奥國解偁、鎭守府牒偁、檢案內、依太政官去承和十年九月十九日符、准國置府掌二員、夫府掌之職、府國惟同、而久經年祀、未給職田、望請准國被給件田者、國依牒狀謹口官裁者、中納言兼左近衛大將從三位行陸奥出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十一年二月廿日（○又見三代實錄）

〔延喜式民部二十二〕凡陸奥鎭守、太宰等府、府掌各二人、每人給職田二町、

諸國史生博士醫師

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年五月乙丑、太政官奏曰、准令、諸國史生、博士、醫師、國無大小、一立定數、但據神龜五年八月九日格、史生之員、隨國大小、各有等差、其博士者、總三四國一人、醫師者毎國一人、今經術之道、成業者寡、空設職員、擢取之人、繕寫之才、堪任者衆、人多官少、莫能遍用、朝儀平章、博士總國、一依前格、醫師兼任、更建新例、職田事力公廨之類、並給正國、不給兼處、有料之國、名爲正任、無料之國、名爲兼任、其史生者、博士醫師兼任之國、國別格外、加置二人、庶令經術之士、周遍宜揚、功勞之人、普蒙霑潤、奏可、

〔續日本紀十一聖武〕天平四年八月壬辰、勅、〇中略筑紫兵士課役並免、〇中略其國人習得、入三色、博士者以生徒多少、爲三等、上等給田一町五段、中等一町、下等五段、

軍團

〔類聚三代格十五〕太政官符

應給軍毅〇軍毅事要略作軍團職田事

大毅四人　　小毅八人　　主帳四人

右得東山道觀察使正四位下兼行陸奥出羽按察使藤原朝臣緒繼解偁、陸奥國四團軍毅十二人、常直城中、不顧私業、既備機速、曾無微祿、准其勤勞、理須優濟、今見國內、乘田數多佃食者少、伏請准郡司將給職田者、右大臣宣、奉勅依請、

大同四年五月十一日

太政官符

應給軍毅職田事

大毅一人田六丁　　小毅二人田各四町

右得征夷將軍參議從三位左衞門督兼陸奥出羽按察使勳四等文室朝臣綿麿解偁、出羽國司解偁、件毅等常直軍團、不顧私業、量其勤勞、實須優恤、望請以挍出公田、准陸奥國軍毅、給件職田者、使加覆

貞觀四年九月廿二日

太政官符

應﹅准﹅雜米未進數﹅沒﹅郡司職田直﹅事

右得﹅尾張國解﹅偁、檢﹅案內﹅、中島郡貞觀四年違﹅期未進糯米五斗三升五合、荏子三升四合、胡麻子一升、荏子二斗五升、准﹅直稻一十九束一把四分、其代被﹅沒﹅郡司職田﹅、直稻五百六十八束、如今未進數少所﹅沒斯多、加之郡司除﹅職田﹅之外亦無﹅所﹅納、而依﹅少奪﹅多、愁訴寔深、望請准﹅未進數﹅沒﹅件職田直﹅、謹請﹅官裁﹅者、右大臣宣、依﹅請、自餘諸國亦宜﹅准﹅此、

貞觀七年八月一日

（三代實錄十八清和）貞觀十二年十二月廿五日壬寅、制、○中略諸國雜交易物有﹅未進﹅者、准﹅未進之數﹅、沒﹅郡司職田直﹅、

（延喜式二十三民部）凡諸國春米運﹅京者、伊勢、近江、丹波、播磨、紀伊等國、二月卅日以前、尾張、參河、美濃、若狹、越前、加賀、丹後、四月卅日以前、但馬、因幡、美作、備前、讃岐六月卅日以前、備中、備後、安藝、伊豫、土佐、八月卅日以前、並送納訖、若有﹅未進﹅者、准﹅數奪﹅專當郡司職田直﹅、若不﹅足者亦沒﹅國司公廨﹅、

（續日本後紀十八仁明）承和十五年○嘉祥元年二月壬子、陸奧國磐瀨郡權大領外從七位下丈部宗成等特給﹅職田﹅、以﹅視﹅民有﹅方、公勤匪﹅懈也、

（三代實錄十清和）貞觀七年三月廿二日癸卯、以﹅筑前國水田三十町﹅、充﹅對馬島上縣下縣兩郡司統領職田﹅、

（三代實錄十六清和）貞觀十一年七月廿七日癸未、加﹅置美作國苫東苫西二郡司職田十町﹅、

（續日本後紀八仁明）承和六年三月丙申、停﹅給﹅內外權任郡司職田﹅、

（延喜式二十二民部）凡權任郡司、不﹅給﹅職田﹅、但太宰府書生帶﹅郡司﹅者、不﹅在﹅此例﹅、

應諸國雜米立進納限并責未進怠事

右得大宰府解偁、檢民部省式云、諸國舂米運京者、伊勢、近江、丹波、播磨、紀伊等國、二月卅日以前、尾張、參河、美濃、若狹、越前、丹後、四月卅日以前、但馬、因幡、美作、備前、讃岐、六月卅日以前、並送納訖、若有未進者、准調庸例、割公廨令辨備者、又延暦十四年七月廿七日格云、寶龜四年閏十一月廿(〇廿原脱、今據一本補、)三日、下民部省符偁、頃者諸國雜米、未進數多既闕國用、仍檢案內、寶龜元年五月十五日下諸國符偁、舂米撿領已上專當其事、史生已上充綱領送、舂運違限解却見任、又奪公廨一依前符者、右大臣宣、奉勅自今以後若有未進雜米、無問多少國司史生已上、皆奪公廨沒爲官物、主典已上、並即貶考、專當官者、解却見任、其郡司主帳已上、咸取職田、解任貶考、亦同國司者、今被右大臣宣偁、奉勅依少奪大事實不穩、而斛米疋絹一物未進、則偏稱格式、悉奪公廨、於事思量深乖弘恕、自今以後宜國司史生已上各作差法、准未進數割其公廨隨色辨備進納京庫、但其未進之物、徵納以充公廨、其省寮計會每年勘出、自餘事條一依先符者、謹案件文、專論他國、未及西道、是緣物不納京庫事不經所司也、今府庫所納雜米、修理官舍器仗、並選士衞卒粮、厨司染所之使料等、總三千七百八十餘斛、或正稅或府儲、年料舂運、色別有數、而國郡懈緩未進猥積、因斯納官雜物貢進違期、府中例用、闕乏多時、寔依懲革無文格制未施也、望請新立程期以責未進、但時澆政劇、憲法難守、准式立限甚以促近、今須筑前筑後肥前六月卅日以前、豐前肥後八月卅日以前、豐後十月卅日以前、並爲進納之期、若有過期未進之國者、貶考解任一從先格、又案件格國司既割公廨而辨備、郡司更奪職田以沒官、試使國司公廨或補未納、郡司職田復被納官、然則未進之代何物辨塡、年中之用何當支給、加以公廨者闕負之儲也、所塡之色觸類多端、重望先以職田辨濟未進、若未進數多乃奪公廨、然則懈惰之吏勤勵更新、檢領之官催督自休、貢進合期例用贍給、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅立制之初不忍苛酷、宜貶考解任此度停止、自餘事咸依請、

〔類聚三代格八〕太政官符

大宰府國司

〔三代實錄十八 清和〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅、制、○中略諸國司已下、到任之後、留京者停給事力公廨田、但殊被徵召、未經一年歸國者、不在此限、

〔延喜式二十二 民部〕凡國司已下、到任之徒、留京者停給事力並公廨田、但殊被徵召、未經一年歸國者、不在此限、○中略

凡遙授國司、不給公廨田幷事力、

〔令義解三 田〕凡在外諸司職分田、大宰帥十町、大貳六町、少貳四町、大監、少監、大判事二町、大工、少判事、大典、防人正、主神、博士一町六段、少典、陰陽師、醫師、少工、算師、主船、主厨、防人佑一町四段、諸令史一町、史生六段、大國守二町六段、上國守、大國介二町二段、中國守、上國介二町、下國守、大上國掾一町六段、中國掾、大上國目一町二段、中下國目一町、史生如前、

〔延喜式二十二 民部〕凡志摩國司、不充事力、其職田五町、以伊勢國田給之、○中略

凡陸奥鎭守、大宰府等府掌各二人、毎人給職田二町、

島司

〔類聚國史百五十九 田地〕大同二年十月丙子、大宰府言、壹伎多褹兩島、按出隱田一百卌町、須准諸國例賜島司公廨田、並郡司職田、以外悉班田百姓口分云々者、許之、

郡司

〔令義解三 田〕凡郡司職分田、大領六町、少領四町、主政主帳各二町、狹鄕不須要滿此數、

〔令集解十二 田〕朱云、於法擬郡司不見、不可得田者、○中略古記云、問狹鄕皆隨鄕法給、如何其意、答准百姓口分之例、增減耳、問公廨職田、當國郡无田者、遙受以不、答亦受、跡云、狹鄕不須要滿此數、未知其意、答與百姓口分共相折給耳、穴云、狹鄕不須要滿此數、未知欲遙受者聽乎、答可聽、今師云、不聽也、

〔東大寺正倉院文書十六〕遠江國濱名郡天平十二年租帳夾名帳

漆佰伍拾玖町肆段貳佰壹拾陸步應輸租

陸町郡司職田

〔令集解田十二〕古記云、公廨田不輸租、問國司公廨田以誰人作、役事力作也、

〔東大寺正倉院文書十六〕遠江國濱名郡天平十二年租帳夾名帳

捌佰伍拾捌町漆拾肆歩堪佃

伍町陸段壹佰參拾參歩不輸租〇中略

陸段公廨田

〔日本後紀五桓武〕延暦十六年二月壬申、是日停給畿內國司事力幷職田、

〔類聚國史八十四政理〕延暦十七年正月甲辰、云々、停止公廨、一混正稅、割正稅利置國儲及國司俸、又定書生及事力數、停公廨田、

〔類聚國史八十四政理〕延暦十七年六月乙酉、勅國司借貸官稻、先已禁斷、至有違犯、法亦不容、今聞自停職田、只待食料、非有借貸更無資粮、宜令一年之料三分之一、準其差法、且借且補、

〔日本紀略桓武〕延暦十九年八月丁亥、依舊更置國司公廨田、

〔三代實錄十二淸和〕貞觀八年三月七日癸未、太政官判、定新置介掾諸國公廨田事力數、甲斐、能登、丹後、石見、周防、長門、土佐、日向八箇國介給公廨四分、公廨田一町六段、事力五人、飛驒一國掾公廨三分、公廨田一町二段、事力四人、

〔享祿本類聚三代格六〕可停給國司以下到任之後留京者事力公廨田事

右造式所起請云、頃年國司到任所後、未勘知前、申請官符、規要留京、量其本情、無有他計、爲貪事力及公廨田、徒損公家、還潤私門、論之政途、甚無謂、伏望如此之輩、永停充給、以絕奸虛、但別有仰事、暫被徵召、未經一年歸於國者、不在此限者、從三位大納言兼左近衛大將陸奧出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十二年十二月廿五日〇又見三代實錄及政事要略五十九

公廨田

闕郡司職田千八百卅町八段

伊勢國十八町（延喜九年帳所載）

尾張國廿二町（延喜七年帳所載○中略）

右得廚家去延暦十二年八月十三日解偁、案式條、位田、國造田、采女田、膂力婦女田、賜田等、未授之間、輸地子田者、檢案內、元慶六年八月廿五日、下民部省符偁、大納言以上、並諸道博士、職外无主職田地子混合正税、又偁、闕郡司職田地子同混合正税者、又檢案內、七年五月十三日、下諸國符偁、得廚家解口、郡司職田地子、元來無主之間、付地子帳檢納廚家、而去年八月廿五日、以其地子稻可混合正税之狀、官符被下民部省、卽下符諸國已了、今檢案內、任權官者每國過半、預榮爵者每年兼任、其位田公廨田以乘田被充行、因玆諸國地子、頻稱減少、廚家用途常以闕乏、望請如舊納件地子、以充廚用者、右大臣宣、奉勅依請、但民部省符下知諸國、早令返進者、而年來地子帳加注大納言以上諸博士等職田、仍令民部省勘申其由云、依太政官元慶六年符旨、以大納言以上並諸道博士、及郡司職田地子可混合正税、省符下知諸國、而依同七年官符令返進、可以郡司田地子可混正税之狀、省符爰依載一符返進兩色、其後未有改給、依式履行者、望請大納言以上并諸道博士无主職田、依元慶符早被下知、抑以乘田地子充年中例用度之遺頗有其數、然則前件等田、徒爲地子田混納其輸、於公有損、爲廚无益、重望請返進件等田地子稻混合正税、但闕郡司職田之數、隨時增減无定數者、此據近年帳所令勘申、至於采女田、定額之外、先補之輩准據格條、一身之後爲无主田者、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣忠平宣、奉勅依請、○中略

延喜十四年八月八日

○

〔延喜式二十六主税〕凡勘租帳者、○中略公廨田、○中略爲不輸租田、

廨田、○中略爲輸地子由、

〔令集解田十二〕民部例、○中略闕郡司職田、○中略公乘田、已上不輸租田、

〔東大寺正倉院文書十六〕遠江國濱名郡天平十二年租帳夾名帳

玖拾參町陸段捌拾伍步、應輸地子、

陸町、闕郡司職田、

〔三代實錄陽成四十二〕元慶六年九月二日辛未、先是民部省言、主稅寮解偁、式云、職田爲輸租田、○輸租田、恐當作不輸租田、其未授之間、爲輸地子田、今檢畿內無主職田收穀倉院、雖不載格式、而事是爲例、至于外國、不論存亡、永爲租田、非只違式、亦有公損、然而既無證驗、無由勘徵、請大納言已下及諸博士等、每有其闕、令式部省移送以備勘會、但其地子混合正稅、將存公益、又諸國郡司等、或遭喪解任、或其身死去、未補之間空經年序、如此之類、最繁有徒、而所進租帳、不見其由、不得勘出、商量事情、似有遺漏、請國郡司、每年三月三十日以前、令同省移送、其地子亦同混合正稅、太政官處分依請、下知式部民部訖、

〔三代實錄陽成四十四〕元慶七年十月廿日癸丑、勅令七道諸國返民部省去年所下國郡司職田地子混合正稅符、先是太政官厨言、闕○闕原作國、據一本改、郡司職田地子、無主之間、注地子帳檢納厨家、而去年八月二十五日符偁、得民部省解偁、主稅寮解偁、郡司未補之間、其職田空經年序、租帳不注其由、是故無由勘出、商量事情、似有遺漏、望請每年三月卅日以前、令式部省移送、其地子混合正稅者、官符下省、省符下國訖、今檢任權官者每國過半、賜兼官者每年兼倍、其公廨位田必給乘田、是以諸國地子頻稱減少、太政官厨用、常煩闕乏、所謂職田加混正稅者、月俸日資何以支之、望請返收省符、依舊檢納地子、從之、

〔政事要略五十三〕太政官符民部省

應行雜事五箇條事

一應返進諸國雜田二千三百六十六町九段五十二步其地子稻混合正稅事○中略

四町、文明法者、是理國之急務也、而進業者寡矣、宜給四町、針博士承前之例所給四町、今減一町定三町、自餘諸博士依前例給之、仍擇取中品以上、色別定給、勿令相貿、自今以後永爲恒例、

延暦十年二月十八日

太政官符

紀傳博士一員

右右大臣宣、奉勅、割直講員、置件博士、其官位同直講、料田依例、

大同三年三月廿一日

〔三代實錄清和三〕貞觀元年六月廿五日己酉、文章博士職田元給四町、今加二町、

〔延喜式民部二十二〕凡文章博士職田五町、算博士四町、

坊令職田

〔類聚三代格十五〕太政官謹奏

應給職田坊令事

右謹案令條、左右京每條置坊令一人、督察所部、惟人是憑、而任居要籍、秩無微俸、至于除補、競事辭遁、伏望特給職田二町、優恤其身、令勤職掌、臣等商量如前、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

延暦十七年四月五日

聞

收職田

〔續日本紀十一聖武〕天平四年二月戊子、故太政大臣職田位田養戶、並收於官、

○按ズルニ、故太政大臣ハ藤原不比等ナリ、其薨ゼシハ養老四年八月ニ在リ、是ニ至テ凡ソ十三年ヲ歷テ、始テ職田ヲ收ム、

無主職田

〔延喜式民部二十二〕凡畿外諸國、無主職田者、每有其闕、式部省移送主稅寮、納其地子、混合正稅、

〔延喜式主稅二十六〕凡勘租帳者、〇中略公廨田、〇中略爲不輸租田、其位田職田、〇中略未授之間、及遙授國司公

山背國二町（相樂郡）

近江國一町（野洲郡）

右位田米年可收、而依宣旨改置陰陽博士職田、

曆博士職田三町

山背國二町（久世郡）

右圖籍注曆博士職田

近江國一町（野洲郡元位田）

右今改置曆博士職田

醫博士職田四町

攝津國一町（豐島郡）

山背國二町（相樂郡）

近江國一町（高島郡竝元位田）

右今改置醫博士職田

針博士職田三町（元四町今減一町）

山背國二町（紀伊郡）

右圖籍注針博士職田

近江國一町（高島郡元位田）

右今改置針博士職田

以前被右大臣宣偁、奉勅今聞所行職田、彼此相貿無有定處、或以博士田給助敎、或以助敎田給直講、正名之理不可如此、然五經者是九流之源也、崇本之道當殊其品、宜給明經博士五町、助敎四町、直講

右圖籍注、文章博士職田、今改置書博士職田、

算博士職田三町

河內國一町讚良郡

山背國一町久世郡竝元位田

右今改置算博士職田

近江國一町坂田郡

右圖籍注右大臣職田、今改置算博士職田、

算博士職田三町

攝津國一町河邊郡元位田

右今改置算博士職田

山背國一町綴喜郡元位田

近江國一町神崎郡元位田

右今改置算博士職田

天文博士職田四町

攝津國一町豐島郡

山背國二町綴喜郡

近江國一町野洲郡

右今改置天文博士職田

陰陽博士職田四町

河內國一町若江郡

右今改置明法博士職田

音博士職田三町
河內國二町若江郡
右圖籍注音博士職田
近江國一町野洲郡元位田
右位田米年可收、而依宣旨改給音博士職田、

音博士職田三町
河內國二町河內郡
右圖籍注音博士職田
近江國一町坂田郡
右圖籍注右大臣職田、而依宣旨改給音博士職田、

書博士職田三町
山背國二町久世郡元位田
右今改置書博士職田
近江國一町神崎郡元位田
右今改置書博士職田

書博士職田三町
攝津國二町島上郡一町元並位田　豐島郡一町
右今改置書博士職田
近江國一町野洲郡

文章博士職田四町

河內國一町 若江郡

右圖籍注文章博士職田

山背國二町

久世郡一町 元位田　同郡一町 元位田

右今改置文章博士職田

近江國一町 野洲郡

右圖籍注文章博士職田

明法博士職田四町 元三町今加一町

山背國三町　久世郡一町 元位田

同郡一町　愛宕郡一町 元位田

右今改置明法博士職田

近江國一町 野洲郡元位田

右今改置明法博士職田

明法博士職田四町 元三町今加一町

大和國一町 平群郡元賜田

右今改置明法博士職田

山背國二町 相樂郡元位田

右今改置明法博士職田

近江國一町 神崎郡元位田

右今改置明法博士職田

右今改置直講職田

近江國一町（高島郡元位田）

右圖籍注右大臣職田、今改置直講職田、

直講職田四町（元三町今加一町）

攝津國二町（島下郡元位田）

右今改置直講職田

山背國一町（葛野郡元位田）

右今改置直講職田

近江國一町（野洲郡元位田）

右今改置直講職田

直講職田四町（元三町今加一町）

大和國一町（平群郡元賜田）

右今改置直講職田

山背國二町

久世郡一町（元位田）

右圖籍注直講職田

相樂郡一町（元位田）

右今改置直講職田

近江國一町（高島郡元位田）

右今改置直講職田

攝津國二町島上郡

右圖籍注助教職田

山背國一町紀伊郡元位田

右今改置助教職田

近江國一町栗太郡元位田

右今改置助教職田

助教職田四町元三町今加一町

攝津國二町豐島郡一町河邊郡一町

右圖籍注助教職田

山背國一町紀伊郡元位田

右今改置助教職田

近江國一町栗太郡元位田

右今改置助教職田

直講職田四町元三町今加一町

河內國一町石川郡元位田

右今改置直講職田

山背國二町

久世郡一町

右圖籍注直講職田

相樂郡一町元位田

右今改置大納言職田

以前得民部省解偁、被左辨官宣偁、右大臣宣、奉勅、今聞、所行職田、彼此相濫、或以左大臣田給右大臣、或以右大臣田給大納言、分職之理、不可如此、宜選中品以上色別點定、然大納言以上、其職惟重、因此殊給畿内二分、外國一分、有應授職田者、各以當色給之、不得彼此任意請替、自餘職田、亦准於此、自今以後、永爲恒例者、謹依宣旨、選定職田、具件如前、

延暦九年八月八日

諸道博士職田

〔類聚三代格十五〕太政官符

應定博士職田事

合博士廿八人應給職田七十三町内五十二町外廿一町

博士職田五町

河内國二町志紀郡

右圖籍注博士職田

山背國一町綴喜郡

右圖籍注助教職田、今改置博士職田、

近江國二町

野州郡一町

右今改置博士職田

甲賀郡一町

右圖籍注博士職田

助教職田四町元三町今加一町

野州郡二町　蒲生郡二町

右圖籍注二大納言職田一

高島郡二町元故右大臣正二位大中臣朝臣位田

右今改置二大納言職田一

大納言職田廿町內十四町外六町

河內國十町

志紀郡一町元故正四位下大中臣朝臣子老位田

讚良郡二町一町元故正四位上藤原朝臣數賞位田、一町元故從五位下笠朝臣賀祜位田、

高安郡二町一町元故正五位下文室眞人水通位田、一町元故正四位下藤原朝臣牧貴位田、

河內郡一町元故從五位上藤原朝臣鳳子位田

茨田郡一町元故從五位下菅朝臣賀祜位田

若江郡三町一町元故正四位下大中臣朝臣子老位田、一町元故從五位下藤原朝臣姉位田、○若江郡町數不ㇾ合、恐有二一誤一、

山背國四町

愛宕郡二町元故從五位下正月王位田

久世郡二町元故正四位下伊勢朝臣老人位田

右今改置二大納言職田一

播磨國六町揖保郡

五町

右圖籍注二大納言職田一

一町元太政大臣位田

右今改置右大臣職田

大納言職田廿町 内十四町 外六町

大和國二町 平群郡

右圖籍注大納言職田

河内國八町

若江郡二町

右圖籍注大納言職田

河内郡二町 一町元故□大臣贈従一位藤原朝臣位田、一町元故従五位下大原眞人夜奈麿位田、

若江郡三町

一町 元故従三位多治比眞人長野位田

一町 元故正四位下伊勢朝臣老人位田

一町 元故正四位上藤原朝臣数實位田

志紀郡一町 元故従四位上美作女王位田

右今改置大納言職田

山背國四町

乙訓郡二町

右圖籍注左大臣職田、今改置大納言職田、

久世郡二町 元故従四位下藤原朝臣春連位田

右今改置大納言職田

近江國六町

紀伊郡一町

右圖籍注大納言職田、今改置左大臣職田、

相樂郡一町元故從四位下藤原朝臣春連位田

右今改置左大臣職田、

播磨國拾町明石郡三町印南郡一町賀古郡六町

右圖籍注左大臣職田、

右大臣職田卅町內廿町外十町

攝津國十町島上郡八町島下郡二町

右圖籍注大納言職田、今改置右大臣職田、

山背國十町久世郡五町○此條恐有脫文

一町元太政大臣職田　二町元右大臣贈從一位藤原朝臣位田

二町元故從五位下酒人忌寸召位田

右今改置右大臣職田、

播磨國十町揖保郡

五町

右圖籍注右大臣職田、

一町元太政大臣職田

右今改置右大臣職田、

二町元故右大臣贈從一位藤原朝臣位田

二町元故從五位下酒人忌寸召位田

久世郡二町一町元故從五位下紀朝臣全[illegible]位田、一町元故從五位下桀井宿禰[illegible]形位田、

右今改置二太政大臣職田一

綴喜郡一町元故從三位多治比眞人長野位田

久世郡一町元故從五位下櫻井鉢鶴位田

右今改置二太政大臣職田一

近江國十町栗太郡

播磨國三町揖保郡

右圖籍注二太政大臣職田一

左大臣職田卅町內廿町外十町

河內國五町高安郡二町若江郡一町河內郡二町

右圖籍注二右大臣職田一、今改置二左大臣職田一、

攝津國十町

豐島郡五町

右圖籍注二右大臣職田一、今改置二左大臣職田一、

島下郡二町一町元故正四位下大中臣朝臣子老位田、一町元故從五位下上毛野公大川位田、

河邊郡三町二町□故從三位多治比眞人長野位田、一町元故外從五位下雛波全信位田也、

右今改置二左大臣職田一

山背國五町

相樂郡一町　久世郡二町

右圖籍注二右大臣職田一

大臣納言職田

〔東大寺正倉院文書二十九〕但馬國天平九年正稅帳
新任國司壹人、比及秋收給食料、稻參佰壹拾參束陸把、
守外從五位下大津連船人、起九月七日迄十二月卅日、合百十二日、公廨田二町、准穫稻充日別二
束八把、
○按ズルニ、但馬國ハ延喜民部式ニハ上國トシタレド、本文守ノ公廨田ノ二町ナルヲ以テ推
考スルニ、此時ハ中國ナリシナリ、
〔日本後紀五桓武〕延曆十六年三月甲午、勅畿內國司新至任者、皆限八月卅日、依式給粮、今停職田、割租
爲料、收租之後、須得其分、宜改舊例、限十一月卅日、
〔令義解三田〕凡職分田、謂、以理解官、及致仕者、准職封減半、其國郡司以理解、其職田即收、不可准此、太政大臣卅町、左右大臣卅町、大納言廿町、
〔拾芥抄中末御給〕太政大臣中略職田四十町 左右大臣中略職田三十町 內大臣中略職田無之 納言中略
職田廿町
〔類聚三代格十五〕太政官符
合職田一百卅町
內九十五町自元置六十町、今加廿五町、外卅五町
太政大臣職田卅町內廿七町、外十三町
大和國廿町城下郡十町、添上郡十町
右圖籍注太政大臣職田
山背國七町
相樂郡二町元故右大臣正二位大中臣朝臣位田
綴喜郡一町元故從五位下多治比眞人黑麿位田

給付、非當年之故、朱云、謂以公力營種食者用正稅者、未明、或云、免雜徭之故、可食私粮也、當年苗子者、未知積年苗子可爲何物、答爲官物耳、依數給付者、未知折取功力分給乎、答不折全給也、法所許故也、反當苗子依數給付者、假十二月內至任者可給也、正月者不給耳者、違令釋耳、京官田雖闕用功力不營種者、問史生職田何、同不、先云、同者何、古記云、依法給之、謂史生田六段應得稻三百斤、造米十五斛、計一年三百六十日、卽一日料米四升六分之一充、此、是依法給之、但充外餘者、成官物及公廨等物耳、其郡司不在給例、問闕官田用公力營、○營下恐脫種字、未知如何、答文稱用公力、不稱役人夫、則知以官物作也、一云、役雜徭也、問會水旱年若爲處分、答无事耳、一云、請辭云國司公廨田、若不得隨不得、而給大稅也、

〔令義解田三〕凡外官新至任者、比及秋收、依式給粮、謂秋前至任、年實未收、故比及秋收、量給公粮、假如中國守職田二町、准稻當一千束、新任守、六月到任者、准計年內所殘六月、卽給稻五百束之類也、

〔令集解田十二〕養老八年正月廿三日格云、凡新任外官、五月一日以後至任者、職分田入前人、其新人給粮、限來年八月卅日、若四月卅日已前者、田入後人、功酬前人、卽粮料限當年八月卅日、○又見延曆交替式、

〔東大寺正倉院文書四十三〕薩摩國天平八年正稅帳

新任國司史生正八位上勳十二等韓柔受郞從一人、幷二人、

起七月廿七日、盡十月廿九日、合玖拾貳日、單壹佰捌拾肆人、食稻漆拾參束壹把、自七月廿七日至八月卅日、合卅三日、依國司部內巡行食法、日別充七把、九月十月二箇月、依公廨食法、月別充廿五束、　酒貳斗陸升肆合、

○按ズルニ、田令集解ニ、和銅五年六月十六日ノ格ヲ引キテ、國司巡行部內、史生食公廨日米二升酒八合ト云ヘリ、今日別充七把ト云ヘルハ、舂テ米トスレバ二升一合ナリ、蓋シ舂功ヲ給セルナラン、酒貳斗陸升肆合ハ、三十三日間、巡行ノ食法ニ依リテ給スル所ニシテ、恰モ日別八合ニ當ル、又史生ノ公廨田六段ノ穫稻ハ三百束ニテ、卽チ月別二十五束ナリ、

數、隨地寬狹、取中上田、一分畿內、一分外國、隨闕收授、勿使爭求膏腴之地、○中略許之、

〔延喜式 二十二 民部〕凡任官叙位及薨卒、應收給封田者、官下符省、造奏文付內侍、令直奏、訖即施行、(辨官直奏者、他皆准此、)皆量便給之、不得阿容、

〔令義解 三 田〕凡在外諸司職分田、交代以前種者入前人、(謂大納言以上職分田、亦准此例、但闕官田者不在准例、)若前人自耕未種、後人酬其功直、闕官田用公力營種、所有當年苗子、新人至日依數給付、(謂公力者、雜徭也、當年者、自正月至十二月也、假有新人後年正月到任者、去年苗子不可更給也、)

〔令集解 十二 田〕穴云、郡司終身之任、不合有交代、故郡司者不云者、問大納言以上職田何、答亦放此、但作令日不云內官者、條內多論在外事故也、問於京官以何日為交代日、答以任官日耳、若於任符給之說一如外官也、跡云、謂依任符至日為限、若同符有二人相代、而一人種訖、一人下苗而未種者、已種人得、未種人不得耳、但今官符云、四月卅日內至者入後人、五月一日以後至者入前人者也、朱云、在外諸司職分田、未知郡司職分田何、同不、答郡司長任人也、不可云交代、故不入此文者、先云、但唯此文雖死亡犯罪解、但前種者入前人也、未種死亡解任者、後人可得者何、問交代前後、依何可定、答以任符至為定耳、明知代之故也、大納言以上得職田等、亦准此條者、遙授國司不可得職田者、古記云、交代以前種者、謂已殖訖也、蒔種者入、未種例也、分佃謂賣與他人也、問公廨職田者、名其理若為、答外官食料給田、謂之公廨田耳、○中略釋云、用公力雜徭之類也、當年猶言一年也、假令正月到任者、去年苗子依數給耳、案稱當年、即知去年苗者不合也、跡云、當時官田用功力營種、新人至日、功力相折耳、當年謂假令元年各被召、而二年春至之類不合給也、穴云、問闕官田用公力營種、所有當年苗子、新人至日依數給付者、未知給新人之時、可折公力之代哉、答須折所用官物之代耳、問大納言以上闕官日何、答不同此例、宜為公田賃租也、(郡司職田亦准此、)十二月以前為當年、問令釋云、當年猶言一年也、假令正月至任者、去年苗子依數給耳、不知誰長、答以十二月以前為當年、然則正月至任者不可

武天皇ノ延暦十六年ニ、畿內國司ニ職田ヲ給スルコトヲ停メシガ、十七年ニ至リ、其制ヲ全國ノ國司ニ及ボシ、其穫ル所ノ稻ヲ正稅ニ混ジテ出擧シ、其利息ヲ以テ俸ニ充テ、幷ニ借貸ヲ聽セリ、借貸トハ、無利息ニテ貸スヲ云フ、而ルニ十九年ニ至リテ、復其職田ヲ置クコト、ナレリ、又遙授國司及ビ任ニ到リテ後ニ、京ニ留リテ一年ヲ經タル者ハ、職田ヲ受クルコトヲ得ザレドモ、遣唐使ニシテ國司ヲ兼ネタル者ニハ、授ケタルコトアリ、サテ國司等ノ職田ハ、事力ヲ以テ營種セシムルナリ、郡司ノ職田ハ、狹鄕トテ田地不足ノ地ナレバ、口分田ノ例ニ準ジテ、必ズシモ全給セズ、例ヘバ男一人ノ口分田ハ二段ナルヲ、狹鄕ニテ一段半ヲ受クベケレバ、大領ノ職田六町ハ全受スルコトヲ得ズシテ、四町半ヲ受クルナリ、而シテ權任郡司、擬郡司ハ職田ヲ受クルコトヲ得ズ、

凡テ職田ハ不輸租田ナレドモ、郡司ノ職田ハ輸租田ニシテ、其租ヲ官ニ納メ、其餘ヲ受クルナリ、而シテ闕官田、卽チ無主職田ハ、總テ輸地子田ナリ、

〔令集解 十二 田〕穴云、私案職田、依官仕功所給、更无進租、○中略

古記云、職田不輸租也、

〔延喜式 二十二 民部〕凡別勅賜田者、其人授位、便滿位田之數、職田亦同

〔令義解 三 田〕凡應給職田位田人、謂、案職田位田者、據先既給訖、不可更稱應、或是衍文乎、其職田位田、得職位則授、去者則收、皆不待班田年也、若官位之內有解免者、從所解免追、謂、解、解官也、免、免官也、假有正三位位田卅町、犯免官者、三載之後降先位二等、叙正四位上、卽依正四位給廿四町之類也、若解官者、追亦如之也、其除名者、依口分例、若有賜田者亦追、謂、此亦爲除名者立文也、當家之內、有官位及少口分應受者、並聽廻給、謂、口分田者、待班田年乃給也、有乘追收、

〔令集解 十二 田〕釋云、其職田位田者、得職位之日卽授、死闕之日卽收、不待班田年也、

〔續日本紀 十一 聖武〕天平元年十一月癸巳、任京及畿內班田司、太政官奏、○中略其職田者、民部預計合給田

古事類苑

封祿部三

職田 公廨田併入

職田、又ハ職分田ト云フ、其職官ニ因リテ給スル所ノ田ナリ、其之ヲ賜フ者ハ、内官ニ在リテハ、太政大臣、左右大臣、大納言、及ビ諸道ノ博士、助教、直講、坊令ニシテ、外官ニ在リテハ大宰府ノ府掌以上、諸國ノ史生以上、博士、醫師、及ビ郡司、軍毅等ナリ、而シテ職田ハ、班田ノ年ヲ待タズ、職官ヲ得レバ即チ給シ、犯罪アリテ解官シ、及ビ身死スレバ、即チ收ムル例ナレドモ、藤原不比等ノ如キハ、薨後十三年ヲ歷テ始テ收メタリ、但シ内官ノ人ハ、理ヲ以テ解官シ、及ビ致仕スルトキハ、職封ニ準ジテ半給スレドモ、外官ハ即チ全收セラル丶ナリ、又職田ハ、交代以前ニ種ヲ下シタルハ前人ニ入レ、前人既ニ耕シテ未ダ種エザルハ、後人其田ヲ受ケテ功直ヲ前人ニ酬ユ、而シテ田ヲ前人ニ屬スルトキハ、秋收ニ至ルマデ穫ラン所ノ年實ヲ計リ、公粮ヲ後司ニ給ス、但シ前任去任ノ後等ニテ、其田闕官田タレバ、其間ハ雜徭ヲ以テ佃種スル故ニ、新任ノ人、就職赴任ノ日ニ、苗子ヲ徭丁ニ給付ス、又元ヨリ賜田アル人、職田ヲ得ベキ官ヲ得レバ、賜田ノ數ヲ補ヒ、職田トシテ賜フ、又位田アル人ハ、職田ヲ累給スルナリ、外官ノ職田ハ、又公廨田トモ云ヘリ、

公廨田ハ、唐制ヲ按ズルニ、諸司ニ給スル所ノ名ナルヲ、我邦ニハ外官ノ職田ニモ、在京ノ諸司田ニモ、並ニ此稱アリ、在京ノ諸司田ヲ公廨田ト稱スル事ハ、政事部諸司田篇ニ詳ナリ、國司ノ職田ハ大ニ因革アリテ、桓

タリシ忠功ニ依テ、大國三箇國、闕所數十箇所被拜領タリシカバ、朝恩身ニ餘リ、其侈リ日ヲ驚セリ、

〔神皇正統記後醍醐〕抑彼高氏、公家にまいりし其功はまことにさかるべし、すゞろに寵幸ありて抽賞せられしかば、ひとへに賴朝卿天下をしづめしまゝの心ざしにのみ成にけるにや、いつしか越階して四位に叙し、左兵衞督に任ず、拜賀のさきにやがて從三位して、程なく參議從二位までにのぼりぬ、三ヶ國の吏務守護、及びあまの郡庄を給はる、

〔梅松論上〕大將軍○足利高氏の叡慮無雙にして、御昇進は申不及、武藏相摸其外數國の守を以、賴朝卿の例に任せて御受領有、

留守所下

可ㇾ令㆘早任㆓先度國宣旨㆒稻富名栢大夫高家孫□□成光進退領知㆒田肆段單田事

右件田者、依㆘爲㆓稻富名內㆒先國司花山院大納言〇藤原通雅之時可ㇾ被ㇾ返㆓付本名㆒之由有㆓御下知㆒被ㇾ付畢、但件田四反者爲㆓彼名內㆒者也、而洩㆓先度御下知㆒之間、類地之上者、同可ㇾ蒙㆓御下知㆒之由依ㇾ申、如ㇾ元所㆓充給㆒也、仍可ㇾ令㆓進退領知㆒之狀如ㇾ件、

弘安八年正月廿九日

稅所 花押

國司代左近大夫將監高橋朝臣 花押

〔異本元弘日記〕元弘四年二月、尊氏賜㆓武藏下總常陸三箇國㆒、直義遠江國、義貞上野播磨二箇國、同義助駿河國、義顯越後國、正成攝津河內二箇國、長年因幡伯耆二箇國、

〔太平記十二〕安鎭國家法事附諸大將恩賞事

此外國々ノ武士共、一人モ不ㇾ殘上リ集ケル間、京白河ニ充滿シテ、王城ノ富貴、日來ニ百倍セリ、諸軍勢ノ恩賞ハ暫ク延引ストモ、先大功ノ輩ノ抽賞ヲ可ㇾ被ㇾ行トテ、足利治部大輔高氏ニ、武藏、常陸、下總三箇國、舍弟右馬頭直義ニ遠江國、新田左馬助義貞ニ上野、播磨兩國、子息義顯ニ越後國、舍弟兵部少輔義助ニ駿河國、楠判官正成ニ攝津國河內、名和伯耆守長年ニ、因幡伯耆兩國ヲゾ被ㇾ行ケル、其外公家武家ノ輩、二箇國三箇國ヲ給リケルニ、サシモノ軍忠有シ赤松入道圓心ニ、佐用庄一所計ヲ被ㇾ行、播磨國ノ守護職ヲバ、無ㇾ程被㆓召返㆒ケリ、サレバ建武ノ亂ニ圓心俄ニ心替シテ、朝敵ト成シモ、此恨トゾ聞ヘシ、其外五十餘箇國ノ守護、國司國々ノ闕所大庄ヲバ、悉公家被官ノ人々拜領シケル間、誇㆓陶朱之富貴㆒、飽㆓鄭白之衣食㆒矣、

千種殿幷文觀僧正奢侈事附解脫上人事

中ニモ千種頭中將忠顯朝臣ハ、〇中略主上〇後醍醐隱岐國ヘ御遷幸ノ時、供奉仕テ、六波羅ノ討手ニ上

尋問候之處、於殿下テハ可成濟物之由依有仰、辭申國務之由所申候也云々、次第勿論上人虛言歟、能保卿之妄言歟、只依賴朝申狀致沙汰許也、其上事不可知之由答了、不足言々々々、　十六日壬子、此日東大寺上人參入、申備前國事、國司遣前使不可國務歟、又申云、能保卿自可國務之由被稱、仍令沙汰不可叶候也云々、以此等旨仰合能保卿（以宗賴朝臣仰也）　一切不可沙汰之由申之、仍仰此之旨、於前使事ハ、強不可申之由仰也、依上人承伏申可給證文之由、仰合能保卿、仰宗賴遣御敎書於長官定長卿之許了、其旨仰上人了、今日依神事上人在門外也、

〔明月記〕建仁三年三月十日、人云、伊與國務被仰大宮中納言、（○藤原公經）

〔愚管抄〕（六）さて又ゆゝしき事の出來たりけり、承元二年五月十五日、法勝寺の九重塔の上に、雷落て、火附て燒にけり、あさましき事にて有けり、（○中略）やがていそぎ作らるゝ、御沙汰の候べき也、當時燒候ぬるハ、御死の轉じ候ぬるぞ、やがて作られ候なんずれば、御滅罪生善に候べしと申されたりければ、やがて伊豫の國にて公經大納言作れとて、ほどなく作り出んとしたくしけるを、是に、伊豫ふたげられて、世の御大事もかけなん、葉上と云ふ上人、その骨ある、唐に久しく住たりし者也とて、葉上に、周防の國をたびて、長房宰相奉行して申さたしたりけり、

〔仁和寺御日次記〕承久元年五月三日丁酉、改丹後守光朝被任成實、是前中納言範朝卿、去月廿三日夜、於桂川邊、斬前左衞門尉大江久實并左兵衞尉朝近等頸之故、蒙勅勘被召給國了、

〔百練抄〕（十五後嵯峨）寬元二年十一月十六日癸丑、五節舞姬參入、公卿（中宮大夫隆親卿、侍從宰相資季卿、）國（權大納言定雅卿、紀伊國、左中辨顯朝朝臣、甲斐國、）

○按ズルニ、右ハ五節舞姬ノ用途ヲ紀伊甲斐二國ヨリ獻ゼシ事ヲ記スルモノニテ、其二國ハ定雅顯朝二人ノ領スル所タリ、

〔常陸國總社文書〕常陸國留守所下文

十二月廿五日庚戌、於伊豆國相摸兩國者、永代早可知行之由被仰下之間、二品已被申領狀訖、又可上洛之由同所被仰也、被申御返事、

〔吾妻鏡十〕文治六年（○建久元年）二月十一日乙未、上總國者爲關東御管領九箇國之内、以源義兼被補任國司之處、去年御辭退之間、正月廿六日與遠江國同日被任國司、（平親長）仍今日目代等國務云云、

○按ズルニ、賴朝ノ知行九箇國ハ又是ヲ其一族重臣ニ分テ之ヲ其國司ニ任ゼリ、卽チ平賀惟信ヲ相模守、平賀義信ヲ武藏守、山名義範ヲ伊豆守、源廣綱ヲ駿河守、足利義兼ヲ上總介、源邦業、安田義定ヲ前後ニ下總守トシ、源遠光ヲ信濃守トシ、安田義資ヲ越後守トシ、藤原季光ヲ豐後守ト爲セリ、

〔玉海〕建久四年四月七日癸卯、申剋宗賴朝臣持來賴朝卿返札、播磨備前兩國猶可被付東寺興福兩寺之由也、召寄上人等可仰合云々、仍東大寺上人早可召之由仰宗賴了、　九日乙巳、今日東札到來、播磨備前國等可付上人之由先日令申、而今日狀には可改任國司、（播州泰經、備州能保）但兩寺造畢之上ハ各不可關國勢、上人可沙汰云々、大旨雖同、聊相違、是非速惑了、然而就今度申狀、可致沙汰歟、被任國司バ、猶國司行吏務バ、所出可注造寺之用途歟、然間左右只不能自專耳、　十日丙午、此日召東大寺大佛上人（春乘房重源、今ハ號南无阿彌陀佛也、）幷彼寺長官左大辨定長等、備前國可被付東大寺之由仰之、但件國可給能保卿、遂可知行人也、仍可申任國司云々、然而大佛殿造營之間、能保卿一切不可口入、上人一向可沙汰云々、上人申云、トあひさたハ凡不可叶事候、一向被仰付、盡成不日之功哉云々、重仰云、自元如被仰、只名。代。國。司也、依可被改任國司、遣先使事バかりハ、定納言致沙汰歟、於自餘國務者一切不可知、上人一向可被沙汰也者、上人申云、然者誠可相勵大厦之功歟、不可煩庄園幷濟物皆可被免之由、於永宣旨召物者可濟之由仰也、各一承諾退出了、其後余（○藤原兼實）以使者此次第仰遣能保之許之處、答云、上人申云、每事萬石能保可沙汰給、其外事不可知云々、而今仰相違如何、卽上人之欲退出召留

許也、而此仰尤珍重也、他事有如此者天下忽可直立歟、親雅云、任人只一人、何樣可候哉、仰云、先々必有加任事、諸司二分中不及沙汰輩一人可計任者、　三年十月二日己巳、藏人辨親經來云、今日參院、奏兩條事、宇佐造營事、所申可然、只以造營早出來可爲先也、○中略件事、先日經房卿申云、此造營忽不可叶、只賜一州於大宮司公通、可被造營云々、余○藤原兼實以此狀奏聞、仰云、只今不可賜國、只募受領功可造進之由可仰者、而余重奏云、件公通先年進二萬疋功、可成給對馬島之由蒙仰、其事默止、已經年序了、其上暗成功之條、定有所申歟、綻擁怠之基也、御定者、理之所致也、然而公通不可受勅定、仍只可賜一州可宜歟、此事雖非先規、以造營早成可爲先之故也、抑總案此儀、人定致難歟、先大宮司兼任受領希代例也、平相國始申行此事、已非吉例、加之公通罪科未決之間、浴此恩、定有傍人之嘲歟、仍以此子細所奏聞也、

〔吾妻鏡九〕文治五年三月十三日乙卯、鶴岳八幡宮之傍、此間被建塔婆、今日上空輪、二品○源頼朝監臨給、主計允行政故奉行之、還御之後被整去十一日院宣御請文云云、

　二月十七日御教書、三月十一日到來、兩條之仰跪以承候畢、

一　大內殿舍門廻廊及築垣事

右明年正月以前可令修造之由、頭辨奉書拜見給候畢、此御時尤可有御沙汰候、任先例之符案、仰所課之諸國、可被到其勤候也、然者賴朝知行八箇國之分、注載別紙可下預候、云閑院御修理、云六條殿經營、連々勤仕にてハ候へども、其事を勤て候へバとて、此事をば更無辭退之思候、云朝家御大事、云御所中雜事、雖何箇度候賴朝こそ可勤仕事にて候へバ、愚力の及候ハん程ハ可令奔走候、但諸國逐日庄園者增加仕候、國領者減少候へバ、受領之力も皆被察候、定無計略候歟、尤以不便恩給候、然而賴朝知行國々ハ、縱如然仰にても、全不可顧善惡候、方々之公事隨堪相營候也、○中略

　三月十三日　賴朝請文

和泉守藤長房（光長朝臣給）　陸奥守藤業宗（前中納言雅頼卿給、元近江守、）　近江守藤雅經（參議雅長給）　越中守同家
隆（元侍從前中納言光隆卿給）　因幡守源通具（權中納言通親卿給）　伊與守源季長（右大臣給）　美作守藤公明（左衞門督實家卿給）

〔吾妻鏡　六〕文治二年三月十三日辛卯、關東御分國々乃貢、日者依朝敵征伐事頗懈緩、然者被免以前分、自今年可合期沙汰之由所被申京都也、

諸國濟物事、治承四年亂以後、至于文治元年、世間不落居、光朝敵追討沙汰之外、暫不及他事候之間、諸國之土民各結官兵之陣、空忘農業之勤、就中關東之武士、爲討手敵人數度合戰、都鄙之往反于今無其隙候、頼朝知行國々相摸、武藏、伊豆、駿河、上總、下總、信濃、越後、豐後等也、被優免去年以往未濟物、自今年隨國々堪否可令勵濟之由所沙汰候也、凡不限此九箇國、諸國一同可爲事歟、總被優免去年以往未濟物令安堵窮民、自今年有限濟物任先例可令致沙汰之旨、可被下宣旨候也、仍言上如件、頼朝恐々謹言、

三月十三日　　　　　　頼朝

進上　帥中納言殿（經房）

〔玉海〕文治二年四月十三日庚申、基親親雅等來門外申雜事、親雅爲院御使申除目之間事、丹波國給實教之間事也、（元知行周防國、爲被充造東大寺、國司不可執行、仍其替給丹波、元前攝政國也、而辭退云々、）以元周防守公基可被任丹波守、周防國一向被付東大寺事、然而猶若可有國司號者、可被任公基歟、公頼（實教男侍從也）又不可任國司者、非此限、可計申者、曰被下濟物免除宣旨之時、以造寺長官行隆并上人（重源）等連署解狀被下宣旨了、然者國司專不可能入歟、但爲後代尙被置假名之國司、又何難有哉、兩ヶ共在御定、若又可被尋知左大臣歟、此次能保朝臣以讃岐國可令任相親者旨、先日除目之時申之、而依事多不申沙汰、此便仰付親雅、且問能保、且可奏事由旨示合了、親雅歸來云、丹波國司事、只以公頼可任丹波、周防事忽不可有沙汰、元國司不可改之故也、讃岐事任中改任無謂云々、此仰尤可然、元自所存也、然而依權門申事一旦令聞食

人面々、直懇望申之間、且募勳功之賞、且爲添二品眉目、殊所及嚴密御沙汰也云云、各可令知行國務之由云云、皆是當時關東〇征夷大將軍源賴朝御分國也、

〔玉海〕文治元年十二月廿七日丙子、午刻右中辨光長朝臣、持來賴朝卿書札幷折紙等、〇中略折紙狀云、

可有御沙汰事〇中略

一國々事

伊豫　右大臣〇藤原兼實御沙汰　　越前　內大臣〇藤原實定御沙汰

石見　宗家卿可給之　　越中　光隆卿可給之

美作　實家卿可給之　　因幡　通親卿可給之

近江　雅長卿可給之　　和泉　光長朝臣可給之

陸奧　兼忠朝臣可給之　　豐後

賴朝欲申給、其故者、云國司、云國人、同意行家義經謀叛、仍爲令尋沙汰其黨類、欲令知行國務也、〇中略

十二月六日　　賴朝在判

〔吉記〕文治元年十二月廿六日、今夜有任官事、〇皇帝紀抄係二十九日 上卿別當家通 參議雅長卿書之、藏人宮內權少輔親經宣下之、〇中略

和泉守同長房兼　近江守藤雅經　陸奧守同盛實　越前守同公守兼　越中守同家隆　因幡守源通具　石見守藤業盛　美作守藤公明　伊豫守源季長

〔吾妻鏡六〕文治二年正月七日丙戌、北條殿飛脚、自京都參著、御使雜色鶴二郎等、去冬十二月廿六日入洛、令申給之趣、同廿七日有其沙汰、解官配流等、藏人宮內權少輔親經宣下、別當家通藤宰相、雅長書除目云云、〇中略

ト被仰下シガ、ソレニ重盛逝去〈○治承三年七月廿九日薨〉ノ後、即被召上之條、死骸何ノ過怠カ候、

〔玉海〕治承三年十一月十四日戊辰、今日入道相國入洛、宗盛卿去十一日首途、令參嚴島、而自路呼還、相共上洛、武士數千騎、人不知何事、凡京中騷動無雙、今夜出仕雖非無所恐、爲勤公事出仕、不可有横災之由深存忠、仍令企參仕之處、果以無爲、凡洛中人家運資財於東西、誠以物忩亂世之至也、　十五日己巳、凡世間物忩無極云々、無聞實説、子剋人傳云、天下大事出來云々、不聞委事間、寅剋大夫史隆職注送云、

關白藤基通　内大臣同　氏長者同

止關白　藤基房

止權中納言中將等　同師家

　上卿權中納言雅賴、職事中宮權亮通親、詔書宣命等權辨兼光作云々、

余〈○藤原兼實〉披見此狀之處、仰天伏地、猶以不信受、夢歟非夢歟、無所辨存、此事由來者、法皇〈○後白河〉奴公越前國〈故入道内大臣(重盛)知行國、維盛朝臣傳之、〉幷被補白川殿倉預〈前大舍人頭兼盛〉已上兩事法皇過怠云々、三位中將師家越二位中將基通任中納言、師家年僅八歲、古今無例、是博陸之罪科也、凡此外法皇與博陸同意、被亂國政之由入道相國攀緣云々、然之間昨日夕禪門率數千騎隨兵入洛之後、天下鼓騷、洛中遽動、故不可云、

元曆二年〈○文治元年〉六月十日辛酉、此日除目也、入道關白〈○藤原基房〉給能登、〈本上西門院知行、而依亡辭退、被給備後云々、〉余和泉、〈實可辭退、弃置國也、然而不能申左右、〉二位大納言兼房給出羽、〈遼遠之境、雖不備當要、拜領一州之仁、是泰經卿勤申法皇云々、可謂善政云々、〉此外事不記、抑和泉國司申補基輔息小男也、雖在中陰中、依有例也、依思被父之遺德、強所申補也、人以爲可云々、

〔吾妻鏡　四〕元曆二年〈○文治元年〉八月廿九日己卯、去十六日有小除目、其聞書今日到來、源氏多以承朝恩、所謂義範〈伊豆守〉惟義〈相摸守〉義兼〈上總介〉遠光〈信濃守〉義資〈越後守〉義經〈伊豫守〉等也、〈○中略〉其〈○伊豫〉外五箇國事者、任

內殿上垸飯 遠江守盛實朝臣調進、件國大宮權大夫入道後盛知行、無定文、入信濃守實教朝臣、○中略調云々、及深更未進云々、件國右大將宗盛知行、　色目同殿上、但不可具酒云々、　同臺盤所垸飯 播磨守行盛調進、但日來忘却、觸當日催、忽令

中宮女房衝重六十前 卅前越前守通盛朝臣、件國平宰相教盛知行、卅前紀伊守爲盛、件國右兵衛督知行、　同侍所饗卅前 越中守雅隆朝臣、件國前治部卿光隆知行、

同廳卅前 和泉守信兼

東宮殿下卅前 尾張守知度、件國中宮御分也、无定文、依爲親王時上達部殿上人饗、宛備前守時房、　同女房衝重卅前 丹後守經正朝臣、件國內大臣知行、

同藏人所饗卅前 常陸介經仲、件國大藏卿泰經朝臣知行、　同廳卅前 駿河守維時、件國右大將宗盛卿知行、　啓陣卅前 石見守能頼、件國藏人右小辨光雅知行、

昇居粉物長櫃於便所、

十合 丹波守行雅調進、(中略)件國春宮權大夫兼雅知行、　十合 因幡守隆清調進、(中略)件國大宮大納言隆季知行、　十合 若狹守師盛調進、(中略)件國大宮權大夫經盛知行、

十合 甲斐守爲明調進○中略

已上四合舁立西中門內西腋、自御前不見之所也、保延陣頭侍者等先舁居長櫃於釣殿、供市餅之後、陣頭侍者等自長櫃取出之、就欄下獻殿上人、今度只可舁立閑所之由、有左府命云々、

此外十合美作守基輔朝臣可調進云々、件國右府知行、籠物五十棒、土左守宗實調進之、親王之時定文被充資頼、件人去年除目下名去任、依爲國所課、新司調進之、件國左府所被知行也、今度次第被作不可有籠物之由、被執然而爲知行之國所課、依不可自由、調進之由被稱云々、仍不取出之、早可返國之由大進光長下知云々、

〔源平盛衰記十一〕靜憲與入道問答事

入道○平清盛大ニ嗔レル體ニテ發ニテ對面セラレタリ、宣タルハ、○中略小松內府ハ其器コソ恐ニ候シカドモ、勅定ニハ忠ヲ抽テ志ヲ運(ハコビ)キ、サレバ保元平治ノ合戰ニモ命ヲバ爲君輕シ、尸ヲバ戰場ニ捨ントコソ擧動侍シカ、及天聽、人口ニモホメラレキ、其後大小度々ノ騷動モ、毎度ニ選レ進セテ、院宣ト申、勅命ト申、旁御感ニ不預ト云事ナシ、サレバ越前國ヲ重盛ガ給シ時ハ、子々孫々マデ

期可放火者、因茲被改賜石見云々、攝二代之政、親三國之務、雖朝恩餘於身、貪利之名可流于後代者歟、

仁平元年二月四日乙巳、右中辨光頼朝臣來、申春日祭雜事、右少辨資長申曰、祈年祭猪、近江國未進者、件國本禪閤〇藤原忠實掌吏務、今度除目相傳已了、然者依下名之前申禪閤、仰曰、目代俊弘申曰、先例不過今日、必所牽進也、定無延怠歟、以此由仰資長了、

〔山槐記〕永曆元年十一月十三日丁亥

一備前國司申、宇佐使供給諸庄園土作對捍任先宣旨被催促事、

仰依前關白命可宣下者

件國大殿〇藤原伊通御沙汰也、仍自彼殿下給此解狀申此旨、

大殿仰云、依神事所申也、早可宣下者、

〔源平盛衰記〕一清盛息女事

抑日本秋津嶋ハ、僅ニ六十六箇國、平家知行ノ國三十餘箇國、既半國ニ及ベリ、其上庄園五百箇所、田畠ハイクラト云數ヲ不知、綺羅充滿シテ、堂上花ノ如ク、軒騎群集シテ門前成市、

〔山槐記〕治承三年正月二日辛酉、後聞、內御方臺盤所菓子六十合、爲院司所課、仍爲大藏卿泰經朝臣奉行、舊年遣仰越前守通盛朝臣許之處、召使存國所課之由、持向沙汰人許、件國內大臣〇平重盛知行國也、即獻請文之後忘却、當日任例署預粥口渡等鉢酒瓶等借請法勝寺、遣國司許之處、申一切不承之由、相尋之處、次第如此云々、仍院臺盤所人々所集繪折櫃菓子有七十合、忽被渡之、件菓子還御之後被奉送內裏、是恒例事也、　六日乙丑、親王之時、以承曆例饗膳等被計充諸國者也、立坊之後、藏人所啓陣等相加、重被充國々云々、〇中略所々居饗

賜國

〔續日本紀 七元正〕養老元年十月戊寅、正三位阿部朝臣宿奈麻呂、正四位下安八萬王、從四位下酒部王、坂合部王、智努王、御原王、百濟王良虞、中臣朝臣人足等、益封各有差、

〔續日本紀 八元正〕養老三年十月辛丑、詔曰、〇中略賜一品舍人親王內舍人二人、大舍人四人、衞士三十人、益封八百戸通前二千戸、二品新田部親王內舍人二人、大舍人四人、衞士二十人、益封五百戸通前一千五百戸、

〔日本紀略 一九條〕正暦五年九月廿六日、前中納言藤原文範加給封戸五十烟、

〔大槐秘抄〕上達部は、封戸たしかにえで、節會、旬、もしは臨時の御宴の祿を給はりて、はふ〳〵候ばかり也、祿法はめのれうなどに候也、それは多々にて候、おほよそみなたえ候にけり、忠雅中納言のゐて候花山院と申所は、京極の太政大臣〇藤原師實の內大臣に任たる最前のとしの封戸をもちてつくりたる屋に候、家は我ちからをもちてつくりたるがはへは候とぞ申事にて候が、これぞ封をもてつくりたる所にて、其まゝにいまだやけぬ家にて候、今の上達部は、封戸すこしもえ候はず、庄なくばいかにしてかはおほやけわたくし候べき、近代の上達部、おほく國を給はり候は、封戸のなきがする事なめりと思候に、めさるゝこそ力をよばぬ事なれ、

〔殿暦〕嘉承元年九月廿九日丁巳、今夜祇薗神人於河原呼、是丹波國司を訴申云々、　卅日戊午、今日候內、自院有召、仍戌剋許參入、是大衆事也、民部卿被候、數剋之後各退出、余〇藤原忠實還參內侍宿、祇薗神民沙汰也、件神民向內府〇源雅實云々、雖然今夜不向云々、內府是丹波國司兄也、件國彼內府沙汰也、仍神民可行向內府許也云々、

〔台記〕天養二年〇久安元年正月廿六日壬申、大和守源清忠遷任石見守、件石見、攝政殿〇藤原忠通親吏務、本賜備前伊賀、今又加賜之、前後相合三ヶ國、去年以清忠申任大和、親吏務、遣殿下侍男共被撿注國內田、衆徒大興、追却御使、其後衆徒帶兵仗籠居興〇興下恐脫福字寺內、誓云、御使重下向時、暫合戰、及命終之

増封

右弟子依有宿念、建圓成寺、後太上皇、勸誘隨喜、微微發願、雖出妄心、一一莊嚴、專由聖慮、方今佛前供養、香油未飽、僧房住持、衣鉢猶乏、弟子所賜別勅封戶、准之家途既爲衍溢、是故算數輸物、先分五十烟廻向功德、普及三千界、人生有限、恩賞無口、死後還公、是大理也、女弟子敬白、

○

〔日本書紀孝德二十五〕天豐財重日足姬天皇○皇極四年○大化元年六月庚戌、○中略以大錦冠授中臣鎌子連、爲內臣、增封若干戶云々、

○按ズルニ、封邑ニ戶數ヲ擧グルコト始テ此ニ見ユ、

〔日本書紀天武二十九〕朱鳥元年八月辛巳、是日、天○天恐衍皇太子、大津皇子、高市皇子、各加封四百戶、川島皇子、忍壁皇子、各加百戶、　癸未、芝基皇子、磯城皇子、各加二百戶、

〔日本書紀持統三十〕三年閏八月丁丑、以直廣壹授直廣貳丹比眞人島、增封一百戶、通前、　五年正月乙酉、增封、皇子高市二千戶、通前三千戶、淨廣貳皇子穗積五百戶、淨大參川島百戶、通前五百戶、正廣參右大臣丹比島眞人三百戶、通前五百戶、正廣肆百濟王禪廣百戶、通前二百戶、直大壹布勢御主人朝臣、與大伴御行宿禰八十戶、通前三百戶、其餘增封各有差、　六年正月庚午、增封、皇子高市二千戶、通前五千戶、

〔續日本紀文武三〕慶雲元年正月丁酉、二品長親王、舍人親王、穗積親王、三品刑部親王、益封各二百戶、三品新田部親王、四品志紀親王各一百戶、右大臣從二位石上朝臣麻呂二千一百七十戶、大納言從二位藤原朝臣不比等八百戶、自餘三位已下、五位已上十四人各有差、　壬寅、詔御名部內親王、石川夫人、益封各一百戶、

〔續日本紀元明六〕和銅七年正月己卯、益二品氷高內親王食封一千戶、

靈龜元年正月甲午、三品泉內親王、四品水主內親王、長谷部內親王、益封各一百戶、

賜封施寺

貞節、感歎之深、宜此二人各賜邑五十戸、其家原音那加賜連姓、

〔續日本紀 稱德 二十五〕天平寶字八年十二月乙亥、大和守正四位上坂上忌寸犬養卒、○中略 九歲○天平勝寶 爲兼造東大寺長官、特賜食封百戸、

〔日本後紀 平城 十三〕大同元年四月丁未、是日參議從四位上兼行右衛士督但馬守藤原朝臣緒嗣、正五位下行侍從左兵衛佐藤原朝臣嗣業等、返上先帝○桓武 所賜別勅封三百戸、卽令從五位下中衛權少將兼春宮亮藤原朝臣眞夏、勅曰、先帝特所賞封也、不可更納、

〔日本紀略 淳和〕天長七年六月丁卯、從三位百濟王慶命、位封之外特給封五十烟、

〔續日本後紀 仁明 九〕承和七年八月辛亥、先是參議從三位中務卿源朝臣定、上表乞退所職、是日參議中務卿職依請許之、但別勅令食封百戸、

〔續日本後紀 仁明 十七〕承和十四年十月戊午、二品有智子內親王薨、○中略 頗涉史漢、兼善屬文、元爲賀茂齋院、弘仁十四年春二月、天皇○嵯峨 幸齋院花宴、俾文人賦春日山莊詩、各探勒韻、公主探得塘光行蒼、○中略 天皇歎之授三品、于時年十七、○中略 尋賜召文人料封百戸、

〔續日本後紀 仁明 二十〕嘉祥三年二月壬午、有勅封戸百烟、特給源朝臣良姫、

〔大鏡裏書〕皇太后宮 高子 御事 淸和天皇后、陽成院母儀、

贈太政大臣 長良公 女、母贈正一位大夫人藤原乙春、元慶六年正月七日、爲皇太后宮、寬平八年九月廿二日、廢后位、同廿三日、賜封四百戸、

〔日本紀略 圓融 六〕天延二年八月十四日己丑、勅給前太宰帥源高明朝臣封三百戸、

〔菅家文草 十二 願文〕爲尚侍藤原氏 ○宇多宮人藤原時平女褒子 封戸施入圓成寺願文 寬平元年正月三日

女弟子尚侍從一位藤原朝臣敬白

施入播磨國封戸五十烟、

封トモ云フ、

增封ハ、本封ノ外、特旨ヲ以テ封戸ヲ增益スルヲ謂フナリ、故ニ又益封トモ云フ、

賜國ハ院宮攝關大臣納言參議等ニ闕國ノ國守ヲ賜ヒ、其所得ヲ收メテ以テ公私ノ用ニ供セシムルヲ謂フナリ、蓋シ中世以降、封戸ノ制漸ク弛廢セシカバ、代フルニ此新法ヲ以テシタルニテ、攝關ニシテ親ラ三國ノ吏務ヲ掌リ、將軍ニシテ九國ヲ知行スルモノアリ、因テ其國ヲ指シテ知行國トモ沙汰國トモ云ヒ、其國守ヲ謂テ名代國司若シクハ假名國司ナド云ヘリ、而シテ其之ヲ賜ヒタル年限ノ如キモ、初ハ必ズ國司ノ一秩四年ヲ以テ限トセシガ、後ニハ希ニ之ヲ子孫ニ傳ヘシメタルモノモアリキ、猶ホ年官年爵篇、官位部國司篇、政治部實官位篇等ヲ參看スベシ、

制度

〔令義解 四祿〕凡令條之外、若有特封及增者、並依別勅、

〔令集解 二十三祿〕朱云、有特封者、未知一端何若、假令臨時六位以下如給封歟、答、假令四位五位等如給封耳、又神寺等給耳、增者假大納言以上、及三位以上等、帶給數外增給耳、

〔令義解 四祿〕凡寺不在食封之例、若以別勅權封者、不拘此令、權謂五年以下、

〔令集解 二十三祿〕朱云、未知此文勅爲不稱年限歟、答然也、若勅不稱權字者爲別哉何、

賜封例

〔延喜式 二十二民部〕凡別勅賜封、若其人授位任官、便即廻充、

〔續日本紀 二文武〕大寶二年十月甲辰、太上天皇〇持統幸參河國、十一月丙子、行至尾張國、〇中略賜國守從五位下多治比眞人水守封一十戸、　庚辰、行至美濃國、授不破郡大領宮勝木實外從五位下、國守從五位上石河朝臣子老封一十戸、　乙酉、行至伊勢、國守從五位上佐伯宿禰石湯賜封一十戸、

〔續日本紀 五元明〕和銅五年九月己巳、詔曰、故左大臣正二位多治比眞人島之妻家原音那、贈右大臣從二位大伴宿禰御行之妻紀朝臣音那、並以夫存之日、相勸爲國之道、夫亡之後固守同墳之意、朕思彼

〔日本紀略村上三〕天暦三年十月廿四日癸巳、今日左大臣〇藤原實賴被奉辭故太政大臣〇藤原忠平信濃國封物之表、卽遣勅答、

尾張公

〔日本紀略圓融六〕天祿元年五月廿日庚申、固關警固、贈故太政大臣從一位藤原朝臣〇實賴正一位、封尾張國、爲尾張公、謚曰淸愼公、

参河公

〔日本紀略圓融六〕天祿三年十一月十日丙寅、奏故太政大臣〇藤原伊尹薨之由、詔贈故太政大臣藤原朝臣正一位、封参河國、爲参河公、

遠江公

〔日本紀略圓融六〕貞元二年十一月廿日丙午、奏故太政大臣〇藤原兼通薨由、廢朝三个日固三關、詔贈正一位、封遠江國、爲遠江公、謚曰忠義公、食封賚人、並同生日、本官如元、

駿河公

〔日本紀略一條九〕永祚元年七月廿日、詔贈故太政大臣藤原朝臣〇賴忠正一位、封駿河國、爲駿河公、謚曰廉義公、

相模公

〔日本紀略一條九〕正暦三年七月十五日丙午、詔贈故太政大臣藤原朝臣爲光正一位、封相摸國、爲相摸公、

甲斐公

〔日本紀略後一條十四〕長元二年十月廿二日丁未、今日贈故太政大臣藤原朝臣〇公季正一位、封甲斐國、爲甲斐公、謚曰仁義公、

〔左經記類聚雜例〕長元二年十月廿二日丁未、申行故大相國薨後雜事、上侍從中納言、文章博士爲政勘申謚號、仁義公、主計寮勘申封國、甲斐、右少辨作宣命、今日儀准故法住寺大臣〇藤原爲光御例申行也、

賜封　增封　賜國　併入

賜封ハ、令制定ムル所ノ職封、位封、功封ノ外、別勅ヲ以テ特ニ賜フ所ノ封戸ニシテ、一ニ別勅

停廢、景風徒吹、震雷收響、朕之遺恨、千秋無窮、

〔三代實錄 二十四 清和〕貞觀十五年十一月六日丁卯、右大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣基經、上表請還故忠仁公封邑、云々、勅答曰、右大臣藤原朝臣得表已知、爲故太政大臣忠仁公讓封、朕聞存立嘉庸、沒受寵渥、古之遺法也、公儀刑道著、輔道年深、仁爲己任、死而後已、朕追加封爵、同之生存、答恩竺也、而卿稟遺旨、再三固辭、朕察其至誠、不拒來請、唯餘位封之所輸、以示厚意之不已、今纔過忌景、更讓還、朕以爲古之功臣有傳世不絕之誼、況公地居外祖、天下推勳、至其遺封、未謂羨食、於朕不失割腴之賞、在公非爲紾臂之飡、聊添幽穸之榮、兼助奠祭之費、朕不勝感泣、卿勿復請焉、〇又見都氏文集

〇按ズルニ、此文ニ據レバ、此ヨリ先ニ國封ヲ奉還シテ、勅允ヲ得シコトノアリシナリ、而シテ史之ヲ漏セリ、

〔三代實錄 二十六 清和〕貞觀十六年十月廿九日甲申、右大臣基經上表、讓還故太政大臣忠仁公爵邑、云々、勅答曰、省表具悉、故太政大臣忠仁公、神宇凝高、風量沈邃、丕功著於竹素、雅操茂於丹青、朕賴其慶雲之惠、得遂幼日之生、顧言往恩、未可忘已、是用餘其位封、以存追賁、而卿爲述遺讓、至于再三、確請竺苦、見於詞章、雖欲無從、其可得乎、故今白日收汗、返土膏於封疆、黑夜更明、增謙光於幽壤、終訓無違、公意已達、本志不遂、朕恨如何、〇又見都氏文集

越前公

〔日本紀略 宇多〕寬平三年正月十五日乙丑、以勅命贈故太政大臣藤原朝臣〇基經正一位、封越前國、爲越前公、諡曰昭宣、食封賚人、並如生存、

〔公卿補任 宇多〕寬平三年 辛亥

太政大臣從一位藤基經 五十六、正月十三日薨、詔贈正一位、封越前國、諡曰昭宣公、

信濃公

〔公卿補任 村上〕天曆三年 己酉

關白太政大臣從一位藤忠平 七十、(中略)八月十四日薨、同十八日、詔遣大納言清蔭、中納言元方、參議庶明等、贈正一位、封信乃國、諡曰貞信公、

祖之顯地、重以上台之元功、朕思所以加隆、無所不至、但尋公平日之志、深秉謙損之心、是用纔飾以正一位、追封爲美濃公、於朕之心、猶有不厭、軍法斬一牙門將者、封侯萬里之外、夫斬一將之功、孰與安寧天下、況亦有天爵者、人爵從之、朕答於恩、公食於道、假之議者、誰謂不宜、今卿上表、爲公讓之、朕雖知其丹誠、未忍割素意、宜如前詔、莫有所請、

十六日癸丑、右大臣重抗表曰、臣聞深衷所届、昊穹必遂其誠、至懇攸通、仁聖不違其願、臣以先臣深託、前表具陳、唯是至誠、實非華飾、聖朝陛下、不忍哀惜之篤意、欲全追賁之鴻恩、重降册詔、未賜天從、夫人心如面、性尙各殊、若反其所好、卽榮還爲憂、先臣常守沖退、固辭祿位、至心表彰、臨歿彌勵、而今追加封爵、費同生人、則將必奪情之恨更深、結草之思還薄、昔晉太傅羊祜、生時讓封、歿時遺令、代王重違其志、遂叶其望、還下優詔、更褒至謙、比夷齊而稱賢、均季札之全節、君臣之道、蓋兩存而不刊、竊以先臣深款、無愆於羊公、陛下篤仁、定加於晉帝、何有鬓氷之感已同、天渙之施還異乎、況亦皇太后殿下、至孝蒸々、必欲述遺命之旨、瑣々愚臣、誓以死者反生、生者不愧也、但先臣非好逃聲榮於朝市、尤忌致煩費於國家、然則賜爵賜謚、足以表戎功、國封職封、不敢妨國用、唯位封所加、公損無幾、望准人存、略在聖旨、然亦不過服紀之閔年、將同朝廷之恒跡、伏願陛下、推至誠以存理、應懇請以顯公、俯賜宸慈、早收璽誥、俾憂國之誠、徹泉壤而寡恨、奉公之節、施竹帛而遺芬、頻塵琁扆、伏深戰兢、不任悾款之至、謹重拜表以聞、勅答曰、右大臣藤原朝臣、抗表累至、反覆知之、然先王之治國也、親其毛髮之勞、且不愛肥腴之壤、況忠仁公、莫大之績、冠於古今、朕盡靑桐而爲珪、何曾酬德、窮白茅而爲苞、未可答恩、初謂公功高蛇丘、封卑蟻垤、設使讓章十上、不欲一從、何意重讀來表、令人酸鼻、卿感其猶子之愛、甚於喪父之傷、自稟啓體之終訓、善述損己之遺言、推丹之誠彌深、泣血之請苦至、追想平素、時動朕心、加之太后殿下、亦爲辭之、至孝安親、豈其違之、朕既屈意於紫闥、公當流謙於黃泉、又晉羊叔子、身歿讓封、來表引以相比可矣、唯祜雖南城之新爵、眼前固辭、而鉅平之舊封、身後相傳、其位封者、存日所食、今之加增、亦是細塵、宜國之鉅平、永々莫絕、豈足爲飾幽之榮、聊須寄追遠之念、餘依來請、並從

四日辛未、策命曰云々、正一位乃冠加贈云々、封以美濃公、爲美濃國、謚曰忠仁、食封資人並如存生、太政大臣之官又如故云々、

〔三代實錄清和二十二〕貞觀十四年十月十日丁未、正三位守右大臣兼行左近衞大將藤原朝臣基經、抗表辭故太政大臣忠仁公封邑、曰臣聞昔樊恭侯之遺言、時至猶從厥旨、羊太常之終制、府丞不敢違心、何況忘私義讓、指河日而結誠、愛國忠謀、糜肝膽而貽誡、臣謹讀去月四日詔書、贈於故太政大臣藤原朝臣、以正一位、又以美濃國封之、爲美濃公、謚曰忠仁、食封資人、並同平日、太政大臣之官、亦如故矣、崇賚懇懃、寵光煇赫、聲榮之盛、門閥縟華、伏計先臣幽魄、追榮舊想、添晃藻於天波、退憚新恩、增氷谷於地底、但先臣臨終、誡臣曰、余昔奉聖主於繦緥、望成人於日月、上天從欲、明辟累年、吾生自此而歿、世上亦有何思、徒恨時運陵遲、邦國凋弊、雖欲開聖化於東后、猶難起人謠於甫田、生時既見帑藏之空、死後何招錙銖之費、即我下世之後、朝例攸給葬送等物、凡諸應爲公煩者、無小無大、汝宜固辭一切勿請、但如此心事、事須面諮皇太后殿下、然而君臣禮隔、男女事殊、何驚長樂之宮、敢幸沈淪之地、吾既無男、汝即猶子、宜述吾志、莫忘吾言、而今職位二封、既同平日、加之以美濃之一國、公費兼倍於生時、誠非先臣提撕告誡之意也、臣仍具狀以聞、皇太后殿下答曰、先慈淹疾涉旬、雖有危篤、恐余憂灼、不令聞知、永隔慈顏、無由再奉、崩心哽絕、何地寄思、唯須欽遺命之旨、以獻愼終之誠、宜抽深趣早奏聖朝、謹奉令旨、敢上此表、伏惟聖主陛下、昔下恩詔、疇〇疇字、恐當在昔字上、加爵加封、敢將綢繆勅斷章表、然猶感其匪石之誠、不敢張奪情之制、魂而有靈、意當無變、既在眼前而苦讓、寧於泉下而甘承、因願唯加號謚、以表殊恩、職封國封等、於公有費者、盡准恒典、即從停廢、然則陛下追崇之德、猶有所加、先臣損挹之心、遂無攸失、上令太后全永言之孝思、下使愚臣果欽命之精誠、伏願陛下曲從哀許、反汗收綸、被至德於幽明、均深仁於存歿、伏陳誠詞、涙〇涙字上下恐有脫字、俱咽、不任悲懇屏營之至、謹拜表以聞、勅答曰、省表悉之、故太政大臣忠仁公、保養朕躬、丕訓告功、〇告功、一本作苦切、朝露溘至、傷如之何、凡褒贈之設、所以旌有功表有德也、忠仁公處於外

淡海公

テ甲斐公トセシヨリ以後、此典永ク絶エタリ、夫ノ淳仁天皇ヲ廢シテ淡路公ト爲シ、奉ズルニ其國ノ調庸ヲ以テセシガ若キハ、亦國封ノ類タリ、

〔扶桑略記 六元明〕養老四年八月三日、右大臣藤朝臣不比等薨、春秋六十三、贈太政大臣、謚號淡海公、

〔續日本紀 二十三淳仁〕天平寶字四年八月甲子、勅曰、子以祖爲尊、祖以子亦貴、此則不易之彝式、聖主之善行也、其先朝太政大臣藤原朝臣〇不比等者、非唯功高於天下、是復皇家之外戚、是以先朝贈正一位太政大臣、斯實依我令、已極官位、而准周禮、猶有不足、竊思勳績蓋於宇宙、朝賞未允人望、宜依齊太公故事、追以近江國十二郡、封爲淡海公、餘官如故、以繼室從一位縣狗養橘宿禰、贈正一位、爲大夫人、

〔大鏡 七太政大臣道長〕かくて鎌足のおとゞは、天智天皇の御時、藤原の姓賜りて、そのとしぞうせさせ給へりける、内大臣の位にて、廿三年ぞおはしましける、太政大臣にきはめ給はねど、藤氏の御いではじめのやんごとなきによりて、うせ給へる後の御いみな淡海公と申けり、此ゝげきがいふやう、大織冠をばいかでか淡海公とは申させ給ふぞ、大織冠は大臣の位にて廿五年、御年五十六にてなんかくれおはしましける、ぬしのたまふことゞも、あまの川をかきながすやうに侍れど、をり〳〵かゝるひが事ぞまじりたる、されどもたれか又かうはかたらんな、佛在世の淨名居士とおぼえ侍るものかなといへば、世繼がいはく、昔から國に、孔子と申もの乄り、のたまひけるやう侍り、智者も千のおもんばかりには、かならず一のあやまちありとなんあれば、世繼とし百歳におほくあまり、二百歳をかぞへぬほどにて、かくまでとはすがたりを申せば、昔の人々もおとらざりけるにやあらむとなんおぼゆるといへば、ゝげきゝか〳〵まことに申べきかたなくこそ覺え侍れとて、かつは涙をおしのごひなんど感ずる、まことにいひてもあまりにぞおぼゆるや、

美濃公

〔日本紀略 清和〕貞觀十四年九月二日己巳、太政大臣從一位藤原朝臣良房、薨于東一條第、年六十九、

退之志、表疏重疊、慇懃不已、所以忘家思國、忠操彌篤者也、卽矜懇懇、遂隨所請、中心感念、不忘寤寐、宜自貫白丁、迄于五世、課役蠲除、奕葉爲例、以斯優恤、答彼洪勳、主者明之、稱朕意焉、

弘仁十一年正月六日（○又見政事要略五十九）

（續日本紀二十四淳仁）天平寶字七年十月丁酉、前監物主典從七位上高田毗登足人之祖父、嘗任美濃國主稻、屬壬申兵亂、以私馬奉皇駕、申美濃尾張國、天武天皇嘉之、賜封戶、傳于子、至是坐殺高田寺僧、下獄奪封、

（續日本紀二十五淳仁）天平寶字八年九月乙巳、勅曰、太師正一位藤原惠美朝臣押勝、幷子孫起兵作逆、仍解免官位、幷除藤原姓字已畢、其職分功封等雜物宜悉收之、

國封

國封トハ、其國ニ封ジテ其國公トスルコトニテ、古來數人ニ過ギズ、悉ク藤原氏ニ出デ、且ツ皆歿後ノ追封ニ係レリ、初メ不比等ノ淡海公ニ封ゼラルヽヤ、子孫ノ其封ヲ辭スル時ニ、一言ノ之ニ及ブ者ナキヲ觀レバ、唯其號ヲ加ヘタルノミニテ、舊封ノ外ニ別ニ增セル所ナキガ如シ、良房ノ美濃公ニ封ゼラレタルハ、永々絕ユルコトナカラント云ヘル詔ヲ受ケタレドモ、幾モアラズシテ奉還セリ、忠平ノ信濃公ニ封ゼラルヽヤ、僅ニ六十五日ニシテ奉還セリ、其餘ハ皆考フベカラズト雖モ、美濃公、信濃公ノ例ニ據リテ之ヲ推セバ、受ケテ卽チ奉還スルヲ以テ例トシ、唯其爵號ヲ以テ榮トセシナラン、良房ヨリ以來、身太政大臣ノ官ニ居リシ者ハ、在任ト去職トヲ問ハズ、其薨ズルニ及ビテヤ、褒スルニ諡ヲ以テシ、封ズルニ國ヲ以テスルヲ例トセリ、而シテ鬀髮スル者ハ與ラズ、後一條天皇ノ長元年中、藤原公季ヲ追封シ

内大臣(○鎌足)踏義懷忠、許身奉國、皇朝藉其不世之勳、錫以無窮之賞、胤子正一位太政大臣(○不比等)確陳丹誠、抗表固辭、天朝即割賜二千戸、傳及子孫、臣等以累世家門久沐榮寵、豈悟逆賊仲麻呂近出臣族、極凶肆逆若斯之甚、今臣等既以凶逆之囚族、猶霑忠槩之餘封、以何面目叨近殊厚、伏願奉納先代所賜功封、少塞天下之責、無任兢惶之至、奉表以聞、詔許之、

〔續日本紀 三十一 光仁〕寶龜元年十二月庚戌、贈太政大臣(○藤原不比等)功封依舊賜之、

〔日本後紀 二十四 嵯峨〕弘仁六年六月丙寅、右大臣從二位兼行皇太弟傳藤原朝臣園人等、奉(○奉原脫、據一本補)表乞還先祖功封曰、臣等高祖大織冠内大臣鎌子、在昔天豐財重日足姬天皇(○皇極)御宇也、緣一匡之功、錫封一萬五千戸、胤子正一位太政大臣(○不比等)堂構相承、門風是存、由茲慶雲四年勅賜封五千戸、大臣固辭、天恩允請、即減定二千戸、傳及子孫、天平神護元年從一位右大臣(○豐成)抗表奉返、寶龜元年勅更還賜、大同三年、正三位守右大臣内麻呂又抗表奉返、不蒙允聽、臣等伏料元緒、事寄功勞、今臣等冒寵苟進、未効涓塵、荷恩時來、徒冥山岳、而重叨殊私、久淹歲序、俯仰天地、慙悚罔措、恐乖忌滿之遠誡、必取覆餗之近憂、伏願奉納所傳功封、以補萬一、少塞素尸、天鑒曲迴、矜斯誠請、則家祚惟永、物議復休焉、無任丹懇切迫之至、謹拜表陳情以聞、不許、

〔享祿本類聚三代格 十七〕勅、周嘉公旦、祚流七胤、漢禮蕭何、一門十侯、藤氏先祖、逐鳥雀於朝庭、舒鷹鸇之輕翼、見機徵於曆數、勒鐘鼎之茂勳、以貞介而立身、以獻替而匡主、邦基以之彌固、帝業由其永寧、自厥以來、台位不曠、繼佐王室、久爲龜鏡、書曰、先正保衡作我先王、夫德有不報、則爲德者弛心、勞有不圖、則爲勞者解體、是以褒賞封戸、歷代不絕、總一萬五千戸、及彼子孫、不貳之美、既表於歲寒、有勞之勤、遂著於竹帛、子之能仕、父敎之忠、父子相傳、綿連不絕、恭敬撙節、溫良懷讓、前屢抗表、割還封戸、又遭朕(○嵯峨)君臨、總求還入、凡弘貫宿勞、晢后通規、敦叙親疎、明王茂典、念惟累世輔弼之臣、往帝國家之助、況復爲朕保傅之族、兼居渭陽之地、思播殊恩、益旌淳烈、故奪忠歎(○歎恐款誤)抑而不聽、猶懷爲國之誠、頻效虛

十町、封百戸、從五位下伊余部連馬養之男田六町、封百戸、其封戸止身、田傳一世、

慶雲四年四月壬午、詔曰、天皇詔旨勅久、汝藤原朝臣乃〇不比等仕奉狀者、今乃未爾不在、掛母畏支天皇御世御世仕奉而、今母又朕卿止爲而、以明淨心而、朕乎助奉仕奉事乃、重支勞支事乎所念坐御意坐爾依而、多利麻比氏夜々彌賜閇婆、忌忍事爾似事乎志奈母常勞彌重彌所念坐久止、宜、又難波大宮御宇掛母畏支天皇命乃、汝父藤原大臣乃〇鎌足仕奉賈流狀乎婆、建內宿禰命乃仕奉賈流事止同事叙止勅而、治賜慈賜賈利、是以令文所載多流乎跡止爲而、隨令長遠久始今而次次被賜將往物叙止、食封五千戸賜久止勅命聞宜、辭而不受、減三千戸賜二千戸、一千戸傳于子孫、

〔續日本紀 十四聖武〕天平十三年正月丁酉、故太政大臣藤原朝臣〇不比等家、返上食封五千戸、二千戸依舊返賜其家、三千戸施入諸國國分寺、以充造丈六佛像之料、

〔續日本紀 六元明〕和銅七年閏二月戊午朔、賜美濃守從四位下笠朝臣麻呂封七十戸、田六町、〇中略以通吉蘇路也、

〔令集解 二十二考課〕凡每年諸司、〇註略得國郡司政有殊功異行、(中略)古記云、殊功謂笠大夫作伎蘇道、增封戸、(中略)類也、(中略)並錄送省、

〔續日本紀 二十一淳仁〕天平寶字二年八月甲子、以紫微內相藤原朝臣仲麻呂任大保、勅曰、〇中略更給功封三千戸、功田一百町、永爲傳世之賜、以表不常之勳、

歿後賜子孫

〔續日本紀 二文武〕大寶元年八月丁未、先是遣大倭國忍海郡人三田首五瀨於對馬島、冶成黃金、至是詔、〇中略賜封五十戸、田十町、〇中略又贈右大臣大伴宿禰御行、首遣五瀨冶金、因賜大臣子封百戸、田四十町、

〔續日本紀 三文武〕慶雲元年七月乙巳、右大臣從二位阿倍朝臣御主人功封百戸、四分之一傳子從五位上廣庭、贈從五位上高田新家首功封四十戸、四分之一傳子無位首名、

辭功封

〔續日本紀 二十六稱德〕天平神護元年四月丙子、右大臣從一位藤原朝臣豐成等上表言、臣等曾祖大織冠

禪位于輕皇子、是爲天萬豐日天皇、實大臣之本意也、識者云、君子不食言、見于今日矣、奉號於天豐財重日天皇、曰皇祖母尊、以中大兄爲皇太子、改元爲大化、詔曰、社稷獲安、寔賴公力、車書同軌、抑又此擧、仍拜大錦冠、授內臣、封二千戶、軍國機要、任公處分、大臣訪求林藪、捜揚仄陋、人得其官、野无遺材、所以九官克序、五品咸諧、白鳳五年秋八月、詔曰、尙道任賢、先王彝則、襃功報德、聖人格言、其大錦冠內臣中臣連、功侔建內宿禰、位未允民之望、超拜紫冠、增封八千戶、俄而天萬豐日天皇已厭萬機、登遐白雲、皇祖母尊俯從物願、再應寶曆、悉以庶務委皇太子、皇太子每事諮決、然後施行、於是抗海梯山、朝貢不絕、擊壤鼓腹、鄕里稍多、非君聖臣賢、而何致茲美、故遷大紫冠、進爵爲公、增封五千戶、前後幷凡一萬五千戶、

〔扶桑略記 五 天智〕七年十月十三日、內臣鎌足任內大臣、內大臣此時始改中臣姓賜藤原朝臣、授大織冠、正一位之號也稍纒沈痾、遂至大漸、〇中略大臣性仁孝聰明叡哲、玄鑒深遠、幼年好學、博涉書傳、爲人偉雅、風姿特秀、前看若偃、後見如伏、先後賜封、都合一萬五千戶也、

〔常陸風土記 久慈郡〕至淡海大津大朝光宅天皇〇天智之世、遣使檢藤原內大臣〇鎌足之封戶、輕直里麻呂造堤成池、

〔續日本紀 二 文武〕大寶元年七月壬辰、勅、〇中略壬申年功臣隨功第亦賜食封、並各有差、又勅先朝論功行封時、賜村國小依百二十戶、常麻公國見、縣犬養連大侶、榎井連小君、書直知德、書首尼麻呂、黃文造大伴、大伴連馬來田、大伴連御行、阿倍普勢臣御主人、神麻加牟陀君兒首十一〇十一、一本作一十、恐是人各一百戶、若櫻部臣五百瀨、佐伯連大目、牟宜都君比呂、和爾部君手四人各八十戶、凡十五人、賞雖各異、而同居中第、宜依令四分之一傳子、

〔續日本紀 三 文武〕大寶三年二月丁未、詔從四位下下毛野朝臣古麻呂等四人預定律令、宜議功賞、於是古麻呂及從五位下伊吉連博德、並賜田十町、封百〇百原脫、據一本補五十戶、贈正五位上調忌寸老人之男田

〔令義解四祿〕凡五位以上、謂一品以下也、以功食封者、其身亡者、大功減半傳三世、上功減三分之二傳二世、中功減四分之三傳子、謂男女同、下功不傳、

〔令集解二十三祿〕釋云、文云、五位以上故、六位以下不可在功封、古記云、五位以上功食封者聽、謂六位以下、雖大功、不在食封之例、但別勅處分依下條耳、跡云、六位以下不在稱有功之例、若有功者、先授五位以上耳、朱云、五位以下功食封、未知以上有限以不、答四位以下、何者依上條、四位以下不食封故者、或云、五位以上功食封者、未知勳相准不、答相准可入、何者有相當文故者、在跡記背、〇中略、穴云、大功減半傳三世者、未知放功田、父祖未請身亡者、給子孫哉、爲當有別哉、答可放田令耳、可問他人、朱云、身亡、謂得封亡、及未得亡、并同也、

〔續日本紀二文武〕大寶元年七月戊戌、太政官處分、〇中略、功臣封應傳子、若無子勿傳、但養兄弟子爲子者聽傳、其傳封之人亦無子、聽更立養子而轉授之、其計世葉一同正子、但以嫡孫爲繼、不得傳封、〇又見田令集解、

〔延喜式二十二民部〕凡功臣封傳子者、無子不傳、但以兄弟子爲養子者、聽傳其養子、得傳封者無子者亦聽傳於養子、其計世如正子、但以嫡孫爲繼者、不得傳封、

〔令義解二戸〕凡應分者家人奴婢、氏賤不在此限、田宅資財、其功田、功封、唯入男女、謂不依財物之法、男女嫡庶並皆均分也、總計作法、

〔令集解十戸〕跡云、功田封戸不別嫡庶子、合均分、爲師說也、朱云、功田功封不及妻妾之理、田令祿令見文也、

〔藤原家傳上鎌足〕內大臣、諱鎌足、字中郞、大倭國高市郡人也、〇中略、天豐財重日足姬天皇、〇皇極、欲傳位於中大兄、〇天智、中大兄諮於大臣、對曰、古人大兄殿下之兄也、輕萬德王、〇孝德、殿下之舅也、方今越古人大兄而殿下陟天皇位、便違人弟共遜之心、且立舅以答民望、不亦可乎、中大兄從之、密以白帝、帝以策書

世ヲ通觀スルニ、功封ノ殊ニ大ナル者ハ藤原氏ニ若クハナク、永世ニ傳フルノ詔ヲ承ケタルモ、藤原氏ノ外ニアルコトナシ、鎌足ノ皇極、孝德、齊明、天智ノ四朝ニ功アルヤ、之ニ一萬五千戸ヲ賜ヒ、世々絶エザラシム、夫レ一萬五千戸ノ地ハ、其廣サ三百郷（郷ハ即チ里ナリ、孝德紀及ビ令ニ五十戸ヲ里トストアリ、）ニ跨レリ、當時ノ郷數ハ考フベカラズト雖モ、姑ク倭名類聚抄ニ依ルニ、全國四千四十郷アリテ、三百郷ハ其十三分ノ一ニ近シ、文武天皇ノ朝ニ、又其子不比等ニ五千戸ヲ賜ヒシヲ、辭シテ受ケザレバ三千戸ヲ減ジ、二千戸ヲ賜ヒ、其内ノ一千戸ヲ子孫ニ傳ヘシメタリ、而ルニ聖武天皇ノ天平十三年ニ至リ、不比等ノ家ヨリ五千戸ヲ奉還セシヲ、二千戸ハ其家ニ還シ、三千戸ヲ國分寺ニ施入スルノ文アルヲ觀レバ、其間ニ又全封ヲ賜ヒシナラン、是ニ於テ藤原氏ノ功封ハ前ニ通ジテ一萬七千戸トス、一萬七千戸ノ地ハ大約三百四十郷ナレバ、全國十二分ノ一ニ過ギタリ、又淳仁天皇ノ天平寶字四年ニ至リ、近江國十二郡ヲ以テ不比等ヲ追封シテ淡海公トセリ、近江ハ倭名類聚抄ニ據ルニ九十三郷アレバ、即チ五千戸ニ近キ國ナレドモ、仍ホ其實封ハ二千戸ニシテ、別ニ加増セシニハアラザリシナルベシ、稱德天皇ノ天平神護元年ニ、不比等ノ孫豐成（武智麻呂ノ子）二千戸ヲ奉還シタリシガ、光仁天皇ノ寶龜元年ニ還シ賜フ、其後又不比等ノ曾孫内麻呂（房前ノ孫ニシテ、眞楯ノ子ナリ、）園人（房前ノ孫ニシテ、楓麻呂ノ子ナリ、）並ニ其封ヲ割還セシカド、並ニ允許ヲ蒙ラザリシヲ、嵯峨天皇ノ弘仁十一年ニ至リ、詔シテ其封ヲ朝廷ニ全收セリ、是ニ於テ其族ハ降リテ白丁ト爲ル者アリトモ、其五世ニ至ルマデハ課役ヲ蠲除スルコトヽセリ、其後美濃公（眞房）越前公（基經）信濃公（忠平）等ニ追封セラルヽ者アリト雖モ、一タビ受テ即チ還スヲ以テ例トスルガ如クナレバ、概スルニ皆名號侯ノ類ナリ、而シテ上ニ臚列スル所、其封ヲ辭スル者、一宗ニ出デザルハ、子孫ノ兄弟遞ニ均分セシ故ナリ、猶ホ功田篇ヲ參看スベシ、

奪位封

半減位封

トノ寵榮アリ、故ニ此辭表アリシナリ、

〔續日本紀 稱德二十六〕天平神護元年八月庚申朔、從三位和氣王坐謀反誅、〇中略從四位上大津連大浦、爲日向守、奪其位封、

〔壬生家文書 三〕公卿分配、一上參陣行事也、大納言奉行無先例者也、
正二位行權大納言藤原朝臣仲光宣、奉勅、祭祀國忌者、是朝家之所重也、敬神尊親之義、既存禮經之故也、而諸卿動稱故障、不勤分配、爲臣之道豈可然乎、自今以後、若故障不明、當役豈闕者、依永延三年〇永祚元年五月七日宣旨、一年封戸半分停之、但神今食神嘗祭小忌職掌令神祇官近期卜之、須臨彼時隨其催、綸言殊重、不得疎略者、

應永二年正月廿八日　大外記兼博士中原朝臣師豐奉

功封

功封ハ親王ノ一品ヨリ、諸臣ノ五位ニ至ルマデ、皆其勳績ニ因テ賜フ所ナリ、卽チ其差四等アリ、大功、上功、中功、下功是ナリ、而シテ大功ノ人其身死亡スレバ、減半シテ三世ニ傳ヘ、上功ハ三分ノ二ヲ減ジテ二世ニ傳ヘ、中功ハ四分ノ三ヲ減ジテ其子ニ傳ヘ、下功ハ其身ニ止マリテ子ニ傳ヘズ、子ト云フハ男女ヲ擇バズシテ均分シ、其子又數人ノ子アルトキハ、遞ニ亦均分スルナリ、若シ子ナクシテ嫡孫ヲ以テ嗣トスレバ、傳フルコトヲ得ザレドモ、唯兄弟ノ子ヲ養子トスルトキハ、之ヲ傳フルコトヲ得ルナリ、其封ヲ承クル者又子ナキトキハ、之ヲ傳フルノ法亦上ニ同ジ、又其封ヲ受クベクシテ、受ケズシテ死スルトキハ、其子ニ授クルナリ、要スルニ功田ハ世々ニ傳フルノ法アレドモ、功封ニハ三世ヲ過グルノ制ナキナリ、今歷

國宜承知依件行之、符到奉行、

正五位下行大輔藤原朝臣 花押　　正六位上少錄菅野朝臣 花押

承保元年八月廿八日

僧尼位封

〔續日本紀 二十九 稱德〕神護景雲二年十月庚午、大尼法戒准從三位賜封戶、大尼法均准從四位下、

入道後不敢位封

〔續日本紀 八 元正〕養老五年五月乙丑、正三位縣犬養宿禰三千代、緣入道辭食封資人、優詔不聽、

殁後不敢位封

〔公卿補任 元正〕養老四年 庚申

右大臣正二位藤原朝臣不比等 六十二、八月三日薨、在官十三年、中納言三ヶ日、大納言八年、作律令十四卷、謚曰淡海公、(中略)宣詔贈太政大臣正一位、謚曰文忠公、食封資人並如全生、

〔續日本紀 十一 聖武〕天平五年十二月辛酉、遣一品舍人親王、○中略就縣犬養橘宿禰 ○三千代 第、宣詔贈從一位、別勅莫收食封資人、

贈位封

〔三代實錄 二十二 清和〕貞觀十四年十月十日丁未、正三位守右大臣兼行左近衛大將藤原朝臣基經抗表、辭故太政大臣忠仁公 ○藤原良房 封邑曰、○中略臣謹讀去月四日詔書、贈於故太政大臣藤原朝臣以正一位、又以美濃國封之爲美濃公、○中略今職位食封、既同平日、加之以美濃之一國、公費兼倍於生時、誠非先臣提撕告誡之意也、○中略不任悲懇屏營之至、謹拜表以聞、　十六日癸丑、右大臣重抗表曰、○中略但先臣非好逃聲榮於朝市、尤忌致煩費於國家、然則賜爵賜謚、足以表戎功、國封職封、不敢妨國用、唯位封所加、公損無幾、望准人存、略在聖旨、然亦不過服紀之閡年、將同朝廷之恒跡、○中略謹重拜表以聞、○中略勅答曰、右大臣藤原朝臣、抗表累至、反覆知之、○中略其位封者、存日所食、今之加增、亦是細塵、宜國之鉅平、永々莫絕、豈足爲飾幽之榮、聊須寄追遠之念、餘依來請、並從停廢、景風從吹、震雷收響、朕之遺恨、千秋無窮、

○按ズルニ、良房ノ薨後、猶ホ太政大臣ノ職封ヲ賜リ、加フルニ贈正一位ノ食封ト、美濃ノ國封

散位封

十七日辛未、今朝下家司親兼、成封戸催牒持來、先例初度不成催牒、先以本符付件國々、被召雜掌請文、不可副催牒、追而付此催牒之由、仰含親兼加判返給了、是任先人令注置跡所下知也、

○按ズルニ、正三位ノ封戸、令條ニ載スル所一百卅戸トス、而シテ此ニ九拾八戸トスルハ、後世改定スル所ノ數ニテ、恰モ拾芥抄載スル所ノ封數ニ合セリ、

〔令義解四祿〕凡食封者、一品八百戸、〇中略正一位三百戸、〇中略其無故不上二年者則停給、謂雖爲封祿立例、其職封者不入此例、但以理解官者、服闋及病差之後、無故不上一年者、准選叙令停給、其在位之官、不上百廿日者亦不給也、

〔令義解二十三〕釋云、其无故不上二年者、則停給封祿、幷停給此、爲散位立文、有一日者不退、位田資人无退文、故不可退、其以理解官不上者、職封待一年、位封待二年幷停年、

後宮位封
婦女位封

〔令義解四祿〕凡食封者、〇中略正一位三百戸、〇中略從三位一百戸、〇中略女減半、〇中略

凡嬪以上、〇妃及夫人並依品位給封祿、謂欲顯不減半、故云依品位、其封祿是重優、令准男、資人位田、灼然不減、

〔類聚三代格八〕乾政官符

應全給尙侍尙藏封戸幷位田事

右奉勅、准令給封女悉減半、但尙侍尙藏職掌既重、宜異諸人量須全給、位田並亦如此、自今以後、永爲恒例、

天平寶字四年十二月十三日〇又見續日本紀

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年九月乙丑、勅、撿天平寶字四年格、偁尙侍尙藏職、掌既重、宜異諸人全賜封戸者、然則官位祿賜、理合同等、宜尙侍准尙藏、典侍准典藏、

〔壬生家文書一〕民部省符　若狹國司

應給從三位源朝臣澄子位封貳拾伍烟仕丁壹人事

右被太政官今年七月廿六日符偁、去六月十六日叙從三位者、應給封戸、具狀謹以奏聞、奉勅依奏者、

應給正三位藤原朝臣基實位封二十三烟事

右被太政官今年正月八日符偁、今日下中務省符偁、得彼省解偁、叙位申送者、應給封戶、具狀、謹以奏

聞、奉勅依奏者、

國宜承知依宜行之、符到奉行、

權大輔正五位下藤原朝臣在判　　正六位上行少錄中原朝臣判

仁平三年二月十日

民部省符　周防國司

應給正三位藤原朝臣基實位封二十伍烟封丁一人事

右被太政官今年〻｜〻｜〻｜、

〻〻〻〻｜

〻〻

民部省符　加賀國司

應給正三位〻〻〻〻二十伍烟封丁一人事

右〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

民部省符　美濃國司

應給正三位〻〻〻〻二十五烟封丁一人事

右〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

已上四通、白紙、省符有請印、

等、請被返收親王封邑、朝家思其遺愛不忍許聽、如今年紀徙積、歸來無期、宜仰所司令允安貞往日之請焉、

〇按ズルニ、三代實錄、貞觀三年九月ノ條ニ、聽傳燈行賢大法師眞如向南海道ノ文アリ、親王ノ入唐ハ恐ラクハ此時ニアラン、下元慶三年ヲ距ルコト十八年ナリ、此ニ至テ始テ其封ヲ收ム、

〔令義解〕四祿凡食封者、〇中略正一位三百戸、從一位二百六十戸、正二位二百戸、從二位一百七十戸、正三位一百卌戸、從三位一百戸、其五位以上不在食封之例、

〔拾芥抄〕中末御給正一位封二百廿五戸〇中略從一位封百九十五戸〇中略
正二位封百五十戸〇中略從二位封百廿八町〇町恐戸誤、中略、
正三位封九十八戸〇中略從三位封七十五戸

〔兵範記〕仁平三年十二月十三日丁卯、今日依吉日、三位中將殿〇藤原基實、時年十一、封戸可召覽民部省、仍著衣冠參烏丸殿、此間民部省官人光兼持參省符四枚、入宮予〇平信範取之持參御曹司方、覽中將殿、宮返給官人了、寬治天永天承不見給祿之儀、仍今日不給祿也、次持參九條殿、覽殿下、亦返給之後下給下家司成親、來十七日又依吉日、以出納可付件國々、可召進雜掌請文之由下知了、
御封省符、先例當時入道殿〇藤原忠實寬治五年令敍正三位給之後被請之、殿下〇藤原忠通天永元年又正三位之後令請給、依彼兩度例、令正三位之後所請給也、
去正月令敍正三位給之後、以太政官敍符送民部省、民部省以其符覽卿宗輔、依卿宣省官尋問給、卷可成之日次、於陰陽寮其勘文之後、省官參會令成給卷了、以本省丞令內覽奏聞、奏聞了省官付外記、外記內文請印之後、返送省官、省官依申事由本家家司下官豫申殿下尋問、今夕昨日下知省官、今日令持參也、
民部省符　美作國司

二百戶、男女並同、但叙品之後一從停止者、今撿奏意、無品內親王叙四品之日、封邑一百五十戶、然則無品之日、其封二百戶、叙品之時、還失五十、事之所在良不穩便、宜議定奏聞者、謹依勅旨商量、件封戶大同三年論奏依令已訖、然則女者良宜半減、內親王准令半之、其先經恩賜、復擴論奏、更不收返、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、奉勅依奏、

大同四年六月廿三日〇又見禄令集解

〔延喜式二十二民部〕凡食封者、〇中略無品親王二百戶、〇內親王減半〇下略

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年二月辛亥、勅、四品安勅內親王、依願令入道、宜封戶及帳內資人品田收公、但无品本封、帳內資人、依舊行之、

〔三代實錄二淸和〕貞觀元年五月七日壬戌、四品守彈正尹兼行常陸大守人康親王出家入道、上表曰、〇中略詔、人康親王、辭其官職、歸於釋侶、宜准國康親王、收其品封、但本封舊〇舊恐衍幷帳內資人、准無品例充之、

〔菅家文草十表狀〕爲小野親王〇惟喬謝別給封戶第一表

臣某言、去九月二十一日勅旨、賜臣百戶之封、以助齋餼之費、仰承溫煦、未悟比量、中謝臣往年病發、沈困不歸、謝簪纓於帝城、約香火於釋衆、菩提一念、身雖在草庵之中、空觀六時、心未離魏闕之下、大致臣合門萬事皆隨省折、灰冷之服備避風、菜茹之飡資送日、若更蒙新賞、猶滿舊封、水石幽閑之地、有嫌於貯藏、煙霞晚暮之家、無節於遊用、陛下寵光不翅、恩之又恩甚深、臣虛受非功、過而再過惟重、伏願陛下察臣丹款、照臣素情、卷中綍於九重、留上腴之百戶、臣願足矣、臣望稱焉、臣某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

貞觀十年十月十九日〇三代實錄、以此表係貞觀十六年十月十八日、

〔三代實錄三十六陽成〕元慶三年閏十月三日己丑、勅、無品高岳親王入唐之後、男正五位下在原朝臣安貞

臣位封、自正一位三百戶、差降止從三位一百戶、冠位已高、食封何薄、宜正一位六百戶、差降止從四位八十戶、　四年四月壬午、詔、益封親王已下、四位已上、及內親王、諸王嬪命婦等各有差、

〔類聚三代格八〕太政官謹奏

應賜位封依令條事

右謹案祿令、王臣食封各有等次、但五位已上不在此例、而慶雲年中更昇差數延及四位、大同元年、大納言已上職封復舊加畢、然則雖有加給未見減省、所據行事理合同軌、伏請從今而後一品已下食封、幷四位位祿等並依令條、但先經恩賜不更收還、其加階進級之日、卽便廻給各得其所、凡法令之興其來尚矣、有國通規、不易之典、而一則遵行、一則無據、臣等商量、良不可然、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、

大同三年十月十九日○又見祿令集解

親王內親王品封

〔延喜式二十三民部〕凡職封者、○中略品位封者、蒐年之料、全納喪家、無品封亦准此、

〔令義解四祿〕凡食封者、一品八百戶、二品六百戶、三品四百戶、四品三百戶、內親王減半、

〔拾芥抄中末御給〕一品親王封戶六百戶○中略

二品三品封戶二品四百五十戶、三品三百戶、○中略

四品無品封戶四品二百二十五戶、無品百五十、○中略

內親王封戶半減○下略

〔類聚三代格八〕太政官謹奏

應賜無品親王內親王食封事

右奉勅、件封戶大同三年十月十九日論奏云、一品已下食封、幷四位位祿等並依令○令下恐脫條字訖、但先經恩賜更不收返、其加階進級之日、卽便廻給各得其所、又大同三年六月廿九日式云、無品親王食封

制度沿革

家ニ入ル、而シテ僧尼ニモ通常ノ位階ニ准ジテ、位封ヲ賜ヒシコトアリ、

〔日本書紀孝徳二十五〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、即宣改新之詔曰、其一曰、罷昔在天皇等所立子代之民、處々屯倉、及別臣連、伴造國造、村首所有部曲之民、處々田莊、仍賜食封大夫以上、各有差、降以布帛賜官人百姓有差、又曰、大夫所使治民也、能盡其治則民賴之、故重其祿、所以爲民也、

○按ズルニ、大夫以上ハ即チ五位以上ナリ、位封始テ此ニ見ユ、

〔日本書紀天武二十九〕五年八月丁酉、親王以下、小錦以上大夫、及皇女、姬王、內命婦等、給食封各有差、

〔續日本紀文武一〕元年八月壬辰、賜親王及五位已上食封各有差、

〔續日本紀文武二〕大寶元年七月壬辰、勅親王已下、准其官位賜食封、○中略又皇大妃內親王、及女王嬪封各有差、

〔續日本紀文武三〕慶雲二年十一月庚辰、有詔加親王諸王臣食封各有差、先是五位有食封、至是代以位祿也、

○按ズルニ、此時始テ大寶令ニ依リテ位封ヲ賜ヒシナリ、皇大妃ハ恐ラクハ元明天皇ナラン、

○按ズルニ、先是五位有食封トハ、大寶以前ノ事ヲ云ヘルナリ、此時大寶ノ制ヲ改メ、三位以上ノ封ヲ加ヘ、四位ニ封ヲ賜ヒ、五位ニ位祿ヲ賜フコトヽナレリ、然レドモ其詔ノ詳ナラザルヲ以テ、三年ニ至リ更ニ之ヲ詔シ、四年ニ之ヲ行ヒシナリ、

〔令集解祿二十三〕慶雲三年格云、正一位六百戶、從一位五百戶、正二位三百五十戶、從二位三百戶、正三位二百五十戶、從三位二百戶、正四位一百戶、從四位八十戶、其封戶者授位之時即與處分、位祿者式部例十一月給之、初授五位會給位祿、未奏之前宜入給限、○又見扶桑略記、

〔續日本紀文武三〕慶雲三年二月庚寅、詔曰、准令三位以上已在食封之例、四位以下寔有位祿之物、又四位有飛蓋之貴、五位無冠蓋之重、不應有蓋無蓋同在位祿之例、故四位宜入食封之限、又案令諸王諸

古事類苑

封祿部二

位封

位封ハ、諸王諸臣ノ位階ニ從ヒテ給スル所ノ封戸ナリ、又有品親王ノ品階ニ由リテ給スルヲ品封ト云フ、而シテ無品親王ニ給スルハ、品封ノ類トス、

位封ハ孝德天皇ノ朝ニ始マリテ、大夫五位以上ニ給セシヲ、文武天皇ノ大寶年間ニ至リ、三位以上ニ止マリ、四位五位ニハ位祿ヲ以テセシガ、慶雲三年ニ、毎位ニ其封戸ノ數ヲ益シ、且ツ四位マデニ給ヒ、位祿ハ五位ノ一位ニ止マル、然ルニ平城天皇ノ大同三年ニ、大寶ノ舊ニ復セリ、中世ニ至リテハ、品封モ位封モ其戸數減省セリ、有品ノ親王剃髮スレバ、定額ノ封ヲ收メ、更ニ無品親王ノ封ヲ給ス、無品親王ノ封ハ、令ニ定制ナシ、類聚三代格、大同四年六月二十三日ノ太政官奏ニ引ク所ノ大同三年六月二十九日ノ式ニハ、無品親王食封二百戸、男女並相同トアリ、

婦女ノ位封ハ、男子ノ半ヲ受クルコトニテ、內親王ノ品封モ亦之ニ同ジ、然レドモ妃、夫人、嬪ノ位封ハ全給スルナリ、尙藏、尙侍ノ位封モ、舊ハ減半ナリシヲ、淳仁天皇ノ天平寶字四年ヨリ全給セリ、

散位ノ位封ハ、無故不上二年ノ後ニ給スルコトヲ停ムル法ニシテ、在任ノ人ノ位封ハ、百二十日不上ナレバ給セザルコトヽス、又封主身歿スレバ、當年ノ封ハ卽チ收メズシテ、全ク喪

據此例、有何謗訕乎、伏願鴻慈、曲垂矜恤、割件國封戸五百烟、永充給延子女御、若遂宿慮於慭遺之時、必報朝恩於他生之日、不耐懇志之至、某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

康平三年四月廿日　從一位行内大臣兼左近衞大將藤原朝臣頼宗

〔中右記〕嘉保二年六月十日、今朝初聞、高倉女御〈○藤原延子〉去夜半、依霍亂俄薨由、〈年八十云々〉女御諱延子、故入道右大臣殿〈堀川〉女也、〈○中略〉康平三年四月廿日、父右大臣奏請割分封戸五百烟讓此女御、〈有狀〉

改職封

〔朝野群載七公卿家〕返上給封申改給他國

請殊蒙天裁、因准先例、返上給封參河國、被改給伯耆國狀

右謹檢案内、奉公之輩、返上給封、申請要國者恒規也、近則去康和三年以後、返封之國々有其數、倩見傍例、中宮大夫源朝臣、大納言藤原朝臣、權大納言治部卿源朝臣、前權中納言大江朝臣、權中納言藤原朝臣等、各隨申請、改給要國、事爲準的、敢無異論、望請天裁、因准傍例、返上參河國給封、被改給伯耆國、將知朝章之嚴矣、仍勒狀謹解、

嘉承元年九月日

收職封

〔延喜式二十二民部〕凡職封者、解官并身薨、卽還收、若解薨在納調物限月以後、聽給、〈別勅封物准此〉

爲九條右大臣請減職封表　菅三品〇文時

臣師輔言、〇中略臣謹尋古來大臣之新除者、莫不割其職封、返之公府、〇中略伏乞鴻慈、擬考舊典、折戶邑之一半、支國用之錙銖、非唯拂浮雲於衡門、最願播輕塵於嵩嶽、不勝懇款之至、拜表以聞、臣某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

天曆元年閏七月廿九日　右大臣從二位兼行左近衛大將藤原朝臣上表

〔日本紀略五冷泉〕安和元年三月廿二日乙巳、太政大臣〇藤原實賴辭職封職田資人新倖等、被許之、勅答、大內記成忠作之、

〔本朝續文粹五狀〕堀河右丞相辭封戶讓女子狀　實範朝臣

請被殊蒙鴻慈割分封戶五百烟讓與女御從二位藤原朝臣延子狀

若狹國廿五烟　加賀國五十烟
丹波國廿五烟　播磨國廿五烟
美作國廿五烟　備前國廿五烟
備中國廿五烟　讃岐國廿五烟
伊豫國廿五烟　土佐國廿五烟

右延子者、先朝〇後朱雀聖主之女御、當時齋王〇頁子內親王之母儀也、梧岫之雲色愁、鼎湖之浪聲咽以來、永出紫微之禁闈、終歸紅塵之俗境、二八廻之星霜雖積、百千行之涕淚未乾、告時之思莫不悵然、臣仕五代之朝廷、及七旬之暮齡、非武非文、無勳無德、惟受親戚之餘慶、久兼相將之淸班、然間自去年之肇秋、至今茲之孟夏、風露易侵、十月全黏於病席之上、效驗難及、一日不離於藥爐之邊、當于斯時、每見賤子至孝之甚深、彌增微臣偏愛之懇篤、嗟呼悲哉、先朝露而塡溝壑之後、又濕誰人之扶持矣、抑割分封戶田、充子息之例、縱事希于曩篇、縱跡絕于往策、然猶或以父職而讓子、或以子爵而讓父者、王政之常也、准

堪誠懇、重以表聞、臣多誠惶誠恐謹言、

元慶四年七月

〔三代實錄 四十一 陽成〕元慶六年正月廿五日戊辰、太政大臣〇藤原基經上表、請罷攝政、帝親萬機、曰云々、勅答曰、先帝託公以眇身、委公以庶績、以至今日、誠思名雖列於成人、德猶慙於往古、復辟之事、非予所堪、攝籙之機、欲公勿讓、朕之此志、美能順之、　廿八日辛未、太政大臣抗表曰云々、伏願職封職田、資人雜俸、並憑先般之定給、總斷此廻之新加、前亦恩賜內舍人二人、左右近衞各四人、爲隨身、先臣宿疾中發、醫療外隨、難待紫垣於直廬、何分霜仗於御巷、今各依初、歸付官府、勅太政大臣來表悉之云々、其職封職田、資人雜俸等、並依所請、一從省減、已曠予一人之素情、且依忠仁公〇藤原良房之故事、又隨身兵仗等、事有舊貫、不敢虧損、　二月甲戌朔、勅曰、舅氏太政大臣藤原朝臣、朕自在提抱、賴其保護、思隆非常之渥寵、以答莫大之元功、其職封職田資人等、累經以聞、自遜辭、朕不敢違之、聽其所請、又舊儀所賜、隨身內舍人二人、左右近衞各六人、左右兵衞各六人、然而隨其固辭、不更加給、依前日之分配、減定內舍人二人、左右近衞各四人、但任人賜爵等、並准三宮、一如先帝策命忠仁公故事、　九日壬午、是日減太政大臣職封職田資人雜俸之狀、須下所司、但隨身如詔旨、

〔三代實錄 四十二 陽成〕元慶六年閏七月十六日丙戌、右大臣多上表曰、臣多言、臣修表辭職、不聽再廻、將重渥愚丹、恐黷塵聖聽、臣謹檢承前、古來任大臣者、掊割職封、返收公府、臣雖云庸瑣、見賢思齊、伏願陛下、留臣所食千戶、接遺美於百年、〇中略許之、

〔本朝文粹 五表〕請減封戶表　菅贈太相國

臣某謹言、〇中略臣伏惟大臣新任、必折半封、〇中略伏願聖主陛下、上稽舊史、下附所司、以減臣所食一千戶、不勝懇切、上表以聞、臣某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

昌泰二年十二月五日　正三位守右大臣兼行右近衞大將菅原朝臣上表

邑三千戸、及隨身兵仗、國有成式、又准三宮給年官給、先帝〇文徳之恩寵也、至于封邑、固讓二千、唯〇唯原作准、據都氏文集改、享千戸、隨身等事、皆辭不受、朕以、祿法所當、古賢不辭、既能有其功、居其位、何不食其祿、增其威、然則所辭封邑等事、乖元老崇班之義、非國家褒飾之心、故今不敢踰法、唯盡其所當、宜其封戸全食三千、以內舍人二人、左右近衞、左右兵衞各六人、爲其隨身之兵、　十四日庚寅、太政大臣從一位藤原朝臣良房抗表曰、臣伏奉今月十日勅旨、賜臣以食邑如舊命、年官准三宮、帶刀資人隨身兵仗等事、苟恩不力、銜贍無間、臣聞太政大臣者、上理陰陽、下經邦國、一人有慶、師範猶施、四海無波、儀形自用、而先帝不棄臣庸瑣、委以此崇班、純陽未兎、履氷臘月、逾添流汗、自愧形影、深執撝謙、唯許減封三分有一、〇中略不許、　十八日甲午、太政大臣重抗表曰、〇中略今陛下黎羨自存、王公茅土且減、臣全不食邑之意、將斷先己之嫌、若事不得已、義可必行、五稼登年、群臣復舊、然後同享所減、臣願足矣、〇中略勅答曰、〇中略來表以爲穀稼載登、㒵雁在御、然後食邑、固不敢當、朕重違元老之意、欲開福謙之門、宜分爲三以享其二、自餘一如前詔、即斷後章、

〇按ズルニ、藤原良房、太政大臣タルヲ以テ三千戸ヲ賜フベキヲ、辭シテ千戸ヲ受ケタルヲ以テ、是ニ至リテ法ニ依リテ三千戸ヲ授ケントシタルヲ、又辭シテ二千戸ヲ受ケタルナリ、

〔三代實錄清和二十二〕貞觀十四年十一月二日戊辰、右大臣〇藤原基經抗表曰云々、誠願見賢齊還職封之一半、積小成大、裨國用之萬分、不堪悃誠、謹以奉表、詔許之、

〔三代實錄清和二十三〕貞觀十五年四月十六日庚戌、左大臣從三位兼行皇太子傅源朝臣融上表、請還食封千戸、勅答曰、來表悉之、〇中略至彼減封之請、苟存利國之義、復有舊章、不敢排拒、朕之此意、公能順之、

〔菅家文草九奏狀〕爲源大納言重請被返納職封二百戸狀

右臣多先策款情、謹待容納、誠之無徹、拒以不聽、臣家富歲輸、伏臘之餘逾積、身忝朝列、負暄之志未休、今如臣所請、事據成式、不敢追風往賢、將以底露方寸、伏願陛下、特垂含弘之鑒、返納臣職封二百戸、不

後幷二千戸、先帝〈○文德〉察其寸心、聽返千戸、臣向寢患彌留、乞還封爵、九重冲邈、難蒙哀〈○哀恐衷誤〉察、徒詠擇號、猶恐嗟若、竊聞比來州郡京邑、承去年旱儉之弊、人用不贍、穀價登躍、加以諸國入少、百官俸乏、帑藏已空、歲用不支、臣辱居端揆、無所彌縫、有慙惶之弗暇、況尸素之胡顏、顧此厚封、自思減耗、亦竊庶幾古人損有餘補不足之義也、臣幸藉陛下不訾之恩、凡厥子弟近親、略皆得拜官爵、仰給資養、得无所乏矣、況亦大將職罷經用、減賜千戸、於臣有餘、伏望奉返此五百戸、將補國用之萬一、然則詩人罷取爾之刺、鬼神貽福謙之慶、不勝慊款之至、謹奉表以聞、

〔三代實錄〈十八清和〉〕貞觀十二年四月廿七日己酉、正三位守右大臣兼行皇太子傅藤原朝臣氏宗上表曰、伏奉恩詔、以臣居右大臣之職、〈○中略〉伏望殊蒙降照、罷退崇班、若爲堪朝廷之老、猶優居大納言之職、事君之道、未必富貴、竭節盡忠、抽誠在此、臣之所陳、不敢虛請、不堪丹款、忝以抗聞、不許、　五月九日庚申、右大臣藤原朝臣氏宗重抗表曰、臣以去月廿七日上表、陳請退右大臣、降忝大納言之狀、即有勅不省、臣欽承失圖、啓處無地、〈○中略〉今所可食職封二千戸、此則祿法所當、何敢專辭、然而素飡之責、自古多難、虛賞之譏、在今何避、伏望分減今所可食職封九百戸、與先所許一百戸、廬爲一千戸、返收公府、又職分資人職田季祿等、一准大納言、更不被加給、〈○中略〉勅答曰、〈○中略〉仍降此一切之制、減彼千戸之封、但至如職分資人職田季祿等、既曰〈○曰恐由誤〉舊典、未許新辭、若苟任來誠、以闕往法、則恨卿損削之美有餘、朕優養之意不足、宜得此趣、且韜謙光、　十六日丁卯、右大臣藤原朝臣氏宗重抗表曰、臣先修表狀、求退右大臣、丹心不融、玄覽無達、後重陳懇誠、請減省封戸幷俸料、幸蒙減半封、猶停省雜俸、〈○中略〉伏望特廻降鑒、重賜早〈○早恐皁誤〉聽、臣職分資人職田季祿等之類、悉准大納言、以斯庸虛、不敢盈溢、恐緣忠執、妄〈○執妄原作熱忘、一本攺、〉摸致抗聞、不許、

〔三代實錄〈十九清和〉〕貞觀十三年四月十日丙戌、勅、〈○中略〉太政大臣外祖父藤原朝臣〈○良房〉風槩沈遠、器度淹凝、摘〈○摘恐鏑誤〉滕〈○摘滕、都氏文集作橘藤、〉之寄攸歸、據計之任是重、朕自在襁褓、頼其保生、〈○中略〉夫太政大臣、法當食

名、唯慮不捨往塞、無勝丹款之至、謹陳謝以聞、依上表懇至、聽其所請、

〔三代實錄 二 清和〕貞觀元年四月廿三日戊申、大納言正二位兼行民部卿陸奥出羽按察使安倍朝臣安仁薨、〇中略齊衡二年領陸奥出羽按察使、上表辭民部卿、不許、三年、〇三年原脫、據一本補、拜權大納言、安仁志尙謙虛、愛公如家、顧謂子弟云、諸國調貢、多入封家、納官者少、所食之邑、於身有餘、乃上表曰、帶職兩三官、周旋於具瞻之地、食邑八百戶、盈溢於尸素之身、伏望減大納言所食、給中納言之所封、帝感安仁之有讓、特許其所請、天安元年爲大納言、兼右近衞大將、抗表苦辭大將、優詔不聽、頻上至于二、然後許之、

〇按ズルニ、此文ニ依レバ、權大納言ノ封ハ正官ト同ジカリシナリ、

〔三代實錄 三 清和〕貞觀元年七月十三日丙寅、詔、太政大臣〇藤原良房祿法准左右大臣、幷停賚人帶刀等、綠太政大臣抗表苦請也、

〇按ズルニ、良房、天安元年ニ太政大臣ノ封ヲ辭シ、左右大臣ノ封ヲ得ント請ヒテ允ヲ蒙レリ、而ルニ是ニ至リテ其祿法ヲ左右大臣ニ准ゼシハ、其間ニ太政大臣ノ封ヲ受ケタル事アリシカ、或ハ新帝卽位シテ、令ニ依リ封ヲ授ケントセシカド、固辭シテ受ケザルヲ以テ此詔アリシカ、

〔菅家文草 九 奏狀〕爲藤大納言請減職封半狀

右臣氏宗伏奉恩制、添授大納言、身居非據、位在具瞻、銜膽棲冰、慚無與二、重以就列槐棘、封戶八百、割土之賞、臣旣知其不功、欺天之罪、臣未計其所避、鬼神惡盈、況於人乎、望請職封之中半、將賚公府之禮節、唯所遺歲入、猶足支伏臘、還恐朝家以臣爲不知分量矣、不勝懇款、抗言以聞、誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

貞觀八年

〔三代實錄 十四 清和〕貞觀九年二月廿三日癸巳、右大臣正二位藤原朝臣良相抗表言、〇中略臣所當食封、前

〔續日本後紀 仁明 十八〕嘉祥元年六月庚寅、正三位守右大臣兼行右近衞大將臣藤原朝臣良房上表曰、○中略臣聞有非常之功、受非常之祿、臣過以頑魯、深沐聖恩、官已崇而又重、位已極而更加、遂居三獨坐之尊、當食二千戶之邑、此榮也非臣本望、此祿也但臣新意、(意恐恩誤、)○中略伏願天聽不遠、皇鑒照徹、殊降福謙之恩、許還封戶之半、○中略天皇不許、　甲午、左大臣藤原朝臣重上表、請減食封、天皇許之、

○按ズルニ、當時左大臣ハ源常ナレバ、左大臣ハ右大臣ノ誤ニテ、藤原良房ヲ謂ヘルナラン、

〔文德實錄 九〕天安元年二月戊子、右大臣從二位藤原朝臣良相上表曰、臣良相言、今月十九日、降軒臨之咫尺、拜徵臣於端右、○中略伏冀天矜、賜垂昭高、(高恐亮誤、)○中略停臣此任、○中略勅答不許之、　五月丙午、右大臣從二位藤原朝臣良相抗表曰、○中略臣居盈溢、深以戰兢、況今稟封戶者倍於疇昔、國用闕乏、職此之由、○中略伏望雖帶右大臣之號、猶食大納言之封、○中略有勅不許之、　壬戌、右大臣從二位藤原朝臣良相又上表曰、臣良相言、臣近上表言、雖帶右大臣之號、猶食大納言之封、敢布腹心、實非矯飾、○中略今算封邑、當食二千、臣之庸虛、何貪厚賞、所以雖優詔之旨有可祗戴、而固陋之情、終難自豢、今亦奉還職田等類、載之別表、添以奉進、伏冀更廻玄鑒、詳照丹愚、前後所陳、必垂允愜、無任迫悚屛營之至、謹重奉表以聞、大納言安倍朝臣安仁宣、奉勅、上表懇懃、宜職封停一千戶、充一千戶、但職田類依例行之者、

〔文德實錄 九〕天安元年二月辛卯、是日、太政大臣正二位藤原朝臣良房抗表曰、○中略勅答不許、　三月甲辰、頻抗表曰、臣良房言、○中略伏望所(所原作可、據一本改、)新加賜封邑、職田、資人、帶刀等類、一切停止、　丙辰、勅曰、○中略今省重表、副朕心情、崇號所宜、不乖攝任、唯至祿法、推而不鍾、所新加色、祈總停止、忌滿之詞最切、助公之意兼深、今欲酌成美於聖言、歸福謙於賢相、是故此般所請、不忤雅懷、以書報之、指不多及、

〔文德實錄 九〕天安元年二月癸巳、權(權原脫、據一本補、)大納言正三位安倍朝臣安仁抗表曰、安仁伏奉恩制、忝授大納言、祗命荷惠、以戚以懼、○中略臣今才微位貴、力劣權崇、帶職兩三官、周旋於具瞻之地、食邑八百戶、盈溢於尸素之身、伏願減大納言所食邑、給中納言所賜封、猶足使飽及子孫、勞施綿邈、不敢貪得空

〔日本後紀 十七 平城〕大同三年六月壬戌、西海道觀察使兼大宰帥從三位藤原朝臣繩主上表曰、伏奉發中之詔、擢臣爲西海道觀察使、兼賜食封、恭聞顯命、恩越恒品、心魂震奮、啓處無地、臣聞諸道觀察使、任在內官、更無外澤、至于賜封、固其宜矣、於臣身居當道、饒給公廨、兼亦食邑、偏濫殊甚、又臣性識庸虛、一無足取、況乎奉使經歲、政達未聞、伏願奉返使封、少免素飡、區々丹愿、伏待矜允、謹遣少典正七位下臣山田造益人、奉表以聞、詔報曰、忽省來表、獨辭使封、執志謙退、聲溢時聽、但遠出外州、人之所苦、卿者爲方牧、兼居蕃鎭、思欲分憂同康景化、忠肅之懿、優賞斯期、宜得此意、無煩重表、

〔日本紀略 嵯峨〕大同四年四月乙未、勅、去大同元年六月十日、始置諸道觀察使、寄深庇俗、任重求瘼、故二年四月十六日、賜食封各二百戶、頃年諸國損弊、百姓困乏云々、今支度公用、頗有欠少、宜暫返納令兼外任、以彼公廨、代此食封、若依理解任、及致仕者、則還納別封、其返收封、宜待兼國、

致仕封

〔續日本紀 四十 桓武〕延暦八年八月庚寅、先是參議正三位佐伯宿禰今毛人致仕、而罷其參議封戶、減半賜之、下知民部、以爲永例矣、

○按ズルニ、大臣納言致仕減半ノ制ハ、祿令ノ本註ニアリ、上ニ引ケリ、

〔日本紀略 一九條〕正暦三年十月十四日甲戌、前權大納言源重光、准致仕賜職封、

減職封

〔續日本後紀 十四 仁明〕承和十一年閏七月辛酉、左大臣從二位兼行左近衞大將皇太子傅源朝臣常上表曰云々、優詔不許、　癸酉、左大臣源朝臣常重上表曰云々、勅書於左大臣曰、所表具之、〇中略卿深鑒損挹、固守沖虛、減封之請、前後累通、朕與卿昆季、義兼家國、偏行則公議不聽、兩遂則私情難忍、雖賞輕德重、自先害盈之嫌、而派分枝連、欲益福謙之利、故屈之于此、申之于彼、以元來望、宜知此意、

○按ズルニ、史文闕逸シテ其事ヲ詳ニスルコト能ハズ、恐ラクハ亦減半ヲ請ヒシナラン、

〔續日本後紀 十五 仁明〕承和十二年正月甲戌、右大臣從二位橘朝臣氏公上表、請返食封一千戶、天皇賜勅書聽之、事見公卿傳、

觀察使封

○按ズルニ、此文ニ依レバ、是ヨリ先ニ大納言以上ノ職封ヲ削ル事ノアリシナリ、大同元年六月、右大臣藤原内麻呂ニ賜フ所ノ手詔ニ、今日增戶是復本數ノ言アリ、下ニ擧ゲタリ、參照スベシ、

〔拾芥抄　中末　御給〕太政大臣（封戶千五百戶、減七百五十戶、）　左右大臣封戶（千五百戶）　内大臣封戶（八百戶）　納言封戶（大納言六百戶、中納言三百戶、）　參議封戶六十戶

〔日本後紀　十四　平城〕大同元年六月戊戌、正三位守右大臣兼行近衞大將藤原朝臣内麻呂上表曰、伏見群臣議奏、大臣食封、增加千戶、所以崇優高德、歷代不易之典也、臣運遇開泰、曲荷鴻貸、超歷等次、辱尸斯位、恩深寵盈、待災人神、今復厚祿疊秩、一倍前數、物極則變、樂往哀來、臣之昧德、不知所爲、伏請名帶二千、俟後來之賢臣、實食千戶、省素食之切責、率由懇衷、非敢詭飾、特願靈鑒、以降天從、无任悾款之至、謹奉表以聞、勅不聽、　壬寅、正三位守右大臣兼行近衞大將藤原朝臣内麻呂上表曰、（中略）伏乞曲廻鑒許、賜於前請、（中略）手詔報曰、重省表口、固辭益封、雖崇沖讓、未允口情、何者堂高階遠、位尊祿厚、聞古稽今、有因无替、其大臣者、望高端右、貴冠群后、禮數秩服、明載國典、又祿之所得、先哲不辭、況今日增戶、是復本數、明知此意、宜斷表請、

〔日本紀略　十一　一條〕寬弘五年正月十六日戊寅、今日前大宰權帥伊周、准大臣給封千戶、（○又見扶桑略記）

〔榮花物語　八　初花〕寬弘七年とぞいふめる、よろづれいのありさまにて過もていくに、帥殿（○藤原伊周）は、ことしとなりては、いとゞ御心ちおもりて、けふや〳〵とみえさせ給、なにごとも月ごろ志つくさせ給へれば、いまはいかゞすべきとおぼしなげき、さるはおとゝしよりは御封なども、れいのおとゞのさだめにえさせ給へど、くに〴〵のかみもはか〴〵しく、すがやかにたてまつらばこそあらめと、いとをしげなり、

〔公卿補任　平城〕大同二年四月十六日、詔、宜罷參議號、獨遷觀察使、所食封邑、各二百戶、

ヲ聽ス、平城天皇大同三年ノ太政官ノ奏文ニ、大同元年大納言已上職封復二舊加畢一ノ語アルニ依レバ、是ヨリ先ニ職封ヲ減ゼシ事ノアリシナリ、是ヨリ後ニハ減封ヲ請フ者頻ニ有リテ、或ハ減半ヲ請フアリ、或ハ減半ヲ經タルノ後ニ、更ニ減半ヲ請フアリ、或ハ太政大臣ニシテ左右大臣ノ封ヲ得ント請フアリ、或ハ大納言ニシテ中納言ノ封ヲ得ント請フアリ、其中ニハ允サルヽアリ、允サレザルアリ、而シテ新ニ其官ニ昇リタル者ハ、必ズ減半ヲ請フヲ以テ故事トシ、太政大臣モ左右大臣ノ封ヲ得ルヲ以テ例トセルガ如シ、拾芥抄ヲ按ズルニ、其數大ニ令式ヨリ減ゼリ、何レノ時ニ此ノ如ク改マリタルニカ、今知ルベカラザルナリ、夫レ職封ハ固ヨリ官ニ因リテ賜フ所ナレバ、人ニ讓ルコトヲ得ズ、其官ニ居レバ必ズ之ヲ受クベシ、而ルニ中世ニハ、之ヲ子女ニ割與スル者アリ、之ヲ寺ニ施ス者アリ、身三台ニ居リテ一戸ノ封ナキ者アリ、亦以テ世變ヲ觀ルベシ、猶ホ封戸總載篇、職田篇ヲ參看スベシ、

制度

大臣納言參議封

〔令義解 四祿〕凡食封者、○中略 其無レ故不レ上二年者、則停レ給、謂、兼爲二封主一立レ例、其職封者、不レ入二此例一、

〔令義解 四祿〕凡食封者、○中略 太政大臣三千戸、左右大臣二千戸、大納言八百戸、若以レ理解官、及致仕者減半、

〔續日本紀 三文武〕慶雲二年四月丙寅、勅、○中略 更置二中納言三人一、○中略 太政官議奏、○中略 其任擬二正四位上官一、別封二百戸、資人三十人、奏可之、

〔延喜式 二十二民部〕凡食封者、○中略 中納言四百戸、參議八十戸、以レ理解官、及致仕者減レ半、

〔類聚三代格 八〕太政官謹奏

聽レ賜二位封一依二令條一事 ○中略

大同元年、大納言已上職封、復二舊加畢一、○中略

大同三年十月十九日

盛貞所　二町八反九十二歩
道重　二町八反九十二歩
助光　二町八反九十二歩
助時　二町八反九十二歩
重俊　二町八反九十二歩
宮用四町貳反　但三嶋卅八町四反三百歩ノ内
神宮寺
所司分　二町貳反
別當分　二町
乃万宮十四町三反半
礒乃宮　二反
伊輿村宮　六町八反半〇中略
右注進如件
建長七年十月　日　田所李允紀

職封

職封トハ、官職ニ因リテ賜フ所ノ封戸ニシテ、大臣、納言、少納言ヲ除ク參議ノ外ハ、之ヲ受クル者ナシ、但シ觀察使ニモ賜ヒシ事アリ、若シ理ヲ以テ解官シ、及ビ致仕スレバ減半シテ賜ヒ、事故アリテ解官シ、或ハ身薨ズレバ卽チ還納ス、但シ其解、其薨、若シ調物收受限月ノ後ニ在ルトキハ賜フコト

無子、又无留心、只有姪、名曰但馬、(六條院女房)即引但馬出予前、予流涙曰、諾敢不忘命矣、年來寤寐思此事、未能報恩、因不通音信、今夜與米五十石、(但馬許)每年可爲之也、是思乳母恩、不當百萬之一、只志之所之也、余若富貴、必可亦厚報者也、今居三台之任、无一戶之封、是以不能報恩、命哉、

○按ズルニ、藤原賴長、時ニ內大臣タリ、

〔春記〕長久元年九月一日癸丑、忩忙無極之間、万事彌不階、就中近來日食欲絕、已無所期、僅雖有公俸、國司一切不聞入、無術之代也、更以何爲哉、官途無隙、家途無術、是宿報也、何爲々々、

〔大槐秘抄〕今の上達部は、封戶すこしもえ候はず、庄なくばいかにしてかはおほやけわたくし候べき、近代の上達部、おほく國を給はり候は、封戶のなきがする事なめりと思候に、めさる丶こそ力およばぬ事なれ、

○按ズルニ、大槐秘抄ハ九條伊通ノ作ナリ、伊通ハ永萬元年歲七十三ニテ薨ゼシ人ナリ、

〔運步色葉集〕封戶田(自天子神社へ被寄田ノ名)

〔潤背上〕庄○中略相傳云、陽成院脫屣之後、分國司所治之地、始名庄、爲太上皇封戶田、置院司等云々、庄號之稱始于此矣云々、旣爲太上皇封戶田、故不輸國衙之貢物也、

〔伊豫國田所注進田文〕封戶田五十五町七反二百歩

第一大三嶋宮　卌八町四反二百歩
　太祝神主得分　三町四反九十二歩
　　同太祝言職分　三町四反九十二歩
　　　越智本郡司　三町四反九十二歩
　　　　兼信　二町八反九十二歩
　　　　考昌　二町八反九十二歩

封戸制衰

卽依請宣旨下了

〔朝野群載七攝籙家〕割封戸奉寄諸社

奉寄封戸拾烟事

尾張國五烟　播磨國五烟

右割給封內奉寄石淸水八幡宮如件、

天永元年十一月廿日　攝政右大臣正二位藤原朝臣〇忠實

祇園社十烟安藝五烟、阿波五烟、　北野社十烟備後五烟、阿波五烟、　賀茂下社十烟尾張五烟、美作五烟、　賀茂上社十烟備後五烟、阿波五烟、　松尾社十烟尾張五烟、備後五烟、

已上書樣倣上　件寄文、攝政之後、各書分、以頭下家司等被分進六社、是前例云々、

〔中右記〕元永二年十二月五日、今朝依祈子孫事割家封備後國十烟奉寄石淸水八幡宮、聊奉幣、付權別當法眼圓賢了、

〔本朝續文粹二勘文〕變異疾疫飢饉盜賊等勘文　敦光朝臣

勘申

變異疾疫飢饉盜賊等事〇中略

一去年風水有難今年春夏飢饉事〇中略

右王者八政、食爲其先、〇中略七者依府庫空虛也、大府之食廩、久以空虛、諸國之租稅、已少塡納、況納官封家、有名無實、列位之臣、不預月俸、奉公之士、難禦歲寒、所謂衣食闕於家、雖父母不能制其子、凍餒切於身、雖堯舜不能固其節、又諸國大粮宛行惟稀、臺隷之輩、衣糧難支、如此七事、廢一不可、〇中略

保延元年七月廿七日　正四位下行式部大輔藤原朝臣敦光

〔台記〕康治二年六月六日辛卯、余〇藤原賴長有乳母名曰備後、早死、其時予年十五疾病、余臨其家問之、遺言曰、我

香、欲混醍醐之妙藥、埃塵豈重、亦任山陵之仁風、思納受於甚深、開青蓮而遠覽、仰哀愍於弘誓、照白茅之上分、今勉精誠、太槪如此、弟子在衡敬白、

安和二年十月廿八日　　弟子右大臣從二位藤原朝臣在衡

〔春記〕長曆三年十二月廿一日丁丑、內大臣（○藤原教通）長女今夜初入內、（○中略）仰云、內大臣女可入內、可聽輦車之事可示關白（○藤原賴通）、又仰云、大般若二部所新寫也、（件事行任奉仕之云々）於石淸水幷賀茂可奉供養、（天曆例云）云、其事春宮大夫先日所奉也、又在坊（○後朱雀）之時、以封百戸相分奉此兩社、今以彼封內二季欲令轉讀、可爲永例也、

〔朝野群載（四朝儀）〕諸家割封戸申充佛聖灯油料

入道二品親王（○性信）家

請特蒙天恩、因准傍例、被下宣旨於民部省、所給本封新加等前後相幷四百五十烟內二百七十五烟永寄置御願喜多院、割充佛聖供灯油料狀

尾張國廿五烟　近江國廿五烟　能登國廿五烟　越後國廿五烟（三年二月改丹波國）　出雲國廿五烟　美作國租穀百石　備中國五十烟　備後國廿五烟　周防國廿五烟　讃岐國廿五烟　土佐國廿五烟

右謹檢案內、賜封戸之輩、寄佛事之例、蹤跡居多、不遑羅縷矣、抑斯院者、去承保二年八月一日、早降綸旨、已爲御願、被置阿闍梨三人、先畢、須經言上申請別符（○符一本作封）也、而件本封等、忝以宗祖之胤子、苟預苞茅之仁恩、今以其封戸申置此院家、頗是穩便、豈無裁許乎、望請天恩、被下宣旨於彼省、本封新加前後相幷、永以寄置、將給所領、卽以院家返抄勘會公文、然者、佛前之灯明無絕、僧中之薰修不懈、先所謂鳳曆之萬歲、遂期龍華之三會、仍勒事狀、謹請處分、

應德二年九月十五日　　阿闍梨傳灯大法師位信覺

下之風、臣之休退、今此時也、昔羊叔子之歸故里也、指二疎而爲吾師、鄭臣君之擧新材也、推五倫而進其位、何以忘止足、猶欲觸逆鱗、伏願陛下、暫撤王懸、幸照丹款、封賞衛卒、是素所辭、早停先勅、攝籙儀形、又新所退、必納後章、不勝戰汗屛營之至、謹重拜表、陳乞以聞、臣某誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

永祚二年三月十七日　　太政大臣從一位藤原朝臣某上表

〔書札禮〕職事奉大臣請文

可被返進封戸間事

右后位之時粗有其例、院號之後不分明歟、然者准后宮之例可被用狀歟、封事者太上天皇之儀也、表者親王臣下之禮也、共以不可叶例耳、至中使者爲希代事、被用公卿可宜歟者、以此旨宜被言上之狀如件、

十二月七日　　太政大臣實行上狀

私封入神社佛寺

〔朝野群載十七佛事〕弟子在衡敬白

請諷誦事

佛御布施名香一裹　燈明二盞

衆僧御布施信濃布二百端

奉施入職封五十烟甲斐廿五烟、播磨廿五烟、

右諷誦封戸、所請如件、伏以須彌百億、日月異而照臨、世界三千、慈悲同而引接、佛陀自施一子之愛、聖教既叶衆生之誠、於是懷舊之感、五内之念易迷、追遠之情、九廻之腸難遏、郎述由緒、宜抽愚庸、弟子在衡、延喜八年初遊國子之藝、次進勸學之場、〇中略俄蒙非常之詔文、暗登丞相之棨職、忽成千万之恐懼、頻上再三之表函、更下勅宜、不許懇望、爰戸部地官、依式充封、尋傍例於官庭、返半分於公府、凡代々昇進、雖云後聖之深恩、度々拜除、莫非先皇〇村上之餘化、仍割大臣之棨口郎獻御願之伽藍、嗟乎黍稷不

況法損恒(〇恒原脱、據一本補)規、朝夕之儲逾乏、朕之焦思、已渉炎涼、如聞今玆收藏不害、民庶稍休、非望栖畝之餘糧、蓋聞載路之多黍而已、夫先王之爲政也、弛於急張於緩、年荒節用、無節不可以存、穀熟復常、不復難可以贍、宜太皇太后、皇太后宮、春宮坊封、及服用、五位以上封祿、諸王(〇王恐臣誤)季祿等、往年減省之物、自今以後仍舊莫減、唯至朕躬、德淺責深、堯之冷葛舜之輕瑠、朕雖未窺彼垣墻、而今恨其珍麗、以群蠹(〇蠹原作囊、據一本改)之器、非片漆之所能堅、壓空之民、豈一秋之所能當、是故朕服御常膳、左右馬寮秣穀、或分析或權停之類、尚如前令、更不加進、普告遠近、不拒朕行、

〔貞信公記〕延喜十四年十月廿六日己丑、奉減封表、　十二月九日辛未、今日奉請減封□□之一狀、

天慶十年三月廿九日、奏減臣下封祿論奏、其儀右大臣令持外記、到御所付藏人令奏者、

〔日本紀略(三村上)〕天曆元年三月廿八日癸丑、減五位以上封祿、　廿九日甲寅、太政官論奏、請依舊減五位以上封祿四分之一、

〔本朝文粹(四論奏)〕爲入道前太政大臣辭職幷封戸准三宮第二表　　江匡衡

臣兼家言、今月十五日、中使權中納言源朝臣伊陟、勅(〇勅恐衍)至、奉宣聖旨、抑臣上表、鳴鶴之聲空隔、卷龍之命不聽、惶惑失圖、心顏罔置、臣某(中謝)臣聞、貞觀之初、命忠仁公爲相、三公當仁、百官總己、俗阜無費于受崇封、德高有便于鍾厚禮、陛下(〇一條)以今日天下、准昔時、賦斂之虛耗萬倍、以貞觀故事、比微臣、才用之懸隔千里、加以彼間公卿、其數纔十有三人、節儉交深、實封不幾、今當時所備者、上皇、三院、內主、三宮、及公卿廿一人也、計其職邑、爲國煩費、而臣更擬三宮之儀、又居正台之任、若以前賢之末苗、謂賞臣、則周邵之後無登三事、若以左戚之元老、謂崇臣、則陰郭之家不過九卿、臣扶帝道、履政途以來、變異屢臻、謗訕無隙、問六典則五既闕、論八柄亦七不堪、彼湯武聖主也、然不能乘幹舟而浮江湖、伊呂賢相也、然不能策驪馬而馳郊野、雖寔聖主賢相、未若越人與胡兒者、況愚臣焉得持重載以久濟巨川、攬六轡以猥陟象岳哉、方今陛下、肇服玄冕、新莅蒼生、百辟傾心、慺々然以待陛下之政、四夷傾耳、靡々然以聽陛

減封賚國用

公、謚曰恒德公、食封賚人悉同存日、本官如本、今日薨奏也、

〔日本紀略（嵯峨）〕弘仁九年三月壬寅、公卿奏曰、頃年之間、水旱相續、百姓農業、損害不少云々、伏望、省臣下封祿、暫助國用、年歲豐稔、即復舊例、許之、　十一年十一月、詔曰云々、其弘仁八九年之間、水旱不登、府庫稍耗、因公卿評議、暫割五位以上封祿四分之一、以均公用、如今五穀頗熟、支用可均、宜封等數復之舊例、

〔日本紀略（淳和）〕天長二年五月乙未、（○未恐巳誤）左大臣藤原冬嗣等上表、奏請臣下封祿、許之、　庚戌、右大臣緒嗣上表、以封一千戶（○一千戶、恐二千戶誤、）奉支國用、勅依請、　癸丑、左大臣冬嗣上表請減封、　乙卯、勅不許、　癸亥、右大臣封戶二千烟、依表收公、

〔三代實錄（清和）十六〕貞觀十一年七月二日戊午、太政大臣從一位藤原朝臣良房、大納言正三位兼行皇太子傅藤原朝臣氏宗、正三位行中納言源朝臣融、中納言兼左近衞大將從三位行陸奧出羽按察使藤原朝臣基經、參議從三位行左衞門督兼近江守源朝臣多、參議右近衞大將從三位兼行讚岐守藤原朝臣常行、參議正四位下行右衞門督兼讚岐權守源朝臣生、參議民部卿正四位下兼行春宮大夫伊豫守南淵朝臣年名、參議正四位下行式部大輔春澄朝臣善繩、參議正四位下行左大辨大江朝臣音人等奏言、昔堯舜以百姓爲心、禹湯以萬方罪己、隔代齊聖、於是可議、伏奉去月廿六日詔書、旱雲涉旬、農民失望、服御常膳、並宜減撤、臣等（○等原作尋、據一本改、）肇讀循環、不勝感歎、夫君臣合體、諒自古來、豐儉同分、豈唯今日、伏請五位以上封祿、亦暫減折、裨纖塵於崇岱、添涓滴於谷水、謹錄事狀、伏聽天裁、奏可、

〔三代實錄（清和）二十四〕貞觀十五年十一月十三日甲戌、詔曰、垂鴻一德、達（○達原作建、據一本改、）道者先亂其行、曆象同天、變常者乃遭其怨、朕政無寒暑、化負水波、淩遲之運、仰慙洪緒、及至十一年、夏旱復甚於常時、性璧空投、山澤之靈、魚龍殆失淵源之府、朕念而三復、過在一人、麤衣以待天下之温、菲食以思天下之飽、而卿等推心唱和、取義往來、論奏一成、懇誠自露、遂王公減封、諸臣省祿、縱令率如舊制、伏臘之費難支、何

歿後不收封

割₌寄故左大臣藤原家封穀壹伯漆拾壹斛漆斗五升（半給主八十五斛八斗七升五合、納官八十五斛八斗七升五合、）

右依₌民部省天平十年十一月十四日符₌割充如ㇾ件、

定官參仟捌伯捌拾陸斛漆斗壹升

合官納租穀肆仟壹伯漆拾捌斛壹斗肆升（振入三百七十九斛八斗一升）

定參仟漆伯玖拾捌斛參斗參升

○按ズルニ、故左大臣ハ武智麻呂ヲ謂ヘルナラン、武智麻呂ハ、天平九年七月乙亥、左大臣ニ拜セラレ、卽日薨ゼリ、此ハ其位封タルト職封タルトヲ詳ニセズ、但シ歿後ニ係レルヲ以テ、減半シテ給セシナラン、

〔續日本紀十武聖〕天平二年四月辛未、始置₌皇后宮職施藥院₌、令₌諸國以₌職封并大臣家封戸庸物充（○充原脫、據₌一本₌補、）價₌買₌取草藥₌、每年進ㇾ之、

○按ズルニ、皇后ハ藤原安宿媛ニシテ、不比等ノ女ナリ、大臣ハ卽チ不比等ナリ、養老四年、右大臣ヲ以テ薨ジ、太政大臣ヲ贈ラレ、是ニ至リテ十年ヲ歷タリ、其間長屋王ノ外ニ大臣ニ陞レル者ナク、長屋王薨ジテ後、是年マデ大臣ニ見任セル者ナシ、故ニ此ニ謂フ所ノ大臣ハ不比等タルヲ知ル、

〔愚管抄一〕關白太政大臣基經（仁和三年十一月十九日、詔、萬機巨細百官總ㇾ己、皆關₌白、然後奏下、一如₌故事₌、寬平三年正月十三日薨、五十七、天皇甚哀悼、詔贈₌正一位₌、食封資人並如ㇾ故、大臣又知ㇾ故、在位二十年、）

〔日本紀略六圓融〕天祿三年十一月十日丙寅、奏₌故太政大臣（○藤原伊尹）薨之由₌、詔贈₌故太政大臣藤原朝臣正一位₌、（○中略）食封資人並同₌平生₌、

貞元二年十一月廿日丙午、奏₌故太政大臣（○藤原兼通）薨由₌、（○中略）詔贈₌正一位₌、（○中略）食封資人並同₌生日₌、

〔日本紀略九一條〕正曆三年七月十五日丙午、詔贈₌故太政大臣藤原朝臣爲光正一位₌、封₌相模國₌、爲₌相模

歿後賜封

授小山下位、乃封二十戶、　十年正月辛巳、勅境部連石積、封六十戶、因以給絁三十疋、綿百五十斤、布百五十端、钁一百口、　十一年三月己酉、是日詔曰、親王以下、至于諸臣、被給食封、皆止之、更返於公、十月丙子、百濟僧常輝、封三十戶、是僧壽百歲、

朱鳥元年五月戊申、侍醫百濟人億仁病之臨死、則授勤大壹位、仍封一百戶、

〔日本書紀三十持統〕五年正月丙戌、詔曰、直廣肆筑紫史益、拜筑紫大宰府典以來、於今二十九年矣、以清白忠誠、不敢怠惰、是故賜食封五千戶、絁十五匹、緜二十五屯、布五十端、稻五千束、　七年十一月戊申、以直大肆授直廣肆引田朝臣少麻呂、仍賜食封五十戶、

〔續日本紀一文武〕四年八月丁卯、赦天下、但十惡盜人不在赦限、高年賜物、又依巡察使奏狀、詔諸國司等、隨其能進階賜封各有差、阿倍朝臣御主人、大伴宿禰御行、並授正廣參、因幡守勤大壹船連秦勝封三十戶、遠江守勤廣壹漆部造道麻呂二十戶、並褒善政也、

〔續日本紀十二聖武〕天平九年九月丁未、贈民部卿正三位藤原朝臣房前正一位左大臣、賜食封二千戶於其家、限以二十年、

○按ズルニ、此レ功封ニ似タリ、其歿後ニ賜フヲ以テナリ、蓋シ左大臣ノ封戶ハ二千戶ナルヲ以テ、其額ヲ職封ニ准ゼシナラン、而シテ限ルニ二十年ヲ以テセシハ、權制ニ出デタルナリ、

〔東大寺正倉院文書三十五〕周防國天平十年正稅帳〔○中略〕

封戶租穀玖佰貳拾斛玖斗陸升伍合

全給貳所租穀伍伯玖斛捌斗伍升伍合

半給參所租穀肆伯壹拾壹斛壹斗壹升

給主二百五斛五斗五升五合
納官二百五斛五斗五升五合

官租穀肆仟伍拾捌斛肆斗陸升

令前賜封例

者乃得眞戸、舊制戸皆三丁已上、一分入國、開元中定制、以三丁爲限、租賦全入封家、

〔續日本紀十七聖武〕天平十九年五月戊寅、太政官奏曰、封戸人數、緣有多少、所輸雜物、其數不等、是以官位同等、所給殊差、於法准量、理實不堪、請每一戸、以正丁五六人、中男一人爲率、則用〇用本作庸一鄕別課〇課原作誤、據本改一口二百八十、中男五十、擬爲定數、其田租者、每一戸以四十束爲限、不合加減、奏可之、〇賦役令集解係六月一日、四十束作三十束、

〔東寶記七〕一五十僧料所〇中略私云、甲斐下總兩國二百戸、今不知其在所、一戸分土貢、禪覺僧都記云、封戸事、兵部入道云、封戸何烟、國々隨有差、但詮同事也、以四石爲一烟、能米定、以八石爲一烟、官米定也云々、

〔續日本後紀四仁明〕承和二年正月壬子、大僧都傳灯大法師位空海奏曰、〇中略願且割被入東寺官家功德料封千戸之內二百戸、甲斐國五十戸、下總國百五十戸、以充僧供、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年四月廿三日戊申、大納言正二位兼行民部卿陸奥出羽按察使安倍朝臣安仁薨、安仁者左京人、〇中略安仁志尙謙虛、愛公如家、顧謂子弟云、諸國調貢多入封家、納官者少、所食之邑、於身有餘、〇下略

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年三月壬午、皇太子使使奏請曰、昔在天皇等世、混齊天下而治、及逮于今、分離失業、謂國業也屬天皇我皇、可牧萬民之運、天人合應、厥政惟新、是故慶之尊之、頂戴伏奏、現爲明神御八島國天皇問於臣曰、其群臣、連、及伴造、國造、所有昔在天皇日所置子代入部、皇子等私有御名入部、皇祖、大兄御名入部、謂彥人大兄也及其屯倉、猶如古代而置以不、臣卽恭承所詔、奉答而曰、天無雙日、國無二王、是故兼幷天下、可使萬民唯天皇耳、別以入部及所封民、簡宛仕丁、從前處分、自餘以外、恐私驅役、故獻入部五百二十四口、屯倉一百八十一所、

〔日本書紀二十九天武〕六年五月甲子、勅大博士百濟人率丹授大山下位、因以封三十戸、是日、倭畫師音檮

同副下文奉之、某謹言、

即日　伊與守藤原

上聞

賜封者所得

〔令義解三賦役〕凡封戶者皆以課戶充、(謂有中男一人以上者、即為課戶、其封戶仕丁亦給其主也、)調庸全給、其田租為二分、一分入官、一分給主、

〔令集解十三賦役〕古記云、問封主無給仕丁文、據誰文處分、答調庸全給、又仕丁免課役、即給課役主耳、課戶課少丁一人以上也、慶雲二年十一月四日格云、以四丁准一戶也、兵士等類不在點例、但出身之色不在障限、

〔延喜式二十二民部〕凡封戶以正丁四人中男一人為一戶、率租每戶以卌束為限、每鄉滿課口二百人、中男五十人、租稻二千束、若不滿此數、通計國內令填、但遭損之年、不聽通計滿給、(悲田分封五十戶亦准此、)其神寺封丁依五六丁之例、准人封、不可增減、

〔延喜式二十六主稅〕凡諸家封租、若當不三得七之年、戶別所輸、不滿卌束率數者、通以他鄉填之、若損過三分、及神寺封租、不在此限、

○按ズルニ、不三得七トハ、租ノ中ニテ、七分ヲ收メ三分ヲ蠲クヲ謂フ、

〔續日本紀六元明〕和銅七年正月壬戌、二品長親王、舍人親王、新田部親王、三品志貴親王、益封各二百戶、從三位長屋王一百戶、封租全給、其食封田租、全給封主、自此始矣、

〔續日本紀十三聖武〕天平十一年五月辛酉、詔曰、(中略)諸家封戶之租、依令二分、一分入官、一分給主者、自今以後、全賜其主、運送傭食、割取其租、(又見賦役令集解、)

〔唐六典二吏部〕司封郎中員外郎、掌邦之封爵、(中略)五等之爵蓋始於黃帝、(中略)隋氏始立王公侯以下制度、皇朝因之、然戶邑率多虛名、其言食實封

封租運漕

ろづにたのみきこえ給て、われはちごのやうにてすぐさせ給ふも、いみじうあはれなり、

〔本朝續文粹六奏狀〕正四位下行伊豫守源朝臣賴義誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩依征夷功被下重任宣旨與復任國勤斷公事狀

右賴義謹檢案內、〇中略去康平六年被任伊豫守、〇中略去年九月被賜任符、下向遲引、自然如是、然間四年之任二稔空過、彼國官物不能徵納、然而封家納官其責如雲、仍以私物且勤進濟、〇中略

年　月　日

〔法隆寺文書一〕法隆寺政所下　所司等所

可早催請納國衙、

但馬　上野

合

國御封等早催請可相配僧供修造料之狀下知

應安三年三月廿二日

別當前僧正法印大和尚位花押

〔雲州消息中末〕御封米事

右伊與國所進米到來淀津云々、解文下文、一日史生秦福充所持來也、早可下行之由可被示綱丁所、某謹言、

極月日　皇后宮權大進

謹上　伊與守殿

宮御封米事

右如仰早可下遣之由可仰遣綱丁所、他國米糠粃相交云々、此國之米殊加精好、又先日所被仰差米

太政官符

應下禁制諸院諸宮諸家使不レ經二國司一闌中入部內上事

右得二近江國解一偁、謹撿二案內一、前司時調庸未進准二租稅一可レ徵二率之一狀、格制已明、而今前件使等不レ由二國司一闌二入部內一、凌二轢百姓一、略二奪田宅一、妨レ取二調庸一、非三啻勘二責正物一、兼復倍二徵賄賂一、調物難レ濟、大底緣レ此、望請官裁、諸院諸宮諸家調庸、若有二未進一者、先牒二國司一、將レ令二辨進一、非レ有二國符一、不レ聽レ入レ部、然則官物易レ濟、百姓安堵、謹請二官裁一者、右大臣宣、依レ請、諸國准レ此、

寬平三年六月十七日

〔榮花物語五浦々の別〕宮の御前（○一條后藤原定子）の御うちまゐりの事、そゝのかしけいしつるにぞ、おぼしたゝせ給へる、明順道順よろづにそゝき奉る、國々の御封などめし物すれど、ものすがやかにわきまへ申人もなければ、さるべき御さうなどぞ、きぬ奉らせんなど案內申人ありければ、きぬめしてよろづにいそがせたまふ、

〔榮花物語十二玉村菊〕あるがなかのおとみや（○具平親王女嫥子）は、三條の入道一品宮（○村上皇女資子內親王）の御子にしたてまつらせ給ひし、十ばかりにやおはしますらん、こたみの齋宮にゐさせ給ぬ、その御あつかひもたゞこの大將どの（○藤原賴通）よろづにせさせ給、式部卿宮（○敦康）いとかひありてもてなし聞えさせ給けり、一宮にておはしましゝかば、御ありさまいとめでたきに、いまはいとゞ大將殿御うしろ見せさせ給へば、御符などいづれの國のつかさかはおろかにおもひ申さむと見えて、いとゞしき御ありさまなるに、大宮（○藤原彰子）よりも、つねになに事につけても聞えさせ給、

〔榮花物語十六本の雫〕やう〳〵御法事の程もちかうなれば、院（○小一條）何事もおぼしいそがせ給、との（○藤原顯光）の御ふなども、かゝるおりたにもとめせど、たゞいま受領どもは、たゞ御堂（○法成寺）のことをさきとする程に、せう〳〵の所の御事をば、なにとも思ひたらねど、たゞ院おはしませば、それをよ

各出家官稱有負物、竟封郡司及富豪宅取其所蓄之稻、若國司相論、却以他故非唯侵損郡内、還似與公家相爭、今須負諸家物人若在國中、彼家牒國、國加追勘、據法任理彼此得所、如此則公私共平、郡内肅然望請早被下符永絶姧源、謹請官裁者、右大臣宣、依請、自餘四箇國亦宜准此者、而諸國司等、不愼符旨、已致違失、彌長姧濫、未聞改轍、凡人情矯僞非一、或侵寃細民多求私利、或假力貴家巧避公責、國家之蠧莫大於斯、今被右大臣宣偁、夫吏道以格式爲先、棄而不行、豈循良之謂乎、宜早下知莫令疎漏者、件格可施七道何止五畿、伏望下知諸國莫令矯濫者、

以前撰格所起請具件如右、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年十二月七日辛巳、禁斷諸司諸寺諸院諸家徵物使等、寃勘諸國貢調綱領郡司雜掌、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁止諸司諸家徵物使寃勘調綱郡司雜掌事

右得丹波伊豫土佐等國解偁、調庸雜物貢進立限、若違其期罪有恒法、而今件徵物使等多集黨類、候郡司雜掌入京之日、各競寃勘、先號前分責取官物、次稱土毛掠奪私粮、縱不叶其求、遂加凌轢、爰郡司爲免身辱偏忘公損、或折納官内徒充賂遺之贈、或取封戸物還致本家之費、又雜掌所職專在公文、不預雜物、而郡司未到之間勘責如前、公粮竭於酒食、旅資盡於苞苴、因茲不濟預事、並以逃歸、調物難濟、公文擁滯、職此之由、於是國司常被絆解由、郡司亦不免決罰、不加禁止何弭苛酷、望請官裁被停件使、將令貢調使并郡司務進納之事、然則納官封家無未進之弊、國宰郡司免罪責之科者、左大臣宣、奉勅依請、若有背符旨強進之輩、捕身言上、殊處重科、宜令有司亦加糺彈、諸國准此、

寛平三年五月廿九日

封租徵收

返上之、

永久三年二月十二日　　勘公文左史生惟宗

右中辨兼大進藤原朝臣

〔朝野群載四朝儀〕今上內親王家別納所、下出雲國辨濟所、

可早進濟御封貳拾伍烟代絁佰肆拾枚事

右件絁當年料、早可進濟之狀所仰如件、國宜承知依件辨濟之、勿緩怠、故下、

保安三年十月一日　　預主水正兼石見守藤原朝臣

別當尾張守藤原敦兼

〔台記別記〕久安六年正月十九日丁酉

女御家多子〇藤原政所返抄　　能登國

撿納庸米佰斛事

右當年御封撿納如件、故返抄、

久安六年正月十九日　　知家事主稅允佐伯在判

〔今昔物語三十一〕常澄安永於不破關夢見在京妻語第九

今昔、常澄ノ安永ト云フ者有ケリ、此レハ惟孝ノ親王ト申ケル人ノ下家司ニテナム有ケル、其ニ安永其ノ宮ノ封戸ヲ徵ラムガ爲ニ、上野ノ國ニ行ニケリ、

〔類聚三代格十二〕太政官符

一應禁制王臣家妨封郡司百姓等稻事

右撰格所起請偁、太政官去齊衡二年八月廿六日下五畿內諸國符偁、太政官去承和十二年六月廿三日下五畿內諸國符偁、得攝津國解偁、收納租稅良由郡司、須先究官物後及私事、而頃年王臣諸家

〔東寺百合古文書六十九〕以白紙書
紀伊國雜掌起成安解申注進弘福寺御封代所濟勘方
　合
永久元年料百烟代百五石四斗八合
調絹九疋代十石八斗
綿二百廿三屯代廿六石七斗
鹽二石一斗代二石一斗
庸綿百三十一屯代十四石四斗
中男作海藻二百斤代六石五斗五升
封丁四人代廿石
租白米廿四石八斗五升八合
同二、三、同上、
並三箇年料
所濟
　准絹十六疋
　永久三年十二月日公文
〔朝野群載四朝儀〕封家假收納　他家准之
中宮職御服所
　假收米玖拾斛貳斗貳升事
右去天永二年、伊與御封百六十三斛七斗二升內、先進七十三石五斗、殘假收如件、但正返抄之時可

租穀六百石　代百八十石（石別三百文）
已上都合二百九十三石九斗
前分石別一斗
廳料石別一升（○下略）

〔東寺百合古文書九十二〕能登國前雜掌調成安解申注進東寺御封代所濟勘文事
康和二年料百七十二石六斗二升五合、代絹八十六疋一丈七尺三寸、
調絹四十九疋三丈二尺五寸、代二十九石七斗二升三合、
庸綿百三十六屯、代六十八石、屯別五斗、
中男油一斗六升八合、代五石四升、升別三斗、
租穀二百石　代六十石
封丁二人　代十二石
所濟二百石
二百石代百疋、康和二年七月九日諸使寺主淨延、
過上准絹十三疋四丈二尺七寸
四疋一丈八尺、補前分口口畢
當過上九疋二丈四尺七寸
朱書云
前分料八疋三丈六尺過上內補
右注進如件
康和三年九月十日　雜掌調成安

租穀六百石　代米二百七十石（石別四斗五升）

已上都合千八十一石九斗八升四合

前分石別一斗

廳分石別一升

美乃國百烟

調絹廿八疋二丈二尺五寸　代米八十五石一斗一升（疋別三石）

庸米三十二石七斗

中男作物油一斗七升五合　代米四石三斗七升五合（升別二斗五升）

封丁四人

養米二十石　人別五石

功錢九貫二百十六文　人別二貫三百四文

租穀四〇（四下恐脫二百字）石　代米百八十石（石別四斗五升）

已上都合三百卅一石四斗一合

前分石別一斗

廳料石別一升

駿河國百烟

調絹五十八疋五丈二尺五寸　代錢四十七貫百八十文（疋別一石）

庸布百卅端二丈一尺　代錢七貫二百卅文（段別六十文）

中男作物紙二千二百張　代米十一石（張別五合）

封丁四人　代廿石

上政所

伊賀國百烟

調生糸百九十一絇　代米九十五石五斗（絇別五斗）

庸米五十一石三斗

中男作物油一斗六升一合　代米四石八斗三升（升別三斗）

封丁四人

養米廿三石　人別五石七斗五升

功錢九貫二百十六文　人別二貫三百四文

租白米百十六石二斗二升九合一勺（糯代三石二斗四升五合八勺二才、井百廿九石四斗七升四合九勺二才、）

已上都合三百廿三石三斗二升九勺二撮

前分石別一斗

廳料石別一升

近江國百五十烟

調絹百卌二疋五丈二尺五寸　代米五百七十二石一斗六升（疋別四石）（寮本）

庸米百八十石六斗　正米百五十四石八斗

脚直廿五石八斗

中男作物油七斗七升　代米十五石四斗（升別二斗）

封丁六人

養米三十石　人別五石

功錢十三貫八百廿四文　人別二貫三百四文

租壹仟壹佰漆拾陸束陸把（納官五百八十八束三把、給主五百八十八束三把、）

從四位下檜前女王食封、御浦郡冰蛭郷肆拾戸、田壹佰玖町漆段壹佰伍拾參歩、不輸租田參拾陸町貳段參拾參歩、見輸租田漆拾參町伍段壹佰貳拾歩、租壹仟壹佰參束（納官五百五十一束五把、給主五百五十一束五把、）

從四位下三島王食封、大住郡埼取郷伍拾戸、田壹佰漆拾捌町貳段參佰捌歩、不輸租田肆拾捌町漆段玖拾貳歩、見輸租田壹佰貳拾玖町伍段貳佰壹拾陸歩、租壹仟玖佰肆拾參束肆把、（納官九百七十一束七把、給主九百七十一束七把、）

從四位下高田王食封、鎌倉郡鎌倉郷參拾戸、田壹佰參拾伍町壹佰玖歩、不輸租田貳拾玖町捌段壹佰玖歩、見輸租田壹佰伍町貳段、租壹仟伍佰漆拾捌束、（納官七百八十九束、給主七百八十九束、）

大官寺食封、高座郡壹佰戸、田參佰肆拾伍町玖段參佰壹歩、不輸租田貳佰貳拾肆町壹佰（○此下有₂缺文₁）

附₂運調使史生大初位上王善德₁進上

以解

天平七年閏十一月十日　　正八位下行少目秦伊美吉三田次

從五位上行守勳十二等田口朝臣（朝集使）　　正六位上行掾勳十二等酒波人麻呂

正六位上行介勳十二等粟田朝臣堅石　　正七位上行大目田邊史廣山

〔東大寺要錄六〕封戸廿一箇國二千七百戸

上政所十五ヶ國

合千八百戸　千百五十烟　六百五十戸

下政所六ヶ國

合九百戸　二百五十烟　六百五十戸

伍拾步、見輸租田伍佰陸拾漆町伍段玖拾陸步、租捌仟佰壹拾貳束玖把、

足上郡岡本鄕伍拾戶、田壹佰貳拾參町貳佰參拾陸步、不輸租田壹拾捌町肆段壹佰肆拾步、見輸租田壹佰肆町陸段玖拾陸步、租壹仟伍佰陸拾玖束肆把、

足下郡高田鄕伍拾戶、田壹佰陸拾漆町參段貳佰伍拾玖步、不輸租田肆拾參町壹段壹佰參拾玖步、見輸租田壹佰貳拾肆町貳段壹佰貳拾步、租壹仟捌佰陸拾參束伍把、

餘綾郡壹佰伍拾戶、田參佰捌拾漆町玖段壹佰肆拾步、不輸租田壹佰漆拾捌町玖段壹佰肆拾步、見輸租田貳佰玖町、租參仟壹佰參拾〇此下有レ缺文段、租肆仟壹佰伍拾貳束、

尺度鄕伍拾戶、田貳佰貳拾伍町捌段貳拾漆步、不輸租田伍拾漆町貳段貳佰陸拾漆步、見輸租田貳佰陸拾捌町伍段壹佰貳拾步、租貳仟伍佰貳拾捌束、

荏草鄕伍拾戶、田壹佰肆拾玖町肆段貳佰參拾陸步、不輸租田肆拾壹町壹段參佰伍拾陸步、見輸租田壹佰捌町貳段貳佰肆拾步、租壹仟陸佰貳拾肆束、

右大臣從二位藤原朝臣〇武智麻呂食封、大住郡仲島鄕伍拾戶、田貳佰壹拾陸町漆段參佰肆拾貳步、不輸租田貳拾漆町肆段貳佰貳拾貳步〇此下有レ缺文見輸租田壹佰捌拾玖町參段壹佰貳拾步、租貳仟捌佰肆拾束、納官一千四百廿束、給主一千四百廿束、

從三位山形女王食封、御浦郡走水鄕伍拾戶、田壹佰壹拾捌町肆段漆拾陸步、不輸租田貳拾漆町貳段參佰壹拾陸步、見輸租田玖拾壹町壹段壹佰貳拾步、租壹仟參佰陸拾漆束、納官六百八十三束五把、給主六百八十三束五把、

從三位鈴鹿王食封、高座郡土甘鄕伍拾戶、田壹佰漆拾捌町陸段參佰五拾參步、不輸租田壹佰壹拾町肆段陸拾伍步、見輸田陸〇此下有レ缺文

○按ズルニ、七百戸ノ稅三十萬束ナレバ、一戸ノ稅四百二十八束餘ナリ、三十萬束ハ、恐ラクハ三萬束ノ誤ナラン、

〔東大寺正倉院文書十九〕相摸國天平七年封戸租交易帳

相摸國司解　申天平七年封戸租事

合八郡食封壹拾參處、壹仟參佰戸、田肆仟壹佰陸拾貳町貳段貳佰玖歩、不輸租田壹仟貳佰肆拾肆町參段壹佰陸拾壹歩、見輸租田貳仟玖佰壹拾漆町玖段肆拾捌歩、租肆萬參仟漆佰陸拾捌束漆把、

全給肆處、漆佰戸、田貳仟壹佰捌拾貳町貳段壹佰壹拾漆歩、不輸租田陸佰貳拾町陸段壹佰捌拾玖歩、見輸租田壹仟伍佰陸拾壹町伍段貳佰捌拾捌歩、租貳萬參仟肆佰貳拾參束漆把、

半給玖處、陸佰戸、田壹仟玖佰捌拾町玖拾貳歩、不輸租田陸佰貳（○貳下恐脫二拾字）參町陸段參佰參拾貳歩、見輸租田壹仟參佰伍拾陸町參段壹佰貳拾歩、租貳萬參佰肆拾伍束、（納官一萬一百七十二束五把、給主一萬一百七十二束五把、）

合全給參萬參仟伍佰玖拾陸束貳把

皇后宮食封壹佰戸、田參佰參拾玖町肆段參佰肆拾漆歩、不輸租田壹佰貳拾肆町伍段貳佰伍拾壹歩、見輸租田貳佰壹拾肆町玖段玖拾陸歩、租參仟貳佰貳拾參束玖把、

足下郡垂水郷伍拾戸、田壹佰漆拾貳町參段貳佰肆拾歩、不輸租田肆拾肆町玖段貳拾肆歩、見輸租田壹佰貳拾漆町肆段貳佰壹拾陸歩、租壹仟玖佰壹拾壹束玖把、

餘綾郡中村郷伍拾戸、田壹佰陸拾漆町壹段壹佰漆歩、不輸租田漆拾玖町陸段貳佰貳拾漆歩、見輸租田捌拾漆町肆段貳佰肆拾歩、租壹仟參佰拾貳束、

一品舍人親王食封參佰戸、田捌佰肆拾玖町貳段貳佰肆拾陸歩、不輸租田貳佰捌拾壹町漆段壹佰

封物、且不與返抄、或放白紙日收、或與丹封借收、其物納畢之日、綱領更至封家、勘先收文、取移返抄、非唯一物之上、再取返抄、即復請移之日、姧僞更起、見進之色、還作未進、十分之數、更爲一分、此則且不改印返抄之大弊也、格制閒施、未免此煩、望請、重仰諸封家、所放日收、必令捺印、有家司者、縱雖官員不備、而有一官署、以印書爲證、無家司者、若別當若事業、署其收文、捺踏印亦同、即仰所司、停求移文、專以日收、且勘抄帳、然則吏民之煩、從此易絕、返抄之事、緣何難成、謹請官裁者右大臣宣、依請、其諸司素改移返抄者、依件改行者、事須隨所納物數、且放返抄、又當年之未進、來年不究納、明年二月一日、作未進結解、移於主計寮、其移致時、使若雜掌、依實辨申、如過期不移者、縱雖有未進、而不在准未進沒公廨之限、自餘諸國、亦復准此、

齊衡三年六月五日

〔享祿本類聚三代格十七〕太政官符

應令封家用印事

右撰格所起請偁、印之爲用、實在取信、公私據此、□決嫌疑、而案公式令、唯有諸司之印、未見臣家□□、爰有勢諸家、皆私鑄作、進官文外、皆僭印之、慣習成常、無復疑慮、夫事不獲已、人所必行、於公□□理宜容許、加之太政官去齊衡三年六月五日、封家調庸雜物、可放捺印日收之狀、下知已訖、然而□用之制未詳、至今猶放白紙、家司雜掌、爭論□絕、伏望令諸封家皆得用印、但一寸五分、以爲其限、外於公家、備於私用者、中納言左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔本朝世紀〕正曆四年八月廿三日戊寅、午後大納言藤原朝光卿、同伊周卿、中納言藤原顯光卿、源保光卿、參議藤原道綱卿、同安親卿、同時光卿、同懷忠卿、著左仗座、被定諸封家納官封代升別十文、

〔日本書紀天武二十九〕朱鳥元年五月癸丑、勅之大官大寺封七百戸、乃納稅三十萬束、

〔日本書紀二十九天武〕五年四月辛亥、勅、諸王諸臣被給封戶之稅者、除以西國、相易給以東國、

〔令集解十三賦役〕天平廿年格云、運送封戶租米脚夫公粮者、准運官物之夫、以正稅稻給粮、自今以後、永爲恒例、

〔令集解十三賦役〕天平神護元年、勅、頃年以來王臣封戶、或緣損田應免調庸者、便以餘鄉滿數充給、是則徒損官物、獨潤私門、自今以後、諸家食封有損田戶者、宜依令條除免、不得通計滿給、

〔延喜式二十六主稅〕凡神寺諸家封租、交易輕貨、并舂米送之、其舂運功賃亦用租內、若家有請受者聽充、

〔日本後紀十三桓武〕延暦廿四年十二月壬寅、公卿奏議曰、○中略諸家封租、暫停舂米、交易輕貨、○中略許之、

〔類聚三代格八〕太政官符

應以正稅充諸家封租事

右案、今年六月十三日詔書、令天下無輸今年田租之半、然則前件封租亦須除半、右大臣宣、准寶龜例以正稅滿數充之、

嘉祥元年十二月廿七日

〔類聚三代格七〕太政官符

應諸神寺及諸院諸家封戶調庸并雜物停作移返抄改捺印日收事

右得播磨國解偁、謹撿太政官去承和十年三月十五日下民部省符偁、得伊勢國解偁、謹撿太政官去天長三年五月廿五日下諸司符偁、和泉國解偁、進官雜物、依期入京、至計返抄、還多未進、何則綱領之貢、若缺錙銖、本司之例、必拘返抄、至乃綱領死亡、本司遷代、撿攝失便、終爲未進、室家弊於重輸、國郡困於再貢、吏之與民、弊莫大焉、望請令撿納諸司錄其見納、捺本司印、且與返抄者、左大臣宣、依請、凡厥諸國亦同此例、而件符未下、知諸社諸寺諸院諸家等、因是所納之物、因循舊例、不與返抄、望請依件下知、且隨所納之物數、令與返抄、謹請官裁者、右大臣宣、依請、諸國亦准此例者、而頃年違此格旨、所納之

返納　春宮坊御封廿五戸
收　五十戸　前二條院御封　五十戸　權大納言藤原朝臣公實職封
奉宛　皇后宮職御封廿五戸
給　權中納言藤原朝臣宗忠職封
奉宛　中宮職御封五十戸
以前大略收給注進如件
元永二年十二月廿五日

〔朝野群載二十七諸國公文〕民部省符　主計寮
不收給佐渡國承德元、二、康和元、二、三、四、五、長治元、二、嘉承元、二、天仁元、二、天永元、二、三、永久元、二、三、四、五、元永元、二、并二十三箇年封戸事、
右年々封戸不收給之狀如件、寮宜承知依件勘文符到奉行、
正六位上行大丞藤原朝臣在判
正六位上行少錄大江朝臣在判
天治元年十二月　日

禁國

〔延喜式二十二民部〕凡諸家封戸各爲三分、一分充輸絁國、二分輸布國、但伊賀、伊勢、參河、近江、美濃、越中、石見、備前、周防、長門、紀伊、阿波等國不得充封、
〔拾芥抄中末御給〕今案、被秘其國也、稱云禁國、然而今者皆悉被充、伊與、出雲、長門、紀伊國、于今不被充封戸、自餘國國皆被破式文、只近江國未被充人封、只院宮親王也、賴隆眞人勘文也、
〔台記〕久安三年五月十七日己卯、美濃、備前、周防、阿波、不可宛封國之内也、具民部式上件等國有余○藤原賴長封、仍請改他國、其請文載依違式請改之由、

封戸租賦

〔延喜式五十雜〕凡諸司及有封所々、不得責取諸國前分、

無禮、天無二日、國無二王、何由任意、悉役封民、自茲結恨、遂取俱亡、 二年十一月丙子朔、蘇我臣入鹿、遣小德巨勢德大臣、大仁土師娑婆連、掩山背大兄王等於斑鳩、○中略 山背大兄王等、四五日間、淹留於山、不得喫飲、三輪文屋君、進而勸曰、請移向於深草屯倉、從茲乘馬、詣東國、以乳部爲本、興師還戰、其勝必矣、

封戶收給法

〔延喜式民部二十二〕凡任官叙位及薨卒、應收給封田者、官下符省、造奏文、付內侍令直奏、訖卽施行、稱直奏者、他皆准此、省量便給之、不得阿容、

〔新儀式五臨時〕充封戶事 加別封事

民部省作奏、付內侍令奏覽、畢返給、若給禁國、幷申改者、上卿奉之、宣下所司、但給別封、召大臣於御前仰其由、若給別封後、授品位者、民部省依式便廻充之、延曆廿一年、藤原緒嗣任參議之日、省奏依例可給封戶之由、而有恩勅、別封如舊、依父大臣功也、天慶九年、監子女王叙三位之日、別封之外、省不奏事由、直充給之、

〔朝野群載二十七諸國公文〕民部省符 主計主稅兩寮

應收給尾張國長治元、二、嘉承元、二、天仁元、二、天永元、二、三、永久元、二、三、四、五、元永元、幷十五箇年封戶事

長治元年不收給

同二年

收 廿五戶 祐子內親王封 十五戶 權中納言藤原朝臣季仲職封

嘉承元年

收 卅五戶 大納言源朝臣師忠職封

給 廿五戶 權中納言源朝臣顯通職封

同二年

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣淸麻呂薨、○中略淸麻呂之先出自垂仁天皇皇子鐸石別命、三世孫弟彥王、從神功皇后征新羅、凱旋明年、忍熊別皇子有逆謀、皇后遣弟彥王於針間吉備堺山誅之、以從軍功、封藤原縣、因家焉、今分爲美作備前兩國也、

〔日本書紀十應神〕二十二年九月丙戌、天皇狩于淡路島、○中略天皇便自淡路轉以幸吉備、遊于小豆島、庚寅、亦移居於葉田(葉田此云鉄娜)葦守宮、時御友別參赴之、則以其兄弟子孫爲膳夫、而奉饗焉、天皇於是看御友別謹惶侍奉之狀、而有悅情、因以割吉備國、封其子等也、則分川島縣、封長子稻速別、是下道臣之始祖也、次以上道縣、封中子仲彥、是上道臣、香屋臣之始祖也、次以三野縣、封弟彥、是三野臣之始祖也、復以波區藝縣、封御友別弟鴨別、是笠臣之始祖也、卽以苑縣、封兄浦凝別、是苑丘之始祖也、卽以織部縣、賜兄媛、是以其子孫、於今在于吉備國、是其緣也、

〔古事記下仁德〕天皇之御世、爲大后石之日賣命之御名代、定葛城部、亦爲太子伊邪本和氣命之御名代、定壬生部、亦爲水齒別命之御名代、定蝮部、亦爲大日下王之御名代、定大日下部、爲若日下部王之御名代、定若日下部、

〔日本書紀二十二推古〕三十二年十月癸卯朔、大臣○蘇我馬子遣阿曇連、闕名阿倍臣摩侶二臣、令奏于天皇曰、葛城縣者、元臣之本居也、故因其縣爲姓名、是以冀之、常得其縣、以欲爲臣之封縣、於是天皇詔曰、今朕則自蘇我出之、大臣亦爲朕舅也、故大臣之言、夜言矣夜不明、日言矣則日不晚、何辭不用、然今當朕之世、頓失是縣、後君曰、愚癡婦人、臨天下以頓亡其縣、豈獨朕不賢耶、大臣亦不忠、是後葉之惡名、則不聽、

〔日本書紀二十四皇極〕元年十二月辛亥、蘇我大臣蝦蛦、立己祖廟於葛城高宮、而爲八佾之儛、○中略又盡發擧國之民、幷百八十部曲、預造雙墓今來、一曰大陵、爲大臣墓、一曰小陵、爲入鹿臣墓、望死之後、勿使勞人、更悉聚上宮乳部之民、(乳部此云美文)役使營兆所、於是上宮大娘姬王、發憤而歎曰、蘇我臣將擅國政、多行

〔拾芥抄中末御給〕封戸事、封大也、圖也、原也、爵也、又云、聚レ土爲レ壇方土、又封二諸侯一以分レ境云々、戸門戸也、又一家謂二一戸一、一戸一烟事、

〔源氏物語十四澪標〕太上天皇になずらへて、みふたまはり、

〔新撰姓氏錄右京皇別〕阿保朝臣

垂仁天皇皇子息速別命之後也、息速別命幼弱之時、天皇爲二皇子一築二宮室於伊賀國阿保村一、以爲二封邑一、子孫因家二之焉、允恭天皇御代、以二居地名一賜二阿保君姓一、㢘帝〇淳仁天平寶字八年、改レ公賜二朝臣姓一、續日本紀合、

〔日本書紀七景行〕四年二月甲子、天皇幸二美濃一、〇中略仍喚二八坂入媛一爲レ妃、〇中略夫天皇之男女、前後幷八十子、然除二日本武尊、稚足彦天皇、〇成務五百城入彦皇子一之外、七十餘子、皆封二國郡一各如二其國一、故當今時、謂二諸國之別一者、卽其別王之苗裔焉、　四十年六月、東夷多叛、邊境騷動、　七月戊戌、天皇詔二群卿一曰、今東國不レ安、暴神多起、亦蝦夷悉叛、屢略二人民一、遣二誰人一以平二其亂一、群臣皆不レ知二誰遣一也、日本武尊奏言、臣則先勞二西征一、是役必大碓皇子之事矣、時大碓皇子愕然之逃二隱草中一、則遣二使者一召來、爰天皇責曰、汝不レ欲矣、豈强遣耶、何未レ對レ賊、以豫懼甚焉、因レ此遂封二美濃一、仍如二封地一、是身毛津君、守君、二族之始祖、

〔新撰姓氏錄右京皇別〕廬原公

笠朝臣同祖、稚武彦命之後也、孫吉備建彦命、景行天皇御世、被レ遣二東方一、伐二毛人及凶鬼神一、到二于阿倍廬原國一、復命之日、以二廬原國一給之、

〔新撰姓氏錄右京皇別〕和氣朝臣〇中略

神功皇后、征二伐新羅一、凱旋歸、明年車駕還レ都、于レ時忍熊別皇子等、竊構二逆謀一、於二明石堺一、備レ兵待之、皇后監識、遣二弟彦王於針間吉備堺一、造二關防之一、所謂和氣關是也、太平之後、錄二從駕勳一、酬以二封地一、仍被レ賜二吉備磐梨縣一、始家之焉、

名稱

十一年ニ、總テ全給スルコトヽナレリ、而シテ運送ノ傭食ハ、舊ハ其租ヲ割キテ充テシヲ、天平十年ニ至リ、正税ヲ以テ之ニ充テタリ、其後又封租ヲ輕貨(布帛ノ類ヲ謂フ)ニ交易シ、或ハ舂キテ米ト爲スニハ、舂功モ運賃モ、共ニ租ノ内ヲ用キルコトヽ爲レリ、凡テ封戸ノ地ハ、神田、寺田(並ニ輸租)不口分田、功田(並ニ輸租)等相錯リテ、輸租アリ、不輸租アレバ、封主ハ輸租ノ分ノミヲ得ルナリ、(封戸ノ地ニ、輸租田、不輸租田ノ相錯レルコトハ、本文ニ載スル所ノ相模國天平七年封戸租交易帳ニ見エタリ、)又調ニハ絁布ノ別アリテ、其直均シカラザレバ、諸家ノ封戸ハ各三分トシ、一分ハ絁ヲ輸ス國ヲ充テ、二分ハ布ヲ輸ス國ヲ充ツ、サレドモ決シテ封戸ニ充テザル國アリ、是ヲ禁國ト云フ、凡テ一戸ノ人口ハ同ジカラザレバ、同數ノ戸ニ封ゼラレタル者モ、其所得ニハ多少ノ異アリ、因テ聖武天皇ノ天平十九年ニ、丁ハ正丁五六人、中男一人、租ハ稻四十束ヲ以テ一戸ノ率トシタリシガ、後ニ正丁四人、中男一人トシタリ、後世封戸ノ事永ク絶エテ、院ノ御庄、神田等ニノミ僅ニ其名ヲ存シテ、封戸田ト云ヘリ、

〔伊呂波字類抄 不疊字〕封戸 封丁

〔唐六典 戸部三〕凡食封皆傳于子孫、
食封人身沒以後、所封物隨其男數爲分、承嫡者加與一分、若子亡者卽男承父分、寡妻無男承夫分、若非承嫡房、至玄孫卽不在分限、其封物總入承嫡房、一依上法爲分、其非承嫡房、每至玄孫準前停、其應得分房無男、有女在室者、準當房分得數與半、女雖多更不加、雖有男、其姑姉妹在室者亦三分減男之二、若公主食實封、則公主薨乃停、

〔令集解 祿二十三〕釋云、起土爲界、謂之封、周禮諸公封地、是謂食邑之意也、跡云、給地曰封也、

〔段注說文解字 十三下土〕封、爵諸侯之土也、(謂爵命諸侯以是土也、詩毛傳、之子嫁子也、之事祭事也、莊子之人也、卽是人也、然則之土、言是土也、其義之土、故其字)从之土、(引申爲凡畛域之稱、○中略)从之土、从寸、(合三字會意、府容切、九部、)寸守其制度也、(○略)註 公侯百里、伯七十里、子男五十里、

古事類苑

封祿部一

封戸總載

神武天皇ノ妖氣ヲ掃蕩シ、天基ヲ草創スルヤ、初テ封建ノ制ヲ立テタリ、彼ノ國造縣主ノ類、永ク其地ニ居リ、官ヲ以テ家ヲ世スルガ如キ皆是ナリ、垂仁天皇ノ息速別命ヲ伊賀國阿保村ニ封ジ、景行天皇ノ諸皇子ヲ國郡ニ封ゼシガ如キモ、皆其土ヲ有シ、其民ヲ司リシナリ、而シテ乳部ト云ヒ、部曲ト云ヘルガ如キモ、多クハ其封邑ノ民ヲ謂フナリ、孝德天皇ニ至ルニ及ビテ、始テ郡ヲ立テ郡司ヲ置キ、國造等ガ部曲田莊ヲ罷メ、大夫以上ニ食封ヲ賜ヘリ、是レ卽チ封建ヲ廢シ、郡縣ト爲シタルナリ、是ニ於テ封戸ヲ賜ハル者モ、唯其賦稅ヲ得ルノミニテ、其地ニ臨ムコト能ハズ、而シテ賦稅ハ國郡司ノ掌ル所タリ、

天武天皇ニ至リ、親王以下ノ封ヲ收メシカド、久シカラズシテ復セシナラン、是ヨリ先キ天智天皇ノ時ニ、始テ令ヲ設ケシカバ、封戸ノ制ヲモ具セシナラン、而レドモ其書傳ラザレバ知ルニ由ナシ、文武天皇ニ至リ、更ニ令ヲ修メ、封戸ノ法ヲ立テタリ、封戸ノ品一ナラズ、職封アリ、位封アリ、功封アリ、國封アリ、別勅賜封アリ、又神封アリ、皇后ノ封アリ、(後ニハ太上天皇ノ封アリ)而シテ諸家ノ封(職封位封ノ類ヲ謂フ)ニハ、必ズ課戸ヲ以テ充ツ、不課戸ヲ充テザルハ、稅ノ外ニ得ル所ナキヲ以テナリ、封戸ヨリ入ル所ハ、租アリ、庸アリ、調アリ、仕丁アリ、調庸ハ全給スレドモ、田租ハ半給シタリシヲ、元明天皇ノ和銅七年ニ、始テ長親王等ニ限リ全給シ、聖武天皇ノ天平

雜俸

封祿部九

役俸

封祿部十

切米 扶持 併入

事力 仕丁〔併入〕

封祿部八

知行

傔仗

仗身 從者 併入 護身　隨身

帳內資人 防閤 附入

封祿部七

准三宮

年官年爵

馬料

封祿部六

公廨 年粮併入

封祿部五

月料 日料給炭薪油女官雜用料併入

女王祿

節祿 臨時賜祿物[併入]

時服

季祿 等第祿 併入

位祿

封祿部四

位田

功田

賜封 增封 賜國 併入

封祿部三

職田 公廨田 併入

功封

國封

封祿部二

位封

古事類苑

封祿部一

封戸總載

職封

年官年爵

封祿部七

准三宮

帳内資人 防閤〔併入〕

儀仗 仗身 從者〔併入〕 護身 隨身

事力 仕丁〔併入〕

封祿部八

知行

切米 扶持〔併入〕

封祿部九

役俸

封祿部十

雜俸

古事類苑

封祿部目錄

神宮司廳藏版

古事類苑

封祿部

古事類苑刊行會